魔法少女リリカルなのはStS Blade Heart

月兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ

【Ｎコード】
Ｎ８７８８Ｐ

【作者名】
月兎

【あらすじ】
情報一課から機動六課に出向を命じられた青年、シノブ・ユキタカ。

十年前、彼と訓練校時代を共に過ごしたなのはとフェイトは突然のことに驚きながらも、再会を喜ぶ。しかし、二人と再会したユキタカは二人の知っていた彼とはどこか違っていて…

少女達が華やかな戦場を翔けるその裏で、暗躍する青年は心に刃を携えて何を想うのか。

世界は綺麗なだけじゃない。
いつまでも綺麗なままではいられない。
これは、そんな青年と少女達の物語。

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります

００『雪鷹』（前書き）

世界だとか、平和だとか
そんなことはどうでもよかった

俺のこの道に引き込んだ人間は言った

天才は仕事を選ぶんじゃない
仕事に選ばれる存在なのだ、と

俺は天才なんかじゃない
だけど、俺はここにいる
今もまだ、ここにいる

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
始まります

00『雪鷹』

00『雪鷹』

「機動六課、ね・・・旦那、お言葉ですが、どうして情報部の私が畑違いの新設部隊に配属されるんで？」

渡された書類の束を一瞥して青年は向かいに座る上司に尋ねた。
丁寧さの欠片がごくわずかに残る言葉遣い。旦那、と呼ばれた上司はため息を隠さない。
怒ることが無駄だと知って諦めた者の顔だ。

「正確には出向だ。君は職場が変わるたびにいちいち理由を聞くのかね？」

四十を越えたあたりの男が青年を睨みつけた。質問は許さない、とその眼差しが無言で告げる。
それを見た青年は軽くため息をこぼして書類に目を戻した。

機動六課。主にロストロギアの回収及び、管理を行う古代遺失物管理部にこの春から新設された新鋭部隊。近年、問題視され始めたレリック事件を専門に扱う為の作られた、ということになっているが、独立性の高い少数精鋭の実験部隊という側面も持っている。

後見人には本局とベルカ聖王教会の要人が名を連ねている。少々癖

のありそう部隊だが、普通の部隊とさしたる違いはないように見える。一般の人間ならば何も思わないだろう。しかし、この青年は違った。この書類を一枚見るだけで何か裏がありそうな匂いを嗅ぎ取り、青年は不敵に微笑んだ。

「地上と仲の悪い本局と教会の人間が後見人の部隊なんて何かあるって疑ってくれ、と言っているようなものだ。だいたい、地上の人間でレリック事件を本気で問題視しているのは片手もいない。ほとんどの人間はアレの危険性にまだ気付かず、少々厄介なロストロギア程度にしか思ってない。それを承知でレリック対策部隊の新設なんて普通はあり得ない。それに部隊長を務めるのは、かの有名な八神はやてだ。若干１９歳で階級は二等陸佐。魔力ランクは管理局でも数少ないＳＳランクでその上、レアスキル持ち。そして、十年前の闇の書事件の最重要参考人。またの名を歩く特秘事項・・・訂正、歩くロストロギア」

遠慮というものを知らない青年の言葉に上司の男は顔をしかめた。それを無視して青年は言葉を続けた。

「犯罪歴のある、といっては流石に失礼か。訳ありの若い魔導師・・・地上本部のトップ、レジアスが一番嫌っているタイプの人間だ。そんな人間を総部隊長にさせられる人間なんてそういない。提督クラスの人間よりも上・・・将官級かそれ以上の人間が絡んでるんだろう。表立って後見人として名乗り出られないってことは伝説の三提督か最高評議会の老いぼれどもか・・・まぁ、正直、誰でもいいんだが。」

上司の男は大きなため息を零し、青年を睨みつけた。しかし、青年も全く意に介していない様子だった。

「流石だな・・・我々、情報部のエリートだ。紙切れ一枚からよくもそこまで想像できるものだ。」

「私を褒めても何も出ませんよ、隊長」

皮肉を皮肉で返された上司の男はため息を零すばかりだった。短く切り揃えられた黒髪に白髪が何本も混じっているのはおそらく、ストレスが原因なのだろう。

「お前の考える通り、この新部隊には何か裏がある。わざわざ魔力リミッターを付けてまでSランク魔導師を何人か捻じ込んでいるしな・・・それだけでも警戒するには十分すぎる理由だ。この部隊設立の裏にあるものを調べるのが今回の君の仕事だ。まぁ、八神二佐が悪事を企んでいるとは思いたくないが、特定の部隊に戦力が集中するのは問題がある・・・やはり、気乗りしないか？」

「えぇ、もちろん」

あからさまな造り笑顔でそう言うと、青年は書類を一枚めくった。次の瞬間、青年の顔に驚愕の色が浮かび、自嘲的な笑い声を上げる。そして、幾分真面目な表情で上司の男に言った。冷めた、静かな声は遠回しの脅迫ようでさえある。

「この仕事、どうしても私でなければいけませんか？」

「生憎、他に割ける人員がいない。それに、君の能力を私は高く評価しているつもりだ。その態度を私が黙認しているのも・・・」

「命じられた仕事で期待以上の結果を出しているから。結果を出せない人間はここには不要・・・それぐらい判っていますよ。所詮、

我々は組織の駒に過ぎないんですから」

先程までのふざけた口ぶりからは打って変わった暗く、重い青年の口調。その瞳の奥にほの暗い光が宿っている。まるで氷のように冷たい瞳は誰も近寄らせない気を発している。

「期待しているよ、氷の懐剣（アイス・タガァ）」

「その名前で呼ぶなって、あんたには前にも言ったはずだが？」

剥き出しの殺気を上司にぶつけながら、青年は敬礼をする。

「情報部情報一課、シノブ・ユキタカ一等空尉は古代遺失物管理部機動六課へ出向致します」

００『雪鷹』（後書き）

最後に会ったのはもう何年も前。
忘れていたわけじゃない。
けど、特別に気に留めていたわけでもない

書類に二人の名前を見つけて、ほんの少しだけ心が痛んだ。

今の俺は二人に顔を合わせられないから
もう、あの頃のようにはなれないから

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
０１『再会は突然に』

テイク、オフ

Intermisson 0.1

Intermission 0.1

闇に溶け込み、暗躍する二つの影。
ビルの上を縫うように駆け抜けるその姿は異様と呼ぶしかない。その漆黒の衣に覆面をつけたその姿は忍者を彷彿とさせる。もう一人の背には決してヒトにはないもの、漆黒の翼が生えている。感情を押し殺した視線は凍りついたように冷たく、恐ろしい。

目的の場所に到達すると影達は脚を止め、向かいのビルの一室を見つめた。数名の男が食事をしている。一見すると楽しい会食のようだが、男たちのすぐ横には黒いスーツに身を包んだ警護の人間が微動だにせず立っている。一方は管理局の高官で、もう一方はあるテロ組織の幹部である。本来なら敵対関係にあるはずの二者がこうして食事をしているのはいかにも奇妙な光景であるが、すぐ隣に置かれたアタッシュケースを見ればその理由は容易に想像がついた。

「・・・これが、今回の分の報酬だ・・・次も頼む。犯罪を管理するのが仕事・・・ときには正義と悪が手を取り合うことも必要・・・流石は管理局の膿。言うことが違うわね」

異常なまでの聴覚で二人の会話を聞きとった影は盛大にため息をこぼす。蔑むような、呆れるような影の声とは対照的にもう一方の影は表情一つ変えずにデバイスを構える。

「・・・目標を確認。これよりミッションを開始する」

感情の抜けた声で影が小さく呟くと、もう一方の影が心配そうにそれを見つめる。まるで懇願するようなその眼差しは世の男が見たら、誰もが手を差し伸べたくなるほどに切なく、儚い。

「・・・ねぇ、今日のミッションは私が、私にやらせて・・・あいつを殺すぐらい私にも・・・」

「ミッション開始までカウント5・4・3・・・」

その言葉を無視して、環状の魔法陣が影の周りに展開する。

「ねぇ、私の話を聞いてよっ!!」

薄い青色をしたその環の中心に弾丸が生成されていく。ただの魔力弾ではない。実体を持った氷の弾丸だ。その氷の塊を高速で撃ちだせば、その殺傷能力は並みの質量兵器に匹敵、あるいは超えるものがある。無論、人に向かって撃てば殺すことも十二分に可能である。影の目的はまさしくそれなのだ。

「・・・2・1・・・ファイアっ!!」

その瞬間、環の中心にあった氷の塊が消えた。そして、一瞬遅れてパリンという小気味よいガラスの割れる音。そして、数瞬の沈黙の後、悲鳴と喧騒が影の耳に入ってくる。

「目標を射殺。ミッション完了」

「私にやらせてって言ったのに・・・どうして無視したの・・・ねぇ、答えてよ」

先程までも冷たさも不気味さも嘘のように消え去り、目に涙を浮かべている。悔しさと悲しさの入り混じった視線をぶつけられ、男は若干たじろいだが、それでもはっきりとした口調で女に言った。

「これは俺の仕事だ。おまえのじゃない。時にはその手を汚すことがあるかもしれない。だが、それは俺の為じゃない。お前達が守るべきは俺じゃない。もう、何度も言っているだろう？ミッションは終了した。すぐにここを離れる」

そう言って男はビルの上を飛ぶように走り始める。女もすぐにそれを追い、走りながら男に反論する。

「それでも、私は・・・私達は、貴方を守りたい。たとえ、貴方に嫌われることになっても、それでも、貴方を守りたい。その咎も、苦しみも、全てを引き受けます。もう、何度も言いましたけど」

「無理だ。本気で俺が命じれば、お前達は逆らえない、お前達の意志に関係なく、俺の命に従わざるを得ない・・・そんなお前達に何ができる？」

容赦なく切り捨てる男の言葉に女は黙りこんでしまう。その言葉の通り、男が本気で拒絶すれば、男の傍に寄ることさえできないのだ。それが二人の関係であり、どう足掻いても変えることはできない。

それが歯がゆくて、悔しい。

心の内では、こうして女が付いてくることさえ男は快く思っていな

いはずだ。人を殺す瞬間を他人に見られたい人間などそういるものではない。それでも、こうして隣に立つことを許してくれるのは女の気持ちを汲んでのこと。せめてもの慈悲といってもいい。

「貴方の苦しみを分かち合うことなら・・・」

「いらない、そんなもの・・・これは俺の傷であり、俺の闇だ。お前には、関係ない」

女はきつく唇を噛みしめ、一歩踏み込んで、男の目の前まで顔を近づけた。

「これ以上関係ないなんていったら許さないんだから・・・貴方が一人だけ、苦しんでいて、どうして私達平気でいられるの？貴方の苦しみは私達の苦しみ・・・どんなに堪えていても、伝わってくる。私達はそういう関係なんだよ？知らないなんて言わせない」

女の目から涙が零れ、闇へと消えた。

「隠しても、一人で抱え込んでも、無駄なんだよ。私には判るんだから。同じように苦しむなら、いっそ受け入れたい・・・貴方の傷も、闇も、全部・・・」

「いらない。二度も言わせるな」

男は不愉快そうに顔をしかめた。泣かれたこともちろんだが、女の言葉の端々に苛立ちを感じる。心の中を見透かされるのは、仕方ないこととはいえ、もちろんいい気持ちはしない。それを咎めることができないことは男が一番よく理解していたが。それを隠す為なのは、男は無理やり話題を変える。

「そうだ。言い忘れていたが、しばらくこの仕事は休業することになった」

「だから?そんなことを言えば私が喜ぶと思った?どうせ、別の仕事が入ったからでしょう?貴方が手を汚さなくてもよくなったことは嬉しいと思ってる。だけど、汚い仕事をしなきゃいけないことに変わりはないんだもの・・・喜べるはずがないわ」

涙を拭いながら女が叫ぶ。睨みつける目は厳しいが、泣き顔を見るのはやはり良い気持ちがしない。男はため息を零すと男は呟いた。

「あぁ、俺も諸手を上げて喜べない。少々面倒な職場みたいだ・・・昔の俺を知っている奴がいて、正直気乗りはしない。それでも、命じられれば行かなきゃいけない・・・お前に言ってもどうしようもないが」

「・・・今度は長いの?」

ようやく泣き止んだ女は男に尋ねる。コクンと首を傾げるその仕草がまるで子供のようで、愛らしく、男の顔からもつい笑みが零れた。そして、まるで赤子をあやすように女の頭に手を乗せる。

「そんな顔をするな。短くても数カ月はかかるだろうが・・・長引いても一年もかからない。そもそも、一年だけの試験部隊らしい。だから、次にお呼びがかかるまで気長に待ってろ」

「うん・・・ずっと待ってる。本当は、呼ばれないことが一番なんだけど・・・でも、そんなことはしないって約束してくれたからそれを信じて、待ってる」

女は男に触れられたことが嬉しいらしく、笑顔を浮かべると小さく頷いた。人とは思えないほど冷酷な表情とは一変したあどけない幼子のような表情。まるで同じ人間には見えない。翼の生えた人間などいるものか、と思い直して男は苦笑する。

「まったく、お前の心の内はよくわからないな・・・何がそう嬉しい？」

「嬉しいわけじゃ・・・」

そこまで言って女は首を横に振った。

「嬉しいものは嬉しい・・・それではいけない？」

「別に・・・どうでもいい。まったく・・・俺の心の内は筒抜けなのに、お前達の心が判らない。不便というか不平等というか。割に合わないぞ」

煩わしそうに男が呟く。すると女は不満そうに眉をあげる。

「仁愛と忠義。御身の為、この身と心、持てる全てを捧げると誓って以来、一度もその気持ちが揺らいだことはありません」

「あぁ、そうだな。その言葉は紛れもない事実だ。俺が煩わしく思うくらいな・・・」

仕事終りのいつものやりとり。他愛のない痴話喧嘩のようなひと時を煩わしく思う一方で、その一瞬が男にとって唯一の安らぎの場であり、慰めでもあることは否定しようのない事実であった。

「ご苦労だった」

ふいに男のすぐ隣にモニターが開いた。そこに映るのは中年の男性。モニター越しに男が笑う。

「他にも頼みたい仕事があるんだが・・・お前がしばらく抜けるのは残念だよ」

「まったく、最後の最後まで仕事を入れやがって・・・」

男が忌々しげに呟く。

「そう怒るな。今日の標的はなかなか面倒な奴でな・・・今日を逃せば次の機会までまた待たなければならなくなる。管理局から流れた金がテロリストの資金源にもなっていたようだからな・・・長引かせたくはなかった。これも平和を守る為だ」

嫌味を言っているわけではない。画面の男の言うように今日の仕事は決して難しいものではなかった。管理局の人間とはえ、魔導師でもない一般人を一人殺すだけなのだ。警備がいるとはいえ、強面の黒服集団など者の数ではない。

「管理局の膿は管理局で排除しなければな・・・」

モニターの男は神妙な面持ちで頷く。影は冷たく笑って皮肉を並べる。

「平和と法の守護者がよく言う・・・世も末だ」

「あぁ、そうだ。確かに、法は遵守せねばならん。法を定めたはずの我々がそれを破るなど言語道断だ。だが、それでは守れぬものもあるのもまた事実。いつの時代も幾千もの屍と血の上に平和は成り立つものだ。そのための我々だ。それはお前も承知の上だろう？」

「さて・・・正義の味方を気取るつもりはないが」

男は皮肉めいた笑みを浮かべる。

「そう、それでいい。我々は決して正義ではない。正義ではないからこそ、悪を為せる・・・」

画面の男は神妙に頷いた。

「悪で結構。悪なら悪らしいやり方を貫き通すだけだ」

０１『再会は突然に』（前書き）

最後に会ったのはもう何年前も前。
ずっと昔のことだけど、あの時交わした約束は今でも覚えてる。

書類で彼の名前を見たときはびっくりだけど、すごく嬉しかった。

もちろん、あの頃とまったく同じというわけにはいかないのはわかってる。
だけど、また会える、ただそれだけで私は胸が高鳴った。

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
始まります

01『再会は突然に』

01『再会は突然に』

「うーん、いくらなんでもここまで露骨なこと・・・」

一枚の書類を片手に八神はやては呟く。春の心地よい日差しが差し込む部隊長にいながら、その顔は晴れない。

「はやてちゃん、どうしたですか？」

はやての横から小さな人形が、もとい、はやてのユニゾンデバイスであるリインフォース・ツヴァイが書類を覗きこみ、書類に記載されている事項を上から読み上げていく。

「シノブ・ユキタカ空曹長・・・２４歳。術式はミッドチルダ式で魔導士ランクは空戦Ａ＋ランク。えっと、前の所属は・・・情報部情報一課っ！？はやてちゃん、大変です！！機動六課にスパイが入り込んでくるです」

「リイン、まだスパイって決まったわけやあらへん。そういう言い方はしたらあかんよ」

大声で叫ぶリインを嗜めるようにハヤテが呟く。

「でも、情報一課といえば潜入捜査のプロフェッショナルです！！管理局内でもスパイ活動で有名です！！」

リインの言葉にはやては軽く苦笑を浮かべた。
表情が晴れない理由はまさしくそれだったのだ。

情報一課と言えば情報部の中でも一番のエリート部隊である。主な任務は情報収集やその解析と言われているがその詳細は特秘事項だ。リインの言う通り、潜入捜査はもちろん、独自のネットワークを駆使した通信システムや情報収集専用の特化デバイスの開発なども行っているという噂も聞く。つい十年前までは無限書庫の探索も行っていたらしいが詳しいことは誰も知らない。正直なところ、噂だけが一人歩きし、その実態を外部の者が知ることはほとんどないといった状態である。時空管理局の上層部でも情報部の実態を知る者は限られているらしく、はやての上司にあたるカリム・グラシア少将でさえその内情は掴めていないと聞く。管理局内にもスパイを送り込んでいるとも言われ、稀に出向や合同調査などで他部隊と関わることがあっても歓迎されていないのが実情だ。

「リイン、まだ決め付けるのは早いって言うたやろ？見てみ、配置はロングアーチ。つまり、私やリインと同じ後方支援専門や。情報一課は確かに諜報活動もしてるやろうけど、情報収集や解析のエキスパート・・・機動六課に必要な人材や」

「スパイさんじゃないですか？」

「こんな露骨なスパイはおらんと思いたいんやけどな・・・」

情報一課のスパイ疑惑はあまりにも広まり過ぎている。それを承知で記載しているということは前所属を隠すつもりがないということだろう。スパイです、と宣伝するスパイがいるとは正直考えづらい。はやてがそう呟くと同時に、部隊長室の扉が開く音がした。部屋に

入って来たのは二人の女性、はやての親友で機動六課スターズ分隊隊長高町なのは一等空尉とライトニング分隊隊長フェイト・T・ハラオウン執務官の二人である。

「二人とも訓練お疲れ様。新人達、どうやった？」

「二人ともお疲れ様です」

「皆、すっごく頑張ってるよ。私も教えがいがあるよ」

なのはが嬉しそうに答える。

「はやて、どうしたの？その書類・・・新しく入ってくる人？」

フェイトがはやての持っていた書類に気付き、尋ねる。すると、はやては少し困ったように笑いながら二人に言った。リインがスパイです、と叫びそうになったのを念話で止めさせたりはしていないはずである、おそらく。

「まぁ、そうやね。配属はロングアーチやから二人とはあんまり接点があらへんかもしれんけど」

そう断りを入れてから二人に書類を渡した。少々ぎこちない笑みだったが、気にせずにフェイトは書類を受け取る。

「へぇ、どれどれ・・・えっ！？うそ・・・」

書類を見た瞬間、フェイトの顔色が変わる。驚きと喜びの混じったその表情はどことなく笑っているようで、頬が薄紅色に染まっている。

「どうしたですか？」

フェイトの驚きぶりにリインとなのはがフェイトの持っている書類を覗きこむ。そして、なのはもそこに書かれていた名前を見てすぐに顔色を変えた。

「えっ、ひょっとして雪鷹さん！？」

「なんや、二人の知っている人なん？」

驚いた表情ではやてが呟くとなのはが笑顔で頷いた。

「私やフェイトちゃんの陸士学校時代の同期なんだ・・・確か、１４歳って言ってたから私達より五つ年上かな？当時の魔導士ランクが確か陸戦ＡＡ・・・あ、でも、空戦Ａ＋ってことは魔導師ランクの受け直したんだ」

陸戦魔導師が空戦魔導師になる場合、魔導士ランクが下がるよくあることだ。陸戦から空戦に変わってすぐは、飛行魔法に慣れていない者が多く、陸戦とは勝手が違うため思うように動けないことが多い。その結果、陸戦から空戦に鞍替えした直後に魔導士ランクが一つや二つ落ちることは決して珍しいことではないのだ。しかし、陸戦であろうと空戦であろうと魔導師の基礎能力に大きな違いはない為、慣れればすぐにランクは元のランク程度まで戻る。ロングアーチに出向ということで、魔導師として使える人間がくるとは思っていなかったが書類やなのはの話を聞く限りでは実戦でも通用する実力を持っていることになる。情報のエキスパート、としか考えていなかったはやては若干の驚きをこめて頷く。

「１４歳で陸戦ＡＡ、現在は空戦Ａ＋・・・かなり優秀な魔導師や

ね」

９歳で魔導士ランクがＡＡＡやＳの化け物に比べてしまえば見劣りしてしまうが、１４歳で陸戦ＡＡランクと言えばかなり優秀な人間である。空戦に切り替えたとしても魔導師として輝かしい将来を約束されている。管理局でも随一のエリート集団と言われる情報一課に配属されているのにも納得がいく。

「うん、すごく強かったよ。あの頃の私やフェイトちゃんが一対一で全然勝てなかったから・・・」

「そうだね。どんなに頑張っても最後の最後で必ず負けちゃってた」

若干の恥ずかしさと懐かしさを感じながらなのはとフェイトが笑う。

「それ、ほんまなん？なのはちゃんやフェイトちゃんが勝てへんかったって？」

「リインもびっくりです」

今度ははやても驚きを隠せない。９歳とはいえ、魔導士ランクＡＡＡを誇る当時のなのはやはフェイトに勝てる魔導師は管理局の中にもそう何人いなかったはずである。その二人が一度も勝てなかった相手、しかも二人より魔導師ランクは格下にも関わらず、となると只者ではない。

「二対一でなら勝てたけどね・・・それでも五分五分だったかな。雪鷹さんとはいっぱい戦って、いっぱい教えてもらったよ。戦い方次第ではどんなに強い敵にだって勝てる、それを実践して、教えてくれた。十年、か・・・あれから、もうそんなに経つんだね」

「なのはちゃんがそこまでベタ褒めするなって珍しいなぁ」

尊敬と憧憬。

過去を振り返るなのはの瞳にはそれしかなかった。はやては内心驚いていた。なのはが人を褒めないというわけではないが、ここまで手放しで褒める人物はそういない。よほど信頼し、尊敬していた人間であることがなのはの言葉からも感じ取れる。

「なのはさんのお世話にになった人なんですね」

「うん、いっぱい迷惑をかけて、お世話になったから。うん、本当にお世話になった」

それに、となのはが一旦言葉を区切り、フェイトを見つめ、彼女に珍しい年頃の女の子の、悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「フェイトちゃんの初恋の相手だし」

「「・・・えぇーっ!!」」

一瞬の沈黙の後、はやてのリインの声が一つに重なって響く。

「な、なのは・・・それは・・・その、そうだけど・・・」

フェイトの顔が一段と紅くなる。恥ずかしそうな表情をしながらも、なのはの言葉そのものは否定しないあたりがなんとも健気である。書類を見てからどこか落ち着きがない様子のフェイトが気になっていたはやてだったが、なのはの言葉を聞いて納得した表情を浮かべ

る。

「なるほど。なんやフェイトちゃんがいつになくそわそわしているなと思ってたらそういうことかいな。そりゃ、そやね、十年ぶりに初恋の人に会えるんやったら落ち着いてられるわけあらへんなぁ」

「はやてまで・・・もう・・・」

拗ねたような表情を浮かべるフェイトがなんともいじらしく、可愛らしい。執務官として日々捜査に明け暮れ、働いているとはいえ、フェイトは花も恥じらう十九のうら若き乙女なのだ。淡い恋心の一つや二つ、その胸の内に秘めていてもおかしくはない。思えば、フェイトに関して浮いた噂話の一つも聞いたことがなかったがその裏にこんな真実が隠されていたとは流石のはやても思い至らなかった。

「いやぁ、仕事一筋やと思ってたら実は想い人がいたとは・・・一途やな、フェイトちゃんは・・・」

「フェイトさんの初恋の人・・・リインもはやく見てみたいです」

「だから、そういうのじゃないって・・・陸士学校を卒業する前の日に告白して、子供には興味ないけど、大人になったら付き合ってもいいって言ってくれて・・・それだけだよ」

フェイトの言葉にはやては返す言葉がなかった。今のフェイトの発言は少々、もとい、かなり笑えない類の言葉だった。一般的に考えてフェイトの言われたそれは遠回しのお断りの返事と考えるのが妥当だ。純情な少女を傷つけないようにと配慮した言葉であったことは察するに易い。十年越しの恋、と唄うのはロマンチックだが、それは現実的ではない。もちろん、その言葉が本物だという可能性が

皆無ではない。１４歳と９歳は年齢的に危険な香りがして微妙なものがあるが、２４歳と１９歳なら理解できなくもない。しかし、その時の言葉が本物であったとしても、十年という月日が人を変えてしまうことは多々ある。相手側の心が変わっていない、という保障はどこにもないのだが、フェイトの様子を見る限りだと相手の心変わりに関しては遙か忘却の極地にあるように思えた。

（なのはちゃん・・・これって・・・）

（にゃはは・・・はやてちゃんの言いたいことはなんとなくわかるよ）

苦笑交じりの念話にはやての顔が強張る。

（あの頃はなんとも思わなかったんだけど、薄々とね・・・だけど、フェイトちゃんはアレだから私の口からは言えないし・・・フェイトちゃんが自分で気付かないと・・・これぱっかりは）

（うっ、それは・・・そう、やね・・・）

なのはが念話でなんとも言い難い心境を明かす。なのはの言葉にはやては頷くしかない。周りがどれほど言っても本人が自覚し、受け入れなければどうしようもないのが色恋沙汰の常である。十年来の付き合いを持つなのはやはやてであっても、フェイトの想いを変えさせるのはおそらく不可能だ。恋は盲目、という言葉の通り、今のフェイトは周りが見えなくなり、冷静な判断が出来なくなっているに違いなかった。。

「と、とりあえず、その話は置いておこか。仕事の話に戻すよ、ユキタカ曹長にはロングアーチに配属されるから通常業務の他に、新

人達のデスクワークを見てもらおうと思うんやけど、どうやろ？」

踏み込みたいような、逃げ出したいような、そんな危うい気持ちを部隊長として責任感と誇りで必死に抑え込み、はやてが話題を変える。新人達が関わってくるということでなのはやフェイトも幾分真面目な顔で頷く。

「私は賛成かな。ヴィータ副隊長に頼むつもりだったけど、余計な負担もかかるし、他の人が見てくれるならその方がいいと思う」

「私もいいと思うよ。雪鷹さんならきっと大丈夫」

「それじゃ、ユキタカ曹長の件はその方向で話は進めていくことで決まりっと。細かいことはこっちで調整しとくから、新人達には二人からそれとなく言っておいてくれるか？まぁ、デスクワークはもうちょっと先の話になるやろうけど」

書類を整理しながらはやては幾分重い声で二人に言った。

「で、や・・・ここから先は私の独り言なんやけど、ユキタカ曹長の前の部隊がちょっと気になるんや。情報一課と言えばその方面のエリートが集まっとる。しかも、慢性的な人手不足らしい。それなのにわざわざ機動六課に出向させるってことはなんや裏がありそうで怖いんやけど・・・こんな露骨なのも変なんやけど」

スパイではないか、という疑問と不安を遠回しに二人に告げる。はやての言葉に二人は黙りこんでしまった。はやての不安は判る。公安部と古代遺失物管理部では畑違いにもほどがある。何か裏がある、と考えるのが妥当である。しかし、十年前にお世話になった人間がスパイとして来るとは信じたくないのが二人の本音だ。二人は黙っ

て見つめ合い、小さく頷いた。

「そんなことないよ、絶対」

フェイトが静かに、しかし、はっきりとした言葉ではやてに告げる。なのはも黙って頷く。

「雪鷹さんはそんなことする人じゃないよ・・・私もフェイトちゃんもそう信じてる」

なのはがそう言うと同時に部隊長室の扉が開き、一人の青年が部屋に入って来た。

年は二十代半ばと言ったところ。機動六課の制服に身を包んでいるのは間違いないはずなのに、全く別の、彼の為に仕立てた服を着ているかのようにその装いが板についている。身長は成人男性の平均といった具合。痩身だが、ひ弱な印象は全く見られない。痩せてはいるが、無駄のない体つき、通った鼻筋、鈍く輝く銀の髪、そして透き通るように白い肌。虫も殺したことがないような優美な顔立ちと立ち姿はきっと人目を惹くことだろう。しかし、切れ長の細目が、あるいはその奥の灰色の瞳が近寄りがたい鋭い雰囲気を放っている。ほとんど白に近い髪は短く切り揃えられ、それがよく似合っていた。

灰色の瞳は状況判断に困っているようだったが、出てきた言葉ははっきりしたものだった。

「シノブ・ユキタカ空曹長、本日より情報部情報一課から古代遺失

物管理部機動六課へ出向となりました」

０１『再会は突然に』（後書き）

再会の喜びもつかの間。十年ぶりの雪鷹さんはどこか雰囲気が違っていた。

あの頃のまま。それは無理なことだってわかってる。
きっと、お互いにこの十年で色んなことがあったはずだから。

だけど、私は歩み寄ることができる。
でも、雪鷹さんは頑固で
全然話を聞いてくれなくて

雪鷹さんに譲れないものがあるのはよくわかった。だけど、譲れないものがあるのは私も同じ。だから…

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
０２『譲れない想い、意地と信念』

想いの果てに、テイクオフっ！！

02『譲れない想い、意地と信念』（前書き）

期待していたのは笑顔の再会。
だけど、待っていたのは冷めた笑み。

この十年で色々変わってしまった。
お互いの立場も、階級も、関係も。

だけど、それでも、変わらないものはきっとある。私はそう信じてる。

だから、私がするべきことはただひとつ

この胸の想いを雪鷹さんにぶつけること。ただ、それだけ。

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
始まります

02『譲れない想い、意地と信念』

02『譲れぬ想い、意地と信念』

「・・・お取り込み中のようですね。出直してきます」

部屋を一瞥して雪鷹が一言呟く。そして、はやてに一礼して部屋を出ていこうとした。慌ててはやてがそれを止めにかかる。

「え、えぇよ。そんなことないから。ちょっと仕事の話を、じゃなくて女同士のおしゃべりしてただけやから」

不自然な言い訳だと、言ってしまってから気付いたはやてであったが、既に引き返せない。この場を笑って押し通す。そんなはやての考えを察したのか、なのはとフェイトも何事もなかった、かのように振舞う。傍から見れば違和感の塊にしか見えないのだが、それを取り繕える余裕を今の二人は持っていない。

「えーと、機動六課部隊長の八神はやて二等陸佐です。後方支援部隊ロングアーチの指揮官も務めているので、ユキタカ曹長にとっては直属の上司みたいになるかな・・・よろしく、こっちはリイン。私のユニゾンデバイスなんやけど、ロングアーチの一員としても働いてくれてるで」

「リインフォース・ツヴァイです。階級はユキタカ曹長と同じで空曹長です」

「こちらこそ、よろしくお願いします。八神二佐の特別捜査官とし

ての活躍はよく耳にしています。その年で一つの部隊を任されるとはさすがですね」

不思議と嫌味を感じない雪鷹の言葉にはやての表情が緩む。突然現れた、しかもスパイ疑惑を持っている人間に緊張していなかったといえば嘘になる。しかし、感じのいいその言葉にその緊張も若干緩む。

「こっちの二人は前線部隊の隊長の・・・って三人とも知り合いなんやね」

「スターズ分隊隊長で機動六課の戦技教導官を務めている高町なのな一等空尉です。久しぶりだね、雪鷹さん」

「同じくライトニング分隊隊長のフェイト・T・ハラオウン執務官です。雪鷹さん、十年ぶりだね」

嬉しそうに微笑みながら敬礼する二人とは対照的に雪鷹はどこか冷めた態度で敬礼を返しただけだった。挨拶の言葉の一つもないそっけない態度に二人は少し戸惑った表情を浮かべたが、雪鷹はそれらを無視して話を進めた。

「さっそくですが、仕事の話を伺えますか？」

二人を見えないもののように扱う雪鷹の態度にはやては眉をしかめた。しかし、雪鷹を責めるのは筋違いであることは十分に理解していた。三人がお互いに知り合いであったとしても、それはプライベートの話である。仕事と区別しようとする意識は当然のことで、そういう意味では雪鷹の態度の方が正しい。いささか冷たすぎるが公私混同するつもりはない、という意志表示なのだとしたそれはそれ

で潔いものが感じられる。はやてはわずかな違和感を息とともに吐き出すと部隊長としての顔を浮かべて言った。

「具体的な仕事の中身については私の副官、グリフィス准尉から話があるので詳しくはそちらで。で、別件なんやけど、ユキタカ曹長には通常業務とは別に新人ＦＷ四人のデスクワークの監督してもらおうと思ってるんや。どうやろ？詳しいことはまだ決まってないんやけど」

「デスクワークの監督ですか？わかりました。では詳しいことが決まり次第連絡をお願いします。八神二佐、仕事の件については以上ですか？」

雪鷹の質問にはやては頷く。

「そやね。二人と色々話もあるやろうし、あとは三人で・・・」

「では、私はこれで。失礼します」

三人で話せる機会を作ろうとした矢先だった。そう言うが早いが雪鷹は部屋から出て行ってしまった。引き留める言葉を言わせる暇も与えない、その速さに残された三人は、特になのはとフェイトは現状を理解しきれていない様子だった。呆気にとられた表情を浮かべながら二人が呟く。

「せっかく会えたのに・・・」

「あっという間だったね・・・雪鷹さん」

あれほど喜んでいたのが嘘のように二人の声は重い。そんな二人に

追い打ちをかけるようにはやてが口を開く。

「・・・まぁ、二人ともユキタカ曹長より年下で階級が上・・・同期の人間にとってはやっぱり気まずいもんがあるやろうな。レジアス中将みたいに若い魔導師を尉官や佐官にすることを快う思ってへん人もいるし・・・」

はやての言葉が二人に深く突き刺さる。同じ年に訓練校で学んだ人間が数年経って上司と部下になること、あるいは若い人間が上の役職に就くことは管理局では珍しくない。特に、二等陸佐という立場にいるはやてを筆頭に機動六課にはそういう人間が少なくない。部隊設立の都合上、仕方ない面があったとはいえ隊長陣は皆、二十歳にも満たない少女ばかりである。もちろん、その実力は与えられた地位にふさわしいものであるが、それでは納得できない人間が存在するのも紛れもない事実だった。

「そんな私はそんなこと思ってないのに・・・」

「そうだよ、そんなこと思うはずないよ」

なのはとフェイトが口を揃えて抗議する。昨日までは友達や同期といった間柄の人間が、次の日から上司と部下という関係になってしまえばそこに何らかの確執や軋轢が生じてしまうのは無理もないことである。たとえ、そこに十年という空白があっても、否、あるからこそ、すんなりと受け入れられないものがあるということは頭では理解できる。しかし、それを黙って受け入れられるほど二人は大人ではない。不満そうな、納得できない表情をはやてにぶつける。それが正当ではないと頭では分かっているが、何かに不満をぶつけずにはいられないのだ。

「ま、まぁ、単なる照れ隠しとか公私混同しないっていう意味かもしれんから一概には言えんけど・・・」

二人のプレッシャーに押し負け、はやてが呟く。無論、はやての言った可能性が皆無というわけではないが、望みは薄い。それを見極める間もなく、雪鷹は出て行ってしまったのだから今更と言ってしまえばそれまでだが。

「私、追いかけてくる」

フェイトはそう宣言するやいなや、部屋から出て行ってしまった。私も、とそれを追うようになのはも部屋を出ていく。残されたはやては小さくため息をこぼした。

「なぁ、リイン・・・どう思う？」

「ユキタカ曹長のことですか？ちょっと怖い人です」

はやはてリインの言葉に同意するように頷く。言葉遣いや所作には隙がない。しかし、武張った印象はなく、どちらかというと研ぎ澄まされた日本刀のような鋭さと美しさを備えている。きっと優秀な人間に違いはないのだろうが、ただの優秀で収まる器ではないだろう。はやてが恐れているのはまさしくそれだった。スパイという露骨な諜報活動ではなく、人目知れず何かを成し遂げてしまうそんな能力を雪鷹は隠している、そんな不安が拭いきれない。

「あの二人は・・・気付いているはずないな・・・」

二人の出ていった扉を見つめながらはやては呟いた。

・＊・＊・

部屋を飛び出した二人は廊下を曲がってすぐに雪鷹を見つけた。後ろ姿だけでも、一際目立って見えてしまうのは姿勢のよさだけではないだろう。本人の内に秘めた美質とでも呼ぶべき何かが雪鷹の周囲に漂っている。

「「雪鷹さんっ！！」」

二人の声が重なる。呼びとめられた雪鷹は振り返り、二人が追いかけてきたことを知ると小さくため息を零した。その顔がどことなく嫌そうな顔に見えたのはきっと二人の気のせいではないだろう。その証拠に、発せられた雪鷹の声は不機嫌なものだった。

「高町一尉、ハラオウン執務官、何か？」

明らかに二人を拒絶する雪鷹の態度に二人は困惑を隠せない。十年前はこんなはずではなかったのに、とその表情が物語っている。感動的な再会を期待しなかったといえば嘘になるが、こんな拒絶をされるとは思ってもいなかった。もっと和気藹々とした、昔を懐かしむようなそんな再会を思い描いていた。しかし、今二人の目の前にいるのは冬を身に纏ったかのように冷たく、どこか苛立っている雪鷹の姿だった。

「あの・・・久しぶりだね。元気にしてた？」

「ひどいよ。せっかく十年ぶりにあえたのに・・・色々話したいことがあるんだよ?それなのに挨拶もないなんてひどいよ」

戸惑いながらも話しかける二人に向かって雪鷹は冷たい言葉を言い放つ。

「それは失礼しました。しかし、思い出話がしたいのなら別の人を探してください。訓練校の元同期とはいえ、今は二人とも私の上官です。少しは立場を自覚したほうがよろしいのではありませんか?上司と部下が馴れ合っていては他の者に示しがつきません」

二人の前に並べられた敬語の数々。雪鷹が二人のことをどう見ているか、聞くまでもない。その中でも、私の上官、という雪鷹の言葉が二人の胸に突き刺さった。はやての言葉通りだった。確かに元同期とはいえ、現在の階級は二人の方が上だ。それはどうしようもない事実であり、誰が何と言おうと受け入れざるを得ない。しかし、それだけに二人は納得できない。要はお互いの気持ちの問題なのだ。階級の上下は否定できない事実であっても、それと人間関係はイコールではない。雪鷹が昔と同じように接するつもりがあれば、それで解決するのだ。それをしようとしない、受け入れようとしない雪鷹が二人には理解できなかった。

「そんな・・・階級なんて関係ないよっ!!」

「そうだよ。それに、ここは上下関係はそんな厳しくないよ?そんな堅苦しい言葉じゃなくていいのに」

しかし、雪鷹は呆れたようにため息を零すばかりだった。

「ここの部隊がそういう方針なのは判った。だが、それは俺の流儀

に反する。友達感覚で慣れ合うのが悪いとはいわんが、俺は遊びに来ているわけじゃない。最低限のラインってもんはあるだろう？」

雪鷹の口調が急に変わる。しかし、それが余計に雪鷹と二人の溝を深めてしまう。

「つまり・・・これが雪鷹さんと私達のラインってこと？」

フェイトが悲しそうに雪鷹に尋ねる。今にも泣きだしそうな潤んだ瞳に見つめられて、雪鷹はわずかにたじろいだ様子だったが、態度までは変わらない。しかし、幾分優しい声に変っていた。

「そんな目で見るな。俺が泣かしたみたいだろう。別にお前らが嫌いになったとか、疎ましいとかそんなことは思ってねぇ」

「本当に？」

潤んだフェイトの瞳が上目遣いで雪鷹に迫る。その仕草があどけない幼女のようで、雪鷹は更にたじろぐ羽目になる。しかし、そこで退く雪鷹ではない。

「十年この仕事をやってきたんだ。安っぽかろうが、俺なりの流儀や意地の一つや二つくらいある。それも通せないようならこんな仕事やってられん」

譲歩するつもりはない、という雪鷹の意志。しかし、退く気がないのはなのはとフェイトも同じである。雪鷹が自身の仕事に雪鷹なりの信念を持っていることは二人にも理解できる。二人にも己の仕事に対する誇りや自負心はある。雪鷹の言葉も理解できる。しかし、理解できるからこそ流儀や意地で、過去をなかったことのように扱

われるのは納得がいかない。

「相変わらず、頑固だね・・・雪鷹さん」

「お前ほどじゃないさ、高町一等空尉殿」

なのはの挑発をさらりと受け流して、挑発で返す。戦闘技術はともかく、口でなのはとフェイトが雪鷹に勝てる見込みはない。階級を盾にして雪鷹を従わせるのは簡単なことだが、そんな手段を使えば雪鷹は本気で二人と口を利かなくなる。後方支援部隊の雪鷹と前線の隊長を務めるなのはとフェイトだ。顔を合わせない方法は幾らでも有り得るし、雪鷹ならばそれを実行できるだろう。上官の権限を振り回しても意味はないのだ。言葉でもダメ、階級でもダメ、となるとなのはに残された手段は一つしかない。

「お互い譲れないものがあるんだね。それはきっと雪鷹さんにとって大切なもの、なんだよね?だけど、私もフェイトちゃんもふざけてるつもりはないんだよ?本気、なんだ。だから、私もフェイトちゃんも絶対に退かない。ううん、絶対に退けない。ただ捨てればいいってわけじゃないよね。逃げればいいってわけじゃ、もっとない。だから、賭けよう?私達と雪鷹さんの譲れない想い!!」

バリアジャケットを身に纏い、なのはは雪鷹をじっと見つめる。

「それからだよ。全部、それから・・・」

なのははレイジングハートを起動させ、杖の先を雪鷹に向ける。

「もう、あの頃のままじゃいられないんだよね、私もフェイトちゃんも雪鷹さんも。みんな、変わってく。変わらなきゃいけないんだ。

私達も雪鷹さんも。だから、新しい私達を始めるために、始めよう！私達の本気の勝負！！」

・＊・＊・

「・・・馬鹿な私でもわかるように説明してくれへんか？」

フェイトから報告を受けたはやては本気でそう言った。現実を逃避しようとしているその姿は妙に痛々しい。

「その・・・だから、なのはと雪鷹さんが模擬戦するだけだよ」

当初はフェイトを含めた二対一の予定だったが、流石にそれはフェアではないと雪鷹から意見が出たため、なのは対雪鷹に変更となったのだ。しかし、問題はそこではない

「本気で模擬戦？あのなのはちゃんが？下手したら死人が出るで」

はやての視線が痛い。こめかみに青筋が浮かんでいる、明らかに怒っている。無理もない話だ。出て行ったと思ったなのはがバリアジャケットを身に纏い、鬼のような形相で戻ってきて、雪鷹さんと戦うから、の一言だけ残してすぐさま出て行ったのだ。たったそれだけではやては数年は寿命が縮む思いだった。その時の恐怖をリインは後にこう語る。魔王じゃないです、魔神です、と。

「で、どうしてそうなったんや？経緯くらいは教えてもらわんと」

「リインも知りたいですっ！」

「そ、それは・・・」

フェイトが言葉を濁す。実際のところ、経緯も何もあったものではない。極めて、非常に、些細な、個人的な価値観の相違が少々、発展しただけだ。意地のぶつかり合い、といえば聞こえはいいが、実際はそこまでたいしたことではない。本来ならここまで大事になるまでにどちらかが退く、はずだった。しかし、運命の悪戯か、星の運びの幸いか、今回の件でどちらも退くということをしなかった。ただ、それだけのことなのだ。本来なら喧嘩と呼ぶにも値しない卑小なことのはずなのだ。当人同士も極めて、非常に、些細な、個人的な価値観の相違による揉め事でしかないはずなのだ。

「なんや？私に言えへんくらい大切なことなんか？」

「そ、そうじゃないよ」

真実ははやてにも言えないくらいくだらないことなのだ。当人二人にとってはきっと大事なことなのだろうが。これ以上フェイトに聞いても無駄だと判断したはやては二人から直接話を聞くことに決めた。

「フェイトちゃんが説明できへんのなら、当事者二人を呼んできてくれるか？」

「二人とも、もう訓練場に行っちゃったから呼びに行くころにはもう模擬線始めちゃうんじゃないかな・・・」

「・・・それもそうやな」

なのはを直に見ているはやてもそれに同意する。それほど、あのときのなのはは真剣だった。不屈の心を胸に宿し、覚悟を決めたなのはを止められるものなどこの世のどこにもいやしない。

「事情は模擬戦の後で聞くとしよか・・・命が惜しいし。それじゃ、私らも訓練場に行こか。なのはちゃんの全力全開・・・見れる機会なんて滅多にあらへんからな」

・＊・＊・

「というわけで、午後の訓練は予定を一部変更して、私と雪鷹さんの模擬戦の見学。そして、その後から訓練。シャーリー、訓練装置の設定よろしくね」

なのははＦＷ四人にそれだけ言うと雪鷹と一緒に訓練場へと向かっていった。残されたＦＷ四人は呆気に取られた表情でそれを見送り、ハッと我に返ってシャーリーに尋ねる。

「シャーリーさん、今の人は一体・・・」

「私もよくわかんないけど、模擬戦するみたいだね・・・」

スバルの問いかけにシャーリーは困惑気味に答える。シャーリーと何も教えられていないのだから、それが当然の反応だ。顔には出て

いないがここにいる人間で一番戸惑っているのはほかでもない、シャーリー自身である。鬼の気迫のなのはに迫られて、正直何がどうなっているのかさえ把握できていない。模擬戦したいから準備をお願い、と頼まれて詳しい事情の説明は一切なしである。何がどうなってるの教えてほしいのはシャーリーも同じだ。しかし、神様というものは存在するらしい。シャーリーに救いの手が差し伸べられた。

「シャーリー、ごめんね、なのはの無理に付き合わせちゃって」

「えっ・・・」

聞き覚えのある声にシャーリーが振り向く。

「フェイトさんっ!?それに八神部隊長っ!?」

フェイトとはやての二人が訓練場に姿を現した。突然のことに五人は驚きが隠せない。

「リインもいるですっ!」

そう言ってはやての背中からリインが飛び出す。

「あ、あの、フェイトさん、あの人は一体・・・なのはさんは訓練校の同期としか教えてくれませんでしたし、詳しいことは何も教えてくれませんでしたし・・・」

シャーリーが必死な顔でフェイトに尋ねる。常に冷静で、それでいて元気と明るさでいっぱいのシャーリーがこんな表情を浮かべるということにフェイトは内心驚いていた。フェイトの考えていた以上に状況は緊迫しているらしい。よく見れば後ろに並ぶ新人四人の表

情は硬く、重い。状況が飲み込めずに困惑しているだけではない。何かに怯えるように体を震わせている。

「みんな、心配しなくてもいいよ」

フェイトの優しい笑みがその場の緊張をそっと解していく。

「二人とも頑固で意地っ張りなだけだから。お互いに譲れないものがあって、それは言葉だけじゃ伝わらなくて、だから・・・」

「なんや、そういうことかいな。それならそうと言ってくれればよかったのに・・・つまったく本当に人騒がせな・・・」

フェイトの言葉の意味を理解したはやてがため息交じりに頷く。言葉だけで伝えられない想いが世界には在る。そして、その想いを伝える手段はたった一つしかない。その想いをぶつける。ただ、それだけだ。

「あの、それじゃ、つまり・・・なのはさんと雪鷹さんは想いをぶつけ合うためだけに模擬戦を？」

躊躇いがちにシャーリーが尋ねるとフェイトとはやては笑顔で頷く。さもそれが当然だと言わんばかりに。

「うん、そうだよ」

「まぁ、なのはちゃんらしいね」

この二人、絶対に狂っている。一見常識人のように見えるが絶対に狂っている。そして、今から模擬戦をしようとしている二人はもっ

と狂っている。シャーリーを含めた五人が五人ともそう思った。

「あ、もうすぐ始まるみたい。ここからだと少し遠いかな・・・シャーリー、モニターをお願い。みんな、よく見てて。なのはと雪鷹さんの模擬戦、きっといい勉強になるから」

シャーリーが装置を操作すると、目の前に巨大なモニターが現れた。モニターに写っているのは木々の生い茂る森林。そして、相対するなのはと雪鷹の姿だった。

０２『譲れない想い、意地と信念』（後書き）

十年前は届かなかった。
今でも届くかどうかわからない。
だけど、届かせないといけないんだ。

新しい私達を始める為に。

この手の魔法は撃ち抜く力。
意地も、誇りも、信念も。

譲れない想いを魔法に込めて。

いくよ、レイジングハート、全力全開っ！！

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
０３『ぶつかる想い、剣と魔法』

戦いの空へ、テイク、オフっ！！

03『ぶつかる想い、剣と魔法』（前書き）

己の信ずる道を切り開く為に。
この手の剣は断ち切る力。
絆も、過去も、運命も。
譲れない意地を剣に込めて。

凍てつく心はこの腕に
裁きの刃はこの胸に
この手に剣を

ブレイドハート、セット、アップ

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
始まります。

０３『ぶつかる想い、剣と魔法』

「高町一等空尉、模擬戦を始める前にもう一度確認する。時間無制限の一本勝負。降参するか戦闘不能になるかのどちらかで勝敗を決める。負けた方は潔く、相手に従う。それで間違いないな？」

「そうだよ。これは全力全開・・・私と雪鷹さんの本気の勝負」

レイジングハートを握るなのはの手に力がこもる。

「全力でやるかどうかは俺が決める。昔のよしみだ。とりあえず、おまえの想いとやらは聞いてやるよ」

雪鷹が懐からデバイスを取り出した。それは透き通る空の彩をそのまま映したような青い宝玉だった。一見するとレイジングハートの色違いに見える待機モード。空色の宝玉を手のひらの上に乗せる。

「凍てつく心はこの腕に、裁きの刃はこの胸に…この手に剣を。ブレイドハート…セット、アップ」

宝玉から青白い光が迸り、その姿を変えていく。光が収まると雪鷹の右手には黒い刀の柄のようなものが握られていた。柄の中心ではデバイスの核が青く輝いている。

≪ １ｓｔ ｍｏｄｅ ｓｅｔ ｕｐ. ≫

「それが雪鷹さんのデバイス？」

とても武器には見えないその形状になのはが訝しげに尋ねる。カートリッジシステムを搭載しているようにも見えない。雪鷹がふざけているとは思っていないが、とても戦えるようには見えない。

「あぁ。情報一課が独自に開発したデバイスなんで、詳しいスペックは教えられんが、使い心地はそう悪くはない。魔法刃生成」

柄の先端を囲むように青い環状魔方陣が展開する。そして、先端から青白い光が伸びていく。研ぎ澄まされた刃のように鋭い魔力。その切れ味は試してみる必要はないほど明らかだった。その形状から本当に武器かどうか半信半疑だったなのはも納得したように頷く。

（魔力刃？いや、違う。あれは・・・）

青白い光は更に圧縮され、細い氷の刃へとその姿を変えた。透き通る刃は一見すると脆そうだが、魔力密度は尋常ではない。いつも見慣れているフェイトの魔力刃のそれをはるかに凌ぐ力がその刃にこめられている。魔力刃の切れ味や強度はその魔力刃の密度に比例する。魔力密度が高ければ高いほどその切れ味は増し、強度も増す。厳密に言うと雪鷹のそれは魔力刃ではないが、生成プロセスはほぼ同じ。つまり、今の雪鷹の持つ刃はフェイト以上の切れ味と強度を兼ねていることになる。もしも、切られたら。そう考えると背筋が寒くなる。しかし、負けるわけにはいかないのだ。

「ステルスフォーム、展開」

≪Ｓｔｅａｌｔｈ　Ｆｏｒｍ≫

青白い光が雪鷹の体を包み込んでいく。袖なしの燕尾服のようなジャケットは夜を溶かし込んだように黒く、それでいて美しい。膝まで伸びる背の裾が揺れる様は優雅ささえ感じさせる。その上から羽織るコートももちろん、黒。飾り気のないシンプルなデザインだが、野暮さはない。その黒い光沢がなのはを妙に威圧する。下も上と同じような、しかし落ち着きのある黒のズボン。両手には指の抜かれたグローブがはめられている。全身が黒尽くめだった。しかし、不気味ではなく、黒の持つ独特の気品と隙を与えない鋭さがある。フェイトが着る執務官の制服とは全く別の、真実黒一色の装い。それだけに雪鷹の銀の髪がよく映えていた。

「引き返すなら今のうちだぞ？訓練校時代、一対一で俺に一度も勝てなかったお前が俺に勝てると思っているのか？教え子の前で恥をかかせるのは少々気の毒だ」

重厚な威圧感。こうして目の前に立たれると百戦錬磨のなのはでさえ気圧されてしまう。くぐってきた修羅場の数は雪鷹も負けてはいない。しかも、訓練校時代になのはに一度も負けなかったという確固たる自信もある。白を基調としたなのはと全く正反対の漆黒の剣士は剣を構えて不敵に笑った。

「あの頃の私とはもう、違う。だから、負けない。必ず、雪鷹さんを倒す」

なのはがレイジングハートを構えなおす。負けられない戦いがここにあるのだ。

「そういえば、魔力リミッターがかけられているらしいが・・・いいのか？リミッターを解除しなくて」

「いらないよ。魔力リミッターを解除するにははやてちゃんの、八神部隊長の許可が必要で回数も決まってる。模擬戦には使わせてもらえないよ。それに今の私は2．5ランクダウンで魔力ランクはＡＡ相当。たぶん、雪鷹さんとそう変わらないはずだよ」

なのはの言葉に雪鷹は小さく頷く。その顔はどこか笑っているようでもあった。

「リミッター付きで互角とは随分の安く見られたもんだな。負けて後からリミッターのせいでした、なんて言うなよ？」

「そんなこと言わないよ。勝つのは私だから」

二人は不敵に微笑みながら対峙する。

「それじゃ、模擬戦・・・」

「開始だな・・・」

・＊・＊・

「レイジングハート、アクセルシューター・・・シュートっ！！」

《Ａｃｃｅｌ Ｓｈｏｏｔｅｒ》

桜色の光弾が雪鷹へと放たれる。その数、二十以上。上下左右、フ

ェイントを交えた同時攻撃。

（まずはこれで様子見・・・）

雪鷹の実力は十年前に嫌というほど味わっているが、今のなのははあの頃とは違う。魔力も技術もあの頃より向上している。魔法を知って一年も経っていなかったあの頃と違い、経験も十二分にある。たとえ、魔力リミッターがかかっているとしても一対一で後れを取るはずがない。それだけの自信がなのははにはあった。

「操作性は相変わらず化け物じみているな。だが・・・」

雪鷹はそう呟くと、氷の剣を地面に突き刺した。

「脆弱だな」

途端、地面から氷柱が幾つも飛び出し、アクセルシューターを貫いた。無表情な氷の細槍が雪鷹を囲むように突き出て、近づく光弾を阻み、あるいは突き刺していく。それはさながら、氷の華だった。優雅に、しかし、したたかに容赦なく、花弁が桜光を穿つ。あの頃の雪鷹ならば捌けない攻撃のはずだった。なのはも雪鷹が十年前から成長していないと考えるほど愚かではない。しかし、ある程度は苦戦するだろうと予測し、その対応を見て今の雪鷹の実力を測るつもりだった。その様子見をいとも簡単に防がれてしまったことになのははは驚きを隠せない。

「これがお前の全力全開か？」

「それ、面白くない冗談だね。今のはほんの様子見だよ」

笑顔で取り繕うが、その顔は少々ぎこちない。それを見透かしたように雪鷹は笑う。地面に突き刺した剣を引き抜き、剣先をなのはへと向ける。

「じゃあ、今度は俺の方が様子見させてもらうか。フリーズランサー、セット」

《Ｆｒｅｅｚｅ　Ｌａｎｃｅｒ》

雪鷹の目の前に氷の槍が生成されていく。その数は四つ。なのはの生成した光弾に比べれば数は少ないがそれでも油断はできない。十年前のなのははこの魔法に散々苦しめられた。そのことを思い出し、なのはの表情が若干強張る。雪鷹の魔法、フリーズランサーはスピードに特化した魔法であり、並みの防御魔法を容易く突き破るほどの貫通力を備えている。しかし、スピードに特化している分、操作性は皆無に等しい。つまり、その射線上にいなければ恐れるに足らないのだ。

（避けられるかな・・・）

判断に迷う。射線上にいなければ危険性はほとんどない攻撃である。しかし、そのスピードは十年前のフェイトがソニックフォームを以てしてかろうじて躱せた、というほどに速い。今のなのはならフラッシュムーブを使えばおそらく避けられる。しかし、それでは意味がない。なのはが雪鷹に手をかざす。

「・・・ラウンドシールド」

《Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ》

なのはの前面にシールドが展開される。淡い桃色の盾を挟んで相対するなのはと雪鷹。

「受け止められると？」

「十年前はできなかったよ。でも、今なら、できる」

自信に満ちたなのはの表情。それを見て雪鷹も面白そうに笑う。

「貫いてやるよ、その自信。ファイアっ！！」

氷の槍が二つ、なのはの目の前から消えた。そう思った瞬間、強烈な衝撃がなのはを襲う。目の前を見るとラウンドシールドとフリーズランサーが拮抗していた。

（・・・全然、見えなかった。速すぎて・・・）

見えたのは二筋の線だけだった。予想を越えた射撃速度になのはの背筋を冷たいものが伝う。フラッシュムーブを駆使してもせたかどうかは微妙なところだ。不意を狙われれば躱せない可能性も十分にある。しかし、なのはの動揺とは裏腹に、雪鷹の槍は堅牢な盾を打ち破ることはできず、粉々に砕け散った。

「なるほど。確かに強くなっている」

雪鷹は感心したように呟く。しかし、驚いた様子はまるでない。想定の範囲内、とでも言いたげなその態度になのはは悔しさを覚えた。驚かされているのはなのはだけ、という状況が負けず嫌いのなのはの心を刺激する。

「もう、私にその攻撃は通じないよ」

真正面からは、となのははは心の中で言葉を続ける。至近距離であのスピードの攻撃を繰り出されれば、デバイスのオートガードでは対応できない。この距離であるなら、発射されてからの回避はほぼ不可能といっていいだろう。

（ちょっと考えが甘かった、かな・・・）

なのはがこの十年で成長したように、雪鷹も成長しているのだ。それは当然のことだが、その伸び幅をなのははは見誤っていた。十年前、一度も勝てなかった相手は、十年経った今でもそう容易く勝たせてはくれないようだ。こうなるとリミッターがかかっている我が身が恨めしく思えてくる。全力全開、と口では言っているものの今のなのはでは全力の半分ほどしか出すことができないのだ。

「言っただろ?その自信、貫いてやるって」

不敵に笑う雪鷹の言葉通り、なのはの前にはまだ二発のフリーズランサーが宙に浮かんでいる。防ぐことに成功したとはいえ、それは真正面からの攻撃を防いだに過ぎない。

「ファイアっ!!」

雪鷹の声が響き、一瞬遅れて盾に氷がぶつかる衝撃。先程よりもやや重い。しかし、それで砕けてしまうほどなのはの盾は脆くない。

「通じないって言ったでしょ」

なのはが叫ぶが雪鷹は不敵な笑みを崩さない。

「さて、どうかな?くどいようだが敢えて、言おう。その自信、貫いてやる。ファイアっ!!」

「えっ!?・・・」

予想していなかった第三射。そして、なのはに向かう一条の閃光。次の瞬間、なのはの盾が砕け散った。信じられない事態になのはの思考が一瞬停止する。しかし、ここで止まってしまうとどうなるかをなのはの体は理解していた。無意識のうちに、体をそらせ、飛んでくる氷を回避する。右腕を何かが掠める感覚。冷たい、というよりはむしろ熱い。痛みがないのは奇跡と言っていい。

「直撃は避けたか・・・流石はエースオブエース」

余裕そうに笑う雪鷹とは対照的に血の気がひいたなのはの表情。バリアジャケット右の袖は抉り取られたような穴が開いている。あと半歩でも右にいたら、氷の槍はなのなの右腕を貫いていただろう。そんな光景を想像して表情が強張る。

「そんな使い方、想像もしなかった・・・やっぱり、雪鷹さんはすごい」

なのははまだ自分の目で見たものが信じられなかった。なのはのラウンドシールドと拮抗していた一発のフリーズランサー。その氷の槍の後ろを寸分たがわず、もう一発のフリーズランサーが打ち抜いたのだ。正確無比な一点突破の一撃。その精度には流石のなのはも驚くしかない。

「大丈夫か?手が震えているぞ?」

雪鷹の言葉になのはは静かに首を横に振った。

（確かに怖い。でもどうしてだろう・・・）

震えているのは恐怖のせいだけではない。もちろん、恐怖はある。それは事実だ。しかし、それ以上に強い気持ちがなのはの中で湧きあがり、魂に訴えかけてくる。恐怖さえ上回る強い激情に気付いてしまったからにはもう、後には戻れない。震えているのは体ではなく、魂だ。そして、この震えは恐怖ではない。歓喜なのだ。

（もっと戦いたい、この人と。何か為だとか、勝負だとかそんなことを抜きにして純粋に・・・）

「・・・楽しいね、雪鷹」

なのはが笑った。それに応えるように雪鷹も笑う。

「あぁ、様子見はもう終わりだ・・・」

・＊・＊・

「い、今のが様子見・・・」

モニター越しにスバルが呆然と呟いた。明らかに自分たちとはレベルの違う攻防を目の当たりにして新人四人とシャーリー、そしてリ

インの六人は言葉を失った。爆炎の飛び交う派手さも、高機動空戦のようなスピード感もない。手の内の見せ合うような、そんな地味な攻防のはずなのに、それだけでは終わらせてくれない。見る者を惹きつけ、その視線を釘付けにしてしまう。エースオブエースとまで呼ばれるなのはの実力は言うまでもないが、対する雪鷹もそれに全く後れをとっていない。むしろ、今の勝負だけを切り取ってみるなら雪鷹のほうに分がある。軽い見学気分だったはやても顔色を変え、モニターを凝視している。模擬戦という言葉で片付けてしまうには危険すぎた。なのはの実力は二人とも承知していたし、雪鷹もそれ相応の実力者であることは予想していた。そんな二人が本気でぶつかり合えばどんなことになるかはきっと二人も良く理解している。だから、本気で闘うと口では言いながらも、ある程度の加減なしてくれるだろうと期待していた。しかし、モニター越しに見る限りでは二人は加減しているようには見えない。自分達の考えが甘かったことをフェイトとはやては痛感した。

「あ、あの、フェイトさん・・・黒い服の人の魔法、あれは一体何なんですか？」

キャロが遠慮がちフェイトに尋ねる。どこか怯えているようなキャロの表情に、はやてと並んで二人、よほど深刻そうな顔をしていたのだろう、とフェイトは内心苦笑した。今更かもしれない、と思いながらも何気ない様子を微笑むとキャロの表情が目に見えて和らいだ。

「雪鷹さんは『氷結』の魔力変換資質を持っているんだよ。だから、あの氷の塊を生成するのに魔法陣はいらないんだよ。今の魔法もきっと魔力を氷に換えて、加速させて撃ちだしているんだと思う」

「へぇ、珍しいな。氷結の資質持ちなんて私も初めてや」

魔力変換資質を持った人間は珍しい。その中でも『氷結』の変換資質を持っている人間は稀である。機動六課にもフェイトのような魔力変換資質を持った人間はいるが『氷結』の変換資質を持った人間はいない。思わぬ拾い物をしたと笑ってしまうのは部隊長という立場のせいか、はたまた、元からのはやての性格か。

「フェイト隊長、それじゃ、あの剣もや地面から突き出した氷も？」

魔力変換資質を使ったのか、と続けようとするティアナの言葉を先読みしてフェイトが頷く。

「そう考えていいと思うよ。剣の方は魔力密度を上げる為にデバイスで制御しているから純粋に変換資質だけ、とは言い切れないけど」

そう付け加えてからフェイトは少し残念そうな顔を浮かべた。

「少し羨ましいな・・・」

私も戦いたい、とモニターを見つめる視線が無言で告げていた。それを見たはやてはため息を零した。魔力リミッターがかかっているとはいえ、なのはもフェイトもＡＡ相当の力を持っているのだ。そんな人間同士が本気でぶつかり合えば訓練場の一つや二つくらい簡単に壊せてしまう。最新鋭の機材を投入し、強度も十分なはずのこの訓練場でさえ、なのはやフェイトの本気に耐え切れるかどうか危うい。

「訓練場を壊さんように今から言うても・・・無駄やろうな・・・」

どこか諦めた様子のはやての言葉が耳に痛い。

「その・・・ごめんね、はやて」

フェイトが謝るのもどうかと思うが、こうなってしまうことを止められなかったという意味ではフェイトにも責任がある。それを理解しているのか、はやては何も言わず黙って頷いただけだった。モニターの向こうで二人が動く。皆の視線は自然とモニターに向き、言葉が消えていった。

・＊・＊・

「エクセリオン・・・バスターっ！！」

桜色の大火力砲。全てを呑み込んでしまう光の奔流が天から降り注ぐ。

「全く、化け物め・・・」

森の木々を薙ぎ倒していく様を目の前にして雪鷹が毒突きながら、なのはの砲撃を躱し、すぐさま反撃に転じる。

「 フリーズランサーっ！！」

氷の槍が空を舞うなのはを狙う。その速さはまさに神速。しかし、距離があり過ぎた。フェイトほどではないが、スピードや機動力にも定評のあるなのはだ。いくら速いとはいえ、真っ直ぐ飛んでくる

攻撃を躱すことなど造作もないのだ。雪鷹の攻撃を躱したなのははすぐさまアクセルシューターを撃ち返す。相手の距離を保ち、鉄壁の防御を固め、誘導弾で敵を牽制、隙を作り出し、大威力砲の一撃を以て仕留める。かつて、なのはの編み出した『単体でも戦闘を行える砲撃魔導師』という戦闘スタイル。自身の生み出した戦術をなのははこの模擬戦で実践していた。まるで、この十年での成長を雪鷹に見せつけるように。アクセルシューターを駆使し、雪鷹の隙を誘い、エクセリオンバスターを撃つ。あるいは、抜き打ちのエクセリオンバスターで雪鷹が崩れたところに数十発のアクセルシューターを容赦なく叩きこむ。模擬戦でここまでするのか、というほどの徹底した攻撃。しかし、それにもかかわらず、なのはは雪鷹に決定打を与えることができずにいた。

「リミッター付きでこれだけの戦闘力・・・恐ろしいね」

雪鷹は半ば呆れた様子で飛んでくるアクセルシューターをブレイドハートで斬り捨てていく。その切れ味も、剣の腕の並みではない。

（さて、どうする・・・あの防御を抜く方法はなくもない。だが・・・）

雪鷹がなのは攻略の策を考える。なのはの戦闘スタイルは極めて単純なものであるが、それだけに攻略が難しい。強引な力技でねじ伏せられたらそれが一番いいのだが、それだけの火力を雪鷹は有していない。様子見で見せたフリーズランサーの二段撃ちもおそらく躱されてしまうだろう。そもそも、あの技は今は使えない。寸分のズレを許さないあの攻撃は、人並み外れた集中力と射撃精度があって初めて成立する。いつなのはからの攻撃がくるか分からないこの状況であの攻撃をすることは不可能なのだ。

「手の内晒すみたいだが、まぁいいか・・・」

そう呟いて、雪鷹はフリーズランサーをなのはに放つ。十発近い弾数。しかし、目的は攻撃の為ではない。幾分、遅い弾速で氷がなのはを囲むように広がる。

≪ Ｂｒｅａｋ ≫

デバイスの電子音と同時に氷が炸裂し、細かな粒となる。これ自体に殺傷能力はない。所謂、目眩ましだ。しかも、なのはの視界を遮れたのはほんの数秒。上に逃れたなのはがレイジングハートを構えるが、そこに雪鷹の姿はない。慌てて周りを見渡すが人影はない、

「森の中に隠れられた、か・・・ちょっと、厄介かな」

なのはが苦い表情を浮かべる。真下を見下ろすと木々が生い茂る緑の絨毯が広がっている。空から見つけるのはまず不可能だ。森の影からあの神速の射撃で狙われるかと思うと生きた心地がしない。易々と奇襲を許すつもりはないが、警戒せざるを得なくなる。

「レイジングハート、エリアサーチっ!!気付かれないように慎重にお願い」

≪ Ａｌｌ ｒｉｇｈｔ，ｍｙ ｍａｓｔｅｒ. Ａｒｅａ Ｓｅａｒｃｈ ≫

桃色の光の玉が三つ、森の中へと消えていく。なのはの対応は冷静だった。動揺することなく、次の戦術を考える。雪鷹が隠れるのなら見つけ出せばいいのだ。この訓練場程度の広さなら数分で探索できる。見つけ出すまでは防御に徹し、居場所が判明し次第、特大の

砲撃を撃ちこむ。そう決めたなのははは探索の結果を待つ。しかし、待っていたのは予想外の報告だった。

≪　Ｎｏ　ｏｎｅ　ｉｓ．　≫

誰もいません、とレイジングハートは静かにそう告げた。

「そんな・・・レイジングハート、もう一度」

信じられないような表情でなのはがレイジングハートを見つめた。

≪　Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．　≫

もう一度エリアサーチを試みたが、おそらく無駄であるとなのはの勘が告げていた。案の定、ほどなくしてレイジングハートが先程と同じ結果をなのはに告げた。

（幻術ならエリアサーチで見破れる。そうじゃないなら・・・）

なのはが考えを巡らす。どんな方法を使っているのはわからないが雪鷹はなのはのエリアサーチから逃れた。しかし、訓練場からいなくなってしまったわけではない。姿を隠して数分が経つが、雪鷹は何の動きも見せない。警戒していたフリーズランサーの二段撃ちもまだこない。こうなると雪鷹の狙う戦術も限られてくる。おそらく、持久戦に持ち込んで、なのはが隙を見せた途端に奇襲するのが雪鷹の狙いなのだろう。いつ襲われるかわからない不安は人間の精神力を容赦なく削り取っていく。緊張の連続はいずれ、隙を生む。長引けば長引くほどなのはが不利になる。なのはを圧倒するだけの火力を持たない雪鷹にとって妥当な戦術だ。雪鷹を見つけられない今のなのはに攻撃する手段はない。

「雪鷹さん、隠れてるなら、力づくで引きずり出すだけだよ？」

しかし、なのはは不敵に微笑んだ。

「レイジングハート、スターライトブレイカー、いけるね？」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．　Ｓｔａｒ　Ｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

レイジングハートから空薬莢が次々に飛び出る。

「広域殲滅型のスターライトブレイカーで隠れてる雪鷹さんを引きずり出して、一気に叩くっ！！」

・＊・＊・

「あ、あの、フェイトさん・・・これ、本当に模擬戦、なんです・・・か？」

エリオがモニターを指さしながら。フェイトに尋ねる。その声はわずかに震えていた。しかし、フェイトは何も言わなかった。他の人間も言葉を失っていた。なのはが使用する最強の集束型砲撃魔法、スターライトブレイカー。その威力を肌で知っているフェイトは何も言えなくなっていた。気付くとキャロがフェイトの制服の裾を握り締めていた。おそらく、キャロ自身、無意識でしてしまったのだ

ろう。キャロの手をフェイトがそっと握り締める。無意識の行動にキャロ自身、驚いた顔をしたが、フェイトの手をギュッと握り返してきた。

「なのはちゃん・・・いくらなんでもそれはやり過ぎやろ・・・」

はやては既にモニターを見ていなかった。訓練場の上空には肉眼で確認できるほど巨大な魔力が集まっていた。淡く優しげな色合い。しかし、その見た目とは裏腹に威力は想像を絶するものがある。なのはに魔力リミッターがかかっているとはいえ、あれほど巨大な集束砲を撃てば訓練場はもちろん、訓練場から離れているはやて達にもその余波が及ぶ。魔力制御の得意なのはであっても余波までは制御できない。

「・・・みんな、防御魔法の準備をして。シャーリーは私の後ろにいて」

静かな口調でフェイトが新人達に指示を出す。バルディッシュを起動させ、余波に備える。

「はやて、念の為にみんなを守る防御魔法をお願い・・・」

「・・・わかった」

はやてはそう呟くと自身のデバイス、シュベルトクロイツとバリアジャケットを起動させた。

・＊・＊・

「本当に化け物だな・・・あれだけの魔力をよく制御できる・・・」

木々の隙間から見える桜色の塊。集束された魔力はなのはの身の丈をはるかに超えている。そんなば化け物じみた代物を見せつけられて雪鷹は呆れるしかなかった。魔力リミッターのせいで十年前よりも魔力値は下がっているはずなのにそれを微塵も感じさせない魔力と機動力。その成長ぶりは雪鷹の想像をはるかに越えていた。

「エースオブエースの名前に嘘はなかったようだ」

そう呟いてから雪鷹は口元が笑っていることに気付き、驚いた表情を浮かべた。

「まったく・・・あいつらといると色々と掻き乱される」

うんざりしたような、しかし、どこか嬉しそうな表情は雪鷹自身戸惑いを隠し切れていない証拠だ。本来の雪鷹ならこのような無駄な争いは極力避ける。避けられなくとも適当な場面で落とし所を作り、不必要に長引かせたりはしない。勝ち負けに拘らず、いかに早く終わらせられるかを考えて戦う。流儀だの意地だのを張り合うことも絶対にない。負けず嫌いで、全力全開を信条とするなのはとは全く正反対と言ってもよかった。そんな雪鷹が心のどこかでこの戦いに心躍らせているのだ。雪鷹自身、そんな自分がいることに妙な気分にならざるを得なかった。

「このまま隠れて続けるのは・・・無理だな・・・」

雪鷹のバリアジャケットには幾つか種類があり、今の雪鷹が装着しているのはステルスフォームと呼ばれるものだ。ステルスの名前が示す通り、索敵魔法や探知機材、レーダーの類を一切無効化にしてしまう効果がある。光学迷彩機能はついていないため、人に見られずに行動することは不可能だが、こうして一旦隠れてしまえば、そのまま逃げ切れる自信が雪鷹にはあった。しかし、広域殲滅型の集束砲撃を放とうとしているなのはの前で隠れ続けることは無意味だ。

「空戦な苦手なんだが・・・」

疲れたようにため息をこぼすと雪鷹は、フリーズランサーを生成し、なのはへと狙いを定めた。生い茂る木々が邪魔でない、といえば嘘になる。しかし、一点を見つめ、息を吐き出し、余計な緊張を抜く。なのはなら発射されたことに気付いてからでも十分に対応できる距離だ。集束砲のチャージをしていたとしてもそれは変わらない。ここから撃てば十中八九避けられる。それを承知した上で雪鷹はなのはを狙った。

「ファイア」

フリーズランサーを放つと同時に雪鷹も宙を翔ける。元々陸戦魔導師だった雪鷹は空戦が苦手だった。魔導師になりたての頃から空戦魔導師として活躍していたなのはと正面からぶつかれば間違いなく負ける。しかし、空戦魔導師としての力量はなのはに及ばないながらも、奇襲であれば、勝ち目の一つや二つくらいはあるはずだった。ブレイドハートを握る手に力が入る。久しぶりに、勝ち、を狙いにいっている自分に気付いた雪鷹はかすかに笑い、速度を上げた。なのはと視線が合う。その顔に驚いている様子はない。むしろ、笑っていた。まるで、思惑通りにいったことを喜ぶかのように。

「かかったね、レイジングハートっ！！」

《Ｃｈａｒｇｅ　ｃａｎｃｅｌ》

集束していた魔力の塊が一気に膨張し、弾け飛ぶ。桃色の魔力が小さな灯となって宙に広がっていく。それはまるで桜の花びらが舞い散るかのように幻想的な光景だった。見る人の目を惹きつけ、魅了する美しさと儚さ。そこで戦場であることを忘れさせてしまうくらい華麗さに雪鷹は思わず息を呑んだ。しかし、そんな感傷に浸れる余裕はない。雪鷹は氷の刃をなのは目掛けて振り翳す。しかし、フリーズランサーを難なく躱したなのははレイジングハートで雪鷹の剣を受け止めた。

「やってくれる・・・いつからそんな策士になったんだ？」

「言ったはずだよ、あの頃の私とはもう、違うって・・・」

《Ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ》

なのはが一旦離れ、雪鷹の背後に回る。雪鷹も距離を取ろうとするが思うように体が動かない。まるで、水の中にいるかのように体が重い。頭に鈍い痛みが走り、体中から力が抜けていくようだった。動かない体に鞭を打ち、雪鷹はなのはと対峙する、

「にゃはは、いくら雪鷹さんでも動けないはずだよ？集束した魔力を全部放出したからこの空域の魔力素濃度は通常の約８倍・・・慣れない人はいるだけでも辛いよ」

勝ち誇ったようになのはが笑う。レイジングハートを構え、空薬莢が一発、吐き出される。杖先に溜まっていく桜色の魔力。それを見

た雪鷹の表情が険しくなる。

「エクセリオン・・・」

《２ｎｄ　ｍｏｄｅ　ｓｅｔ　ｕｐ》

「バスターっ！！」

大きな爆発音が空に響く。至近距離での中距離砲撃。撃たれた方はもちろん、撃った方にもそれなりの反動がある、はずだった。しかし、反動はなく、手応えもいつもと違っていた。砲撃の反動とは全く異なる、鈍い痛み。そして、朦朧としていく意識。

「残念だったな。十年前なら間違いなく、おまえが勝っていた。あるいは俺からもっと離れて、距離をとっていれば、今日も勝てただろう。策はよかった。が、勝ちを急ぎ過ぎた」

消えかける意識の中になのはは雪鷹の声を聞いた。しかし、顔を動かすことができない。目の前に見えるのは雪鷹の右手に握られた新しいデバイスだけであった。雪鷹が手にしていたのは黒塗りの刀だった。先程までの氷で生成された魔法刃ではなく、実体を持つ片刃の刀がバリアジャケットを切り裂き、なのはの右の腹部に食い込んでいた。何故、と思うよりも速く、なのははその意識を手放していた。負けた、ということだけは理解できたようで気絶したその顔はどこか悔しそうに見えた。意識を失ったなのはの体を雪鷹が受け止める。

「ブレイドハート、モードリリース。レイジングハート、お前もだ」

雪鷹の言葉に従ってブレイドハートが待機モードの青い宝玉に戻り、

雪鷹の右手の中に収まる。レイジングハートも待機モードに戻ると雪鷹の右手へと収まった。なのはを抱えたまま雪鷹は大きく息を吐き出す。高濃度の魔力素の影響はまだ抜けきっていないが、なんとか飛行はできる。それを確認すると雪鷹はゆっくりとした速度でフェイト達の下まで飛んでいった。

０３『ぶつかる想い、剣と魔法』（後書き）

白熱した模擬戦が幕を閉じた。

一対一でなのはを下した雪鷹。しかし、それははやての疑いを強めただけだった。

模擬戦後、はやてに呼び出された雪鷹。

繰り広げられる水面下の戦い。そのさなかではやては雪鷹の闇を垣間見る。

絶望の光のその先に、はやては何を想うのか…

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ

０４『立場と責任』

テイクオフ

０４『立場と責任』（前書き）

自慢にもならないことだが、疑われることには慣れている。
だが、それは文字通り『慣れている』だけであって
それ以上でも以下でもない。

当然、不愉快な気持ちになる。
傷つきもするし、悲しいこともある

慰めて欲しいわけではない。
哀れんで欲しいわけではない。
優しくして欲しいわけではない。

一つだけ理解してくれたら、それでいい

踏み込んでくるなら容赦しない。
たとえ、それが誰であろうとも。

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
始まります。

０４『立場と責任』

「なのはさんが・・・負けた・・・」

スバルは食い入るようにモニターを見つめていた。なのはが負けたという事実を受け入れられない表情だ。他の人間も似たような面持ちだった。

「フェイト隊長、今のは一体何が・・・」

ティアナが最期の攻防で何が起きたのか理解できず、フェイトに尋ねた。

「集束砲撃、スターライトブレイカーはたぶん囮。わざと隙を作って隠れていた雪鷹さんを誘いだした。そして、雪鷹さんが出てきたところでスターライトブレイカーをキャンセル。集めた魔力を全部放出して、魔力素の高濃度空域を作り出した。これがどういうことだかティアナはわかる？」

魔力素を吸収することで魔導師は魔力を得ている。しかし、魔力素があればいいというわけではなく、濃度があまりに高過ぎると吸収できる量に限界があるため、自然回復の阻害や魔法の暴走を起こす可能性があるのだ。

「えーと、魔力素の過剰摂取のせいで一時的に行動に支障が・・・って、それだけの為になのはさんは集束砲撃を・・・」

ティアナの顔から血の気が引いていく。集束砲がその反動はもちろん、集めた魔力の制御など負担が大きく、何度も使えない。多くの砲撃魔導師にとって、集束砲は最期の切り札といってもいい。その集束砲を隠れている人間を誘いだす為の囮として使ったのだ。そして、魔力素の高濃度空域を作り出すための布石としても。

「こんな戦術、どの教本にも載ってませんでした・・・」

「私も初めて見た。たぶん、なのはがこの模擬戦中に考えて、実践したんだよ」

誰にでもできる戦術ではない。使用できる場面も、魔導師もかなり限定される。しかし、一対一で戦う場合はかなり有効な戦術である。隠れている相手が出てこなければ集束砲を撃つ、という選択もできる。強敵と相対し、勝ち目がないと判断した時、離脱するための隙を作るためにもこの戦術は応用できる。荒削りな部分はまだあるが、即席の戦術としてはかなり完成度の高いものである。

「すごい・・・」

感嘆と尊敬の念を込めてティアナが呟く。しかし、すぐにその顔が険しくなる。

「でも、その戦術を破った・・・あの人は」

「うん、そうだよ・・・」

そう呟いて二人は空を見上げた。雪鷹がなのはを抱えてゆっくりと降りてきた。間近で見るとその異様さが嫌でも目につく。見る者を

威圧する漆黒のバリアジャケット。雪鷹の鋭い眼光と相まって、近付くことを躊躇わせる雰囲気を漂わせている。敵意はないが、怒っているような、そんな気配だった。

「なのはさんっ！！」

スバルが駆け寄る。気を失っているが、右の腹部以外に目立った外傷はない。

「肋骨を痛めている可能性がある。無理に動かすな」

静かな、しかし鋭い雪鷹の言葉。

「雪鷹さん、なのはは？」

「気を失っているだけだ。命に別状はない。誰か医務室に案内してくれないか？」

雪鷹の言葉にフェイトは安堵の溜息を零す。

「よかった。それじゃ、スバル、雪鷹さんを医務室まで・・・」

「あかん、スバルがなのは隊長を医務室に連れていってくれるか？ユキタカ曹長、模擬戦終わってすぐで悪いけどすぐに私と部隊長室に来てもらうよ。リインはなのは隊長についてあげてな」

静かな、しかし、どこか冷たさのある声ではやてが指示を出す。有無を言わさないその口調に雪鷹はスバルになのはを手渡すと黙ってはやてのあとについて歩いていった。

・＊・＊・

「ユキタカ曹長、あんたは何者や？」

二人きりの部隊長室。はやての表情は険しく、対する雪鷹はどこか飄々としていた。

「八神二佐、質問の意図を掴みかねます」

雪鷹のわざとらしい困った顔がはやてを感情を逆撫でし、苛立たせる

「こんなときにふざけるのはやめてくれるか？」

「ふざけていません。私は何者か、とそんな哲学的な問いかけをされても困ると言っているのです。私は何者か。男です。シノブ・ユキタカです。管理局局員です。空曹長です。答えは無数にあります。しかし、八神二佐はそんな答えを求めているのではないでしょう？」

雪鷹の言葉にはやては黙りこんだ。初対面の好印象が嘘のように消え去った。何かあるだろう、と覚悟はしていたがここまで露骨な態度を取られるとは思ってもいなかった。ふざけた言葉や態度は聞き流さなければならない。冷静を保たなければ雪鷹のペースの呑まれてしまう。下手な腹芸は通じない。そう自分自身に言い聞かせながら、はやてはため息をこぼした。まずは会話の主導権を取り戻さなければならない。今の状況ではやてが何を尋ねても簡単にはぐらかされてしまうのは目に見えていた。

「なのは隊長とフェイト隊長はユキタカ曹長のことをすごい信用してる。訓練校時代によっぽどお世話になったんやろうな」

「いや、それほどでも」

雪鷹が照れたように笑う。もちろん、作り笑いであることは明白だ。それを無視してはやては続ける。二佐としての、部隊をまとめる人間としての顔を浮かべるはやての瞳は鋭く、強い。

「せやけど、私は違う。ユキタカ曹長とは今日が初対面や。初対面の人間を信頼しろって言われても信用できるほど私はお人好しやあらへん」

「ごもっとも」

雪鷹が大げさに頷く。もちろん、はやてはこれも無視する。

「情報部、しかも情報一課なんていうたらその筋では有名や」

「有名なのはお互い様でしょう？有名人は辛いですね」

雪鷹はしみじみと頷く。それでも、はやては無視を続ける。腸が煮え繰り返るのを懸命に堪えながら。

「それに、リミッター付きとはいえ、なのは隊長を一対一で下すその実力・・・目つぶっておけ、いうんは無理は話や」

「お聞きになってませんか？こう見えて十年前は陸戦ＡＡランクだったんです。今は空戦Ａ＋ですが。エースオブエースとはいえ、リ

ミッター付きでＡＡランクまで下がっていたと伺っています。Ａ＋がＡＡに勝つ。決して珍しいことではないですよ」

自慢げに語る雪鷹の表情にはやては憎たらしさを覚えずにはいられない。

「同じ職場の人間を疑うんは心苦しいことやけど」

「またまた心にもないことを」

はやての言葉を遮って雪鷹が笑う。はやてのこめかみに皺が寄る。

「非常に心苦しいことやけど、単刀直入に聞くで。あんたはスパイか？」

雪鷹は一瞬言葉に詰まり、遠くを見つめるような切なく、寂しげな眼差しではやてを見つめた。

「・・・高町一尉やハラオウン執務官が・・・なのはやフェイトが聞いたら悲しむだろうね、きっと。信頼している人間が親友に疑われているなんて」

急に雪鷹の口調が変わった。愁いを漂わせた眼差しがはやてを射抜く。はやての顔が曇る。流石のはやてもこう切り返されるとは思ってもいなかった。ふざけた口調や態度ならいくらでも無視できたが、親友のことを引き合いに出されるとそれも難しい。なのはやフェイトは雪鷹に絶大な信頼を置いている。あれほど冷たい態度を取られても、雪鷹に不利な条件が揃っていても二人は雪鷹を信じると言い切った。その瞳に迷いはなかった。そのときの二人の顔を思い出すとはやての心が痛む。雪鷹の言葉の通り、今のはやての質問は二人

に対する裏切りでもある。雪鷹を信じる、という二人の言葉をはやては真っ向から否定している。ひどく気分が悪い。部隊長として当然のことだと言い聞かせても、苦しみは消えない。二人の言葉を信じられないことがこれほどまでに苦しいことだとは思ってもいなかった。

「・・・それとこれとは話は別や。関係あらへん。質問に答えて」

雪鷹の言葉はまるではやての体を内側から抉り取っていくようだった。しかし、それでもはやては退けない。はやてには部隊長としての責任がある。それを果たす為に退くことは許されない。

「関係ない、ね・・・そういう顔には見えないが？こうして二人きりで話すってこと自体、二人に後ろめたさがあるからじゃないのか？俺に質問するだけならあの場所でもできた。でも、それをしなかった。それはつまり、ハラオウン執務官の前で俺を問い詰めたくなかったからだろう？」

決して強い言葉ではなかった。むしろ、おだやかささえ感じられる。しかし雪鷹の言葉はまるで尋問するかのような鋭く、容赦ない雪鷹の言葉が更にはやての心を傷つけていく。間違いなく雪鷹ははやてが傷つくことを狙っている。ふざけた言葉でペースを乱し、弱みを見つけ、隙を見せたところを容赦なく、抉り取っていく。平静を装いながら、どこまでもしたたかな真似できる。はやては前に感じた恐ろしさの正体がなんとなく判った気がした。はやてがそのまま黙りこむ。

「否定しないということはあながち的外れでもない、か・・・」

「そや・・・フェイト隊長や新人達の前でこんなことはしたくなか

った。けど・・・」

「部隊長の義務、だから?」

雪鷹の言葉にはやては小さく頷く。

「部下を疑うなんて気分最悪や。私も本当なこんなことしたくない。せやけど、私は部隊長や。部隊の安全を守る義務がある」

だから、答えてくれへんか、とはやての瞳が雪鷹に語りかける。涙を堪えながら、懸命に訴えかけるその姿に雪鷹は観念したようにため息を零した。

「自分自身を傷つけても、か・・・その心意気やよし。と言いたいところだが、その泣き落としで同情を誘うような素振りがどうも気に食わない。全く、十九の小娘かと思っていたらしたたかなこと・・・油断も隙もない」

雪鷹は苦笑を浮かべる。それを見たはやては軽くため息を零し、舌打ちをする。

「なんや、お見通しか・・・これでも少しは自信あったんやけどな・・・泣き落とし」

眉をしかめたはやてはさらりと呟く。

「そんな顔するなよ。折角の美人が台無しだ」

「またまた・・・心にもないことを。ユキタカ曹長、あんまり調子のってると部隊長権限で地獄見せてあげますよ?この部隊、あんま

り階級にはうるさないけど、私の権限でどうにでもできるんよ？」

はやてが満面の笑みで、あぶないことをさらっと言ってのける。笑っているのは顔だけで、雪鷹を睨みつける瞳は本気だった。

「是非そうしてくれ。そして、俺に地獄をみせてくれ。今度はどんな地獄を見れるか、楽しみだよ」

しかし、雪鷹の目も本気だった。口調も顔も笑っているが目だけは全く笑っていない。まっすぐにはやてを見つめながらも、その瞳にはやては映っていなかった。まるで地獄の奥底を覗いてきたかのようなどす黒い、絶望の光。きっとはやてには想像もつかないような壮絶な過去があるのだろう。一目見ただけでそう思わせるほど強烈な光だった。

「・・・何があったん？」

思わず、はやてがそう尋ねてしまうくらいに。

「それは二佐としての質問ですか？それとも、個人的な好奇心ですか？」

いきなり声の調子が変わった。初めて顔を合わせた時とほぼ同じ口調。しかし、雪鷹の声は冷たく、まるで人間味が感じられなかった。自虐的な響きさえ感じられる。そんな雪鷹の言葉や態度が演技でないことをはやては悟った。理由は上手く説明できないが、そんな気がした。深さは違えど、雪鷹とはやては同じ類の傷を抱えているのだ、と言い聞かせてみると雪鷹と張り合うことが馬鹿らしく思えてしまった。どのような結果になったとしても、お互いに自虐し合うことにしか繋がらないことが見えてしまったからだ。

「いや、やっぱりえぇわ・・ただの好奇心やから忘れて。さっきの言葉も訂正する。冗談でも言うべきやなかった。私もちょっと意地になりすぎた。気、悪くしたなら許してな」

聞いてしまえば後に戻れなくなるような気がした。雪鷹はきっと地獄を見たことがあるのだろう。それも、生きていくことさえ許せなくなるような生き地獄を。雪鷹は無言でそれを告げていた。雪鷹はきっと誰かに話すことはしないだろう。誰かに相談してみたら、と助言するのは容易いことだ。しかし、きっと雪鷹は一人で胸の奥に抱えたまま、苦しみながら生きていく。そんな確信がはやての中にあった。不器用な生き方だが、そんな生き方をしている人間をはやてはよく知っている。知っているからこそ、言うべきではなかった。そんな人間に対してはやての言葉は不謹慎過ぎた。

「急にしおらしくなるな・・・何か裏があるんじゃないか疑うだろう？」

「ひどいな・・・私かて普通の十九歳の女の子やで？人よりちょっと腹黒いかもしれんけど、それでも、悲しいことは悲しいと思うし、傷つくことだってある。それを隠すのがちょっと得意なだけや」

そう言ってはやては笑う。しかし、その笑顔は歪だった。それに気付いた雪鷹は口を開きかけたが、すぐに止めた。そして、黙って立ち上がり、はやてに背を向けた。

「八神二佐・・・隠すのが得意なのではなく表に出すのが苦手なだけでは？」

はやては小さく息を吐き出した。そして、雪鷹の言葉に答える代り

に柔らかな口調で雪鷹に言った。

「なのはちゃんもフェイトちゃんもええ子や。それに、あの二人が手放しで信頼する人間なってそうおらへん。どんな過去があっても、あの二人ならきっと受け入れてくれる。拒絶するなんてこと、絶対にあらへん。それは私が請け合いますよ、ユキタカ曹長」

雪鷹は小さくため息を零した。

「話はもう終わりですね？」

はやてが答えるよりも雪鷹は歩きだした。それを見てもはやては止めようと思わなかった。これ以上、雪鷹に尋ねてもきっと何も答えてくれない。お互いに傷付き合うのが目に見えていた。雪鷹の出ていった部屋ではやては小さくため息を零した。何か裏がある、というはやての読みは間違っていなかった。しかし、それは覚悟なく触れてよいものではなかった。部隊長としての義務感だけで、それに触れようとしたはやてはその負荷に耐えることができなかった。軽い気持ちだったとは思わない。しかし、想像していなかった、重みを。はやては後悔を覚えずにはいられなかった。

「結局、逃げられてしまたな・・・本人の口からは何にも聞けへんかったし。まぁ、ええ。九分九厘、スパイなんは確定やし・・・それで・・・ええよな・・・」

はやての頬を涙が伝う。しかし、それを拭おうとはしなかった。そして、はやては呟く。自分自身への言い訳を。

「やっぱり、しんどいな・・・せやけど、部隊長が泣いてたら誰もついてこうへん。一人で我慢するしかないやん。みんなに心配かけ

られへん。私はそういう立場にいるんやから・・・」

０４『立場と責任』（後書き）

なのはの具合を見に医務室に訪れた雪鷹。
しかし、雪鷹を迎えたのシャマルと新人達の厳しい視線。
敵意さえ感じられるその視線に雪鷹は苛立ちを隠さない。

対立は深まるばかり。
見ていられなくなったフェイトはついに…

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
０５『それぞれの想い』

テイクオフ

05『それぞれの想い』（前書き）

本当はこんな人じゃない。
記憶の中の雪鷹さんは厳しくて、でも、すごく優しかった。

何が彼を変えたのだろうか。

情報一課？
十年の年月？
それとも…

何が彼を変えてしまったのか、私は知らない。知りたくもない。

私の雪鷹さんは今でも十年前の、あの頃のままだから。

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります。

05『それぞれの想い』

05『それぞれの想い』

医務室に入った雪鷹を迎えたのは明らかな敵意をもった視線だった。敵意を通り越して殺気といってもいいくらい鋭い気配。笑えば可愛いはずの唇は固く結ばれ、視線も怖い。一目で怒っているとわかる表情だが、雪鷹は目の前の女性とは初対面のはずだ。しかし、資料で名前だけは知っている。確か、シャマルという名だった。しかし、そのシャマルから怒られる理由も思いつかない。記憶違いか、と首を傾げる間のなく、白衣を着た女性、シャマルが雪鷹に詰め寄る。

「あなたですか?なのはちゃんと模擬戦をしたのは・・・」

「あぁ」

雪鷹が頷くとシャマルは更に詰め寄る。

「右の肋骨、折れてましたよ。骨折です。非殺傷設定のデバイスで模擬戦・・・何をしたらこんなことになるんですか!?シグナムとだってこんなことなかったのに」

「何のことだ?非殺傷設定だから骨折程度で済んでいるんだろう?殺傷設定なら今頃、あいつの体は真っ二つだ」

雪鷹の予想通り、なのはの肋骨は折れていたらしい。雪鷹自身、手を抜いたつもりはなく、相応の手応えもあったので、肋骨が折れていたと言われても、やはり、としか言いようがない。が、そんな雪鷹の態度が気に食わなかったらしく、シャマルは更に声を荒げた。

「あなた、どうしてそんな無関心な顔ができるんですか!?あなたのせいでなのはちゃんは・・・」

「まぁまぁ、シャマル先生、雪鷹さんをそう責めないであげてください。模擬戦を申し込んだのは私の方ですし、それに怪我をしたのは私の不注意のせいでもありますから・・・」

遠慮がちになのはが二人の間に割って入る。無理やり笑っているが、怪我が痛むのかその顔はぎこちない。しかし、それなりに効果はあったようで、シャマルは軽くため息を零しながらもそれ以上の何も言わなかった。もっとも、なのはのおかげ、というよりはその後ろに並ぶフェイトや新人達の視線を気にしてのことかもしれないが。

「本日付けで機動六課に出向を命じられたシノブ・ユキタカです。はじめまして、シャマル医務官」

「シャマルです。ご覧の通り、機動六課の医官です」

愛想のいい笑みを浮かべて、握手の右手をさしだした雪鷹をシャマルは無愛想に突っぱねる。雪鷹の方も医官に用件があって医務室まできたわけではないのでそのまま軽く流しておく。

「高町一尉、怪我の具合は?」

「聞いての通り、右の肋骨が折れちゃって・・・」

眉間に皺を寄せながらなのはが笑う。痛みを堪えているのだと一目で判る。雪鷹の知る限り、なのはがこういう笑顔を浮かべているときは、かなりひどい怪我を負っていることが多い。昔から無茶をす

ることの多かったが、それは今でも変わらないらしい。変に気遣うことの無意味さを知っている雪鷹は呆れたようにため息をこぼした。

「痛むのなら笑わなくて結構です。まぁ、無事そうでなによりです」

「無事ってどういうことですか!?なのはさん、骨折してるんですよ。あなたのせいで」

雪鷹の言葉にスバルが反応し、前に出る。その顔はシャマルに負けず劣らず険しい。あなたのせいで、と凄むその表情は雪鷹への敵意が剥き出しだ。しかし、それを気にする素振りすら見せずに雪鷹はなのはからスバルに視線を移した。

「あー、えーと、確かお前はスバル・ナカジマ二等陸士・・・でよかったか?」

資料に載っていた顔写真を思い出しながら雪鷹がスバルに尋ねるが、雪鷹の言葉はスバルに届いていない。雪鷹がスバルの名前を知っていた、ということに驚きも、もとい、気付きもしないくらい激昂している。寸前まで詰め寄り、声を荒げる。

「怪我させたんですよ!?一言くらい謝るのが普通なんじゃないですか!?それなのに・・・」

「少し、黙れ」

シャマルにスバル、二人から怒鳴られた雪鷹は不快感を露わにしてスバルを威圧する。しかし、これくらいで怯むスバルではない。真っ向から対立し、一歩も引こうとしない。憧れの存在であるなのはを傷つけた、というだけで既にスバルの中の雪鷹の印象はかなり下

がっていたが、それに加えて、先程の反省を見せない態度、到底納得できるものではなかった。

「スバル、ダメだよ、そんな態度を取ったら。雪鷹さんも、もう少し落ち着いて。ほら、みんな怯えちゃってるよ？」

なのはの言葉に雪鷹が周りを見渡すと、スバルとフェイトを除く人間が皆、警戒した目で雪鷹を見つめている。威圧的な態度をとった自覚はあるものの、ここまで怯えられるとは雪鷹も予想外だった。キャロに至ってはフェイトの後ろに隠れるようにしてこちらを見ている。

「新人達には随分怖がられ、いえ、嫌われたようで・・・」

雪鷹が皮肉めいた苦笑を浮かべると、なのはが困った表情を浮かべる。

「もう、そんなこと言わないでよ。雪鷹さんにはこの子達のデスクワークをみてもらうんだよ。もっと仲良くしてくれないと困るよ」

「「「「えっ！？」」」」

なのはの言葉に四人の表情が変わる。スバルは驚きながらも雪鷹を睨みつけ、ティアナとエリオは困惑気味、キャロはフェイトの制服を掴んで泣きそうな表情を浮かべている。それを見て雪鷹は軽くため息をこぼす。

「なのはさん、私たち、そんな話聞いてませんっ！！」

「そうか・・・残念だったな、諦めろ」

スバルが控えめに抗議するとティアナとエリオもそれに同意する。
デスクワークもいずれしなければならなくなるとは聞いていたが、
それもなのはやフェイトが見てくれるものだと思い込んでいたのだ。
まさか、模擬戦でエースオブエースに一太刀浴びせた武骨な人間が
デスクワークの担当になるとは新人達の誰も想像もしていなかった。

「決まったことには黙って従え、ティアナ・ランスター二等陸士、
エリオ・モンディアル三等陸士。あと、キャロ・ル・ルシエ三等陸
士・・・とりあえず、泣くな。俺が泣かしているみたいだろう？」

フルネームに階級までつけて呼ばれ、三人は困惑する。そういえば
スバルのこともフルネームで呼んでいた。スバルを含め、四人とも
雪鷹に名乗った覚えはない。もちろん、雪鷹とは初対面だ。それな
のに、名前を知っていた。否、知られていたことに驚きを隠せない。
そんな新人達の気持ちを察したのか、雪鷹はため息を零す。

「資料で顔と名前を見たから知っていて当然だろう？そんな不審そ
うに見るな」

前の職場でも浴びたことのない視線に雪鷹は不満げにため息を零す。
疑われる理由が真っ当なもので、雪鷹に後ろめたいことがあるのな
ら割り切れる。全く持って自慢にならないが以前なら公にできない
仕事を幾つもこなしてきた。それを部隊の中で噂され、後ろ指をさ
されたこともあったがその時でさえここまで不快な気分にはならな
かった。それほど、今回の新人達からの視線には納得できないもの
がある。

「どうしてそんなことを？」

疑い深そうな目で雪鷹を見つめるのは新人達の中で最年長のティアナである。実際の年齢より大人びた雰囲気があるが雪鷹からみればティアナも幼さを残す少女でしかない。そんな年下の少女から怪しまれるのは不愉快極まりない。しかし、なのはの手前、再び威圧的な態度をとることもできない。苛立つ気持ちを抑え、平静を装いながら雪鷹は口を開く。

「ランスター陸士、どうして、とはどういう意味だ？事前に同じ職場の人間の顔と名前を覚えておくことがそんなに不思議か？」

「い、いえ・・・そういうわけじゃ・・・失礼しました」

大声を出したわけではないのに、雪鷹を前にしてティアナは明らかに委縮していた。その隣に立つエリオも顔が緊張している。スバルに至っては敵意を剥き出しにし、キャロはフェイトの横で涙を浮かべたままだ。新人達の雪鷹に対する印象は相当に悪いらしい。

「高町一尉、この子達の面倒を見るのはどうしても私でなければいけませんか？」

このままでは仕事にならない、と無言で付け加える。しかし、なのはは首を縦に振らない。予想はしていたことだが雪鷹はため息を零さずにはいられなかった。

「ハラオウン執務官はこの状況を見てもまだ私がこの子達を見るべきだと？」

「それは・・・」

雪鷹の言葉にフェイトは言葉を詰まらせる。なのはのように頷きた

いが、キャロの怯えた表情を見るとすぐには頷けない。雪鷹にできない仕事ではない。それは自信を持って言える。雪鷹の面倒見のよさはフェイトやなのはが身に染みて知っている。訓練校時代、口では不満ばかり言いながらも暇を見つけては二人との模擬戦に付き合ってくれたり、細かいアドバイスをしてくれた。雪鷹にできないはずはないのだ。それだけは断言できた。

「みんなは雪鷹さんのことを怖がってるけど、本当はすごく優しい人なんだってこと、私となのはは知ってる。訓練校時代にいっぱいお世話になった。我儘も言ったし、迷惑もかけた。それでも、雪鷹さん、最後まで私達に付き合ってくれたよね。途中で投げ出したり、適当に流すこともできたのにしなかった。私達と真剣に向き合ってくれた。そんな雪鷹さんだから私は、きっとなのはも、この子達を任せられるって思ったんだよ」

フェイトの言葉に新人達の表情が変わり始める。ティアナとエリオの表情はまだ硬いままだったが、幾分緊張が解れたらしく、柔らかい表情になっている。スバルはいまだに雪鷹を睨みつけていたがその瞳からは敵意が若干薄れて、驚いているようだった。キャロの瞳からも涙が消えていた。

「雪鷹さんの優しさも強さもよくわかってるからみんなに雪鷹さんのこと、誤解してほしくなかった。それに・・・好きだった人が・・・」

そこまで言ってフェイトは一旦言葉を途切らせ、軽く息を吐きだしてから言い直す。

「好きな人がそういう目で見られるのは私も辛いし、悲しい」

好きだった、から好きな、にわざわざ言い換えたその意味がわからないほど皆愚かではない。友人に対する親愛の情以上の気持ちが込められた言葉だ。雪鷹への好意は過去のことではなく、今の続いているのだというはっきりとしたフェイトの意思表示。雪鷹のことを好きだと言い切ったフェイトの頬がほんのりと赤らむ。恥ずかしそうだがその表情はどこか晴々としていて、後悔している様子はない。新人達の視線が違った意味の驚きを持って雪鷹に注がれる。雪鷹の言葉に注目していることは明らかだった。しかし、その期待を裏切るように雪鷹は淡々とした口調でフェイトに告げる。

「今更、誤解や偏見なんて気にしませんが、心遣いには感謝します。それと、最後の言葉は聞かなかったことにします。もう少し貴女自身の立場と状況を考えて発言してください、ハラオウン執務官」

そう言い切ると雪鷹は辺りを見渡し、新人達に睨みを効かす。その視線が出ていけ、と暗に告げていた。これからの行方は非常に興味深いものがあるが、今の雪鷹に逆らうほど命知らずな新人達ではない。あるものは驚きの表情のまま、またあるものは名残惜しそうに、四人が四人とも別々の表情を浮かべながら医務室から出ていった。

０５『それぞれの想い』（後書き）

ふざけてなんかない。

十年前も、今もこの気持ちは変わらない

好き、なんだ。雪鷹さんのことが

今までずっと、これからもきっと

だから…

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ

０６『想い、重ねて』

本気の気持ちにテイクオフっ！！

06『想い、重ねて』（前書き）

十年越しの恋
それは甘くて、切ない、耽美な響き
だけど、これはそんな美談じゃない

ただ我儘なだけだ
傲慢で、汚くて、醜くて、愚かしい妄執だ

だけど、私はこの想いを貴方に伝えたい

綺麗なだけじゃないこの想いを
馬鹿みたいに一途なこの想いを

一途さも醜さも愚かさも、全部私だから

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
始まります

06『想い、重ねて』

06『想い、重ねて』

残された雪鷹はフェイトを一瞥すると大きくため息を零した。

「ハラオウン執務官、一体何を考えているんですか？」

その口調からかなり不機嫌なことが伝わってくる。

「まあまあ、雪鷹さんも落ち着いて。フェイトちゃんも悪気があって言ったわけじゃ・・・」

なのはが間に入り、雪鷹を宥める。

「その・・・確かにあの場の勢いみたいになっちゃったけど、でも、雪鷹さんが好きだって気持ちは本物だよ。十年前も今もこの気持ちは変わらない。もしかして、迷惑だった？」

フェイトは少し恥ずかしそうな顔をしながらも好きだとはっきりと言い切った。そう言ってから、雪鷹の言いたいことを察したらしく不安そうに尋ねる。雪鷹は小さくため息を零すと、これ以上ないくらい冷たい声でフェイトに言った。

「迷惑以前の問題です。まさか本当に自覚がないとは・・・ハラオウン執務官、私は告白云々について怒っているわけではありません。あの状況であんな発言をした貴女の無自覚さに怒って、いえ、怒るにも値しない。呆れてものが言えません」

怒るのも馬鹿馬鹿しい、と言わんばかりの雪鷹の口調に、フェイトの顔が下を向く。そして、静かに口を開く。

「・・・だって、悔しかったんだ。雪鷹さんがみんなから誤解されて・・・悪く思われてることが。本当の雪鷹さんがどんな人なのか知ろうともしないで勝手に悪者だって決め付けて・・・怖くなんてないのに・・・本当の雪鷹さんはすごく優しいのに・・・はやては雪鷹さんをスパイだって疑ってる。模擬戦の後もその件で話があったんでしょう?私、そんなの嫌だ」

フェイトの声に涙が交じる。俯いているのは涙を見せないようにする為だったのだ。フェイトに言いたいことが幾つもあった雪鷹も、涙を見せられては何も言えなくなり、ため息をこぼす。今日だけで何度ため息を零しただろうと記憶を辿り、雪鷹は再びため息をこぼした

「八神二佐が私を疑う理由は貴女もご存じのはずだ。それに、新人達にしても俺があんな風に威圧したら怖がるのも無理はない。そもそも、私がどう思われているかなんて貴女には関係ないことだ。ハラオウン執務官が気にする必要もないでしょう?」

「気にするよっ!!」

自身への中傷をまるで他人事のように話す雪鷹にフェイトが叫ぶ。涙で濡れた紅の双眸が雪鷹を射抜く。怒りと悲しみ、苦しみ。様々な感情の入り混じった瞳に見つめられ、雪鷹の体は石化してしまったかのように動かなくなる。

「その話し方が雪鷹さんの流儀だっていうなら受け入れる。昔の話

をしたくないならそれでもいい。だけど、雪鷹さんが誤解されたままなのは、それだけは絶対に許せない。雪鷹さんがいいって言っても私が許さない」

溢れる激情が言葉となって雪鷹を貫く。怒りと形容するには優しく、強い瞳。頬がほんのりと染まっているがそれは恥じらいからではない。抑えきれなくなった激情が表に出てきているのだ。雪鷹を圧倒する気迫がその華奢な体のどこから出ているのか疑いたくなる。幼さの残した少女の面影は微塵も感じられない。凛とした佇まい。一挙手一動。真紅の瞳も、固く結ばれた唇も、艶めく金の髪も、その全てが人を惹きつける。同性のなのはでさえも目を奪われてしまうくらい今のフェイトは気高く、美しかった。

「結局、自分の為か・・・？」

雪鷹が呟く。その呟きに含まれた微かな笑い声を聞いたフェイトが苦い表情を浮かべる。フェイトの言葉は突き詰めればフェイトの自己満足でしかない。好きな人が侮辱されているのが我慢できなくなり、騒いでいるだけだ。当の本人がそれでいいと言うのだからフェイトは大人しく引き下がるべきだ。それが大人の対応なのだろう。雪鷹にしてみれば今のフェイトは駄々をこねている子供にしか見えない。そう頭では判っているのに、心がそれに応じない。

「そう、だよ。私が許せないのは結局、私が納得できないから・・・私の為であって雪鷹さんの為じゃない。私の言ってることは子供のわがままに聞こえるかもしれない・・・だけど、全部、雪鷹さんのせいにするほど子供じゃなくなったつもり・・・だと思う」

言いたいことを上手くまとめることができない苦しみがフェイトの想像以上だった。伝えたい想いの半分さえも言葉にすることができ

ない。苦しみも悲しみも全部投げ出して、雪鷹の為に、と言ってしまえばどれだけ楽になれるだろう。こんなにも貴方のことを想っているのに、こんなにも尽くしてあげているのに、愛しているのに、と悲劇のヒロインになることだってできる。しかし、それは卑劣で、汚いだけだ。責任を全て雪鷹に投げ捨て、押し付けの善意に自己満足しているだけなのだ。雪鷹を愛している、と言う気持ちは紛れもない真実だ。だからこそ、薄汚い言葉で穢すわけにはいかない。適当な言葉で誤魔化してもいけない。フェイトの中に芽生えた誇りがそれを許さなかった。

「愛の為、とは言わないんだな」

雪鷹の言葉に十年前の記憶が甦る。あの日、訓練校を卒業する前日の夜、フェイトは一大決心をして雪鷹に告白した。雪鷹さんのこと愛している。そう言ったフェイトの頭にそっと手を乗せて雪鷹は言った。本当に俺のこと愛しているなら、愛してるなんて薄っぺらい言葉は絶対に使うな、と。子供扱いするその所作にからかわれていると思ったフェイトが不服そうに雪鷹を睨みつけたが雪鷹の瞳は全く笑っていなかった。フェイトの告白が本気だと理解しているからこそ、雪鷹も本気の言葉でそれに応えたのだ。そう思ったらフェイトの瞳から涙があふれてきた。どうすればいいの、とは泣きながら尋ねるフェイトに雪鷹は優しく言った。

答えなんてない。それはフェイトが自分で考えて、フェイトだけの答えを見つけなければいけないことなんだ、と。

今、思い出すと曖昧な言葉で九歳の子供を誤魔化しただけなのかもしれない。しかし、フェイトを見つめる雪鷹の瞳は本気で、だから

こそ、フェイトもその言葉を信じることにした。周りから見れば恋に盲目した大馬鹿者にしか見えないかもしれない。だが、それでもいいのだ。周りにどう思われようとフェイトの想いはフェイト自身のもので、それを貫き通すと決めたのなら迷うことなく貫けばそれでいい。卑屈になることも、恥じることもない。迷うことなど何もないのだ。

「愛してる、なんて平気で言える子供に興味はない・・・私にそう言ってくれたのは雪鷹さんだよ。だから、愛の為だなんて絶対に言わないよ」

それだけ雪鷹のことを愛しているから、と続くはずの言葉をフェイトが胸の内に収める。雪鷹の手がそっとフェイトの頭の上に乗せられる。少しばかりひんやりした手のひら。フェイトの顔を上げ、雪鷹を見つめる。そこにはあの頃と同じ瞳をした雪鷹がいた。

「変わったな、お互いに・・・」

「うん。でも、変わらないものもあるよ、お互いに」

そう言ってフェイトは微笑んだ。不思議なくらいごく自然に、その表情が出てきた。余計な力が抜けた。苦しみも悲しみも一緒に消え去った。

「立場も責任もあの頃とは違う。だけど、それだけだよ。たったそれだけ。私にとって雪鷹さんはあの頃の雪鷹さんのまま・・・雪鷹さんが嫌なら無理じいはしないけど、私達と一緒に過ごしたあの時間をなかったことにはしないで。私にとってあの時間はすごく大切な時間なんだ。それをなかったことにしてほしくない。だから、名前で呼んで？ハラオウン執務官じゃなくて、フェイトって」

「それは執務官としての命令ですか？」

「違うよ。私からささやかなお願い」

フェイトはにこりと微笑む。雪鷹には雪鷹の想いがあり、信念があり、生き方がある。それを無理に捻じ曲げることが正しいことだとはフェイトには思えなかった。仕事であるなら、あるいはそういうこともあるだろう。本人の意思に反する命令を下さなければならないことはある。しかし、これは仕事ではない。ごくごく個人的な、本当にプライベートなことだ。フェイトの役職がどれほどのものであろうと雪鷹に命令する権利はない。できるのは、ただ願い、頼むことだけだ。

「・・・そういう約束でしたから、二人がそう言うのなら聞かないわけにもいきません」

雪鷹は観念したように呟く。一方のフェイトは雪鷹の言葉に首を傾げる。雪鷹のいう約束に心当たりがないのだ。十年前の約束、は十中八九違う。あれはフェイトと雪鷹の交わした約束であり、なのはは関係ない。しかし、雪鷹の口ぶりからするとフェイトとなのは、二人が絡んでいるように聞こえる。

「さっきの模擬戦で負けた方は潔く、相手に従う。そういう条件でしたよね、高町一尉」

「ふぇえええっ！？」

突然話を振られたなのはが驚きの声をあげる。その顔はどこか居心地が悪そうで、真っ赤になっている。二人から視線をはずし、真っ

直ぐ見ようとしない。

「えっ・・・その、ごめん。その・・・なるべく見ないようにしてたんだけど、その、なんていうか・・・いきなりあんなことになって私もどうしたらいいか・・・えーと、だから・・・」

なのはの言葉の意味がわからないフェイトは一瞬首を傾げたが、すぐにその言葉を理解し、顔色を変える。激情に任せて叫んでからこちら、フェイトは雪鷹のことしか見ていなかった。もっとはっきりいうと、ここが二人きりの空間だと思い込んでいた。しかし、ここは医務室である。二人きりになれるはずはないのだ。二人のすぐ横にはなのはがいた。ここからは見えないがシャマルもいる。そのことを完全に失念していた。思い返せばとんでもなく大胆な発言を何度もしていた。それは、二人しかいないから、雪鷹しか聞いていないから口にできた言葉でもある。それを誰かに聞かれていたと知ると急に気恥ずかしさがこみ上げてきた。

「あぅう・・・あれは・・・その・・・」

「なんだ？まさか誰もいないと思っていたのか？」

雪鷹の呆れた声にフェイトは小さく頷く。その姿には先程までの気高さも美しさも微塵もない。恥じらっているだけの、年相応の少女に見える。

「なのは・・・き、聞いてた？」

震える声で尋ねるフェイトになのはが頷く。しかし、可哀想なのはフェイトよりむしろなのはである。目の前で桃色の修羅場を見せつけられ、その後のほのかに甘い雰囲気を浴びせられては堪ったもの

ではない。声を出すどころが身動ぎ一つできず、目を逸らすしかできなかった。しかし、言葉は嫌でも耳に入ってくる。もちろん、愛している云々の件も耳に入って来た。色恋沙汰に疎く、免疫を持たないなのははにはそれだけでもう十分だった。

「・・・二人が初心だということはよくわかった。だが、このままだと話が進まないから無視していくぞ？」

一人、雪鷹だけが何事もなかったかのように淡々と話を進めていく。

「さっきの模擬戦で高町一尉が勝った。というわけで約束通り、私は二人に従う」

「えっ？それってどういうこと？だって、私、雪鷹さんにやられて・・・」

なのはは雪鷹に負けた。それは誰の目にも明らかなことだった。なのは自身を含め、あの場にいた全員がなのはの負けだと認識している。それなのに雪鷹はなのはの勝ちだという。首を傾げる二人に雪鷹は続けた。

「俺はブレイドハートの１ｓｔモードしか使わないつもりでいた。それだけで勝てる自信があったし、その覚悟を以てもお前との勝負に臨んだ。だが、結果は承知の通り、俺は２ｎｄモードを使わされた。そうしないと勝てない状況に追い込まれた。どういう形であれ、俺の覚悟を破ったんだ。あの勝負、お前の勝ちだ」

なのはは驚きの顔を浮かべ、少し悩む表情を見せてから首を横に振った。

「ダメだよ、それは。私の負け・・・私は本気で、全力全開で挑んだ。でも、雪鷹さんに負けた。本気じゃない雪鷹さんに・・・」

「リミッターがついてたんだ。全力になんて程遠い・・・出せてもせいぜい半分から六割ってとこだ。仕方ないだろ？」

しかし、なのはは首を縦に振らない。

「あの時はあれが全力だったもん。雪鷹さんの負けなんて誰も納得しないよ。それに・・・もし、みんなが納得しても私が納得できない。負けたんだよ、私は雪鷹さんに」

はっきりとしたなのはの言葉。お互いに引くつもりがないらしい。どちらが勝ったかで張り合うならともかく、どちらが負けたかで張り合うのも珍しいがこのままでは収集がつかなくなりそうなのでフェイトが妥協案を提示する。

「それじゃ、今日の模擬戦は引き分けということじゃダメ・・・かな？」

「引き・・・」

「分け・・・」

なのはと雪鷹は呟き、お互いに顔を見合わせる。このまま意地を張り合うことに無意味だということはお互いに理解している。ただでさえフェイトをはじめ、多くの人間に迷惑をかけている。信念を貫く、といえば聞こえはいいが、結局は意地の張り合いに周りを巻き込んでいるだけだ。そろそろ事態を収めなければ、仕事にも影響してくる。これ以上はただの我儘でしかない。それが理解できないほ

ど二人とも子供ではない。

「まぁ、ここが引き際、か・・・」

「引き分け、なら・・・うん、それなら・・・」

ため息を零しながら雪鷹が呟く。なのはもフェイトの提案を受け入れるように頷く。

「それじゃ、今日の模擬戦は引き分け。それで、二人ともいい？」

フェイトの言葉に二人が頷く。

「でも・・・それだと条件はどうなるの？」

頷いてからなのはが首を捻る。勝者がいないのだから条件は無効とするのが筋だが、あれだけのことしておいて何もなかったというわけにもいかない。

「どうもこうもない。俺がお前達に昔みたく接すればいいんだろ？なのは、フェイト」

雪鷹の言葉になのはとフェイトは一瞬驚きの表情を浮かび、すぐに喜びへと変わる。どこか重苦しかった雰囲気が嘘のように消え、部屋の中が急に華やいだようにさえ感じてしまう。その表情が十年と全く変わらないことに雪鷹は軽い驚きを覚えずにはいられなかった。訓練校時代、毎日のように模擬戦をねだる二人に雪鷹は少々冷たくあしらっていた。そのせいか偶に雪鷹が模擬戦の相手をすると心底嬉しそうな表情を浮かべていた。今思えば、あの二人の笑顔が見たくて少々意地悪な態度を取っていたのかもしれない。あるいは、今

日も。しかし、そう考えてから雪鷹が馬鹿馬鹿しいと言わんばかりにため息をこぼした。しかし、そう考えるのも悪くない、と雪鷹に思わせるほどなのはとフェイトの笑顔は嬉しそうで可愛らしいものだった。

「たかだか名前を呼ばれただけで舞い上がり過ぎだ。少しは成長したかと思ったが、体だけだったようだな」

雪鷹の言葉に二人は顔を赤らめ、その豊満な胸を両手で覆い隠すようにして雪鷹から一歩引く。

「ゆ、雪鷹さん、私達のことそんな風に見てたの!?」

「へ、変態。セクハラだ!!」

「心配するな。子供に興味はない」

動揺する二人とは対照的に雪鷹は平然と言い放つ。不敵に笑うその表情から、雪鷹が二人のことを歯牙にもかけていないのは一目でわかる。二人のことを小娘と見下し、大人の女性として見るつもりは全くないらしい。雪鷹から女として見ていない、と告げられ二人の胸の奥が熱く疼く。自慢ではないがそれなりのプロポーションを持つ二人だ。まだまだ成長途中とはいえ、かなりのものがある。むしろ、これでもまだ成長途中というべきか。はっきりいって、誇っていいレベルだ。その優れた容姿も相まって、今すぐにでも雑誌の表紙を飾れるくらいあるそれを無視されたとなると、女としての誇りに関わってくる。

「こ、子供じゃないよ!!」

「そうだよ、そんな言い方ひどいよ！！」

男に下心を持って見られるのはもちろん不愉快なことだが、全く興味を持たれないのも同じくらい面白くないことだった。なまじ、容姿や体型に自信があるだけに悔しくてたまらない。その男が同性にしか興味のないような、あるいは幼い子供にしか興味がないような特殊な場合ならともかく、雪鷹はいたって健全な青年である。その雪鷹に子供扱いされたあげく、女としてみられなかったのだから二人は面白いはずがない。幼さが抜けきっていない部分があるとはいえ容姿にも自信はある。出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる体型もそう人に劣っているとは思えない。それにも関らず、雪鷹からは対象外と宣言をされたのだ。不満そうな表情を浮かべる二人に更に雪鷹は言葉を続けた。

「そんな顔するから子供扱いされるんだよ。納得いかないなら、自力で俺をその気にさせてみろよ」

挑発とも取れる雪鷹の言葉に二人は顔を真っ赤に染める。半分は怒り、半分は恥ずかしさである。おそらく、今の二人が何をしても雪鷹をその気にさせることはできない。たとえ、その健康的でしなやかに伸びた白い肢体を晒したとしても、熟した果実のように膨らんだ双の乳房を押し付けたとしても雪鷹は鼻で笑って終わらせてしまうだろう。実際にはそこまで無反応なことはないだろうが、もし、仮にそうなってしまえば二人とも本当に立ち直れなくなってしまう。色々な意味で。

「まったく、お前たちはどう見られたいんだ?その話はもう終わり。いいな?」

そう言って雪鷹は疲れたようにため息を零す。これ以上言えば、二

人の性格上、行動に出かねない。もう二人とも十九歳なのだからそれはないと信じたいが、今までの様子を見る限り、素直にそう信じられない。もし仮に、万が一、二人が実際にそれをしたならば、色々な意味で非常にまずい。とりあえず、雪鷹は死ぬ。社会的に。

「あと、昔のなじみでひとつだけ頼みがある。俺をさん付けで呼ぶのはやめてくれないか？年は俺の方が上でも、階級では二人の方が上だからな。さん付けで呼ばれるのはどうにもな・・・むずがゆくて」

「えっ？」

「でも、それじゃ、どう呼べばいいの？」

なのはとフェイトの二人は首を傾げる。雪鷹をさん付けで呼ばないのなら、どう呼ぶべきなのだろうか。真剣に悩んでいるその表情に雪鷹はため息を零す。

「普通に雪鷹、と呼び捨てでいいだろ？」

至極単純な答えだった。しかし、途端に二人は顔を赤らめる。今度は怒りではない。恥じらうようなその顔は二人を実際よりも幼く見せる。

「で、できないよ、そんなこと・・・」

「そうだよ。雪鷹さんの方が年上だし・・・それに、少し恥ずかしいし・・・」

今更何を、と雪鷹が呟く。組織において年齢より階級が重視される

のは当然のことで、それを理解していない二人ではない。しかし、二人はそれを受け入れようとしていない。二人の気持ちが全く分からないというつもりもないが、組織の人間としての自覚があるなら、受け入れなければならない。それもできないのなら、雪鷹も二人への態度を元に戻さざるを得なくなる。そんな雪鷹の想いが伝わったのか、あるいは交換条件と考えているのか、二人とも不満を言い出そうとしない。

「呼び捨てに抵抗があるなら階級でもいい」

「「それは嫌!!」」

二人の声が見事に重なる。必死な眼差しに雪鷹は思わずたじろぐ。妥協案として出したつもりが、論じる余地さえなかった。

「・・・フェイトはともかく、なのははさっきの模擬戦で呼び捨てで呼んでいただろ?覚えてないのか?」

「ふぇえええっ!?私、そんなこと・・・言ってない・・・よね?」

記憶にないことを言われ、なのはが動揺する。しかし、言われてみれば戦いに興奮して、そのようなことを言ったような気もする。肯定の返事を求めてフェイトを見つめるが、フェイトは苦笑いを浮かべるだけで何も言わない。しかし、その所作が全てを物語っていた。

「そ、そんなぁ・・・」

情けない声を上げるなのはに雪鷹が更に言葉を重ねる。

「ということで決まりだな。なのはが呼べたんだから、フェイトも

呼び捨てでいいだろ？俺として呼び方如きで時間を取られたくないんだ。ロングアーチの連中に挨拶に行きたいし、仕事の内容を聞かなければならないだが・・・」

早く終わらせてくれと、と暗に告げる。その言葉に二人はお互いに顔を見合わると、しぶしぶ頷いた。それを見た雪鷹は満足そうに頷くと、二人の頭に手を置く。突然のことに二人の体がビクッと震える。照れたように顔を赤らめ、子供扱いするなと無言のまま睨みつける。しかし、当然のように雪鷹はそれを無視して、二人の耳元で囁く。

「よぉし、素直でいい子だ。ご褒美にいいことを教えてやる。ドアの外にネズミが四匹隠れている。どう処分するかは二人に任せる。ちなみに頭の髪の色は青、赤、オレンジにピンク。最初から最後まで聞かれてたぞ？」

「「えっ？」」

首を傾げる二人をから手を放し、雪鷹が医務室から出ようとするとドアに近付いた。途端に外が騒がしくなり、すぐに悲鳴に変わる。

「えっ、ちょっと、何これ！？」

「動けない」

「足が、凍ってる！？」

「早く逃げないと・・・」

聞き覚えのある声になのはとフェイトの顔色が変わる。その表情を

見て雪鷹は愉快そうに笑う。

「俺が黙って見逃すはずないだろ？」

不敵な笑みを浮かべながら雪鷹が扉を開く。そこには足元を氷漬けにされ、身動きの取れなくなった新人四人が気まずそうな、あるいは泣き出しそうな表情を浮かべて立っていた。

「あとは好きにしてくれ。ささやかなプレゼントだ」

雪鷹はそう言い残すと足早に医務室から出て行った。その姿が見えなくなるとなのはとフェイトは大きくため息を零し、これ以上ないくらい清々しい、満面の笑みを浮かべた。その笑顔はまるで慈愛の聖母を思わせるくらい和やかで優しい。しかし、その後ろでは何か得体の知れないものが蠢き、威圧感は雪鷹の比ではない。新人の顔は青ざめ、凍りついている。何に、とは敢えて言わない。

「そ、その、なのはさんのことが心配で・・・」

「スバル、私のことを心配してくれたんだ。嬉しいな。でも、盗み聞きはよくないよね？ティアナもいけないことはいけないって止めてあげないと。ダメだよ。ティアナはお姉さんなんだから」

柔らかな口調と優しい微笑み。レイジングハートを構えていなければ、あるいは見惚れてしまうくらい美しいなのはの笑顔にスバルは言葉も出ない。体中が震えだす。何に、とは敢えて言わない。

「大丈夫。四人にしか当たらないように上手く制御するから。心配しなくても死んだりしないよ。ちょっと痺れるだけだよ、たぶん。エリオ、キャロ、世の中にはしちゃいけないことがあるんだよ？ご

めんね、そういうこと私がきっちり教えてあげられなかった。だから、今日、徹底的に叩きこ・・・教えてあげるね」

バルディッシュを構えるフェイトの表情は今までにないくらい晴れやかだ。さりげなく怖いことを言いかけた気がするが集束していく魔力とそこから迸る稲妻さえなければ、エリオやキャロの思い浮かべる優しいフェイトさんそのものだ。しかし、そんなはずがないことは一目瞭然だった。空薬莢の落ちる音が無慈悲に響く。

「エクセリオン・・・」

「トライデント・・・」

本来はもっと広い場所で使用するべき魔法である。しかし、非殺傷設定に加えて、非破壊設定まで加えている為、機動六課の隊舎を壊すことはない、はずである。

「バスターぁあああっ！！」

「スマッシャーぁあああっ！！」

新人四人を呑みこむ光の奔流。悲鳴をあげることさえ許さない圧倒的な力の前に、四人の意識は一瞬にして掻き消えた。桃色と金色の光に呑みこまれるほんの一瞬の間に新人達は悟った。触らぬ神に祟りなし、と。

０６『想い、重ねて』（後書き）

慌ただしい初日をなんとか終えた雪鷹はようやく機動六課の面々と顔を合わせる。

だけど、どこか不穏な空気が漂っていて…

向けられたのは疑いの眼差し
叩きつけられたの模擬戦の挑戦

不適に笑う雪鷹の思惑は…

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
０７『孤高の鷹』

テイクオフっ！！

Intermission 6.1

Intermission 6.1

（シャマル・・・どうやった？）

医務室の主、シャマルへはやてが思念通話で話しかける。

（話を聞いてた限りだと、なのはちゃん達の古い知り合い・・・先輩、みたいな感じね。なのはちゃんとフェイトちゃんがあんな顔を見せる人なんてそういないわよ。はやてちゃん、あの人は一体誰なの？）

人にはその立場に応じた顔がある。本来の自分とは全く別の、与えられた責任を果たす為の顔。八神はやてを例に挙げるなら機動六課を束ねる部隊長としての顔、個性豊かな八神家の大黒柱としての顔、十九歳の女の子としての顔など様々な顔を使い分けている。使い分ける、といえば聞こえは悪いかもしれないがその場に相応しい態度をとっているだけだ。はやてを身近に見ているシャマルとしてはもっと年相応の顔を見せてもいいと思うのだが、今回はその件に関しては深く掘り下げないでおく。同じことはなのはやフェイトにも言える。この機動六課においては教導官、あるいは執務官としての顔が二人の普段の顔である。ごく稀に年相応の表情を浮かべることはあっても、それは気心のよく知れ合った人間、家族や友人、の前だけであり、機動六課の中で二人がそんな表情を浮かべることはほとんどあり得ない。しかし、そのあり得ないはずの事態が今までシャマルのすぐ横で繰り広げられていたのだ。正直、信じられなかった。

（まぁ、予想通りやな・・・ユキタカ曹長は二人の訓練校時代の同期やそうや。詳しくはわからんけど、三人はけっこう親しくしてたみたいやね）

（なのはちゃんを一対一で破る実力者・・・シグナムが聞いたら嬉々して模擬戦を申し込むわね、きっと。でも、どうしてその人をはやてちゃんが気にするの？）

シャマルがなのはの怪我の治療をしている最中に、はやてからの思念通話があった。曰く、これから医務室に行く男についてどう感じるか、という漠然としたものでシャマルが詳しく尋ねようとしたら当の本人、雪鷹が医務室に姿を現した。それからのことは割愛するが、結論から言うと三人の目に入らない所でシャマルは聞き役に徹していた。雪鷹はシャマルの存在にも気付いていたようだが、特に気にする素振りもみせなかった。雪鷹に対して初対面の冷淡な印象しか持っていなかったシャマルだったが、一部始終を聞いたシャマルの雪鷹に対する印象はわりと好意的なものに変っていた。

（本人の口からは聞いてへんけど、ユキタカ曹長は情報一課からのスパイで間違いあらへん）

（スパイ？そんな人には見えなかったわよ？）

二人があんな表情を見せる人間は滅多にいない。それほど二人が信頼している人間となると、シャマルも考えを改めざるを得なくなった。確かに少々威圧的な態度を見せたり、厳しいことを言ったりしていた。しかし、その様子はスパイと呼ぶほど怪しいものではなかった。雪鷹が本当にスパイなら、なのはやフェイトに取り入ろうとするはずだ。情報収集という点ではその方がはるかに効率はいい。しかし、反対に雪鷹は二人との間に一線を引こうとさえしていた。

情報一課の噂はシャマルも耳にしていたが、雪鷹はとてもそんな人間には思えなかった。

（スパイやのうても、ちょっと気になることがあるんや。ロッサにちょっとお願いごとしたし、もうすぐ化けの皮を剥がいたるで・・・）

普段見せない言葉遣いにシャマルの顔が曇る。おそらく、雪鷹とはやての間に何かがあったのだろう。はやての友人とはいえ、部外の人間にまで調査を頼むなど普通はあり得ない。それも、同じ部隊内の人間の身辺調査を。

（無理はダメよ、はやてちゃん）

無理するな、と言っても無駄なことはシャマルもよく理解している。しかし、理解しているからこそ、願わずには、祈らずにはいられない。無理をして傷付くのはいつもはやて自身だ。傷付くはやてを見るのはシャマルも辛い。しかも、厄介なことにはやては滅多なことでは傷付いた素振りを見せない。今日は言葉の端々にそれが見て取れるが、普段はもっと落ち着いた、傷を隠すような口調なのだ。

（私のことなら大丈夫や、心配せんでええよ）

それがはやてなりの精一杯の強がりなのだ。誰も傷つけたくないと願うゆえの自己犠牲なのだ。誰もそんなことは望んでいないのに、そのことはおそらくはやても理解しているのだが、はやてはそれを止めようとしない。それしか方法がないのだと思い込んでいるかのように。

「不器用なんだから。本当に・・・」

はやてとの思念通話を終えたシャマルは天井を見上げながら、静かに呟いた。

07『孤高の鷹』（前書き）

古代遺物管理部機動六課

近年、問題視され始めた超高エネルギー結晶体『レリック』に対応する為に作られた新設部隊で、ミッド地上に本拠地にしているものの地上本部と命令系統は別になっている。また、独立性の高い少数精鋭の実験部隊という側面も持つ。

一見すると何もなさそうな部隊だ。だが、俺の勘が何かあると告げている。この部隊にはまだ何かが隠されている。

その何かを調べる為に、俺は此処にいる。

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります。

07『孤高の鷹』

07『孤高の鷹』

隊舎のロビーになのはやフェイト、新人四人に、八神家の面々、その他数名の六課スタッフが集まっている。そんな一行を前にしてはやてが雪鷹を紹介する。

「なんや昨日、顔合わせした人もいるみたいやけど、初対面の人もおるみたいやから改めて紹介するな。昨日から機動六課に出向してもろてるシノブ・ユキタカ曹長や。前の部隊は情報部情報一課。なのはちゃんやフェイトちゃんとは訓練校時代の同期やそうや。ここではロングアーチの一員として一緒に働いてもらう。ほな、ユキタカ曹長、一言どうぞ」

はやてに促され、雪鷹が前に出る。新人達からは恨みがましい視線を送られ、シグナムとヴィータは値踏みするように雪鷹を睨みつける。歓迎ムードがあるのはなのはとフェイトの二人だけ。他の視線ははっきり言って、敵意しか感じられない。

「シノブ・ユキタカです。どうぞ、よろしく」

針の筵に晒されることに慣れてはいるが、流石の雪鷹もそれを苦痛に感じないわけではないのだ。とりあえず、笑顔を取り繕って挨拶するが反応は冷たい。

（まぁ、無理もないか・・・）

昨日の一件で新人達からは言われもない恨みを買っている。シグナムやヴィータははやてから何か言われているらしく、視線が厳しいままだ。他のロングアーチスタッフも空気を読んでいるのか、無難に拍手をしているだけだ。笑っているのはなのはとフェイト、そしてはやての三人だけだ。前の二人は純粋に歓迎しているようだが、はやての笑みはどこかしたたかさを感じさせる。

「来歴等に関しては八神二佐から紹介のあった通りなので、私の方からは特に言うことはありません。私から以上です」

雪鷹はそう言うと同時にスバルが勢いよく手を挙げる。どうやら雪鷹に質問があるらしい。早く切り上げたかった雪鷹は内心、ため息をこぼしながらスバルを見る。

「ナカジマ陸士、何か？」

「どうして、ロングアーチに配属になったんですか？模擬線でなのはさんに勝てるだけの魔力や技術があるのに前線部隊じゃなくて後方支援部隊に配属されるなっておかしくないですか？」

なのはに勝った、という言葉にシグナムとヴィータが反応し、雪鷹を見る目が明らかに変わる。返答次第では今にも襲い掛かってきそうな二人を一瞥してから雪鷹は言った。

「そう命令されたからだ。他に理由などない。そもそも魔力ランクと前線部隊は必ずしも関係しない。もちろん、魔力ランクの高い魔導師が前線に配置されることが圧倒的に多い。だが、そうでもない例も少なからずあるだろう？ナカジマ陸士の疑問を突き詰めると、なぜＳＳランクの八神二佐は前線部隊でないか、ということになるが・・・それでも説明が必要か？」

「い、いえ・・・もう、いいです」

有無を言わせない雪鷹の口調にスバルも引き下がるしかない。

「個人的な理由を付け加えるなら、俺は個人戦しかしたことがないからここの連中みたいに集団で戦うってことに慣れてない。そんな人間を前線部隊に捻じ込んでも、お互いマイナスにしかならないだろう?それに、情報収集や解析は前の部隊でもしていたからな。後方支援への配置は妥当だと思う」

「ユキタカさんの前の部隊・・・情報一課ってどんな所だったんですか?個人戦しかしたことがないなんて執務官でもない限り、そうそうないですよ」

含みのないティアナの問いかけに雪鷹は意外そうな顔を浮かべた。他にも数名、ティアナに似た反応をしている者、主に新人達、がいる。それを見た雪鷹はなんとも言えない表情を浮かべ、軽く咳払いをした。

「身内の悪口を言うようであまり気は進まないが、今更隠すことでもないか。詳しいことは特秘事項に抵触するから話せないが情報一課の仕事の一つに諜報活動というのがある。要するにスパイだ。で、問題はここからだ。多くの場合、潜入捜査を行う対象はどこかの犯罪組織なわけなんだが、稀に管理局内の他の部署で潜入捜査を行うことがある。理由については想像に任せるが、俺が前にいた部隊はそんな部隊だ。それにしても、情報一課の人間がきたらスパイと思えって言われてると聞いていたが、知らない奴もいたのか・・・」

まるで他人事であるかのように淡々と言葉を並べる雪鷹に一同は言

葉をなくす。一歩間違えば、私はスパイです、と周りに宣言するようなものである。つかの間の沈黙を破ったのは微かな笑い声だった。全員の視線がその人へ集まる。

「すまない、笑うべきところではないことは百も承知だ。しかし、そこまで堂々と宣言されると清々しくてな、どうにも堪えられなかった」

意外なことに声の主はシグナムであった。その目はまるで無邪気な子供のように輝いていた。次に出てくるであろう言葉の察しがついたはやてやヴィータは呆れたため息をこぼす。雪鷹がなのはに勝った、という言葉を聞いたときからこうなるだろうということは薄々感づいていたが、こうも予想通りだと苦笑するしかない。

「主はやて、この者と模擬戦を行いたいのですが、よろしいですか？あの高町なのはを打ち破った実力・・・久々に腕が鳴ります」

案の定だった。一部の人間に戦闘狂として有名なシグナムである。リミッター付きとはいえエースオブエースを打ち破った人間を前にして黙っているはずがない。嬉々と笑うシグナムは既に戦闘体制だ。一方の雪鷹は露骨に嫌そうな表情を浮かべている。

「せやね・・・それもええな」

「謹んでお断りします、シグナム二尉。なのはとはお互いにぶつけ合う意地もありましたが、私とあなたはただの上官と部下だ。ぶつけ合う意地も、義理もない」

許可しようとするはやてを遮るようにはっきりと雪鷹が言うと、シグナムが眉をしかめる。

「ほう、高町とは戦えても私とは戦えないと・・・負けるのが怖いか？」

「挑発のつもりなら無駄ですよ？シグナム二尉」

挑発は無駄だ、と口では言いながら、気配は戦闘体制に入っている。それを見たシグナムが不敵に笑う。二人の視線がぶつかり合い、部屋の空気が一転する。もともと歓迎ムードという雰囲気でもなかったが、雪鷹に対する視線が一気に冷たいものへと変わり、雪鷹の表情からも笑みが消える。一触即発の雰囲気に新人たちは戸惑い、動けずにいる。なのはとフェイトが、雪鷹とシグナムの間に立って、この場を収めようとする。

「シグナム、模擬戦をしたいのはわかるけど、今の言い方はよくないよ。雪鷹、昨日なのはと模擬戦をしたばかりなんだよ。今日、シグナムと模擬戦なんて無茶だよ。どうしても模擬戦がしたいなら日を改めて、ね？」

隊長クラスとの模擬戦は肉体的にも精神的にも負担も大きい。昨日の今日では、雪鷹も全力は出し切れないだろう、というフェイトの言葉も嘘ではないだろう。相手が全力を出せない状態で模擬戦を行うのはシグナムの主義ではない。フェイトの言葉にシグナムは不承不承に頷くしかない。

「雪鷹も・・・らしくないよ？昨日の疲れが残っているのは仕方ないけど、もう少し冷静になろう？こんなのいつもの雪鷹さんじゃないよ」

「俺は冷静だ。なのは、お前の理想を押し付けるな。これがいつも

の俺だ。昨日の俺が、いつもの俺じゃなかった。今の俺はお前が知っている頃の俺じゃない。何も知らないくせに俺のことを知ったような口を聞くな。不愉快だ」

雪鷹は冷めた口調ではっきりとそう言った。

「じゃあ、教えてよ。言えない、ばかりじゃいつまでたっても雪鷹のことわかんないよ、言えることだけでも・・・この十年で色んなことがあったんだと思う、私も雪鷹さ・・・雪鷹も」

雪鷹を見つめるなのはの瞳は強い。修羅場の一つや二つをくぐり抜けてきたと自負する雪鷹でさえたじろぐほどに。

「ねぇ・・・この十年で何があったの?言えることだけでも教えて」

雪鷹はなのはから目を逸らし、はやてを一瞥した。まるで嘲笑っているかのようなその眼差しにはやての背中を嫌なものが走る。そして、雪鷹はもう一度なのはと目を合わせ、声を抑えて言った。

「知りたい、だけで踏み込んではいけない世界がある。俺の十年はそんな世界だ。責任感や好奇心、興味や好意、そんな気持ちで踏み込むな。後悔するだけだ」

「知らないまま後悔するより、知って後悔するほうが私はいい」

なのはも一歩も引こうとしない。雪鷹と正面から向き合い、対峙する。しかし、今日の雪鷹の目は本気だった。昨日の雪鷹とは何かが違っていた。話すくらいなら死を選ぶ、そんな目をしていた。何故、と思うよりも早く、何があったのか、となのはは思う。人にあれほど強い決意を持たせるものがなのはには思いつかなかった。話した

くない、というその意志は堅牢な殻となって雪鷹を隠している。十年前と比べても詮無きこととはいえ、その違いになのははは戸惑いを隠せない。十年という月日だけで変わってしまったとは到底思えない。今の雪鷹には十年前の欠片さえ残っていない。まるで別人のようだった。ここまで変えてしまったものは何なのか、知りたいという欲求がなのはの中で強く疼く。

「なのはちゃん、そこらでやめとき。ユキタカ曹長にやってプライバシーっちゅうもんはある。言いたくない過去の一つや二つあってもおかしない。無理に追及するんは野暮っちゅうもんや」

はやては静かにそう言った。言葉は柔らかいが、その顔は部隊長としての顔だった。親友としての表情なら、なのはも少々の無理を押し通せたが、上司として顔を出されては引くしかない。

「ユキタカ曹長ももう少しその態度を改めてもらえんか？私も口うるさく言うつもりはないけど、部隊にはその部隊の雰囲気いうか、色みたいなもんがあるやろ。ユキタカ曹長の前いた部隊がどんなとこやったかはよう知らんけど、ここでそういう態度は勘弁してもらえんかな？頼むから私の部隊を壊さんといて」

はやての言葉に雪鷹は軽く鼻をならす。不満そうな表情を浮かべながらも、これ以上張り合うつもりはないらしい。それを雪鷹なりの了承の合図だと受け取ったはやてはいくぶん明るい声で言葉を続けた。

「そやから、もう一度自己紹介からやり直しや。今度では全部自分の口で説明してな」

仕方ないか、と諦めにも似た声を零してから雪鷹は口を開く。

「シノブ・ユキタカです。階級は空曹長。２４歳。術式はミッドチルダ式で魔導師ランクは空戦Ａ＋。魔力変換資質は氷結。生まれはミッドチルダですが、母は八神部隊長や高町教導官と同じ第９７管理外世界の人間です。えーと、高町教導官やハラオウン執務官とは訓練校時代の同期で、当時の二人からは何度も模擬戦を挑まれたのでその都度完膚なきまで叩きのめしていました。年甲斐ないことをしたと今では反省しています」

笑いながらさらりと言ってのけた雪鷹。その言葉に全員の視線がなのはとフェイトに集中する。雪鷹の言葉の真偽を確かめる為だ。二人が揃って頷くとその場に驚きの声があがる。当時のなのはとフェイトの実力を知っているシグナムとヴィータは特に驚いているようだった。当時の二人はリミッターがついていない分、数字の上では今よりも強い。その二人を完膚無きまでに叩きのめした、と言ってのけられる人間は管理局の中でもそういない。雪鷹の態度や口調を虚栄だと思っていた人間も、それが裏付けされた実力によるものだとわかると考えを少々改めた。

「氷結の変換資質か・・・珍しいな」

「シグナム二尉、何をいっても模擬戦はしませんよ」

雪鷹がシグナムの出鼻を挫く。しかし、その言葉に硬さはなく、嫌味な笑みも挑発的な態度も見られない。やんわりと、しかし、確実にシグナムの口を封じる。それ以上言葉を続けられなくなったシグナムは黙るしかない。言い負かされたわけではないのに何故と思わずにはいられなかったが、不思議なことに不快感はなかった。

「二人の名誉の為に言っておきますが、当時の二人は強かったです

よ・・・まぁ、今も強いですけど」

蛇足気味に付け加えるとヴィータが尋ねる。

「それってつまり、今でも二人よりも強いって言いたいのか？」

「まさか。さっきも言ったように私の魔導師ランクは空戦Ａ＋です。そこそこいい勝負はできるとは思いますけど、正面からぶつかったら十回模擬戦をして一回勝てるかどうかですよ。もちろん、高町教導官にリミッターがついているのが前提ですよ」

苦笑を浮かべる雪鷹に謙遜している様子はない。今言った勝率も二人のランク差を考えれば妥当な線だ。しかし、それでは納得できないこともある。昨日行われたというなのはとの模擬戦だ。ヴィータもシグナムも結果しか聞いていないが、聞くところによると、なのはは切り札のスターライトブレイカーまで使ったらしい。それにも関らず、なのはが負けたと聞いた時は一瞬何かの冗談かと思ったほどだ。しかし、実際になのはは撃墜され、肋骨を折るほどの大怪我を負った。リミッターがかかっているとはいえ、その防御は魔導師ランクＡ＋が破れるほど弱くない。まして、骨を折るなど物理的にあり得ない。そんなヴィータの心の内を察したのか、雪鷹は言葉を付け加える。

「あれはどちらが強い、ということではなく相手の手の内を知っていたかどうかの問題です、ヴィータ三尉。はじめに言ったように、私は過去に高町教導官と模擬戦をした経験があり、教導隊の教育プログラムで現在の高町教導官の教導映像を知ることもできた。つまり、今の高町教導官に何ができて何ができないかを知っていた。逆に、高町教導官は十年前の私しか知らなかった。『彼を知り己を知れば百戦殆からず』という言葉をご存じですか？」

雪鷹の言葉にヴィータは黙るしかない。雪鷹の言う通り、相手の戦力と自分の戦力を知ることは個人戦であれ、集団戦でも重要なことだ。戦術の基礎といってもいい。単純に戦力で勝っていても、戦術次第では不利な状況を覆すことは不可能ではない。それを為す為には彼我の戦力や特徴、性質を十分に把握しなければならない。それを怠ったなのはと熟知していた雪鷹とでは、結果は必然といえた。しかし、それでもまだ疑問は残る。なのはの防御を破るほどの力を魔導師ランク空戦Ａ＋の雪鷹が持っていたとは思えない。

「ユキタカ、空戦Ａ＋のお前がなのはの防御を破った、というのが少々気になるのだが？」

今度はシグナムが口を開く。隙あらば模擬戦を挑もうと、もとい、申し込もうとする視線は獲物を狙う肉食獣のように鋭く、周りの人間も一歩引いている。そんな様子のシグナムを見て雪鷹は内心苦笑しながら、制服から待機状態のデバイス、ブレイドハートを取り出した。

「それはデバイスのおかげとしか・・・ブレイドハート、セットアップ」

《　１ｓｔ　ｍｏｄｅ　ｓｅｔ　ｕｐ.　》

電子音と響くと同時に空色の宝玉は青白く瞬き、その姿を変える。ファーストモードは黒い刀の柄のようなその形をしている。一見すると武器には見えないその形状にシグナムは首を傾げる。ヴィータ同様、シグナムも昨日の模擬戦を見ていないが、あの高町なのはに一太刀浴びせた、と聞いた時は騎士として胸が昂ったのを覚えている。それだけに期待も大きかったのだが、いざその男を見てみると

見栄えはするが軽薄なだけの優男で、正直期待外れな想いをしなかったといえば嘘になる。話を聞けば、見た目ほど軟ではないようだが、一度手合わせしてみなければ、その実力を信じることができない、というのがシグナムの本音だった。

「ファーストモードは氷結の魔力変換資質の補助を目的で、この前で見せた魔法刃はあくまでのその一部。普段はもっと短い、ナイフ程度の長さで使います。大抵の場合はそれでこと足りるので。あと、形状はある程度自由が利くので簡単なものになら何でも」

「・・・それは答えになっていないだろう？」

「そう慌てないでください、シグナム二尉。はじめに言っておきますが、私のマルチデバイス、ブレイドハートには今見せたファーストモードの他に幾つかありますが、次に見せるセカンドモード以外は見せません。情報一課には色々と守秘義務がありますから、これ以上は話せません。いいですね？」

真面目な顔を浮かべる雪鷹にシグナムも、他の人間も黙って頷く。

「本音を言うとこのセカンドモードも見せたくなかったんですが一度見せてしまったからしかたないですね・・・ブレイドハート、セカンドモード」

≪ ２ｎｄ ｍｏｄｅ ｓｅｔ ｕｐ ≫

雪鷹に手に収まっていた束から刃が伸びる。黒塗りの光沢と鋭さを放つそれは見る者の目を奪う。人を傷つける為の、戦う為の武器であるはずなのに、それを感じさせないくらい美しかった。刃紋がない、黒く伸びる刀身は鏡のように磨きあげられ、独特の光を放つ。

これまで数々の相手と剣を交えてきたシグナムでさえ、その黒刃の美しさに目を奪われる。

「見事だ・・・しかし、戦いに赴くにはいささか優美すぎるな」

「無駄を削ぎ落とせば、自然とそういうものになります。一見武骨な刃でさえ、研ぎ澄ませばこのように。シグナム二尉、貴女も美しい。私の剣に負けないくらいにね」

人の目を惹きつける優美な微笑み。今までのような冷たい、どこか影のある笑みではなく、輝くようなその笑顔を向けられ、シグナムは一瞬言葉を詰まらせる。まるでシグナムを口説くかのような雪鷹の言葉にシグナムの頬が紅く染まる。半分は羞恥、もう半分は怒りだった。

「ふ、ふざけるなっ!!」

「そ、そうだよ、雪鷹、そんないきなり・・・」

顔を真っ赤にしてフェイトもシグナムに続く。しかし、雪鷹はそれを無視して言葉を続ける。悩ましげな視線をシグナムに投げかけ、愛の言葉を紡ぐ。

「ふざけてなんかいません。貴女は美しい。それは紛れもない真実だ。それとも、貴女は自身の魅力を理解されていないのですか？なんて罪深いお方だ。そうして、何人もの男の心を乱し、惑わせてきたのですね。そして、私もその一人に・・・」

雪鷹の容姿が優れているだけに一際その言葉の一つ一つが真実味を帯びていた。まるでドラマや映画から告白シーンをそのまま切り取

ったかのような雪鷹の所作と言葉遣いに全員が息を呑み、シグナムを見つめる。部屋の全員の視線を集めたシグナムは普段の彼女からは想像もできない表情をしていた。顔を薄く染め上げ、恥じらう素振りは烈火の将とはまるで別人で、困惑したように瞳は宙を泳いでいる。そんなシグナムを見た雪鷹はクスクスと笑い声を上げる。その笑い声にからかわれたことを理解したシグナムは怒りで顔を真っ赤にし、フェイトは安堵のため息を零した。そして、雪鷹の言葉を本気にして一人先走ってしまったことに気付き、シグナムに負けないくらい顔を紅く染めた。

「こういう返し方もあるんです。嫌がる人間に無理強いして、何もないと思っていたのですか?誰もが笑顔で許していると思ったら大間違いですよ。」

不敵に笑う雪鷹は冗談のように見えたが、その目は笑っていなかった。これはシグナムへの、否、シグナムを含めたこの場にいる全員への警告だった。踏み込むようならば容赦しない。そう静かに、遠回しに、告げていた。もちろん、それを理解したのははやてとシグナムだけで、新人達やロングアーチスタッフの目には雪鷹がふざけているようにしか見えなかった。

「・・・その件について素直に非を認め、詫びよう。無理を言ってすまなかった」

からかわれたことを許したくはなかったが、雪鷹の言葉はもっともなことだ。これ以上口説かれては堪らない、と言わんばかりにシグナムが雪鷹に謝罪する。

「いえいえ。貴女が美人なのは本当のことですから」

真面目な顔で雪鷹がシグナムを見つめる。

「やめてくれ、そういうことを言われたくない」

シグナムはばつが悪そうな表情で顔を背ける。嫌がっているような、照れているようなその素振りは普段のシグナムらしくない。そんなことを知ってか知らずか雪鷹は軽くため息を零すと何事もなかったかのように話を続けた。

「話を戻します。このセカンドモードは対魔導師戦に特化したモードでその機構のほとんどを対魔法に費やしています。構造や原理等は機密事項に触れるので説明を省きますが、簡潔に言うと、魔法を切り裂く・・・魔力の結合を断つことのみを目的にして造られたデバイスです。防御魔法はもちろん、攻撃魔法も含めてね。」

「だから、私のバリアジャケットを簡単に・・・」

なのはの言葉に雪鷹は頷く。

「接近戦に持ち込めばたいていの砲撃魔導師には勝つ自信がありますよ。どんな強い火力をもっていても、至近距離で撃つわけにはいきませんから」

そう何気ないように付け加えて雪鷹はなのはに微笑む。昨日の模擬戦で、至近距離から砲撃魔法を放ったなのはは恥ずかしそうに顔を赤らめ、下を向く。勝ちを意識し過ぎて、安全確認を疎かにし過ぎたことをに対して雪鷹に無言で咎められ返す言葉もなかった。

「あの、さきほどマルチデバイスとおっしゃってましたよね・・・それは一体?」

初めて聞く言葉にデバイスマスターでもあるシャーリーが興味を示す。恐る恐る尋ねると雪鷹は少々厳しい表情を浮かべた。

「情報一課が独自に開発した万能型デバイスのことです。まぁ、私に言わせれば凡庸デバイスですが・・・これ以上は機密に触れるので話せません。ストレージとアームド、インテリジェンスにユニゾンの四つを足して割ったようなものだとイメージしてください。私に言えるのはそれぐらいです。さて、八神二佐、もうこれで終わりにしてよろしいですか？根ほり葉ほり聞かれても答えられないことも多いので」

そう言って笑う雪鷹に釣られ、何人かの笑い声が聞こえる。冗談のように聞こえるのは雪鷹の声に緊張や妙な硬さがないからだ。しかし、実はかなり切迫している。情報部は多くの機密情報を扱う部署であり、そこで働く人間には情報を秘匿する義務がある。言わない、のではなく、言えないのだ。雪鷹が自己紹介の中で話したことの中にもかなり際どい内容のものもある。それにも関らず、何事もないように振舞えるのは長年の経験と自制の賜物だ。

「なんや、普通に自己紹介できるやないの。なんであんな態度取ったりしたん」

若干の驚きと呆れ、そして苦笑を浮かべながらはやてが尋ねると雪鷹は空惚けたように笑う。昨日の冷たい表情は嘘のように消えている。よく似た別人だ、と言われたらそのまま信じ込んでしまいそうな表情にはやては呆れるしかない。腹芸には自信があったが、雪鷹はおそらくその上を言っている。威圧的な態度も、今の笑顔も、おそらくは昨日のほの暗い微笑さえも計算の内なのだろう。どれが雪鷹の本質なのかはやてには見極めることができない。

「怖い人やな・・・」

「いえいえ八神二佐ほどでも」

二人の顔は笑顔なのにその目は少しも笑っていない。火花散る、と形容するには微笑ましく、しかし、和やかに、と形容するには程遠い二人の笑顔に周りが仲裁に入る。

「もう、二人とも止めてよ」

「そ、そうだよ、どうしてはやてなの」

「はやてもらしくねぇぞ」

「主はやて、おやめください」

隊長陣の四人が二人の間に割って入る。一触即発というほど危険な状況ではないがこのままではいずれそうなる。そうなる前に止めなければ、というのが三人の出した結論だった。一人だけ、他の三人とは少々異なる思考回路を持って二人の間に立ちふさがっていたが、その詳細については割愛しておく。

「ヴィータ、そんな顔せんでもええよ。別に喧嘩してるわけやないんやから」

「そうだ。齢は下とはいえ八神二佐は私の上司だ。尊敬こそすれ、喧嘩などそんな無礼をするはずがないだろう」

二人ともこれ以上ないくらい清々しい笑みを浮かべている。まるで

申し合わせたかのように、同じ笑顔だった。そして、二人の背中から立ち上る圧倒的な威圧感は、至近距離で砲撃魔法に狙われた時のそれをはるかに凌いでいた。隊長四人でさえ抗うことのできない笑顔を浮かべたまま、雪鷹は言葉を続ける。

「もっと詳しいことが聞きたい方は個人的に私の所へ来てください」

そう言って雪鷹は軽く一礼をすると懐から煙草の箱を取り出した。それを見たはやてが咎めるような口ぶりで雪鷹を注意する。

「・・・ここ、禁煙なんやけど」

その言葉に雪鷹が固まる。その表情はどことなく怖い。

「・・・なぜ？」

今までにない重い声。その声にはどこか絶望に似た感情が混じっている。

「なんでって言われても・・・禁煙ブームってゆうたらおかしいけど、そういう世間の流れから・・・ミッドチルダの公共施設は基本的に禁煙やし、そんな驚くようなことないやろ？」

雪鷹の予想外の反応にはやての声が強張る。機動六課全面禁煙は断じて雪鷹への嫌がらせではない。はやてを筆頭に、機動六課の主要メンバーは未成年だ。もちろん、煙草など吸うはずもない。先に述べた禁煙の風潮もあり、機動六課全面禁煙はごく自然に決定された。成人の職員もいるにはいるが、禁煙に対する不満は今のところはやての所には上がってきていない。

「分煙、ではないのか？」

諦めきれない雪鷹がせめてもの願いを託し、はやてに問いかける。

「残念やけど、禁煙や。機動六課全面禁煙。ここにエリオやキャロみたいに、私らもやけど、未成年の子も多いし、分煙もな・・・健康に悪いし、ユキタカ曹長もこの機会にタバコ止めたらええんとちゃう？アルコールは舎内の売店に売ってるよ、ちなみに」

笑顔を取り繕いながらはやてが答える。決して雪鷹個人を狙った禁煙ではないのだが、今まで流れから見て、そう見えてもしかない。それを自覚しているだけにはやても気が抜けない。

「私に死ね、と？」

絶望的な表情を浮かべるその姿はまるで別人のようだった。小刻みに肩を震わせ、はやてを睨みつけるその眼差しは痛々しく、そして、痛い。

「そ、そんなこというたかて・・・ユキタカ曹長一人の為に禁煙を止めるなんてことできへんし、なぁ？」

救いを求めるようにはやてが周りを見渡す。

「そうだよ、タバコなんて体に悪いんだし、この機会にやめちゃったほうがいいよ」

「私はあの臭いは好きじゃないな・・・」

「別にいいだろ、タバコが吸えなくたって」

「タバコをやめて模擬戦をすればいい。模擬戦の相手ならいつでも引きうけるぞ」

隊長陣からの言葉を浴びせられ、雪鷹は観念したようにため息を零す。

「わかった。では、地上本部で吸うことにしよう。あそこはミッドチルダでも数少なくなった分煙の公共施設のはずだ。少々、距離はあるがまぁ、仕方ない・・・」

至極当然のように言い放った雪鷹に皆言葉を失った。ここから地上本部までは車でも軽く三十分はかかる。そこで仕事をするわけでも、寝食の為でもなく、煙草を吸うだけの為に通うと雪鷹は言い切った。しかも、その目は本気だ。常軌を逸しているとしか言えない行動だ。

「・・・えーと、私の耳がおかしくなったんかな?ちょっと確認させてな。ユキタカ曹長は煙草が吸いたい。でも、機動六課では吸えない。そして、地上本部に行けば煙草が吸える。だから、地上本部に煙草を吸いに行こう。そう聞こえたんやけど・・・」

はやての言葉に雪鷹は神妙な面持ちで頷く。

「概ねその通りだ。心配しなくても任された仕事はこなす。仕事を疎かにしてまで、煙草を吸いに行くほど愚かではない」

言葉は至極真っ当に聞こえる。しかし、何かがずれている。それも、かなり激しく。

「そんな子供みたいなこと・・・認められるわけないやろぉぉおお

おっ！！」

はやてが吠えた。

「何故だ？」

一方の雪鷹は冷静だ。声を荒げることも、委縮することもなくはやての叫びをさらりと受け流している。

「仕事をしない、とは言っていないだろう？空いた時間をどう使うかは個人の自由だ。地上本部はオフシフトの行動可能範囲内にある。だから行動そのものに問題はない。仮に緊急事態が発生したとしても対応は可能だ。それとも、部下の自由を制限するのがこの部隊の方針なのか？もちろん、交通費は私が負担する。煙草の代金も。部隊の法規には何一つ違反していない。八神二佐、何が不満なのだ？」

雪鷹の並べた理由が真っ当なものだけにはやてもすぐには言葉を返せない。雪鷹の非常識な行動に納得できない、というのはあくまではやて個人の私情である。規則上は何の不都合もないだけに部隊長といえども雪鷹の行動を制限できない。それを見越しての地上本部か、とはやてが呟く。あれほど絶望した顔を浮かべながらも頭の中では、冷静に、したたかに考えを巡らせていたのだろう。そう思うと悔しさがこみ上げてくる。

「・・・わかった。いくら、私でもそこまで制限できへんしな。そやけど、任された仕事は全部きっちりとやってもらうで？心配せんでもユキタカ曹長だけに仕事を押し付けるような子供じみた嫌がらせはせえへんから」

「それを聞いて安心しました」

腹立たしそそうな表情を浮かべるはやてに雪鷹が笑顔で返す。その笑顔を見て、はやては心を決めた。必ずや一矢報いると。

「ただし、高町教導官が怪我で動けない間はユキタカ曹長が、高町教導官監修の下、新人達の訓練の相手をすること。嫌とは言わせへんで？なのはちゃんを怪我させたんはいくらなんでもやり過ぎや。たとえ本人同士の合意があったとしてもな。本来なら正式に処分を下さなあかんのやけど、今回はこれで目瞑っといてあげる」

はやてはそう言い捨てると雪鷹の言葉を聞くよりもはやくロビーから出て行ってしまった。雪鷹はわずかに眉をしかめたが何も言わなかった。

07『孤高の鷹』（後書き）

ついに始まった新人達の教導

初めての模擬戦に慣れない連携
立ちはだかる敵は雪鷹

負けたくない
負けられない

その一撃は雪鷹に届くのか！？

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
０８『教導開始』

強くなる為に、テイクオフっ！！

08『教導開始』（前書き）

ついに始まった戦闘訓練

憧れのなのはさんとの模擬戦

…のはずが色々あって

立ちはだかるのは黒衣の剣士

なのはさんに勝った実力者

だけど、絶対に負けない。

負けたくない。

負けられない

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります。

08『教導開始』

０８『教導開始』

機動六課の朝は早い、新人達の場合は特に。日が昇り始めた頃に起床し、身支度を整えると朝の訓練が始まる。時間にしてみると一時間にも満たないわずかな時間だが、その訓練密度は濃い。今朝も四対一のシュートイベーションと呼ばれる訓練が行われている。簡単に言うと、弾丸回避、すなわち新人達が攻撃を避け続け、且つ、反撃をする訓練である。口で言うのは簡単なのだが、これがなかなかハードな訓練なのである。今回は五分という時間制限付きで、一撃でも与えれば新人達の勝ちという条件である。

「ほらほら、もっと動かないと的にされちゃうよ」

「はいっ！！」

なのは達の声が訓練場に響く。今回再現されたのは廃墟となったビル群だ。隠れる場所も多く、地形を上手く利用すれば敵の攻撃を避けきることも難しくはないのだが、それを実行するだけの能力も経験も持たない新人達は動きまわって攻撃を避けるしかない。スバルの先天魔法、ウイングロードがビルの隙間を縫うように張り巡らされ、その上を新人達が駆け巡る。それを狙うのは桜色の光ではなく、鋭く尖った氷の槍だった。

「雪鷹さ・・・雪鷹ももっと狙っていていいよ」

今朝のなのははバリアジャケットではなく、教導隊の制服を着ている。新人達の相手をしているのは漆黒のバリアジャケットに身を包

んだ雪鷹である。その顔は眠そうなままで、気の入っていないように見えるが右手には１ｓｔモードのブレイドハートが握られ、周囲を囲むように幾つも氷の槍が浮かんでいる。その数は十や二十ではない。

「まったく・・・時間外労働だろ？一応、ロングアーチの人間だぞ」

雪鷹の口から不満が零れる。なぜ、雪鷹が新人達の相手をしているのかというと、教官であるはずのなのはが先日の模擬戦で肋骨を折ってしまったため、急遽、雪鷹がその代行を務めているのだ。ちなみに、雪鷹が戦技教導官の資格は持っていない。最初は拒否していた雪鷹だったが、なのはの骨折させた自覚はあるので、結局断り切れず、朝早くからの訓練に付き合っている。なのはの潤んだ上目遣いに屈したわけではない、はずである。今朝もまだ日の昇らない内から準備をし、こうして新人達の相手をしている。

「ちっ！！またフェイクシルエットか」

フリーズランサーで貫いたティアナの姿が霞んで消えていくのを見て、雪鷹が毒づく。ティアナが幻術と射撃で雪鷹を翻弄し、隙を作り、スバルが攻撃の起点となり、キャロの支援魔法を受けたエリオの一撃で決める、というのが今朝の新人達の戦術だった。戦術としては概ね良好なのだが、それを簡単に通すほど雪鷹は甘くない。攻撃の要であるスバルとエリオをフリーズランサーで牽制されている為、新人達は決定的な攻撃を雪鷹に与えることができなかった。

「そろそろ五分、か・・・」

雪鷹はそう呟くと不敵な笑みを浮かべる。あくまでも新人達の訓練が目的であるので、ある程度の加減をするようになのはからきつく

言いつけられている。しかし、それではつまらないと雪鷹が言いだしたため、最期の十秒を切ったら、少々、もといかなり手荒なことをしても構わない、という条件が付け加えられた。もちろん、なのはと雪鷹の二人だけの話であって新人達は何も知らない。

「恨むならこんな俺を模擬戦の相手に選んだどこぞの教導官を恨め。フリーズランサー、アサルトシフト」

嬉々した声で雪鷹が剣を振る。更に氷の槍が生成され、その数は五十を越えた。その数に新人達は顔を青ざめ、なのはも心配そうな声をあげる。新人用に威力が調節してあるとはいえ、単純な貫通力はなのはの訓練用弾の比ではない。当たり所が悪ければ、痛いでは済まない。

「あ、あの、それは流石に・・・」

「最終通告だ。いますぐ投降すれば命だけは助けてやる」

なのはの言葉を無視して雪鷹が叫ぶ。その目は殺意に、もとい苛立ちに溢れ、今にも喰い殺さんばかりに新人達を睨みつけている。しかし、投降しろ、と言われて素直に引く四人ではない。四人はこれが反撃のチャンスだと言わんばかりに雪鷹を狙う。

「スバル、あたしが援護するからここで決めなさいっ！！」

「オッケー、ティア。ウイング・・・ロードっ！！」

スバルの足元にベルカ式の魔法陣が広がり、雪鷹目掛けて一直線に道が現れる。ティアナがスバルの攻撃の道を切り開く為の魔力弾を放とうとする。しかし、ティアナのデバイス、アンカーガンが装填

不良を起こし、撃発しない。攻撃の出鼻を挫かれたスバルだが、既に走り出してしまっている為、止まれない。立ち止まれば雪鷹の的にならざるを得ないからだ。

「うぉりゃぁああっ！！一撃、必倒っ！！」

スバルが強引に突き進み、右手の拳、リボルバーナックルを振りかざす。

「そうか、そんなに死にたいのか・・・なら、死ね」

冷たく言い放ち、雪鷹はフリーズランサーを放つ。新人達の防御力を越えた攻撃がスバルとティアナに迫る。フリーズランサーは誘導弾ではない為、雪鷹に全てを操作しようという考えはない。魔力を変換した氷の塊を加速させて撃ちだしているだけだ。それゆえの乱れ撃ち。速さと貫通力のみに特化した射撃はいとも容易く瓦礫と成り果てたビル群を貫く。

「ディバイン・・・バスターぁあああっ！！」

スバルの右の拳から繰り出される必殺の一撃。砲撃とは名ばかりの射程と、それに相応しい威力を持った空色の砲撃が氷の槍の一部を呑みこんで、雪鷹に迫る。

「ちっ！！一応は砲撃か・・・」

フリーズランサーを呑み込み、突き進むディバインバスターに雪鷹が顔をしかめ、空へと離脱する。極至近距離で放たれたのならともかく、この程度の距離があれば避けることは雪鷹には容易い。しかし、そんな雪鷹の動きを待っていたかのようにティアナが叫ぶ。

「今よ、エリオ、キャロっ！！」

「「はいっ！！」」

ティアナの指示に二人が頷く。

「我が乞うは疾風の翼。若き槍騎士に駆け抜ける力を・・・」

《Ｂｏｏｓｔ Ｕｐ Ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ》

キャロの補助魔法がエリオを優しく包みこむ。全身に力が漲るを感じたエリオはデバイス、ストラーダを握る両手に力を込めた。

「いくよ、ストラーダ・・・」

ストラーダの推進装置が火を噴き、雪鷹を目掛けて一直線に突き進む。キャロの補助魔法を受けたエリオの突進力は普段の数倍はある。この距離からの回避は雪鷹の機動力では不可能だった。エリオの突撃に気付いた雪鷹は軽く舌打ちをしてブレイドハートを構える。

「スピーア・・・アングリフっ！！」

雪鷹とエリオ、二人の体がぶつかり、大きな衝撃音と共に爆発が起きる。煙の中からエリオが弾かれたように出てくる。そのバリアジャケットに左の肩から斜めに斬られた痕が残っている。体の方までは達していないらしく、出血は見られない。近くのビルに着地し、エリオがストラーダを構える。煙が晴れるとブレイドハートを構えたままの雪鷹が姿を現す。

「一応、先に一撃もらったからな・・・お前たちの勝ちだ」

肩についた汚れを払いながら雪鷹が静かにそういうと新人達の顔に喜びの表情が広がっていく。

「ただし、ルシエ陸士以外の三人は死んでるが」

雪鷹はそう言ってスバルとティアナを睨みつけた。二人は無傷だったが、二人の後ろにはフリーズランサーが幾つも突き刺さり、ご丁寧に人型を描いている。振り返ってそれを見た二人の顔が紅く染まる。一目見ただけで遊ばれたのだと判る。その気になれば雪鷹はスバルとティアナを串刺しにできたのだ。ティアナとスバルで隙を作り出した、と思っていたが、ギリギリを狙い、しかも人型を描けるくらいの余裕が雪鷹にはあったのだ。二人の中に悔しさがこみ上げる。

「くやしいぃ!!なんで勝てないのぉ!!」

スバルが大声で叫び、その隣でティアナが両手で耳を塞ぐ。相当うるさいらしい。

「うっさいっ!!馬鹿スバルっ!!」

ティアナに一喝されてスバルが黙る。

「とりあえず、俺からの苦言を、もとい所見を言うぞ?まずはランスター陸士、射撃の精度は悪くないが、実戦で使えるレベルにはまだ遠い。誰かのフォローなしでは戦えないだろう?幻術も使えるようだが、出すので精一杯では使い物にならん。最低でも、幻術を使いながら戦闘がこなせるようになれ。あと、装填不良は論外な。次

にナカジマ陸士、突進力や機動性はいいが、それを上手く利用できてない。防御で受けるくらいなら躱せ。お前の機動力ならそれぐらいできる。最期の突撃に関しては自殺行為だ。できないと判断したら引け。次に馬鹿な真似をしたら殺す」

スバルが不満を言おうとしたが、それをティアナが抑える。厳しい言葉が並ぶが、全て雪鷹の言う通りだった。ティアナの射撃の精度は高いが、それだけだ。単体で戦えるだけの火力も技術もティアナは持っていない。スバルのような突破力や機動力、防御力がない為、一対一で戦うことは苦手だった。Bランクの認定試験も一応合格できたが、スバルとティアナ、二人一組だったからこその合格である。ティアナ一人ではまず不可能だった。

「モンディアル陸士、スピードに自信があるのは結構だが、まっすぐ飛んでくるだけなら馬鹿でもできる。どれだけ速かろうと返り討ちにあるのが関の山だ。よくても相打ち・・・その痕を見ればわかるだろう?死にたくないならもう少し頭を使え。ルシエ陸士も補助に徹するだけなら必要ない。竜召喚、だったか?出さなくても勝てる自信があるならいいが、ないなら出し惜しみするな。宝の持ち腐れだ」

新人で唯一の生存者であるキャロも雪鷹からきつい言葉を浴びせられ、しゅんと下を向く。模擬戦には勝ったものの、素直に喜べない。結局、雪鷹との実力差を思い知らされる結果となっただけだ。自分たちの力で勝った、というよりも雪鷹の手の上で遊ばれた、という実感の方が強い。喜ぶに喜べず、かといって雪鷹に悔しさをぶつけるわけにもいかず、四人が黙りこむ。

(あの・・・もう少し言葉を選んでもいいんじゃないかな?)

なのはの念話に雪鷹がため息を零す。

（知らん。嘘を言っているつもりもない。咎められる理由に心当たりはないが？十年前のなのはやフェイトにもこんな感じだったはずだ）

（それはそれ、これはこれ。これから四人をフォローする私の身にもなってもらえないかな・・・これじゃ、フォローが・・・）

菜の葉の念話に苦い響きが混じる。雪鷹に遊ばれたと感じている新人達をどうやって立ち直らせるのかを思案しているらしい。それを感じ取った雪鷹は呆れたように念話を返す。

（模擬戦で徹底的に叩きのめすのが教導隊の方針じゃなかったのか？）

（それはそうだけど、フォローしないわけじゃないんだよ。大きな失敗や間違ったことをしたら、そのアフターケアも大切なんだよ）

雪鷹は軽くため息を零すと少し柔らかな口調で四人に言った。

「厳しいことをいったが、その年でそれだけできれば上等だ。実戦経験が少ないのはお前たちのせいじゃない。これから経験を積んでいけばいい。そもそも、チーム戦ってのは個人が強ければいいってものじゃない。足りないところを補い合って、それで勝てれば問題ない。そういう意味では、今回の模擬戦は真実お前たちの勝ちだ。自信をもっていいぞ」

嫌味を感じさせない雪鷹の言葉に四人はそれぞれ驚きの表情を浮かべている。厳しいことしか言わないと思っていた雪鷹から誉められ

るとは四人の中の誰一人として想像していなかったのだ。固くなっていた表情が自然に緩み、笑顔に変わる。

「うん、戦術も悪くなかったよ。ティアナの考えたのかな？指揮もだいぶ様になってきたし、今度指揮官訓練も受けてみる？」

「い、いえ、戦闘訓練だけでいっぱいいっぱいです」

なのはの言葉にティアナが困ったように笑う。指揮官訓練に興味がないわけではなかったが、これ以上の訓練は身が持ちそうにない。そんなティアナの後ろで小さな鳴き声が響く。キャロの召喚竜、フリードだ。騒ぐような鳴き声をあげるフリードをキャロが宥める。

「どうしたの？フリード・・・」

「あれ、なんだか焦げ臭いような臭いが・・・」

エリオが異変に気づき、四人があたりを見渡す。

「あ、スバル、あんたのローラー・・・」

ティアナがスバルをローラーを見て叫ぶ。スバルの足元からが火花が飛び散り、黒い煙が細い筋となって立ち昇っていた。素人目に見てもかなりの故障だとわかる。

「あっちゃぁ・・・しまった、無茶させちゃった・・・」

ローラーを脱いで、スバルが故障の具合を確かめる。しかし、どこを直していいのかわからないほど故障しているらしく、諦めに似たため息をこぼす。

「かしてみろ」

雪鷹がスバルの手からローラーを奪い取ると故障箇所を見て、舌打ちをする。それを見たなのはがオーバーヒートかな、と呟くとそれに答えるように雪鷹は頷く。

「中の配線が焼き切れてる。それも一箇所や二箇所じゃないな・・・ここまでひどい故障となると、素人の手に負えないな。専門家のところに持っていって直してもらわないとどうしようもない」

「見るだけでわかるんですか？」

スバルが驚いた顔で雪鷹を見つめる。一目で故障箇所や程度を見抜ける魔導師はそういない。それこそ、デバイスの専門家であるデマイスマスター並みの知識が必要になるからである。

「まぁ、自分のデバイスを整備できる程度の知識と経験はある」

そう言った雪鷹に新人たちが感心の声をあげる。

「ティアナのアンカーガンもけっこう厳しい？」

訓練中に装填不良を起こしたことを考えるとおそらくはその通りなのだろう。なのはの言葉にティアナが頷く。

「はい、だましだましです」

スバルのローラーもティアナのアンカーガンも二人の自作デバイスである。強度や性能面では支給品にも劣る代物で、戦闘訓練に必要

な最低限の機能しか備わっていない。それぞれ馴染んではいるが訓練校時代から使用しているため、かなり古く、なのはの訓練で酷使した結果、デバイスとしての寿命は一気に縮まってしまった。訓練のあるたびに整備はしているのだが、その分野の専門家でもない二人にできる整備は限られている。今日のティアナの装弾不良も起こるべくして起こったといっていい。

「みんな訓練にも慣れてきたし、そろそろ実践用の新デバイスに切り替えかな・・・」

安全面から考えて、今のデバイスを使用し続けるのは危険である。また、今のデバイスでは二人の本来の力を発揮することができないだろうと考えたなのはが呟く。

「新・・・」

「・・・デバイス」

思いもよらないなのはの言葉にスバルとティアナが驚いた表情を浮かべる。

「よし、それじゃあみんな、一旦隊舎に戻ろうか」

「「「「はいっ！！」」」」

・＊・＊・

なのは達が隊舎の前まで戻ってくると向こうから黒いスポーツカーが近づいてきて、一行の前で止まり、屋根が消える。

「フェイトさん、八神部隊長・・・」

運転席にはフェイト、その隣の助手席にははやてが座っていた。二人は軽く会釈をする。

「みんな、お疲れさん。練習の方はどないや？」

「はは・・・」

「・・・頑張ってます」

スバルとティアナが複雑そうな表情で答える。今日の模擬戦の結果を考えると素直に頷けない。結果からいうと今日の模擬線には勝った。しかし、実践なら間違いなく二人は死んでいた。そう考えると手放しでは喜べない。

「エリオ、キャロ、ごめんね。私は二人の隊長なのにあんまり見てあげられなくて。なのはや雪鷹さ、じゃなくて雪鷹の訓練は少し厳しいかもしれないけど、大丈夫？」

「あ、いえ・・・」

「大丈夫です」

「四人ともいい感じに慣れてきてるよ。だから、ちょっと早いけどこの子達に新デバイスを渡して、今日の訓練から使わせちゃおうと

思うんだ」

なのはが嬉しそうに微笑む。

「フェイトは八神二佐とどこかに出かけるのか？」

「うん、ちょっと・・・」

「言わんでええよ、フェイト隊長。ユキタカ曹長には関係あらへんことやから。なのはちゃん、私は夕方には戻るよ」

フェイトの言葉を遮って、はやてが言葉を続ける。顔は笑っているが雪鷹を見つめる目は鋭い。普段とは異なる部隊長としての表情よりも更に険しいその目つきにフェイトは困惑しながらも笑顔で取り繕う。

「私は昼前には戻るからお昼はみんなで一緒に食べようか」

「「「「はいっ」」」」

新人四人の元気な声にフェイトは嬉しそうに頷き、車を発進させる。フェイトたちを見送るとなのはは雪鷹に念話を送る。

（はやてちゃんと何があったの？）

何か、ではなく、何がと尋ねたなのはに雪鷹は苦笑を浮かべる。あの表情を見せられては何もなかった、と思う者もいないだろうが、確信を持って何があったののかと直接尋ねる者もあまりいないだろう。見れば新人たちも意味ありげに雪鷹を見つめている。馬鹿正直に答えるわけにはいかず、だからといって適当な嘘で誤魔化すのも

億劫で話す気にもなれなかった雪鷹は黙って懐からタバコを取り出した。それを見た新人たちは呆れた表情を浮かべる。たばこをめぐるはやてと雪鷹の争いはまだ記憶に新しい。部隊長権限で機動六課内を全面禁煙にしたにも関らず、雪鷹は諦めることなく、機動六課外にタバコの吸える場所を求めたのだ。

「というわけで俺は少し出かけてくる。午前の訓練が始まるまでは戻る」

そう言い残すと雪鷹はどこかへ行ってしまった。そんな雪鷹をため息で見送るとなのはは新人達に言った。

「それじゃ、みんなは寮に戻ってシャワーと着替えを済ませたらロビーに集まろうか」

「「「「はいっ」」」」

・＊・＊・

「はやて、どうしてあんな態度をとったの？」

車を運転しながらフェイトが助手席に座るはやてに尋ねる。非難混じりのその言葉には棘があり、雪鷹に対するはやての態度に不満を持っているのは聞くだけで判る。

「まだ雪鷹のこと疑ってるの？はやても聞いたでしょ？あんなこと

を言うスパイがいるわけないよ」

遠回しに、これ以上雪鷹を疑ったら許さない、と告げるフェイトの顔をはやては直視できない。フェイトの言うことは判る。もし雪鷹がスパイであるならば、それを必死に隠そうとするはずだ。疑惑に繋がる全てを隠し、誰にも気付かれないようにするのが常識だ。言動は限りなく黒に近いが、客観的に考えて雪鷹がスパイである可能性は低い。それははやても理解しているのだが、雪鷹がまだ何か隠しているような気がしてならない。ほとんど勘といってもいいくらい根拠はないが、はやてはフェイトのように雪鷹を信用できずにいた。

「私もそう思うよ。そやけど、あの態度、何か隠してるようでな・・・」

「それの何がいけないの？」

フェイトは当然のように言葉を続けた。

「誰にだって言いたくない過去の一つや二つくらいあるって言ったのははやてだよ。私も人には言いたくない過去がある。エリオやキャロもそう・・・言いたくない、思い出したくないことは誰にだってある。雪鷹・・・雪鷹さんにだってそういうことがあってもおかしくない。何かを隠しているからってだけで疑うなんてひどい」

視線はフロントガラスの向こうを見つめている。その瞳に映しているのは悲しみだった。親友に尊敬する人を疑われたことに対する悔しさと怒り。穏やかな口調とは裏腹にフェイトの瞳は荒れていた。はやての心配する理由は判る。しかし、それで納得しろというのは無理な話だった。

「私かてそれだけで疑ってるわけやない。過去のこと掘り返されて嫌な気持ちになるんは私も知ってるつもりやし、無理に聞こうとも思ってへん。私が不安なんはユキタカ曹長が何か企んでいるような素振りを見せへんことや」

はやての言葉にフェイトは首を傾げる。何かを企んでいるから不安になる、というのなら理解できる。しかし、何も企んでいないから不安になる、というのは理解ができない。そんなフェイトの心情を見抜いたようにはやてが、勘やけど、と前置きをして話し始める。

「フェイトちゃんやなのはちゃんには悪いけど、ユキタカ曹長はスパイや。それが私の出した結論や。本人に聞いても否定せえへんかったし、まず間違いない。そんなスパイが今のところなんの動きも見せてへん・・・私はそれが気になるんや」

「スパイじゃないから、とは考えられないの？」

フェイトの言葉にはやては首を振る。

「もちろん、それやったら一番ええよ。ただの杞憂で済んでくれたらそれに越したことはない。けどな、ユキタカ曹長はなかなかの策士や。この前やってスパイを結局うやむやにしてしもうたし、なんだかんだいうて地上本部に煙草を吸いに行くことを認めさした。そんな策士が何も行動を起こせへん、いうのが怖いんや。むちゃくちゃな理屈なんはわかるよ。言ってる私も上手く説明できへんし・・・」

「・・・それでも、私は雪鷹さんを信じる」

淀みのない、強い言葉だった。信じる、と言い切ったフェイトの瞳は威圧的なものではないのに、はやてに何も言わせなかった。はやてが雪鷹を疑う理由を承知した上でフェイトは信じると言い切った。それがどんな結果になろうとも、その全てを背負い、受け止める覚悟があるからこそ、その言葉は強く、その瞳は美しかった。

「ごめんな・・・ユキタカ曹長が二人にとって大切な人やのに、疑ってしもて」

「はやての立場や責任は理解してる。だから、謝らないで。ごめん、はやてを困らせたいわけじゃないんだ。でも・・・」

申し訳なそうな顔を浮かべ、フェイトは呟く。はやてにははやての立場があり、果たさなければならない責任がある。部隊を束ねる者として、その安全を脅かすものから部隊を守ることははやての義務だ。スパイの可能性がある人間を疑うことも当然のことで、たとえ親友を傷つけることになったとしても手を抜いていいことではない。車の中に妙な雰囲気が漂う。お互いに負い目を感じ、会話がそれ以上進まない。居心地が悪いが、二人しかいないのだからどちらかが動かなければ状況は変わらない。しばらくの沈黙の後、フェイトが口を開く。

「はやて、聖王教会のカリム・グラシア少将ってどんな方?」

「あ、えーと・・・カリムはな・・・」

ぎこちないフェイトからの問いかけにはやてが戸惑いながら答える。まるで初対面の人間と話しているかのようなその口調がおかしくなり、どちらからとなく笑みがこぼれた。それをきっかけに車内に漂っていた妙な気まずさもなくなり、自然な会話に変わっていく。

「きっと、フェイトちゃんとも気が合うと思うよ」

「それは楽しみだね」

08『教導開始』（後書き）

地上本部を訪れた雪鷹
久しぶりの一服と新たな出逢い

六課にはない穏やかな時間
しかし、束の間の平穏はすぐに破られた

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
０９『ファーストアラート』

初めての戦場（そら）へ、テイクオフっ！！

Intermission 8.1

Intermission 8.1

高速道路を抜け、ベルカ自治領内に入ってすぐのことだった。目的地である聖王教会まであとわずかというところで不意にはやてが口を開いた。

「ところで、フェイトちゃんはユキタカ曹長のどこに惚れたん？」

その瞬間、フェイトの運転する黒い車がガクンと大きく揺れ、車体が対向車線へはみ出す。フェイトは慌ててハンドルを切って、元に戻す。はやてが顔を横に向けると運転席に座るフェイトは顔を真っ赤に染めてはやてを睨みつけていた。変なことを聞くな、とその目が語っている。しかし、当然のことながらそれで引っ込むはやてではない。

「やっぱり顔？それともあの性格？」

嬉々とした目の輝きに部隊長としての威厳は全く感じられない。年頃の少女が色恋沙汰で盛り上がるのは世の常のこと。もちろん、はやてもその例に漏れることはなかった。

「そ、そんなこと言えるわけないよ」

一方のフェイトは恥ずかしさで顔を真っ赤にし、気を紛らわせる為にハンドルとギュッと握りしめている。

「あぁ、そうやね、十年も付き合いのある親友に一言も教えてくれへんかったんや・・・言えるわけないわな」

急転直下の冷めたく、鋭い響き。拗ねたはやての声がフェイトの胸に突き刺さる。雪鷹のことをはやてに隠していたのは、単純に言う機会がなかったからであり、はやてに何か理由があるわけではない。もちろん、親友と思っていないから言わなかった、なんていうことはあるはずがない。しかし、振り返ってみると三人の中ではやて一人を除け者にしてしまった感は否めない。そこで無言ではやてに睨まれてしまえばもうフェイトに逃れる術はなかった。

「そんなことあるわけないよ・・・」

「ほな、教えてよ」

一瞬にしてはやての双眸がきらきらと輝き始める。それを見たフェイトは諦めの溜息を零した。十九で一つの部隊を背負うだけのことはある。伊達に狸と呼ばれてはいない。雪鷹には劣るものの、はやても腹芸は得意分野なのだ。

「はじめはね、好きだとかそんなんじゃなくて、すごく単純に憧れてたんだ。」

「憧れ？ユキタカ曹長に？」

はやてが意外そうに首を傾げた。

「そうだよ。初めて模擬戦をして完膚ないまでに叩きのめされて・・・悔しいって思うより先に、すごいって思った。あの頃の雪鷹はまだ陸戦魔導師で、魔力値も私より低くて、それなのに私よりずっと

強かった。初めは油断して負けたんだって思ってたんだけど、何度戦っても勝てなくて、全然ダメで・・・追い詰めたと思った次の瞬間にはいつの間にか撃墜されたこともあったかな」

昔を懐かしむようにフェイトが呟く。いつの間にか頬の赤みは引いていて、代わりに笑顔が浮かんでいた。余計な力の抜けた自然な笑顔は美しく、純粋そのものだ。隙あらば更に踏み込もうと考えを巡らしていたはやてには眩し過ぎるくらい、純粋だった。

「なのはと何度も話し合って、作戦を考えて、二人がかりだけど、初めて雪鷹に勝てた時はやっぱり嬉しかったな。でも、次に戦った時は二対一なのに二人ともすぐに撃墜されて・・・それが悔しくて、何度も頼みこんで、毎日模擬戦に付き合ってもらって・・・適当に相手してもよかったはずなのにいつも真剣に私達と向き合ってくれて、戦ってくれて・・・だけど、私達が怪我しないようにって、気をつけてくれたり、アドバイスしてくれたり・・・優しいけど、厳しくて、強かった。そんな雪鷹に私は憧れてた」

今の雪鷹からは想像できないかもしれないけど、と付け加えてフェイトは軽く笑う。

「雪鷹のことが好きだって気付いたのは卒業間近になったま頃。もう雪鷹に会えなくなるんだって思ったら、急に寂しくなって、悲しくなって、切なくて、胸が苦しくなった・・・訓練校で泣いたのはあれが最初で最後だったかな。このままずっとそばにいてくれるんだって思い込んでたんだ。それでなのはに色々相談して、卒業式の前の夜に雪鷹に告白して、約束をして・・・違うな。あれは振られた、か」

そう言ってフェイトは苦笑する。あの当時は本当に雪鷹との約束を

信じていた。しかし、今思い返すと、あれはフェイトを傷つけない為の優しさだったのだと判る。頭のどこかで振られたことを理解しつつも、それでも諦めきれなくて、あの約束を忘れることができなかった。そして、心に決めたのだ。きっと、いつの日か雪鷹に会える機会がある。だから、その日まで諦めない、と。たとえ、馬鹿だ、愚かだと言われようとも、それでも雪鷹への想いを貫き通そうと。

「十年も馬鹿なことしてるって思うでしょ？そう、本当に馬鹿だと思う。でも、後悔はしてないよ。また雪鷹に会えて、約束のことも覚えていてくれた・・・だから、それで十分。返事はまだ聞いてないから、ひょっとしたらひょっとするかもしれないし・・・期待薄だけど」

それに、とフェイトは一旦言葉を切ってにこりと微笑んだ。窓から差し込む日差しのせいなのだろうか、無垢な笑顔はきらきらと輝いていた。

「もし、雪鷹にこの気持ちが受け入れられなくてもいいんだ。一度振られているから、とかそういう理由じゃないよ。雪鷹が私を好きなことと私が雪鷹を好きなことは別のこと。だから、もし雪鷹が他の人を好きになっても・・・悲しくないって言ったら嘘になるけど、それでも、私は祝福するよ。雪鷹がそれで本当に幸せになれるのなら、悲しくても受け入れる」

はっきりと言い切ったその表情は凛として、強く、美しい。

「雪鷹にはいっぱいお世話になった。私となのはのわがままに付き合ってもらったり、無理を言っていっぱい迷惑をかけた。最期の最期に告白して困らせたりもした。でも、何も返せなかったから・・・だから、そのお返しができたら、たぶん、それでいいんじゃないか

な・・・ってあれ?はやて?どうしたの?何か変だよ?」

はやての異変に気付いたフェイトが尋ねるが返答はない。目は虚ろで生気が抜けきってしまっている。

「・・・なんでやろう。この圧倒的な敗北感・・・あかん、フェイトちゃんが純粋過ぎて、自分のこと嫌いになってしまったんかな。こんな身も心も汚れきった人間なんか生きててもしゃあないなぁ・・・このまま教会で葬ってくれるか?」

その言葉を冗談だと信じたかったが、はやての目は本気だった。フェイトは知らないことだが、あまりの人目を憚らない惚気ぶりとフェイトの純粋さにあてられたはやては自己嫌悪の極地に達してしまい、生きる気力を失ってしまったのだった。

「な、なに言ってるの、はやて・・・ほら、もうすぐ着くよ」

「天国に行って生まれ変わったら、今度はもっとまともな人間になれるかな・・・」

フェイトの言葉ははやてに届いていないようだった。その後も自虐的な、あるいは厭世的な呟きと繰り返し、教会に着いてからもはやてを立ち直る気配を見せなかった。言葉では無理だと判断したフェイトは外部からの、具体的には死なない程度の高圧電流をはやてに流すこと、刺激で一旦気絶させて強引に立ち直らせたとか、しなかったとか。真実はフェイトのみが知っている。

09『ファーストアラート』（前書き）

煙草は百害あって一利なし
誰もが口を揃えて言う

百害の部分については否定しない。
それは紛れもない事実だ
だが、煙草の一利は確かに存在する。

それは至福のひととき
それは偶然の出逢い
それは…

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります

09『ファーストアラート』

09『ファーストアラート』

地上本部で勤務している人間がまだ休憩時間でないこともあり、地上本部の喫煙室に人影はまばらだった。雪鷹は空いていたベンチの一つに座り、懐から煙草を取り出す。

「まったく、なんでここまでしてるんだろな・・・」

雪鷹の言葉はどこか愚痴めいていた。煙草がなければ仕事ができないほど雪鷹はヘビースモーカーではない。禁煙しろ、と言われればおそらくは、できた。本来の雪鷹であればあそこではやてと言い争うような真似はせず、大人しく引き下がったはずである。わざわざ地上本部まで来て煙草を吸っているのも売り言葉に買い言葉、半分以上は意地だった。いつもの雪鷹らしからぬ行動である。

「まったく・・・あの部署はどうにも調子が狂う・・・」

吐き出した煙が天井に設置された排煙装置に吸いこまれていく。よくいえば和やかな、悪く言えば奔放な上下関係。部隊の中心となる人間が部隊長である八神はやての人脈に依るもので、隊長陣はプライベートでも仲がいい。しかし、その雰囲気を部隊にまで持ち込み、部隊そのものの雰囲気を決定づけているというのは頂けないが、部隊としては雪鷹が思っていた以上に出来のいい仕上がりになっていた。一見するとただのお友達部隊だが、前線部隊も後方支援部隊も一般部隊以上の人材、設備が整っている。部隊長を筆頭に若年層が

集まり過ぎているといえばその通りなのだが、その辺は許容範囲内だ。今回の雪鷹の任務の一つ、部隊の現状把握と調査は概ね終了した。

「が、突けばいくらでも埃が出てくる・・・訳あり者を寄せ集め部隊だ」

闇の書事件の重要参考人、八神はやてとその固有戦力四名をはじめ、機動六課の人間はどこかしら影のある者ばかりが集まっている。雪鷹の視線が自然と険しくなる。

「爆弾を抱え過ぎだ、八神二佐・・・」

「爆弾がどうかしましたか?」

不意に響いた若い女性の声に雪鷹がふと顔を上げると、目の前に二十台半ばの眼鏡をかけた女性が立っていた。

「いえ・・・お気になさらずに。貴女のような方に話すほどのことではありません」

笑顔で取り繕って返すとその女性も微笑みを返した。怜悧な印象を与えるその視線は美しい。管理局の野暮ったい制服の上からでも一目で判る見事なプロポーション。すらりと伸びた脚は、細くなり過ぎず健康的だ。

「そのわりにはずいぶん悩んでいたようだけど?初めて見る顔ね。ここには四月に異動してきたのかしら?」

「いえ、部隊が禁煙で」

苦笑交じりに雪鷹がそう言うと女性はくすりと笑う。驚きと呆れの混じったその声に他意はない。

「それでわざわざ地上本部まで？ご苦労なことね」

「自慢じゃないけど、部隊長と揉めてしまってね。今更引けなくなったったんだよ」

取りたてて隠すようなことでもないので、雪鷹が包み隠さず打ち明けると女性は意外そうな顔を浮かべた。まるで雪鷹をからかうように、しかし、嫌味に聞こえないその声は真実呆れているようだった。

「男の人ってもっと体裁を取り繕うと思ってたのに・・・貴方のような人は特に」

女性はそう言って魅惑的に微笑む。

「それはどういう意味かな？」

「貴方がとても魅力的な人だということよ。そんな子供っぽい意地でここまで来てるなんて恥ずかしくて普通は人に言わないわよ？しかも、初対面の女性に向かって」

「ありがとう、オーリス・ゲイズ三等陸佐殿」

名前を呼ばれた女性、オーリスは驚いた表情を浮かべる。警戒しているのか声が僅かに硬い。

「貴方、私が誰か知っていたの？」

「名前だけはね。顔を知ったのは今日が初めてだ。想像していたよりずっと美人だね。オーリス三佐はきっとお母さんに似ているんだね」

雪鷹は柔らかな笑みを浮かべる。影のないその笑顔は見る者、特に異性にとっては好印象を与える。それはオーリスも例外ではない。

「ここに階級を持ちこむなんて無粋よ。オーリスでいいわ。母親似、か・・・よく言われるわ。あの父親に似ても似つかぬ器量よしだって。娘としては喜んでいいのか悪いのか。それにしても、名前しか知らないのによく私がオーリスだとわかったわね」

美人だと言われ、恥じらう仕草を見せながらも満更でもない顔を浮かべる。

「階級章と外見でおおよそ見当はつく。魔導師でもないのにその年で三佐の人間なんてそういない。父親は地上本部のトップ、レジアス・ゲイズ中将。その娘であるあなたは中将の秘書官。こんな時間に煙草を吸いに来られるのも納得がいく・・・」

オーリスだと判った根拠を次々に並べていくとオーリスの表情から緊張が抜け、声も幾分柔らかなものになる。

「ご明察ね、名探偵さん。よろしければ名前を教えていただけるかしら？」

「シノブ・ユキタカ曹長です。この春から機動六課で勤務しています」

三佐と曹長。階級差は歴然としているがそれを気にする素振りはどちらにもない。喫煙室、というある種の切り取られた空間に階級を持ちこむような無粋な真似をする二人ではない。それから二人は他愛のない言葉を交わし合った。愚痴と呼ぶにも値しない小言や悩み、職場の話。周りに人がいないせいもあり、初対面とは思えないくらい会話が弾む。

「不思議ね。貴方とは初めて会ったのに、そんな気がしないわ。どうしてかしら」

「僕もだよ。これでも女性と話すのは苦手でね。よく怒らせたりしているんだ。普段はもっと硬くなってるんだけど、不思議だ」

雪鷹の言葉にオーリスは意外そうな顔を浮かべた。

「あら、もっと女性の扱いに慣れてると思ってたけど、人は見かけによらないものね。何人もの女の人を泣かせてきたって顔よ」

「ひどいな。心外だよ、そんな軽薄は男に見られるなんて。まぁ、こんな風に話していると気があると誤解されて、後で泣かれたことはあるけど。でも、少しもそんな素振りなんて見せてないはずだよ？一言も口説いてなんかいない・・・そうだろ？」

少々大袈裟過ぎるリアクションだったが、それさえもオーリスにとっては微笑ましかった。オーリスを知る人間のほとんどはオーリスをレジアス中将の娘としか見ていない。魔導師でもないのに、若くして佐官になったオーリスを親の七光と陰で呼ぶ者は決して少なくない。しかし、そう言わせないだけの努力はしてきた自負と、その地位と責任に相応しい能力も持っている。仮にも地上本部束ねる立場にあり、武闘派の人間であるレジアス中将は娘可愛さで、無

理な人事異動をする人間ではない。三佐という立場はオーリスが自身の実力で掴み取った地位なのだ。雪鷹はオーリスがレジアス中将の娘であることを知りながらも、オーリス自身を見てくれていた。それがオーリスにとって何よりも嬉しかった。

「そう・・・つまり、私は口説くほどの魅力もない女なのね」

そう言って拗ねたような態度を取ってみせるのも普段のオーリスらしからぬ行動だ。異性の気を惹くような態度をとること自体がありえない。オーリスをよく知る人間が見たら、よく似た別人だと思いかねない。

「そんなこと一言も言ってないだろう？ひどいな」

雪鷹は困ったように笑う。

「ごめんなさい。冗談よ。私らしくないわね・・・男の人にこんなことをいうなんて」

「そうなのか？では、珍しいオーリスを見せてくれた幸運に感謝することにしよう。さて、僕はそろそろ仕事に戻るよ。昼からまた新人達の面倒を見なくてはいけなくてね」

「そう・・・」

疲れた笑顔を浮かべながらも、どこか楽しそうな雪鷹とは対照的にオーリスは俯きがちで、どこか寂しげに見えた。そんなオーリスの表情を見た雪鷹はオーリスを見つめながら微笑む。

「そんな顔をするな。心配しなくてもまた会える」

「・・・本当？」

まるで幼子が甘えるような声音。反射的にそう尋ねてしまったオーリスは恥ずかしそうに顔を背けた。とても成人女性とは思えないくらいあどけなさの残る声だった。オーリス自身、自分がこんな声を出せるとは思ってもいなかった。ほとんど無意識の内に出た言葉だっただけになお性質が悪い。普段のオーリスなら適当な言葉で誤魔化すなり、言い繕うなりできたはずだが、それすらできないくらいに動揺していた。きっと今のオーリスの顔は羞恥で真っ赤になっていることだろう。そんな自分を想像してしまい、言葉に窮してしまう。

「そこまで不安ならこれをオーリスに預けるよ」

そう言って雪鷹が懐から取りだしたのは鈍く、いぶし銀に輝くライターだった。片面には今にも飛び立とうとする鷹の意匠が彫られており、一目で一点ものだとわかる。躍動感あふれる彫りと量販品にはない重量感。ブランド銘は刻印されていないが、相応の値が張るであろう代物だ。

「二十歳の祝いにもらった大切なものだ。それを貴女に預ける」

「そんな大切なものなのに・・・私が預かっていいのかしら？」

オーリスは困惑した様子で尋ねる。これはほとんどオーリスのわがままだ。祝いの品、ということは雪鷹にとって大切なもののはずだ。それを事もなげに初対面であるオーリスに預けると雪鷹は言った。嬉しい、と思うと同時に怖くもあった。

「そう、大切なものだ。だから、なくさないでくれ。絶対に」

雪鷹にそう言われて断れるオーリスではない。無言で頷き、口を開こうとした時、雪鷹の顔色が変わった。懐から笑顔は嘘のように消え、険しい表情を浮かべている。

「すまない。レリック絡みの事件が起きた。これから急いで六課に戻らなければならない」

和やかな表情が一変して仕事の顔になる。

「オーリスと話せて楽しかったよ。また、機会があれば是非」

事件を控えた人間とは思えない笑みを浮かべ、そう言い残すと雪鷹は喫煙室から出て行ってしまった。残されたオーリスは渡されたライターを大切そうに胸に抱き、残念そうに呟く。

「気をつけて、の一言も言えなかった・・・」

しかし、自分自身に言い聞かせるように首を横に振り、精一杯の笑みを浮かべた。

「大丈夫よ・・・また、会えるわ。きっと・・・」

・＊・＊・

「こちら、ロングアーチ１３。今、地上本部を出たところだ。状況はどうなっている？」

待機モードのブレイドハートを取り出し、機動六課に通信を入れる。機動六課の通信担当、シャーリーがモニター上に現れ、雪鷹に現況を説明する。

「聖王教会から機動六課に出動要請です。エイリム山間丘陵地帯にてレリックと思われる物品を護送中の山岳リニアレールがガジェットの襲撃を受けている模様。リニアレールはガジェットに乗っ取られて、飛行型や大型の新型ガジェットも多数確認されています。既になのはさんの指揮の下、六課前線メンバーはヘリで現地へ移動中です。フェイトさんもすぐに現場に向かうとのことです」

「了解。すぐに戻る。市街地での飛行許可を頼む」

「割り込み失礼。ユキタカ曹長はそのまま現場に飛んでくれるか？」

突如、はやてがモニターに現れる。背後に映るのは応接間のような豪華な造りで、おそらくは聖王教会の一室だ。背後に映る人影は機動六課の後見人の一人して、聖王教会騎士団を束ねる女性カリム・グラシアで間違いないだろう。何故、と尋ねる合間を与えず、はやては言葉を続けた。

「ロングアーチなのにって思うかもしれへんけど、飛行型のガジェットに対応できるんは現状でフェイトちゃんとユキタカ曹長の二人だけや。怪我してるなのはちゃんに無理させられへん。フェイトちゃんが後れをとるなんてことないと思うけど、数も正確には把握できてへんし、一人では厳しいかもしれへん。そやから、不本意かもしれんけど、ユキタカ曹長は現場へ行ってくれるか？」

「まったく、人遣いの荒い隊長様だ」

バリアジャケットを展開しながら雪鷹が呟く。袖無し燕尾服のようなデザインの上衣にコート。戦いに赴くにはいささか優雅過ぎて、不向きな装いだが、それでも絵になるのは持って生まれた雪鷹の容姿のおかげだ。その表情に浮かんでいるのは面ごとに巻き込まれたことを疎むような、疲れた表情だったが。

「愚痴や不満はあとでいくらでも聞くさかい、ユキタカ曹長、頼むで」

どちらかというとはやての方が不本意な顔をしていると思った雪鷹だったが、それをこの場で言い争うほど非常識な人間ではない。

「心配しなくても隊長にそんなことは言いません。新型ガジェットに関する情報を送ってください。ロングアーチ１３、シノブ・ユキタカ、これより現地に向かう」

雪鷹はそう言って飛び立った。

09『ファーストアラート』（後書き）

襲いくるガジェット群
対峙する雪鷹とフェイト

駆け抜ける閃光が新人達の道を切り開く

覚悟を決めた瞳は何を見据えているのか

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
１０『鷹と雷』

テイク、オフっ！！

１０『鷹と雷』（前書き）

ずっと怖かった。

誰かを傷つけてしまうことが
一人になってしまうことが

だけど、この力は守る為の力
大切な人を傷つけさせない為の力

守りたい。きっと、その想いが力に変わる

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります。

１０『鷹と雷』

１０『鷹と雷』

「ロングアーチ１３、前線部隊を確認。これより合流する」

山岳地帯の上空で前線メンバーを輸送するヘリを視認した雪鷹が連絡を入れる。そのままヘリに近付き、開放されているハッチから中へ入る。それをなのは達前線メンバーが出迎える。

「ロングアーチ１３、前線メンバーと合流。以降は高町一尉の指揮下に入る」

「ユキタカさん・・・どうして？」

ロングアーチなのに、と続く言葉を胸の奥に秘めてティアナが首を傾げる。ロングアーチからは現場管制としてすでにリインが来ている。これ以上ロングアーチの人間が現場にくる理由はないはずだ。

「高町一尉の代わりだ。飛行型のガジェットが確認されている。数も戦力もわからないままハラオウン執務官一人に任せるわけにもいかないし、高町一尉は戦えないからな」

雪鷹の言葉にティアナはなるほど、と頷く。

「お前達、実戦は今日が初めてらしいな？で、新型デバイスをいきなり投入・・・いけるか？」

雪鷹の言葉にスバル達は頷く。緊張しているのかその表情は普段と比べて硬い。待機モードのデバイスを握るその手もわずかに震えている。しかし、それ以上にやる気に満ちたその瞳に変な気負いはない。不安と緊張で押しつぶされるのはよくないが、自信過剰で突っ込んでいくのはもっとひどい。初戦は少し臆病なくらいでちょうどいい。

「大丈夫だよ。私は出られないけど、危ないときはフェイト隊長やリイン、雪鷹がちゃんとフェローするから、おっかなびっくりじゃなくて、思いきりやってみよう！！」

「「「「はいっ！！」」」」

俺も頭数に入っているのか、と雪鷹が念話でぼやくがなのはは笑顔でそれを返す。

（頼りにしているからね）

（・・・まぁ、怪我させたんだからその分は代わりに働くさ）

雪鷹は観念したようにため息を零す。そして、新人達を見渡し、一人不安そうに俯くキャロの前に立った。

「ルシエ陸士、怖いか？」

雪鷹の言葉にキャロは肩をびくんと震わせ、顔を上げる。雪鷹を見つめる瞳は不安そのもので、戦いに赴くものの眼ではなかった。

「い、いえ、そんなこと・・・ない、です」

慌てて否定するが、その声に説得力はない。無理して繕った表情は戦いそのものに怯えているというよりは、別の何かを恐れているといった具合だった。

「怖いなら怖いと言え。無理をするな。」

キャロは何も云わず、雪鷹を見つめ、そして、俯く。小さな肩の上にキャロの使役竜、フリードが飛び乗り、甲高い声で鳴く。キャロは励ましているつもりなのだろう。フリードのおかげでキャロの表情がわずかに安らぐ。そっと小さな手を伸ばし、フリードを撫でる。

「できないことをできないと認めるのは難しいことだ。特にお前のような若い魔導師はよく無茶をする。それで人生を棒に振った馬鹿を何人も知っている。その馬鹿の巻き添えになった奴もな」

雪鷹はそういうとキャロを、そしてティアナやなのは達を見渡し、もう一度キャロに視線を戻した。決して励ましているのではない。むしろ、新人達の不安を煽るような言葉ばかりが並んでいる。しかし、そこには何の悪意もなかった。雪鷹に対し、ある種の対抗意識を持っていたスバルやティアナも真剣に雪鷹を見つめていた。普段とは違う雰囲気に誰もが押し黙り、その言葉に耳を傾けていた。

「竜召喚でそいつが暴走しないか不安なのだろう?」

フリードを見ながら話す雪鷹にキャロは小さく頷く。何故判ったのだろう、と疑問に思うことはなかった。まるで、何もかもを見通すかのような雪鷹の瞳を見れば、キャロの心を見透かすくらいわけないことに違いないのだと確信できた。

「できないのなら、それでいい。朝に言ったことは忘れて、今日は

補助に徹しろ。自信がないのなら、無理をすることはない。もちろん、それでも無理しないといけないこともある。だから、そのときだけは、迷わず無理をしろ」

「えっ・・・？」

キャロは戸惑った表情を浮かべて雪鷹を見つめ返す。無理をするな、と言いながら、無理をしろ、という雪鷹の言葉の意味が理解できなかったからだ。

「すまない。言い方が悪かったな。無理をしろ、というのはできることは全部しろということだ。そうしたら、あのときああしておけば、と後悔することはない。まぁ、なんであんなことしてしまったんだって後悔するかもしれんが。同じ後悔するなら、俺は前者を選ぶ。真似しろと言うつもりはない。退くと逃げるは別物だ。ここでお前が退いても誰もお前を責めはしない・・・俺がさせない」

俺がさせない。キャロは雪鷹の言葉を噛みしめるように眼を閉じ、自分自身に問いかける。何の為にここにいるのか。何の為の力なのか。稀少能力と呼ばれるだけあって、竜召喚の力は強力だ。単純な火力だけならばエース級の魔導師に匹敵する。上手く制御できなければ、敵だけではなく、味方をも傷つけてしまう。事実、使役竜の制御に失敗して大勢の人間を怪我させてしまった過去がキャロにはある。しかし、それに怯えて、ここで立ち止まっていては永遠に先には進めない。ずっと変わらないままだ。

「キャロ、大丈夫。そんなに緊張しなくても。一人じゃないからピンチの時は助けあえる。キャロの魔法は、みんなを守ってあげられる優しくて強い力なんだから、ね？」

なのはの言葉に後押しさえ、キャロはゆっくりと目を開き、周りを見渡した。出逢ってまだ間もないが、ここいるのはキャロにとってかけがえのない人達だ。誰かを守りたい、と思ったのは、きっと初めてのことだった。

（あのとき、フェイトさんは私に言ってくれた、私が何をしたいのか。決めるのは、私なんだ・・・）

小さく、しかし、はっきりと頷いた。幼さの残る瞳から覚悟を決めた者の瞳へと変わる。それを見た雪鷹の表情が笑顔に変わる。少年のような無邪気なで悪戯っぽい、しかし、老獪なしたたかさを含んだ笑みだった。

「危ないときはフォローしてやる。まだ若いんだ。とりあえずがむしゃらに突き進んでみて、後の面倒なことはなのは隊長やフェイト隊長に押し付けるくらいでいい。若さゆえの特権は使えるうちに使っておけ」

「はい」

「そうそう、キャロ、もし何かあっても後のことは私やフェイトちゃんが・・・って雪鷹は!?」

それとなく事後の責任をなのはとフェイトに押し付けた雪鷹の発言になのはが表情を一変させる。しかし、雪鷹は笑ったまま取り合おうとしない。

「直属でないとはいえ、俺の上司なんだ。当然だろう?ここで一番階級が高いのは誰だ、高町一等空尉殿?さて、それじゃ、俺はそろそろ出る。後は任せたぞ、なのは」

そう言い残して雪鷹は輸送ヘリから飛び立ってしまった。残されたなのは達は呆然と立ち尽くしかない。

「もう・・・いつも強引なんだから・・・」

雪鷹を見送りながらなのはが呟く。しかし、その表情はどこか嬉しそうな笑みを浮かべている。普段のなのはからは想像できない、年相応の女の子の笑顔だった。ある意味、この状況に最も相応しくない表情であったが、すぐにそれを振り払い、四人を見渡した。

「降下ポイントまではもうすぐ・・・雪鷹もフェイト隊長も頑張ってくれてる。だから、みんなも頑張ってズバっとやっつけちゃおう！！」

「「「「はいっ！！」」」」

・＊・＊・

輸送ヘリから飛び立った雪鷹の視界が新型ガジェットの群れを捕らえる。総数は４０から５０。報告にあった通り、翼を持った飛行型だ。新型の機体であるなら性能は低く見積もっても?型と同程度かそれ以上のものがあると考えるのが妥当である。

「こちら、ロングアーチ１３、目標を補足。これより迎撃する」

雪鷹は愛機ブレイドハートを起動させ、フリーズランサーを放つ準備をする。朝の訓練で新人達に放った数の倍を超える氷の塊が雪鷹の周りを取り囲む。魔力ではなく、氷の塊を撃ち出すフリーズランサーはＡＭＦの影響を受けないため、対ガジェットに非常に効果があるのだ。

「ユキタカ曹長、あと数分でフェイト隊長がそちらに到着します」

「・・・あれか？」

遠くの空から金色に輝く光が一直線にこちらへ飛んでくる。軍服調の黒いバリアジャケットに白いマントをはためかせるその姿はまさしく、ライトニング分隊隊長、フェイト・Ｔ・ハラオウンだった。雪鷹はフェイトの姿を確認するとすぐに念話で指示を出す。

（フェイトはそのままガジェットの方へむかってくれ。こちらから合図の後、敵へ支援射撃を行う。俺もすぐに行く）

（・・・了解）

フェイトは進路をやや右に逸らせ、ガジェットの群れへと向かう。その軌跡を目で追いながら雪鷹は攻撃のタイミングを見定める。早く撃ち過ぎれば、フェイトの攻撃の支援にはならず効果は半減してしまう。逆に遅すぎれば、フェイトの身が危険に晒される。ガジェットとフェイトの位置関係、飛行速度、その他諸々を掛け合わせ、雪鷹はその一瞬を待つ。フェイトがデバイスを鎌状のハーケンフォームに変形させ、振りかぶる。攻撃する、と見せかけたその瞬間、フェイトの進路を変え、垂直に急上昇する。

「フリーズランサー、アサルトシフト・・・ファイアっ！！」

環状魔法陣から氷の塊が次々と撃ちだされていく。操作性を度外視している分、単純な弾速はフェイトのプラズマランサーを遙かに凌いでいる。常人にはその軌跡を目で追うことは不可能に等しい。勢いよく撃ちだされた氷の槍はＡＭＦを易々と貫き、機体に突き刺さり、爆炎が上がる。しかし、射線上にないガジェットはほとんど無傷のままだで、体勢を立て直す為に辺りの空域に散開しようとする。

「今だっ！！いけっ！！」

雪鷹の合図と共にフェイトは一転、急降下してガジェットを強襲する。稲妻のほとばしる魔力刃がＡＭＦ諸共、ガジェットの機体を切り裂いていく。ガジェットとガジェットの隙間を縫うようにフェイトは飛び交い、着実にガジェットを墜としていく。爆音と共にフェイトの体が煙に包まれたが、その煙を斬り裂いてフェイトが飛び出してくる。

「まったく、相変わらずだな・・・一人では危ないかと思ったが、余計な心配だったようだな」

支援射撃の後、すぐに駆けつけた雪鷹はフェイトの一騎当千の戦いぶりを目の前にして半ば呆れたように笑う。ＡＭＦの影響を受けていないかのような動きと攻撃には雪鷹には到底真似のできないものだ。機動力が強化されているはずの飛行型を翻弄するその機動性は化け物染みているとしか言いようがない。フェイト一人でも十二分にガジェットを殲滅できたに違いない、と雪鷹は確信した。

「ありがとう、心配してくれて。でも、こうして雪鷹と同じ空は久しぶりだ・・・」

フェイトの表情に喜びの笑みが浮かぶ。それはこの戦場において不謹慎なくらい、綺麗な笑顔だった。

「笑ってないでさっさと終わらせるぞ？」

セカンドモードに変形させたブレイドハートで雪鷹が残ったガジェットを斬り捨てながらフェイトに指示を出す。対魔導師戦に特化したセカンドフォームの最大の特徴はその機構のほとんどを費やした『魔法を斬る』というシステムだ。ＡＭＦのように魔力結合を阻害するのではなく、魔力結合を文字通り、断ちきって無効化するこのシステムは雪鷹の前所属である情報部が独自に開発し、情報一課が試験運用していた重要な機密情報だ。本来なら情報部以外の人間に見せてはいけないのだが、既に知られてしまった以上、雪鷹は使い惜しむような真似はしない。デバイスの内部に機構が組み込まれているため、ＡＭＦ状況下でもその影響を全く受けないこのシステムは当然、ガジェットにも有効なのだ

「うん、ハーケンスラッシュっ！！」

フェイトの一閃がガジェットを切り裂く。対ＡＭＦ仕様に強化された魔力刃の切れ味は凄まじく、ガジェットの装甲をいとも容易く切断する。斬られたガジェット群は一瞬にして爆炎に包まれた。戦場を駆るその姿はまさに死神。ＡＭＦをものともしないフェイトの機動と攻撃に負けじと雪鷹の黒刀を振るう。ものの十数分で何十機ものガジェットを殲滅した二人は辺りに機影がないことを確認してから一息ついて本部に報告を入れる。

「こちらライトニング０１、飛行型のガジェットは全機破壊しました」

しかし、返ってきたのは焦るなのはの声だった。

「フェイトちゃん、すぐにリニアレールの支援に向かって。ライトニング０３と０４が新型の大型ガジェットに遭遇して、戦闘中・・・だけど、思ってたよりＡＭＦの範囲が広くて・・・数も一機だけじゃなくて」

「エリオとキャロが！？」

フェイトの頬を嫌な汗が伝う。対ガジェット戦の訓練を受けているとはいえ、新人達はこれが初めての実戦だ。決められたことをこなしていく訓練とは違う。何かしらのイレギュラーが発生し、それに臨機応変に対応していかなければならない。そのための経験があの四人には、特にエリオとキャロの二人には、圧倒的に不足しているのだ。ＡＭＦで魔法が使えない状況に追い込まれて、普段通りの動きが出来る可能性は低い。魔導師としては優秀かもしれないが、それでもまだ十歳の子供なのだ。しかし、ここからリニアレールまではフェイトが最速で飛んでも数分はかかる。それまで二人が持ちこたえられる保障はどこにもないのだ。

「二人がどうかしたのか？」

「もう一つの新型と交戦中なんだけど、ちょっと手こずってるみたい・・・大型で、しかも一機だけじゃないみたい」

平静を装うが、唇の震えが止まらない。それを見た雪鷹は軽く舌打ちをして、すぐに上昇を始めた。

「ゆ、雪鷹、一体なんのつもり！？」

あっという間にフェイトの上空まで飛び上がった雪鷹にフェイトは驚きと戸惑いの表情を浮かべるが、雪鷹はそれを無視して、フリーズランサーを発動する。二重の環状魔法陣に包まれた氷の槍は普段のそれの数倍の魔力の込められた特別製だ。

「決まっている、あいつらの支援だ。本部、こちらロングアーチ13、リニアレールの現在地と移動速度、路線図とここら一帯の風向きを至急こっちに送ってくれ・・・訂正、風向きだけでいい。リニアレール上で交戦する二人を確認した。これより、長距離支援射撃を行う」

「し、支援射撃って・・・ユキタカ曹長、ガジェットのすぐそばには二人がいるんですよ。もし外れたら・・・」

通信越しにシャーリーの焦った声がフェイトにも聞こえてくる。それを聞いたフェイトはすぐに雪鷹の隣まで上昇する。雪鷹の言う通り、前方にはリニアレール上で三機の大型ガジェットと交戦する二人の姿が確認できた。しかし、ガジェットはもちろん、二人の姿は点に等しく、ここから狙えない。目測でもここからリニアレールまで数キロはある。距離だけならばあるいは、なのは級の技術と魔力を持った魔導師の砲撃魔法ならかろうじて届く可能性のある距離だが、フェイトの知る限り、雪鷹は砲撃魔法を使えない。事実、雪鷹の目の前には氷の槍が浮かんでいるだけだ。

「まさか・・・本気でここから狙うつもりなの？」

フェイトの顔が青ざめていく。単純に届かせることだけなら、あるいはできるかもしれない。砲撃魔法級のエネルギーを以てフリーズランサーを撃ちだせば理屈上は可能かもしれない。しかし、正確にガジェットだけを撃ち抜くことは不可能に等しい。ミドルレンジで

は気にならない小さな誤差でも長距離射撃では命取りになることなど珍しくはない。それらの計算をするだけでもデバイスに大きな負荷がかかる上に、術の制御まで任せるとなると最新のデバイスでも命中率はほとんどないと言っていい。当てられるはずがない。

「気が散る。黙っていろ」

外れただけならまだいい。もし、万が一、ガジェットではなくエリオやキャロに当たることがあったら、そう思うとフェイトの顔から血の気が引いていく。雪鷹のフリーズランサーは魔力変換した氷の塊を加速させて放つ物質加速型射撃魔法だ。純粋な物理運動ゆえＡＭＦの影響をほとんど受けないが、それゆえ殺傷傷能力も極めて高いのが特徴だ。雪鷹が本気を出せば、新人魔導師のバリアジャケットなどないに等しい。当たり所が悪ければ二人の命が危うい。

「やめて。もし二人に当たったら・・・」

「その時はその時だ。現場に出てきた以上、大人も子供も関係ない・・・」

雪鷹は冷たく言い放つ。その目はまるで氷のようで、何も考えていないかのように静かで、穏やかで、そして、暗かった。いままでフェイトが何度も見てきた目だ。犯罪者を、しかも残虐な殺人犯がおとなしく逮捕された時、犯人はたいていこんな目をしていた。人の心を抉るように鋭く、残酷で、無慈悲な目だ。人殺しの目だ。

「雪・・・鷹、どうしてそんな目をしてるの・・・」

「言ったはずだ、十年色々あったって。こちら、ロングアーチ１３、ライトニング０３、ならびに０４に告げる。これより、支援射撃を

行う。死にたくなければその場から絶対動くな」

雪鷹はフェイトを見ようとせず、ただ正面だけを見据えて、そう呟いた。

・＊・＊・

時はわずかに遡る。

雪鷹達が空戦ガジェット達を足止めしてくれたおかげで、新人四人は無事にリニアレール上に降下することができた。スターズ分隊とライトニング分隊に別れ、リニアレールの両端から中心部を目指しているところだった。初めての実戦にも関わらず、順調に進んでいくライトニング分隊の二人の前に現れたのが身の丈をはるかに超える大型の球状ガジェットだった。

「新型・・・」

大型のガジェットがいると事前に聞いていたが、こうして目の前にするとその圧迫感に押しつぶされそうになる。しかし、ここで退くようなエリオではない。ようやく手に馴染んできた愛機、ストラーダを握る両手に力が入る。

「僕が行くっ！！」

ストラーダを振りかざし、エリオが新型ガジェットへ突撃する。ストラーダの先端がガジェットのアームと拮抗する。生半可な強化魔法を施しただけ突撃ではその巨体はびくともしない。装甲の厚さはその大きさに比例しているらしく、小さな傷が一つついただけだ。

「か、かたい・・・うわぁっ！！」

単純なパワーでもガジェットの方が勝っている。体格でも劣るエリオはいとも簡単に弾かれ、宙に舞う。体勢を立て直し、リニアレールの上に着地するがすぐにアームがエリオに襲いかかる。

「エリオくん、あぶないっ！！」

キャロの声に反応して、エリオはその攻撃を正面からストラーダで受け止める。しかし、力負けしているエリオはじりじりと端へ押し寄られていく。

「フリードっ、ブラストフレアっ！！」

キャロの足元に魔法陣が展開され、フリードに魔力が集まる。橙炎が集束し、ガジェットのアームへと放たれる。攻撃の衝撃で生まれた隙に乗じてエリオがその場から離れ、ガジェットと距離を取る。訓練で戦った疑似ガジェットとはまるで違う圧倒的な存在感とパワーが二人の不安と恐怖を駆り立てる。ガジェットのアームが二人に迫る。

「キャロ、もう一度フリードであいつを攻撃して。その隙に僕が・・・」

訓練で何度も繰り返した連携だ。しかし、その時の相手は疑似ガジ

ェットやなのは、雪鷹だった。実戦で使うのは今回が初めてだ。普段とは違う本物の、しかも新型のガジェット相手にどこまで通じるかは未知数だ。エリオ単体で破れる装甲ではないことは二人とも承知している。あの装甲で打ち破るにはキャロの補助が必要不可欠だ。しかし、キャロが失敗したらエリオに命が危なくなる。そう思うとキャロの決心を惑わせる。あの大型ガジェットを倒すにはそれしか手段がない、それはキャロも承知している。

「だいじょうぶ、キャロならきっとできる」

エリオの言葉に迷いを振り払ってキャロが元気に頷く。キャロの足元に魔法陣が広がり、優しく、力強い光がキャロを、そして、エリオを包み込んでいく。

「・・・我が乞うは、清銀の剣。若き槍騎士の刃に、祝福の光を。猛きその身に、力を与える祈りの光を。いくよ、エリオくん」

「了解、キャロ」

「ツインブースト、スラッシュアンドストライクっ!!フリード、お願いっ!!」

エリオにブースト魔法をかけると同時に使役竜に魔力を付与する。先程よりも一回り大きな炎の塊にガジェットに向かって放たれ、炸裂する。ガジェットが怯んだその隙にエリオがカートリッジを撃ちだし、一気にガジェットとの距離を詰めて突撃する。

「一閃必中!!メッサー・アングリフ!!」

迸る電撃を帯びた魔力刃がＡＭＦと一瞬拮抗し、そのままガジェッ

トの装甲を突き破る。そして、魔力刃を突き刺したままエリオはストラーダを上空へ振るう。魔力刃に両断されたガジェットはそのまま爆散した。

「「やったっ！！」」

二人が完成をあげる。しかし、通信からシャーリーの悲鳴が響く。

「二人とも気をつけて。ガジェットはまだ・・・」

その声をかき消すように爆炎の中からアームが伸びてきて二人を襲う。

「うあっ！！」

「きゃっ！！」

寸前に反応してガジェットからの直撃はなんとか避けられたものの、二人の小さな体では受け止めきれずに二人の体が吹き飛ぶ。

「ど、どうして・・・」

いくら新型とはいえ真っ二つに切り裂かれて無事なはずがない。それなのに。予想外の攻撃。二人は現状が把握できずに困惑するしかない。煙が晴れ、その理由を知った二人が愕然とした。真っ二つに切り裂かれた大型ガジェットの後ろには二体の大型ガジェットが並んでいた。

「一体じゃ、なかった・・・」

二人の顔に動揺が広がる。二人の実力では連携して大型ガジェット一体の相手で精一杯なのが現状だ。二体を同時に、しかも一戦交えた直後に、など今の二人にはとてもではないができない。

「二人とも無茶はしないで・・・今、フェイト隊長達に応援を頼んだから、だから今は・・・」

シャーリーの通信を遮るようにガジェットのアームが二人に襲いかかる。一本目、二本目はストラーダで受け止められたエリオだったが、三本目のアームが隙間を縫ってエリオの体を正面から捕え、突き飛ばす。

「うわぁ!!」

「エリオくん!!」

キャロの悲鳴が響き、次の瞬間にはキャロの体もガジェットのアームで突き飛ばされた。

「キャロ、だい、じょうぶ?」

エリオが立ちあがり、キャロのもとへ駆け寄る。

「だいじょうぶ・・・なんとか」

キャロも身を起こし、エリオを並んで二体のガジェットと対峙する。しかし、何も策が浮かばない。もう一度ブースト魔法をかけようにも、二人の疲労は小さくない。負担も大きい。リスクは決して小さなものではない。しかし、単体であの装甲を貫けるだけの攻撃力を二人は持っていない。ただ一つ、キャロの使役竜、フリードリヒの

真の姿を解放するという切り札を除けば。

――だけど、もし制御に失敗したら・・・

最悪の光景がキャロの脳裏を過る。かつて、フリードが暴走したときの忘れられない記憶。正確な数字は聞かせられていないが、死者こそでなかったが軽傷の者も含めると研究所の職員の負傷者の数は数十人に及んだ、と後に教えられた。もしも同じことが起きればガジェットを破壊できるかもしれないが、レリックはもちろん、一緒に戦ってくれているエリオや他の二人まで巻き込んでしまいかねない。それだけはどうしても避けたかった。

「こちら、ロングアーチ１３、ライトニング０３、ならびに０４に告げる。これより、支援射撃を行う。死にたくなければその場から絶対動くな」

不意に雪鷹の声が二人の頭に響いた。その声に驚いて二人が辺りを見渡すが雪鷹らしき人影はない。

「ユキタカさん!?どこから?」

「お前達の居る場所から約二キロ北だ。長距離射撃だ。絶対に動くなよ」

「「は、はい!!」」

長距離射撃の難しさを知る二人はすぐに頷く。そして、次の瞬間、二人の頭上を青白い光が駆け抜けた。それが何なのかを確認するよりもはやく目の前のガジェットが爆散する。雪鷹の放った射撃、おそらくはフリーズランサーだろう。驚くよりも先に二人の体が凍り

ついた。動くな、と言われて数秒も間もない射撃。すごい、と思うよりも恐ろしかった。

「弾着確認。目標はどうだ?」

雪鷹の念話が響く。

「あ、えっと・・・一体は破壊。もう一体はほぼ無傷・・・」

「そうか、あと一体ならしばらく持ちこたえられるだろう?今、フェイトがそっちに向かっている。それまで好きにしろ。それで、もう無理で死にそうになったらすぐに連絡しろ。苦しむことなく一瞬であの世に送ってやる」

かすかに笑いを含んだ声音でそう言い残して、雪鷹は一方的に念話を切ってしまった。残された二人は戸惑いを隠せないまま、もう一体のガジェットと対峙する。爆発のおかげで装甲が少し焦げ付いているがほとんど傷がない。状況は緊迫したままだ。それなのに、雪鷹の声の調子はまるでいつもと同じだった。それを思い出して二人は顔を見合わせ、苦笑する。

「それまで好きにしろって、ユキタカ曹長・・・」

「ちょっと無責任過ぎます」

急に体が楽になったような気がした。無駄な力が抜けた。状況は何一つ好転していないのに、明確な理由は何一つないのに、なんとかなりそうな予感が二人の中に芽生え、両手に力がこもる。

「倒すよ、キャロっ!!」

「うん、エリオくんっ！！」

絶望を漂わせていた二人の瞳に再び炎が宿った。

「エリオくん、少しだけあのガジェットをおさえてて・・・」

「・・・わかった」

覚悟を決めたキャロの瞳を見てエリオは頷き、ストラーダをガジェットに向ける。体中が軋んでいるように痛むが今は全て無視する。今、エリオがするべきことはただ一つ。キャロの為に少しでも長く時間を確保することだ。今の状況を打破できる二人に残されたたったひとつの切り札。キャロがそれを使うと決めたのだ。詳しい事情は知らないが、キャロがその力を使いたがっていないことにはエリオも薄々気付いていた。そのキャロが覚悟を決めたのだ。

「絶対に邪魔はさせない！！うぉお！！」

ストラーダとガジェットのアームが拮抗し、その動きを封じる。それを見たキャロはそっと手を伸ばし、フリードの頭を撫でた。優しい、しかし、覚悟を決めた者の声でキャロはフリードに告げる。

「フリード、不自由な思いをさせててごめん。私、ちゃんと制御するから・・・いくよ、竜魂召喚」

キャロのブーストデバイス、ケリュケイオンが眩しいほどに輝き始めた。足元には一際大きな召喚魔法陣が広がり、淡い桃色の環状魔法陣が幾重にも重なってフリードの体を包み込んでいく。巨大な力の躍動は大気を震わせ、その存在感を静かに告げる。

「蒼穹を走る白き閃光・・・我が翼となり、天を翔けよ」

魔法陣から飛び出た両翼は普段のフリードからは想像もできないくらい大きく、力強い。しかし、これがフリードの本当の姿なのだ。巨大過ぎる力故に、厳重に封印されていた、白銀の飛竜の本当の力。

「来よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚!!」

その巨大な翼を羽ばたかせ、飛竜の鳴き声が渓谷に響く。堂々たるその白き体躯は見る者を圧倒する。真紅に燃えるその瞳にチビ竜の面影は全くない。竜を天の御使いだと崇める理由がよく判る。これは人智を超えた存在なのだ。内に秘めた魔力も躍動感も、生命力も人のそれをはるかに凌いでいる。真の姿を解放したフリードの背に乗り、キャロは天を翔けた。

「エリオくん、こっちはだいじょうぶ」

キャロのその言葉にエリオが振り返る。しかし、その隙を突かれてガジェットのアームがエリオを突き飛ばし、その体が宙を舞う。

「エリオくん、あぶないっ!!」

キャロがフリードの手綱を引いて、そのフォローに向かう。リニアレールから放り出されたエリオを無事に空中で受け止める。

「エリオくん、だいじょうぶ?」

「ありがとう、だいじょうぶだよ、キャロ。これが・・・フリードの本当の姿・・・すごい」

フリードの真の姿を目の当たりにしてエリオは驚きの表情を浮かべている。キャロもそれに同意するように頷く。

「今まで、制御できなかった。だけど、今ならできる・・・どうしてかな」

「それはきっと不思議でもなんでもないよ。守りたい人がいて、キャロに守る力があるなら、きっと・・・」

エリオの言葉を噛みしめるようにキャロはもう一度頷いた。

「うん、いくよ、フリード・・・ブラストレイっ！！」

キャロの力がフリードに力を与え、巨大な火球を作りだす。煌々と輝くその焔火がどれほどの力を秘めているのかを肌で感じ取ったエリオはキャロがこの力を恐れていた理由がなんとなくわかった気がした。そして、キャロが巫女と呼ばれていた理由も。

「ファイアっ！！」

フリードの放った焔がガジェットを包み込み、焼き尽くす。あんなに分厚く、頑強な装甲もこの竜焔の前ではただの鉄屑に等しかった。わずかばかりの抵抗の後、ガジェットは爆散した。人智を超えた力を使役する者が並みの人間であるはずがない。その力を従え、使役するほどの強い意志がなければ、扱うことができないのだ。守りたい。キャロのその意志がフリードを従えたのだ。

「「やった」」

ガジェットが破壊されたことを確認すると二人が歓声をあげる。ようやくリニアレールに辿りついたフェイトは無事な二人の姿を見て、安堵のため息を零してから隣に立つ雪鷹を睨みつけた。

「雪鷹、もう絶対にこんな危ないことはしないで。今回はたまたま二人に当たらなかったからよかったけど、もし二人に当たったらどうするつもりだったの！？」

「たまたま、ね・・・随分と見くびられたものだな？フェイトにできないからって俺もできないなんて決め付けるな。。ガジェットだけを撃ち抜ける自信があったから撃ったに決まってるだろ？もちろん、何かの拍子で外す可能性はある。それでも、あいつらに当てるかよ」

雪鷹は不敵に笑う。先程の氷のように冷たい微笑とはまた別の自信に満ちた笑顔だった。

「だ、だって・・・雪鷹があんなこと言うから・・・」

フェイトがそう呟いて俯く。

「あんなこと？」

「その時はその時だ、とか。大人も子供も関係ない、とか。だから、私、不安になって・・・」

特別意識して言った言葉ではないが、その言葉がよほど不安だったらしい。雪鷹は申し訳なさそうに苦笑する。

「まぁ、心配する理由はわからなくはない。おまえはあいつらの保

護者だからな。身内を犠牲にするほど重要な任務じゃない。いざとなればあいつらを撤退させれば済むことだ。そこまでするか。それより、はやくあいつらの所にいってやれ、お母さん」

「う、うん・・・って、お母さんじゃない！！」

フェイトが顔を真っ赤にして抗議する。まだ十九の若い身空である。エリオやキャロの保護者であるが、母親と呼ばれる年齢ではない。しかし、雪鷹は面白そうに笑うだけだ。

「その言葉、二人の前では絶対に言うなよ？傷付くぞ」

「うっ・・・」

確かに二人の前で言うべきではないだろう。それを承知しているフェイトは思わず顔をしかめる。その隙をついて雪鷹はその場から離脱する。

「あっ、雪鷹、どこに・・・」

「なのはに報告だ。本来は上官であるお前の仕事なんだが・・・お前ははやくあいつらのとこに行ってやれ。そして、いっぱい褒めてやれ。あいつらに足らないもの経験と自信。経験は一朝一夕では身につかないが、自信はすぐにつく。それが明日の強さに繋がる」

雪鷹はそう言い残すとなのはの乗るヘリまで真っ直ぐに飛んで行った。

こうして機動六課新人達の初出動は無事に成功を収めて終わった。

１０『鷹と雷』（後書き）

前線メンバーや隊長は聖王教会からの依頼で第９７管理外世界『地球』へと向かってしまった。

居残り組の雪鷹は今日も地上本部へ

それは束の間の羽根休め

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
１１『優しい止まり木』

それは少女達の知らない大人の世界

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　１０．１

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　１０．１

「そう言えばユキタカ曹長、どうしてコールサインが１３なんですか？」

帰りのヘリの中で思い出したようにスバルが雪鷹に尋ねる。そう言えばそうだ、と他のＦＷ陣も雪鷹を見つめる。本来、コールサインは階級順になる為、曹長である雪鷹はもっと若い番号が付与されるはずである。それにも関わらず１３という番号なのは確かに疑問だ。

「どうしてもなにも１３だって言われたからだ。そもそもコールサインの番号くらいどうでもいいだろう？」

呆れたように雪鷹は笑う。真実、興味のなさそうな雪鷹の態度にスバルは何も言えなくなる。しかし、それで話は収まらない。

「でも、確かにちょっとおかしいね。はやてのミスかな？なのははどう思う？」

「うーん、こんな単純なミスはしないと思うけど・・・」

「はやてちゃんがそんなミスするはずありません」

隊長陣二人とリインはお互いに顔を見合わせ、首を傾げている。今まで気にしなかったが確かに妙といえば妙な話だ。親友を疑いたくはないが、はやては雪鷹を危険視している。出来れば機動六課から

排除したいというのがはやての本音だろう。その一手として、嫌がらせの意味を込めて雪鷹のコールサインを13にした可能性も否定しきれない。

「急遽、ここの部隊に出向が決まったからそれぐらいのミスの一つや二つあるだろう？」

雪鷹の言葉に一同はなるほどと頷く。確かに雪鷹の機動六課出向は急に決まったことだ。そのせいで対応が間に合わなかった可能性は十分にある。手続きの煩わしさを考えると後から付け加える方が数段楽になる。

「まぁ、意図的にしたならここの部隊長はなかなかいい趣味をしてると言えるが」

そう呟いて雪鷹は笑った。苦笑とも皮肉とも受け取れるその笑みに一同な首を傾げる。13という数字が何故いい趣味なのか。その理由を理解できるものは誰もいない。

「ユキタカさん、それはどういう・・・？」

ティアナが尋ねると雪鷹は窓の遠くを見つめて呟いた。

「招かれざる客、ということだ」

その意味をはかりかねた一同はもう一度首を傾げた。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　１０．２

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　１０．２

「これがシャーリーにまとめてもらった今日の事件でのユキタカ曹長の戦闘データや。シグナム、ヴィータ、二人はどう思う？」

部隊長室ではやてのその守護騎士、シグナムとヴィータの三名は今日の雪鷹の戦闘データを見ていた。

「魔力値はＢ＋からＡ前後。奴の魔導師ランクが空戦Ａ＋であることを考えると少々手を抜いて戦っていた、というところか」

「あんだけ自分で機密、機密って言ってたセカンドモードとやらも使い惜しみしてねぇし・・・けど、別に気になるとこはなんもねぇな」

戦闘データを見ながらシグナムとヴィータがそれぞれの意見を述べる。データを見る限り可もなく不可もない、と言ったところだ。と言ったところだ。実戦に場慣れしている雪鷹なら少々力を抜いて戦うことがあってもおかしくはない。ガジェット対策にＡＭＦを切り裂くことのできるセカンドモードを使うことも納得できる。特別奇妙な点は見当たらない。

「主はやて、何か気になることでも？」

「気になるいうほどのことでもないけど・・・ちょっとこれ見てもらえるか？」

そう言ってはやてはモニターに今日の戦闘映像を出す。フリーズランサーによる斉射の後、セカンドモードを使用しての切り込み突撃。普通の魔導師なら切り込みはしないが、雪鷹のような剣をベースにしたデバイスを持っているならそれも珍しいことではない。

「なるほど・・・いい動きだ」

「あぁ、ただの優男かと思ってたけど、なのはに勝ったてのは伊達じゃねぇみたいだな」

ＡＭＦを展開しながら飛び交うガジェット群の中でも雪鷹の動きに衰えはない。巧みにガジェットの隙間を縫い、着実に一機ずつ落としていく。フェイトのような目を引くような派手さや激しさはないが、安定した手本となる戦い方だ。隙のない構えから繰り出される斬撃は魔導師というよりもベルカの騎士を思わせる。

「機会があれば手合わせを願いたいものだな」

映像を見ながらシグナムが呟く。

「そんなこと言ってまた口説かれても知らねぇぞ？」

「う、うるさい・・・」

速く忘れたい恥ずかしい思い出をヴィータに掘り起こされ、シグナムの頬が薄く染まる。そんな二人のやりとりをはやては軽く咳払いして止めさせると一旦映像を止めた。

「それはまたの機会に、いうことで・・・二人に見てほしかったんはここからや」

そこはちょうど雪鷹がエリオとキャロを助けるために長距離射撃を行うシーンだった。セカンドモードからファーストモードに変形したデバイスで氷の塊を生成し、照準を合わせている。氷の塊を囲むように展開された環状魔法陣の数がいつもより多いが特別何かがおかしいということはない。

「はやて、これのどこがおかしいんだ？」

「ユキタカ曹長のいる場所からターゲットである大型ガジェットのいる位置までの距離はおよそ2．2キロ。遮蔽物はないけど、風速は北西に強めの風が吹いててお世辞にも射撃にぴったりとは言えん状況や。それを一発で撃ち抜くなんて芸当・・・射撃が専門の魔導師やってそう何人もできへん」

はやての言葉に二人は黙って頷く。

「あのな・・・これはあくまでも私の仮説なんやけど、ユキタカ曹長の魔導師ランク、本当はもっと上で、実力を隠してるんとちゃうかなって思うんやけど・・・どうやろ？」

はやての言葉に二人は黙りこむ。実力を隠すことは決して難しいことではない。試験で手を抜けばいくらでも低い魔導師ランクを手にいれられる。しかし、魔導師ランクは昇進や給与に関わってくるため、わざわざ低い魔導師ランクのままでいる利点はどこにもない。デメリットばかりで何一つメリットがないのだ。

「今の映像を見る限りではなんとも言えないですね・・・実力を隠す理由もわからない」

シグナムの言葉に同意するようにヴィータも頷く。

「やっぱり私の考え過ぎなんやろか・・・」

はやてが疲れたようにため息を零す。

「ありがとう、聞きたかったんはそれだけや」

「では、これで失礼します」

そう言ってシグナムとヴィータは部屋を出ていく。一人残されたはやては胸の内の不安を吐き出すように深くため息を零した。

「あんたは一体何者なんや、シノブ・ユキタカ・・・」

11『優しい止まり木』（前書き）

『バー』は『止まり木』

『テンダー』は『優しさ』

だから、バーは誰にも優しい
今宵は鷹も羽を休めて一休み

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります

11『優しい止まり木』

11『優しい止まり木』

初出動から数日後、前線メンバー達は聖王教会からの依頼を受けて、はやてやなのはの出身地でもある第97管理外世界『地球』へと出張してしまった。ミッドチルダに残された雪鷹は溜まっていた仕事を片付け、ミッドチルダの地上本部まで来ていた。もちろん、六課では吸えない煙草を吸う為に。

「少し混んでるな・・・」

本部内の喫煙スペースに来た雪鷹は少し煩わしそうに呟く。前回来た時はちょうど他の局員が働いていたせいで人影はまばらだったが、今は社会の隅に皺寄せされた愛煙家でごった返していた。人ごみの中で煙草を吸うことに抵抗はないがそのためにはライターを預けた相手、オーリスを見つけなければならない。流石にそれは面倒に思えた。だからといってわざわざ地上本部まで来て何もせずに帰るのも負けたようで腹立たしい。どうするかを決めかねていた雪鷹の後ろで耳慣れた声がした。

「ユキタカ曹長？」

雪鷹が振り返るとそこにはオーリスが立っていた。

「オーリス三佐、お久しぶりです」

雪鷹はオーリスに一礼する。

「え、えぇ、ひ、久しぶりね」

雪鷹がいることに驚いているらしく、言葉が妙にたどたどしい。すぐに雪鷹から目を逸らし、辺りを気にするようにきょろきょろしている。挙動不審と言えばその通りなのだが、オーリスがそうなってしまう理由に雪鷹は心当たりがない。雪鷹は知らないことだが、あの日からオーリスは何度もこの喫煙所に顔を出して雪鷹の顔を探していたのだ。もちろん、機動六課で働く雪鷹がわざわざ地上本部に来ている理由は聞いていたし、毎日来れないだろうことも知っていた。それでも、もしかしたらという淡い期待を胸に抱いてあの日からずっと雪鷹に会える日を楽しみにしていたのだ。今日も仕事の合間を見つけては何度もここに脚を運んで、諦めかけていたその時に雪鷹に会えたのだ。言いたいことはいっぱいあった。笑顔で迎えたかった。それなのに、思うように言葉が出てこない。

「どうされたんです？どこか具合でも？」

「い、いえ・・・そんなことはないわ。その、貴方がここにいるなんて思ってもいなかったから・・・あ、そうだ、預かっていたものを返さないと」

そう言ってオーリスは雪鷹から預かっていたライターを取り出す。しかし、雪鷹はそれを受取ろうとせずに首を横に振る。

「もう少し落ち着いた場所が好きなんだ。だから、今日は遠慮しておくよ」

「そう・・・」

雪鷹の言葉にオーリスは残念そうな顔を浮かべる。顔を上げ、雪鷹を見つめるその瞳は切なげで普段のオーリスからは想像もつかない。ライターを握る手に無意識のうちに力が入る。折角会えたのに何も言えなかった悔しさと寂しさ。苦い気持ちをぐっと堪えて呑みこむ。

「ところで、オーリス三佐、今日の仕事はもう終わりましたか？」

「え、えぇ・・・先程終わって、それでここに・・・」

雪鷹の言葉の意味を量りかねて、困惑した様子でオーリスは頷く。

「近くに行きつけのバーがあるんです。よろしければ如何です？」

「え、えぇ、そうね」

「それでは、支度ができるまで下で待ってます」

雪鷹はオーリスに一礼するとその場から去ってしまった。残されたオーリスは雪鷹が去って、ようやく事態を呑み込み、顔を真っ赤に染め上げた。何も考えずに雪鷹の誘いを受けてしまったが、こんな展開を予想していなかったオーリスは一人、狼狽え出した。しかし、長く雪鷹を待たせるわけにもいかず、あれこれ考えることを諦めたオーリスは帰る支度をするために足早に喫煙室を出て行った。

・＊・＊・

「『Ｗｈｉｔｅ　Ｓｎｏｗ』・・・ここがそのバーなの？」

オーリスが銀製のネームプレートを読みながら雪鷹に尋ねると雪鷹は小さく頷く。地上本部から少し離れた雑居ビルの入り口に二人は立っていた。地下に降りる階段は薄暗く、女性一人で踏み込むにはやや勇気がいる。看板と呼ぶには小さすぎるネームプレートの他にここに店があることを主張するものは何も見当たらない。

「心配しなくて怪しい店じゃないよ。そもそも、そんなところにオーリスを連れていくわけないだろう？」

オーリスの胸の内を察した雪鷹がそう言うとオーリスは、そんなことないけど、と呟いてすぐに俯く。心の中を見透かされたような気がして恥ずかしい。しかし、雪鷹がオーリスと呼んでくれたことが嬉しくて思わず頬が緩む。喫煙所で会った時は階級をつけて呼ばれた。それはもちろん、周囲の目を気にしてのことなのだろうけど、それでも少しさびしかったのだ。

「まぁ、そう不安がらずに、ね？」

そう微笑んで雪鷹はオーリスの手を取る。まるでそれが当たり前であるかのような仕草だった。普段ならその類の男の気障な態度の切り捨てるはずなのに、オーリスは断ることができなかった。雪鷹の仕草には飾っているところがまるでなかった、まるで息をするかのようにごく自然で、そして、優しさと気遣いに溢れていた。雪鷹に案内されるまま階段を下りていくと分厚い木製の扉があった。もし、オーリスが一人だったなら間違いなくここで引き返していた。訪れる者を拒むような、そんな存在感がその扉にはあった。しかし、今日のオーリスは一人ではない。雪鷹が扉を開け、オーリスもそれに

続く。照明を落とした店内には軽快なジャズが流れ、外の喧騒とは全く無縁の空間が広がっていた。カウンターとテーブル席が一つだけのこぢんまりとした店だ。まだ時間が早いせいか、客の姿は見当たらない。少し古めかした、レトロな雰囲気がオーリスをそっと包み込む。

「いらっしゃい、忍君。ずいぶんとご無沙汰だったわね。そちらの方は・・・はじめましてね？」

カウンターから湯気立つおしぼりを二人差し出しながら微笑む女性を見て、オーリスは息を呑んだ。そこに立っていたのは三十代半ばと思しき女性バーテンダーだった。シルクのように艶やかな薄紫の髪を結いあげ、蝶ネクタイをキュッと締めたその姿はどこか男性的で、同性であるオーリスでさえ見惚れてしまう凛々しさを感じさせる。しかし、それ以上に女性の持つ内面的な優しさや母性といったものがその美貌を際立たせていた。首元には銀の三日月のネックレスがきらりと輝いている。

「どうぞ、こちらへ。今日はずいぶん早いですね」

そう言って微笑んだのはまだ二十歳前後の若い女性だ。まるで夜を溶かし込んだかのような黒髪はため息をつくほど美しく、くっきりとした目鼻立ちはどこか人間離れした印象を与える。二人を出迎えるその仕草一つにしてもどこか目で追ってしまいたくなるほど快活で、それでいて若さゆえの子供じみた煩わしさが感じられない。

「久しぶりだね、ビアンカ、クロエ。二人とも元気そうで何より。仕事の途中でちょっと抜け出してきたんだよ。だから、あまり強いのは勘弁してくれ。酔っぱらって帰って怒られたくないからね」

「えぇ、わかっているわ。そちらの女性は何になされますか？よろしければメニューをどうぞ」

そういってビアンカと呼ばれた女性、年上のバーテンダー、はオーリスにメニューを差し出す。その仕草一つとっても優美で、それでいて隙がない。クロエと呼ばれた若いほうのバーテンダーは小皿に盛られたナッツと灰皿をカウンターの上に並べる。

「ありがとう」

ビアンカからメニューを受け取って、オーリスはそれを開く。嗜み程度にお酒は飲むが、詳しいわけではないオーリスにとって見たこともない名前が幾つも並んでいる。そもそも、こういった本格的なバーに来た経験も数えるほどしかないのだから当然のことだった。

「オーリス？」

メニューを見つめたまま黙っているオーリスを見かけたのか、雪鷹が声をかける。

「あ、ごめんなさい。こういうお店は慣れてなくて・・・」

そう言ってオーリスは恥ずかしそうに俯く。

「お客様、普段はどんなお酒をお飲みですか？」

「えーと、ワインやシャンパンを・・・」

「では、お客様にはそれをベースにした一杯を」

そう言ってビアンカは微笑む。芳香な笑みは同性であるオーリスさえも思わず見惚れてしまうほどに美しかった。二人の美人バーテンダー。この二人を目当てに来ている客もきっと少なくはないのだろう。

「白ワインを５０ｍｌとカシスリキュールを１０ｍｌ。これをグラスに注いで・・・」

手際良くボトルを並べると細長いフルート型のシャンパングラスにそれらを注ぎ、バースプーンで軽く混ぜてオーリスにグラスを差し出す。

「どうぞ、キールです」

透き通るような、目を引く紅はカシスリキュールの色合いだ。白ワインの香が鼻腔を擽る。お酒に疎いオーリスも以前にも何かの食事の席で飲んだことのあるカクテルだったが、あの時とはまるで別物だった。

「・・・きれいね」

二種類のお酒を混ぜただけだ。それはオーリス自身がよくわかっている。それなのに、目の前に出されたグラスはそう形容するのが相応しい一杯に見えた。グラスを手に取り、一口飲むと味もまた格別だった。甘過ぎることなく、飲みやすい。

「どうぞ、忍」

クロエが雪鷹に差し出したのは水割りだった。ウイスキーを水で割っただけ。ただそれだけのことなのに、琥珀色のウイスキーが薄明

かりに照らされてキラキラと輝いてみえた。

「不思議ね・・・ただのお酒なのにどうしてこんなに輝いてみえるのかしら」

雪鷹が飲む様を横眼で見ながらオーリスが呟く。オーリスの飲んでいるカクテルも、雪鷹の飲んでいる水割りもただのお酒だ。ボトルの中で眠っていた液体がバーの薄明かりに照らされただけで、まるで宝石のように輝き始める。

「不思議でもなんでもありませんよ」

静かにビアンカが口を開く。

「それはどういう・・・？」

「世の中にはどんな優秀な魔導師にも使えない、バーだけの、バーテンダーにしか使えない魔法があるんです。その魔法を使えば、どんなお酒でも見違えて輝き始めるんです」

しなやかに伸びる指を口元に添えて笑うビアンカにオーリスは目を奪われた。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。この『Ｗｈｉｔｅ Ｓｎｏｗ』のマスター、ビアンカ・ネーヴェです」

色白で透き通るような肌。きっと、化粧という化粧はしていないだろう。香水臭さの代りに熟成された醸造酒のような甘い芳香を漂わせている。見た目もさることながら、その仕草の一つ一つが妖艶で、これまで積み重ねてきた時間の違いを感じさせた。この女バーテン

ダーにとってオーリスなど小娘程度でしかないのだろう。

「オーリスです」

名前を名乗って、ビアンカに名刺を差し出す。

「頂戴いたします」

名刺を受取るその笑顔にもどこか余裕に溢れていた。

「たまにはこういうお店も悪くないだろう?」

「えぇ、そうね。つれてきてくれてありがとう、雪鷹。でも、このお店・・・なんていうか隠れ家というか秘密基地みたいな雰囲気ね」

微笑みながらオーリスは店内を見渡す。決して広いとはいえない店内。カウンターとテーブル席を合わせても十人も入れないだろう。カウンターの奥には銘柄のわからない色取り取りのボトルが並んでいる。カウンターは厚い一枚板でよく磨きこまれて、手に馴染む。

「そうですね。ある意味ではバーは隠れ家のようなものですから」

そう笑ってビアンカはバーの入り口を見つめた。

「隠れ家だからこそバーの扉は重く、店名も小さく目立たない。その代わり、一旦中に入ればあの重い扉があるからこそ、お客様は安心して外の世界を忘れられる。年齢や立場、肩書き、煩わしいしがらみを全部忘れて一人に戻れる・・・ここはそういうお店なんですよ、オーリスさん」

「と、いうことだ。流石にあそこで一介の曹長風情が上官を軽々しくオーリスなんて呼べないからね」

「それもそうね・・・」

雪鷹の言葉にオーリスも思わず苦笑する。こうして話していると忘れてしまうが、立場上、雪鷹はオーリスを呼び捨てにすることなどできる人間ではないのだ。二人がいくら納得していても周りが納得しない。今はよくても、いつかは周りに迷惑をかけてしまう。それでも、無理をすればいずれは破綻してしまう。

「でも、ここなら・・・階級なんて煩わしいものを忘れて、ただのオーリスと雪鷹でいられるのね」

「まぁ、そういうことだね」

そう二人が顔を見合わせ、どちらからとなく笑う。余分な力の抜けた自然な笑みだった。こんな風に笑えたのは本当に久しぶりだった。

「でも、それだと５０点。残りの半分は・・・いや、やっぱり言うのはやめておこう」

「言いなさい。そんな風に言われると気になるわ」

「謹んでお断り申し上げましょう。秘密の一つや二つあるほうが楽しいだろう？お互いに」

そういって雪鷹はクスリと笑う。悪戯っぽい子供じみた、だけど、魅惑的で女の視線を惹きつける笑みだった。

「そ、そういえば最近は職場の方はどうなのかしら？この前のレリック絡みの事件があったばかりでしょう？」

「あぁ、それなら無事に解決したよ。優秀な新人達の活躍によってね。居心地はまぁ、まずまずかな。だけど、部隊長からして若い連中が多いからどうにもね・・・酒や煙草にも誘えないのが玉に傷だ。そっちこそどうなんだ？あまり言いたくはないが、最近いい噂を聞かないよ？」

「父のことね・・・えぇ、そうよ。昔から強引なところがあったけど、最近は特に・・・でも、地上の平和を守る為には少しくらい無理をしないと守れるものも守れない。失った悲しみを知らないから・・・だから、誰もそれをわかっていないのよ！！」

オーリスの語気がわずかに強くなる。しかし、すぐに恥ずかしそうに俯く。雪鷹に不満を言っても詮無きことだということはオーリス自身も判っている。それでもぶつけてしまうのは雪鷹に対する甘えだ。どんな愚痴も不満も雪鷹なら受け止めてくれるはずだという期待と甘え、そしてほんの少しのアルコールがオーリスの心の奥の殻を溶かしていく。

「・・・そのためになら、誰かを犠牲にしても構わない？」

「そういうつもりじゃ・・・いえ、たぶん、その通りね。父はきっと地上の平和の為なら、誰かを犠牲にしてもいいと思っているのかもしれない。残念だけど、違うとは私の口からは言い切れない」

「悲しみを知らない人なんていないわよ。そう決め付けるのはただの傲慢。上に立つ人間がそれじゃ、部下はついてきてくれませんよ」

そう言ったのはビアンカだった。あの芳香な笑みを浮かべ、しかし、その瞳は少しも笑っていない。

「悲しみを知るからこそ、人はそれを乗り越えて強くなれる。誰かに同じ想いをさせたくないから厳しくなれる。その痛みを知るから優しくなれる。二度と繰り返さないように賢くなれる。悲しみを知らない人なんていません。ただ、その悲しみの形が人それぞれなだけなんです」

その言葉にオーリスは俯き、小さく頷いた。普段のオーリスなら絶対に反発しているはずなのに、今日ばかりはどうしてもそんな気持ちになれなかった。まるで子供が駄々をこねているようになるのが目に見えていた。積み重ねてきた時間の重みが違うのだ。

「優しいのね・・・ビアンカさんは」

「バーテンダーですから」

そう言ってビアンカはにこりと微笑む。

「それも貴女にしか使えない魔法？」

「さぁ、どうでしょう？」

この人には敵わないな、とオーリスが悟るには十分過ぎる余裕の表情だった。

「さて、俺はそろそろ仕事に戻るか」

そう言って雪鷹は懐から財布を取り出す。それを見たオーリスも財

布を取り出そうとするが雪鷹は笑顔でそれを制する。

「でも・・・」

「少しくらい男を立ててくれ」

そう言って雪鷹は会計を済ませると二人は連れ立って外に出た。日が沈みかけ、薄暮の空が二人を迎える。二人がバーにいた時間はほんの数十分程度に過ぎないはずなのに、何時間も一緒にいたような錯覚に陥ってしまう。

「今日はありがとう。こんないいお店を教えてくれて」

オーリスが笑顔で礼を述べると雪鷹も笑顔を返す。

「俺も久しぶりに酒が飲めた。今の部隊に来てからはほとんど禁酒状態だったからな」

「前の部隊にいた時はよく来てたのかしら?」

「まぁ、そうだね。よく来てた。色々迷惑もかけたし、本当にお世話になった」

まるで遠くの彼方を見つめるような雪鷹の視線。オーリスが初めて見る表情だった。声をかけることさえ躊躇ってしまうような儚げで、今にも消えてしまいそうな刹那の笑みだった。

「・・・そういえば、機動六課に来る前はどこの部隊にいたの?」

「それは秘密です」

しかし、すぐにあの悪戯っぽい魅力的な笑みに戻っていた。教えなさい、と踏み込むオーリスに雪鷹は飄々とした態度で笑うだけだ。

「秘密の一つや二つあるほうが楽しいだろう？お互いに」

１１『優しい止まり木』（後書き）

今度の任務は六課総出の大仕事
ホテルの警備とオークションの護衛

華やかに咲き誇る六課の花々
だけど、その裏で物語の歯車は回り始める

動き出した歯車はもう、止まらない

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
１２『ホテル・アグスタ』

華麗に、優雅に、テイク、オフ！！

～はねやすめ～

祝１８万ＰＶ＆１万６千ユニーク達成！！

と、いうわけで今回は１８万ＰＶ＆１万６千ユニーク達成記念のフリートークですっ！！

雪「…フリートーク、ね。そんなくだらないことを書く暇があるなら、さっさと続きを書け、この馬鹿作者。そもそも、ＰＶもユニークも中途半端だろう？」

まぁまぁ、そう言わずに。次のホテル・アグスタ編からしばらく話が途切れそうにないからこういうのは挟めないし、息抜きだと思って楽しもう？それでは、摂氏零下の主人公、忍ちゃんのプロフィールですっ！！ちなみに、作中ではユキタカって呼ばれてるけど実は名字なんですよね

シノブ・ユキタカ（忍・雪鷹）
性別：男
年齢：２４歳
階級：空曹長
所属：機動六課ロングアーチ
　情報部情報一課より出向
役職：教導官補佐
資格：普通自動四輪運転免許
　大型自動二輪運転免許

コールサイン：ロングアーチ１３
魔力変換資質：氷結
術式：ミッドチルダ式
魔導師ランク：空戦Ａ＋

その他：地球出身の母（非魔力保有）と管理局の魔導師との間に生まれた私生児。
幼少の頃を地球で過ごし、魔力を持っていたためミッドチルダに強制移住させられる。以後、色々あって訓練校に入校する。高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウンと訓練校時代の同期で一対一の模擬戦では負けなし。二対一でも勝率は五分五分だった。訓練校卒業後、情報部に配属される。

使用デバイス
ブレイドハート（Ｂｌａｄｅ　ｈｅａｒｔ）
情報部が独自に開発したマルチデバイスの一つ。ストレージ以上、インテリジェンス以下の自動処理能力。ストレージ以下、インテリジェンス以上の処理速度。アームドに準ずる強度と耐久性。ユニゾンとブーストを組み合わせた出力向上効果を有する。どんな環境にでも対応できることを目的に造られた万能型デバイス。雪鷹の戦闘スタイルに合わせて接近戦用に設計されている。カートリッジシステムを備えていない代りに環状魔法陣による疑似カートリッジシステムを搭載している。待機モードを含め、５つの形態を持つ。情報部の特秘事項。雪鷹曰く、凡庸デバイス。

待機モード
空色の宝玉。見た目はレイジングハートと色違い

１ｓｔモード
刀剣の柄のような形状。雪鷹の魔力変換資質の補助を目的に造られ

た。射撃のサポート等も行えるためもっとも使い勝手のいいモードであり、基本的に雪鷹が使用するのはこの形態のみ。刀身である氷はあくまでも雪鷹の魔力変換によるものなのである程度の形状変化は可能。ツーハンドモード有り。

２ｎｄモード
黒塗りの刀のような形状。１ｓｔモードとは異なる実体剣。魔力結合を切り裂く為に造られた対魔導師戦用の形態だったが、ＡＭＦも切り裂くことができるため対ガジェット戦にも使用される。魔力結合切断システム（Ｍａｇｉ－Ｌｉｎｋ　Ｂｒｅａｋｅｒ）にその機構のほとんどを費やしているため、他の魔法の補助はほとんどできない。ツーハンドモード有り

３ｒｄモード
ｕｎｋｏｗｎ

４ｔｈモード
ｕｎｋｏｗｎ

バリアジャケット：

ステルスフォーム
雪鷹のバリアジャケットの基本形
袖無しの燕尾服。レーダーやセンサー系に対するステルス性有り。ただし、光学迷彩ではないので肉眼での確認は可能。どちらかというと防御重視の汎用型。

アサルトフォーム
ｕｎｋｏｗｎ

ジャッジメントフォーム
ｕｎｋｏｗｎ
な感じです。

雪「自分で言うのあれだが、作中の俺はカタログスペック以上に強くないか？」

まぁ、主人公補正ということで。まだ未公開設定もあるし、そう気にするな

鷹「まぁ、いい…それはそれとして、俺の設定に関して秘密主義過ぎないか？未登場のデバイスやバリアジャケットは仕方ないとして、他の部分を明らかにしないと誰も話についてこれないぞ？」

そりゃ、まぁ、そうなんだけど…情報一課の設定が大きくなりすぎて…

忍「ちなみに、俺の過去話もでかくなりすぎて扱いに困ってるんだろ？」

仰る通りで…訓練校卒業から情報一課時代まで一本書けるんじゃね

？ってくらいになってしまってどうするべきか思案中。過去編みたいな感じで挿入するか番外編として別に書くか…

雪「ただ、番外編として書くと原作キャラなしになりかねないからな…二次創作と言っていいのかは微妙だな」

そうなんだよね…まぁ、それについて時期が来たらまた改めてということで今回は本作の主人公、雪鷹について話しよかな

鷹「話せる範囲でな」

まずは名前から。見ての通り、漢字表記で地球風に名乗るなら『雪鷹　忍』ミッド風に名乗るなら『シノブ・ユキタカ』だね

忍「地球とミッドのハーフというややこしい設定のおかげだな。親について言うと父親は既に故人で、母は存命。まぁ、出てくる気配も予定もないが」

作中で呼び方が雪鷹だったり、ユキタカだったり別れてるのは漢字として認識してるかどうかの違いです。なのはとフェイトは漢字文化圏で過ごしていたので『ユキタカ』を『雪鷹』として認識して、他の人はそう認識できないというわけ。はやてがユキタカと呼んでいるのは『ユキタカ』を『雪鷹』と書くことを知らないから。書類上は『シノブ・ユキタカ』で通っているので。

雪「まったくもってややこしい限りだ」

まぁ、そう言わないでくれ。

鷹「次はデバイスだな。説明にあった通り、情報一課が独自に開発したマルチデバイス『ブレイドハート』が俺の愛機だ」

開発コンセプトはストレージ以上に情報処理能力にインテリジェント以上の人工知能を搭載したアームド以上に頑丈で、ブースト以上の支援や補助も出来て、ユニゾンも可能なデバイス…簡単に言うと今までのデバイスの良いところだけを寄せ集めたデバイスだね

忍「まぁ、もちろんそんな夢みたいなデバイスが作れるはずもなく、失敗したがな。その過程で作られたのがブレイドハートのようなマルチデバイスだ」

結論から言うとマイナスを底上げして、弱点を減らすことでいろんな状況にも対応できる“自称”万能型のデバイス、それがマルチデバイスだね。情報処理能力はストレージほど早くないし、人工知能もインテリジェントには及ばない。本式のアームドには打ち負けるし、ブースト機能もほぼ自己ブーストのみ。ユニゾンに関して論外…

雪「まったくもって凡庸というしかない」

それでも管理局の技術の粋を結集したデバイスなんで雪鷹が言うほど使い勝手は悪くないんですけど。

鷹「まぁ、ミッド式の人間が使うには十分頑丈で、インテリジェントよりは早いし、ストレージよりも補助はしてくれてるからな…悪くはない」

ちなみに、ブレイドハートの１ｓｔモードのイメージは某炎の忍者軍団の氷の剣士さんの使う魔導具で、２ｎｄモードは鞘とか鍔とか装飾を全部取り払った状態の日本刀をイメージしてます。

忍「魔導具と言ってる時点でほぼ元ネタは明らかだろう？あと付け加えるとカートリッジシステムはついてない。マルチデバイスは早い話、各デバイスの良い所の寄せ集めだ。そのおかげで中の機構は他のデバイスとは比べものにならないぐらい複雑。本式のカートリッジシステムなんか入れる余裕がなかった。だから、環状魔法陣を利用した強化魔法で魔力を補っている。これが疑似カートリッジシステムだ」

ついでに２ｎｄモードの魔力結合切断システム（Ｍａｇｉ－Ｌｉｎｋ　Ｂｒｅａｋｅｒ）についても説明をしよかな。

雪「あぁ、あの作者オリジナルのチートシステムか…」

そんなにチートじゃないと思うんだけどなぁ…まぁ、読んで字の如く、魔力結合を切ることのできるシステムです。魔法名はマギリンクブレイカー；Ｍａｇｉ－Ｌｉｎｋ　Ｂｒｅａｋｅｒ（ＭＬＢ）

鷹「ＡＭＦが魔力結合できない“空間”を作り出すのに対して、ＭＬＢは任意の結合のみを断ち切ることが可能だ。そうは言っても限度はあるし、ＡＭＦほど広範囲にも使えないが。大抵の防御魔法なら…まぁ、切り裂けるだろうな。元々は対魔導士戦を想定したシステムだ」

まぁ、なのはの防御もあんなあっさり破れてるくらいだからね。ちなみに、“大抵の防御魔法”の中にフィールド系の魔法も含んでるからＡＭＦも当然、切り裂ける。おかげでガジェットも鉄クズ同然…

忍「なのはみたいな砲撃魔導士にとっては天敵みたいな魔法だからな…」

ところで、話は変わるけど雪鷹って主人公なのに主人公らしくないよね。

雪「唐突だな…」

だって、フラグというフラグをぶち壊してるし。普通ならハーレムな展開になってもいいと思うんだけどなぁ。性格も摂氏零度が基本で、読者の皆さんからはダークヒーローって呼ばれてるし…やってることもなんだか…

鷹「そういう俺に誰がした？」

…あっ、俺か…

忍「そうだよ、お前だ、馬鹿作者」

…不満か？

雪「不満とかそういう問題ではないが…釈然としないものは残るな」

まぁ、そういう設定だから我慢して。ちなみに、キャラの原型は先程挙がった炎の忍者軍団の氷の剣士さん＋某国の口説き魔伯爵だからね。仕方ないよ。

鷹「よくわからないが…まぁ、二人とも正統派主人公って役柄ではないな。だからといって納得できるものでもないが」

ちなみに、エンディングはトゥルーエンドの他にヒロイン毎の個別

エンディングも考えているからね。現時点で雪鷹にフラグというフラグをぶち壊させているのはそのせいでもある。

忍「…ん？オーリスはどうなるんだ？現時点ではあれが唯一の残存フラグだろう？一応」

その辺は…まぁ、お楽しみに、としか。

雪「気になるが…どうせ、真っ当なことを考えてないんだろうが」

そんなこと言わないでおくれよ。これでも当初の予定よりかなり雪鷹はまるくなったんだよ。はじめはもっと鬼畜外道キャラになる予定だったんだから

鷹「いまでも十二分に鬼畜外道キャラだと思うが…」

いまの雪鷹なんてまだまだ可愛いよ。ちょっと冷たいだけのクールな二枚目、な感じかな。まぁ、そのうち鬼畜外道な顔も出していくからお楽しみに。

忍「楽しみなはずがあるか」

さてさて、それではそろそろこのフリートークもお開きにしましょうか。次回もよろしくお願いします。

ではでは

12『ホテル・アグスタ』（前書き）

少女達が華やかな戦場を翔けるその裏で、暗躍する青年は心に刃を携えて何を想うのか。

世界は綺麗なだけじゃない。
いつまでも綺麗なままではいられない。

これは、そんな青年と少女達の物語。

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まりです

12『ホテル・アグスタ』

12『ホテル・アグスタ』

「あの・・・雪鷹、ちょっとお願いがあるんだけど・・・」

ある日の機動六課、デスクワークに励む雪鷹にフェイトが申し訳なさそうに声をかける。その仕草はどこか恥じらっているようで普段のフェイトらしくない。仕事が絡んでいるのなら、フェイトがこんな態度を取るはずがない。となると、私用か何かなのだろうと当たりをつけた雪鷹は少々煩わしそうに顔を上げる。

「何か？」

「あの、明日の件なんだけど・・・」

「明日？ホテル・アグスタでの警備の仕事のことか？どうかしたのか？」

当てが外れて、仕事絡みの内容だったことに雪鷹は意外そうな声をあげる。明日のホテル・アグスタの警備任務には前線部隊と八神部隊長、そしてその固有戦力全員が投入される機動六課始まって以来の大規模な任務であった。雪鷹は直接警備には参加せず、隊舎で後方支援に回るシフトになっていた。何か予定の変更があったのだろうか、と尋ねた雪鷹に対して帰って来たフェイトの答えは雪鷹の予想を見事に裏切るものだった。

「その・・・私のエスコートをしてくれないかな？」

フェイトの言葉に雪鷹の動きが一瞬止まる。まるで石像のように数瞬硬直した後、ゆっくりと口を開く。

「エスコート・・・何故それを、私に?」

「なのははユーノにエスコートを頼んでるし、はやても六課後見人のカリム・グラシア少将の義弟のアコース査察官にもう頼んでて、私だけがまだ決まってなくて・・・」

機動六課部隊長、八神はやてと前線部隊長の二人、高町なのはとフェイト・T・ハラオウンの三人はオークション会場で警備にあたることは雪鷹も聞いていた。しかし、会場内で管理局の制服姿はどう考えても浮いてしまう為、オークションに参加するという体裁を取り、正装姿で警備にあたることになっていた。もちろん、エスコートする男性がいた方が女としての箔が付くし、女性だけでオークションに参加する不自然さを隠すこともできる。その理屈は雪鷹にも理解できたが、フェイトにエスコートを頼まれる理由としては納得できるものではない。

「それだと説明になってない。エスコートを頼むなら他にも適当な相手がいくらでもいるだろう?そもそも、明日がオークションだというのに何故前日になってその相手が決まっていない?時間は十分にあったはずだろう?」

「それは・・・その、そうなんだけど・・・」

雪鷹の口調は決してフェイトを咎めているわけではなかったがその声はわずかに硬い。フェイトは頬を紅く染めたまま俯き、はっきりしない口調で小さく何かを呟いている。

「折角の申し出だが、今更シフトを変更するわけにもいかない。悪いが他の相手を探してくれ」

雪鷹はばっさりとフェイトの申し出を断ると何事もなかったかのようにモニターに向かい、事務仕事を再開する。カタカタとキーボードを打つ音がしばらく響き、すぐに止まる。そして、一歩も動こうとしないフェイトを軽く睨みつけながら雪鷹は言う。

「いつまでそうしているつもりだ？今日はレリック絡みの事件の首謀者・・・確か、ジェイル・スカリエッティだったか？それが判明したから調査があるんじゃなかったのか？担当はお前のはずだ。そうして立っていられるほど暇じゃないだろう」

「それはそうだけど、あの・・・どうしても、ダメなの？私は雪鷹にエスコートしてほしい・・・雪鷹じゃないとダメなんだ」

意を決してフェイトが口を開く。頬は紅いままだったが、はっきりとした想いのこもった力強い言葉だ。雪鷹を見つめるまなざしは言い出したら聞かない強い意志の宿った瞳。それを見た雪鷹は呆れたようにため息を零す。

「そこまで言うならどうしてもっと早くに言わなかった？シフトが決まる前に言ってくれればこっちの方で調整もできた。こんな直前に言うのは非常識にもほどがある」

「その・・・雪鷹が忙しそうで、邪魔しちゃ悪いかなって・・・仕事が終わったらすぐにいなくなっちゃうし、訓練中に言うのもどうかと思って・・・それに・・・私から誘ってるみたいで言い出しづらくて・・・恥ずかしくて・・・」

色々それらしい理由が並べられているが、どうせ本当の理由は後者なのだろうと雪鷹は盛大にため息をこぼした。そして、ゆっくりと立ち上がり、フェイトの前に立つ。いきなり目の前に立たれたフェイトはその意図をはかりかねて困惑気味だ。

「時間がない？一言言うくらいいつでもできるだろう？それに、エスコートを頼むとはいっても所詮仕事だ。別に恥ずかしがるようなことでもない。違うか？」

「それは・・・そうだけど・・・」

雪鷹の言葉にフェイトは頷くがその顔は納得しているようには見えない。それぐらい簡単だろう、と雪鷹はさらっと言ってのけるが、ここに至るまでのフェイトの道のりは決して平坦ではなかったのだ。この話をフェイトがはやてから聞いたのはおよそ二週間前。エスコート頼む相手は任せるから、とはやてに言われてからフェイトの苦悶の日々は始まった。二人がエスコートを頼む相手はある程度予想がついていたし、当の二人もそれらしいことをほのめかしていた。つまり、頼む相手の目星がついていないのは三人の中でフェイトだけだったのだ。管理局内でも有数の美人揃いの機動六課、その中でも花形の一人のフェイトである。職場の適当な男性に声をかければすぐに相手の一人や二人くらい見つけられることはできる。しかし、折角の機会なのだから綺麗に着飾った自分を大切な人に見てもらいと思うのが乙女の心情だ。そう考えるとフェイトが頼む相手は雪鷹しかいなかった。しかし、あの雪鷹がフェイトの誘いに素直に頷いてくれるとは到底思えない。他の相手を探せ、と一蹴される光景が鮮明に浮かび、フェイトの気を挫く。雪鷹に話す機会は何度もあったものの、結局何も話せないまま一週間が過ぎた。はやてとなのはからは早く決めるように催促されたが、それでも切りだすことがで

きず、結局前日の今になるまで一言も話せずにいたのだ。

「まったく・・・この埋め合わせは必ずしてもらうからな」

「うん・・・ごめんね、無理言って・・・って、えっ・・・いいの？」

断られるとばかり思い込んでいたフェイトは我が耳を疑った。フェイトの理解能力に誤りがなければ、今の会話の流れは受け入れられたと捉えていいはずだ。まだ信じられないフェイトはもう一度雪鷹に尋ねる。

「本当に・・・いいの？エスコートを頼んでも・・・」

「上がそういうシフトでいくと決めたなら俺は黙って従うだけだ。まぁ、あとの細々とした手続きはかなり煩わしいが、なんとかなるだろう」

そう言って雪鷹は笑う。

「ありがとう。すごく嬉しいよ、雪鷹」

フェイトは満面の笑みを浮かべて雪鷹に抱きつく。雪鷹の目の前をフェイトの金の髪がなびく。甘く、優しい香り。口ではフェイトやなのはを子供、子供と言ってからかっているが、体付きはそうもいかない。容姿も、体型も大人のそれと比べて何の遜色もない。むしろ、容姿だけなら極上の部類だ。管理局の華と称されるだけのことはある。そんなフェイトに抱きつかれて雪鷹が何も思うことのないはずがない。

「お、おい、フェイト、少しは自重しろ」

雪鷹は慌ててフェイトを引き離す。フェイトは名残惜しそうな表情を浮かべていたが、それ以上抱きついてこようとはしなかった。頬は薄く染まっているが、恥じらっているというよりは嬉しさが隠しきれずにそのまま出てしまった具合だ。

「・・・何を考えている?そういうところが子供だと言われるんだ」

「ご、ごめんなさい・・・」

フェイトを睨みつける雪鷹の瞳は鋭く、厳しい。思わず、謝るが雪鷹は許す素振りを見せない。小さくため息を零すとそのままフェイトに背を向けた。

「後は任せた。一旦、クラナガンの自宅に戻る」

「えっ!?どうして?」

「エスコートするならそれなりの服がいるだろう?それを取りに戻るんだよ。じゃあ、あとの幕引きは任せる。まぁ、身から出た錆だと思って精々片付けろ」

意味深な言葉を残して雪鷹はそのまま立ち去ってしまった。残されたフェイトは辺りを見渡し、その言葉の意味を理解した。フェイトは大事なことを失念していた。雪鷹の働いている一室にはもちろん、他のロングアーチの人間もいる。そんな大勢の中でフェイトは雪鷹に抱きついたのだ。当然、周囲の視線は集まる。好奇の視線に晒されていることに気付いたフェイトは恥ずかしさに一気に顔を赤らめた。誰も何も言ってこないが、その視線が無言で語りかけてくる。

「あ、あの・・・フェイトさん・・・？」

フェイトの補佐でもあるシャーリーが近付いてくる。

「えっ、あの・・・その、今のは・・・」

冷やかし混じりのシャーリーの質問攻めからフェイトが解放されたのはそれから小一時間経ってからのことだった。

・＊・＊・

翌日、ホテル・アグスタへ向かうヘリの中ではリインが全員に本日の作戦の概要について説明していた。モニターの前で浮遊しながら、画面を切り替える。

「今日これから向かう先はここ、ホテル・アグスタ」

切り替わった画面に映ったのは周囲を森に囲まれた中にひっそりとたたずむ建物の映像だ。しかし、寂れた印象はなく、高級感あふれる内装は細かいところまで手の加えられた一級品ばかりだ。オークションに参加者の中には名のある富豪や一流企業の社長や幹部、政治家やマフィアといった政財界の有力者も少なくない。そんな人間が使用するホテルなのだから、それに相応しい造りになるのは当然のことと言えた。

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護、それが今日のお仕事ね」

なのはの言葉に一同は頷く。

「取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品されるのでその反応をレリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高い、とのことで私達が警備に呼ばれたです」

「この手の大型オークションだと密輸取引の隠れ蓑にもなったりするし、色々油断は禁物だよ」

リインの言葉にフェイトが付け加える。はやてがモニターを変えるとそこに前線部隊の副隊長陣の姿が映っていた。

「現場には昨夜からシグナム副隊長とヴィータ副隊長他数名の隊員が張ってくれてる」

「私達と雪鷹曹長は建物の中の警備に回るから前線は副隊長達の指示に従ってね」

「えっ？でも、ユキタカ曹長は隊舎で私達の支援のはずじゃ・・・」

なのはの言葉にティアナが口を挟む。事前の打ち合わせで雪鷹の名前は聞いていない。渡されたシフト表には隊舎で前線部隊の管制及び、支援を行うことになっていた。事実、ヘリの中に雪鷹の姿はない。首を傾げる新人達にフェイトが申し訳なさそうに理由を説明する。

「あ、それは私のせいでちょっとした手違いがあって・・・それで

急遽警備に回ってもらうことになったの。急なことだったから、雪鷹は仕事の引き継ぎをして現地で合流するんだ」

フェイトの言葉に新人達はなるほど、と頷く。

「あの、シャマル先生・・・さっきから気になってたんですけど、その箱って・・・」

キャロがシャマルの足元に置かれた黒い箱を指さす。するとシャマルは嬉しそうに笑う。

「あぁ、これ？隊長達のお仕事着」

・＊・＊・

ホテル・アグスタのロビーは正装した紳士淑女で溢れていたが、その中でも一際華やかに咲き誇っていたのが機動六課の隊長陣三人だった。なのはは赤を基調としたワンピース型のドレス、フェイトとはやてはそれぞれ大胆に肩を露出した紫と若草色のドレスに身を包んでいる。三人が正装する機会はこれまでほとんどなかった。稀にあったとしても、管理局関連の式典であるためドレスではなく儀礼用の制服で参加しなければならず、ドレスを着て人前に出る機会は今回が初めてだった。慣れない化粧もシャマルに手伝ってもらったおかげで完璧で、雰囲気もどこか大人びている。

「ユーノ君達、どこかな？」

「せやね。ホテルのロビーで落ち合う約束なんやけどな・・・」

なのはとはやての二人は辺りを見渡し、待ち人を探す。ほどなくして探していた二人がなのは達の方へ歩いてきた。管理局のデータベース、無限書庫の司書長であるユーノ・スクライアと同じく本局の査察官、ヴェロッサ・アコースである。

「ごめん、少し待たせちゃったかな？」

ユーノは緑がかった灰色の二つボタンのスーツにベージュのシャツという装いだった。派手さはなく、どちらかというと地味な色遣いだが、なのはと並んで立つと明るい色合いのドレスを上手く包み込み、引き立たせている。そして、ネクタイではなく細いループタイをしめることで学者らしい知的な雰囲気を醸し出している。

「思ってたより人が多くてね。そのドレス、よく似合っているよ、はやて」

そう言ったのはヴェロッサだ。スマートなデザインの光沢のある白いスーツに浅葱色のシャツと濃紺のタイは当人の鮮やかな髪色と相まって爽やかな印象を与える。同じく爽やかな色合いでまとめているはやてによく合う装いだ。

「ユーノ君、どう？おかしくない？」

「すごく綺麗だよ、なのは」

褒められた二人は嬉しそうに頬を染める。一人残されたフェイトは居心地が悪そうにその場から一歩引く。雪鷹との待ち合わせもホテ

ルのロビーなのだが、引き継ぎの手続きが遅れているのかまだその姿が見えない。

「あの、私・・・ちょっと雪鷹を探してくるね」

フェイトがそう切り出すと同時に後ろで声が響く。

「いい。もう、ここに来ている」

フェイトが振り返るとそこには正装姿に身を整えた雪鷹が立っていた。一見すると黒に見えるミッドナイトブルーのスーツ、色気のない無地の白シャツ、細身で光沢のあるシルバーのソリッドタイ。タイピンとカフスの渋い銀が夜空に散りばめられた星のように輝き、装いにアクセントを添えている。決して派手さはないが落ち着いた色合いで、雪鷹の容姿や髪の色とも相まって人目を惹きつける魅力があった。

「引き継ぎが遅れてしまって申し訳ない・・・どうした？どこかおかしいところでも？」

雪鷹をじっと見つめたまま隊長陣を見て、雪鷹は訝しげに尋ねる。

「君のその格好が三人の想像以上に似合っていて言葉が出ないんだよ。はじめまして、本局査察部のヴェロッサ・アコースです、ユキタカ曹長」

「無限書庫の司書長をしているユーノ・スクライアです。以前、なのはから何度も貴方の話を聞かせてもらいました。訓練校時代、模擬戦でなのはやフェイトには負けなしだったとか」

雪鷹と初対面の男性陣が挨拶を交わす。その間に、女性陣はようやく言葉を取り戻した。

「そのスーツよう似合ってるで、ユキタカ曹長」

「うん、なんだか大人っぽくてカッコいいよ」

はやてとなのはが雪鷹を誉めるが雪鷹は煩わしそうに見つめて返す。

「忘れているようなら言っておくが酒も飲めないお前達と違って、もう成人している」

雪鷹はなのは達よりも五歳も年上、なのは達の目に雪鷹が大人びて見えるのは当然のことだ。二人の目を見ればお世辞で言っているのではないことは一目瞭然だが、褒められて別段嬉しくもない。どんな人間であれ、着飾ればそれなりに見栄えがするようになるものなのだ。

「でも、似合ってる。うん、すごく、似合ってる」

フェイトは雪鷹を見ながら嬉しそうに微笑む。控えめな装いなのだが、それがかえって雪鷹の持つ生来の美質が際立っているようだった。決して雪鷹の外見だけに惹かれたわけではないが、こうして身だしなみを整えた雪鷹を前にするとその精悍な顔を意識せざるを得ない。いつになく胸が熱くなり、鼓動が大きく響く。

「そのドレス、フェイトもよく似合っている」

雪鷹に微笑みかけられ、フェイトの顔が一気に紅く染まる。お世辞だと頭で判っているのに、その一言に胸が躍る。見慣れているはず

のその笑顔も、フェイトだけに向けられているのだと思うと嬉しさも一入だ。

「うん・・・ありがとう。雪鷹にそう言ってもらえて、すごく嬉しい」

「・・・まぁ、いい。ここで油売っていられるほど暇でもない。行くぞ？」

そう言って雪鷹はフェイトの手を取り、受付へと足を進めた。

・＊・＊・

「ほんなら、ここで一旦別れて、ホテル内の警備の確認に行こか。私となのはちゃんは会場、フェイトちゃんとユキタカ曹長は非難経路や裏口やらを頼むわ。合流はここで。ロッサ、今日は無理言ってごめんな」

「なに、他でもないはやての頼みだからね」

「それじゃ、僕もオークションの打ち合わせがあるから。なのは、また後でね」

そう言って六人はそれぞれ別れる。非難経路等々を割り当てられたフェイトと雪鷹はホテルの案内図で場所を確認するとそこへと向かって歩きはじめる。しかし、歩きだしてすぐに雪鷹がフェイトに切

り出す。

「フェイト、悪いが警備の確認は一人で行ってくれ。少し寄りたい所がある」

「どこか見たい場所があるの？それなら私も一緒に・・・」

「いや、一人で行かせてくれ」

フェイトの言葉を遮るようにはっきりと、しかし、どこかやんわりとした口調で断りを入れる。そして、にこりと微笑んで、フェイトの反論する気勢をそぐとそのまま人ごみの奥へと消えてしまった。残されたフェイトは不意の笑顔に見惚れてしまった自分自身を怨みながら、しかたなくはやてに指示された場所へと向かった。一方、フェイトと別れた雪鷹を待っていたのは先程別れたばかりの本局の査察官、ヴェロッサ・アコースだった。

１２『ホテル・アグスタ』（後書き）

突如として現れた大量のガジェット群
相手をするのは機動六課の面々

時を同じくして雪鷹は森の奥で一人の男と対峙する

ぶつかり合うのは刃と刃。心と心

この手の剣は断ち切る力
たとえ、それが誰であろうとも

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
１３『未知との遭遇』

戦場へ、テイクオフ

Intermission 12.1

Intermission 12.1

「待たせたね、アコース査察官」

雪鷹が笑顔でヴェロッサに手を振る。しかし、笑っているのは口だけで目は全く笑っていない。警戒心と敵意を剥き出しにしたその表情は先程までとはまるで別人だ。

「古巣から本局の人間が俺のことを嗅ぎ回っていると聞いてはいたが、貴方だったんですね」

「悪く思わないでくれ、はやてから頼まれてね。地上本部によく出入りしているみたいだし、レジアス中将ははやてや僕のような稀少技能保有者が嫌いでね。君に関しては僕個人としても興味があるんだ」

いつもはにこやかなヴェロッサもこの時ばかりは隙のない表情を浮かべている。そんなヴェロッサを見た雪鷹は不敵に微笑む。

「査察部とぶつかり合うのはお互いの為にならないからな・・・ここは目を瞑っていてもらいたいんだが」

「それは同感だね。僕も情報部と対立するのは避けたい。でも、これればかりは譲れない。情報一課が何の目的で六課にスパイを送り込んでいるのかは知らないけど、機動六課ははやての夢なんだ。それ

を邪魔するような人間には容赦しないよ?」

二人の視線がぶつかり合う。どちらも譲る気持ちはないようで険悪な雰囲気が辺りに広がる。人目の少ない場所を選んでいるとはいえ、皆無というわけでもない。これ以上、騒ぐのはまずいと判断した雪鷹は軽く息をついて、幾分穏やかな口調でヴェロッサに言った。

「お互い、幾つか誤解をしているようだ。俺は別にレジアスの指示で六課に来たわけじゃない」

「でも、中将の秘書官のオーリス三佐と親しげに話していたという人が何人もいる。疑うな、という方が無理な話だ」

レジアス中将と雪鷹が繋がっているのではないか、と疑うヴェロッサは雪鷹の言葉を一蹴する。オーリスと親密にしている雪鷹を見た、あるいは会話を聞いたという証言はいくつか集まっている。雪鷹の経歴を漁ってみたが過去にオーリスとの接点は何もなかった。今の職場でオーリスと出逢うことはまずない。そうなると二人の背後にレジアス中将の影が見えるのは当然のことだった。

「あれはあくまで個人的な付き合いだ。邪推するのは結構だが、情報部はあんな中年オヤジに飼い慣らされた覚えはない。情報部を舐めるなよ?だいたい、試験運用の部隊の妨害をするほど情報部は暇じゃない」

「・・・なら、目的は?はやての邪魔をするつもりがないというのなら何故、機動六課に来た?」

雪鷹の冷ややかに笑う。

「言えるわけないだろう?」

「それで君の言葉を僕が信じるとでも?」

二人の視線が一瞬ぶつかり合い、雪鷹が視線を逸らす。

「・・・いいだろう。今日のところは手土産を渡すから、それでお帰り頂こう」

「手土産?」

雪鷹の言葉にヴェロッサは訝しむような表情を浮かべた。ヴェロッサが賄賂の類を受け取る人間ではないことがわからないほど雪鷹は愚かではない。何を切り出すのか、とヴェロッサは雪鷹の言葉を待った。

「今回のオークションでは取引許可の出ているロストロギアがいくつか出品されている。だが、その裏で許可の出ていないロストロギアの闇取引が行われるらしい。まぁ、間違いなく管理局の上層部が一枚噛んでいる。誰が絡んでいるかはまだ分からないが・・・査察部にとっては悪くないだろう?」

雪鷹の言葉にヴェロッサは黙りこんでいしばし考えを巡らす。査察官の本来の任務はこのような管理局の膿を見つけ出し、是正させることにある。その意味では雪鷹の提案は悪いものではない。

「何故、その闇取引を機動六課で検挙しないんだい?」

至極最もな疑問である。違法なロストロギアの売買は禁止されている。それを取り締まるのは機動六課の任務の一つだ。このオークシ

ョンでロストロギアの闇取引が行われるという情報を事前に手に入れていたのなら、警護任務ではなくその取引を摘発し、関係者を逮捕するべき、と考えるのが当然である。

「今の六課が手を出すには少々大き過ぎてね。摘発してもどうせ横槍が入って、邪魔されるのが目に見えている。情報部にはこの程度の事件に人員を割ける余裕がない。見逃すくらいなら、査察部にくれてやったほうがまだましだ」

顔こそ笑っているがその目は笑っていない。嘘や冗談ではなく、雪鷹の言葉通り実際に機動六課では手が出せないのだろう。そうなるとかなりの大物がこの闇取引に絡んでいることになる。査察部としてこれを見逃すわけにはいかない。しかし、この闇取引にヴェロッサが手を出すということは雪鷹の条件を呑んだということにもなる。みすみす雪鷹の思う通りに動かされるのは癪だったが、身内可愛さにこの闇取引を見逃すことなど許されるはずもなかった。

「・・・いいだろう。その手土産を持って今日の所は大人しく引き下がるよ。ただし、調査内容についてははやてに渡す。これだけは譲れない」

「好きにすればいい。貴方からの情報をどう判断するかは八神二佐の自由だ。さて、それでは闇取引の現場まで案内するとしよう、査察官殿」

皮肉っぽい笑みを浮かべながら雪鷹はヴェロッサを連れて歩き始めた。

13『未知との遭遇』（前書き）

戦場には色々な敵がいる。
もちろん、強い奴もいれば弱い奴もいる。

一騎当千の無双者
数と勢いに任せた者
怯え、逃げ惑う者
見境なく暴れ狂う者
権謀術数を張り巡らす者
一撃必殺を狙う者

嫌いな敵は何人もいる
その中で一番会いたくない敵

それは、知らない敵

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります

１３『未知との遭遇』

１３『未知との遭遇』

「やっぱり、この部隊は異常だよな・・・」

ホテル内の警備の確認を終え、隊長陣と合流した雪鷹は目の前の三人を見ながら一人ぼやく。こうして見ると美しく着飾った少女にしか見えない三人だが、皆、オーバーＳランクの魔導師だ。ついでに言うなら、副隊長の二人もニアＳランク。リミッターを付けているとはいえ一騎当千の勇士達だ。八神部隊長の固有戦力とはいえＡＡランク相当の人間がロングアーチに配属されている。今更ながらに思うが、六課の戦力は無敵を通り越して異常だ。まだ十歳にも関わらずティアナやズバルと同じ魔導師Ｂランクを持つエリオと稀少技能『竜召喚』を持っているキャロの可能性は計り知れない。危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊であるスバル。あのティーダ・ランスターの実妹、ティアナ。提督と母に持ち、ティアナやスバルとさほど年も変わらないのに、八神部隊長を務めているグリフィス准尉とデバイスマスター資格所持者もフェイニーノ一等陸士。他の隊員達も未来のエリート揃いで、部隊の設備も比較的新しいものが多く、他部隊に比べれば恵まれている。

（その気になれば次元世界の一つや二つをあっさり制圧できるぐらいの戦力と能力が揃ってる・・・やはり、情報部としては見過ごせない）

「雪鷹、さっきはどこに行ってたの？」

フェイトに尋ねられ、雪鷹はふと我に返った。怒っているわけではないが、機嫌がいいようにも見えない。何か言いたげなその視線に雪鷹は苦笑を返す。

「オークションの品が置いてある部屋から会場までの通路と想定される脱出経路を幾つか・・・俺ならこう奪って、こう逃げるだろうっていう所を見てきただけだ」

「そんな大袈裟なことせんでも・・・私らは警備にきてるけど、泥棒退治するわけやないんよ」

はやてが呆れた口調を返す。雪鷹の想定は相手が人間ならば、という想定である。しかし、今日の機動六課の任務はオークションに出品されるロストロギアをレリックと誤認したガジェットが出てきた時の為の会場警備である。雪鷹の懸念事項は無駄とまでは言わないがいささか的外れな部分がある。

「ガジェットを作って、レリックを集めてる一連の事件の首謀者とされているジェイル・スカリエッティ・・・ロストロギア絡みの事件で広域指名手配されている次元犯罪者らしいな」

雪鷹の言葉にフェイトは軽く頷いて、言葉を付け加える。

「そうだよ。前の事件で破壊したガジェットから名前入りのプレートが発見されたんだ。もちろん、他の人がミスリード狙いで仕込んだ可能性も否定できないけど、当面はその男が犯人の線で捜査を進めていくつもりだよ」

「そこで、だ。レリックの方に目がいって忘れているみたいだがスカリエッティは生命操作や生体実験、違法医学・・・その方面の専

門家だ。そんなに人間の欲しがりそうなものが幾つか出品されている。危険性の高い病原菌に感染した死体のホルマリン漬けや絶滅した動植物のミイラや化石・・・狙ってくるかもな」

「つまり、レリックじゃなくて、オークションの品物を狙ってくるかもしれないってこと？」

なのはが尋ねると雪鷹は頷く。

「まるで捜査官みたいやね、ユキタカさん。訓練を見させてもらったけど、初めて言うわりには慣れてるみたいやったし・・・前の職場で何してたんや？」

雪鷹を疑うはやての眼差し。もう既に慣れてしまったその視線に雪鷹は皮肉めいた笑顔を返す。

「どこの部隊だって新人教育くらいある。本職には及ばなくても真似事くらいできる。まぁ、部隊をあちこち転々としてきた特別捜査官には縁のない話ですが」

二人の視線がぶつかり合う。

「まぁまぁ、はやてちゃんも雪鷹もそんな怖い顔しないで。もうすぐオークションも始まるからそろそろ所定の位置に・・・」

そう言って二人を宥めるなのはの言葉を遮るように緊張感に満ちたシャマルの声が響く。

「前線各員へ。状況は広域防御戦です。ロングアーチ０１の総合管制と合わせて私、シャマルが現場指揮を行います」

「ロングアーチ００、他三名了解。現状は聞いての通りや。打ち合わせ通り、会場は私となのは隊長、フェイト隊長の三人で警護にあたるさかい、ユキタカ曹長は前線メンバーと合流して、シャマルの指揮下に入ってや」

「「「了解」」」

・＊・＊・＊・

「まとめて、打ち抜けぇぇ！！」

「レヴァンティン、紫電、一閃っ！！」

「ここは通さんっ！！てりゃぁああっ！！」

モニター越しにヴィータが、シグナムが、ザフィーラが次々とガジェットを駆逐していく。ＡＭＦを物ともしないその戦いぶりにスバルは目を輝かせる。

「副隊長達とザフィーラ、すごいっ！！」

歓声をあげるスバルとは対照的に隣に立つティアナの表情はどこか

暗い。

「これで、能力リミッター付き・・・」

そう呟いて悔しそうに握り拳を固める。自分達があんなに苦労して倒したガジェット群を副隊長陣はいとも容易く撃破していく。新人と歴戦の勇士なのだから比べる相手が間違っているといえばそうなのかもしれないが、リミッターがついてなお、その実力差は圧倒的なものであった。ＡＭＦ状況下であるとは思わせない動き。一撃一撃に込められた魔力はティアナの全力の砲撃に匹敵、あるいは凌ぐほどのものがある。しかし、そんな現実を振り払うかのようにティアナは首を横に振る。

（だけど、そんなこと関係ない。私は、ただ証明すればいい・・・才能や魔力がなくたって、天才や歴戦の勇士にだって負けない・・・どんな危険な状況でも、私は、ランスターの弾丸はちゃんと敵でも撃ち抜けるんだって）

・＊・＊・＊・

「あっ！？」

ライトニングチームの一人、キャロのデバイス、ケリュケイオンの核が点滅し始め、持ち主に異常と危険を知らせる。

「キャロ、どうしたの？」

エリオが尋ねるとキャロは緊迫した様子でそれに応える。

「近くで誰かが召喚魔法を使ってる」

「クラールヴィントのセンサーにも反応。だけど、この魔力・・・」

キャロの言葉に続いてデバイスを通じてシャマルの声が響く。驚きを隠せないその声がその魔力の膨大さを物語っている。ホテルから離れた所にある為、ガジェットと交戦中とシグナムやヴィータ、ザフィーラは動けない。

しかし、放置するにはあまりにも危険過ぎた。シャマルが判断に迷っているところに雪鷹の声が響いた。

「こちらロングアーチ１３、新たに出現した敵には俺が行く」

「わかりました。でも、相手は推定Ｓランクの強者です。気をつけて」

シャマルから送られてきた敵の位置情報を確認すると雪鷹はバリアジャケットを展開して空を翔ける。木々の上を飛びながら、雪鷹は未確認の敵を目指す。雪鷹が進んでいる方角はガジェット達が出現している方角とは正反対の方角である。ガジェットが出現してからは警戒が手薄になっていたせいもあり、六課としては完全に裏を突かれた形になってしまった。

「フリーズランサー、セット・・・」

敵との距離が近づいてきた雪鷹は迎撃の準備をしながら更に距離を詰めていく。そして、それらしき人影が見えた瞬間、雪鷹は叫ぶ。

「ファイアっ！！」

氷の槍が人影を貫く、かと思われた瞬間、人影が何かを振るって全ての攻撃と弾き飛ばした。おそらくはデバイスであろう槍を構えた大柄の男。服装は少しやつれているが武器を構えたその姿は堂々たるもので、男が尋常でないことを雪鷹に告げていた。

「なるほど・・・ちょっと厄介だな」

雪鷹は愛機ブレイドハートを構えて男と対峙する。

「・・・召喚士には見えないが、仲間か？」

雪鷹が尋ねるが男はデバイスを構えたまま何も言おうとしない。予想通りの反応に雪鷹は軽くため息を零す。

「沈黙は肯定を受け取らせてもらう。俺は管理局機動六課、シノブ・ユキタカ。大人しく投降するなら弁護の機会がある。武器を収めてもらえるか？」

「断る」

隙のない男の構え。おそらくはベルカ式の魔法を使う騎士なのであろう。雪鷹は苦々しげに顔をしかめた。どこかに敵が潜んでいる状況で、ベルカ式の騎士との一対一は雪鷹が最も苦手とする戦いだ。生粋の武人相手にミッドチルダ式の魔導師が斬り合いを仕掛けるのは分が悪い。しかも、Ｓランク相当の召喚士もまだ姿を見せていない。しかし、分が悪いからといってここで退くわけにもいかない。

「では、無理にでも同行してもらう」

雪鷹が一気に踏み込んで間合いを詰め、男に斬りかかる。魔力を凝縮した氷の刃の切れ味は実体剣のそれに匹敵するものがある。しかし、男は動じることなくそれを受け止め、強引に弾き飛ばす。そうして、数合打ちあってから雪鷹は男と距離を取った。剣の腕にはそれなりの自信のあった雪鷹だが、男のそれは雪鷹を凌いでいた。しかも、本式のアームドデバイス相手に打ち合っては氷の刃などいずれ叩き折られてしまう。正面からぶつかっては敵わないと判断した雪鷹は戦術の変更することにした。

《Two hand mode.》

電子音と共にブレイドハートが二つに分かれた。刃渡りは短くなり、ナイフほどしかない。二刀流で剣を構えた雪鷹は静かに、慎重に間合いを詰めていく。しかし、槍の方が間合いは長い。有利なのはもちろん、相手の方だ。槍の間合いに雪鷹が一歩でも踏み込めば薙刀状のその刃がすぐに雪鷹の喉元を襲うであろう。それを承知しているから雪鷹も迂闊に近づけない。槍の届かないギリギリまで近付くと足の動きが一瞬止まる。

（セカンドフォーム・・・いや、あれは対魔導師戦用の武器だ。ベルカの騎士相手ではファーストフォームと大差ない。サードフォームまで外部に見せるわけにはいかない。そうなるとやはり・・・）

雪鷹は覚悟を一気に踏み込んだ。それを待っていたかのように、槍の穂先が雪鷹を狙って伸びる。殺傷設定なら致命傷、非殺傷設定でも悶絶は逃れられないその一撃を雪鷹は左の剣で迎え撃つ。無論、片手で受けられるような攻撃でないことは百も承知だ。刃と刃がぶつかるその瞬間、雪鷹は手首を捻って、槍の軌道をわずかに逸らし

た。雪鷹の顔のすぐ横を槍が勢いよく突き抜ける。男は何が起きたのか理解できなかったようだが、すぐに槍を引き戻し、続けざまに斬撃を繰り出す。その一発一発が当たれば致命傷になりかねない強力なものだったが、雪鷹はその全ての両手の小刀でいなして防いでみせた。

「ほう・・・魔導師にしては剣の扱いが手慣れているな」

一旦攻撃を止め、男が感心したように呟く。雪鷹に対する警戒は全く薄れていなかったが、その賛辞は男の本音のようだった。

「ベルカの技ともミッドチルダの格闘技とも異なるな。初めて見る技だ」

「あぁ、そうだろうとも。魔法がない世界の技だからな」

雪鷹が不敵に笑う。しかし、男は動じる様子もなく言い放つ。

「だが、躱すだけでは勝てんぞ？」

「躱すだけが技ではないっ！！」

そう言うと雪鷹は左の剣を逆手に持ち直し、右足を勢いよく振り上げた。男の眼前を蹴りがかすめる。蹴りの届く間合いではなかったが、勢いに押されて男は反射的に一歩退く。そして、反撃に移ろうとした次の瞬間、手に鈍い痛みが走る。致命傷と呼ぶには程遠いが痺れるような痛みのせいで、槍を握る手に力が入らない。

「・・・蹴り上げた足を下ろさず、そのまま俺の手を蹴ったか。それも別世界の技か？」

「ほう?今のが見えたか?大抵の騎士なら何が起きたのかわからないまま慌てふためくんだが・・・」

雪鷹は意外そうに呟きながらも、攻撃の手を緩めない。蹴りと両手の氷の短剣の連撃で男に反撃の隙を与えない。蹴りがが横切った次の瞬間には、上から短剣の一撃が振り下ろされる。下段から上段へ変幻自在の蹴り技。右からと思えば左から、下からと思えば上から、男を狙う刃は止まることない。一撃一撃は軽く、致命傷になるようなものではない。男にとって、雪鷹の攻撃そのもの防御に徹すれば防ぐのは難しくないが、それでは攻撃に移れない。戦闘を長引かせるわけにはいかないとなると、無理にでもこの連撃を破るしかない。

「なるほど・・・だが、まだ足りんな・・・」

男の持つ槍の石突から空薬莢が飛び出す。それを見た雪鷹は迷わず身を引いた。何がくるのかは分からなかった、。しかし、何かがくることだけは確信できた。そして、それは来た。すぐ隣を駆け抜ける衝撃波。バリアジャケット越しでもその破壊力のほどは痛いくらいにわかる。雪鷹の後ろに並んでいた木々がなぎ倒され、その凄まじさを物語っている。

(射程こそ短いが砲撃魔法並みの威力・・・化け物だな)

一瞬でも避けるのが遅れていたら、雪鷹の命も危なかった。長年の勘に助けられた雪鷹は苦々しげに男を睨み付けた。手数では雪鷹が勝っているが、単純な火力では男の足元にも及ばない。あの衝撃波を正面から受けるなど、至近距離でなのは級の砲撃を受けるようなものだ。いくら雪鷹といえひとたまりもない。

「よい判断だ。年の割りには場数を踏んでいるようだな・・・」

「あんたも、もう若くないのによく頑張るな・・・おとなしく投降すれば楽になるぞ？」

「残念だが、それはできぬ相談だ」

二人とも間合いをとって武器を構えなおす。応援を期待できない雪鷹にとって戦闘を引き伸ばすのは愚策でしかない。まだ姿を見せていないがSランク相当の召喚士が、それとその召喚獣が、この付近にいるのだ。一対一で拮抗している状況が更に悪化するであろうことは目に見えている。早々に決着をつけなければ、雪鷹の身が危なくなる。それは嫌というほどわかっているのだが、目の前の男を崩す術が思い浮かばない。

（この男、おそらくだがこれが本気ではないな。その気になればデバイスごと俺を叩き切れるだけの実力があるだろう・・・それにも関らず出し渋るとなると、理由は何だ？）

「では、何が目的だ？」

「お前には関係のないことだ」

雪鷹の質問を男は一蹴する。しかし、それでも雪鷹は諦めない。

「ガジェットと・・・ジェイル・スカリエッティとはどういう関係だ？」

「ほう？あいつを知っているのか？」

ジェイル・スカリエッティという名前が出ると男はやや驚いた表情を浮かべた。やはり、ガジェットを使っているのにフェイトの調べた通り、ジェイル・スカリエッティで間違いないらしい。これは貴重な情報だ。雪鷹は一人、心の内で笑う。戦闘が長引けば、その分危険も大きくなるが、それに見合った、あるいは危険に勝る利益があるというのなら話は変わってくる。

「ジェイル・スカリエッティ。広域指名手配されている犯罪者だが、本物の天才だ。今回の襲撃の目的も、オークションの品か何かだろう？その手の研究者の好きそうなものがいくつか出品されていたからな・・・ガジェットはあくまで陽動。本命はあんたか？」

「奴とは関わりがないといえば嘘になる。だが、俺は奴の部下になったつもりはないっ！！」

男は強い口調ではっきりと言い切った。

（こいつははずれ。本命は別・・・召喚士か、あるいはその召喚獣？となると、この男は何故ここにいる？召喚士の護衛・・・にしては強過ぎる。騎士としての実力は超一級・・・普通なら護衛に回すはずがないし、かといって襲撃の本命でもない）

武器を構えたまま雪鷹は考えを巡らす。この男に関して不可解な点が多すぎるのだ。実力は間違いなくエース級であるこの男が何故ここにいるのか、その理由が全く読めなかった。この状況で遊ばせておくには勿体無い戦力だ。それをむざむざ遊ばせておくなど、あのスカリエッティがするとは思えない。しかし、時折聞こえてくるシャマルの声が、召喚士がスカリエッティの指示で動いているのは間違いない、と告げている。

「この襲撃にお前は関っていない・・・そう受け取っていいのか？」

急に構えを解いて、雪鷹が男に尋ねた。そんな雪鷹を男は怪訝そうに見つめた。

「この事件に無関係だというのなら、お前と戦う理由がない。お互い、こんな所で命を懸けたくないだろう？これ以上、危険な目に会いたくはないだよ、俺は」

「管理局員とは思えない発言だな」

男の声に怒りと失望が混じる。今にも爆発しそうな激情を理性で必死に押さえ込んだ声だ。しかし、雪鷹に戦う意志がないということを信じたらしく、男も武器を下ろす。

「ガジェットも倒した。早く逃げないと俺の仲間がこっちに来るぞ？」

「そのようだな」

辺りに静けさが戻っていた。男はそう呟くと空へと飛び立った。ガジェットの掃討もほぼ終了したと見て間違いない。そうなるとここにいつまでも残っている理由はない。当然の選択と言えた。

「できればもう戦いたくはないんだが・・・そうはいかないだろうな。たぶん、また会う気がする、今度は戦場（そら）で」

「本気ではなかったくせに何を言う・・・今度、戦場で相見える時は容赦せん」

男はそう言い捨てると雪鷹の前から姿を消した。男がいなくなったことを確認すると雪鷹は大きくため息をこぼし、その場に座り込んだ。

「やっぱり見抜かれてたか・・・まぁ、全力を出していないのはお互い様だからな。それにしても・・・ロングアーチの人間にあんな化け物を相手させるなよな」

一人愚痴を零しながら思い出したかのようにシャマルに連絡を入れる。

「シャマル、こちらロングアーチ１３。召喚士は見つからなかったが、仲間と思われる騎士と交戦した。が、敵には逃げられた。今からホテルに戻る。詳しいことはそっちに着いてから話す。そっちの様子はどうだ？」

「お疲れ様。その様子だと大きな怪我はないようね。こっちもヴィータ副隊長が戻ってきてくれたおかげでなんとか無事よ。新人四人も大きな怪我はしてないわ」

「了解」

そう返すと雪鷹はゆっくりと立ち上がり、ホテルのほうへと飛び立った。

１３『未知との遭遇』（後書き）

きっかけは些細なミス
誰でもするような小さなミス

だけど、その小さなミスが
大きくなって、広がって重なって
深い傷になり、埋められない溝になり

繋がっていく。更なる深みへと
もう、取り戻せない
あの頃には戻らない

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
１４『あらしのよるに』

それは、あらしの前触れ

Intermission 13.1

Intermission 13.1

「一体こいつは何なんだ!?」

査察官ヴェロッサ・アコーズは苦々しげに呟いた。雪鷹に案内されて密輸品のある部屋まで来た所まではよかった。そこで雪鷹と別れ、査察官として密輸物の調査をしている最中にガジェットが襲撃していると館内アナウンスが流れ、こいつは突然現れ、襲いかかってきた。人型の、おそらくは虫か何かなのだろう。鋭い鉤爪と硬い装甲、そして人並みはずれたスピード。戦闘は得意でないとはいえ、一般の魔導士よりははるかに実力があるヴェロッサが苦戦するほどの力をその虫は持っていた。その動きはエース級の魔導士に伍する。

「何が目的だ?」

しかし、虫は答えない。ヴェロッサに鉤爪を向けながらゆっくりと間合いを詰めてくる。鉤爪自体の攻撃力ならヴェロッサの防御魔法でも防げる範疇だが、この虫の速さにヴェロッサでは対応できない。

(人・・・ではないな。使い魔か召喚獣か・・・どちらにしろ、裏で誰かが糸を引いている。誰だ・・・?)

真っ先に思い浮かんだのはこの密輸を取り仕切っている人間だ。しかし、明らかに密輸品の護衛をしているという雰囲気ではない。どちらかというと密輸品を狙う盗賊や強盗に近い印象だ。

「無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）、発動」

ヴェロッサの足元に緑色に輝く魔方陣が広がり、そこから無数の犬達が湧き出てきた。ヴェロッサの持つ古代ベルカ時代の稀少技能、無限の猟犬。魔力で生み出した猟犬を放つことで、その場にいながら探査・捜索を行うことが可能であるため、査察官にはうってつけの能力である。それに加えて、猟犬の名に恥じぬ攻撃力とスピードを兼ね備えている。デバイスを持たないヴェロッサにとって、この猟犬達がまさしくヴェロッサの武器なのだ。ヴェロッサを守るように猟犬達がその周りを囲み、敵を威嚇する。

（とはいえ、敵の正体も目的も不明・・・まずいな・・・僕一人の手に負えるかな？）

自信なさげにヴェロッサが呟く。もちろん、優秀な魔導師ならすぐ傍にいる。幸か不幸か、機動六課が会場の警備に来ているのだから、増援を頼むことは不可能ではない。しかし、六課は六課で戦闘中である上に今のヴェロッサは査察官としての職務中だ。密輸取引の現場を六課の人間に見られるとの後々の処理が面倒になってくる。組織の縦割り運営の悲しい所だ。特に査察部はその性質上、部内においても個人主義の傾向が強く、手柄を分け合うという考えがあるはずがないのだ。

「狙いはここにある密輸品か？」

ヴェロッサの問いかけを相手はまたも無視する。何を命じられているのか知らないが、何かを物色している様子だ。ヴェロッサへの警戒ももちろん怠っていないが、ここで戦うつもりはないらしい。そして、目当ての物を見つけたらしく、小さな箱を取り上げる。何が入っているかはヴェロッサも知らないが、ろくな物ではないだろう。

幸いロストロギアではないらしい。そこでヴェロッサは考える。こいつをどうするべきなのか。下手に捕まえてしまえば、この密輸品の存在が明らかになってしまい、関係者は姿を晦ましてしまうだろう。

（はやてみたいな潔癖の人間なら見逃さないんだろうけどね・・・）

可愛い妹分のことを考えてヴェロッサは自嘲気味に笑う。もちろん、相手は密輸品を盗み出そうとしている犯罪者なのだから何らかの方法で捕獲するべきだが、はっきり言ってヴェロッサはここの密輸品に興味はない。重要なのはこの密輸に関わっている人間達であり、これらの品々がここまで流れてきた密輸ルートである。ロストロギアが盗まれた、というのなら話は変わってくるが、密輸品の一つや二つならば見逃しても大きな損失にはならない。つまり、ここであの虫を見逃す、というのもヴェロッサの選択肢の一つに入っているのだ。

（・・・まったく、自分がどんどん汚くなっていくみたいだよ）

白いスーツを着てきた自分自身を恨めしく思う。汚れのない無垢な色のスーツのその下は一体どれほど汚れてしまっているのだろうか。今更だとは思いながらも考えずにはいられなかった。彼我の戦力差と危険性、事件の重要度等々、様々な諸要素を考えた上でヴェロッサは言った。

「もし、僕の言葉が理解できるなら聞いてくれ。もし、君が今手に持っている品物だけしか盗まないというのなら、この場のあれこれについては見逃そう。早々に立ち去ってくれ」

はやてが聞いたら怒りだしそうなヴェロッサの決断。しかし、目の

前の小さな事件ばかりに目を囚われて、その背後に広がる密輸ルートを放置してしまえば結局はいたちごっこなのだ。大事の前の小事というと語弊があるが、明日の千人が救われるなら、今日の一人を見捨てることを厭わないのが管理局の、もっと言うなら査察部の人間だ。管理局の上層部の不正に繋がる手掛かりを密輸品一つで見逃すことなどできるはずがない。ヴェロッサの言葉が理解できたのか虫は大きく一度だけ頷くと、その部屋から姿を消した。一人残されたヴェロッサはため息を零しながらぼやく。

「こんなことをはやてに知られたら嫌われるかな・・・」

当然のことながら、誰も答えてはくれない。一抹のむなしさを噛みしめながら、ヴェロッサは何事もなかったかのように密輸物の調査を再開した。

Intermission 13.2

Intermission 13.2

「旦那ぁああっ！！」

森を抜けたところで烈火の剣精ことアギトがゼストを迎える。

「心配したよ、旦那。旦那と別れてすぐに森の方でででかい音がして」

「あぁ、管理局の魔導士とな・・・」

黒衣の剣士との一戦。久しぶりに騎士として胸の踊る戦いだった。多くの死線を潜り抜けてきた自負のあるゼストが初めて見る未知の剣技。シノブ・ユキタカと名乗ったあの男はゼストの攻撃を受け止めるのではなく、手に持った短剣で軌道を逸らして外していた。理屈はゼストに理解できたが、実際にするとなれば話は別だ。血の滲むような修練の積み重ねがなければ到底実戦では使えない。タイミングが合わなければ、怪我ではすまない。それ相応の自信がなければできることではない。

「ミッド式を使う魔導士だったが、なかなか奇妙な技を使ってな・・・少々、手こずった」

「一人で戦ったのか！？どうしてあたしを呼んでくれなかったんだよっ！！」

アギトが大声で叫ぶのをフードを被った少女、ルーテシアが宥める。

「ゼスト、怪我してない？」

「あぁ、問題ない。ルーテシア、お前は？」

大丈夫、といわんばかりにルーテシアは首を横に振る。

「そうか。ところで、奴から頼まれた品物とは何だったんだ？」

ガジェットがホテルを襲撃する数刻前、ジェイル・スカリエッティはゼストにホテルからあるものを奪ってくるように言った。しかし、レリックが絡んでいないなら聞く必要はない、と一蹴され、ルーテシアに強奪を頼んだのだ。優秀な召喚士であるルーテシアの能力を使えば、こっそりと品物を盗み出すことは容易い。事実、ガジェットの襲撃で警備が乱れた隙をついてルーテシアの召喚虫が頼まれた物をまんまと盗み出したのだ。

「わかんない。オークションの品物じゃなくて密輸品だったみたい」

興味がないのか、ルーテシアはつまらなさそうに呟く。ルーテシアにとって捜し求めているレリックでないのなら、ロストロギアであろうと密輸品であろうと大差はないのだろう。

「ゼスト、何かいいことあった？嬉しそうな顔してる」

「嬉しそうな顔？」

ルーテシアの言葉にゼストは首をかしげる。自慢ではないが人相は悪い方だという自覚はある。普段から仏頂面で愛想も悪い。思い返してみても、いいことは何もなかった。嬉しそうな顔になる理由が

思い浮かばない。そこまで考えてゼストは気付いた。気持ちの昂ぶる理由が一つだけあった。あのシノブ・ユキタカと名乗ったあの管理局員との戦いだ。これまで長い間埃を被っていた騎士としての何かに火が付いた。今はまだ灯火のような小さな火だ。しかし、そう易々と消えることのない強い火だ。いずれ、戦場で顔を合わせることになるだろう。理由はないがゼストはそう確信していた。その時には、この小さな火が猛る轟炎になっているだろう。

「・・・あぁ、そうかもしれんな。アギト、そう遠くない未来にお前が必要になるだろう。その時は頼む」

「お、おうよ。そんときはあたしが全力で旦那の力になるよ」

常々アギトはゼストの為に尽くすと言ってきたが、ゼストからそれを言われたのは今日が初めてだった。融合騎として嬉しいことこの上ないが、同時に不安もあった。長時間の戦闘はゼストの体に著しい負担がかかる。文字通り、命を削って戦っているのだ。そして、それはゼスト自身が一番理解している。その上でアギトに頼む、と言ったのだ。その意味を噛み締めてアギトは一人、心に誓う。

（旦那のことはあたしがぜってぇえに守ってみせる）

「さて、お前の探し物に戻るとしよう」

そう言ってゼストがルーテシアの手をとる。

「うん」

ルーテシアは小さく頷くと一行は森へと消えていった。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　１３．３（前書き）

東北・関東が未曾有の大地震で大変な中で新た話をに投稿することには躊躇われるものがあります。

しかし、物書きはやはり書くことしか出来ないようです。素人風情が偉そうに、と思われるかもしれませんが、この作品がささやかな楽しみになれば幸いです。

できるなら、明るい話をお届けしたかったのですがストーリーの都合上、しばらくシリアスな展開が続きます。ご容赦のほど、よろしくお願いします。

では、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　１３．３　始まります

Intermission 13.3

Intermission 13.3

「前線のおかげでガジェットはほぼ撃墜したんですが、すみません、召喚士は追えませんでした」

「近隣の観測隊に通達は出しましたから移動ルートくらいは掴めると思います」

モニター上でシャーリーとルキノが事件の経過を部隊長であるはやてに報告する。報告を聞いたはやては軽く頷きながら、微笑みを浮かべる。

「うん、味方に被害は出てへんし、任務自体も順調。ええことにしよう」

そう言って、はやては近付いてくる足音に気付き、振り返る。そこにはいつもは調子のいい笑顔を浮かべているはずのヴェロッサ・アコーズが少し疲れた様子で立っていた。

「やぁ、はやて」

「ロッサ、どうしたん？なんや、お疲れ気味やね」

心配するはやての言葉にロッサはなんでもないよ、笑顔で返し、大きめの封筒をはやてに手渡した。

「頼まれていた調査報告書だ。先に言っておくけど、なかなか面白

い経歴の持ち主だよ、驚くことは請け合いさ」

普段のヴェロッサとはどこか違う雰囲気にはやては報告書の入った封筒を受け取る。いつも使っている薄茶の紙封筒のはずなのに、重く感じられてしまうのは妙な雰囲気に呑まれてしまっているからなのだろうか。はやては緊張した面持ちで封を開け、報告書に目を通す。そして、そこに書かれていた内容に我が目を疑った。

「シノブ・ユキタカ・・・一等空尉っ!?曹長やのうて、一尉やて!?なんやねん、これ・・・立派な階級偽装やないか!?」

はやての顔から血の気が引いていく。何か裏があるだろうとは思っていたが、まさか階級を偽装しているとは思いもしなかった。当然のことながら階級偽装は立派な違法行為であり、許されるものではない。驚愕の事実はまだ続く。

「魔導師ランク陸戦S＋・・・空戦でもS－やて!?」

「はやて、少し声を抑えて。オークションが開始して人がいないとはいえ、大声を出すのはよくない」

「せやけど・・・いくらなんでもこれはないやろ・・・」

書類を指さしながらはやては呻く。雪鷹が部隊に来る前に見た報告書とは内容がまるで違っている。あれが情報一課から送られてきた書類であることを考えると、意図的に内容を変更したであろうことは容易に想像がつく。流石はスパイ活動で有名な情報一課である。驚くことさえ馬鹿らしく思えてきたはやては盛大にため息をこぼす。

「潜入捜査しやすいように色々誤魔化したんやろうね・・・普通に

考えてオーバーSランク魔導師なんかを捻じ込める余裕なんて六課にはないからなぁ」

ただでさえ、隊長陣にリミッターをかけてSランク魔導師を集めている機動六課だ。そこに新たにSランク魔導師を入れることなど不可能に等しい。部隊ごとの魔導師保有制限にひっかかってしまうのは言うまでもなく、なにより目立つ。スパイを送り込もうと考えている人間にとってあまりいいことではないだろう。

「問題は、彼がどうして六課に来たかだよ、はやて。仕事もないのに地上本部に出入りしているし、レジアス中将の秘書官と二人きりでいるところを目撃したっていう人間もいる。本人は個人的な付き合いだって否定していたけど、レジアス中将が送り込んだ可能性は十分あると思うよ。あまり言いたくはないけど、中将はいまだにはやてのことを犯罪者呼ばわりしてるって聞く」

ヴェロッサの言葉にはやては頷く。その顔は既に普段の、部隊長としてのはやての顔に戻っていた。雪鷹の出自や経歴がどのようなものであれ、今更変えることはできないのだ。それならば、はやてが考えるべきはこれからどうしていくかだ。それが上に立つ者の義務だ。

「そやね・・・それもあるやろうし、レジアス中将は私やロッサみたいな稀少技能（レアスキル）持ちがお嫌いや・・・私が部隊長を務めてる六課のことは面白く思ってへんやろうね」

はやてがわずかに顔をしかめながら俯く。闇の書事件から既に十年の月日が経つ。当然、はやてや守護騎士一同の執行猶予期間は終わっているし、特別捜査官として多くの事件の解決に貢献してきた。しかし、それで過去に犯した罪が消えるわけではない。レジアス中

将の他にも事件の詳細を知る管理局上層部ではいまだにはやてのことを嫌っている人間も少なくないと聞く。自虐ともとれるはやての言葉にヴェロッサは不愉快そうな表情を浮かべる。

「それは、はやてを妬んでのことだろう？闇の書事件なんてただのこじつけだ。気にするようなことじゃない」

いくら優秀な魔導師でも十代で佐官を務めることなど通常ありえない。しかし、はやてはそれを実現してしまった。運や人脈も少なからず影響していることは否定できないが、それを実現するだけの能力がはやてにあり、そしてその為の努力の惜しまなかったのだから当然のことなのだ。しかし、多くの人間は十九歳という若さで二佐まで駆け上がれたその才覚を妬み、過去に犯した過ちを引き合いに出して、はやてを傷つける。

「たとえ、それでも罪は罪や。一生かけて背負わなあかん・・・ありがとうな。でも、ロッサが気にすることやないよ」

そう寂しげに笑いながらはやては書類に目を戻した。

「また改めて、ユキタカ一尉と話してみるな。忙しいのに色々無理言ってごめんな、ロッサ」

「僕は姉さんみたいにはやてや六課のみんなを守るだけの力はない。でも、力になりたいと思ってるんだ。僕にできることなら何でも言ってくれ。はやては僕とカリムにとっては妹みたいなもんなんだから」

「ありがとうな、ロッサ」

はやてはそう微笑みながら、ふと思った。自分は恵まれている、と。両親に先立たれ、一人ぼっちだった子供時代。寂しいと思ったことは一度もなかった。それがその頃のはやてにとっての当たり前だったのだから。しかし、紆余曲折を経て、大切な家族ができて、かけがえのない親友ができた。尊敬できる上司の下で働くことができ、今では信頼できる部下を率いている。犯罪者には分不相応な幸せだ。正直なところ、今でも全てが夢だったのではないかと思う時がある。月の陰った暗い夜、ふと目を覚ますと、あの頃に戻っているかのような錯覚に陥る。愚かしい、と思う一方で安堵している自分がいる。夢でよかった、そう心のどこかで、わずかばかりとはえ、そう思っているのは紛れもない事実だ。

「私は・・・幸せ者やな」

ヴェロッサには聞こえないようにはやては一人呟いた。

１４『あらしのよるに（前編）』（前書き）

手にしたのは魔法の力
受け継いだのは兄の夢

この手の魔法は貫く力

どんな敵も
どんな想いも

私の全ては、叶えられなかった夢の為に

貫き通すと私は決めた。だから…

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります。

１４『あらしのよるに（前編）』

１４『あらしのよるに（前編）』

ホテル付近にはガジェットの残骸が散乱している。頑強であるはずの鋼鉄製の機体は無残に貫かれ、あるいが切り裂かれて原形を留めていない。集めてどうするのか、と言いたくなるような欠片を一つ一つ残さずに丁寧に拾っていく。曰く、これも貴重なサンプル、らしい。その一つを手にとって、金属片についた土を軽く払いながら雪鷹はぼやく。

「確かにこういう調査はロングアーチの担当です。しかし、一言だけ言わせてもらうなら・・・私も一応戦ってきた人間なんですけどね・・・」

「もう・・・人手が足りないんだから仕方ないでしょう？我慢して」

その横でシャマルが雪鷹を嗜める。雪鷹と同じ管理局の制服の上から白衣を纏ったその姿は少しちぐはぐな感じもするが、それでも様になって見えるのは本人の容姿によるものが大きいのだろう。そんなシャマルを一瞥して、雪鷹は盛大にため息をついた。

「はっきり言って割に合わないよな・・・前線と後方支援の兼務で給料は一人分なんて・・・」

思い返せば六課において時々、不当な扱いを受けていると思わないときがないこともない。日頃の自身の言動を顧みればいたしかたない部分もあるが、それでも、思う所はやはり、ある。

「八神二佐、人遣いが荒いよな・・・」

一線で戦えるだけの十分な戦力を有しているせいもあり、怪我で動けないなのはの代行として戦闘に駆り出されたこともある。しかし、名目はロングアーチスタッフとしての現場管制なのだが、しているのは紛れもなく戦闘行動だ。おそらく、危険手当はついていないだろう。

「口を動かすより、手を動かす」

隣で叫ぶシャマルの声を雪鷹は右から左に聞き流し、ふと思い出したようにシャマルに尋ねる。

「そういえば、今日の戦闘はどんな具合だった?ヴィータ副隊長の罵声が聴こえてきたような気がするんだが・・・何かあったのか?」

「それは・・・」

シャマルは言葉を詰まらせ、辺りを見渡すと何とも言えない表情を浮かべる。雪鷹に言うべきかどうか迷っている様子だ。しかし、すぐに小さな声で雪鷹に言った。

「ティアナがミスショットをしちゃって、スバルを誤射しかけたのよ。寸前でヴィータ副隊長が間に合って大事にはいたらなかったんだけど、そのとき、ヴィータ副隊長がちょっときつい言葉を言っちゃって・・・」

シャマルの言葉に雪鷹はわずかに眉をしかめる。

「ミスショット？珍しいな・・・射撃の腕はあれで悪くない。よほどの混戦ならともかく、普段通りに戦っていれば外すことはあっても仲間を撃つような真似はしないはずだ。焦って冷静さを欠いたか、それとも無理したのか？」

雪鷹の言葉にシャマルは一瞬驚いた表情を浮かべ、そして小さく、しかし、はっきりと頷いた。

「ガジェットが急に遠隔操作に切り替わって動きがよくなって、あと四発カートリッジロードで弾丸を制御しきれなかったみたい。でも、意外ね。あなたがあの子達のことをそんな風に見てたなんて」

「どういう経緯であれ、面倒を見ると言った以上責任は持つさ。シャマル医官には軽薄そうに見えるかもしれないが、これでも年並みの責任感は持っている」

意外というシャマルの言葉に気に障ったのか、どこか棘のある雪鷹の声だった。しかし、その矛先はシャマルには向いていないのは明らかだった。雪鷹の視線の先にはミスショットをした当のティアナとなのはがいた。なのはが注意しているのだろうが、その表情はどこかおだやかで叱っている感じがしない。一方のティアナも聞いてはいるものの、納得しきっている顔には見えない。

「・・・まぁ、二度目を繰り返さなきゃ、それでいい」

雪鷹は小さく呟くと作業に戻った。直前の一瞬の間は聞かなかったことにして、シャマルも作業に戻った。しかし、そのとき見た雪鷹の横顔はあまりに鮮烈に脳裏に焼き付いて忘れられそうになかった。氷のように冷たく、慈悲というものを感じさせない灰色の瞳。それは紛れもない人殺しの目だった。

・＊・＊・＊・

ホテルから戻ったティアナは一人で精密射撃の練習をしていた。ティアナを囲むように動き回るターゲットに対して銃口を合わせるターゲットトレーニング。地味なトレーニングではあるが、この繰り返しが命中精度を向上させる為には必要不可欠だ。

「証明しなきゃいけないのに・・・私は、ランスターの弾丸は全てを撃ち抜けるんだって・・・それなのに・・・」

動く標的を睨みつけて、ティアナはクロスミラージュの引き金を引く。ティアナ達が隊舎に帰って来たのはまだ日没前だったが、今ではすっかり日も沈み、引き金を引く音と乱れた息遣いしか聞こえない。人差し指の皮が破れ、血が滲んでいるがそんなことは気にも留めず、ティアナは狙いを定め、引き金を引く。

カコン、という空撃ちの音。

ティアナを嘲笑うかのように空しく響くその音にティアナは唇を噛みしめる。思い出すのは昼間のミスショットだ。

カートリッジの四発ロード。
訓練でも扱ったことのない弾数と魔力量。

無理をしている自覚はあった、しかし、それでも制御できる自信が、否、制御しなければならない義務がティアナにはあった。この程度は兄なら容易く扱えた。兄の力を証明するにはあの程度が扱えなければ話にならない。ティアナはできなければならないのだ。その為にここにいるのだから。

（なのはさんの訓練は基礎が中心で・・・もちろん、それが大切なのはわかるけど、でも、それじゃ、いつまで経っても強くなれない。だから・・・）

クロスミラージュを握る両手にティアナはもう一度力を込める。血が滲む指先は既に感覚が消えようとしていた。しかし、ティアナにとってはただそれだけのことだ。

まだ銃を握れる。
的が見える。
体が動く。

自主訓練を止める理由などどこにもなかった。しかし、男の声でティアナの訓練は中断されることになる。

「もう、それくらいにしとけ。帰ってからずっとだろう？」

ティアナが顔を上げるとそこに制服姿の雪鷹が立っていた。その後

ろにはパイロットスーツを着たヴァイスがいる。

「もう四時間も続けてるぜ。いい加減倒れるぞ?」

「ユキタカ曹長にヴァイス陸曹・・・見てたんですか?」

ティアナはわずかに驚いた様子で二人に尋ねる。

「ミスショットが悔しいのはわかるけどよ、精密射撃型のスキルなんてそうすぐに上手くなるもんじゃねぇし、無理な詰め込みで妙な癖をつけるのもよくねぇぞ」

「ゆっくり休め、となのはから言われただろう?自習練をするな、とは言わないが、そろそろ言われた通り、休め」

二人の言葉にティアナは煩わしそうな表情を浮かべてから、頭を下げる。

「お気遣いありがとうございます。でも、詰め込んで練習しないと上手くならないんです。凡人なもので・・・」

貴方のような天才には判らないでしょうが、と続く言葉を呑み込んでティアナは頭を上げる。

ヴァイス陸曹はともかく、この雪鷹という人間は紛れもない天才だ。

リミッターがかかっているとはいえ、管理局のエースオブエースを一対一で打ち負かすほどの実力を持ちながら、ロングアーチの一員

として勤務している。なのはの骨折というアクシデントがなければ前線に出ることもなかっただろう。もし、ティアナに雪鷹と同等の力があれば、間違いなくティアナの夢である執務官になれる。それだけの実力を持ちながら、後方支援という日陰にいる雪鷹の考えがティアナには理解できなかった。ほんの少しだけ努力をすれば、執務官を含め、どんな役職にでも就くことができるだろう。

それだけの才能に恵まれながらも無駄にしている雪鷹が羨ましく、妬ましく、そして憎らしくあった。

「凡人、か・・・ランスター陸士、何か勘違いしているようだが、お前は紛れもない天才だ。俺とは違って」

「・・・馬鹿にしてるんですか？」

ティアナが敵意を剥き出しにて睨みつける。雪鷹の方が階級は上だということはもちろんティアナも承知している。それでも、ティアナは雪鷹の言葉が許せなかった。

ティアナが欲しいものを持っていながら、無駄遣いしている雪鷹が。そして、持たないティアナを嘲笑うかのような雪鷹の態度が。

私が天才？

冗談も甚だしい。才能に乏しいことはティアナ自身が一番理解して

いる。陸士訓練学校を首席で卒業したものの、それは足りない才能を努力で補った結果であって、それ以上のものではない。

「馬鹿になんてしていない。事実を言っただけだ。お前は天才だ」

「ふざけないでっ！！私より魔力も上で、魔導師ランクも上。珍しい魔力変換資質を持ってて、なのはさんに一対一で勝てる人間に私の気持ちがわかるはずなんてないっ！！私を馬鹿にするのもいい加減して！！どうせ、私は貴方に勝てないわよ、クロスレンジはもちろん、ミドルレンジも貴方の方が実力は上・・・凡人を見下して、そんなに楽しいですか！！」

「おい、ティアナ、それぐらいにしとけ」

慌てたヴァイスが止めに入るがそれでもティアナは止めない。涙を流しながら心のままに叫び続けた。心の奥の劣等感を雪鷹への怒りと憎しみにすり替え、雪鷹を罵った。雪鷹は何も言わずに、黙ってその言葉を聞き、ようやく止まったかと思うと何事もなかったかのような表情でティアナに言った。

「言いたいことはそれだけか？」

ティアナが顔を真っ赤にして睨みつけるが雪鷹が動じるはずもない。淡々とした口調で雪鷹はティアナに告げる。

「ミスショットをした経緯のおおよそは聞いた。訓練でもしたことのないカートリッジの４発ロードをしたらしいな。間違いないか？」

雪鷹を睨みつけたまま、ティアナは頷く。すると、雪鷹は小さくため息を零し、こう言い捨てた。

「なるほど。少しは見込みがあると思ったんだが・・・所詮はランスターの妹か・・・お前も兄貴と同じだな」

雪鷹のその言葉にティアナの中で何かが弾けた。ごちゃごちゃしていた頭の中が急に真っ白になり、考えるよりも先に身体が動いた。

愛銃クロスミラージュの銃口を雪鷹に向け、狙いを定める。
無駄のない、流れるような素早い動き。

すぐ横にいたヴァイスが止めるよりも先にティアナはその引き金を引いた。
カツンという撃鉄の落ちる音と同時にオレンジ色の閃光が雪鷹の頬を掠め、一筋の紅い線を引く。雪鷹は表情一つ変えずに傷口にそっと手を添えた。

「今の言葉、撤回してください。次は・・・当てます」

クロスミラージュを構えたままティアナが低い声を出す。銃を持つ手が震えているのは恐怖のせいではない。

抑えることのできない怒りが震えとなっているのだ。

「おい、ティアナっ!!」

「邪魔しないでっ!!ヴァイス陸曹・・・貴方に何が判るんですかっ!!あの人は兄を・・・私の兄を侮辱したんですよっ!!許せるわけがないっ!!」

止めに入ろうとするヴァイスをティアナが一喝する。ヴァイスが止めに入るよりもティアナが引き金を引く方がはるかに早い。それを承知しているからこそ、ヴァイスは動けない。興奮状態のティアナを下手に刺激すると何をしでかすかわからない。そんなことを知ってから知らずか、雪鷹は呆れたように小さくため息を零した。銃を向けられているこの状況が理解できないはずがないのに、雪鷹は何事もないかのように振舞っている。

「・・・脅しだと思ってるんですか？」

そんな雪鷹の態度が気に食わないティアナが吼える。しかし、雪若は煩わしそうな顔を浮かべるだけで発言を撤回する素振りさえ見せない。苛立ったティアナは無言で引き金を引く。雪鷹の頬にもう一本傷が増えた。その傷は一発目より深く、流れ出た血が頬を伝う。

「・・・故人を侮辱したことに関しては素直に非を認め、詫びよう、すまなかった。だが、発言そのものを撤回するつもりはない」

反省しているようには見えないその態度にティアナは更に引き金を引く。しかし、三発目の弾丸は雪鷹に当たることはなかった。驚くティアナに雪鷹な事もなげに言う。

「流石に今のは怪我では済ませられんな」

その動きと言葉にティアナは背筋が凍りつく感覚を覚えた。一発目、二発目は雪鷹の頬を掠めるように狙って撃ったいわば威嚇の弾だ。

しかし、三発目にティアナが狙いを定めたのは雪鷹の眉間。

非殺傷設定でも確実に昏睡、殺傷設定で撃てば致命傷どころか即死

する急所だ。

それを雪鷹は見切って難なく躱したのだ。おそらくは一発目、二発目も見切っていた。躱せるのに躱さなかったのは大した怪我にならないと知っていたからで、躱そうと思えば先の二発とも躱せたのだ。三発目の弾丸を躱したように。

「馬鹿にしないでっ！！」

ティアナは叫びながら続けざまに引き金を引く。パン、パン、パンと連続する破裂音と同時に三発の魔力弾が雪鷹を襲う。しかし、雪鷹は上半身をわずかに動かしただけでそれを躱す。

「それじゃ、何発撃っても変わらない。殺気が強すぎる。機械相手や並みの犯罪者なら通用するだろうが、気に聡い者なら目を瞑ってても躱せる。今のお前に必要なのは射撃の精密さでも弾の制御でもない。自分自身をコントロールする能力だ。今のままだと、当たるものも当たんない」

「・・・どういう意味ですか？」

銃を構えたままティアナが尋ねるが雪鷹は飄々とした態度を崩さない。答えるつもりがないことはその顔を見れば明らかだ。

「後はヴァイス陸曹に聞いてくれ。射撃は専門外なんでね。専門がすぐそこにいるんだ、色々聞けば参考になる」

そう言い捨てると雪鷹は訓練場から去っていった。

「ヴァイス陸曹・・・今の言葉はどういう意味ですか」

「当てようって気が強すぎるってことだろ。それで余分な力が入ってるってことじゃねぇのか?そんなことより、ティアナ、おめぇは自分が何をやらかしたのか判ってんのか?」

ティアナを威圧する低い声。決して大きな声ではなかったがその重い響きはティアナを委縮させるのに十分だった。普段はどこかとぼけた様子を見せるヴァイスが初めて見せる怒りの表情にティアナは困惑の表情を浮かべる。

「どんな理由があったにせよ、おめぇは自分の意志でユキタカ曹長に銃を向けて、引き金を引いたんだ。それがどういう意味かわかんねぇほど馬鹿じゃねぇだろう?」

その言葉にティアナは俯く。雪鷹がどんな態度をとっていたにしろ、ティアナの上官であることに変わりはない。銃を突きつけ、引き金を引き、傷つけたのだ。どんなに甘く考えて懲戒処分は免れない。実際に処分を受ければ当然のことながら、ティアナの夢である執務官になどなれるはずもない。それさえ忘れるほどにティアナは激昂し、冷静さを欠いていた、ということなのだがそれで許されるほど世間は甘くない。

「これ以上、練習しても無駄だってわかるな?」

休め、と遠回しに告げるヴァイスの言葉にティアナは力なく頷く。

「曹長には今日のことは目瞑ってもらうように俺が頭下げとくから、おめぇはもう帰って寝ろ。いいな」

「で、でも・・・そんなこととしたらヴァイス陸曹に迷惑が・・・」

「そう思うなら最初からするな。それに、俺も現場にいたんだ。監督不行き届きって奴だ」

気にするな、と手を振りながらヴァイスはそう言うと雪鷹の後を追って走り出した。一人残ったティアナは自分自身の愚かさを呪うようにクロスミラージュを握り締める。

「なにやってるんだろ、あたし・・・馬鹿だな」

自嘲するかのようにティアナは力なく笑い、立っていられなくなったのか、そのまま地面に座り込んでしまう。その目は虚ろで何も映していない。じわじわと込み上げてくるむなしさと悔しさ。しかし、何もする気になれない。動くことも億劫で、いっそこのまま眠ってしまおうか、とも考えたがそんな自分を想像してあまりにも惨めだったので、無理矢理立ち上がって、隊舎へと向かう。日頃はなんとも思わないが、今日は余計に体が重い。疲れているのだろうか、と考えティアナは自嘲する。ホテルから帰ってきて、とくに休みもせず自習練に励んでいたのだ。疲れていて、当然だ。しなければならないことが幾つか残っていたような気もするが、こんな状態でできるはずがない。明日に回そう、とティアナは呟き、夜空を見上げた。

「だけど、私は・・・間違ってなんかいないんだ」

その声はあまりに小さく、涙に濡れていた。

・＊・＊・＊・

訓練場を抜けるとすぐにヴァイスはすぐ雪鷹に見つけた。

「すみません、ユキタカ曹長。今回の件は私の監督が行きとどかず・・・」

「なんのことだ?」

雪鷹は振り向くと煩わしそうにため息を零す。頬を流れる血は鮮やかで、痛々しい。

「ティアナのやらかしたことは黙って見逃せるようなことじゃありません。しかし、あいつはまだ若いから自分自身をコントロールしきれていないんです。どうか今回は私の監督不行き届きということにして頂けないでしょうか」

「だから、何のことだ?ランスター陸士が何かしたの?」

そう言って雪鷹は大きくため息を零し、更に言葉を続けた。

「何かしたのなら俺も上に報告しなきゃならんが、今日は色々あって疲れてるんだ。余計な仕事を増やさないでくれると嬉しいんだが?」

微かに笑った雪鷹の口元を見てヴァイスは心の内で安堵のため息を零す。どうやらはじめから上に報告するつもりはないようだった。雪鷹が問題にしなければあとはなんとか誤魔化せるだろう。雪鷹の

頬の傷が気にはなったが、それは雪鷹がきっとどうにかする心づもりなのだろうと勝手に決め付けるとヴァイスは軽く頭を下げた。

「失礼しました。私の勘違いだったようで・・・で、ユキタカ曹長、失礼ついでに質問してもいいっすか？」

雪鷹は何も言わなかったが、沈黙を肯定と受け取ったヴァイスは言葉を続けた。

「一体誰から聞いたんすか？俺が射撃型魔導師だって・・・六課の人間でそのことを知っている奴なんざそういねぇし、見ず知らずの人間に話すような口の軽い奴じゃねぇ・・・」

「お前も俺の古巣がどんなところか知ってるだろう？それぐらいこと、調べるなんてわけもない」

こともなげに話す雪鷹の口ぶりにヴァイスはあることに思い当り、声を低くして雪鷹に尋ねた、

「じゃあ、ひょっとして・・・ティアナの兄貴のこと全部知ってててあんなこと言ったんすか？」

「あぁ、当然だ」

平然と頷いた雪鷹を見てヴァイスはキレた。

「一体どういうつもりなんすか！？俺は納得できねぇぜ。ティアナが傷付くのを知っていてあいつの兄貴の話をしたんすか！？あの事件のせいで、あいつがどんなに傷付いたか・・・大好きだった兄貴が死んで、上司からひでぇこと言われて・・・曹長があいつのこと

をどう思ってるかは知りませんが、ああ見えてあいつは人の何倍も苦しんで、努力してきて、そして、悩んでるんっすよ。エリート揃いの機動六課で居場所を見つけようと必死なんす。それを・・・」

雪鷹の方が階級は上だと判っているが、苛立っているせいかヴァイスの言葉は荒い。そんなヴァイスに雪鷹は事もなげに返す。

「それがどうした？悩みの一つや二つ、誰だって抱えている。俺も真っ当じゃない人生を歩んできた人間だ、自慢にもならないがな。そんな簡単なことに気付きもしないで一人でうだうだと喚いてる人間の面倒を見るほど俺はお人好しじゃない。不幸自慢がしたいなら聖王教会に行けばいい」

ヴァイスの言葉を容赦なく切り捨てると雪鷹は更に言葉を続ける。

「ランスター陸士の無茶にどんな理由があるかは知らんし、興味もない。だが、その無茶のせいで、仲間の一人を誤射しかけた。それだけは紛れもない事実だ。あいつを庇うのは勝手だが、下手したらそのせいで一人死んでいたかも知れないんだぞ？それは忘れるな」

ヴァイスの顔色がわずかに曇る。

「あと、付け加えるなら、ヴァイス陸曹、お前やティアナが知っているのは事件の一面でしかない。あいつの兄、ティーダ・ランスターはそれ相応の報いを受けたと俺は思っている」

「・・・それはどういう意味っすか？まさか、連中みたいにあんたも犯人を取り逃がした奴はクズだなって思ってるんすか？」

「そうだな・・・言葉は悪いが、クズという評価に異論はない。も

ちろん、それなりの理由に基づいての評価だ。こっちにも色々あるんだよ、あまりしゃべらせてくれるな、ヴァイス陸曹」

迷惑そうな表情を浮かべる雪鷹を見てヴァイスは仕方なく頷く。雪鷹の人となりはよく掴めないままだったが、どこぞの上司のような心ない人間ではないことはヴァイスにも理解できた。おそらくはヴァイスやティアナの知り得ない、雪鷹のみが知り得る情報を握っているのだろう。だからといって雪鷹の言動を許す気にはなれなかったが、その辺の事情が理解できないほどヴァイスは子供でもないのだ。

「・・・わかりました」

ヴァイスの返事を聞くと雪鷹は隊舎へと帰っていった。やりきれない思いを胸に抱えたヴァイスは悔しそうに夜空を見上げる。

「一体、なんなんだよ・・・あんたは」

１４『あらしのよるに（前編）』（後書き）

中編に続く

どうも、月兎です。
皆様、日頃から『魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ』をご愛顧頂き、まことにありがとうございます。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

今回は読者の皆様に幾つかアンケートに協力をお願いしたく参りました。

一つ目はこの小説の前書きと後書きについてです。今までは前書きで導入、後書きで次回予告という形式でしたが、その結果、一方通行になってしまい、読者の皆様との絡みがほとんどなく、変更すべきか悩んでいます。よろしければ皆様のご意見をお聞かせください。

１：現状維持

２：後書き＋雑談

３：後書き無しで雑談のみ

４：その他　（具体案）

続いて二つ目です。皆様のおかげで、この小説ももうすぐ３０万ＰＶに到達します。それを記念して番外編を書こうと考えているのですがその番外編に関してのアンケートです。

ａ：なのは達の訓練校時代
雪鷹となのは、フェイトの出逢いを中心にしたお話。ほのぼの風味に仕上げるつもりです。ひょっとしたらハードな模擬戦の可能性も

ｂ：雪鷹の情報一課時代
一課の一員として暗躍する雪鷹。ダーク＆シリアスは雰囲気でお届けします。ちょっとアダルトが入るかも

ｃ：六課メンバー（女性）と雪鷹
六課女性陣と雪鷹のほんのり甘い恋愛風味の予定。時系列は無視してます。雪鷹の相手役をご指名ください。

ｄ：ほのぼの日常編
文字通り、他愛のない六課の日常を描きます。ギャグをねじ込めるならねじ込みたいけど、笑いには自信なし

ｅ：なし
早く本編進めろ、な人はこちらを

注：３０万ＰＶ記念小説に関しては今の話に一区切りついてから投稿する予定ですので、実際に投稿できるのはしばらく先になると思います。

皆様のアンケートのご協力、小説に関するご意見、ご感想、ご質問等々心よりお待ちしています。これからも『魔法少女リリカルなの

はＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ』をよろしくお願いします。

ではでは、月兎でした。

15『あらしのよるに（中編）』（前書き）

――守りたい人がいる

だから、もう決めた――

15『あらしのよるに（中編）』

15『あらしのよるに（中編）』

部隊長室には部屋の主である八神はやて二等陸佐を筆頭に機動六課の隊長陣が顔を揃えていた。重苦しい、とまではいわないが楽しいおしゃべりの真っ最中といった様子でもない。

「訓練中から時々気になってたんだよ、ティアナのこと・・・強くなりたいなんてのは若い魔導師ならみんなそうだし、無茶も多少はするもんだけど、時々ちょっと度を超えてる」

ヴィータの言葉になのはとフェイトは頷く。訓練でティアナと接する機会が多い二人もヴィータの指摘には気付いていた。二人の目から見てもティアナは優秀な人間だ。射撃の精度はもちろんのこと、幻術の腕前や新人チームを引っ張っていく指揮能力は十六歳という年齢から考えるとかなり高い水準にあるといっていい。魔導師ランクこそBランクだが、中距離戦闘だけに限ってみればAランク、射撃の腕だけならAAランク魔導師にも引けはとらないだろう。これもティアナ自身の日々のたゆまぬ努力の成果だ。

「あいつ、ここに来る前に何かあったのか？」

ティアナは強い。クロスレンジとロングレンジはほとんど手付かずの状態で、若い故に経験不足である所は否めないが、それでも、同年代の射撃型魔導師に比べるとその実力は頭一つ、否二つ分は抜きんでている。そのティアナが更に強さを求めるとなると、それなりの理由がついて回るのは間違いない。ヴィータの言葉になのはは小

さく頷いた。

「うん・・・ティアナのお兄さん、執務官志望の魔導師だったんだけど、両親を亡くしてからはそのお兄さんが一人で育ててくれたんだって・・・だけど、任務中に・・・」

「亡くなった、か？」

言いづらそうに言葉を途切らせたなのはの続きをシグナムが続ける。なのははその言葉に頷きならモニターにティアナの兄のデータを表示させる。

「うん、ティアナのお兄さん、ティーダ・ランスター。当時の階級は一等空尉。所属は首都航空隊。享年２１歳・・・」

「結構なエリートだな」

ヴィータの言葉にフェイトは悲しげに俯く。

「そう、エリートだったから、なんだよね」

「それ、どういうことなん？何か問題でもあるん？」

意味深なフェイトの言葉にはやてが首を傾げる。任務中に殉職する魔導師は決して珍しいことではない。死者を侮辱するつもりはないが、管理局内ではよくあること、と言ってしまえばそれで片付いてしまうのだ。もちろん、残された遺族にとってみれば悲しむべきことであり、ティアナのように身寄りのない子供にとっては人生の分かれ道にもなりかねないのだが。

「ティーダ一等空尉が亡くなったときの任務・・・逃走中に違法魔導師に手傷は負わせたんだけど、取り逃がしちゃってて・・・」

「まぁ、地上の陸士部隊に協力を仰いだおかげで犯人はその日の内に取り押さえられたそうなんだけど・・・」

「その話なら私も前の部隊で耳にしたな・・・確か、上司の男が心ない発言をして問題になったらしい」

「「問題？」」

シグナムの言葉にはやてとヴィータが揃って首を傾げる。どちらかというと噂話には疎いシグナムの耳にも入る問題となると決して小さなことではない。

「犯人を追いつめながら取り逃がすなんて首都航空隊にあるまじき失態だ。任務を失敗するような役立たずは云々・・・もう6年ほど前のことですがティーダ一等空尉の汚名はまだ消え去ってはいないようです。半分はその若さに対する妬みのようでしたが・・・」

「それは流石にひどいな・・・」

はやては眉をしかめながら頷く。失態を犯した部下に対してきつい言葉を浴びせる上司はどこの世界にもいるものだが、殉職者に対する言葉としてはいささか度を超え過ぎている。どんな事情があるにせよ、死者にはそれ相応の敬意と礼儀を払わねばならない。それを蔑ろにしたとなれば、周囲が黙っているはずもない。

「ティアナはその時まだ１０歳・・・たった一人の肉親を亡くして、しかもその最期の仕事が無意味で訳に立たなかったって言われて・・

・きっとものすごく傷付いて、苦しんで・・・」

「つまり、死んだ兄貴の汚名を晴らしたいから強くなりたいってことか？」

「そうなんだと思う。そして、残された夢を・・・ティーダ一尉が叶えられないで終わった執務官になるっていう夢を叶えたいんだ、きっと・・・」

フェイトの言葉に一同は黙りこむ。なんとも言えない沈黙を破るかのように部屋の扉の開く音がした。

「失礼します、八神二佐」

低く、重い声。一同の視線が集まる。見る者を射抜く鋭い灰色の眼差しに、鈍い銀の髪。頬には擦り傷ような線が二本横切っている。周囲の人間を拒むかのようなその顔立ちは精悍だが、どこか冷たさを感じさせる。事実、雪鷹はどこか怒っているようでさえあった。

「隊長陣揃い踏みでお呼び出し・・・ご用件は一体なんでしょうか？」

威圧しているわけではないのだろうが不機嫌そうな表情と頬の傷とが相まって、どこかの筋の若衆に見えなくもない。しかし、それで動じるような柔な隊長陣ではない。はやては小さく息を吐き出して気持ちを入れ替えると机から大きめの封筒を取り出した。昼間、ホテルでアコース査察官から渡された雪鷹に関する調査報告書の入った封筒である。

「まぁ、なんや・・・ちょっと調べさせてもらったら幾つか気にな

ることがあってな。それを聞かせてもらおうかなと思て。心配せんでも、そんなに時間はとらせへんよ。素直に答えてくれたらすぐに終わるよ。ユキタカ一等空尉」

「なるほど・・・その封筒に入ってるのは私に関する身上調査ですか・・・」

雪鷹は驚いた素振りの一つも見せず、煩わしそうにため息を零す。昼間、アコース査察官との話からいずれは部隊長からその話をされるだろうと思っていた矢先のことだった。

「ねぇ、どうして魔導師ランクや階級を偽ったりしたの？」

「そうだよ、階級詐称は立派な犯罪だよ、それを知らないはずよね？」

不安そうに雪鷹を見つめるなのはとフェイトの視線。雪鷹のことを本気に心配しているのだと一目でわかるが、それさえも今の雪鷹にとっては煩わしいものでしかなかった。

「まぁ、いつかはこうなるだろうと思っていましたから、私に答えられる範囲でよろしければ質問にお答えしましょう、八神二佐」

はやてに向かい合うように雪鷹が椅子に座る。尋問される側であるはずなのに気負っている様子はどこにもない。むしろ、場慣れしている感じさえ漂っている。どこか優雅で、不敵な笑みがはやてを呑み込んでいく。

「まずは魔導士ランクについてや。陸戦でＳ＋、空戦でもＳ－。どっちも7年前のデータや。せやけど、私の手元に来たデータには空

戦Ａ＋って書いてあった。年とってランクが下がることがないわけやないけどまだそんなに老けてないやろ？これはなんでや？」

「そのころのこっちで・・・情報一課で色々とありましてね。そのおかげで魔力値が減ってしまったんですよ。今は体調で多少は変化しますがＢ＋からＡ程度の魔力しかないんです。それでも疑いになるのでしたら、好きに検査してくださっても構いませんよ。疚しいことは一つもないですから」

雪鷹はにこやかに答えるととどめと言わんばかりにこりと微笑む。絵になるようなその笑顔とは裏腹に、纏う空気は氷のように冷たく、見るものを威圧する。まさしく、氷の微笑。問い詰めているはずのはやては言葉を詰まらせてしまう。雪鷹の模擬戦や事件での戦闘データを解析した結果、魔力値に関しては雪鷹の言葉通りの値が出ていた。いくら技術が高くとも魔力値が規定値を満たしていなければ魔導師ランクは下がってしまうのだ。そう考えると魔導師ランクに関して雪鷹は嘘は言っていないのだろう。Ｓランク相当の魔力がＡランク以下まで下がることは滅多にないが、リンカーコアの損傷などで起きる可能性は確かにあるのだ。

「なら、階級についてや。情報一課では一等空尉やったのに、機動六課には曹長として出向・・・これは立派な階級詐称やないんか？」

「階級詐称だなんてハラオウン執務官も八神二佐も人聞きの悪い。階級が一尉から曹長に変更になったのは所謂、降格処分というやつです。名目上は出向ということになってますが、実際は左遷に近いものなんです」

真に迫る演技だが、いかんせん白々しい。一応筋は通っているが左遷で機動六課に来た、といって納得する人間などいない。

「そんな言葉を私らが信じるとでも?」

はやてがそう言って雪鷹を睨む。その両脇を固める隊長陣も雪鷹に疑いの目を向けている。雪鷹寄りのなのはとフェイトでさえ、今回ばかりははやての側に付いてしまっている。完全に孤立してしまった雪鷹だが、それを気にする素振りも見せず、言葉を続けた。

「信じるもなにもそれが事実です。逆にお尋ねしますが、どんな答えを期待していたのですか?八神二佐は少々自惚れていらっしゃるようだから教えて差し上げますが、一年限りの試験運用部隊に階級詐称のリスクを冒してまでスパイを送り組むほど情報一課は暇ではありません」

追い詰められているのは雪鷹のはずである。しかし、その言葉に動じる様子は微塵もない。そして、雪鷹の言葉もあながち的外れな意見でもない。どんな理由であれ、階級偽装は犯罪であり、処罰の対象だ。そんな危険を冒してまで機動六課にスパイを送るか、と考えると可能性は限りなく低い。はやてを筆頭に若い魔導師の活躍を妬む人間は少なくもないが、単なる嫌がらせの割にはリスクが高すぎる。

「ついでに言わせてもらうなら、機動六課は叩けばいくらでも埃が出てくる組織だ。スパイなんか送るまでもない」

雪鷹の声の調子が変わる。いつぞやの尋問の時のように鋭く、冷たい声。雪鷹を反撃を覚悟して、はやては身構える。

「・・・どういうことや?」

「まずは部隊長、八神はやて二等陸佐。十年前の闇の書事件の重要参考人だ。下手をすればスカリエッティと同じ次元犯罪者の仲間入りを果たしていただろう、違うか？」

「それは・・・」

雪鷹の指摘にはやては言葉を詰まらせる。罪の重さだけで考えるならはやての罪は確かに次元犯罪者扱いされてもおかしくないものだ。裁判も執行猶予期間もとっくも昔に終わっているとはいえ、犯した罪は消せない。そんなはやてを追い詰めるように雪鷹は言葉を続ける。

「シグナム副隊長、ヴィータ副隊長も二名も闇の書事件に付随した魔導師襲撃事件の主犯格、シャマル医務官とザフィーラを含めた夜天の書の守護騎士一同、前科持ちであることには変わりはない」

その言葉にシグナムとヴィータの顔が険しくなる。

「なんだよ、今更昔のこと掘り返しやがって・・・」

「そうだ、かつて我らの犯した過ちは消せないが、それ相応の償いはしてきた」

雪鷹に避難される覚えはない、と言い張る二人に雪鷹は冷たく言い放つ。

「貴女達が襲った魔導師達を前にして同じことが言えますか？幸いなことにあの襲撃事件で死者こそ出ていませんが、襲われ、リンカーコアを奪われたた魔導師の中には魔導師として現場に復帰できなくなった者もいる。そういう意味では貴女達は何人もの魔導師を殺

しているんです。それでも償いをしてきたと言い切れますか？」

シグナムもヴィータも返す言葉がなかった。闇の書事件のせいで魔導師襲撃事件に関する処罰はうやむやになってしまい、実質的に襲撃事件はお咎めなしということになってしまったのだ。もちろん、グレアム提督やリンディ提督やクロノ執務官の気持ちばかりの配慮の結果であって、はやてやシグナム達が自分達の罪をもみ消したわけではないのだが、触れられると痛いものがある。償いをしてきたか、と言い寄られると答えは否としか言えない。

「だ、だけど、あの時ははやての命に関わっていたんだし・・・」

「そうだよ、事情が事情だから・・・」

「だから、仕方がなかった？どんな犯罪者にだってそれなりの理由くらいある。命が関わっていたから許される。なのは、フェイト、本気でそう思っているのか？」

親友をフォローしようとしたなのはとフェイトに対しても雪鷹は容赦がない。冷たい眼差しで二人を睨みつけ、二の句を続ける隙を与えない。

「どんな理由があったにせよ、八神二等陸佐と守護騎士達のしたことは立派な犯罪・・・それこそ、階級詐称なんて目にならないくらいの重罪だ。それを見逃してもらったのは、八神二佐の稀少技能（レアスキル）や魔導騎士としての能力、守護騎士一同が管理局の戦力になるからだ。過去の判例に照らして処分を下すなら、八神二佐はもちろん、守護騎士全員死ぬまで軌道拘置所の中でもおかしくはない。違うか？」

雪鷹の指摘は紛れもない事実だ。管理外世界の事件であることや本

人の意思に関係なく発動する闇の書の機能上の問題、初犯であることや、管理者の生命に関わるという観点からの情状酌量等々、理由は幾つもあるがはやての罪が減免された一番の理由はまさしくそれだった。はやてとその守護騎士達が管理局にとって有益になると判断されたからこそ、事なきを得たのである。

「その件については全部私が悪いんや・・・みんなは関係ない。それより、なんで一局員でしかないユキタカ一尉がそんなことを知ってるんや・・・私や守護騎士の個人情報、闇の書事件の詳細に関しては特秘事項扱いや。普通にしてたら知る機会なんてあらへん・・・」

苦々しげな表情を浮かべ、はやてが雪鷹に尋ねる。雪鷹を詰問すると決めた時からある程度のことは覚悟していたが、こうまで露骨に斬りこんでくるとは思いもしなかった。しかも、特秘事項であるはずの闇の書事件や守護騎士の詳細な情報まで知っている。まさか、そこまで知られているとは予想していなかったはやては出鼻を挫かれた心地だった。

「勘違いしているようですが、特秘事項というのは門外不出というわけではないのですよ?正式な手続きを踏みさえすれば管理局員なら誰でも見ることができます。もっとも、その閲覧申請の受理に短く見積もっても数年かかりますけど」

「せやけど、それにしたって・・・申請は滅多なことでは通らへん。事件に無関係な人間が申請したって無理なはずや」

雪鷹の言う通り、正式な手続きを踏めば特秘事項の開示自体は不可能なことではない。所定の書類に必要事項を記入し、いくつか印鑑を押してもらい、提出すれば書類は受理され、情報は開示される。

しかし、それはあくまでも建て前であり、現実に書類が受理されて、情報が開示されることはない。ほとんどの人間な何故、情報開示が必要なのか、という理由の部分で申請を却下されるのだ。唯一許可される場合があるとすれば、過去の犯罪者が特秘事項の事件に関わっていて、どうしてもその事件の情報が必要な場合ぐらいだが、その時でさえ事件と関連するという説明する為の厖大な資料を準備しなければならず、その為だけに数年掛かることも珍しくはない。そうして資料を集めても、受理までは数年かかり、結果的に無駄足に終わることが多い。つまり、雪鷹が特秘事項である闇の書事件の詳細やはやてと守護騎士達の秘密を知ることは物理的に不可能なのだ。

「それでも、知っているものは知っている。情報部の特権だとでも思ってください。ハラオウン執務官は十年前のP・T事件の最重要参考人、高町教導官は八年前にアンノウンによる撃墜・・・昔の話と言ってしまえばそうだが、隊長陣がこれだけ爆弾（スキャンダル）を抱えた部隊っていうのはまた珍しい」

雪鷹の言葉に部屋にいた全員が言葉を失う。そんな隊長陣を嘲笑うかのように雪鷹はさらに言葉を続ける。

「前線メンバーにしても才能はあるがそれなりの問題児揃いだ。知らずに集めたのか、それとも、問題の方はどうにか隠し通せると目を瞑ったのか・・・どちらにしろ、いい根性だな」

部屋が沈黙する。雪鷹だけが不敵に笑う。雪鷹を追い詰めるはずに隊長陣が集まったというのに、逆に雪鷹に追い詰められてしまった。機動六課の抱える爆弾（スキャンダル）をちらつかされてはどうしようもない。しかし、ここで引き下がることなどはやてにはできなかった。機動六課ははやての夢なのだ。カリムやヴェロッサ、クロノもこの部隊の設立に尽力してくれた。もし、ここではやてが引き下がれば、協力し

てくれた多くの人の好意が無駄になってしまってしまうのだ。それだけではない。はやてを含めた数人しか知らない。なのはやフェイトにさえ教えていない機動六課設立の本当の理由。その『刻』がもう間近に迫っているのだ。もしその時、機動六課が動けなければ、それこそ一番の裏切りだ。はやての両手に力が入る。

「・・・そんなん関係、あらへん」

沈黙が破られた。部隊長として今まで精一杯やってきたつもりだったが、何かが足りなかった。上に立つ者としての覚悟。部隊全員を背負う、その覚悟がはやてにはなかった。もちろん、今まで手を抜いていたつもりはないが、ここまで追い詰められたことは一度もなかった。なかったからこそ、気付けなかった。上に立つ人間が何を背負っているのか。その意味を。その大きさを。その重さを。譲れない、負けられない戦いがここにあるのだ。

「みんな、何もうしろめたいことなんてない・・・これ以上、可愛い部下を侮辱するゆうんなら、私も腹括るで?」

後編に続く・・・

15『あらしのよるに（中編）』（後書き）

アンケートは引き続き継続中です。
締め切りは3月末です。

＊後書きについて
1：現状維持
2：後書き＋雑談
3：後書き無しで雑談のみ
4：その他　（具体案）

＊30万PV記念小説について
a：なのは達の訓練校時代
雪鷹となのは、フェイトの出逢いを中心にしたお話。ほのぼの風味に仕上げるつもりです。ひょっとしたらハードな模擬戦の可能性も

b：雪鷹の情報一課時代
一課の一員として暗躍する雪鷹。ダーク&シリアスは雰囲気でお届けします。ちょっとアダルトが入るかも

c：六課メンバー（女性）と雪鷹
六課女性陣と雪鷹のほんのり甘い恋愛風味の予定。時系列は無視してます。雪鷹の相手役をご指名ください。

d：ほのぼの日常編
文字通り、他愛のない六課の日常を描きます。ギャグをねじ込めるならねじ込みたいけど、笑いには自信なし

e：なし
早く本編進めろ、な人はこちらを

皆様のご意見、ご感想、ご質問を心よりお待ちしています。ではでは、月兎でした。

16『あらしのよるに（後編）』（前書き）

言葉だけじゃ、何も変わらない…変えられない。だからっ！！

16『あらしのよるに（後編）』

16『あらしのよるに（後編）』

「・・・そんなん、関係あらへん。みんな、何もうしろめたいことなんてない・・・これ以上、可愛い部下を侮辱するゆうんなら、私も腹括るで？」

決して大きな声ではなかった。むしろ、声量だけで考えるなら小さ過ぎるくらいだ。しかし、力強い響きは部屋の雰囲気を一変させた。冷たく固まっていた空気が溶け出し、柔らかなぬくもりとなって包み込んでいく。それは堅牢な盾であり、近付く者を寄せ付けない矛でもあった。はやての瞳に、言葉に、力が戻った。

「機動六課は私の夢や。あんたが何の目的でここに来たかはしらんけど、みすみす夢を壊させるほど私は甘ない・・・邪魔するいうんなら、容赦せえへんで」

「いい面構えだ。覚悟を決めた奴の目だな・・・それでいい」

雪鷹はそう呟いて、小さく笑った。しかし、先程までの嫌みな感じはまるで感じられず、むしろ、喜んでいるような感じに近い。

「それでいいってどういう意味やねん・・・こっちは本気やで」

侮られたと思ったはやてが凄む。主の意志を汲んだ二人の騎士も武器を構えて、雪鷹を睨みつける。二人の殺気が部屋を満たす。暴力で脅すことは決して許されることではない。しかし、上に立つのな

ら、正道だけを歩むことなどできるはずがないのだ。話し合いで解決できるならそれが一番いい。しかし、それでも上手くいかないことは必ずあるのだ。互いに折れるつもりがないのなら、相手を折るしかないのだ。

意地を
信念を
誇りを
尊厳を

それを罵られようとも、部下の為に、守るべきものの為に、やらなければならないのだ。

「正直に白状してくれんか？こんなこと、私もしたないし、ユキタカ一尉も痛い目を見るのは嫌やろ」

はやてが騎士杖シュベルトクロイツを雪鷹に向ける。その目は脅しではない、本気の目だった。

「はやてちゃん、それはいくらなんでもやり過ぎだよ」

「そうだよ、シグナムもヴィータも・・・やめて」

なのはとフェイトの二人がはやてと雪鷹の間に割って入る。はやては一瞬怯んだ表情を浮かべたが、すぐにそれを振り払い、威圧的な声で二人に告げる。

「邪魔、せんといて・・・二人には悪いけど、このままユキタカ一

尉を見逃すわけにはいかんのや」

はやてとは十年来の付き合いのあるなのはとフェイトであったが、初めて見る表情だった。部隊長として、指揮官としての厳しい顔は二人も何度かある。しかし、それとも全く異なる、鋭さと危うさと兼ね揃えた顔だ。普段の柔らかな笑顔など欠片も残っていない。

怖い――

二人は純粋にそう思った。何をするのかわからないからではない。何をするのかがわかるからこそ怖いのだ。はやての視線から溢れてくるのは明確な殺意だ。もし、雪鷹が機動六課に仇なす存在であるなら殺すことさえ厭わない、そんな目だ

「なるほど、騎士ではなく自らの手を汚すつもりか・・・」

「許されるようなことをしてへん自覚はあるよ。ユキタカ一尉の言う通り私は犯罪者や。せやけど、私は卑怯者にはならへん。機動六課の為に誰かの手を血で汚させるような真似は絶対にさせへん」

はやては自嘲気味に笑う。とんでもないことを口にしている自覚はもちろんある。ＳＳランクの魔導師が無防備な人間にデバイスを突きつけ、脅迫しているのだ。魔導師として許されることではない。しかし、そうしなければ機動六課を守れないというのなら、躊躇う理由はどこにもなかった。

「その潔さは尊敬するが、まだ青いな。詰めが甘い、ブレイドハートっ！！」

そう言うと雪鷹はさっと立ちあがり、なのはの腕を後ろ手に捻り上げるとその白い首筋に氷の懐剣を突きつけた。隙を突かれたとはいえ、エースオブエースと称されるなのはが身動き一つとることができなかった。本当にほんの数瞬の出来事だった。

「痛っ、ゆ、雪鷹！？」

突然の痛みになのはが驚きの声をあげるが雪鷹は眉ひとつ動かさない。

「いますぐ武器を捨てろ。さもないと、なのはを殺す」

部屋の空気が一気に凍りついた。はやては驚いた顔を浮かべながらも、苦々しげな表情を浮かべて騎士杖を床に放り投げた。どう考えてもはやても魔法が届くより、雪鷹の刃がなのはの首を切るほうが早い。シグナムやヴィータもそれは同じだった。二人とも武器を捨てる。どんなに最速で踏み込んでも、二人の攻撃が届くよりも先になのはが殺されてしまう。武装放棄するしかなかった。

「雪鷹・・・本気なの！？」

信じられないものを見るような目でフェイトがなのはを、そして雪鷹を見つめる。それを見た雪鷹は小さく笑う。

「もちろん、冗談に決まっている」

そういうと雪鷹はすぐになのはを解放した。すぐにフェイトが駆け寄り、なのはを抱きしめる。はやてと守護騎士二人も安堵のため息を零す。しかし、すぐに雪鷹を睨み、詰問する。

「とんだ茶番やったな・・・なのはちゃんを人質にするなんて一体何のつもりや」

「理由は二つ。一つ目はここにいる人間の頭を冷やす為だ。話し合いをしようと言って聞いてくれる雰囲気でもなかったからな。二つ目は人質にとられた時、どういう反応を示すから見たかったから。以上だ。なのは、悪かったな」

事もなげに雪鷹は言ってのけると座り直し、更に言葉を続けた。

「何か勘違いしているようだが、私は機動六課をどうにかするつもりなんてはじめからない。あるなら、とっくの昔に動いている」

声の調子も普段の雪鷹に戻っていた。身を刺すような冷たさが消えたことを肌で感じ取ったはやては困惑した表情を浮かべた。一瞬垣間見えた冷たい視線。あれは紛れもない本気の目だった。はやて達が武器を捨てなければ、間違いなくなのはを殺していた。そう確信させるだけの鋭さがその目には宿っていた。

「なら、何が目的でここに来たんや?」

「理由は幾つかありますが、機動六課をどうにかしようというつもりはありません。安心してください、八神二佐」

そう言って雪鷹は微笑んだ。まるで、女性を口説いているかのような柔らかな笑み。笑顔一つでも、ここまで使い分けられるのか、と思いたくなる雪鷹の笑顔にはやては返す言葉がなかった。腹芸にははやてもそれなりの自信があったが、今回の雪鷹相手ではまるで通じなかった。年季が違うのだ。

「そんなら、なんであんな紛らわしいことを言ったんや？」

腹の探り合いで勝ち目はない、と判断したはやては直球で雪鷹に尋ねた。その気になれば雪鷹はこの部屋の誰かと刺し違えるくらいのことはできる。誰か一人の命でも失われてしまえば、意味がないのだ。ここは引き下がるしかはやてに選択肢はなかった。

「紛らわしいこと、とは？私はこの部隊の抱える爆弾（スキャンダル）をいくつか並べて見せただけです。八神二佐達が勝手に勘違いしただけでしょう？それを仄めかしていたことも多少の私情を含んでいたことは否定しませんが」

いけしゃあしゃあと言ってのけた雪鷹にはやてはため息を零すしかなかった。本来なら怒るべき所のはずなのだか、今はその気力もない。それに、口では何もしない、と言っているが六課の弱みを雪鷹が握っているという現実は何も変わっていないのだ。下手に出るつもりはないが、変に波風を立てるつもりもない。

「・・・まぁ、えぇわ。今更嘘ついて私らを騙す理由もないやろうし、そういうことにしとくわ」

シグナムとヴィータはまだ不満そうな顔を浮かべていたが、はやてが何も言わないと決めたのならば二人の出る幕はない。武器を拾うと待機モードに戻して、はやての横に立つ。

「で、何を話してくれるんや？わざわざなのはちゃんを人質にして・・・おかげで気分は最悪や」

間接的にとはいえ、はやての行動がなのはを危険に晒したのだ。はやてが本気になれば雪鷹が抵抗するはずがないと心のどこかで思い

込んでいた。冷静に考えれば、あの雪鷹が大人しくなるはずがないとすぐに思いつく。それを忘れるほどはやては激昂していたのだ。どんな理由があったにせよ、なのはを危険に晒したことに変わりはない。気持ちのいいはずがなかった。

「私がここに来た理由について。全てを話すことはできませんが、それでよろしければ」

雪鷹は不敵に笑う。

「・・・はじめからそのつもりやったんなら、なんでこんなことをしたんや」

「入ってくるなり、私を問い詰めてきたのはどこのどなたですか？話し合うつもりがなかったのはお互い様でしょう？」

皮肉っぽい笑顔にはやては返す言葉がなかった。疲れて怒る気力も出てこない。他の四人は物言いたげな視線で雪鷹を睨みつけるが、雪鷹は飄々とそれを受け流す。

「さて、まずはどこから話しましょうか・・・皆さんが一番気にしている私がここにきた理由についてお話しましょう。理由は幾つかありますが一番の目的はこの機動六課設立の目的を探ることです。表向きはレリック対策専門の部隊と少数精鋭部隊の試験運用がこの部隊の設立目的になっていますが、情報一課はまだ何か理由が隠されていると判断しました。そこでその理由を探る為に私が派遣されたのです」

雪鷹の雰囲気が急に厳粛さを帯び始めた。今までの飄々とした顔つきが一変し、言葉遣いまで変わってしまっている。怖い、というわ

けではないが妙に近寄りがたいものを感じずにはいられない。いつもの軽い調子で話すのだろうと思って、楽に身構えていた隊長陣も居住まいを直して雪鷹の言葉に真剣に耳を傾ける。

「それに機動六課の戦力と設備の把握、部隊長以下部隊の中心人物の身辺調査・・・主な理由は以上の通りです。他にも幾つかありますが、これ以上は特秘事項にあたるので言えません。そして、調査の為とはいえ八神二佐に対するこれまでの無礼はこの場を借りてお詫びします」

そう言って雪鷹は深々と頭を下げた。予想外のことにはやては言葉が出なかった。あの雪鷹がはやてに頭を下げているのだ。しかも、誰かから強制されたのではなく、自発的に。

普段の素行からは考えられないような真摯な態度と言葉遣い。既に冷徹な印象しか持っていなかったはやてにとってそれはあまりにも新鮮で、珍しくて、そして、急に恥ずかしさを覚えた。これまでの雪鷹の態度は許されるものではないが、雪鷹に対するはやての態度も決して褒められたものではない。情報一課から出向、というただそれだけの情報で雪鷹を疑いの目で見てしまい、なのはとの模擬戦の後も雪鷹を傷つけてしまった。それからもはやては雪鷹を疑い続け、傷つけてきた。

六課を守る為、と言えば立派に聞こえるがそれははやてが雪鷹を傷つけていい理由にはならない。今の今までそんな簡単なことさえ忘れていたのだ。雪鷹を傷つけることが当然であるかのように振舞い、罪悪感の一つも覚えることなく、今まで過ごしてきた。しかし、雪鷹は違った。はやてへの非礼を非礼だと自覚し、謝罪をしたのだ。

非礼を非礼と承知して、振舞うことは決して許されることではないが、非礼を非礼と知らずに振舞うことはもっと性質が悪い。

「いや・・・その・・・とりあえず、顔上げてや。私の方こそ・・・色々やってしもうて・・・」

はやての言葉に雪鷹は顔を上げるが、気まずそうにはやては雪鷹から視線を逸らす。言いたいことは幾つもあるのに言葉が続かない。自分自身の振舞いが如何に愚かだったのか、見せつけられたようだった。今までの言動はもちろんのこと、先程の脅迫は立派な犯罪行為だ。雪鷹に対する非礼を詫びなければならない、と頭では理解しているが言葉が出てこない。

「・・・今まで私もユキタカ一尉にひどいこと言ってきたし・・・今日なんてほんまに最低なことをしてしもた。私のほうこそ・・・」

はやては言葉を詰まらせる。それから先の言葉が出てこない。ごめんなさい、の一言がどうしても喉の奥から出てこない。そんなはやてを見かねたのか、雪鷹は控えめに言葉を続けた。

「あのような状況を作りだす為に挑発したのは私です。八神二佐の責任ではありません。ですから、お気になさらずに」

「えっ・・・いや、でも・・・・そんなこと・・・」

はやては悪くない。悪いのは自分自身だ。はっきりとそう言った雪鷹の言葉にはやては言葉を詰まらせる。卑屈になることなく堂々としていて、それでいて誠意に溢れた雪鷹の態度。はやてに到底真似できるものではなかった。己の卑小さを見せつけられたようで悔しくて、それ以上に恥ずかしかった。これまでの雪鷹への態度に何の

疑問も持たなかった自分自身が。雪鷹に何も言えない自分自身が。
そして、雪鷹に謝ることさえできない自分自身が。だから、はやては雪鷹を真っ直ぐ見ることができなかった。

「その・・・任務の為なんやろ?それやったら、怒るわけにもいかんし・・・今日はもう疲れてるやろ?私からの話はもうこれで終わりや。ゆっくり休んでな」

雪鷹は嫌そうな顔一つ浮かべず、はやてに一礼すると部屋から出ていってしまった。不自然な終わり方であることははやてが一番理解していた。はやての聞きたいことはまだある。言いたいことはもっとある。しかし、これ以上、雪鷹と同じ部屋にいることがはやてには耐えられそうになかった。

「・・・ごめんな」

涙とともに零れた言葉はあまりに小さく、誰の耳にも届くことなく消えてしまった。

16『あらしのよるに（後編）』（後書き）

どういう関係かと聞かれると正直、困る

幼なじみと呼ぶには年が離れている
同僚と呼ぶには階級が離れている

上司と部下で割り切れるほどドライな関係じゃない
同期なのだから先輩と後輩も当てはまらない

恋人と呼べるほど親しくはない
そもそも片想いなのだから論外だ

仲は、たぶん悪くない
だけど、これ以上は進まない。

それなら、私達の関係は一体…

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ

17『友情の証』

だけど、私はあなたを……

アンケートは引き続き継続中です。
締め切りは3月末です。

＊後書きについて

1：現状維持

2：後書き＋雑談

3：後書き無しで雑談のみ

4：その他　（具体案）

＊30万PV記念小説について

a：なのは達の訓練校時代
雪鷹となのは、フェイトの出逢いを中心にしたお話。ほのぼの風味に仕上げるつもりです。ひょっとしたらハードな模擬戦の可能性も

b：雪鷹の情報一課時代
一課の一員として暗躍する雪鷹。ダーク&シリアスは雰囲気でお届けします。ちょっとアダルトが入るかも

c：六課メンバー（女性）と雪鷹
六課女性陣と雪鷹のほんのり甘い恋愛風味の予定。時系列は無視してます。雪鷹の相手役をご指名ください。

d：ほのぼの日常編
文字通り、他愛のない六課の日常を描きます。ギャグをねじ込めるならねじ込みたいけど、笑いには自信なし

e：なし
早く本編進めろ、な人はこちらを

皆様のご意見、ご感想、ご質問を心よりお待ちしています。ではでは、月兎でした。

Intermission 16.1

Intermission 16.1

「はやて、あいつを帰しちまってよかったのか？」

ヴィータは納得できないという顔を浮かべている。その隣に立つシグナムも同様だ。なのはとフェイトは荒事にならなくてよかった、と安心したような表情を浮かべている。

「よくはあらへんな・・・だけど、あれ以上はどうにも問い詰めづらくてな・・・」

はやては疲れたよう笑う。まさしく精根尽き果てたといった表情だ。準備万端で雪鷹を待ち構えたというのに、獲物はするりするりと網をくぐり抜け、はやてに牙を剥いた。その時点ではやては雪鷹に負けていたのだ。

「完敗や・・・あんな幕引きで閉めるなんて真似、私にはできへん」

「はやて、どういうこと？」

フェイトは首を傾げる。

「うーん、私も上手く説明できへんけど、私らはユキタカ一尉の手の上で踊らされていたいうことかな・・・なんで呼ばれたかはきっと知ってたはずや。もちろん、私がどんな対応をするのかも。おかげで私らみんな、ユキタカ一尉に負い目ができてしまったな・・・それが狙いやったんやろうけど」

はやての言葉に四人とも黙りこんでしまった。今回の一件。結果的には雪鷹だけが悪い、ということに収まってしまったがそうではないことはこの部屋にいる人間が一番理解している。雪鷹に非があるのは事実だが、はやて達にも非はあるのだ。それをなかったことにされた負い目は決して軽いものではない。もちろん、そんなものはないと言い張って今まで通り雪鷹に接しても、咎める者は誰もいない。しかし、良心は痛むのだ。

「でも、まぁ、あの言葉が本当やったら、そこまで警戒せんでもええやろう・・・」

「おい、あいつの言葉を鵜呑みにすんのかよ。あんなの嘘に決まってる」

「私も反対です。嘘だとは言いませんが、まだ何か隠している可能性がないとは言い切れません」

ヴィータとシグナムが揃って反論する。

「そうなんやけど・・・今回だけはあの言葉を信じさせてくれへんかな？今までずっと疑ってばかりやった。もし、私がはじめにあんな態度やなかったら、もしかしてこんなことにならへんかったかもしれへん。そやから、ごめんな、他に何も思い浮かばなかったんや。だから、今回だけは二人とも目瞑ってくれへんかな？」

はやては申し上げなさそうに頭を下げる。二人の言葉は正論だ。今までのことを振り返って考えると、雪鷹の言葉を素直に信じるなど愚かと言われてもしかたのないことだ。それははやても重々承知している。その上で、はやては雪鷹の言葉を信じたいと思ったのだ。

信じることで何かが変わる。それはほとんど直感といってもいいくらい曖昧なもので、確信も根拠も何もない。しかし、だからこそ、信じたいのだ。

（本当はもう、人のことを疑いたくないだけなのかもしれへんけど・・・）

はやてはゆっくりと目を閉じて自分自身に問いかける。人を疑うことは決して愉快なことではない。それを身に染みて実感できた。きっと、雪鷹ははやてのことを信じてはいない。雪鷹がなのはやフェイトに接する時は冷たいながらも、どこか優しい表情を見せる。しかし、はやてにその表情を見せることは決してない。訓練校時代の同期だから、というわけではない。なのはとフェイトは雪鷹のことを信じている。はやてがどんなに疑わしい証拠を並べても、それは揺るがなかった。訓練校時代を共に過ごしたとはいえ、ほんの数カ月のことだ。それから十年近くなんの音沙汰もなかったと聞いている。十年ぶりに再会し、それでも微塵も揺らぐことのない確固たる三人の絆。羨ましいと思うと同時に悔しく、寂しくもあった。その繋がりの中にはやてはいないのだ。

「私はな、ユキタカ一尉に機動六課を信じてほしいんや。こんだけの戦力が一つの部隊に集まったら不安に思う人もいるやろうし、警戒する人がいてもおかしない。そやけど、そんな人にも信じてほしいんや。六課なら大丈夫やって思ってほしい。せやから、私はユキタカ一尉を信じるんや。私がユキタカ一尉を疑ってたら、ユキタカ一尉が私を・・・機動六課を信じてくれるはずないやろ。だから・・・ええかな？」

そう言ってはやてはゆっくりと目を開きくと四人とも笑顔で頷いてくれた。自分の考えを受け入れられたのだと理解したはやては小さ

く安堵のため息を零した。

「ありがとうな、みんな」

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　１６．１（後書き）

アンケート途中経過　（３／２７　～　１６００）

＊あとがき
１：５票
２：４票
３：０票
４：１票

＊記念小説
ａ：３票
ｂ：３票
ｃ：３票（はやて、なのは、フェイト、ＦＷ陣）
ｄ：０票
ｅ：２票

はい、ご覧の通り、見事にばらけてます。まさかこんなに綺麗にばらけてしまうなんて…予想外な展開です。

締め切り（３／３１）までまだありますので是非ともアンケートにご協力ください。

Intermission 16.2

Intermission 16.2

機動六課の隊舎は隊員達の居住施設も備えている。当然、六課の隊員である雪鷹にも一室が与えられている。部隊長室から自室に戻った雪鷹は訳もなくため息を零した。

「全く・・・肝の据わった隊長様だ」

疲れた口元から漏れたのは皮肉とも賞賛とも取れるはやてへ向けられた言葉だった。

情報一課から出向という形でこれまでいくつか部隊を回った経験のある雪鷹だが、その中でも八神はやての部隊長としての力量は決して低いものではない。未成年であることを考慮するなら、十二分に高い水準に達している。若さゆえかまだ甘い所もあるが磨けば優秀な指揮官になるだろう。

「魔導師としては一流、指揮能力もまずまず・・・十九歳にしては上出来だ。とはいえ、まだ他人の手を汚させる覚悟はないか・・・まぁ、それについては俺も人のことを言えないが」

雪鷹は独り、自嘲する。

「因果なものだな・・・」

はやては雪鷹を脅す時、守護騎士達が手を出すことをひどく嫌って

いた。

誰かの手を汚させることは絶対にさせない、と。

それはそれで潔いことであるし、悪いことだと言い切れるものでもない。雪鷹もその気持ちはよく判る。しかし、それではいけないのだ。雪鷹のような下の人間なら、或いは、それでも通用する。しかし、それで部隊長は務まらないのだ。時には、部下に死ねと命じなければならないかもしれない立場の人間にとって、それは甘えなのだ。他人にそれを命じることをはやては卑怯だと言った。しかし、それはある意味では欺瞞であり、偽善だ。それを命じることがはやての仕事であり、はやての地位なのだ。卑怯だろうとなんだろうと、やらなければならない。それがはやてに科された義務であり、罪だ。はやてはその現実から目を逸らしているだけなのだ。

「このままだと、いつか折れるかもな・・・」

雪鷹自身の言動もはやてを追い詰めている一因であるということを棚に上げて雪鷹は呟く。

「まだ折れてもらうのは困るんだよな、俺としては。まぁ、友人には恵まれているようだからそう容易くは折れないだろうが・・・」

そこで何かに気付いた雪鷹は言葉を濁らせ、窓の外を見た。一羽の烏が窓の向こうから雪鷹を見つめていた。悲しげな、寂しげな憂いを秘めた烏の視線。それが雪鷹の疲れた神経を逆立てる。苛立つ雪鷹と視線がぶつかると烏は鳴き声をあげてすぐに飛び立ってしまった。視線を部屋の中に戻した雪鷹はため息を零す。

「まったく・・・理不尽だな、世の中は」

そう呟いた雪鷹は疲れたように目を閉じた。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　１６．２（後書き）

読者の皆様、ご愛読ありがとうございます

アンケートの締め切りは本日２４００までです
多くの読者の皆様のご意見をお待ちしています

ではでは

17『友情の証』（前書き）

Auf die Hande kust die Achtung,
Freundschaft auf die offne Stirn,
Auf die Wange Wohlgefallen,
Sel'ge Liebe auf den Mund;
Aufs geschlosne Aug die Sehnsucht,
In die hohle Hand Verlangen,
Arm und Nacken die Begierde,
Ubrall sonst die Raserei.

グリルパルツァー『接吻』より

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ

始まります

17『友情の証』

17　『友情の証』

部隊長室から出たフェイトは自室に戻ることなく、雪鷹の部屋へと向かっていた。今回は前線部隊隊長という立場上、はやての側に回ってしまったフェイトだが心情的にはむしろ雪鷹寄りなのが本音だ。はやての不安や疑問は理解できる。そうしなければならない立場にいることも。しかし、それだけで雪鷹を疑うことなどフェイトには出来なかった。そして、はやて達と別れた後、一人で雪鷹に真意を聞きに行こうと決めたのだ。

「えーと、ここでいいんだよね？なんだか久しぶりだな、こんな気持ち。ちょっとドキドキしてきた」

雪鷹の部屋の前で昔を思い出して楽しそうに小さく笑う。十年前の訓練校時代にも同じようなことが何度もあった。訓練が終った後になのはとフェイトの二人で雪鷹の部屋に遊びに行ったのは一度や二度ではない。もちろん、あの頃は色恋沙汰とは縁がなかったし、意識したこともなかった。しかし、もうそんなことを言っていられる年齢でもない。その類の経験が少なく、疎い分余計に意識してしまう。不謹慎なことかもしれないが、気分が高揚し始めているのを否定できなかった。フェイトが扉をノックする。しかし、返事はない。フェイトがもう一度少し強めにノックをするが反応はない。不思議に思ったフェイトは申し訳ないと思いながらも部屋の中に入る。

「雪・・・鷹？」

机と椅子が一組にシングルサイズのベッドとクローゼットが一つずつ。部屋にあった家具はたったそれだけだ。その全てが元々部屋に備え付けのものだ。まるで生活感が感じられない。そして、当の雪鷹は椅子に座ったままゆっくりと船を漕いでいた。机の上には雪鷹の愛機、ブレイドハートが待機モードで転がっていた。

「雪鷹・・・寝ちゃってるみたい・・・疲れてたんだね」

フェイトは声を潜めて雪鷹に近寄る。昨日、フェイトが急なエスコートを頼んだせいで、オークションの直前まで雪鷹は仕事の引き継ぎに奔走していた。小さな任務ならまだしも、ここまで大きな任務となると仕事の引き継ぎも一苦労だ。

手の空いている人間を探すのはもちろん、業務内容の確認と申し送り、緊急時のバックアップ、その他諸々の作業を一晩で片づけなければならないのだ。雪鷹は難なくこなしたが、はっきりいってできるほうが異常なのだ。一般職員にはできる芸当ではない。それに加えて警備任務にアンノウンの魔導師との戦闘、警備終了後の調査等々も手伝っていた。雪鷹の台詞ではないが、一人で数人分の働きをしている。

「・・・私が無理言ったせいだよね・・・ちょっと申し訳ないな」

雪鷹の無防備な寝顔からはいつもの鋭さと厳しさがまるで感じられない。眠り姫のようなその穏やかな寝顔は二人の心を和ませる。白磁のように艶やかな頬は無垢な色合い。灰色の瞳な瞼の奥に姿を隠し、薄い唇から小さく寝息が零れている。フェイトの胸の奥で何かが響く。指がそっと伸びて、雪鷹の頬に触れる。柔らかく、ひんやりとした感触が心地よい。しかし、その心地よさに浸る間もなく雪

鷹が目を開き、フェイトを睨みつける。

「・・・何の用だ?」

「えっ、あ、その・・・ごめん、起こしちゃった?」

「あぁ、おかげさまで」

雪鷹の低い響き。顔を見るまでもなく不機嫌だと判る。

「幾つか聞きたいことがある。まずは一つ目、何故俺を起こした?二つ目、何故俺の部屋にいる?」

「あの・・・その、さっきのことで・・・雪鷹に話があって・・・」

尋ねる雪鷹の声は重く、威圧的だ。理不尽に起こされたのだから怒るのも無理はないが、対するフェイトは見ている方が気の毒に思うほどに委縮してしまい、言葉もたどたどしい。執務官としての威厳はまるで感じられず、叱られた子供のように俯いてしまっている。

「で、その・・・雪鷹の寝顔が可愛くてつい・・・その・・・触りたくなって・・・」

「呆れた執務官様だ。知らないようなら教えてやるが、お前のしたことはセクハラ扱いされてもおかしくないんだぞ?」

「雪鷹、そんな大袈裟な・・・」

「想像してみろ。部屋でお前達が寝ていて、男が部屋に侵入してきた。で、その男がお前達に触れた。そこでお前達は目を覚ました。

どうだ？大袈裟だとおまえは言うが、性別が逆転していたら立派な犯罪行為だろう？」

雪鷹の指摘にフェイトは返す言葉が出てこない。

「まぁ、知らない人間でもないし、今更そんなことを気にすることもない。はっきり言って無断で部屋に入って来たことはどうでもいいが・・・寝ている人間を叩き起こしてくだらない話なんてしたら、わかってるな？」

「うっ・・・その・・・大した話じゃないんだけど、はやてのこと、悪く思わないであげてほしいんだ。さっきはあんな態度をとってたけど、はやては六課を守る為に必死で、だから・・・」

雪鷹と同じくらいはやてのことも大切なのだ。二人の仲が抉れたままはフェイトも辛い。はやての態度は決して褒められたものではないが、その理由も理解できないわけではない。はやてにははやての立場があり、守るべきものがあるのだ。だから、はやては悪くない、ということはできなかったがそうせざるを得なかった理由を、はやての気持ちを雪鷹にも理解して欲しい。

「なんだ、わざわざ話があると思ったらそんなことか・・・くだらない。そんなこと、言われるまでもなく承知している。あれは指揮官としては優秀で、魔導師としても一流だがまだ若い。俺も老けたつもりはないが小娘の戯言の一つや二つくらい聞き流せるくらいにはもう大人になっている。それに、その原因を作ったのは俺だからな・・・」

雪鷹の言葉にフェイトは心の中で安堵のため息を零す。

「あの、雪鷹・・・もうひとつだけ聞いていい？」

フェイトが控えめに口を開いた。その口調はどこか重く、暗い。

「あの時・・・なのはを人質にした時、もしもはやて達がデバイスを捨てなかったらどうするつもりだった？」

「・・・それは聞く必要があることか？」

雪鷹は静かにそう言った。伏せ目がちのせいで雪鷹の視線は読めない。

「・・・そうだよね。ごめん、聞くまでもなかったね」

フェイトはそう言って憂いを振り払うように首を振り、笑顔を浮かべる。

「まぁ、流石にやり過ぎたし、謝らないといけないと思っている・・・また改めて謝りにいくと伝えておいてくれ」

なのはに悪いことをした、という自覚のある雪鷹はそう言って申し訳なさそうに笑う。

「うん、なのはにはそう伝えておくね。でも、雪鷹、本当に大丈夫？椅子に座ったまま居眠りするなんてらしくないよ」

「まぁ、どこぞのお嬢様のおかげで昨日からずっと休めなかったからな。大丈夫といえば大丈夫だが、疲れていないとは言えないな、残念ながら」

そう言って雪鷹はフェイトに笑顔を向ける。これ以上ないくらい清々しい笑顔だが、その目は鋭く、容赦がない。

「うぅ・・・それは、その・・・ごめんなさい」

「昨日も言ったが、そういうシフトで行くと上が決めたら、俺達下っ端は黙ってそれに従うだけだ。フェイトが謝ることなんてない。気にしなくていい。そんなことより、こんな時間に俺の部屋に来るのはあまり感心しないな」

「それは・・・」

そう呟きながらフェイトは俯く。真夜中とまではいかないが、夜ももう遅い。異性の部屋に入るには相応しくない、と遠回しに告げる雪鷹の言葉は理解できないこともない。しかし、雪鷹のことを心配してわざわざ来たのだから、そう言われるのは心外でもあった。

「でも、雪鷹のことが心配で・・・」

「心配、ね・・・そんなくだらないことの為に？」

雪鷹は呆れたように笑う。その笑い声がどうにも不愉快で、フェイトの声が僅かに硬くなる。

「その言い方、よくないよ。私のせいでいっぱい迷惑かけたから・・・折角に気にして来てあげたのに・・・」

雪鷹を心配して来たというのに、くだらないと冷たく返されては如何にフェイトといえど良い気持ちはしない。折角の好意を踏みにじられたようで気分が悪かった。

「来てくれ、と頼んだ覚えもないし、さっきも言ったが上がそれで行くと決めたなら俺はそれに従うだけだ。変な気遣いをしてもらう必要はない。そもそも、心配して来たなら黙って寝かせておいてくれてもいいだろう？こんなことを聞かせる為にわざわざ起さないでくれ」

「・・・それは、ごめん。でも、そんな言い方しなくてもいいでしょ・・・」

雪鷹を起こしてしまったことに関しては悪いことをしたと反省しているせいもあり、反論せずに小さく頷く。しかし、どうにも胸の奥に何かが刺さったようで気分が悪い。寝起きで機嫌が悪いことを差し引いても、雪鷹の対応には納得できない。

「居眠りするくらい疲れるなら一言くらい私に言ってくれればなんとかできたかもしれないんだよ」

「まったく・・・そこまで他人のことに一生懸命になるくせ、自分自身のことには不用心過ぎる」

呆れたように雪鷹はため息をこぼす。

「私だってもう子供じゃないんだよ、用心しなきゃいけない人としなくていい人の見分けくらいできる。馬鹿にしないで」

「変わらないな、フェイトは・・・」

ため息交じりに呟きながら雪鷹はゆっくりと立ち上がる。

「あの頃と同じ子供のままだ・・・」

まるで、昔を懐かしむような、フェイトを憐れむような、泣いているような、そんな灰色だった。

「もう、あの頃の俺達じゃないんだ。いい加減、自覚しろ」

「そんなことないよ。私もなのはも雪鷹も確かにあの頃と変わってしまったかもしれない。だけど――」

そんなことないんだ。フェイトはそう続きを言おうとしたが言えなかった。フェイトの目の前に立った雪鷹にそのままベッドへと押し倒されたからだ。両手首をしっかりと握られ、自由は奪われてしまっている。真新しいシーツの匂いがフェイトの鼻腔をくすぐるが、それさえも気にならないくらいフェイトは動転していた。

「えっ、あ、えぇぇ!?」

驚きで言葉にならない。目の前にはフェイトが初めて見る雪鷹の表情があった。いつも冷たく冴えた視線でもなく、見る人を惹きつける笑顔でもない、猛々しい雄の顔がそこにはあった。

「お互い、もう子供じゃないんだ。二人きりの夜の過ごし方くらい知ってるだろう?」

雪鷹の口から紡がれた甘く、残酷な声音。その言葉にフェイトは身を硬くする。もちろん、フェイトとて純真無垢な子供ではないのだから男女の営みについては知っている。しかし、それはあくまで知識としてであり、実体験などもちろんない。雪鷹を心配してきたのに、気がつけばその雪鷹に押し倒されているのだ。しかも、色めい

た言葉を仄めかされてはどうしようもなかった。

「い、嫌・・・やめて・・・」

竦んでしまって声が出ない。執務官として凶悪な事件に遭遇したことは何度かある。ある程度は恐怖に対して耐性を持っていると思っていた。しかし、今フェイトの身を襲う恐怖は今まで感じたものとは全く異質な恐怖だった。デバイスが使えないとはいえ、魔法そのものが封じられたわけではない。魔力変換資質を使えば電気で雪鷹にショックを与えることもできる。頭ではそう理解しているのに、体がまるで言うことを聞かなかった。

「何を今更嫌がっている・・・まさか、こうなることを少しも考えなかったのか？」

フェイトを見下すような、蔑むような下卑た笑い。突きつけられたその恐怖に身の毛が弥立つ。実を言うなら、こういう展開を全く考えていなかったわけではない。フェイトもそれなりの年頃なのだ。恋い慕う男の下へ行くのだから淡い期待を抱かないはずがない。しかし、それはもっと甘く、優しい場面のはずだった。少なくとも、身も凍るような恐怖があるはずがなかった。

「雪鷹・・・嘘、だよね・・・こんなの、冗談、だよね・・・」

「嘘に見えるか？」

声が震えて、まとも話すことさえままならない。嘘であると信じたいが、目の前の雪鷹の表情が偽りであるようには見えない。本能的にフェイトは目を閉じた。これ以上の恐怖を見ていられなかった。何も見えない恐怖がフェイトを襲う。しかし、目を開けることの方

がはるかに恐ろしかった。永遠に思えるほど、永い沈黙。手首が痺れるような錯覚。そこから伝わる熱。額に何かが触れた。柔らかくて、あたたかい感触。不思議と嫌な感じはしない。むしろ、優しささえ感じられ、心地いい。フェイトは何が起きたのか理解できなかった。気付くと手首も自由になっていた。恐る恐るフェイトが目を開けると雪鷹は何事もなかったかのように椅子に座っていた。

「これで懲りたら少しは自重しろ、ハラオウン執務官」

そう言った雪鷹の表情はいつも通りで、先程までの豹虎（けだもの）のような恐怖感が嘘のように消えていた。それでもなお、何が起きたのか理解できなかったフェイトは上半身を起こしてから動けなかった。ようやく、自分の置かれた状況を理解すると涙が溢れてきた。

「・・・やり過ぎたか？」

フェイトの涙を見て雪鷹が申し訳なさそうに呟く。思わせぶりな態度をとっていたが、もちろん、雪鷹にフェイトに何かする気などなかった。理不尽に起こされた復讐も兼ねてのささやかな悪戯のつもりだったのだが、泣き出すとは思いもしなかったのだ。

「馬鹿ぁ・・・すごく怖かったんだから・・・」

濡れた深紅の瞳が雪鷹を睨みつける。ほんのりと赤いまぶたは化粧をしたようにその瞳を際立たせている。肩を震わせながら涙を零すフェイトを目の前にすると流石の雪鷹も罪悪感を覚えないわけにはいかなかった。

「・・・すまない」

笑って済ませる状況ではなかった。泣きながら睨みつけるフェイトに対して雪鷹は頭を下げる。しかし、その程度でフェイトの機嫌が収まるはずもない。

「許さないんだから・・・」

恨みのこもった声はいつものフェイトからは想像もつかないくらい低く、重い。ささやかな悪戯のはずが強姦未遂に発展してしまえば雪鷹も無事では済まない。まったくもって笑えない。流石にそれだけは避けたい雪鷹は静かに立ちあがるとフェイトの前に片膝をつき、右手をそっとフェイトの頬へと伸ばす。

「まさか、泣くとは思ってなかったんだ・・・」

雪鷹の白い指がフェイトの頬を優しく包む。流れるようなその所作に隙はない。勝手に触るな、と言い返そうと思ったフェイトだったが、雪鷹と目が合った瞬間に何も言えなくなってしまった。

「起こされた腹いせに少し厳しめにしたことは謝るよ。だけど、俺の言いたいことは伝わっただろう?」

真っ直ぐな真摯な瞳。どこか憂いを湛えたその眼差しは寂しげで、今にも泣き出しそうに見えた。雪鷹の親指がフェイトの涙をそっと拭う。たったそれだけの動きからも雪鷹がフェイトを大切に思っていることが伝わってくる。あの豹虎(けだもの)のような荒々しさはまったく感じられない。心地よい優しさにフェイトはそっと目を閉じる。

「・・・雪鷹はずるい。そんな顔するなんて・・・」

恨みつらみをぶつけようと思っていたフェイトだったが、雪鷹に見

つめられてその気が萎えてしまった。雪鷹にとってあれは本気ではなかったのだ。夜遅くに異性の部屋を訪れたフェイトの不用心さを戒める為に演技をしていただけなのだ。あの下卑た笑いも、豹虎（けだもの）の貌も全ては偽りで、しかも、フェイトをからかって楽しんでいたわけでもないのだ。逆にフェイトを大切に想っているからこその行動だったのだ。だからといって雪鷹の全てを許せるわけではないが、怨むこともできそうになかった。ゆるんだ唇から零れ落ちたの紛れもなく、フェイトの本音だった。

「じゃあ・・・優しく慰めて？そしたら、許してあげてもいいよ」

「仰せのままに」

雪鷹は片膝を床についたまま恭しく頭を下げて一礼をすると、フェイトの前髪を掻き分けて、額にそっと口づけを落とした。柔らかくて、あたたかい感触。唇が触れていたのは時間にして一秒にも満たないほんの一瞬のことだ。しかし、その一瞬で雪鷹がフェイトのことをどんなに大切に想っているのかが伝わってくる。もちろん、不快ははずがない。嬉しいはずなのに、それがフェイトの心を掻き乱す。止まったと思っていた涙が再び溢れ出し、それを見た雪鷹は困惑した表情を浮かべる。

「嫌、だったか？」

違う、と首を横に振って答えるが涙は止まらない。逆に一層溢れて来て止まりそうになかった。

「ごめんなさい・・・私、どうかしてたみたい。その・・・今日はありがとう。それじゃ、おやすみなさい」

そう言うとフェイトは逃げるように部屋から出ていってしまった。
独り残された雪鷹は諦めにも似た感情を込めてため息を零した。

「・・・最低だな、私は」

自己嫌悪の言葉はむなしく響くだけだった。

17『友情の証』（後書き）

――ぶち抜けっ！！

狂い咲け――

ぶつかり合うのは鉄槌と氷の刃

――フランメシュラァァアクっ！！

白蓮華（ビャクレンゲ）――

勝負の行方は…

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
１８　『鷹と鉄槌』

戦いへ、テイクオフ

・＊・＊・＊・

アンケート結果です

＊あとがき
１：５票
２：４票
３：０票
４：１票

＊記念小説
ａ：３票
ｂ：３票
ｃ：３票（はやて、なのは、フェイト、ＦＷ陣）
ｄ：０票
ｅ：２票

以上のようになりました。
あとがきは現状維持でこれからはいきます。問題は記念小説の方です。見事にバラけちゃって…困りましたね

どう反映するかは只今考え中です。

アンケートに協力してくださった皆さん、本当にありがとうございました♪

ではでは

Intermission 17.1

Intermission 17.1

寝室に戻り、寝衣に着替えたなのははフェイトの帰りを待ちながら、今日の新人達の戦闘映像の分析をしていた。ガジェットが有人操作に切り替わるというイレギュラーに遭いながらも、それに惑わされることなく新人達はよく戦っていた。もちろん、教導官の目から見れば幾らでも穴は見つかったし、危ないと思う場面も一つや二つではない。しかし、全体的に見れば合格といっていい水準だった。一段落着いて軽く体を伸ばした時、部屋の扉の開く音がした。

「あ、おかえり、フェイトちゃ・・・!?」

僅かに乱れた髪と制服。別れた時とはまるで別人のフェイトがそこに立っていた。涙で濡れたまぶたはほんのりと紅い。視点の定まらない紅い瞳はなのはの姿を見つける安心したように笑う。駆け寄って来たなのはの腕の中に身を寄せるとフェイトは切ない声を絞り出す。

「なのは・・・」

「どうしたの・・・もしかして、雪鷹に何かされた?もしかして、暴力?」

雪鷹を疑いたくはなかったが、雪鷹に会いに行き、帰って来たらこの有様なのだ。疑うな、と言う方が無理というものだ。雪鷹に絶対の信頼を置いているなのはだが、もし雪鷹が本当にフェイトに乱暴なことをしたのなら許すわけにはいかない。

「ち、違うの・・・そうじゃないの・・・乱暴なことはされて、ないけど・・・」

なのはの言葉をフェイトは首を振っては全力で否定する。しかし、含みのある言葉遣いは遠回しに何かがあったのだとなのはを確信させた。

「けど・・・雪鷹に何をされたの？」

「・・・キスされたんだ。おでこにだけど」

一瞬、なのははフェイトの言葉の意味を理解しかねた。聞き間違いかと思ったが、フェイトはすぐ目の前にいるのだから聞き間違えるはずがない。しかし、雪鷹がフェイトの額に口づけをしている光景はどうしても思い浮かべることができなかった。二人とも並べば絵になるような美男美女だ。雪鷹に対するフェイトの想いも知っている。それでも、なのはにはイメージが湧いてこない。

「えーと・・・状況がよく呑み込めてないんだけど・・・フェイトちゃんは雪鷹にキスされて、それで泣いているってことでいいの？」

フェイトは小さく頷く。それを見てなのははますます混乱した。

「ちょっと待って。フェイトちゃんは今でも雪鷹のことが好きで間違いないんだよね？それとも、もしかしてもう嫌いになったの？」

雪鷹へのフェイトの想いはなのはの中で既に確定したもだという認識だ。しかし、既に嫌いになってしまった可能性が皆無というわけでもない。嫌いな男から無理矢理、額にとはいえ、キスされたのな

ら、フェイトが泣いていた理由も納得できる。

「そんなことないよ、絶対に。雪鷹のことは好きだよ・・・だから、嫌なんだ。雪鷹は本気じゃないってわかってるのに、それなのに・・・すごく怖かった。でも、一瞬でも嬉しいって思ってしまった自分がすごく嫌・・・嫌なの」

肩を震わせるフェイトの言葉になのはは困惑するしかない。一体何があったのか。その全体像がまるで掴めなかった。詳しい話を聞く為にフェイトの肩を抱いて近くのソファに座らせ、その隣になのはも腰を下ろす。

「フェイトちゃん、何があったのか、詳しく話して？」

なのはに宥められてフェイトはゆっくりと事の次第を話し始めた。雪鷹と口論になったこと。雪鷹にベッドに押し倒されたこと。それが雪鷹の悪ふざけだったこと。額にキスされたこと。それを一瞬でも嬉しいと思ってしまった自分が許せないこと。躊躇いがちに、拙い言葉ながらも全てを明らかにしたフェイトはどこかすっきりした笑顔を浮かべていた。

「雪鷹に押し倒された時、すごく怖かった。今まで感じたことがないくらい・・・でも、それなのに心のどこかで私はきっと喜んでた・・・雪鷹にはそういう対象に見られてないって思ってたから、そうじゃないんだってわかって嬉しかった。キスされた時もすごく嬉しかった。でも、気付いたんだ。雪鷹の『好き』と私の『好き』は別物なんだって・・・そんなことにも気付かないで舞い上がっていた自分がすごく愚かで、惨めに思えてきて・・・」

そう思うと涙が止まらなかったんだ。濡れた瞼を擦りながらフェイ

トはそう言うとなのははにこりと微笑んだ。

「聞いてくれてありがとうね・・・なのはに話したらすっきりした」

「そ、そう・・・なら、いいんだけど・・・」

フェイトの話を聞いていたなのはの頬はほんのりと紅い。なのはもフェイトに負けないくらい色恋沙汰には疎い。そんななのはにとってフェイトの話はいささか生々し過ぎたのだ。なのはが新人達の戦闘データを解析している間に親友がそんなことになっていたのだと思うとどうしようもなく気恥かしい。

「もう、大丈夫だよ。ありがとう」

まぶたは赤いままだったが、涙はもう止まっている。それを見てもう心配ないと判断したなのはそっと立ちあがる。

「じゃあ、もう寝ちゃおう?明日も朝から訓練。フェイトちゃんもスカリエッティの捜査で忙しいんでしょう?」

「うん、そうだね・・・」

フェイトも笑顔で立ちあがると寝巻に着替え始めた。なのははそっと窓の向こうを見上げた。数えるほどの星明かりが寂しげに瞬いている。

「・・・私達って雪鷹にとって何なんだろう」

独り呟いたその言葉は誰にも聞かれることなく夜空へと消えていった。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　１７．１（後書き）

どうも、月兎です。
趣向を変えて雑談をば少し（笑）
今回のＩｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　１７．１は如何だったでしょうか？

１７については賛否両論な展開だったと思います。主人公が未遂とはいえフェイトを……主人公がこんなので本当にいいのか？と私も疑いたくなりますよ。

ちなみに、あの程度では特に規制は設けませんし、あれ以上でも多分設けません。用語や行為が出てきたら考えますけど。まぁ、当分そこまで露骨な性描写が出てくる予定はないのでいらぬ心配かもしれませんが。

今回のお話、見方を変えるとフェイトは結局、雪鷹のことが好きだってお話にも見て取れます。反撃しなかった一番の理由はあの先をフェイト自身が望んでいたからかもしれない、という穿った読み方もできると思います。

この小説を書く上で一番注意しているのはキャラクターの葛藤や迷いについてです。一人の人間の中に正と負二つの顔があります。その二つの顔を必ず見せようと思って書いてます。どちらか一方しかないキャラクターというのは作りたくなかったので
はやての扱いが若干腹黒キャラなのもこういう理由からでもありま

す。

というわけでこれからなのはやフェイト、新人達が時折影を見せるかもしれませんがあんまり気にしないでください。こんなキャラじゃない！！とか言わないでください。悪く書いているからと言ってそのキャラが嫌いだとかそういう理由ではありませんので悪しからず…

さてさて、前置きが長くなりなりましたが本題です。
以前、実施したアンケートについてですが記念小説は三つが同数票でした。そこで悩んだ結果、決めました。三つとも書きます。

ただし、番外編を入れて今の流れを壊したくないので今進行中のティアナフルボッコ編（仮）が終わってから投稿するつもりです。本編に織り込む形で雪鷹の訓練校時代、情報一課での仕事、そして六課メンバーとのほんのり系の恋話をそれぞれ描きたいと思います。

そして、ティアナフルボッコ編（仮）はまだまだ続くので、実際に投稿できるようになるのは今の進捗状況から考えて多分6月くらいになると思います。大分先になりますが待っていてください。それまでしばらく鬱な展開が続くかもしれませんが、どうかご辛抱をばお願い申し上げます。

長々とした雑談にお付き合い頂きましてありがとうございました。
今後も魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔをよろしくお願いします。

18『鷹と鉄槌』（前書き）

戦いは嫌いだ
自分の中で何かが崩れていく

歓喜する自分がいる
狂う自分がいる
笑いを堪えきれない自分がいる

俺はそれが恐ろしい。
だけど、逃げるわけにはいかない

俺が俺として俺で在り続ける為に

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります

18『鷹と鉄槌』

18『鷹と鉄槌』

「流石に適当な相手はいないか・・・」

書類を片手に雪鷹がぼやく。先日、ホテル・アグスタで雪鷹が遭遇したアンノウンの騎士。直接刃を交えた雪鷹の感触だとどんなに低く見積もってＡＡＡランク、おそらくはオーバーＳランク相当の実力者だ。しかも、雪鷹の苦手とするベルカ式の使い手。前回は相手に交戦する意志が乏しかったおかげで無傷で済んだが、本気で襲いかかってくれば雪鷹の命も危うい。備えもなしに戦える相手ではなかった。

「ユキタカ曹長、何してるですか？」

「ん？あぁ、リイン曹長でしたか。先日ホテルで戦ったアンノウンの騎士に備えてベルカ式の使い手と模擬戦をしようと思って相手を頼めそうな地上本部の人間を探してたんですがなかなか適当な人間がいなくてな」

飛んできたリインを見ながら雪鷹は苦笑する。ここ、ミッドチルダにも近代ベルカ式が広がりつつあるとはいえ、一対一の近接戦闘に特化したベルカ式よりも応用性に富んだミッドチルダ式の方が管理局では重宝されるせいもあり、ベルカ式の使い手は絶対数が少ない。その数少ないベルカ式の使い手の中から雪鷹の求める基準を満たす人間となると数えるほどしかいない。

「どんな人を探しているですか？」

「近代ベルカ式でも構わないが、できれば古代ベルカ式の使い手で魔導師ランクは最低でもＡＡＡ・・・聖王教会ならいるかもしれないが流石に地上本部にそこまでの使い手はいないようだな。さて、教会に頼もうにも伝手はないし・・・どうしたものかな」

「それなら、ちょうどぴったりの人がいるじゃないですか」

リインは嬉々とした表情で雪鷹の肩に止まる。

「本当か？」

「はい、ユキタカ曹長、灯台もと暗し、ですよ」

・＊・＊・＊・

「なるほど。事情はわかった。要するにあたしに模擬戦の相手をしてくれってことだな？」

雪鷹とリインの説明を受けてヴィータは頷く。先程まで新人達の相手をしていたらしく、後ろの方では疲れ果てた新人四人が大の字に倒れている。

「あたしもおめぇには興味もあったからな。いいぜ、引き受けた。なのは、悪りぃけど、訓練場少し借りるぞ？」

「うん、いいよ。それじゃ、みんなはで二人の模擬戦、見学しようか」

「「「「はいっ！！」」」」

「おめぇら、ちゃんと見とけよ。あとで意見とか感想とかきっちり聞くかんな」

鉄の伯爵、グラーファイゼンを肩に背負いながらヴィータが新人達にサボるな、と釘を刺す。見た目はエリオやキャロと変わらないのに、その仕草は凛々しく、様になっている。

「模擬戦だからって手は抜かねえかんな。全力でぶっ潰してやるよ」

・＊・＊・＊・

森の中で漆黒のバリアジャケットを身に纏った雪鷹と真紅の騎士甲冑に身を包んだヴィータが対峙する。両手にはお互いの獲物が握られて、模擬戦開始の合図を今か今かと待ち侘びている。

「時間は３０分でいいかな、無制限にしちゃうと二人ともいつまでも戦い続けちゃうかもしれないから」

モニター上のなのはが二人に確認を取る。なのはの見立てでは今の

二人の実力に大きな差はない。実力が拮抗しているなら決着の付き方は二つしかない。一瞬で決まるか長引くかのどちらかだ。あまり長引かれると訓練の予定が狂うのでなのはは制限時間を設けたのだ。

「あぁ、それでいい」

「俺も問題はない」

二人はなのはの提案に同意して頷く。

「それじゃ、いくよ。時間制限三十分一本勝負、模擬戦開始っ！！」

なのはの合図と共に雪鷹に一気に間合いを詰めてヴィータに斬りかかる。ブレイドハートのファーストモードである氷の刃は一見すると脆そうだが、魔力密度は尋常ではない。グラーフアイゼンでその攻撃を受け止めたヴィータはわずかに顔をしかめる。

「開始早々特攻か？つまんねぇ奴だな」

グラーフアイゼンを握る両手に力を込めて一気に振り払い、雪鷹との間合いをとって空へと舞い上がるとすぐに反撃に転じる。

「シュワルベフリーゲンっ！！」

そう叫んでヴィータは鉄球を雪鷹に向けて打ち出す。弾数は４発と決して多くはないが誘導制御にバリア貫通、着弾時に破裂するなど多くの効果が付与されている射撃魔法だ。並みの魔導師で避けることも受け止めることも難しい。

「狂い咲け、白蓮華（ビャクレンゲ）」

雪鷹がブレイドハートを地面に突き立てる。すると地面からいくつもの氷が突き出し、ヴィータの攻撃から雪鷹を守る。なのはとの模擬戦でアクセルシューターを防いだあの技だ。鉄球が氷にぶつかって弾けるが、氷はびくともしない。それを見たヴィータは忌々しげに舌打ちをする。決して雪鷹を格下と侮っていたつもりはなかったがシュワルベフリーゲンが通じないほどの防御力を持っているとは思ってもいなかったのだ。

（一撃の重みならあたしの方が断然上だけど、あっちの方が速さはある。まともに斬り合ったら、ちょっとやべぇかもな・・・）

中距離攻撃魔法が他にないわけでもないが、雪鷹にあまり手の内を晒したくないヴィータは間合いをとりながら、策を練る。普段のヴィータならすぐに突っ込んでいくのだが、今回は違った。今日の相手は並みの魔導師ではないのだ。これまで数多くの戦闘経験のあるヴィータだ。ほんの数合打ち合っただけでも相手の技量は掴める。雪鷹の剣の技量はあのシグナムに劣らないものがある。いかにベルカの騎士とはいえ、ハンマーを得物とするヴィータでは斬り合いは少々分が悪い。

「おめぇ、ミッド式を使う割には剣の腕も立つんだな」

「まぁ、剣の技量にミッド式もベルカ式も関係ありませんから」

雪鷹は冷めた表情で剣を構え直すとヴィータ目掛けて一気に飛び上がる。小細工のない正面からの突撃。速さは確かにあるがそんな単調な攻撃が通じるヴィータではない。グラーフアイゼンを振りかぶるとタイミングを合わせて雪鷹に強烈な一撃をぶつける。それを雪鷹はブレイドハートで受けるが、その一撃に耐え切れず刀身が真っ

二つに折れてしまった。グラーフアイゼンの直撃を受けた雪鷹はそのまま地面に叩き落とされる。一度ブレイドハートで受けていたおかげで戦闘不能になるようなダメージではない。地面にぶつかる寸前でリカバリーして雪鷹は体勢を立て直す。しかし、その隙を与えまいとヴィータがグラーフアイゼンをふりかぶって急降下してくる。

「ぶっつぶれろぉぉお！！」

「・・・白蓮華っ！！」

躱せないと判断した雪鷹は身をかがめて折れたブレイドハートを地面に突き立てた。シュワルベフリーゲンを防いだ時よりも更に大きく、鋭い氷の槍がヴィータを迎え撃つ。飛行魔法のスピードに重力を上乗せした必殺の一撃をぶつけようと身構えていたヴィータは突如現れた氷の槍に攻撃を中断せざるを得なくなり、軌道を上へと変えて離脱する。

「防御魔法かと思ったらそんな使い方もあんのか・・・」

「誰も防御魔法と言ってませんよ。ブレイドハート、ツーハンドモード」

両手に握られたブレイドハートからそれぞれ氷の刃が伸びる。アンノウンの騎士と戦った二刀流の構えである。それを見たヴィータはわずかに顔をしかめた。雪鷹の手数が増えたせいで、武器での打ち合いはますますヴィータが不利になった。

（刃そのものは氷でできてんだ。壊してのあんま意味はねぇ。隙が僅かにできる程度・・・アイゼンで一気に叩けるか・・・いや、無理に近付いたらあの氷で串刺しにされちまう。かといって打ち合い

はあたしの分が悪い・・・どうする？）

雪鷹の魔導師ランクはＡ＋で、リミッターの掛かっているヴィータとほぼ同程度の魔導師ランクを持っている。魔導師ランクに差がないのなら、力技でねじ伏せることもできなくはないがそんな単純な策が通じるほど甘い相手ではない。下手に動いて隙を見せたら雪鷹は容赦なく喰らいついてくるだろう。訓練の相手とはまるで違うのだと再認識させられたヴィータはグラーフアイゼンを握る手に力を入れ直した。

・＊・＊・＊・

「すごい・・・あのヴィータ副隊長と互角に渡り合うなんて・・・」

「ユキタカ曹長、やっぱい強いです」

スバルは模擬戦をしながらため息を零す。二人の強さはよく知っていたつもりだが、こうして目の前にすると改めて実感せざるを得ない。その横でモニターをみつめるリインも同じように頷く。

「なのはさん、ユキタカ曹長の術式はミッドチルダ式なんですよね？それなのに、ベルカ式とあんな風に戦えるんですか？」

そう尋ねたのはエリオだ。どちらが優れているというわけでもないが近接戦闘ではベルカ式、遠・中距離戦闘ではミッド式という見解

が一般論だ。一対一の戦闘に特化したベルカ式をミッド式の魔導師が相手にする場合、距離をとって射撃や砲撃を駆使して戦うのが定石である。しかし、雪鷹の闘いはその定石とは逆の、正面からぶつかっていくというベルカ式に似たスタイルだった。

「それはちょっと難しい質問だね。雪鷹も言ってたように剣の腕だけなら術式は関係ない。それにミッド式にも近接戦闘用の魔法もあるし、使い方次第ではあんな戦い方ができないわけじゃないんだよ。だからってヴィータ副隊長とあんな風に戦うなんて私にはできないけど」

手本にはできないな、となのはは困ったように笑う。なのはの本分は正確無比な誘導弾と一撃必殺の砲撃魔法だ。
それを使わずにヴィータに勝つのは流石のエースオブエースでも不可能に等しい。

「雪鷹はオールラウンダーだからね。基本的にバックスの私と比べても仕方ないし、誰にもできることじゃないんだけど・・・」

かなり曖昧な答えだったが、エリオは一応納得したらしく、頷いてくれた。

・＊・＊・＊・

「二刀流か・・・おめぇ、本当にミッド式の魔導師か？ベルカの騎士みたいな戦い方しやがって・・・」

「一番効果的な戦術を選んだだけです」

そう言って雪鷹は地上からヴィータを見上げる。もちろん、雪鷹も飛行魔法は使えるが、練度はヴィータに及ばないという自覚がある。わざわざ相手の土俵に踏み込んでいく無茶はしない。

「フリーズランサー、ファイアっ」

氷の槍をヴィータへ放つ。しかし、距離があったせいもありヴィータは難なくそれを躱して、雪鷹を目掛けて飛ぶ。振りかぶった鉄槌の渾身の一撃。それを受け止めようと雪鷹は刃を構える。雪鷹を捉えた、と思った瞬間、鎚が雪鷹を右に逸れた。

「なっ!?うわっ!?」

防がれたのではない。受け止められたのでもない。躱されたわけでもない。何が起きたのか理解できなかったヴィータは驚きの表情を浮かべる。しかし、驚く間もなく、ヴィータの小さな体は吹き飛び、数瞬宙を舞った後に、地面に叩きつけられた。

「くそっ!!てめぇ、何しやがった!!」

しかし、そこは歴戦の兵。ヴィータはすぐに立ちあがって体勢を立て直し、雪鷹に向けて武器を構える。しかし、頭に響く鈍い痛み。おそらくは蹴られたのだろうが、いつ蹴られたのかまるでわからなかった。正体不明の攻撃に警戒してヴィータは動こうとしない。

「さて、ヴィータ副隊長、質問です。当時ＡＡＡランクの二人の九歳の少女にＡＡランクの十四歳の少年が勝つにはどうしたらいいで

しょうか？」

場違いなほど清々しい笑顔を浮かべて雪鷹がヴィータに尋ねた。

「こんな時にふざけんなっ！！」

ヴィータは一喝するが雪鷹は笑顔のままだ。

「ふざけてなんてない。これが副隊長からの質問の答えだ。格上の魔導師相手に勝つにはどうするか・・・自分の得意分野に持ち込むしかないだろう？」

そう言って雪鷹は一気に間合いを詰めるとヴィータに斬りかかった。それをヴィータはグラーフアイゼンで難なく受け止める。そのまま膠着するかと思われたがすぐにヴィータが崩れ、そのまま空へと逃げた。

「くそ・・・そういうことかよ・・・」

脇腹を押えながらヴィータは忌々しげに呟き、雪鷹を睨みつけた。今度ははっきりと見えた。雪鷹の右足が自分の腹部に容赦なく食い込んでいくその様子が。つまり、二刀は元々囮だったのだ。その防御にヴィータが集中している隙に無防備な箇所へ蹴りを入れる。雪鷹は最初からそのつもりだったのだ。バリアジャケットのおかげで痛みは鈍く疼く程度で済んでいるが、普通なら肋骨が折れていてもおかしくない一撃だった。

「まぁ、そういうことだ。魔法で勝てないなら肉弾戦で・・・腕力しか勝ってないんだから、それを生かすのは当然だろう？奇襲やフ

エイント、不意打ち・・・それを交えたコンビネーション。あとは、剣も少々・・・最近、狙撃しかしてなかったからまだ本調子じゃないが、何か不満は？」

「上等だよ！！ベルカの騎士に真っ向勝負を挑むなんざ百年早えぇ・・・いくぞ、アイゼンっ！！」

・＊・＊・＊・

「ユキタカ曹長、すごい・・・」

「あのヴィータ副隊長を相手に一歩も引かないなんて・・・」

エリオとスバルが感嘆の声を挙げる。ポジション的に前線寄りの二人はティアナやキャロに比べてヴィータに指導してもらう機会が多い。それだけ、ヴィータの強さを知っているのだ。そのヴィータを相手に一歩も退かない戦いをしている雪鷹が信じられなかった。

「違う・・・互角じゃない。ユキタカ曹長はほとんどダメージがないもの・・・むしろ、ヴィータ隊長を押してる！？」

二人の様子を冷静に観察していたティアナが驚きを込めて小さく呟く。

「よく見てるね、ティアナ」

それを聞いたなのははは嬉しそうに笑う。センターガードに最も必要なのは精密な射撃能力でも、火力でもない。周囲を見渡し、冷静に状況を判断する『眼』が最も求められていると言っても過言ではない。そのことを教えずとも理解しているティアナはまだまだ伸びる。それを確信したなのははは嬉しそう、そして、どこか懐かしそうに言葉を続ける。

「あれが雪鷹の基本戦術・・・魔法で勝てないなら、魔法を使わせない。それを可能にする間合いとスピード、体術・・・結局、私もフェイトちゃんも一人では破れなかったんだよね」

「でも、前になのはさんと模擬戦した時はあんな戦い方しませんでしたよ」

「それは私が私の間合いで戦ってたからだよ。雪鷹の苦手な砲撃魔導師の間合い・・・まぁ、負けちゃったけどね」

そう言ってなのはの笑顔は少し寂しげだった。そんな表情を見せつけられ、ティアナは何も言えなくなってモニターに視線を戻した。

・＊・＊・＊・

「シュワルベフリーゲンっ!!」

「フリーズランサー、ファイアっ！！」

ヴィータの撃ち出した鉄球を雪鷹はフリーズランサーで迎撃する。両者がぶつかり合い、爆煙が二人の間を遮る。それを突き破ってヴィータが雪鷹に突撃する。重力を味方につけた必殺の一撃。しかし、それを予想していた雪鷹は慌てることなくブレイドハートを地面に突き立てた。

「白蓮華っ！！」

先程もヴィータの猛攻を阻んだ白い仇花は再び咲き誇り、その中央に雪鷹を抱え込む。強固の氷壁にし槍。攻守どちらにも応用の効くその魔法は、その鋭い矛先を迷うことなくヴィータに向けていた。しかし、ヴィータは止まる気配を見せない。鉄槌からカートリッジが一つ射出される。防御が邪魔なら、どうすればいいのか。鉄槌の騎士の二つ名を持つヴィータの答えは一つしかない。

「てめぇの防御ごとぶち破るっ！！いくぞ、アイゼンっ！！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．Ｆｌａｍｍｅｓｃｈｌａｇ．≫

「ぶち抜けぇ、フランメシュラァァアクっ！！」

ヴィータの渾身の一撃が氷を捉え、轟音と共に爆ぜた。飛び散る氷片。揺れる焔火。咽るような熱気が辺りを支配する。焔のゆらめきの音だけが不気味に響く。静か過ぎる戦場、それを破ったのは冷たい電子音だった。

≪Ｉｃｉｃｌｅ Ｌｏｃｋ≫

その瞬間、煙の中から二人が飛び出て来た。一方はバリアジャケットが焦げ、左腕から出血している雪鷹。もう一方は、バリアジャケットこそ無事だが、氷漬けにされた鉄槌を握り締めたヴィータ。二人ともこのまま戦いを続けられる状態には見えなかった。

「左腕を犠牲にして武器封じ・・・なめたことしやがって」

「腕一本でそいつがしばらく使えなくなるなら悪くはないね・・・ワンハンドモード」

雪鷹は右手にブレイドハートを構え直して、嬉々とした表情を浮かべる。明らかに模擬戦に挑む者の顔ではない。どこか狂気めいたその笑顔にヴィータは後ろに一歩だけ身を引く。グラーフアイゼンを氷漬けにされ、攻め手を欠いたヴィータが正面から雪鷹にぶつかっていっても勝ち目はない。

「てめぇ、そんな卑怯なことして恥ずかしくねぇのかよ」

苦し紛れに悪態をつくが雪鷹は眉ひとつ動かすことなく、冷めた目でヴィータを見つめた。

「卑怯・・・あぁ、武器封じのことか。見ての通り、俺も左腕を怪我している・・・肉を切らせて骨を断つ。立派な作戦だ。何が悪い？」

返す言葉のないヴィータは悔しそうに雪鷹を睨みつける。しかし、すぐに両手を上に挙げた。それの意味することは一つしかない。

「悔しいけど、今回はあたしの負けだ・・・次はぜってぇにぶっ潰してやるかんな・・・覚悟しとけ！！」

剥き出しの敵意に雪鷹は苦笑を浮かべる。

「たぶん、もうないと思います。二度とヴィータ三尉には模擬戦の相手を頼みませんから。これでも命は惜しいので」

・＊・＊・＊・

「副隊長に勝っちゃった・・・」

「すごいです・・・」

「まぁ、当然かな。ヴィータ副隊長とグラーフアイゼンはリミッター付きで、雪鷹はきっとヴィータ副隊長の戦術を有る程度は研究してるはずだから。初見の雪鷹のあの攻撃に対応するのは結構厳しいし、デバイス封じなんて奥の手を隠されてたら、いくらヴィータ副隊長でもああなるよね。実戦ならともかく、模擬戦であれ以上無理するわけにもいかないし」

なのははさほど驚くことなく、冷静に今の模擬戦を分析する。魔導師や騎士として能力ではヴィータの方が上だろう。しかし、戦術の幅では雪鷹の方がはるかに上なのだ。ベルカ式の騎士としては攻守共にバランスのとれているヴィータであるが、それはあくまでもベルカ式の騎士として、である。攻守のバランスやバリエーションの観点のみで考えるとベルカ式よりもミッド式の方がはるかに優っているのだ。ヴィータと相性の悪い戦術を選べば、不可能なことではは

ない。

「まぁ、奇襲なんてどんなものしろ一発勝負だからな・・・」

そう言ってなのはの隣に模擬戦を終えた雪鷹とヴィータが降り立った。傷付いた左腕が痛々しいが、冷めた眼差しはそれをまるで感じさせない。

「通じなければ俺が負けてた」

「ごめん、なのは・・・勝てなかった」

しょんぼりと肩を落としたその姿からは出陣前の凛々しさが嘘のように消えてしまっていた。あれだけ威勢のいい言葉を並べて、結局勝てなかったのだ。落ち込むのは当然だ。しかし、そんなことないよ、となのはは笑顔でヴィータを慰める。

「ヴィータ副隊長が謝ることなんてないよ。大切なのは勝ち負けじゃない。この子たちもいい勉強になったし、私もいっぱい参考になったよ。対雪鷹用の戦術・・・おかげでだいぶ形になってきた」

「俺用の戦術って・・・」

なのはの言葉に雪鷹は呆れたような顔をするが、なのはの目は真剣そのものだ。生来、負けず嫌いな性格である上にエースオブエースとして意地もある。次に戦うときは必ず勝つ、その想いは純粋で、強い。

「本気だよ。だって、一対一で今まで一度も勝ってないんだもん。勝ちたいよ、絶対に」

「オーバーSランク魔導師にA＋の俺なんかが勝てるはずないだろう？リミッター無しなら今日も負けてたよ」

雪鷹は疲れたように首を振る。しかし、なのはは言葉を続ける。

「技術や経験だけなら雪鷹もまだまだオーバーSランク魔導師だよ。足りないのは魔力量だけ・・・私もね、伊達に教導官をしてるわけじゃないんだよ？動きを見ればそれぐらいわかるよ」

見くびらないで、と自信満々な表情を浮かべるなのはとは対照的に雪鷹の顔がわずかに曇る。

「あの、なのはさん・・・まだまだってどういうことですか？魔力量が足りないって・・・」

キャロが首を傾げながらなのはに尋ねる。しまった、という表情を浮かべるなのはに雪鷹は小さくため息を零す。ヴィータもわずかに顔をしかめた。変な憶測や噂が広まることを防ぐために昨日の部隊長室での一件は口外しないことに決めたのだ。それを自らが破ってしまったのだ。言葉に詰まるなのはにフォワード陣の視線が集中する。

「・・・俺が説明する。言っていなかったが、昔の俺の魔導師ランクは陸戦S＋、空戦でもS－だった。色々あって今は空戦A＋まで落ちたが・・・まぁ、そういうことだ」

「ユキタカ曹長もオーバーSランク・・・」

ティアナがどこか悔しそうに呟く。雪鷹がかつて陸戦AAランクの

魔導師であったことはなのはから聞いて知っていた新人達は突然判明した事実に驚きを隠せない。

「元、だ。今は正真正銘、ただの空戦Ａ＋。どこにでもいる平凡な空戦魔導師だ」

だが、しかし、誰も頷かなかった。皆、一様に首を横に振っている。どこにでもいる平凡な空戦魔導師に落とされるほど機動六課の隊長陣は弱くない。リミッターが付いているとはいえ、一個小隊が束になってかかってきても勝てるほどの実力者揃いだ。それを難なく、とまではいかないが、倒したのだ。

「・・・どうしてＡ＋に下がったんですか？」

「色々あって魔力量がＢランク並みに下がったんだ」

何があったのか誰もが聞きたかったが、雪鷹の纏う雰囲気がそれを許さない。

「その・・・腕、大丈夫そう？」

「あぁ、少し痺れるが堪えられない痛みでもない。問題ない」

そう言って雪鷹はなのはに左腕を振ってみせる。ヴィータの一撃を受けた代償は凄まじく、バリアジャケットは黒く焼け焦げ、多量ではないが出血も見られる。おそらくはバリアジャケットを貫通していたのだろう。しかしというか、やはりというか、その動きはぎこちない。表情が平然としているだけに左腕の不自然さが際立つ。あまり感情を表に出すことのない雪鷹であるが、まるで痛がる素振りを見せないのは流石に妙だ。違和感を覚えたなのははは無言で雪鷹に

近付き、怪我をしている雪鷹の左腕を掴んだ。無造作に、躊躇うことなく。

「っ・・・」

流石の雪鷹も痛みに顔をしかめるが、なのははそれでも雪鷹の腕を放そうとしない。

「・・・痛む？」

「痛くない顔に見えるか？」

顔をしかめたまま雪鷹はなのはを睨む。しかし、なのはをそれを無視して言葉を続ける。

「折れてる？」

「・・・折れてはいないが、ひびは入っているだろうな」

予想していた言葉になのははため息を零す。それはほとんど勘といってもいいほど根拠のないものだったが、悲しいかな、外れていてほしい予想は的中していた。

「やっぱり・・・そういうとこは昔から変わらないんだから。ごめん、ヴィータちゃん、みんなをお願いしていいかな。私、雪鷹を医務室に連れていくから」

「医務室くらい一人で行ける。おまえは新人達を見てろ」

そう言って雪鷹は腕を振り払う。しかし、なのはは決して放そうと

はしなかった。それどころか、ここで逃がしてなるものか、と言わんばかりに雪鷹の腕を強く握り締めた。もちろん、怪我をした左腕を、である。雪鷹の口からうめき声が漏れた。

「ダメだよ。だって、私が言わなかった雪鷹、このままにしてたでしょ？医務室に連れていくまで放さないよ」

図星だったのか、それとも腕の痛みがひどいのか雪鷹は何も答えずになのはから視線を逸らす。

「そう思うなら、少しは緩めろ」

「あっ、ごめん。その・・・痛かった？」

なのははは雪鷹に言われてかなりの力で雪鷹の左腕を握っていたことに気付き、力を緩める。しかし、絶対に放そうとはしなかった。それを見た雪鷹は呆れたようにため息を零す。

「今更、逃げるかよ・・・いくぞ？」

そう言って雪鷹は医務室へと歩き始めた。一瞬出遅れたなのははは雪鷹に引かれるようにその隣をついていく。もちろん、怪我した左腕を握ったまま。

「あ、待ってよ、雪鷹」

残されたヴィータとリイン、そして新人四人は二人の後ろ姿を黙って見つめることしかできなかった。小言を言い合いながら連れ添って歩くその姿がまるで恋人同士の痴話喧嘩に見えたのは言うまでもない。

１８『鷹と鉄槌』（後書き）

求めたのは更なる強さ
大切な人を守れるように
夢を叶えられるように

後悔も悲しみも立ち上がる力に変えて
私達はずっとそうやって歩いてきた

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
１９　『願い、ふたりで』

強さ、求めて。テイク、オフっ！！

Intermission 18.1

Intermission 18.1

「それにしても、なんつーか、おめぇらも変わったな。はじめはあんなにあいつのこと、嫌ってたのに・・・」

なのはと雪鷹を見送ったヴィータは何気なしに呟く。あいつとは言うまでもなく雪鷹のことである。初めてヴィータが雪鷹を見た日、新人達の雪鷹に対する視線には明らかに敵意で満ちていた。後から聞いた話では雪鷹のせいでなのはとフェイトから砲撃魔法を浴びせられた云々、ということらしかった。

「嫌ってたわけじゃないです。ただ、ちょっと怖い人だなって・・・」

「なのはさんと模擬戦をする前の目がすごく鋭くて、冷たくて、なんていうか刃物みたいな人だなって・・・」

エリオとキャロの言葉は言い得て妙だった。良い意味でも悪い意味でも雪鷹は人の視線を惹きつける。強いて喩えるなら鍛え上げられた日本刀に近い。人を斬る、ということを目的を作られながらも、凄烈なまでの美しさを秘めたその刃に雪鷹は似ているのだ。見目の美しさは皆の認める所だが、その内に秘めた氷の鋭さには容赦というものがない。

「あたしもあんな風に強くなれたらって思います」

スバルは目を輝かせて呟く。スバルの憧れの人、なのはに怪我を負わせた人間として嫌っていたのは事実だが、訓練を受けていくうちき雪鷹の強さにも憧れを抱くようになり、今ではなのはに負けないくらい尊敬するようになっていた。

「ユキタカ曹長の訓練は厳しいけど、実戦的で指摘は的確だし、毎日強くなってるって実感が湧くんです」

確かにスバルのいうように、なのはに比べて雪鷹の訓練はより実戦的なものが多い。教える技も基礎ではなく、乱戦の最中に役立つような小技がほとんどですぐに身に付くものばかりだ。応用が効く技も多く、ヴィータでさえスバルやエリオの相手をしているとひやりとさせられることも、時々ではあるが、ある。

「けど、あんなのは小手先の技だ。勘違いすんなよ」

雪鷹がスバルやエリオに教えている技は実戦的ですぐに身に付く技ばかりだ。しかし、それは小技でしかなく実力に必ずしも直結しない。その技を知らない者にとっては有効かもしれないが、所詮は小技なのだ。破ることは難しいものではなく、実力差がありすぎると通じない可能性も高い。

「それは大丈夫です。ユキタカ曹長からも念を押されてますから」

雪鷹も一応の注意はしているようだが、スバルやエリオの顔を見る限り、それほど本気にしているようには見えなかった。ヴィータから見て、エリオは割と素直に聞いてくれるのだが、スバルは最近無茶なことをすることが多くなってきた気もする。

「まぁ、いいけど。ティアナはどうだ?なのはに付きっきりで指導

されてんだからあいつとはあんま接点ねぇけどよ」

センターガードというポジション上、ティアナの訓練はほとんどがなのはの担当だ。雪鷹がティアナに直接訓練する機会があるとすれば模擬戦の相手がほとんどで一対一の訓練を受けた機会はない。

「魔導師として優秀な方だとは思います。でも、それだけです」

どこか硬さの残るティアナの声。雪鷹への敵意のようなものさえ感じられた。その違和感にヴィータも気付いたが、気にするほどのことではないと頭の隅に押し込む。そんなことを知ってか知らずかティアナは更に言葉を続けた。

「あたしにはあの人みたいな才能なんてありませんから」

ホテル・アグスタでの任務が終了してから自主練習に励んでいたティアナに向けた雪鷹の言葉。ティアナ自身に対する侮辱なら多少のことは堪えもするが雪鷹はティアナではなくその兄、ティーダ・ランスターを侮辱したのだ。あのときほどではないが、やはり胸の奥にくすぶる怒りは収まっていない。隠そうとしても言葉の端々に棘が出てきてしまう。

「別にあいつが天才ってわけじゃねぇと思うけどな・・・」

それは実際に戦ってみたヴィータならではの感想である。雪鷹は確かに強いがその戦い方は所謂天才型のそれとは違う、というのがヴィータの印象だった。相手の弱点を見極め、そこを突いていくという基本に忠実な戦い方だった。なのはとの模擬戦の映像も見せてもらったが、その時も同じような印象を持った。天才的な才能や感覚に頼るのではなく、理屈の積み重ねに依った戦い方だ。もっとも、

リミッター付きとはいえ、魔導師ランクオーバーS、ニアSランクの隊長陣と互角以上に渡り合えるだけの力を持った魔力値がB程度の魔導師と聞けば、誰もが天才だと言いたがるだろうが。

「まぁ、ティアナとは戦闘スタイルが別物だかんな・・・そんなに気にすることでもねぇよ。んじゃ、予定はちょっと変わっちまったが訓練始めんぞ」

「「「「はいっ！！」」」」

そう言ってヴィータ達は訓練を始めた。もしも、このとき、ヴィータがティアナに適切な指導を行っていれば、あるいは未来は別のものになっていたのかもしれない。

Intermission 18.2

Intermission 18.2

「まったく・・・ヴィータちゃんの攻撃を片手で受けるなんて・・・馬鹿にもほどがあるわ」

シャマルは目の前で腕を組んで雪鷹となのはを睨みつけていた。検査の結果、雪鷹の左腕は軽度の火傷に加えて小さなひびが入っていることが判明した。怪我については予想していた二人とも驚かなかったが、その怪我を負った経緯を話した途端にシャマルの表情が一変した。普段は温厚で滅多に怒ることのない優しい医務官も今回の件に関しては堪忍袋の緒が切れてしまったようだ。

「まぁ、シャマル先生・・・雪鷹も反省してるんでそんなに怒らないであげて・・・」

「なのはちゃんも・・・安全監督も教導官の大切な仕事じゃないんですか?こんな怪我をさせないための教導官でしょう!?」

「うぅ・・・それはその・・・おっしゃる通りです」

反論の余地がないシャマルの指摘になのはは力なく肩を落とす。教えるだけが教導ではない。安全かつ、確実に訓練を行える環境を準備し、監督して、怪我人を出さないことも教導官の大切な役割だ。振り返ってみれば、なのは自身も二人も模擬戦を見ることに集中し過ぎて、安全監督の面については疎かになっていた自覚があった。言い換えるなら、それだけ二人の模擬戦が伯仲していたということ

なのだが、それで許される理由になり得るはずがない。

「ユキタカ曹長ももう子供じゃないんですか模擬戦でこんな無茶しないでくださいっ！！前はなのはちゃんの骨を折って、今度は自分の腕・・・もう少し自覚してください」

シャマルの矛先が雪鷹に向く。しかし、雪鷹は煩わしそうな表情を浮かべるだけで、反省している素振りも見せない。ここまで露骨な態度はいっそ清々しくも思えるが、その態度は当然のようにシャマルの態度を逆撫でした。

「ちょっと、聞いているんですか！？私はあなたに言っているんですよ、ユキタカ空曹長！！」

「あぁ、聞いている。だから、そんな大きな声を出すな、みっともない。もう少し声を落としたほうがいい。傷にも響くし・・・だいたい、この程度の怪我で大袈裟だろう？命に関わるような怪我じゃあるまいし・・・」

「その小さな怪我の積み重ねが命に関わる怪我に繋がるんです！！」

雪鷹の言う通り、怪我そのものは命に関わるような大きな怪我ではない。雪鷹にしてみれば取るに足らないような小さなものだ。しかし、その小さな怪我の積み重ねが小さな無茶に繋がり、小さな無茶は更なる大怪我に繋がっていくのだとシャマルは雪鷹に説いた。

「・・・まぁ、それはその通りだ」

雪鷹にしては珍しく、反論することなく頷くとシャマルから視線を逸らし、横目でなのは見た。しかし、それはほんの一瞬のことで、

すぐにシャマルに視線を戻すと申し訳なさそうに、しかし、確かに微笑んだ。すると、シャマルは急に言葉を詰まらせ、視線を泳がせると軽く咳払いをした。何かを誤魔化すようなシャマルの仕草になのははは首を傾げる。

「これからはもう少し気をつけるよ、シャマル医官」

「そう・・・それならいいけど・・・一応、魔法で処置はしたけど、左腕はしばらく動かしちゃダメよ?いい?」

シャマルの言葉に雪鷹は笑顔で頷く。先程までの無愛想で、無関心だったのが嘘のように消えている。普段の雪鷹からは想像もつかないような態度になのははは困惑した表情を浮かべるが、雪鷹は笑顔のままだ。

「あと・・・できればシャマル先生って呼んで?医官なんて堅いでしょう?」

「はい、シャマル先生。それじゃ、私はまだデスクワークが残ってますからこれで」

雪鷹はそう言うと立ちあがってなのはの手を取った。シャマルに一礼して医務室から出る雪鷹はなのはのむっとした視線に気付き、手を放した。

「すまない。迷惑かけたな」

「安全監督不足は私のせいだから、雪鷹が謝ることじゃないよ」

「そう言うわりには怒ってるぞ?顔も声も・・・」

「それは・・・」

雪鷹の指摘になのはは言葉を詰まらせた。安全課監督云々に関してはなのはのミスだ。雪鷹に何も思っていないといえば嘘になるが、責任を転嫁するつもりは毛頭ない。なのはの機嫌が悪い理由は全く別のところにある。

「・・・私のことをなのはって呼ぶのにはあんなに抵抗したのに、シャマル先生をシャマル先生って呼ぶのはあんなにすんなり受け入れたのがちょっと・・・悔しいというかなんというか・・・」

ほとんど子供が駄々をこねているようなものなのだが、どうしての言葉に感情が出てしまう。笑われているかな、と思ってなのはが雪鷹を見ると案の定、ずいぶんと可笑しそうに笑っていた。

「わ、笑わないでよ・・・」

「いや、違う。なるほど・・・そういう見方もあったか。言われて見ればそれもおかしくない」

どうやらなのはの駄々を笑っていたわけではないらしい。しかし、自分の知らない理由で笑われるのはやはり気持ちのいいことではない。なのはが首を傾げると雪鷹は軽く咳払いをして、少々真面目な顔で口を開いた。

「医官の小言を聞きたくなかったからはやく切り上げただ。他意はない。付け加えるならあの時の笑顔も同じ理由だ。だから、変な邪推をするな」

「・・・へ？」

雪鷹の言葉の意味を理解しきれなかったなのはの口から間の抜けた声が漏れる。

「もっと簡単に言うなら、笑ってごまかしただけだ」

「笑って・・・ごまかした？」

「自分の容姿については自覚している。これくらいなら愛想良く笑えばなんとでもなるさ」

たいしたことでもなさそうに言い切った雪鷹になのはは半ば驚き、半ば呆れながらため息を零し、両手で頭を抱えた。雪鷹の容姿についてはなのはも、おそらくは他の多くの人間も、認める所だが、それを承知した上での確信犯というのはいささか性質が悪く思えた。シャマルが視線を泳がせていた理由もこれで頷ける。

「そもそも、こういうのは女の方が得意だろう？男は単純な生き物だからな」

そういう雪鷹も男だろう、となのはは思ったが返す言葉がない。雪鷹の言わんとすることは理解できる。色仕掛け、と言ってしまうと大袈裟だが、男の下心を巧みに利用して愛嬌を振り撒けばなんとかなることがあるのは事実だ。本人にその意図がなくとも、容姿や仕草で許されてしまうことは少なくない。

「・・・こういうことはよくしてるの？」

心なしか咎めるような声音。それが皆無と言ってしまえば嘘になる

が、それを隠し通せるほどなのはは腹芸が得意ではない。

「まぁ、それなりに。心配しなくても、なのはにはしていない」

「うん、私もそう思う・・・」

否定しないだろうな、とは予想していたが、直接聞くと何故だかやるせない気持ちになる。機動六課での日々を振り返ってみれば、雪鷹の笑顔は数えるほどしか見たことがない。あっても、どこか仄暗い氷の微笑である場合がほとんどでつい見惚れてしまうような笑顔を見た回数は片手にも満たないだろう。

「納得できないかもしれないが、これも一つの処世術だ。そう悪く思わないでくれ」

そう言った雪鷹の背中がなのはにはとても遠くにあるように思えた。距離にしてみればたかだか一歩の距離しかない。手を伸ばせば触れられるほどすぐ近くにいるというのに、その背中が限りなく遠かった。

Intermission 18.3

Intermission 18.3

「ねぇ、スバル・・・ちょっと、いい？」

訓練を終えたティアナはどこか響きのある低い声でスバルを呼び止める。

「ティア、どうしたの？」

「あんたとのコンビネーション・・・もっとバリエーションを増やそうと思うんだけど・・・短期間で現状戦力をアップさせる為に。うまくできれば戦術の幅も広がるし、エリオやキャロのフォローももっとできる」

「うん、それはワクワクだね」

スバルは嬉しそうに笑う。六課に来て、二人の実力は確実に伸びてきている。もちろん、隊長陣にはまだ遠く及ばないが、それでもここに来る前に比べれば断然強くなっている。その更に上に行くのだ。心が奮い立たないはずがない。

「今日のヴィータ副隊長とユキタカ曹長の模擬戦を見てて思いついたばかりだからまだ細かい所は詰めていかなくちゃいけないけど、新しいコンビネーションは私とスバル、二人ともクロスレンジでいく」

「ティアがクロスレンジ？でも、クロスミラージュは・・・」

「その点は心配ないわ。魔力刃でも作ってなんとかするから・・・急いで技数を増やして、どんな相手にも対応できるようにしないとこのままじゃ、絶対に強くなれない」

そうだね、とスバルは頷く。それはヴィータと雪鷹の模擬戦を見ていてスバルも感じたことだった。雪鷹の強さの理由の一つはどんな相手にも対応できる汎用性の高さにあることは紛れもない事実だ。なのはに負けない射撃能力とヴィータと渡り合える近接戦闘能力。おそらくはオールレンジに対応できるのだろう。

「幻術は切り札にはならないし、中距離から撃ってるだけじゃ、それが通用しなくなったときに必ず行き詰る。私のメインはあくまでシャープシュート、兄さんが教えてくれた精密射撃だけど、それしかできないからダメなんだ」

「だから、ティアもクロスレンジか・・・いいね、それ」

ティアナはスバルに新しいクロスシフトの概略をスバルに説明する。今までの二人のクロスシフトは大勢の敵を一度に倒すことを目的としていたが、今度のクロスシフトは違う。明らかに二対一で戦うことを前提とした陣計だ。ティアナの幻術で相手を撹乱し、隙を突いてスバルが突撃する。きっと、相手はスバルが本命だと思うだろう。しかし、スバルもまた囮なのだ。本命は背後をついたティアナの魔力刃による一点突破だ。

「ちょっと危ないけど、でもやってみる価値はあると思うよ。やっぱり、ティアナはすごいよ。模擬戦を見ながらこんなの考えてたなんて」

「たぶん、誰も精密射撃型の私がクロスレンジで戦えるなんて思わないはず・・・そこが狙い目。いるはずのない私の攻撃で防御を切り裂いて、崩れたところに・・・」

「私が一撃必倒・・・絶対いけるよ、頑張ろう、ティア」

スバルは満面の笑みを浮かべ、ティアナもまんざらではない表情を浮かべている。しかし、すぐに表情を引きしめる。

「まぁ、私がクロスレンジもできるようにならないと始まんないけど。だから、スバル、これからの自習練、付き合ってもらえる？」

「任せて！！大丈夫だよ、ティアならきっとすぐにできるようになるって」

そう言って笑うスバルの笑顔は、とても無邪気だ。

「ごめんね、無理に言って。でも、あんたにしか頼めないから」

申し訳なさそうな表情を浮かべるティアナにスバルは首を横に振る。

「気にしないで。私とティアはコンビなんだから。だから、一緒に強くなろう」

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　１８．３（後書き）

どうも、月兎です。

今回はかなり短めのお話だったのでいつもより1日早く投稿させて頂きました。だからというわけではありませんが、今回は少しだけ雑談をば。

・雪鷹の名前の由来について

ミッドチルダと地球のハーフという設定だったので、日本風の名前にしたいと考えてました。漢字については以下の通りです。

『雪』は雪鷹の冷たい性格や冷徹な部分、危うさ、儚さ、美しさなどの刹那的なイメージ、そして魔力変換資質が氷結であることを表しています。

『鷹』は強さの象徴として、また原作では翼や空など鳥に関連する言葉がキーワードになっていたのでその意味を込めてみました。

『忍』は主人公や情報一課のモチーフが忍者だったので安直ながらこの名前にしました。

私がオリキャラを作るの場合、名前には基本的にこんな感じに何かしらストーリーを組み込むようにしています。変な所が凝り性でして（笑）

・雪鷹のコンセプト

一言で言うと『主人公らしくない主人公』です。暗殺のお話然り、スパイ疑惑然り、フラグブレイク然り。前半ではとりあえず主人公らしくない部分をちょっと誇張して書いてみました。

原作アンチや管理局アンチがしたいわけじゃないくて、ああいう組織の黒い部分、原作キャラのどす黒い部分をもっと自然に作品に取り込みたい、と考えていたら主人公はいつのまにかあんな感じになってしまいました。

今日はこれくらいで・・・ではでは

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　１８．４

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　１８．４

地下への階段を下っていくと木製の分厚い扉があった。その扉には『ｃｌｏｓｅｄ』と書かれた看板が掛けられている。しかし、雪鷹は躊躇う素振りの一つも見せずに扉を開ける。薄暗い店内にチャイムの音が響く。

「すみません、お客様、まだ準備中でして」

ボトルを磨いていたバー『Ｗｈｉｔｅ　Ｓｎｏｗ』の女マスター、ビアンカは少々困った表情を浮かべて突然の来客を迎える。しかし、心底嫌がっているようには見えない。どちらかというと、また来たのね、とでも言いたげな顔だ。困った表情はほとんど演技といってもいいくらいだ。

「珍しいな。今日はビアンカだけか？」

そう言って雪鷹はカウンター席に座る。二人きりの薄暗い店内。軽快なジャズは心地いい。

「クロエならお姫様と一緒にお昼寝よ。クロウもね。というより、二人に聞かれたくないからわざわざこの時間を選んだんでしょう？まったく罪な男ね」

「貴女だけに言われたくないが・・・まぁ、そうだな。もっとも、あいつらには言わなくてもわかるだろうが」

雪鷹は自嘲気味に笑ってからため息を零す。

「それでも、直接言ってほしいと思うわよ？たとえ、心が通じ合った仲だとしてもね。まぁ、忍君とあの子達の関係に私が色々口出しするのもおかしなことかもしれないけど。で、今日は何を飲むのかしら？」

店内には二人しかいないせいもあり、ビアンカの言葉は普段からは想像もつかないくらいフランクで雪鷹への親しみが込められている。

「あ、そうだ。昔みたいに潰れるまで飲むのはなしよ？もう、子供じゃないんだから」

遠慮のないビアンカの言葉に雪鷹は苦笑を浮かべた。こうして話しているといつまで経ってもかなわないと実感する。それを喜ぶべきことなのか、悲しむべきことなのかは判断に迷うところだが、少なくとも悪い気はしない。常に仮面を被り続けている雪鷹にとって、ここは自分自身を偽る必要のない数少ない場所だった。

「もうあんな真似はしない・・・少しは成長したさ」

「私から見ればどんぐりの背比べなんだけど」

そう言って微笑んだビアンカは薄明かりに照らされていて妖艶に映った。誘うような、それでいて突き放すような灰紫の瞳。白磁のようなすべやかには染み一つなく、しとやかに流れる髪は絹のように柔らかで、上品な風合いを醸し出している。決して派手ではないが、人目を惹きつけて放さないその美貌。年の盛りはとうに過ぎているはずなのにそれをまるで感じさせない容姿に雪鷹は呆れるしかなかった。

「貴女は相変わらずだな。あの頃のまま、綺麗だ」

「こらこら、そんな下手な口説き文句を教えた覚えはないわよ、坊や。こういうときはこういうの。あの頃よりずっと綺麗になったって」

お互いの視線がぶつかり合い、絡まり合い、沈黙が生まれる。しかし、その沈黙はすぐに笑い声に変わった。どちらからとなく笑顔を零し、声をあげて笑う。機動六課では決して見ることのできない真実、楽しそうな笑顔だ。窮屈さから解放されたその笑顔は憎いくらいに魅力的だ。

「まったく化け物だよ、貴女は」

「せめて魔性の女って言いなさい。こんな美人な化け物がいてたまるものですか」

「仰る通りで」

雪鷹は笑いながら小さく頭を下げる。普段の雪鷹を知る者ならこんなあっさりと頭を下げるなど信じられないかもしれないがビアンカは違う。ビアンカにとってこれは珍しいことでもなんでもない。見慣れた光景だ。

「本音を言うと強い酒で全部忘れてしまいたいが、そういうわけにもいかないからな・・・適当に軽いものを頼む」

「かしこまりました」

笑顔でそう言うとビアンカは手際よく水割りを準備して雪鷹に差し出す。

「まぁ、忍君の愚痴のひとつやふたつを聞いてあげるくらいたいしたことないけど、そろそろ私の他にもいい人を見つけなさいよ。それとも、忍君の周りにはそういうひとはいないのかしら?」

ビアンカの言葉に雪鷹は陰のある笑みを浮かべて首を横に振る。

「それは・・・できないよ。知ってるだろう?誰かに背負わせるには重すぎる。その重さは貴女が一番理解しているはずだ。これ以上、誰も巻き込みたくない」

そう言って雪鷹はグラスを口に運ぶ。そんな様子を見ていたビアンカは悪戯っぽい笑みを浮かべて小さく呟く。

「ふーん、いないとは言わないのね」

「そ、それは・・・そういうつもりで言ったわけじゃない」

咽ながら雪鷹は反論するがビアンカは笑みを絶やさない。かすかとはいえ狼狽している雪鷹は珍しい。そんな雪鷹をからかうようにビアンカは言葉を続ける。

「坊やが隠し事するなんて百年早いわよ。今の勤務は確かに機動六課よね?部隊長はまだ十代で、隊長さん達もそれくらいのはず。さて、どの子がお目当てなのかしら?それとも、ひょっとしてもっと若い新人達?隊長さん達ならともかく、流石に新人さんに手を出すのは犯罪よ」

「余計なお世話だ。それにしてもよくもそこまで詳しくと・・・流石と言うかなんというか・・・貴女には敵わないな」

「当然。まだまだ若い子には負けないわよ?」

そう言ってビアンカは自信満々に胸を張る。黒のベストに包まれたそれは確かに自信を持っていい代物だったが、年を考えろ、と雪鷹は心の中でツッコミを入れる。そんな雪鷹の心を読んだのか、ビアンカはむすっとした表情で雪鷹を睨む。

「今、失礼なこと考えたでしょう?顔に出てるわよ。まったく、こんな場末の年増に、じゃなくてお姉さんに見破られるなんて、情けないわね」

「少しは現実を直視しろ。あの頃よりずっと綺麗になったのは認めるが、お姉さんと呼ばれるほど若くはないだろう?」

雪鷹は呆れた様子で言葉を帰すがビアンカは何も聞いていないかのように優雅に振舞う。白々しさを感じさせないその笑みは見事というしかない。

「さて、なんのことかしらね。あら・・・それよりも、来たみたいね?」

駆け足気味の階段を下りる足音。そして、勢いよく扉が開く。

「忍っ!!」

店内に飛び込んできたクロエは開口一番に雪鷹の名前を叫ぶ。

「こら、もう少し静かにしろ、騒々しい」

「そうよ、そんなに騒がしいと忍君に嫌われちゃうわよ？そんなに慌てなくても忍君は逃げたりなんかしないわ。早く着替えてらっしゃい」

「おい」

ビアンカの言葉に雪鷹は呆れたようにため息を零す。しかし、それを無視するようにビアンカは言葉を続ける。

「忍君もそんな顔しないであげて。あの子も嬉しいのよ、こうして会えて。この前は二人で来てたから抑えてたけど、本当はもっと忍君とお話したかったのよ？」

「そういう問題ではないだろ・・・」

仮にも接客業に携わる人間なんだから、と雪鷹はぼやく。クロエは店の奥で素早く着替えて支度を整えると嬉しそうに笑いながらカウンターの中に姿を現した。鏡のように磨きあげられた黒髪は艶やかで、見る者に落ち着いた印象を与える。さきほどまで騒いでいたのが嘘のようだ。

「改めまして、いらっしゃい、忍。もう、マスター・・・忍が来てるなら呼んでくださいよ」

「ごめんなさいね、ちょうどお昼寝中の時間だったから起こしたらいけないかと思って」

「そんなことないですよ、忍に会えるなら、いつだって、どんな時

だって」

クロエはそう言って快活に笑う。きらきらと瞳を輝かせるその様子はまるで少女のようだ。見た目に釣り合わないその表情に雪鷹は軽くため息を零す。

「会えなくてもたいしたことないだろうに・・・大袈裟なんだよ」

「・・・どんなに近くにいても顔を見れないのはやっぱり不安だし、会いたいって思う気持ちはどうしようもないよ」

「まるで恋する乙女だな・・・似合わないぞ?」

「恋じゃない。愛だよ」

雪鷹を見つめてクロエは言い放つ。その目は少しも笑っていない。クロエの言葉は紛れもない本物だ。しかし、雪鷹は煩わしそうにため息を零すだけだ。

「まったく・・・随分と慕われてるな。クロエ、もう少し男を見る目を養うことを勧めるよ。気持ちは嬉しいが俺はお前にそこまで想われるに値する男じゃない」

「そんなこと言われなくてもわかってる。でも、だけど、初めから叶う筈ないってことはわかってても、この気持ちは変わらない・・・私は世界中の誰からもどんな出来事からも忍を守る。忍に私を愛して欲しいからじゃない。私が忍を愛しているから」

「・・・くだらん」

雪鷹は冷めた眼差しでクロエを一蹴する。クロエは沈んだ表情で俯く。しかし、すぐにそれを振り払うと何でもなかったかのように微笑む。

「それでも、愛してるから。もう何度も言ったことですけど・・・」

「まったく、忍君も少しは乙女心を汲んであげなさい。」

ビアンカはわずかに柳眉を逆立てて雪鷹を睨みつけた。普段は温厚で、滅多なことでは怒らないビアンカだ。雪鷹はばつの悪そうな顔をしながらもクロエに頭を下げる。

「悪かった・・・クロエ」

「謝らないでください・・・忍には感謝しているんです。もちろん、マスターにも。行き場のなかった私とクロウに新しい居場所をくれた。力をくれた。生きる意味をくれた。だから、その恩に報いたい。もしかしたら、この気持ちは愛なんて綺麗なものじゃない私のエゴ。ただの自己満足なのかもしれません。それでも、いいんです」

平気な顔をしているが、それだけにその笑みは痛々しい。そんなクロエにビアンカは優しく微笑む。まるで幼子を宥めるように、そっと囁く。

「あらあら、クロエ、そんなこと気にしなくていいって前にも言ったでしょう？お姫様のお世話もお願いしちゃってるし、私の方こそ感謝してるのよ。忍君も口ではあんなこと言ってるけど、貴女達二人にはきっと感謝してるはずよ。そうでしょ？」

「・・・あぁ、否定はしない。この五年間、クロエ達には色々世話

になった。ありがとう」

そう言うと雪鷹は恥ずかしさを誤魔化すかのようにグラスに残っていたウイスキーを一気に飲み干した。アルコールのせいなのか、それとも照れからなのか、雪鷹の頬はほんのりと紅い。そして、そのまま雪鷹は席を立つ。

「それじゃ、俺はそろそろ帰る。開店前に邪魔して悪かったな」

「そう思うなら、開店してから来なさい？」

ビアンカの言葉に雪鷹は苦笑を返すだけで何も言わなかった。勘定を済ませて店の外に出ていった。足音が聞こえなくなるとビアンカは小さくため息を零した。

「まったく、騒々しいお客様ね・・・」

しかし、迷惑だ、と口では言いながらその顔はどこか嬉しそうだ。

「マスター、気付きました？忍の腕・・・」

「えぇ、たぶん、訓練か何かで怪我したんでしょうけど・・・何か気になる？」

クロエは控えめに小さく、しかし、はっきりと頷いた。怪我について気になるわけではないんですが、と前置きをしてからクロエは話し始めた。

「忍、すごく怒ってました。最近は心を閉ざしてばかりだったのに、それでも伝わってくるくらい強くて、激しい怒り・・・あの怪我の

せいでしょうか？」

「うーん、そんなことはないと思うけど。まぁ、複雑な職場だから色々あるのよ、きっと。クロエ、忍君を心配する気持ちはわかるけど、でも、もう仕事の時間よ。切り替えなさい？」

ビアンカはバーテンダーとしての顔を浮かべていた。そうなるとクロエもいつまでも悩んではいられない。

「はい、そうですね」

「そう、それでいいのよ。それじゃ、バー『Ｗｈｉｔｅ Ｓｎｏｗ』今日も開店しましょうか」

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　１８．４（後書き）

どうも、月兎です。

次回はいよいよ例の魔王降臨のお話です。お楽しみにしてください

さて、今回の雑談は管理局について月兎の考えを述べさせて頂きます。

なのはの二次創作ではどちらかというと悪役として描かれることが多く、アンチ管理局とさえ呼ばれる時空管理局。年端もいかない子供達を戦わせたり、グレアム提督のはやてに対する対応、非人道的な違法研究なんかもしている問題組織ですね。

とはいえ、それは現実の一般常識と照らした結果であって、作中の常識ではそれが当たり前だと言ってしまえばそれで片付けてしまいますけど。

ともかく、個人的な意見を述べさせてもらうなら、管理局は悪ではない、というのが私の意見です。平和と安全の為なら、多少の犠牲も厭わない、という考えは軍隊として当然です。まぁ、そもそも管理局は軍隊ではないですけどね。ちなみに、時空管理局は裁判所と警察、自衛隊を混ぜ合わせた組織というのが月兎の認識です。

管理局の考え方が傲慢だ、という人もいますがそれの何がいけないのでしょうか？管理局が各次元世界やその住人に対して下手に出る理由も見当たりませんし、現実の歴史を紐解いてみても、平等と自由を旗印に掲げて他国の文化と伝統を平然と踏みにじってきた国は

多くあります。つまり、現実に照らしてみるなら、管理局のあの態度は至極当然のことなのです。

主人公ｓｉｄｅに非協力的だから管理局が嫌いだという人も偶にいますが、それでアンチ管理局っていうのは…子供じゃないんだからその辺はね…

この小説における管理局は一部の人が裏で色々とやっていながらも、それが当たり前というかそういう人もいるんだ、程度の認識で進めていきます。

で、付け加えるなら００でしてたみたいにそのごく一部の人達をお片付けするのが雪鷹の仕事の一つ、みたいな感じです。しかも、雪鷹は正義に燃えているのではなく仕事なので仕方なく、といった感じです。義憤を感じるでもなく、快楽に浸るでもなく、ただ黙々と？仕事をこなしていきます。

さて、長くなりましたが結論をまとめますとこの小説では管理局の黒い部分も描きますが、アンチ管理局ではありません。そのダークな面も受け入れて話を進めていきますのでよろしいお願いします。

では次回をお楽しみに♪

１９『願い、ふたりで』（前書き）

自分の失敗が許せなかった
兄さんを侮辱されて悔しかった
叶えたい夢があった

だから、強くなりたかった
その為にならなんだってする

そう心に決めた

そう、強くなる為ならあたしは・・・

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります

19『願い、ふたりで』

19『願い、ふたりで』

「なのは、怪我はもう完治したんだろう?それに、ヴィータ三尉もいる。俺なんかいなくても教える側は十分だろう」

本日の訓練も無事終えた雪鷹は疲れたようにぼやく。先日、なのはの骨折は無事に完治した。シャマル先生のお墨付きももらっている。訓練はもちろん、通常の戦闘にも支障はなく、今日も新人達の模擬戦の相手をしていた。

「俺は二人と違って教導官の資格も持ってないし、そろそろこの仕事を降りてもいい頃だろう?」

今では当たり前のように訓練に参加しているが、元々は怪我をしたなのはの代行という形で訓練に参加していたのだ。なのはの怪我が治ったら雪鷹が代行をする必要はなくなるし、そもそも、教導官資格を持っていない雪鷹がこのまま教え続けるのはやはり色々と無理がある。

「それはそうかもしれないけど、でも、二人より三人の方が教えられることは多いし、オールラウンダーの雪鷹なら私やヴィータ副隊長が気付かないことも教えてあげられる。私はこのままでいけたらいいなって考えてるんだけど。ヴィータちゃんは?」

「あたしもなのはと同じ意見だ。おめぇの実力は本物だし、エリオやスバルの参考になることも多いだろうし・・・どうしても無理だ

って言うんならしかたねぇけど、そうでもないだろう?今のままでいいんじゃねぇか?」

揃って頷く二人を見て、雪鷹はため息を零す。

「二人揃ってそう言われると辞めづらいだろう?」

「雪鷹、辞めたいの?」

「当然だ。本来なら、デスクワークを見るだけでよかった仕事がなんでこんな教導官まがいなことまで・・・前線に出ても管制扱いで危険手当はつかないし、もちろん、ロングアーチとしての仕事もある・・・はっきり言って割に合わない」

躊躇う素振りの欠片も見せず、雪鷹は言い切った。歯に衣着せないその言葉になのはとヴィータは顔を見合わせ苦笑する。これまでの出動で雪鷹が出たことは何度かあるが、その全てにおいて雪鷹は現場管制ということになっている。ロングアーチの人間が現場管制を行うことは決して珍しいことではないが、雪鷹の場合、現場管制に加えて前線での戦闘行動を行うことも珍しくない。というよりも、戦闘が主であって現場管制はほとんどおまけといっていい。

「まぁ、それはロングアーチの人間を戦わせると色々と面倒なことになるから・・・」

機動六課に限らず、どこの部隊でも報告書というものを上に提出しなければならない。いつ、どこで、誰が、なにを、どうしたのか。何故それを行ったのか、といった事件の詳細をまとめなければならないのだが、そこにロングアーチの人間である雪鷹が戦闘行動を行

ったと記すと後々面倒なことになるのだ。それは長年管理局にいる雪鷹も理解していたるのだが、やはり、すっきりするものではない。

「だいたい、危険手当ぐらいでうだうだ言うなよな。男らしくねぇぞ」

「ヴィータ三尉、塵も積もれば山となる、ですよ。一般論として二人分、三人分働いているのに一人分の給料しか出ないなんて不満を持って当然だ。正直、やってられない。仕事を少しくらい減らしてくれって言うくらいかまわないだろう？」

本来のロングアーチスタッフとしての仕事は当然ながらある。それに加えて、訓練の手伝いや緊急出動、デスクワークの監督。一人の人間に任せる仕事としてはやはり、多過ぎた。それはなのはもヴィータも理解しているので強くは言えない。お互いに顔を見合わせて小さく頷き合う。

「それじゃ、ロングアーチの仕事を少し減らしてもらうように私からはやてちゃんに頼んでみるね」

「あたしもデスクワークの監督ならなんとかなる。それでいいだろう？」

予想していなかった二人の言葉に雪鷹一瞬驚いた表情を浮かべて、すぐに苦笑する。仕事を減らしてほしいのではなく、訓練の教導から外して欲しかった、というのが雪鷹の本心である。しかし、二人の気遣いを無下にするわけにもいかず、申し訳なさそうに頭を下げる。

「そういうつもりはなかったんだが・・・その心遣いだけで十分だ。

ありがとう」

「なんか素直じゃねぇのな、おまえ・・・」

「まぁ、その辺が雪鷹らしいといえばらしいんだけど。あ、そういえば、ティアナとスバルがね、新しいコンビネーションを考えてるみたいなんだけど・・・」

その言葉に雪鷹の表情が、雰囲気がわずかに硬くなる。まるで、気温が下がったかとさえ思わせるその変化になのはとヴィータの顔からも笑顔が消えた。

「なんだ?どうかしたのか?」

「いや・・・新しいコンビネーションとやらがどんなものか気になってな。少し二人の様子を見てくる」

「あ、それなら私も・・・」

「なのはは止めておいたほうがいい。たぶん、今度のなのはとの模擬戦を考えてのコンビネーションだ。あの二人も手の内を知られたくはないだろう?」

雪鷹の言葉になのははなるほどと頷く。模擬戦の目的はより実践的な訓練を行うことは言うまでもないことだが、その場に応じた状況判断能力や応用力を試す場でもある。そして、新人達が考えた作戦を実践してみる場でもあるのだ。その作戦を事前に知ってしまうとなると試す意味もいくらか薄れてしまう。

「そうだね。それじゃ、私とヴィータちゃんは先に隊舎に戻るね」

「あぁ」

そう言って雪鷹はなのはとヴィータを見送ると真っ直ぐに新人二人の下へ向かった。

・＊・＊・＊・

ティアナの顔面を狙ってきたスバルの右手をティアナがはたいて落とす。しかし、逆方向から蹴りが飛んでくる。それを受けようとティアナは右手を突き出す。

「そう、そこで受け止めて、そう、それ」

同時に左手のクロスミラージュがスバルの顔に突きつけられていた。撃とうと思えばいつでも撃てる状況。この状況からスバルに逆転する術はない。ティアナの一連の動きにスバルは満足そうに笑う。

「やぱり、ティアはすごいよ。もう、こんな風に動けるようになるなんて」

組手を終えた二人はそのまま地面に座り込んだ。全身泥まみれの汗まみれ。しかし、二人が努力の成果だ。

「まだまだよ。スバルが手加減してくれてるから私でもなんとかなるだけで、スバルが本気になったらとてもじゃないけど、相手にな

らないわよ」

汗を拭いながらティアナは首を横に振る。クロスレンジの基礎、正確に言うならシューティングアーツの基礎をスバルに教えてもらったおかげでティアナの動きもある程度は形になった。しかし、まだまだ前線で戦うに足りるレベルには達していない。

「少し休んで、そしたらもう一回お願いね」

「うん」

「なるほどね・・・それが新しいコンビネーションか」

突然二人の背後から低い声が響く。二人が振り返ると、そこには雪鷹が立っていた。

「・・・何かようですか？ユキタカ曹長」

先日のことを思い出したティアナはやや警戒気味に雪鷹を睨みつける。しかし、そんなことなど知らないスバルは嬉しそうに笑うと、ゆっくりと立ち上がる。

「ユキタカさん、どうしたんですか？」

「お前達二人が新しいコンビネーションを考えてるって聞いてな。少し様子を見に来た」

「そうなんですか。今度のコンビネーション、結構自信あるんですよ。なんたって今回はティアナが・・・」

「スバル、だめよ・・・今度の模擬戦まで誰にも言わないって決めたでしょ？」

自信満々に新しいコンビネーションの説明を始めようとしたスバルのティアナの鋭い声が遮る。怒っているようにも聞こえるその声にスバルはびっくりした様子だったが、すぐに笑顔に戻ると雪鷹に言った。

「ということなんで、今度の模擬戦を楽しみにしてくださいね。私とティアの新クロスシフトのお披露目です。なのはさんが相手なんですけど、私達、負けませんから」

自信たっぷりに笑うスバルの目は本気だ。本気でなのはに勝つ気でいるのだ。自信に溢れる瞳が眩しい。しかし、雪鷹はティアナに目を移して呟く。

「たぶん、まだ難しいな・・・」

「・・・まだ何も見せてないのにどうしてそう言い切れるんですか？」

雪鷹の視線に気付いたのかティアナも立ちあがり、雪鷹を睨み返す。敵意を剥き出しにしたその瞳を雪鷹は平然とした表情で受け止める。その余裕さえ、今のティアナには憎らしかった。本音を言うなら、雪鷹の言う通り、成功率は決して高くはない。よくて五分五分、あるいかそれ以下が妥当なところだろう。しかし、それをティアナ自身も承知しているだけに雪鷹に指摘されることが我慢できなかった。

「今の動きを見れば考えてることはだいたい察しがつく。その上で一言だけ、忠告しておく。ホテルでの誤射の後、なのはに言われた

ことのその意味と理由をよく考えろ。前にも言ったとが、馬鹿な真似をしたら俺は容赦しないぞ?」

それだけ言い残すと雪鷹はその場から去って行った。

「ねぇ、ティア・・・今のどういうこと?なのはさんに言われたことって何?」

剣呑な雰囲気を感じ取ったスバルは雪鷹を見送ると遠慮がちにティアナに尋ねた。ティアナは一瞬、顔をしかめたがすぐに元の表情に戻るとスバルに言った。

「あのあとなのはさんに言われたのよ。『一人で戦ってるわけじゃない。前後左右、全部が味方なんだから』って・・・それだけよ」

「それってどういうこと?」

「たぶん、言葉通りだと思う。センターガードの役割をよく考えてって・・・広い視野を持って、もっとまわりを見なさいって意味なんじゃないの?そんなことより、スバル、ちょっとはやいけど、休憩はおしまいにしてもう一度、コンビネーションの確認よ。あんな風に言われたらやるしかないじゃない・・・明日の模擬戦は絶対に成功させて、ユキタカ曹長を驚かせてやるんだから」

決意を新たにしたティアナの言葉。どこか陰を感じさせる表情だったが、それは思い過ごしなのだとスバルは振り払う。

「そうだね、あんなこと言われたらやっぱり悔しいもんね、いくよ」

そうして二人は自習練を再開した。

・＊・＊・＊・

「悪いわね、クロスミラージュ、あんたのことも結構酷使しちゃって・・・」

≪　Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ.　≫

ここ数日、無茶な訓練に付き合ってくれたもう一人の相棒を手入れしながらティアナは呟く。自分で言うのおかしなはなしだが、ここ数日間の自習練はティアナにも、クロスミラージュにもかなりの負担になっていた。そろそろ整備しなければ通常の訓練にも支障が出かねない。

「明日の模擬戦が終ったらシャーリーさんに頼んでフルメンテしてもらうから」

≪　Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ.　≫

自習練の時はスバルに大丈夫と言ってしまったが、成功率は相変わらずだ。あれから更に連携を詰めたおかげでわずかに成功率はあがったがそれでも、贔屓目で六割かその程度だ。引き出しに開くと幼い頃のティアナと亡くなった兄と一緒に映った写真があった。執務官になることを夢に見て、その志半ばで倒れてしまった兄、ティーダ・ランスター。年はティアナと一回り近く離れていたが、それでもティアナは兄のことが好きだった。百発百中の精密射撃、あの頃は届かなかった大きな背中。きっと、今でも届かないだろう。その

兄はいきなりティアナの前から消えてしまった。あのときの兄の冷たさをティアナは今でも覚えている。死というものについてまだあやふやな認識しか持っていなかった十歳の少女でも理解できるその圧倒的で、絶対的で、現実的な冷たさ。当時のティアナに兄はもう生きていないのだ、と認識させるにはそれで十分だった。

「兄さん・・・大丈夫、だよね」

答えが返ってくるはずがないと承知しながらもティアナは堪えることができなかった。

《Ｙｅｓ，ｗｅ　ｃａｎ．》

返って来たのはクロスミラージュの電子音。無機質なその声がなによりも愛しく、あたたかい。

「そうね、それくらいできなくちゃ、エースになんてなれないし、執務官になんてなれない。だから、力を貸してね、クロスミラージュ」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．》

殉職した兄に向けられたのは慰みの言葉でもなく、労わりの言葉でもなく、侮辱の言葉だった。どうして、と思う気持ちと許せないという気持ち、悲しい気持ち、悔しい気持ち。兄が死んでしまったことと同じくらい苦しくて、辛かった。だから、決めたのだ。その力を証明するのだと、その夢を叶えるのだと。

「明日は必ず成功させて見せる・・・証明するんだ、私の・・・私達の力を」

・＊・＊・＊・

翌日、訓練場では予定通り、フォワードメンバー達となのはとの２ｏｎ１の模擬戦が行われていた。先行はスバルとティアナのスターズコンビだ。ライトニングコンビとヴィータ、雪鷹の四人は近くの廃ビルからその様子を見学している。

「あ、もう模擬戦始まっちゃってる？」

そう言ってフェイトが屋上に姿を見せる。普段の制服姿ではなく、訓練用の動きやすい服装だ。

「私も手伝おうと思ってたんだけど・・・あ、雪鷹・・・」

一行の中に雪鷹の姿を見つけたフェイトの声がわずかに硬くなる。例の一件以来、フェイトにとって今日が初めての顔合わせだった。なのはのおかげで精神的に立ち直りはしたが、やはり雪鷹に何も感じないわけにはいかず、それとなく雪鷹と顔を合わせないようにしていたのだ。

「怪我が治ったばかりでなのはも少し体が鈍ってる・・・肩慣らしにはちょうどいいさ」

しかし、雪鷹は普段と何も変わらない調子にフェイトに話しかけてきた。あまりにも自然なその所作にフェイトは驚くことさえ忘れて

しまった。そして、変に気負ってしまっていた自分が馬鹿らしく思えてしまった。そもそも、あれは雪鷹にとっては少々性質の悪い冗談程度のものでしかないのだ。フェイトに対して妙な気を抱くはずもない。

「そう、だね。うん、雪鷹の言う通りだ」

そう思うと顔が自然に笑っていた。なかったことにはどうしてもできないが、それを引きずってばかりでは前には進めない。決していい思い出とは言えないが、今思い返すとそれほど悪いものでもなかったはずだ。ならば、その上に新しく積み重ねていけばいいだけのことなのだ。

「でも、なのは…部屋に戻ってからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニューを作ったり、ビデオで皆の陣形をチェックしたり」

そんなフェイトの言葉にエリオとキャロが嬉しそうに頷く。

「なのはさん…訓練中も、いつもボクたちのこと見ててくれるんですよね」

「ほんとに、ずっと…」

見つめる先にはためくのは白のバリアジャケット。憧憬と尊敬。エリオやキャロがなのはを如何に信頼しているかが二人の表情を見るだけでよくわかる。

「お、クロスシフトだな」

ヴィータの声で一行の視線がティアナ達に移る。

「クロスファイアぁあ、シュートっ！！」

空間制圧を目的としたティアナお得意の中距離誘導射撃魔法。橙色の弾丸が幾筋の光となってなのはに迫る。しかし、普段のそれに比べて速度は遅く、鋭さに欠けていた。コントロールがいかによかろうともその程度の軌道が通じるほどなのはは甘くなければ、優しくもない。難なく全弾を回避する。しかし、そのなのはを目掛けて一筋の道が伸びてくる。スバルのウイングロード。空戦魔導師にはまだ及ばないがそれに準ずるだけの機動性をスバルに与えてくれる。その道を一直線にスバルが突っ込んでくる。幻影ではない本物だ。迎撃の魔力弾を撃ちながら、なのはは障壁を展開してスバルの拳を受け止める。一瞬の拮抗。しかし、すぐにスバルは弾き飛ばされしまった。

「こら、スバル、ダメだよ。そんな危ない軌道」

強引な攻撃を試みたスバルになのはの声も厳しくなる。

「すいません！！　でも、ちゃんと防ぎますから！！」

スバルが無事に着地したことを見届けるとなのははティアナを探す。ほんの一瞬、ティアナから気を逸らしてしまい見失ってしまったのだ。

「ティアナは？」

辺りを見渡すとビルの屋上から一筋の光がなのはの頬を刺していた。しかし、その光自体は威力を持たないただのレーザーサイトだ。そ

の向こうには両手でクロスミラージュを構えたティアナが立っていた。ティアナがこれから何をしようとしているのかなのはには一目でわかった。

「砲撃・・・ティアナが？」

なのはの表情がわずかに硬くなる。ティアナにはまだ砲撃魔法は全く教えていない。精密射撃がメインのティアナが砲撃魔法を使えたはずがない。となると、ティアナが独学で組み上げた魔法なのだろう。その努力は認めるが、ティアナのような砲撃魔法の初心者が組み上げた魔法は多くの場合、威力と射程を重視し過ぎて撃つ側の人間のことを考慮していない。はっきり言って、スバルの特攻以上に危険な行為だ。教導官として見過ごすわけにはいかない。

「特訓成果、クロスシフトC！！行くわよ、スバル！！」

「おおっ！！」

スバルはティアナに応えるように吼えるとカートリッジをロードして、なのはを目掛けて一直線に突き進む。なのはも迎撃の魔力弾を放つがスバルはそれを物ともせず、なのはの真正面に飛び込び、必殺の拳を放つ。回避しきれないと判断したなのはは防御魔法でそれを受け止める。カートリッジのおかげで魔力が上乗せされているせいもあり、先程のように弾くことはできない。

「ティアぁぁあ」

スバルの口から洩れた声に反応してなのはは再び、ティアナに目をやる。しかし、先程までそこに立っていたティアナが霞のように消えていく。射撃魔法に並ぶティアナのもうひとつの武器、幻術魔法。

術者への負担が大きい為、使い手は少ないが上手く使えばその汎用性は言うまでもない。

「本物は・・・」

なのはが辺りを見渡すとなのはの背後からウイングロードを駆けのぼっていくティアナの姿があった。その手に握られたクロスミラージュからは橙色の魔力刃。何をしようとしているのかなど考えるまでもなかった。スバルが敵を足止め、攪乱している隙にティアナが近接攻撃による一撃を狙う。奇襲としてはスタンダードな戦術だが、そんな危険な戦い方を二人に教えた覚えはなのはにはない。

「一撃必殺・・・てやぁぁああっ!!」

「・・・レイジングハート、モードリリース」

感情の抜けたなのはの声が静かに響き、次の瞬間、辺りが爆煙に包まれた。その煙の中から出てきたのは両手でスバルとティアナの攻撃を受け止めているなのはの姿だった。

「・・・おかしいな、ふたりともどうしちゃったのか?」

それは決して大きな声ではなかった。むしろ、近くにいる人間にしか聞き取れないような小さな声だ。それなのに、二人はその声がひどく恐ろしいものに聞こえた。攻撃を受け止められたことよりも初めて目にする、凍りつくようななのはの眼差しに二人は驚き、そして、ただ純粋に、単純に、恐怖した。

「頑張ってるのは、わかるけど模擬戦は、喧嘩じゃないんだよ」

突きつけられた静かな、けれど、激しい怒り。それは駆けだしの新人程度に受け止めきれるほど軽いものではない。

「練習のときだけ言うことを聞いてるふりで本番でこんな危険な無茶をするんなら練習の意味、ないじゃない。ちゃんとさ、練習通りやろうよ？」

エースオブエースの名はただの飾りではない。単純な実力云々という話だけでなく、新人二人には想像もできないような修羅場をいくつもくぐりぬけてきたからこその称号なのだ。そのなのはが本気になったのだ。スバルやティアナがどう足掻いても相手になるはずがない。

「ねぇ・・・私の言ってること、私の訓練、そんなに間違ってる・・・？」

まるで二人を哀れむかのようななのはの視線。絶対的な強者からの視線。天才が凡人を見下すかのような視線。既になのはが二人を敵として見ていないことは明らかだった。湧きあがる感情が恐怖を上回り、ティアナの中の何かが弾け、反発する。魔力刃を解いて、後ろに跳んでなのはと距離を取る。クロスミラージュを構えて、狙いを定める。

「あたしはっ！！もう、誰も傷付けたくないからっ！」

それは嘘偽りのないティアナの本心だ。新しいコンビネーションが危険なものであることはティアナも理解していた。理解したうえで、スバルと一緒に訓練し、完成させたのだ。絶対的な強者を倒す為に、今よりもずっと強くなる為に。

「なくしたくないから・・・」

もし、あのとき、ティアナに力があれば兄を失うことはなかったかもしれない。無意味だと判っているのにティアナは何度もそのことを考えていた。力さえあれば失わずに済んだのかもしれないその未来の行末を。もちろん、それはティアナの空想でしかない。ティアナの兄、ティーダ・ランスターはもう既にこの世にはいない。だからこそ、守りたいのだ。失いたくないのだ。今、ここに生きているティアナの大切な人を、夢を、誇りを。

「だから、強くなりたいんですっ！！」

しかし、なのはの声が無慈悲に響く。

「・・・少し、頭冷やそうか・・・」

なのはは右手を掲げて、魔力弾を生成する。

「クロスファイア・・・」

一方のティアナも砲撃魔法を放つ準備に入る。

「うわぁぁあああっ！！ファントムブレイ・・・」

「シュート」

しかし、射撃魔法の発射速度に勝てるはずもなく、なのはの弾丸がティアナを襲う。ティアナを助けに行こうとしたスバルだが、いつの間にか拘束されていて動けない。

「ティアっ！！バインド・・・」

「じっとして、よく見てなさい」

スバルにバインドをかけた張本人、なのはは追撃の魔力弾を生成してティアナを狙う。一方のティアナは既に満身創痍で立っているのが精一杯の状態だ。次の攻撃に耐えるのはおそらく不可能だ。しかし、なのはは躊躇う素振りも見せず、弾丸を放つ。しかも、幾つもの弾丸を一つにまとめて威力を強化した特別版。それを見たスバルの口から悲鳴が零れる。

「なのはさんっ！！」

もう、やめてください。そういうよりも先に桜色の奔流がティアナへと放たれた。光がティアナを呑み込む。誰もがそう思った次の瞬間、ティアナの前に黒い影が立ちふさがり、黒刀を一閃してなのはの攻撃を斬り裂いた。その人物の姿になのはは自身の目を疑った。

「・・・雪鷹」

なのはの攻撃からティアナを守ったのは雪鷹だった。右手に握られているのはセカンドモードのブレイドハート。戦場には不釣り合いなほどに美しいその刃を握り締め、雪鷹はなのはに言った。

「悪いが邪魔をする」

その言葉に込められていたのは激情。なのはさえ、一歩引いてしまうほど殺気を露骨に見せつけていた。

１９『願い、ふたりで』（後書き）

お前のその強さでは何も守れない――

――お前の目指した強さ、お前の努力

その全てを俺にぶつけてこい――

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ

２０『阿修羅の如く』

――お前の全てを俺が全力で否定してやる

Intermission 19.1

Intermission 19.1

パリン、とグラスの割れる音が店内に響いた。

「えっ・・・」

それは本当にいきなりのことだった。全身を駆け抜ける寒気にも似た衝撃。それに驚いたクロエがうっかり手を滑らせてグラスを落としてしまったのだ。そして、そのまま蹲ってしまう。

「こら、クロエ、気をつけなさい」

バーのマスター、ビアンカが顔をしかめるがクロエは何も答えない。妙に思ったビアンカはクロエに近付き、そしてその体が震えていることに気付いた。

「クロエ?どうした?何があったの?」

「忍が・・・本気で怒ってる。どうしよう・・・忍が、忍が・・・」

普段は快活で、見る者にも元気を与えるクロエなのだが、その面影がまるで感じられなかった。何かに怯えるように体を小さく丸め、肩を震わせるその姿は幼い少女のようですらあった。

「どういうこと?忍君が怒ってるって何があったの?」

しかし、ビアンカの問いかけにクロエは首を横に振るだけだ。

「わからない・・・でも、わかるの。どうしよう・・・雪鷹が、雪鷹が・・・」

よほど動転しているらしく、話す言葉も要領を得ていない。怯えるクロエをビアンカはそっと抱きしめた。まるで、母親が幼子をあやすように優しく、しかし、しっかりとクロエを抱きしめて、落ち着いた声でクロエを宥めていく。

「大丈夫よ、忍君なら心配ない。少し危なっかしい所もあるけど、あの子は芯の強い、いい子だから。何があっても大丈夫。怯えることなんてなにもないのよ」

しばらくして、ようやく震えの収まったクロエは少し恥ずかしそうに顔を赤らめてビアンカの腕の中から離れた。

「・・・うん、ありがとう、マスター」

照れたように笑顔を浮かべるクロエにビアンカは満足そうに微笑む。

「うん、それでよし。それじゃ、割っちゃったグラスを片付けてね」

「はい」

そう言うとクロエは自分が割ってしまったグラスの欠片を一つ一つ拾って片付けていく。その様子を見守りながらビアンカは一人呟く。

（でも、あの忍君が本気で怒るなんて・・・何があったのかしら。それにしても、忍君を怒らせるなんてとんだ命知らずがいるのね・・

２０『阿修羅の如く』（前書き）

戦場に降り立った漆黒の修羅

冷た過ぎる殺気はただ、恐ろしくて

それなのに、その目はどこか悲しげで

怒れる修羅の見つめる先にあるものとは

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります

２０『阿修羅の如く』

２０『阿修羅の如く』

時は僅かに遡る。コンビネーションの初動、ティアナの空間制圧を目にしたヴィータとフェイト、雪鷹は皆、同じ感想を抱いていた。

「なんかキレがねぇな」

普段のティアナに比べて幾分劣る弾速と軌道。それを隊長陣は見逃さなかった。

「コントロールはいいみたいだけど・・・」

「疲れが出てる・・・というわけではないようだな。単純に操作性重視に切り替えたか？」

ティアナの弾道を見ながら雪鷹は呟く。前回のミスショットで全弾制御しきれなかったことを反省して、操作性を重視したとしてもおかしくはない。

「それにしたって・・・」

ヴィータは納得できない、と言いたげに呟く。操作性は確かに以前より向上している。しかし、その程度でどうにかなるほどなのははは甘くない。ティアナの持てる能力を最大限に発揮した弾速と軌道でようやくなのはに届くかどうかといったところだ。操作性が優れているだけの弾など幾つあってなのはにはないに等しい。

「あ、スバルさんだ」

なのはに目掛けて伸びる空の道。そこを駆け抜けるスバルを見つけてエリオとキャロが指さした。

「あの馬鹿、正面から突っ込むなんて自殺行為だぞ」

ヴィータはそれを見て顔をしかめる。訓練中の模擬戦だから命の危険はないものの、実際の現場でフォローもなしに単身で突撃するなど愚の骨頂だ。命が幾つあっても足りるものではないし、現場の指揮官がそのような無茶を認めるはずもない。案の定、なのはに弾き飛ばされてしまう。

「たぶん、ティアナの空間制圧射撃でなのはを崩して、そこにスバルが突っ込んでいくっていうプランだったんだね。できないってわかったらすぐにプラン変更しなきゃいけないのに・・・そういうところがちょっと甘いかな」

二人の意図を読んだフェイトも辛口の評価を下す。もしもの時の切り替えや見極めがまだできないのは経験不足で仕方ないことなのかもしれないが、だからとって無謀な攻撃を認めることはできないし、許せるものでもない。

「・・・いや、違う。ナカジマ陸士は囮（デコイ）だ」

鋭い口調でそう言った雪鷹の視線の先には砲撃魔法を放つ準備をしているティアナの姿があった。

「砲撃!?ティアナが!?」

「違う、その下だ」

驚きの表情を浮かべるフェイトに雪鷹の声が鋭く響く。砲撃を放とうとしているティアナのその下に、もう一人のティアナがあった。スバルが訓練場に張り巡らせたウイングロードを足場にして、なのはの背後に迫る。

「えっ、じゃあ、あれは・・・」

どちらが本物なのか見分けのつかないフェイト達は困惑した表情を浮かべる。

「上は幻影で作りだした偽物だ。精密射撃型のランスター陸士が砲撃、と思わせておいて本命は近付いての一撃を狙うと言ったところか。確かに、意外性はある。たいていの人間なら砲撃が切り札だと思うだろうし、まさかバックスの人間が斬りこんでくるとは思わないだろうからな・・・」

雪鷹の説明にフェイトとヴィータはなるほど、と頷く。エリオやキャロも感心した様子でティアナ達の動きを目で追っている。だからこそ、誰も気付かなかった。雪鷹が零した小さな一言に。そして、その言葉から滲み出ている雪鷹の怒りに。

「所詮、屑の妹は屑か・・・」

体勢を立て直したスバルがもう一度正面からの特攻を仕掛ける。魔力を上乗せしている分、なのはも容易には弾けない。二人が拮抗し、動きが封じられたなのはの背後からティアナが肉薄する。カートリッジをロードして作った魔力刃は短いながらも、かなりの切れ味を

持っている。その一撃がなのはを襲い、爆煙が三人を包み込んだ。

「なのは・・・」

フェイトが心配そうな声を出す。しかし、煙の晴れたそこには二人の攻撃を素手で受け止めているなのはの姿があった。

「よかった、みんな無事みたい・・・？」

安堵の声が零れるがすぐにフェイトは異変に気付いた。遠く離れているフェイトでさえ感じ取れるほど、鋭い気配。表情は見えないが、この気配だけで何が起きたかは理解できる。ヴィータもそれに気付いたのか、いつになく真剣な表情でフェイトを見た。

「やべぇぞ、なのはがキレた」

「うん・・・」

二人は揃って頷く。そして、二人は同時に雪鷹を見た。

「ねぇ、雪鷹、なのはが・・・」

しかし、二人の目に映ったのは氷のように冷たく、なのは達を見つめる雪鷹の姿だった。声をかけることとさえ許さないその雰囲気に二人とも圧倒されてしまい、声が出なかった。もちろん、数々の修羅場をくぐり抜けてきた二人なのだからそう簡単に気押されることなどない。二人が驚いたのはその静けさだ。すぐそこに立っているというのに、全くそれを感じさせない、それでいて、見る者を圧倒する威圧感。二人が初めて目にするものだった。

「あ、ティアさんっ！！」

なのはから距離をとったティアナが砲撃の姿勢に入る。そして、その悲痛な叫びはここにも届いた。

「あたしはっ！！もう、誰も傷付けたくないからっ！！なくしたくないから・・・だから、強くなりたいんですっ！！」

しかし、それが放たれるよりも先になのはの攻撃がティアナを襲った。それと同時に、フェイトの横から何かが消えた。それが雪鷹だとその場の人間が気付いたときには既に雪鷹は青白い、光に姿を変えていた。そして、ティアナの前に立つとセカンドモードを起動させ、二度目のなのはの攻撃を斬り裂いた。

「悪いが邪魔をする」

そう言い放った雪鷹の目は感情の色が抜けおちていた。まるで深い闇の深淵を覗いてきたかのように冷たい瞳。なのはの知る限り、こういう眼をした人間に一種類しか心当たりがなかった。

人殺し。

人の命を命と思わない、外道の極み。血塗られた修羅が其処に立っていた。なのはに向けられているのは激しい怒り、そして紛れもない殺気だ。

「・・・何をするつもりなの？」

しかし、雪鷹はその問いかけに応えることなく、なのはを無視してティアナに言った。

「ランスター陸士、昨日俺が言った言葉を覚えているか？」

意味のわからない問いかけになのはは首を傾げる。しかし、ティアナとスバルの表情を見れば雪鷹が何を言いたいのか想像はついた。おそらく、今のコンビネーションについて何らかの警告をしたのだろう。それを聞かなかった二人に対して雪鷹は怒っているのだ。そして、気付いた。雪鷹の殺気が向けられているのはなのはに対してではないことに。なのはに届いているのは雪鷹から漏れ出した単なる余波でしかないことに。雪鷹が殺気を向けているのは、怒りを向けているのは雪鷹がなのはの攻撃から助けたティアナであることに。

「沈黙は肯定と受け取るぞ？」

その言葉にティアナは何も答えない。俯いたまま、悔しそうに唇を噛みしめている。そんなティアナの前に立ち、雪鷹は更に言葉を続けた。

「奇襲としてはまぁ、悪くない。その点に関しては評価できる・・・が、はっきり言ってやる。お前のその強さでは何も守れない。誰かを傷つける。言ったはずだ、馬鹿な真似をしたら容赦はしない。ブレイドハート、モードリリース・・・俺はなのはと違って優しくない」

そう言った次の瞬間、ティアナの腹部に雪鷹の蹴りが突き刺さる。ティアナはそれに反応することさえできず、苦悶の表情を浮かべ、その場に倒れこむ。

「雪鷹っ！！なんのつもりなのっ！！」

「言葉で言っても通じないなら、直接体に叩きこんでやるしかないだろう？ティアナ（この馬鹿）に自分の愚かさを徹底的に教え込んでやるだけだ。心配しなくても加減はしている。死にはしない」

悲鳴に近いなのはの声。しかし、雪鷹の返答は氷よりも冷たく、鋭い。どう考えてもふざけている顔ではない。雪鷹は本気で言っているのだ。それを理解したなのはは雪鷹を止めようとレイジングハートを起動させようとした。しかし、手が動かない。手だけではない。なのはの四肢には青白い環状魔法陣が巻きついていた。

「バインド・・・いつのまに・・・」

「悪いが、邪魔しないでくれ」

雪鷹はなのはを一瞥してそう言うと倒れたまま悶えているティアナの頭を掴み、無理矢理立ちあがらせた。

「とはいえ、一方的に痛めつけられるのも不満だろうから、チャンスをやろう。俺は魔法を一切使わない。お前は何をしてもいい。俺の攻撃が届かない所から俺を狙い撃とうが、さっきみたいに魔力刃で斬りかかろうが好きにすればいい。お前の目指した強さ、お前の努力、その全てを俺にぶつけてこい。お前の全てを俺が全力で否定してやる」

そう言って雪鷹はティアナを突き飛ばした。しかし、今度はすぐに立ちあがるとクロスミラージュを構えて雪鷹に向けた。雪鷹を睨む目には涙が滲んでいる。

「魔法を使わない？馬鹿にしないでっ！！」

新人とはいえ、ティアナは陸戦Ｂランクの魔導師である。いくら雪鷹が強いとはいえ、魔法を使わない人間に、素手相手で負けるような技量ではない。悔しい、という言葉では足りないほどの激情がティアナの中で迸る。

「魔法を使わなくても私と互角だとでもいいたいんですか！？」

叫びながらティアナのクロスミラージュが魔力弾を放つ。しかし、雪鷹は難なくそれを避け、ティアナに言った。

「互角？自惚れるなよ、ランスター陸士。お前程度、素手の俺以下だ」

そう言うと同時に雪鷹は間合いを詰めて、ティアナの腹部に強烈な蹴りを入れた。

「うっ！？」

その蹴りに反応しきれなかったティアナは紙きれのように吹き飛ばされる。バリアジャケット越しとはいえ、その一撃は重く響く。もし、バリアジャケットがなければ間違いなく骨折や内臓破裂しているはずだ。それを思うと恐ろしいが、ここで退くわけにはいかない。たとえ新人といえども、譲れない意地や信念がある。その譲れないものの為にもティアナに退くという選択肢はないのだ。痛みを堪えて、すぐに立ちあがる。しかし、すぐに容赦のない雪鷹の拳が飛んでくる。

「はやっ！！」

練習の時とは比べものにならない速さ。眼で追うのが精一杯のその攻撃をティアナはかろうじて防ぐ。防ぐとはいっても顔面への直撃を避けただけで躱せたわけでもない。眼で追うことさえ難しい雪鷹の連撃。上段から下段へ、右と思った次の瞬間に左から、変幻自在のコンビネーションの前にティアナはただそれを受けることしかできなかった。

見ている側が粟立つ阿修羅の如き猛攻。すぐに両手と両足にダメージが蓄積され、立ち続けることさえ困難になる。容赦しない、その言葉の意味を噛みしめてティアナは懸命にその攻撃に耐え続けた。ある一定量以上の魔力ダメージを受ければ気絶してしまうのだが、雪鷹の攻撃は単純な物理攻撃でしかない為、それがない。つまり、ティアナの気力が尽きるまで、あるいは雪鷹の体力が尽きるまで終わらないのだ。その事実が、その一撃一撃が体力を、そして、それ以上に精神力を削り取っていく。

（どうして・・・私、こんな痛い目にあわなくちゃいけないんだろう・・・馬鹿みたいに殴られて、蹴られて・・・）

ティアナの気持ちが一瞬揺らぐ。それによって生じた隙を雪鷹は見逃さない。蹴り上げた足が狙うのはティアナの右側頭部。ガードの下がったその一点に吸い込まれるように蹴りが入り、そのままティアナは崩れ落ちた。

「さて、まだ続けるか？」

悶えるティアナを見下ろしながら雪鷹が尋ねる。息は僅かに上がっているが、それだけだった。ダメージらしいダメージは皆無で、ま

だまだ余裕の表情を浮かべていた。それほど一方的な試合内容だった。否、試合とすら呼べないただの私刑（リンチ）だ。ティアナは懸命に立ちあがろうとするが体がそれを拒む。立てばどうなるかを本能が理解しているのだ。なまじ、中途半端に実力があるだけに悔しくて、涙が溢れてきた。それを見た雪鷹は顔色一つ変えずに言い放った。

「屑の妹は所詮屑だな・・・少しでも、期待した俺が馬鹿だった」

その瞬間、ティアナの中で何か弾けた。

「・・・な」

体中が痛む。普段なら歩くことはおろか、立つことさえできないダメージのはずだ。しかし、ティアナは立ちあがった。

「・・・するな」

怒りが痛みを、恐怖を、本能を、全てを凌駕していた。頭の中が妙にすっきりしている。真っ白で何もない。ただ一つ、はっきりしていることがある。目の前の男だけは絶対に許さない。右手に握られたクロスミラージュの先端から魔力刃が伸びる。

「兄さんを、馬鹿にするなっ！！」

ティアナの魔力刃が雪鷹を狙う。怪我人とは思えないくらい素早い動きはまさしく電光石火の一閃。橙色の刃が油断している雪鷹を貫いた、はずだった。しかし、手応えがない。代りに腹部に鈍い痛みが広がり、意識が揺らいでいく。

「だから、お前は屑なんだよ。強くなりたいと思って練習するのが

悪いとは言わないが、少しはその理由を考えろ、この大馬鹿者」

薄れゆく意識の中でティアナが見たのはクロスミラージュの魔力刃を掴んで止めている雪鷹の左手と、ティアナの鳩尾に深く食い込んでいた雪鷹の右拳だった。拳を抜くと同時に意識を失ったティアナの体は崩れ落ちる。

「まったく、最期の最期まで世話のかかる奴だ。クロスミラージュ、モードリリース」

倒れかかってきたティアナを受け止めると雪鷹は教導官権限でクロスミラージュを待機モードに戻し、そのままティアナを抱え上げた。

「で、この状態から俺をどうするつもりだ？ハラオウン執務官、ヴィータ三尉。俺に二人と、いや、三人と交戦する意志はない。逮捕したいなら勝手にしろ。罪状は何だ？婦女暴行か？」

雪鷹を囲むようにフェイトとヴィータ、そして、自力でバインドから逃れたなのはの三人がデバイスを雪鷹に向けていた。信じられないものを見るような悲しい瞳が雪鷹を射抜く。

「・・・どうして？どうしてこんなことしたの？確かにティアナのしたことが許せないのはわかるよ。でも、いくらなんでもそれはやりすぎだよ」

「生憎、俺はなのはと違って優しくない。だから、こういうこともできる。まぁ、俺の処分は後回しだ。はやくこいつを医務室に連れていくぞ？話ならあとでいくらでも聞いてやる」

追い詰められているはずなのにまるで動じない雪鷹はティアナを抱

えたまま隊舎へと飛んで行った。三人は不満そうな顔を浮かべるがティアナの怪我の治療を最優先にしなければならないことには同意せざるを得ない。なのはは新人達をまとめる為にその場に残り、ヴィータとフェイトは急いで雪鷹の後を追った。

・＊・＊・＊・

「さて、これからどうするつもりなんだ？拷問？尋問？」

雪鷹は不気味なくらいにこやかに笑いながら周りを見渡す。隊舎の一室、雪鷹を囲むようになのはとヴィータ、そしてフェイトの三人が立っている。その表情は皆鋭い。

「ふざけんなよ、一歩間違ったらあいつが死んでたかもしれねぇんだぞ」

「死にませんよ。それぐらいの加減はしましたし、バリアジャケット越しなら怪我をしたとしてもせいぜい軽い打撲です。命の危険に関わるような怪我じゃない。二、三日休めばすぐに動けるようになります、たぶん」

反省する素振りを見せない雪鷹の態度にヴィータは吼える。しかし、雪鷹は何も食わぬ顔でそれに応える。

「そういう問題かよっ！！」

「そういう問題です」

パシン、という渇いた音が部屋に響く。雪鷹の頬に赤い痕が残っていた。

「流石に痛いな、フェイト」

雪鷹はわずかに顔をしかめながら、自分の頬を打った人間、フェイトを見た。なのはとヴィータも驚いた様子でフェイトを見つめている。普段の優しい表情が一転して、厳しい表情に変わっていた。雪鷹に向けられた瞳に映るのは軽蔑と失望、そして涙だった。今までフェイトは雪鷹に憧れていた。魔導師として、一人の人間として、一人の男性として。しかし、その全てを否定され、裏切られたのだ。悔しさと怒り、悲しみ、幻滅。堪え切れない感情が溢れて来て、フェイトを突き動かす。

「痛い？でも、ティアナはもっと痛かったんだよ？」

そう叫んでフェイトはもう一度右手を振り上げた。二度目の渇いた音が響き、涙交じりのフェイトの声が響く。

「雪鷹に大切なお兄さんを侮辱されて、傷つけられて、心も、体も・・・そんなこともわからないの！？」

「あぁ、屑呼ばわりしたことか・・・言葉が悪いことは認めるが評価に関しては改めるつもりはない」

頬を打たれたにも関わらず、雪鷹は平然と言い放った。言うまでもなく、火に油を注ぎ込むだけだ。フェイトはもう一度右手を振り上げる。しかし、三度目ばかりはなのはとヴィータが制止に入って止

める。

「放してよっ!!ねぇ、雪鷹・・・どうして?ねぇ、どうしてあんなことしたのっ!?」

ほとんど半狂乱になってフェイトが叫ぶ。フェイトは雪鷹のことが好きだった。愛していた。尊敬していた。信じていた。憧れていた。だからこそ、許せなかった。悔しかった。我慢できなかった。その想いが深いからこそ、その反動は誰よりも大きいのだ。

「半分は私情。もう半分は・・・強いていうなら罪悪感、いや・・・罪滅ぼし、かな」

そういってせつなげに微笑んだ雪鷹は今にも消えてしまいそうなくらい儚く見えた。嘘を言っている人間の目には見えなかった。

「・・・あのね、もし何か理由があるなら私達に話して・・・私達、雪鷹がわけもなくあんなことするようなひどい人間じゃないって私は知ってるから・・・だから、その理由を聞かせて?」

なのはの言葉に雪鷹は自嘲気味に笑って返す。

「それは十年前の俺の話だ。今の俺はあの頃みたいに優しくない」

「でも、理由はあるんだよね?罪滅ぼしってどういうこと?ティアナをあんな目に合わせることが罪滅ぼしなの?」

その言葉に雪鷹は押し黙る。

「あたしも伊達に騎士やってんじゃねぇんだからさ、一度刃を交え

たらそいつの為人はなんとなくわかんだよ。おめぇは弱いものいじめして楽しむような下衆な人間じゃねぇし、自分を抑えきれねぇような未熟な人間でもねぇ。どうしてあんなことしたんだよ」

落ち着きを取り戻したヴィータも雪鷹に尋ねる。その言葉に荒さはない。むしろ、悲しみを必死に抑え込んでいる響きだった。ヴィータもまた、雪鷹の強さを認めていた。それは単純な戦闘技術はもちろんのこと、どんなことがあろうとも己を曲げようとしない信念の強さ、心の強さには一目置いていたのだ。

「・・・理由を聞いてもたぶん、納得しないぞ？」

それは力のない諦めにも似た声だった。

「それでもいいよ」

「黙ったままよりはそっちのほうがいい」

「納得できるかどうかは私達が聞いて決める」

なのは、ヴィータ、フェイトの三人はそう言って頷く。その表情は固く、意志の強さを窺わせる。

「・・・いいだろう、場所を変えよう。ついでに新人達にも聞かせてやる。六年前、ある馬鹿のやらかした事件の顛末をな」

２０『阿修羅の如く』（後書き）

ついに語られる一課の秘密

そして、明らかになるティーダ・ランスターの死の真相

それはずっと知りたかったはずの真実で

だけど、突きつけた現実はあまりに重く、残酷で

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ

２１『真実』

――いつの時代も幾千もの屍と血の上に平和は成り立っている

それが現実なんだ――

21『真実』（前書き）

ロビーには医務室で眠っているティアナを除く全員が集まっていた。
雪鷹を睨む新人達の目は鋭く、初対面の時以上に警戒されている。
それを見た雪鷹は呆れたように笑う。

「ずいぶんと嫌われたものだな。まぁ、今更驚くにも値しないが・・・高町教導官他二名から先程の件について理由の説明を求められたからこれから話す。色々質問したいことがあるだろうが、とりあえず最期まで聞いてくれ。いいな？」

雪鷹の言葉に全員が頷く。

「はっきり言って気持ちのいい話じゃない。気分が悪くなったらすぐに部屋を出ろよ・・・それじゃ、始めるぞ？」

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります

21『真実』

21『真実』

前にも言ったかもしれないが、情報一課の任務の一つに潜入捜査、俗に言うスパイ捜査というものがある。一課と聞けば管理局内での諜報活動ばかり有名だが、それはあくまでも副業的なもので本業は当然、管理局外の組織を対象にした潜入捜査だ。テロ活動、質量兵器や古代遺失物等危険物の密売、薬物やら臓器、人身売買、その他諸々の諸犯罪に関わっている組織を見つけ出し、内偵して証拠を集め、組織を検挙・逮捕するのが本来の任務だった。

――だった？

そう、だった、だ。正確に言うとだったらしい、か。俺が情報一課に配属された時には既にそれは過去のものになっていた。

俺が情報一課に入った時にはその任務・・・具体的に言うと逮捕については既に他の課が受け持つようになっていた。今の一課の任務はほとんどが潜入捜査や密輸ルートの解明、つまりは情報収集だ。所謂、裏方仕事だな。

――えっ？それじゃ、調べるだけ調べて終わりなんですか？

あぁ、そうだ。一課に逮捕権はない。逮捕権を申請するか現行犯でない限り、逮捕は出来ない。組織に潜入に内偵し、証拠が集まった時点で組織から抜け、手に入れた情報を他の課に提供し、その課が検挙や逮捕を行うという形が出来上がっていた。まぁ、その経緯についてはこれからの話に関係はない。情報一課の専門は潜入捜査、それだけ頭の隅にでも留めておいてくれればいい。話を元に戻すぞ。

――はい

六年前、俺達情報一課はある犯罪組織を追っていた。質量兵器の密売と臓器売買、人身売買を主とする、俺達にしてみれば、よくある組織だった。組織の規模は大きくもなく、小さくもない中規模の組織。ただ、そこそこ腕の立つ魔導師が何人か組織の中にいた上に、管理局の人間が質量兵器の密売に一枚噛んでいたから俺達も慎重に動いていたんだ。

――管理局の人間が・・・そんなことを・・・

そこまで驚くようなことじゃない。質量兵器の横流しなんて中堅職員や下っ端の人間にとっていい小遣い稼ぎだ。ある犯罪組織を摘発して、押収した武器を別の組織に売り払うこともあれば、質量兵器が合法的に認められている、厳密に言うなら取り締まれないだけなんだが、管理外世界から転売することあるし、廃棄処分という名目で大量に売りさばくこともある。

――最低だな・・・

方法は色々あるが、横流しそのものは珍しいことではない。ついでに言うと、情報一課が有名になったのは管理局内のそういう組織に関わっている人間を一挙に摘発したから、らしい。俺が入る前の話だから詳しいことは知らないが・・・と、また余計な話をしてしまったな。本筋に戻すぞ。

その密売組織に情報一課は諜報員として一人の男をスパイとして送り込んだ。年は当時の俺より二つか三つ年上だからちょうど二十歳過ぎぐらいか・・・情報一課の中でも若い方で、そいつより年下なのは俺くらいしかいなかったな。年は若いが優秀な人間で、まぁ、そいつが潜入捜査をして順調に捜査を進めていたんだ。そして、内偵終了まであと僅かといった頃に一人の大馬鹿野郎が現れた。その大馬鹿野郎の名前はティーダ・ランスター一等空尉。つまり、ランスター陸士の兄だ。

――それは、どういうこと？

お前達がランスター一尉のことをどこまで聞いているか知らないが・・・奴は当時２１歳で首都航空隊の隊員で執務官を志望していた。まぁ、いわゆるエリートだった。精密射撃型の魔導師で、魔導師ランクも確か空戦ＡＡかそれくらいのレベルだったはずだ。肩書き、実力ともに申し分ない奴だったんだが、なかなか執務官試験の推薦がもらえなかった。推薦が貰えなかった理由の詳細は俺も知らない

が、奴はその理由を実績がないことだと考えた。

――実績？

そうだ。凶悪な犯罪者を捕まえたり、難しい事件を解決したり、そういった魔導師としての実績が奴には欠けていた。真面目に勉強してきたのが仇になったのかどうかは知らないがそういう機会に恵まれなかった。まぁ、恵まれないほうが幸せだと思うが。

――それと情報一課とどう関係があるの？

まぁ、話は最期まで聞け。実績さえ示せればどうにかなる、そう考えた奴は何でもいいから手早く実績になりそうな事件を独自に探し始めた。優秀な人材であること確かだったようで奴は自分一人の当時の情報一課が内偵中だった犯罪組織に管理局の人間が絡んでいる事実を突き止めた。そして、それを上司に報告した。しかし、上司はその事件には手を出さないように伝えた。

――えっ！？どうして？

その組織を情報一課が内偵中だということを事前に伝えてあったからだ。俺達が外に潜入捜査をする時は他の部隊のトップにそのことを通達している。他の人間にそのことを漏らさないように厳命してな。寸前まで調べ上げたのに、他の連中が手を出してきたらお互い

不利益にしかならないし、既に他の部隊が動いていることに勝手に首を突っ込まないのが暗黙のルールだ。

――地上の陸士部隊は縄張り意識が強いからね・・・

まぁ、それもあるんだろう。ともかく、上司の指示は当然といえば当然のことだ。奴もその場は一旦、引き下がった。そこで引き下がったままだったらよかったんだが、奴は違った。まったくもって愚かとしか言えないことだが、こともあろうか報告を揉み消した上司あるいは上司に近い人間がその犯罪組織に絡んでいるのではないかと疑い始めたんだ。

――えっ・・・

――そんな・・・

認めたくないだろうが、それが事実だ。管理局の人間が絡んでいる。質量兵器の横流しが行われている。首都航空隊の人間なら質量兵器と接する機会も多い。事件に踏み込まれることを嫌がっている。たったその程度の情報だけでも奴にとっては上司を疑うには十分な理由だったらしい。それから奴は上司の気付かれないように独自に捜査をすすめ、ついにその組織と管理局を結ぶ人間を見つけ出した。それが一課の潜入諜報員だった。

――えっ？それじゃ、つまり・・・

――ティーダ一等空尉は・・・

まぁ、一言で言うなら勘違いだな。しかも、信頼性に乏しい、独自の解釈に基づいた性質の悪いやつだ。ここまで話せば察しがついていると思うが、その潜入していた一課の人間がお前達の言う違法魔導師グループの一人というわけだ。

――それじゃ・・・

質量兵器の売人と舐めてかかったのか、それとも自分の実力を過信していたのか・・・あの馬鹿は一人でそいつと一緒にいた組織の魔導師を捕まえようとした。結果は知っての通り、返り討ち。当然の結果だな。愚か者の末路に相応しい。

――そんな言い方・・・ティーダ一等空尉は・・・

なら、聞くが俺に奴のどこに同情しろと？情報一課にしてみれば長い時間をかけた内偵調査をたった一人の馬鹿のせいでぶち壊しにされたんだ。数日中にそいつも一課に戻ってきて、無事に任務が終了するはずだった。恨みこそすれ、同情するはずがないだろう。奴の死を喜ぶつもりはないが悲しむつもりもない。それに、話はまだ終わっていない。

――えっ？続き？

知っての通り、あの馬鹿のおかげで魔導師一人は陸士部隊が逮捕した。一課の諜報員は無事に逃げおおせたんだが、そいつの素性が組織の人間に知られた。これから先、奴がどうなったか想像がつくか？

――組織の人に捕まっちゃったんですか？

まぁ、間違いではないが・・・人身売買や臓器売買をしているような連中だ。そんな連中が裏切り者を捕まえてそれで終わり、なはずがないだろう？どんなことをされたのか考えたくもないが、連絡が途絶えて数日後、情報一課に小包が届いた。両手で持てるくらいのそれほど大きくない箱だった。中に入っていたのは捕まっていたやつの首だった。

――えっ・・・

――殺されちゃったんですか・・・

そうだ。髪や頬に血がこびりついていて、目を見開いていて・・・本当に無惨な格好で・・・ちなみに、首から下はいまだに見つかっていない。臓器を取りだされて、いらなくなった部分は捨てられた

か、それも売られたのか・・・それさえ分からなかった。そして・・・ルシエ陸士、顔色が悪いぞ?聞いてて気分が悪くなったなら無理はするなよ。これから先はもっとひどくなる。

――大丈夫、です・・・

フェイト、無理そうならお前が連れだしてやれ。子供には少々酷過ぎる話だ。気分が悪くなったことを恥じる必要はない。それが正常な反応なんだ。何も感じない方がおかしい。だから、無理はするなよ。さて、話を戻すぞ?捕まったそいつには一人の妹がいた。年は確か・・・ナカジマ陸士やランスター陸士ぐらいだったはずだ。妹も連中に狙われる可能性があったから一課の人間が保護に向かったんだが、間に合わなかった。

――それって・・・

自宅は荒らされて、妹の姿はなかった。そいつの妹も連中に攫われたんだ。一応、妹の方に関しては殺される前に助け出すことができたが、無事では済まされなかった。育ち盛りとはいえ年頃の女だ。攫われてからそいつの妹が連中に何をされたか・・・俺の口から言わなくても判るな?

――それで、それからどうなったんですか・・・

組織の方については一課が総力を以て潰した。当時、俺達の知り得る全ての戦力を投入して、その組織に関係のある人間全てを消し去った。ちなみに、ただの感情論で殲滅したわけじゃないぞ？もちろん、感情的な理由があったことは否定しないが、中途半端に組織を潰して、それで逃げ延びたやつらが他の部隊に逮捕されると情報一課にとって色々と不都合だったんだ。だから、その組織の存在そのものがなかったことになる程度には潰さざるを得なかったんだ。

――あ、あの、今、殲滅って聞こえたんですけど、それは逮捕したってことでいいんですよ？

殲滅は殲滅だ。意味がわからないなら、言い変えてやろう。皆殺しだよ。

――えっ・・・

言っただろう？組織そのものがなかったことになるまで潰す、と。関係あるものは全て殺した。徹底的に。勘違いのないように言っておくが俺もそれに参加して連中を殺した。何人殺したか覚えてないし、その数を自慢するつもりもないが。

――そんな・・・いくらその人達が犯罪に加担していたからって殺すなんて・・・管理局は法と平和の守護者なんだよ。その管理局がそんな酷いことをするなんて・・・

ハラオウン執務官、確かに法は遵守しなければならない。法を定めたはずの管理局がそれを破るなど言語道断だと言いたいその気持ちは理解できる。だが、それでは守れないものがあるのもまた事実だ。違うか？

――そ、それは・・・だけど・・・

いつの時代も幾千もの屍と血の上に平和は成り立っている。それが現実なんだ。情報一課の行っている諜報行為も管理局の定めた法に則るならば違法だ。それでも、管理局がそれを認めているのは、それが平和を維持する為に必要だからだ。それが俺のいる世界なんだ。

――だけど、でも・・・

なら、お前は大勢の男どもに凌辱されて、目の前で自分の兄の首が切り落とされる様子を見せつけられた人間の前で同じことが言えるのか？あいつらは犯罪者です。私達が裁きます。でも、死刑にはなりません。そう胸を張って言えるのか？それでそいつが納得するとでも思ってるのか？それが正義だと？

――それは・・・

自分が同じ目に遭って、仲間が同じ目に遭って、それで犯人達を殺

したいと思わずにいられるか？そこで見逃した連中がもう一度同じような犯罪に手を染めないと言い切れるのか？見逃さなければ助かった人がいるかもしれない。そいつらが被害者になった時、お前は平気でいられるか？

――そんなの・・・乱暴な理屈だよ・・・

そうかもしれない。でもね、今、目の前の一人を殺して、未来の千人が救えるのなら、俺は迷わない。受け入れられないなら、それでもいい。これは俺の世界の話で、お前みたいな表舞台に立つ人間には無縁の話だ。知る必要もないことだ。だが、管理局が何故、自らを正義の守護者と名乗らないのか、その理由を少しは考えてみるといい。

――話はだいたいわかった。けど、やっぱりそれでおめぇがティアナにしたこと許せるかって言うのは別問題だ。

別に許してほしくてこの話をしたわけじゃないし、あいつの兄に対する評価を改めるつもりは毛頭ない。出世に眼が眩んで、他の人間に迷惑をかけて・・・勝手に死んで・・・直接的でないとはいえ、俺にとってランスター一尉は人殺しであり、誘拐犯であり、強姦魔だ。屑と言われて当然の人間だ。

――でも、ティーダ一尉も自分の夢を叶えようとして一生懸命だったんだよ。それなのに・・・

夢を叶える為？ふざけるなよ。そんな身勝手な理由であいつが一体どれだけの人間に迷惑をかけたと思ってるんだ。あいつが大人しく上官の指示に従っていれば誰も死ななかったんだぞ。自分の夢の為に頑張っていたから悪くない。死んだに人間にそう言えるのか？言えるわけがないだろう。

――それは・・・

ランスター陸士にしてもそうだ。死んだ兄の夢を引き継いだ。それだけ聞けばはいかにも美談に聞こえるが、実際はどうだ？自分と相手の実力差も理解しないで無茶な特攻をしかけて、自分だけじゃなくて仲間の命まで危険に晒した・・・今回は偶々訓練だからよかったが、下手をすれば、二人とも死んでいたんだぞ？実際の現場なら他の人間を巻き込んでいたかもしれないんだ。それをどう評価しろと？何を褒めろと？危険なことをするな、と俺は言った。それでもランスター陸士はやめなかった。そういう人間は口で何度も言っても通じない。現実って壁にぶつかるまで絶対に自分の誤りを認めようとしない。だから、徹底的に潰した。

――でも、あんなやり方は一方的過ぎるよ・・・強くなろうってティアナはティアナなりに考えて必死に努力したんだよ？それをあんな風に全否定されたら立ち直れないかもしれないよ・・・

それがどうした？一度や二度の失敗で逃げ出すくらいなら最初から

目指すな。その程度の夢に付き合うほど俺は暇人じゃないし、その程度の夢の為に危険に巻き込まれるのはごめんだ。俺達が世間から求められているのは努力じゃない。結果だ。どれだけ頑張ろうとそれが結果に繋がらないなら無意味なんだよ。教導官なら努力も褒めてやるんだろうが、生憎俺は教導官じゃない。

――だけどっ！！

夢を叶えたいなら、その為に努力するなんて当然のことだ・・・褒めることじゃない。それとも、お前達は褒められる為に努力をしているのか？違うだろう？何の為に強さを求めているのか、何の為の努力なのか、少し考え直せ。

21『真実』（後書き）

――死ぬ気でやらなきゃ強くなんて
なれないじゃないですかっ！！――
―いっそ今死んでくれ。それが世界の為だ
次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
２２　『優しさと厳しさ』
――管理局の仕事は
子供の遊びじゃないんだ――
！！クロス宣伝！！
『魔法科学医者リリカルジェイルＳｔｒｉｋｅｒＳ～新たな仲間は

危ない医者～』

作者：　名前募集中

主人公はなんとあの稀代の天才にして、次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティ！？

時にはシリアスに♪時にはコミカルに♪
あの無限の欲望（アンリミテッド・デザイア）が機動六課で大活躍！？もう、変態医師だなんて呼ばせません！！

オリ主顔負けのフラグ乱立。まさか、あの人がジェイルと・・・予想の斜め上をいくまさかの展開！！オリキャラも登場してますます目が離せません。

あなたもめくるめくスカリエッティの世界をお楽しみあれ♪

Intermission 21.1

Intermission 21.1

雪鷹が出ていった部屋の空気は重く、誰も口を開こうとしなかった。愉快な話ではないことは覚悟していたが、雪鷹の話の重さは想像を超えていた。これまで見てきた世界がまるで違うのだ。執務官として数多くの事件に携わってきた自負のあるフェイトでさえ何も言えなかった。あの後、フェイトはエリオとキャロを連れて部屋を出ていった。まだ幼い二人には刺激の強過ぎる話だった。今、部屋に残っているのはスバルとなのは、ヴィータの三人だけだ。

「私達の考えが甘かったのかな・・・」

なのはは弱々しく呟く。頭の中に思い浮かんだのは自己紹介の時に雪鷹の言った言葉だ。

『知りたい、だけで踏み込んではいけない世界がある。俺の十年はそんな世界だ。責任感や好奇心、興味や好意、そんな気持ちで踏み込むな。後悔するだけだ』

その言葉の意味が今では痛いくらいに判る。あのときは雪鷹が話したくないから、そんな言葉を並べているのだと思っていた。適当な言葉を並べて、脅かしているのだと、そう思っていた。しかし、現実は違った。話せばどういうことになるのか雪鷹は理解していた。だから、話すことを拒んだのだ。

「知らないまま後悔するより、知って後悔するほうが私はいい、か・・・結局、私は何も見えてなかったんだね」

雪鷹の過ごした十年はなのは達には想像もつかない世界だったのだ。見ているものが違うのだ。人を育て、その先にある未来を見つめてきたなのは。様々な事件の狭間に見え隠れする現実を見てきたフェイト。自分自身の夢を追いかけてきた新人達。そして、誰も知らない闇のその深淵を見てきた雪鷹。世界が違い過ぎた。

「けど、それとこれとは話は別だろう・・・あいつがティアナをボコッた理由はわかったけど、だからってあいつのやったことが正しいってわけじゃねぇよ」

他の人間とは対照的に比較的落ち着いているのはヴィータだった。元々は夜天の書の守護騎士プログラムとして生まれた身だ。薄れかけているとはいえ、戦乱のベルカ時代の血みどろの光景は未だに消えることなく記憶に残っている。見た目と違って一番の最年長なのだから、当然といえばその通りだった。

「あの、なのはさん・・・あたしとティアのコンビネーション、やっぱりいけなかったんですか？その動きとかそういうことじゃなくて・・・その・・・」

スバルが戸惑いを浮かべながらなのはに尋ねる。なのはは困ったように笑いながら、優しい言葉でスバルを諭す。

「二人の連携って意味ならすごくよかったよ。それは自信持っていいよ。だけど、あんな危険なことは教導官としてはやっぱり見過ごせないな・・・あのときも言ったけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ。模擬戦は積み重ねてきた基礎を生かす為の場所。それがわかってないみたいだったから、私も少し厳しいことしちゃったんだけど・・・スバルは雪鷹のしたこと、どう思う？やっぱり、許せないかな

？」

「・・・ユキタカ曹長がティアにあんなことをしたのはやっぱり許せないです。あたしはティアからティアのお兄さんの話やティアが執務官になりたい理由を聞いていて、だから、ティアのお兄さんのことを悪く言うのは許せないって思ってけど、でも、もし父さんやギン姉が同じ目に遭ったらって思うと・・・ユキタカ曹長だけが悪いとはやっぱり言えなくて・・・ごめんなさい、あたしもよくわかんないです」

スバルは泣き出しそうな顔で俯いたままそう言うとそのまま黙りこんでしまった。なのはでさえ、突きつけられた現実に困惑しているのだ。心も体もまだまだ成長途中のスバルに受け止めきれるはずがなかった。嗚咽が漏れ始めたスバルをなのははそっと抱きしめる。

「いいんだよ、一杯悩んで。悩んで、悩んで、おもいっきり悩んで、そして、スバルの答えを見つけたらいい。それが明日の強さに繋がるんだよ。昔ね、私やフェイトちゃんも雪鷹に言われたんだ。言葉で教えられたことはすぐに忘れる。悩んで、迷って、自分の血を流して考え抜いたことしか身に付かない。それが強さに繋がるって・・・だから、もっと強くなってね、スバル・・・」

「・・・はい、なのはさん」

スバルはなのはの腕の中で小さく頷いた。

「それで、なのは、これからどうするつもりなんだ？」

「・・・とりあえず、雪鷹にはしばらく訓練から外れてもらう。元々、怪我した私の代理ってことだったし、雪鷹もきっとそれを望ん

でると思うの・・・いいかな?」

なのはの提案にヴィータは同意を示すように頷く。

「まぁ、それが妥当だな。ティアナの容体は?」

「シャマル先生が言うには怪我自体は大したものじゃないからすぐに目を覚ますだろうって・・・この後、もう一度様子を見に行くつもりだよ」

「ユキタカの件もあるけど、ティアナはどうするんだ?ユキタカが横槍いれてうやむやになったけど、ティアナの危険行為がそもそもの発端だろう?」

ヴィータの言葉になのはは一瞬押し黙る。ヴィータの言う通り、今回の件の原因はティアナの危険行為にある。一見するとティアナが被害者で、雪鷹が加害者のように見えるが一歩身を引いて見てみれば、ティアナにも非はあるのだ。怪我をしているからといって見逃すことができるものではない。しかし、それは教導官としてのなのはの指導力不足でもあるのだからティアナを一方的に責めることはしたくなかった。数瞬の思惟の後、なのはは結論を出した。

「ティアナが目を覚ましたら、みんなに話すよ。私の教導とその意味・・・」

Intermission 21.2

Intermission 21.2

「二人とも、大丈夫？」

部屋からエリオとキャロを連れだしたフェイトは近くの椅子に二人を座らせ、顔色を窺った、血生臭い現場を何度も目にしているフェイトにでさえ、不快感を覚えたのだ。管理局員として働いているとはいえ、幼い二人には刺激の強過ぎる話だった。管理局のもうひとつの顔。雪鷹の裏の仕事。思い出しただけでも気分が悪くなる。

「だいじょうぶです」

「僕も、もう落ち着きました」

顔色は未だ優れないままだったが二人が元気そうに頷いて見せる。その顔がフェイトに心配をかけまいと無理をしているようで、どこか痛々しくさえあった。

「無理しなくていいんだよ・・・あんなことを突然言われて、戸惑うのは当然だし、辛い時は辛いっていいんだよ」

フェイト自身も戸惑っているのだが、二人にそれを見せないと笑顔で浮かべる。その笑顔の下でフェイトは悲しみのため息を零した。雪鷹の話そのものもショックだったが、それよりもその話を二人に聞かせてしまったことを後悔していた。

（こんな話だって知っていたら、二人には聞かせなかったのに・・・

）

フェイトも初めて聞いたのだから、誰もそれを咎めはしないが、だからこそフェイトには自分の過ちが許せなかった。たいしたことないだろうと、フェイトが勝手に決め付けてしまったせいで幼い二人を傷つけてしまったのだ。

「いえ、確かにびっくりしましたけど、でも・・・そんなに落ち込んでないですから」

「その・・・管理局が正義の味方じゃないってことはなんとなくわかってましたから」

俯きながらそう言った二人の顔は複雑で、悲しんでいるようで、それでいて、笑っているようでもあった。

「なんとなくって・・・」

そこまで言ってフェイトは気付いた。幼い二人は既に知っていたのだ。管理局の正義が、世界が歪んでいることに。

第６管理世界アルザス地方の少数民族「ル・ルシエ」の出身のキャロは優れた召喚士としての才を秘めていたが、強過ぎる力は争いと災いしか呼ばない、と一族を追放された過去を持つ。その後、管理局に保護されたのだが、管理局の目当てはキャロの持つ稀少技能（レアスキル）『竜召喚』であった。竜を使役する為だけの存在としか見ていなかった局員のキャロの扱いはひどかった。日に三度の食事と睡眠の時間以外は全てが実験と言う名の地獄だった。半ば強制的に竜を召喚させられ、制御できなければため息と罵声を浴びせられる。ただそれ

だけだった。その結果、キャロの使役する白竜、フリードリヒが暴走したのは一度や二度ではない。暴力を振るわれたことは一度もなかったのが救いと言えば救いなのかもしれないが、そうだとしても、その生活がキャロの心に深い爪後を遺したことに変わりはない。今でこそ、こうやって普通に笑っているが、フェイトが保護した直後は怯えるだけ笑うことなど欠片もなかったのだ。

「そう、だよね・・・」

フェイトの顔が苦痛に歪む。

エリオもまたその出生に深い闇を抱えている。エリオは富豪モンディアル家の長男として生まれ、優しい両親の庇護の下で何不自由なく育てられた。しかし、その幸せは長くは続かなかった。ある日、とある研究施設の人間が家を訪れ、エリオを両親から引き離したのだ。初めは抵抗していた両親も研究員にある事実を突きつけられ、抵抗を諦めた。その事実とは、モンディアル家の長男、エリオは既に病気で死亡していること。今のエリオは息子の死を受け入れきれなかった両親がある技術に縋って生み出した特殊クローンであること。そして、その技術『プロジェクトF』が極めて犯罪性の高い違法研究であることだった。この事実が公になればモンディアル家もただではすまない。そう判断した両親は事実を隠す為にエリオを研究施設に引き渡した。信じていたはずの両親に見放されたエリオを待っていたのはキャロと同様、実験という名の地獄だった。しかも、研究者にとってエリオは人間ではなく、ひとつの研究対象であり、実験体でしかなく、その扱いは常軌を逸していた。両親の裏切りと研究施設での非人道的な扱い。エリオが重度の人間不信に陥るまでそう長くは至らなかった。フェイトによって管理局の保護を受けた後もそれは変わらず、その荒み具合に保護している管理局の人間さ

えも匙を投げ、エリオに近寄らなくなった。まるで、誰もが異形を見るかのような目でエリオを見ていた。誰もエリオをヒトとして見ていなかった。フェイトの献身的な説得のおかげで立ち直ることはできたのだが、それまでエリオが見て、感じて、味わってきた苦痛は消すことのできない事実なのだ。

「ごめんね・・・二人をこんな世界（管理局）に巻き込んで・・・」

フェイトの口から漏れたのは二人への謝罪の言葉だった。本音を言うなら、二人に管理局には入ってほしくなかった。危険に巻き込みたくない、という親心からというのはもちろんあるがそれだけが理由ではない。幼い頃から管理局で働いてきたフェイトは心のどこかで管理局の歪に気が付いていたのだ。それに二人を関わらせたくなかったのもまた本音だ。二人の過去を刺激して、苦しめたくなかったのだ。後悔の味はひどく苦かった。

「フェイトさん・・・どうして謝るんですか？」

「そうですよ・・・そもそも、管理局で働きたいって決めたのは僕達が決めたことです。フェイトさんが謝ることじゃないですよ」

キャロもエリオもどうしてフェイトが謝るのか分からない、という顔をしていた。二人が管理局に入ったには紛れもなく、二人の意志だった。誰かに強制させられたわけでも、頼まれたわけでもない。もちろん、フェイトに何か言われたわけでもなく、むしろ、やんわりと反対されていたのを無理を通して、許してもらったといってもいい。フェイトが二人に謝る理由が思いつかなかった。

「二人とも雪鷹の話を聞いて、昔のこと思い出したりとか・・・嫌な気持ちになったりしたでしょう？だから・・・」

フェイトの言葉に二人は顔を見合わせ、互いに頷き合うと真っ直ぐにフェイトを見つめて言った。

「それはフェイトさんが悪いわけじゃないですよ。それに悪いことをしている人がいるとしても、管理局のみんなが悪い人のはずがありませんよ。フェイトさんみたいに優しい人だってたくさんいるってことを知っています。自然保護局のミラさんもタントさんも管理局の人だけどすごく優しくて、いい人でした。」

「誰も信じられなくて、悲しみも苦しみを理解してくれないって暴れていた僕を優しく抱きしめてくれたのはフェイトさんじゃないですか。僕もキャロもフェイトさんに救われたんです。だから、そんな悲しいこと、言わないでください。僕達は自分の意志でこの道（管理局）を選んだんです。僕は六課で働けることを誇りに思っているんです。だから、そんなこと言わないでください」

二人の言葉は強く、その目に影はない。

「そう・・・だね。ごめんね、私が色々考え過ぎてたみたいだね」

フェイトが考えているよりも二人の心は強く、そして柔軟に育っていた。辛い現実を目の当たりにしても、挫けることなく前を向ける強さがあるのだ。それが嬉しいようで、ほんのり寂しくもあった。

「さっきの話を聞いて二人は雪鷹のこと、どう思ってる？嫌いになったりした？」

「その・・・すみません、やっぱり少し怖いです。人を殺したことがあるって言ったときはびっくりしました。でも、悪い人じゃない

と思います。それが仕事だっていうなら、雪鷹さんが悪いわけじゃないですし、それに訓練でも色々なことを教えてくださって・・・ユキタカさんのおかげで前よりずっと強くなっているって感じてます。僕は好きですよ、ユキタカさんのこと」

「私もユキタカさんのことは好きです。書類の作り方も丁寧に教えてくれて・・・だから、人を殺した、なんて言ったときは本当にびっくりして・・・でも、ユキタカさんはユキタカさんです。今日のこともティアさんが嫌いだからあんなことしたわけじゃないってわかって、よかったです。安心しました。フェイトさんの言うように嫌なことも少し思い出しましたけど、でも、それだけじゃありませんから。私もエリオ君も早くティアさんと仲直りしてほしいと思ってます。」

そう言って二人は笑った。純粋な瞳。嘘偽りなどあるはずがない。

「そっか・・・よかった・・・」

二人に気付かれないようにフェイトはそっと目尻に溜まった涙を拭った。

Intermission 21.3

Intermission 21.3

スバル、ヴィータと別れたなのははは医務室を訪れた。無論、ティアナの容体を見る為だ。シャマルは大事ない、と言っていたがそれでも心配な気持ちに変わりはない。

「シャマル先生、ティアナは？」

「あいかわらず眠ってるわ。怪我のせいというより、日頃の疲れが出ちゃったみたいで、もうぐっすりよ」

そういうシャマルの顔からどこか微笑ましいものさえ感じられる。事前に聞いていたとはいえ怪我そのものについては深刻ではないことを確かめ、なのはの安堵のため息を零す。

「それじゃ、怪我の方は・・・」

「軽い打ち身が少しあるくらいよ。いつもの訓練より少し怪我が多いくらいだから心配するほどの怪我じゃないわ。今日一日ゆっくり休めば軽い運動くらいならできるわよ。それにしても・・・」

そう言ってシャマルは呆れた様子でなのはを見た。

「ティアナの怪我、ユキタカ曹長がやったそうね。まったく・・・怒っていいのやら、褒めていいのやら・・・」

「といいますと？」

意味深なシャマルの言葉になのはは首を傾げる。

「私が聞いた話だとユキタカ曹長、ティアナを殺しそうな勢いで殴っていたらしいけど、実際には外傷はほとんどなし。バリアジャケット越しっていうのもあるんでしょうけど、殴る場所、蹴る場所もしっかり考えて大きな怪我に繋がらない場所を狙ったのが一番の理由よ。医官として彼の行為を認めるわけにはいかないけど、その技量に関しては認めざるを得ないわ」

「・・・ですね。私も訓練校時代にいっぱい殴られました」

そう呟いてなのはは苦笑する。模擬戦で雪鷹に殴られ、蹴られたことは一度や二度ではない。むしろ、なかった回数の方が圧倒的に少ない。しかし、顔面を殴られたことは一度もなかったはずだ。その辺りの配慮は今回もしていたらしい。

「あの・・・シャマル先生にとって雪鷹はどんな人に見えますか？」

「どんな人って言われても・・・あんまり話したこともないし、顔を合わせると怒ってばかりなような気がするけど・・・」

なのはの質問にシャマルは苦笑しながら答える。二人とも同じロングアーチスタッフだが片方は医務室の主、もう片方はデスクワークから現場出動までこなす便利屋。顔を合わせる機会があるとすれば怪我をして医務室に来た時がほとんどで、それ以外は数えるほどしかない。怪我人に対してはやや厳しいと定評のあるシャマル女史が医務室で雪鷹と顔を合わせると口論になることがほとんどで、にこやかに会話を楽しんだことなど記憶にない。

「でも、まぁ、優秀な人間だとは思うわよ。あれでいて、ヴィータちゃんも悪く思ってないみたいだし、シグナムも機会があれば模擬戦を申し込みたいっていつも言ってるもの。はやてちゃんも前は少し疑ってたみたいだけど、でも、今は信じたいって言ってる。私もそう・・・」

シャマルはそういって微かに笑う。

「それがどうかしたのかしら？」

「いえ、なんでもないです。少し気になっただけで・・・シャマル先生、ティアナが目を覚ましたら知らせてください。それじゃ」

そういうとなのはは逃げるように医務室を後にした。どうして走り出してしまったのはなのは自身も理解していない。ただ、あのまま医務室にはいてはいけないような気がしたのだ。胸の奥が鈍く疼く。シャマルが見ていたのは雪鷹の一面でしかない。そして、シャマルはそれが雪鷹の全てだと思い込んでいる。その笑顔の下で雪鷹が何を思っているのかも知らずに。

「もうあの頃の雪鷹じゃないんだね・・・」

なのはは苦々しげに呟く。あの頃のままの雪鷹であるはずがないことはなのはも頭では理解していた。なのはもあの頃のなのはではないのだ。しかし、あまりにも変わり過ぎていた。受け止めるには重すぎる現実がなのはにのしかかる。教え子の居る前では弱音を吐かないように懸命に堪えていたが、それもそろそろ限界だった。

「どうして・・・あの頃のままでいられないんだろう」

昔を懐かしむその言葉が胸を締め付ける。胸が疼く。お互いに変わってしまった。当然と言えばそれだけのその事実がどうしようもなく切なくて、寂しくて、悔しくて、やるせなくて、ただ、苦しかった。

Intermission 21.4

Intermission 21.4

エリオとキャロを休ませてからフェイトは雪鷹の部屋へと向かっていた。しかし、その足取りは重い。つい先日も一人で雪鷹の部屋に行って酷い目にあったのだから、無理もないことかもしれないが。

「雪鷹、入るよ？」

ノックをしてフェイトが部屋に入る。以前来た時と変わらない生活感の感じられない無機質な部屋。どうせなら花一輪でも添えて彩りの一つくらい加えればいいのに、と思わなくもない。そんなことを考えながらフェイトは部屋の主、雪鷹を見た。事務仕事の続きをしていたのだろう、雪鷹は机に向かったままデータ整理の真っ最中だった。

「ハラオウン執務官、何の用ですか？」

画面に顔を向けたまま。フェイトを一瞥することなく、雪鷹がため息を零す。顔さえ見ようとしない雪鷹の態度に、そして、他人行儀な言葉遣いにフェイトの表情がわずかに硬くなる。それに気付いていないのか雪鷹は画面を見つめたまま更に言葉を続ける。

「見ての通り、忙しいので用件は手短にお願いします。あと、ランスター陸士の件でしたらまた後日に。今はお互い冷静に話し合うこともできないでしょうから」

「・・・そういう態度、よくないよ。ちゃんと相手の顔を見て、話

さないと」

淡々と話す雪鷹をフェイトがたしなめる。しかし、雪鷹は気にする素振りさえ見せない。画面を凝視しながら流れるように見事なキーボード捌きで淡々と作業をこなしていく。その動きが不意に止まる。そして、盛大にため息を零してからフェイトの方を見た。

「で、用件は？本当に忙しいんだ。手短に頼む」

「あっ、えーと、その・・・さっきのことを謝ろうと思って・・・」

「不要だ」

雪鷹のその一言でばっさりとフェイトを切り捨てると画面に視線を戻して、キーボードを打ち始めた。

「不要って・・・話も聞きもしないでどうしてそんなことわかるの！？」

「謝られる心当たりがない」

フェイトの言葉が硬さを帯びる。滲み出てくる苛立ちの矛先は当然、雪鷹だ。しかし、それでもなお、雪鷹は平然としており、淡々と作業をしながら言葉を返すだけだった。無機質なその態度にフェイトは顔をしかめ、雪鷹の腕を取る。強引に顔を向けさせるとフェイトはやや怒った口調で言った。

「ねぇ、どうしてそんな態度を取るの？私の顔も見たくないくらい怒ってるの？」

「・・・馬鹿なことを言うなよ。俺に謝りたい?それが謝る側の態度か?いきなり部屋に入ってきて、俺の都合を無視して、自分の主張を押し通して・・・それが相応しい態度か?怒っているというのなら、今のお前の態度に対してだ」

決して怒っている声ではなかった。むしろ、普段と変わらない淡々とした口調だ。しかし、その裏に秘められた鋭さは容赦なくフェイトを貫く。

「それは・・・ごめんなさい」

「忙しいと言っただろう?新人四人分のデスクワークを片付けないといけないんだ。邪魔しないでくれ。いい迷惑だ」

フェイトは返す言葉がなかった。雪鷹には悪いが、適当な理由で誤魔化しているものだとばかり思っていたのだ。雪鷹が新人達の分も引き受けているというのは全く以てフェイトの予想を超えていた。それに、雪鷹の態度は確かに問題があるが、指摘されたように、フェイトの態度にも悪い部分はある。このまま居座るのは流石に躊躇われた。

「もう用件は済んだだろう。邪魔しないでくれないか?」

「あ、その・・・どうしてあの子達の仕事も雪鷹が引き受けてるの?」

フェイトは雪鷹に尋ねた。居座ることは躊躇われたが、このまま何も言わずに出ていくことはしたくなかった。

「ランスター陸士、モンディアル陸士、ルシエ陸士の三名を使えな

くしたのは俺だからな。それに、ナカジマ陸士に一人に押し付けるのも酷な話だ。だから、俺が引き受けた。こう見えてもそれなりの責任は感じているんでね」

「そっか・・・そうだよね・・・」

そう言ってフェイトは嬉しそうに微笑む。普段の言動から厳しいことばかり言う印象の強い雪鷹だが、途中で投げ出すことは絶対にしない。十年前もそうだった。なのはとフェイトのわがままに、嫌そうな顔をしながらも、手を抜くことなく最期まで付き合ってくれた。情報一課時代の話を聞いて、この十年で雪鷹が別人になってしまったのではないか、と不安に思っていたがあの頃のままの雪鷹がまだ残っていることがひどく嬉しかった。

「なにがおかしい？」

「雪鷹はやっぱりあの頃と変わってないなって思って・・・ちょっとだけ、ううん、すごく嬉しかったんだ」

フェイトはほんのりと顔を赤らめながら笑う。

「この十年で変わってしまった所はある。でも、変わっていない所も確かにある・・・私はそれが、すごく嬉しい」

「買い被り過ぎだ。俺は所詮、日陰の人間。おまえみたいな表舞台で活躍する人間には縁がない・・・もういいだろう？仕事の邪魔だ」

雪鷹は自嘲気味にため息を零す。変わっていない部分は確かにある。それは雪鷹も否定はしないが、変わってしまったものが大き過ぎた。あの頃のようにはいられない。いられないのだ。それを誰よりも自

覚しているだけにフェイトの言葉は救いであり、そして、残酷なものだった。フェイトは真面目な表情に戻ると真っ直ぐに雪鷹を見据えた。強い意志の宿った紅の双眸。雰囲気が引き締まり、流石に雪鷹も無視できなくなったのかフェイトの方に体を正して、その視線を受け止める。

「私は理由もよく知らないで雪鷹を殴ったり、ひどいことを言ったりした・・・雪鷹がそんなことするような人じゃないって知ってるのに信じきれなくて疑った。そして、雪鷹を傷つけた・・・ごめんなさい」

そう言ってフェイトは雪鷹に頭を下げる。雪鷹はそれを見て軽くため息を零す。

「さっきも言ったがそれに関しての謝罪は要らない。俺はそのことでお前を責めるつもりもないし、咎めることもない。お前が求めているのは俺の許しじゃなくておまえ自身の許しだろう?そんな自己満足に付き合ってやるほど俺は優しくない」

「・・・そう、かもしれないね。やっぱり敵わないな、雪鷹には」

そう言ってフェイトは笑う。溢れる涙を見せないように懸命に、無理矢理に。しかし、堪え切れなくなり、顔を両手に埋める。苦しげな嗚咽が漏れてくる。

「前にも言ったな。言葉で教えられたことはすぐに忘れる。悩んで、迷って、自分の血を流して考え抜いたことしか身に付かない・・・俺がフェイトを許したって意味はない。後悔してるならその分苦しめ、悩め、迷え、そして考えろ。どうして苦しいのか、どうすれば自分を許せるのか。そして、自分自身を許せるくらい強くなれ。俺

から言えるのはそれだけだ」

そう言って雪鷹はフェイトの頭にポンと手を乗せた。十年前と同じ優しくて、あたたかくて、大きな手のひらだった。

「やっぱり・・・変わらないね、雪鷹は。あの頃のままだ。厳しくて、でも、優しくて・・・よかった」

フェイトは顔を上げて嬉しそうに微笑む。涙で濡れた顔はとても見られたものではないはずだ。しかし、フェイトは無理矢理微笑んだ。そうすることでしか今の感情を表現できなかった。笑顔に見えなくてもいい。どんな風に見えてもよかった。それでも、この気持ちを雪鷹に伝えたかったのだ。言葉にできない、この気持ちを雪鷹に届けたかった。

「さて・・・そろそろ出ていってくれないか？さっきもいったが仕事が溜まっていてかなり忙しいんだ」

「そ、そうだね。ごめんね、邪魔して・・・」

フェイトは一瞬残念そうな表情を浮かべたがすぐに俯いて雪鷹の部屋を後にする。一人きりになった雪鷹は天井を見上げて、盛大にため息を零した。

「違うよ、フェイト。もう、変わってしまったんだ。俺はもうお前達の隣に立っていい人間じゃない・・・人を欺いて、傷つけて、挙げ句殺して・・・俺はそんな人間なんだ」

雪鷹は自虐するように一人呟く。まるで許しを乞うかの如く、ゆっくりと目を閉じていく。その姿はまるで懺悔のようで、雪鷹に似つ

かわしくなく、それなのに、絵になるくらい美しかった。

「でも、決めたんだ。たとえ、外道と蔑まれても、それでも守りたい人がいるから。その為なら、誇りも意地も、全部捨てると・・・・もう、決めたんだよ」

影を帯びてなお雪鷹は揺るがない。閉じていた瞳を開く。そこに宿った光は固く、強い。

「許してくれとは言わないよ、フェイト」

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　２１．５

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　２１．５

目を覚ますとそこに世界が広がっていた。一切の色彩の消えてしまった純白の世界。夏の雲よりも、冬の雪よりも純粋な混じり気のない、神々しいまで白がティアナを包み込む。どこまで見通せるほどに世界は広がっているというのに、胸が締め付けられるように苦しい。

――ここは・・・？もしかして、あたし・・・死んだの？

死後の世界がどのようなものなのかティアナは知らないが、初めて見るこの白い世界があるいはそうなのかもしれないと思えなくもない。それほどにこの世界のティアナにとって初めて見るものだった。不意に頭が鈍く痛み始め、記憶が鮮明に蘇る。白い空間が記憶で満たされていく。

ホテル・アグスタでのミスショット。
精密射撃の自主練習。
兄を侮辱した雪鷹の言葉。

急に胸の奥が激しく疼き始める。灼けるように熱く、痛い。溢れ出てくる激情と共に記憶は更に広がっていく。世界が染めあがっていく。

スバルとのコンビネーション。
なのはの冷たい視線。
ティアナを呑み込んだ桜色の閃光。

刺すような激しい痛みまでが記憶と共に蘇ってきた。あまりの激痛に意識が飛びそうになる。しかし、意識が途切れることはなかった。ティアナ自身、痛みに耐えかねて何度も意識を手放そうとしたが手放すことはできなかった。悶絶の一言で片づけてしまうにはあまりに残酷なその痛みにティアナは声にならない悲鳴をあげる。朦朧とする意識の中でティアナは次に出てくるはずの記憶を思いだして絶望した。

ティアナの体に突き刺さる殺気。
浴びせられる罵声
わきあがる憎悪と怒り
目で追うことさえ敵わない素早い連撃。

駆け抜ける痛みに意識が飛びそうになる。しかし、意識が途絶えることはない。この世界の支配する何かがティアナにそれを許さない。

振りかざした刃は容易く避けられる。
弾丸も躱される。
何一つ届かない。
ティアナの努力の全てが通じない。

――所詮、凡人は天才には敵わないってこと、か・・・

込み上げてくるのはむなしさと諦めにも似た無情感。全力で否定する、といった言葉の通り、雪鷹はティアナの努力を全力で否定した。今まで積み上げてきた精密射撃も、スバルに教えてもらったクロスレンジも通じなかった。しかも、雪鷹は魔法を一切使っていないのだ。バリアジャケットさえ使わなかった。屈辱と思うことすら馬鹿馬鹿しく思えるくらい圧倒的な実力差。それを見せつけられた。

――まぁ、もういいや・・・どうせ、死んじゃったんだし

真っ白な世界は既に記憶に埋め尽くされてしまった。無色の世界は既に極彩色に満たされていた。その中にティアナは懐かしい人を見つけた。ティアナの愛兄、ティーダ・ランスターだ。亡くなって既に六年が経つその兄はどこか悲しげな目をしてティアナを見つめていた。ティアナは声を失った。

――兄さん・・・

写真では毎日のように見ていた兄の姿。もう一度触れるのなら全てを投げ出してもいいとさえ思っていた兄が今、ティアナの目の前にいるのだ。嬉しかった。ただ、純粋に嬉しかった。何故ここに死んでしまった兄がいるのかを考えるよりも先に体が、本能が駆け寄ろうとする。しかし、体が動かない。まるでこの世界に縛り付けられてしまったかのように、指一本動かすことができなかった。兄の影が揺蕩い、透けて、霞となっていく。

――待って、兄さんっ!!

力を振り絞る。全身に力を込め、必死に足を動かそうとする。しかし、微動だにしなかった。まるで世界がティアナを拒んでいるかのように、ティアナを否定する。

――兄さんっ!!

声を上げて叫ぶ。魂が吼える。しかし、何も変わらない。指一つ動かすことさえ今のティアナには叶わなかった。兄の姿が消えていく。ティアナの目の前で消えていく。悲しげな表情でティアナを見つめ

ていた兄は静かに、はっきりと首を横に振り、六年前に見せたのと同じ優しい笑顔を浮かべ、そして、消えた。

――いやぁぁぁあああっ！！

ティアナの絶叫。世界を震わせる魂の咆哮。苦渋に満ちた過去に彩られた世界に罅が入る。ティアナの叫びに呼応して世界が崩壊していく。極彩色の世界の欠片が砕けて光へとその姿を変えていく。世界は再び、純白に戻ろうとしていた。粉々になった世界の欠片。記憶の欠片。辛く、悲しい、苦しみの欠片。その全てが白い光へと変っていく。そして、その全ては光となったその瞬間、世界が爆ぜた。

22『優しさと厳しさ』（前書き）

どうしても叶えたい夢があった
叶えなければいけない夢があった
だから、あたしは管理局に入った
その為だけにこれまで頑張ってきた
夢を叶えることだけを目指していた

だけど、あたしのしてきたことは…

選んできた道は全部、無駄だった

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　始まります

22『優しさと厳しさ』

22『優しさと厳しさ』

「あれ？・・・」

ティアナの目の前に広がっていたのは見慣れた薄紫色の無機質の天井だった。体の節々が痛むが起き上がれないほどの痛みではない。上半身だけを起こす。頭がまだぼんやりとしているせいか、ひどく重い。何をするにも億劫な気持だった。

「・・・あれは夢だったの？」

既におぼろげになりかえている記憶を手繰り寄せながらティアナは呟く。当然、答えなどあるはずがない。しかし、辺りを見渡してみればここが隊舎の医務室で、手足も自由に動かせることがわかる。紛れもなく、ここは現実だった。しかし、夢とするにはあまりにも生々しい夢だ。目の前で大切な人が消えていくのをただ黙って見ていることしかできない無力感。夢だとわかっても、やはり、気分が悪い。

「あら、ティアナ、起きた？」

医務室の扉が開き、この部屋の主シャマルが入って来た。

「シャマル先生・・・えーと、その・・・」

「ここは医務室よ。昼間の模擬戦でユキタカ曹長に撃墜されちゃっ

たのは覚えてる？」

シャマルが簡単に現状を説明するとティアナは小さく頷く。ついさきほど、夢の中でその記憶を見ていたのだ。忘れるはずがない。なのはの魔力弾で失神寸前まで追い詰められ、朦朧とする意識の中で雪鷹から浴び去られた暴言。そして、肉体への物理的制裁。思い出すのも億劫になる。

「あれでいて雪鷹も加減してくれていたみたいだから怪我っていっても軽い打撲くらいだから、何日か安静にしていればすぐに動けるようになるわ。どこか痛い所はある？」

「い、いえ・・・」

全身がまだ痛むが動けないほどの痛みではない。以前の模擬戦でもこの程度のダメージなら平気で動いていた、問題などあるはずもなかった。ふとティアナは部屋に置かれた時計に目をやった。

「九時過ぎっ！？えっ、夜！？」

ティアナの記憶が正しければ模擬戦を行ったのは午前中のはずだった。しかし実際に窓の外に見える光景はどう考えても夜だ。つまり、ティアナは半日以上眠っていたことになるのだ。目の前の現実は否定できないものだが、それでもティアナは信じることができなかった。

「すごく熟睡してたわよ。死んでるんじゃないかって思うくらい」

そんなティアナの驚く様子が微笑ましかったのか、シャマルは優しい、しかし、真面目な顔をしてティアナに言った。

「最近、ほとんど寝てなかったでしょう？溜まっていた疲れがまとめてきたのよ」

そう言われると心当たりがないこともない。というよりも心当たりがあり過ぎた。毎晩、日付が変わるくらいまでの自主練習。そして、日が昇るよりも先に起きて、スバルとのコンビネーションの練習。どう考えても無茶な練習だった。しかし、辛いと思ったことは一度もなかった。強くなる為の訓練なのだ。辛いはずがなかった。しかし、その努力の全ては、積み上げてきた全ては、砕かれ、否定されたのだ。

・＊・＊・＊・

「なのは？」

訓練場でシミュレーターの調整を行っていたなのはを呼ぶフェイトの声。薄暗い闇夜の中をきらきらと金の髪が舞っていた。

「フェイトちゃん・・・」

振り返ったなのはの表情がどこか暗い。街灯の灯りしかないことを差し引いてもその表情にはなのは生来の明るさが感じられなかった。

「シミュレーションの調整？お疲れ様です、高町教導官」

「午後も訓練できなかったし、時間ができたからちょっとね。もうすぐ終わるよ」

そう言ってなのはがキーボードを操作するとなのはの前に浮かんでいたモニターが消えた。

「おまたせ」

仕事を切り上げたなのははフェイトに駆け寄る。そして、二人は隊舎へと歩き始めた。

「そういえばね、さっきティアナが目を覚ましたよ。大きな怪我もないから明日か明後日には訓練に復帰できると思うよ。なのはに謝りたいって言ってたんだけど、なのはは訓練場だから明日、朝一で話したらって伝えちゃったんだけど・・・」

「ありがとう。でも、ごめんね・・・監督不行き届きで、フェイトちゃんやライトニングの二人、雪鷹まで巻き込んじゃって・・・」

フェイトの言葉になのはは申し訳なさそうに俯く。雪鷹が乱入した理由も行為も許されるものではなかったが、だからといって理解できない理由というわけでもなかった。雪鷹の行為云々についてもなのはが二人をしっかりと教導していれば未然に防げたことのなのだ。あの直後は雪鷹を一方的に責めてしまったが、今回の件は雪鷹だけの責任ではない。

「ティアナ、どんな感じだった?」

「やっぱり、まだちょっとご機嫌斜めだったかな・・・」

「まぁ、ティアナに関しては明日にでもちゃんと話すよ、フォワードの皆にも。雪鷹はどうだった？まだ、怒ってた？」

不安そうな、というよりもどこか怯えた様子のなのはにフェイトは心配ないよ、と首を横に振った。あれでいて雪鷹はなのはやフェイトよりも年上なのだ。それ相応の分別は身につけている。

「あのあと雪鷹の部屋に行ったんだけど、気にしてる様子はなかったよ。むしろ、邪魔しちゃた責任は自覚してるみたいだったかな。でも、ティアナに謝るってことはたぶんないと思うし、これから二人がこれからどうなるのかがちょっと心配」

「だね」

フェイトがそう言うと二人は顔を見合わせ揃ってため息を零した。ティアナと雪鷹の間に生じた亀裂はかなり深いはずだ。ティアナにはティアナの、雪鷹には雪鷹の意地があり、理由があり、信念がある。だからこそ、複雑で深い。だからこそ、お互いに譲らないだろう。

「雪鷹っていつもは冷静なんだけど、こういう時って何があっても自分の意見を曲げないから・・・」

フェイトの言葉になのはは苦笑する。呼び方一つの為に模擬戦をすることさえ躊躇わないような人間なのだ。その頑固は天下一品であると言っていい。ティアナに雪鷹を曲げられることができるとは思えないし、なのはやフェイトにもできる気がしない。

「為るように為る・・・なんて楽観視できたらいいんだけどね」

もちろん、そんなことがありえないことはなのはも理解している。しかし、どうしようもないのだ。どちらかに無理強いをして謝らせることなら、あるいは可能かもしれないがそれで解決するはずもない。

「とりあえず、雪鷹には訓練から外れてもらって本来のロングアーチの仕事に戻ってもらうことにしたの。デスクワークもヴィータちゃんが面倒みてくれるって・・・二人を引き離しても何も解決しないってことはわかってるけど、今はこうするしか思いつかなくて・・・」

なのはの対応は問題を先送りしているだけでしかない。しかし、他に考えが浮かばないのはフェイトも同じだ。時間が解決してくれる類の問題ならば放っておくのも一つの手であるが、生憎これはその類の問題ではない。

「でも、今はそれで様子を見るしかないよ・・・下手に動いて二人の関係を悪化させたくないし・・・」

自己弁護のようにも聞こえるフェイトの言葉。結局、今の二人にはそれしかできないのだ。出来ること以上のことはできない。そんな憂鬱な気分を一掃するような警戒音が突如、鳴り響いた。第一級警戒態勢。即座に思考を切り替えた二人はすぐに司令部へと向かった。

・＊・＊・＊・

「東部海上にガジェットドローン?型が出現しました。機体数は１２・・・１６・・・２０・・・まだ増えます」

海上を旋回する航空型のガジェットの群れがモニターに映し出される。

「付近にレリックの反応はありませんが・・・これ、機体速度が今までよりもだいぶ、いえかなり速くなってます」

「場所はなんにもない海上。レリックの反応もなければ海上施設も船もない・・・」

モニターを睨みつけながらはやては指揮官として考えを巡らせる。付近にロストロギアの反応も見られないことからレリックと誤認して出てきたという線は薄い。発見されてからその場から動く気配も見られない。

「撃ち落としに来いと誘っているような・・・」

「そやね・・・」

はやての副官、グリフィスの言葉にはやては頷く。

「テスタロッサ・ハラオウン執務官、どう見る?」

「犯人がスカリエッティなら此方の動きとか航空戦力を探りたいんだと思う」

はやてに尋ねられたフェイトは執務官としての意見を述べる。ガジェットの数は多いが戦力として脅威になるほどでもない。機体性能

が向上しているとは六課の航空戦力なら十二分に対応できるレベルだ。レリックが目的でないとするなら、戦力把握が目的と考えるのが妥当な所だ。はやても同様の考えだったようで、それに頷く。

「こっちはこの状況なら超長距離攻撃に放り込めば済むわけやし・・・」

「一撃でクリアですよ」

リインがはやての横から飛び出してきて元気いっぱいに答える。

「でも、だからこそ奥の手は見せないほうがいいかなって」

敵の狙い六課の戦力把握だというのなら手の内は見せないほうがいい。必然的に結論はそう収まってくる。

「実際、この程度のことで隊長達のリミッター解除いうわけにもいかへんしな・・・」

リミッターのついている今の隊長達では超長距離攻撃はできない。敵戦力そのものは今の状態でも対応でき、一刻を争うほど切羽詰まった状態でもない。少数精鋭で一機ずつ確実に落としていけばそれで片が付く。リミッター解除には回数制限もある。使わないで済むのならそれにこしたことはない。

「高町教導官はどうやろ？」

「こっちの戦力調査が目的ならなるべく新しい情報を出さずに今まで同じやり方で片付けちゃう、かな」

なのはも二人と同じ意見だった。

「ほな、それでいこか。今回は両分隊の隊長、副隊長に出撃してもろて・・・」

「戦力調査が目的と決め付けるには早すぎないか？あのガジェットには陽動の可能性もある。隊長陣が総出の隙をついて、というのが狙いだったらどうする？」

「それは・・・そやね」

雪鷹の指摘にはやては頷く。隊長陣は六課の戦力の要といってもいい。それを欠いた状況で別の場所で事件が発生した場合、新人達だけでは対処しきれないかもしれない。

「ほな、こっちの航空型についてはスターズの隊長、副隊長の両名でなんとかしよか・・・ユキタカ曹長、今回も現場管制頼むで」

「・・・人遣いが荒い隊長様だ」

雪鷹はため息交じりに愚痴る。はやての言う現場管制とは純粋な意味での現場管制とは少し異なる。現場管制は後方支援の人間が行うものであり、その意味ではロングアーチに属している雪鷹がその任に就くのは妥当だ。戦闘行動には一切関わることなく、後方支援に徹する。それが本来の役目だ。しかし、雪鷹は違う。雪鷹にとって現場管制という仕事はおまけでしかない。はやての中で雪鷹は既に重要な遊撃戦力の一つなのだ。現場管制というのはロングアーチの人間である雪鷹を現場に放り込む為の名目でしかない。

「そんなこといわんといてな。人聞き悪いやろ。ほな、頑張ってな、

高町一尉、ユキタカ曹長」

・＊・＊・＊・

六課のヘリポートの前線メンバーが集結する。その中にはエリオとキャロ、そして目覚めて間もないティアナの姿があった。

「今回は空戦だから出撃は私とヴィータ副隊長、雪鷹曹長の三人」

「みんなはロビーで出動待機ね。指揮は私がとるから」

「「「はい」」」

なのはとフェイトの言葉に新人三人が元気に返事をする。それに一瞬遅れてティアナが小さく返事する。目が覚めたばかりで調子が優れていない、というのもあるだろうが一番の理由はティアナの険しい目つきを見れば一目瞭然だった。雪鷹を睨みつけるその双眸は敵意が剥き出しで、上官に対する態度ではない。

「あぁ、それからティアナ・・・ティアナは出動待機から外れておこうか」

「えっ・・・」

なのはの後ろでフェイトとヴィータもそれに同意するように頷く。雪鷹に至ってはティアナを見ようとさえしない。まるで眼中にない

とでも言わんばかりの態度だ。ティアナは信じられないと言った表情でなのはを見た。しかし、その目はティアナを真っ直ぐに見詰めたまま一分たりとも揺るがない。

「その方がいいな。そうしとけ」

「今夜は体調も魔力もベストじゃないだろうし・・・」

それは極めて妥当な理由だった。普段のティアナなら素直に受け入れられる理由のはずだった。しかし、今のティアナにとってそんな理由などどうでもよかった。ただ、目の前の理不尽（げんじつ）を理解できなくて、受け入れられなかった。

「・・・言うことを聞かない奴は、使えないってことですか・・・」

恨み言のようにも聞こえるティアナの言葉になのはの口から呆れたようなため息が漏れた。

「はぁ・・・自分で言っててわからない？あたりまえのことだよ、それ」

「現場での指示や命令は聞いてます。教導だって、ちゃんとサボらずやってます。それ以外の場所での努力まで教えられたとおりじゃないとダメなんですかっ！？」

ティアナが涙を滲ませながらなのはに詰め寄る。

「私はなのはさんやユキタカ曹長みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャロみたいな稀少技能（レアスキル）もない。少しくらい無茶したって、死ぬ気でやらなきゃ強くなんてなれないじ

ゃないですかっ！？」

叫ぶティアナの襟をシグナムが掴む。そのまま力づくで振り向かせると拳を振りかぶる。ティアナは驚いたまま固まる。殴られる。それを理解した瞬間、目を瞑る、しかし、いつまで経っても痛みはこない。おそるおそる目を開くとシグナムの拳がティアナの目の前で止められていた。

「ユキタカ・・・」

シグナムは己の拳を片手で受け止めた人間、雪鷹をきつく睨みつけた。一方の雪鷹はわずらわしそうな顔をシグナムに向けてからティアナの方を向いた。シグナムの拳を受け止めたというのにその表情はまるで変化が見られない。それがかえって不気味でさえある。その場の全員が雪鷹に注目している。ヘリのローターの回転音だけが無情に響く。

「何故、止めた、なんて無粋なことは聞かないでください、シグナム二尉。ランスター陸士、俺達、管理局員の任務はミッドの安全と平和を守ることだ。強くなることじゃない。何故、２４時間勤務なのかその理由を考えたことがあるかい？いつ出動しても大丈夫なように考えて自主練習してきたかい？そんなこと、一度も考えたことないだろう？だから、君も、君の兄も三流以下の屑なんだよ。少し、頭を冷やせ。他人に考えろ、と言われたら少しは考えてみろ。それもできないほど君は屑ではないだろう。これ以上、私を失望させないでくれ」

雪鷹は決して大きな声を出したわけではない。それなのに、その声は不思議とよく響いた。誰もがその声を聞いていた。その表情は迫力があるというよりはむしろ女性を口説いているかのように優雅で

魅力的でさえある。言葉と表情がまるで一致していない。それがひどく不気味で、恐ろしい。

「フェイト、悪いが俺の代りに現場に行ってくれ」

否とは言わせない言葉だった。フェイトは頷くしかない。

「ヴァイス陸曹、もう行けるか？」

「乗り込んでいただけりゃあ、すぐにでも」

言外に早く行け、と雪鷹が命じる。その意を汲んだなのはとフェイトはすぐにヘリに乗り込む。不満そうな顔を浮かべていたヴィータも諦めてヘリに乗り込むとすぐにハッチが閉じて、ヘリが離陸した。最新鋭のヘリは瞬く間に見えなくなっていく。ヘリを見送った雪鷹にスバルは一瞬躊躇うような表情を見せながらも、はっきりとした声で言った。

「あの、ユキタカ曹長、シグナム副隊長・・・命令違反が絶対ダメだし、さっきのティアの物言いとか、それを止められなかったあたしは確かにダメだったと思います。だけど、自分なりに強くなろうとするのとか、きつい状況でもなんとかしようって頑張るのってそんなにいけないことなんでしょうかっ！！」

スバルの肩が小さく震える。

「自分なりの努力とか、そういうこともやっちゃいけないんでしょうか・・・なのはさんやユキタカ曹長の言いたいことはわかります。でも、あたしやティアナのしてきたことってそんなに間違っていたことなんですか」

「自主練習？限界まで自分を追い詰めて、挙句の果てに緊急出動にも出られないようになって・・・それのどこが自主練習だ？」

スバルとティアナの努力を全否定する雪鷹の言葉。しかし、スバルは反論できなかった。今回に関しては悔しいが雪鷹が正しかった。緊急出動に出られなければ、練習の意味はない。

「勘違いのないように言っておくが、俺は二人の努力を否定しているわけでもないし、自主練習を否定してるわけじゃないぞ？ランスター陸士のしてきたあの行為を自主練習とは呼ばない、そういう意味だ」

雪鷹は容赦のない言葉を更に続ける。

「努力というのなら、お前達が一番にするべきことはいつ出動があっても大丈夫なように、常に自分をベストの状態に保つ努力だ。その上で、練習するというのならおおいに結構だ。どんどんやればいい。だが、ベストを保つ努力もしないで、ただ我武者羅に突き進んで、強くなる為に努力しました。どうして認めてくれないんですかって言い張るなら、今すぐ管理局を辞めろ、邪魔だ」

ティアナは怒ることさえ忘れた。無意識のうちに右手がデバイスに伸びる。しかし、それよりも先に右手を雪鷹が掴み、捻り上げた。ティアナの表情が苦痛に歪む。

「本当に何も聞いてないんだな・・・自分自身のコントロールをしろ、そう言っただろう？意地を張るのが悪い、とまでは言わないが、その意地の一割くらいは管理局員としての自覚を持てよ。それができないなら辞めろ。考えも変えず、管理局も辞める気がないのなら・

・・頼む、死んでくれ」

死んでくれ。その言葉を言った瞬間、その場の空気が凍りついた。指一つ動かすことさえ許さない研ぎ澄まされた殺気。息をするだけで肺の奥が凍りつくように痛む。雪鷹の放つ殺意は明らかにティアナに向けられたもので、それを隠そうとさえしていなかった。午前中の模擬戦の時など比較にならないほど、剥き出しの殺意は容赦なくティアナの心を穿ち、圧し折った。

「い、いや・・・ゃめて・・・」

声にすらならない声。しかし、震えるティアナを見ればどれほどの恐怖を味わっているのか一目瞭然だった。抗う気さえ起こさせない、圧倒的で絶対的な、殺すという雪鷹の意志。まだ心も体も成長途中のティアナに受け止めきれるものではない。あのシグナムでさえ、拳を硬く握りしめ、その場から動けない。漏れ出した殺気が雪鷹と正面から向かい合う気を挫く。

「今まで、何度も忠告したはずだ。お前は決して弱くない。だからこそ、その中途半端な力は他人を傷つける。管理局員として守らなければならない人達を傷つける。隣に立つ仲間を傷つける。そして、お前自身を傷つける。そうなるくらいなら、いっそ今死んでくれ。それが世界の為だ」

「ふざけるなっ！！」

雪鷹の殺気を吹き飛ばすほどの怒声。誰もが驚きの目でその声の主、スバルに目をやった。

「ティアは少し間違ったかもしれない・・・でも、だからって、殺

すだなんて絶対に間違ってるっ!!ティアは夢の為に必死に頑張ったんです・・・どうしてそれを認めてくれないんですかっ!!」

「頑張った?ふざけるなよ・・・そいつがしたことは立派な職務放棄だ。その間違いを認めないのはどこのどいつだ?俺は何度も忠告した。それを受け入れようとせず、変わろうとしなかったのは誰だ?管理局の仕事は子供の遊びじゃないんだ・・・管理世界の平和と安全を守るのが俺達の仕事だ。それさえできない人間が組織にいる価値があるのか?」

雪鷹は冷たく言い放った。認識がまるで違うのだ。スバルは返す言葉もなく黙りこんでしまう。

「俺達はボランティアをしてるわけじゃない。子供だからいつまでもわがままが許されると思うなよ?一晩ゆっくり考えろ・・・返事は明日、聞かせてもらう」

雪鷹はそう言うとティアナの腕を放し、隊舎の中へと戻ってしまった。

22『優しさと厳しさ』（後書き）

―自分の中に譲れないものがあるのならその為に努力するのは当然のことだろう？

――弱い私たちは努力して当たり前ってことですか？

―もしかして、俺が何の努力もしないで今の強さだと思っているのか？

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
２３『たゆたうこころ』

自分だけが頑張っている、なんて考えがそもそも間違っているんだ。

Intermission 22.1

Intermission 22.1

その部屋は薄暗く、灯りも足元を照らすだけの小さなものだった。
スーツの上から白衣を身に纏った男、ジェイル・スカリエッティは大型モニターを見つめ、愉悦に浸った笑みを浮かべながらモニターを見つめていた。映し出されているのは海上を飛び交っている航空型のガジェット群だ。速度やエネルギー残量など細かな数値まで表示されている。

「ふむ・・・まずまずといったところか。悪くはない」

改良したガジェットの初飛行にスカリエッティは満足そうに笑う。
その隅に小さなモニターが開き、一人の少女の姿が映し出された。

「おや、これは珍しい。君から連絡をくれるとは嬉しいじゃないか。ゼストとアギトはどうしたね？」

ルーテシアから連絡がくることも珍しいが、いつもは傍にいるはずの二人の姿が見えないことの方がその数倍は珍しい。武骨な印象が強いゼストだが、あれでいて面倒見はいい。アギトもゼストと同じくらいルーテシアを大切にしている。その二人がルーテシアを一人にすることなどそうあるものではない。そうはいってもルーテシアが見かけどおりのか弱い少女でないことはスカリエッティもよく理解しているので特別不安に思う所などない。

「今、別行動。遠くの空にドクターの玩具（オモチャ）が飛んでるみたいだけど」

玩具とは言うまでもなく海上を旋回中のガジェットのことである。今回の改良型ガジェットははっきりいって並みの空戦魔導師よりも速度は早い。機動性だけならエース級に次ぐだろう。機動性の追求の為に余計な兵装は全て取り外しているので、もちろん、その分、火力が落ちてしまっている。実戦用の機体はやや遅くなるだろうが、それでも一般的な空戦魔導師では苦戦するレベルには達し得る。

「直に綺麗な花火が見れるはずだよ」

それは皮肉ではなく本心だ。ガジェット群を出した一番の目的はその性能試験。遠からず管理局に見つかる。元々そのつもりだ。火力の低い、ただ速いだけのガジェットの苦戦するほど管理局は弱くはない。自分の技術に絶対の自信を持つスカリエッティであるが、管理局を過小評価するほど慢心してもいない。

「レリック？」

「だったら、君に真っ先に報告しているさ。私の玩具（オモチャ）の動作テストなんだよ。破壊されるまでのデータが欲しくてね」

更なる改良の為に、とスカリエッティは心の中で付け加える。

「壊されちゃうの？」

「私はあんなガジェット（鉄屑）に直接戦力は期待してないんだよ。私の作品たちがより輝く為に囮（デコイ）として使うガラクタさ」

ガジェットに求めているのは一騎当千の強さではない。大量生産、大量運用が可能にする数の暴力だ。管理局の魔導師達をある程度疲

弊させられたならそれで十分なのだ。それ以上の成果を期待してはいない。

「そう・・・レリックじゃないなら私に関係ないけど。でも、頑張ってね、ドクター」

少女の声は真実興味がなさそうで、抑揚がまるでない。感情の抜け落ちた平坦な声を聞いてスカリエッティは嬉しそうに笑う。

「あぁ、ありがとう、優しいルーテシア」

「じゃあ、ごきげんよう」

「ふふふ、私の作品はやはりいい出来だな」

スカリエッティは満足そうに一人頷くとガジェットの方へ視線を移した。

「頑張る、か・・・そんな無駄なこと、私はしないよ」

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　２２．１（後書き）

どうも、月兎です。日頃は『魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ』をご愛読頂きありがとうございます。

今回は久しぶりに雑談をば。

そういえばスカリエッティが登場してなくね？ということでスカリエッティ初登場？なお話です。

スカリエッティを出す為だけのお話なんで特に説明することもないのですが、最後のスカリエッティの台詞についての少しだけ補足です。

何かしたいことややらなければならないことがあるならその為に力を尽くすのは当然のこと、というのが作中でのスカリエッティの考えです。だから、スカリエッティにとってガジェットを開発・改良することは呼吸するのと同じくらい当たり前のことで、自然なことなので頑張るなんて必要がない、という意味です。

こうすればいい、とわかっているのならスカリエッティにとってそれはするべきことであって、頑張るとは別物ということですね。

どうすればいいのかわからないのにとりあえず突っ走ってみる。スカリエッティにとってこれほど愚かなことはないのです。わからないならまず、何をすればいいのかを理解する。そして、動く。この作品のスカリエッティの思考はこんな感じです。

ちょっと強引ですし、動いてみて初めてわかることもありますがスバルやティアナ、新人達との対比も兼ねてこんな設定にしてみました。

ちなみに、雪鷹の思考も基本的にスカリエッティに近いです。努力云々については色々厳しいことを言っていますから仕事に関してはかなり事務的というか機械的な考えの持ち主です。ただし、雪鷹も人間なのでそれなりに感情が入ってきますから、冷徹な面はあってもスカリエッティほど機械的ではありませんけど。

話は変わりますが『魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ』のＰＶが８０万アクセスを超え、ユニークも７７００人を突破しました。これも読者の皆さまの支えあってこそです。まだまだ至らぬ所のある作者ではありますが、これからも誠心誠意書き進めていきますので、この拙作をこれからもよろしくお願い申し上げます。

それでは、今日はこのへんで。ではでは

23『たゆたうこころ』（前書き）

何が正しいとか、何が間違っているとか
そんなことはわからない

わからないこそ、悩む

悩んで、考えて、迷って、傷ついて
そしてまた、悩んで…

それは無駄な時間なのかもしれない
意味のある時間なのかもしれない

わからない

けど、その時間がなければ今の自分はいなかった。

悩み、苦しんだあの時間が魂を磨いて、進むべき道を示してくれた

それだけは、わかる

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります

☆イメージソング☆

『明日咲く花』　ｂｙ奥華子

23『たゆたうこころ』

23『たゆたうこころ』

あれから一行は震えるティアナに付き添って医務室まで送り届けると新人三人とシグナムは隊舎のロビーで一息ついていた。

「あの・・・シグナム副隊長、ティアナは・・・」

「心配する気持ちはわかるがシャマルに任せておけ。一緒にいてどうにかなるものでもなかろう?」

シグナムの言葉にスバルは頷くしかない。餅は餅屋、というわけではないがスバルにはどうしようもないのだ。医務官であるシャマルに任せるしかない。

「ティアさん、これからどうなるんですか?」

「処分という意味でなら心配しなくてもいい。あったとしてもそれほど重いものにはないだろう。だが・・・精神的に立ち直れないとなると少々厳しいかもしれないな・・・」

ティアナの怯え、震える様子を思い返したシグナムは苦い表情を浮かべる。これまで幾多の死線をくぐりぬけてきたシグナムでさえ、圧倒するほどの凄まじい殺気。理屈では説明できない、本能に直接突き刺さる恐怖。まだ精神的に未成熟なティアナが直に浴びせられて耐えられるものではない。

「そんな・・・」

エリオとキャロの顔が悲しみに歪む。

「ユキタカさんの言ってることはわかります。ティアさんにも悪いところはありました。でも、あんな乱暴なやり方間違ってますっ！！ティアさん、すごくがんばって練習してたのに、それなのに・・・」

「そうです。正しいことを言ってるかもしれない、でも・・・」

二人もまたティアナの努力を知っている。それだけに雪鷹の言葉を理解しつつも、ティアナに対する態度がどうしても許せなかった。しかし、シグナムは違った。一瞬躊躇うように視線を二人から逸らしたが、覚悟を決めて重い口を開く。

「あの方法が是だとは私も思わないが、言った中身だけに限れば私もユキタカと同意見だ。頑張ればいい、それで許されると思っているのならそれは間違いだ」

期待を裏切るシグナムの言葉。厳しいながらも味方だと思っていたシグナムの予想外の言葉に三人は絶望的な表情を浮かべる。

「たとえば、スバルは前の舞台では災害救助任務を担当していたな。私はその方面に携わったことはないがもし、今日の模擬線が、先ほどの出動がその任務だったなら、災害救助に携わった人間として、ティアナは全力を尽くしたと言い切れるか？」

「それは・・・言えない、です」

スバルは悔しそうに奥歯を噛み締めながら答える。全力を尽くしても救えない、助けることのできない命は確かにある。かつて災害担当部隊に所属していたスバルも、もちろんティアナも、そういう場面に遭遇したことはある。目の前で命の消え逝くその儚さは言葉で表せないくらい鮮烈で、忘れられなくて、苦しい。この手にもっと力があれば救えたはずの、届いたはずの、消えてしまった命。後悔しない為に、力が欲しかった。その為の力のはずだった。

「あたしとティアは大切なことを忘れていたんですね・・・」

いつの間にか、忘れてしまっていた。スバルが、ティアナが強さを求めるその理由。もう二度と後悔しないための、助けられるはずだった命を助けるための強さ。誰かに勝つ為の力でなく、誰かを救う為の力。求める強さの先に在るものがスバルにもティアナにも見えていなかったのだ。

「わかればいい。まぁ、それがユキタカの本心なのかどうかは知らんが・・・」

「たぶん、そうなんだと思います。あたし達が強くなることだけに囚われていて、その先が全然見えてなかったから・・・だから、ユキタカ曹長はあんなに怒ったんですね」

スバルは俯く。筋を追って説明されれば雪鷹の行動も受け入れられないものではない。もちろん、あの全てを許せはしなかったが、シグナムの説明の通りなら頷けないものではない。ふと、なのはから教えてもらった言葉が頭を過ぎった。言葉で教えられたことはすぐに忘れる。悩んで、迷って、自分の血を流して考え抜いたことしか身に付かない。その言葉の通りだった。同じことを雪鷹の口から説明されてもきっと反発して、受け入れられなかった。スバルが自ら

の力で気づいたからこそ、素直に受け止めることができたのだ。

「生憎、俺はそこまでお人好しじゃない。的外れというわけではないが、それだと３０点といったところかな。いっただろ、子供の遊びじゃないと。あいつの兄のように他人の巻き添えにあいたくないし、させないためにしただけのことだ。そこまで高尚なことを考えるか」

四人が振り返るとそこには雪鷹が立っていた。顔は相変わらずにしかめ面で視線も鋭いままだったが、その声は先ほどよりも棘がなくなっていた。

「それならそれでもう少し別の言い方もあったと思います」

己の非を認めたとはいえ、雪鷹の全てを許したわけではないスバルは非難めいた口調で雪鷹を見つめた。

「甘やかすつもりはないと以前言ったはずだ。そもそも、大なり小なり自分の中に譲れないものがあるのならその為に努力するのは当然のことだろう？何故、その努力を認めてもらおうとする？お前の努力は褒めてもらう為にしているのではないだろう？」

「弱い私たちは努力して当たり前ってことですか？」

スバルの声が硬くなる。自然と拳に力が入る。それに気づいた雪鷹は呆れたような、哀れむような目でスバルを見た。

「・・・もしかして、俺が何の努力もしないで今の強さだと思っているのか？」

「・・・違うんですか？」

訓練校時代、一対一ではなのは、フェイトに負けなし。機動六課に来てからも、リミッター付きとはいえエース級の実力を持つなのはとヴィータを相手に勝っている。雪鷹が一人で訓練している様子も見られない。その強さはまさに天性のものだ。生まれ持った才能だけでここまできたのだとスバルはそう考えていた。

「モンディアル陸士とルシエ陸士もそう考えていたのか？」

雪鷹の言葉に二人は戸惑いながらもはっきりと頷く。それを見た雪鷹は両手で頭を抱え込み、盛大なため息を零した。

「よくわかった。お互いの認識が根本から違ったようだ・・・なるほど、俺が天才か・・・まったく、どこをどう見たらそんな馬鹿げた考えに行き着くんだ。ナカジマ陸士、ランスター陸士を連れてきてくれ。一から説明しないと通じないようだ」

・＊・＊・＊・

シャマルとスバルに付き添われてティアナが姿を現した。額には脂汗が滲み、顔色もひどい。しかし、話せる程度には落ち着きを取り戻したらしく、笑顔を取り繕ってエリオとキャロに言った。

「だい、じょうぶよ・・・もう、落ち着いたから・・・」

「無理に笑うな。本当に辛い時に辛いって言うことは恥ずべきことではない。今、無理に我慢してもあとがきつくなるだけだぞ?」

シグナムの言葉にティアナは黙って、首を横に振る。

「本当に、大丈夫です・・・もう、なんていうか辛いとかそういうのが気にならないくらいショック受け過ぎてて・・・」

表情は笑っているが、その声はあまりにも痛々しい。感情の一部が麻痺してしまったような壊れた笑顔だ。雪鷹を見た瞬間、わずかに顔が強張ったがティアナにも一分の意地はあるらしく、逃げ出すことなく必死に堪えている。一方の雪鷹はティアナを一瞥しただけで、声一つかけようとしなかった。ティアナがソファに座ったのを確認すると雪鷹は小さくため息を零して新人たちを見つめた。

「どうやら互いの認識に大きな祖語があるらしい。ランスター陸士に一つ尋ねる。君も私をある種の・・・こういう表現はしたくないが、天才だと考えているのか?努力することなく、力を手に入れた恵まれた人間だとそう思っているのか?」

雪鷹の問いにティアナは首を傾げながらも頷く。ティアナには雪鷹の問いの意味が理解できなかった。雪鷹が天才か、と聞かれればその答えは紛れもなく是(イエス)である。なのはに負けない長距離射程(ロングレンジ)とヴィータに伍する近接戦闘(クロスレンジ)を併せ持っているだけでも反則級の強さを誇る。それに加えて、稀少な魔力変換資質である氷結まで持っている。これだけの力を持っている人間が天才以外の何者でもあるはずがない。

「ランスター陸士、俺のどこを見て天才だと思った?氷結の魔力変換資質を持っているからか?ロングもクロスもできるからか?魔導

師ランクが下の人間が上の人間に勝ったからか？それとも、俺が努力しているように見えないからか？」

「・・・全部です」

ティアナは静かに、しかし、はっきりとそう言った。雪鷹は呆れたように肩をすくめた。

「魔力変換資質に関しては先天性のもので、ある意味では才能といってもいい。だが、その代わり、純魔力のコントロールが苦手な者が多く、俺の場合は特にそれがひどい。気付いてないようなら言っておくが、俺の射撃魔法は物質加速型のフリーズランサーとそのバリエーションだけだ。他は一切使えない。」

言われてみればその通りである。これまで何度も雪鷹と模擬戦をしてきたが、魔力弾を撃ったことは一度もなく、全てフリーズランサーとその応用のみだった。しかし、ティアナも他の人間も、得意だから、或いは使い勝手がいいから多用している、という程度の認識しか持っていなかった。速度と貫通力に優れ、ＡＭＦにも対応した氷弾の性能は皆が承知しているのだ。それしかできない、と考えたことは一度もなかった。

「確かに、氷結の魔力変換資質の使い勝手は悪くない。だが、魔力弾は一切使えない。誘導制御弾なんて撃てないし、もちろん砲撃もできない。これのどこが天才だ？」

「魔力弾も使わずになのはさんやヴィータ副隊長に勝てるなんて天才じゃないですか・・・」

魔力弾が使えないことがハンデにならないほどの強さ。それを天か

ら与えられたものでなく何だと言うのか。羨望を越え、妬みに近いティアナの視線。悔しそうに雪鷹を睨みつけるティアナに雪鷹は僅かに苛立った声で言った。

「天才、ね・・・ふざけるのもいい加減にしろ。何故、そこで俺が努力したと考えられない？どうして自分の手に入らないものを才能という言葉で片付ける？お前が俺をどう見ているのか知らないが、天才という言葉で俺の努力を全否定したんだ・・・その自覚があるか？」

その言葉に驚き、ティアナは大きく目を見開いて雪鷹を見た。

「魔導師ランクにしても二人ともリミッターがついていてＡＡとＡ＋の状態だ。俺のランクもＡ＋・・・二人とも強敵に違いないが勝てない相手でもない。それぐらい少し考えれば気付くだろう？」

雪鷹の言う通り、リミッターのかかっているなのはとヴィータ、そして雪鷹の実力はほとんど拮抗していると言っていい。簡単に勝てる相手ではないが、絶対に勝てない相手でもない。

「で、でもユキタカ曹長は訓練らしい訓練なんて・・・」

雪鷹が一人で訓練している様子をティアナは知らない。ティアナだけではない。スバルやエリオ、キャロはもちろん、シグナムやシャマルでさえ見たことがなかった。

「俺の場合は実際に体を動かすことはほとんどしない。頭の中でのシミュレーションの方が圧倒的に多いから努力しているようには見えないというのはわからないでもないが何もしていないわけじゃない」

「でも、たったそれだけで・・・」

「たったそれだけ?随分と安くみられたものだな・・・２４時間、３６５日、一瞬たりとも休むことなく積み重ねてきたシミュレーション。たったそれだけだと言うのならしてみるがいい。日常業務と並列で模擬戦のシミュレーションとその分析、反省をそれぞれ行い、お前たちの教導の時はそれに加えてお前たち四人の行動の分析・・・たったそれだけのことか?」

余談だが、雪鷹の頭の片隅では常に、今この時も、誰かを仮想敵にした模擬戦が行われている。その相手はなのはやフェイトであったり、管理局員百人であったり、ガジェットだったり、過去の犯罪者だったり様々だが、そのシミュレーションが途切れることはない。一戦終われば環境などの設定を変えて徹底的にシミュレーションを繰り返し、その時に備えている。それは既に癖といってもいいほど、雪鷹に染み着いてしまっている。一度のシミュレーションそのものは長くても数分程度で終わってしまうので、単純に計算した一日だけで数百戦の模擬戦をこなしていることになる。その経験が雪鷹の強さと自信の理由であり、根源なのだ。

「つまり、なのはやヴィータに勝てたのはそのおかげだと?」

驚きを隠せないシグナムの言葉に雪鷹は頷く。

「相手のできること、できないこと、得意なこと、苦手なこと・・・その他諸要素を可能な限り分析して、あらゆる状況でシミュレーションを重ねて、確実に勝てる方策を見つける為に力を尽くした自負はある。勝って当然、と慢心するつもりはないが勝てて不思議はないだろう?ランスター陸士、これでもまだ俺を天才だと思うか?」

ティアナは黙って首を横に振った。雪鷹は強い。しかし、それは天から与えられたものではないのだ。ティアナが強くなる為に努力を重ねたように、雪鷹もティアナの知らないところで努力を積み重ねてきたのだ。それを目の当たりにさせられて、ティアナは返す言葉がなかった。

「それに、お前は自分のことを無能のように言っているが、射撃も幻術も胸を張っていいレベルだ。少なくとも、俺よりは上だ。他の三人も、俺より優れている能力はある。それだけは保証する。その上で、ランスター陸士に、それに他の三人にも問うぞ。お前達の求める強さとは何だ？」

雪鷹の問いに四人は押し黙る。

「俺はなのはほどの火力を持たないし、フェイトほどの速さもない。八神二佐ほどの魔力もないし、ヴィータ副隊長みたいな破壊力もない。魔導師ランクは空戦Ａ＋で魔力値に至ってはＢからＡ程度しかない。彼我の戦力差は把握しているつもりだ。だが、並列処理（マルチタスク）と応用力に関しては絶対に負けない。オールレンジに対応できるだけのバリエーションが俺にはある。そのうえではっきり言うぞ？リミッターをはずした隊長陣相手でも俺は負けない戦いをする策と自信はある」

雪鷹は新人四人を、シグナムを、シャマルを見渡しながらはっきりと言い切った。その眼に宿った光は虚勢ではない。本気で勝てると思っている眼だ。その威圧感に四人は言葉を失う。シグナムは不敵な笑みを返すだけで何も言おうとしない。

「もちろん、楽に勝てるとは思っていない。でも、絶対に負けない。

さて、これで俺が天才じゃないということを理解してもらえたか？」

雪鷹の言葉に四人は頷くしかない。見えている部分だけが努力ではない。誰にも見えないところで積み重ねてきた努力が雪鷹の礎にあるのだ。おそらく、ティアナやスバルが管理局に入るよりも前から雪鷹は続けているのだろう。新人たちには想像もつかない時間を積み重ねてきたのだ。ティアナのほんの数日間の自主練習など雪鷹にとってはないに等しいのだろう。

「なのはやフェイトにしてもそうだ。お前たちは天才だというが二人ともお前たち以上に努力してきた。二人だけじゃない・・・エースだ、エリートだって呼ばれる人間は誰だってその程度の努力は当然のようにしている。才能は確かに必要だ。だが、才能だけで生きていけるほど世の中は甘くない。自分だけが頑張っている、なんて考えがそもそも間違っているんだ。それを自覚しろ」

浴びせられる厳しい言葉に皆黙り込む。

「でも、だけど・・・あれしか方法がないんだから仕方ないじゃないですか！！」

「クロスレンジはフロントアタッカーに任ればいいだろう？射撃が専門のお前が無理して前線に出る必要はない・・・何の為のセンターガードだ？お前はお前の役目を果たせ。それも十分に果たせないうちに他に手を出して身に付くはずがないだろう？そんな付け焼刃が何の役に立つ？勘違いしてるようだが、技数が多さは強さじゃない」

雪鷹はティアナを否定する。しかし、その言葉に悪意は感じられない。少なくともティアナを苛めて楽しんでいる愉快犯ではない。雪高はただ、諌めているだけなのだ。雪鷹はティアナやスバルには想

像もつかないような努力を重ねてきた。その上で、ティアナの努力を否定しているのだ。それを理解したスバル達は何も言えなかった。雪鷹には雪鷹の信念があり、スバルのような新人が口を挟める余地などあるはずがなかった。

「あれしか方法がない。そういう馬鹿みたいな台詞は射撃を究めてから言え。射撃に関して専門外の俺から見てもまだ穴だらけで、よく言えば伸び代がある。今の射撃が通じないと思うなら通じる射撃のレベルまで上げろ。安易な方法に逃げたやつに優しくするわけがないだろう?」

安易な方法。スバルとティアナが必死に考えたコンビネーションを雪鷹はその一言で片づけた。しかし、悔しいことだがその言葉の通りだった。射撃が通じないのなら通じるレベルまで高める方法もあったがティアナはそれをしなかった。ティアナが求めていたのは短期間で強くなる方法だ。精密射撃の技能はすぐに上がるものではない。

「だって・・・すぐに強くならないといけないんですよ。精密射撃の技能を上げるのは時間がかかり過ぎる。それじゃダメなんです!」

「・・・その為に多少の無茶は仕方がない、か・・・馬鹿が。もう口で説明するより実際に見せた方が早いようだ。ブレイドハート、本局データベースにアクセス。開示要求、Ｐ・Ｔ事件、闇の書事件に関する詳細」

《Ｙｅｓ，ｍｙ　ｌｏｒｄ.》

「そんな馬鹿なっ!?全て特秘事項だぞ・・・そう容易く見られる

ものでは・・・」

シグナムが驚きの声をあげる。Ｐ・Ｔ事件も闇の書事件も管理局内の特秘事項だ。見せてくれ、と言ってすぐに見られるものではない。事件の関係者は別として、一般の管理局員は正式な手続きを踏まなければ見ることはできない。そして、手続きだけで短くても数年はかかるのだ。今申請して見られるはずがないのだ。

「まぁ、そこは情報部の特権ということで理解してくれ。コード《アイス・タガァ》入力、閲覧制限解除・・・」

モニターに一人の少女が映し出された。家族との団欒、しかし、その表情はどこか寂しげで年不相応の憂いを秘めているようでさえあった。

「昔、一人の女の子がいた。その子は本当に普通の女の子で、どこにでもいる三人兄妹の末っ子で、運動音痴で、もちろん魔法なんて知りもしなかったし、戦いなんて子じゃなかった。友達と一緒に学校に行って、家族と一緒に幸せに暮らして、そういう一生を送るはずだった、小学三年生の九歳の女の子。その子の名前は高町なのは」

雪鷹は静かに語り始めた。

「だが、ある日事件が起きた。現無限書庫司書長であるユーノ・スクライア氏との、魔導師の杖レイジングハートとの、魔法との出会い・・・」

モニターには九歳の頃のなのはとユーノ、覚醒した魔力の奔流、目覚めたレイジングハート、暴走するジュエルシードの映像が次々と映し出されていく。

「あの頃のなのはは魔法学校に通ってたわけでもないし、特別なスキルがあったわけでもない。だが、偶然の出会いで魔法を得て、偶々魔力が大きかっただけのたった九歳の女の子が魔法と出逢って数カ月で命懸けの実戦を繰り返した・・・」

次に映し出されたのはフェイトと戦うなのはの姿だった。

「これ・・・」

「フェイトさん・・・」

エリオとキャロは驚きの表情を浮かべる。今では親友である二人、なのはとフェイトが戦っていたという事実が信じられないのだろう。スバルとティアナのその映像に言葉を失っている。

「あの頃のフェイトは家庭環境が複雑で、あるロストロギアを巡ってなのはとは敵同士だったらしい」

次に映し出されたのはなのはがスターライトブレイカーを放つ場面だった。身の丈を上回る巨大な光の奔流。その大きさにエリオの顔が青くなる。

「集束砲っ!?こんな大きな・・・」

「九歳の女の子が・・・」

「ただでさえ大威力砲撃は体に負担がかかるのに・・・」

スバルとキャロを驚きの声をあげる。それほどなのはの放った砲撃

は規格外なのだ。魔法を学び始めて数カ月の人間が、しかも九歳の女の子が放てるレベルではない。エース級の人間の攻撃だった。

「フェイトにどうしても伝えたい想いがあったらしいからいっぱい無茶もしたし、危険なこともしたそうだ。クロノ・ハラオウン執務官他管理局の協力もあったおかげでその事件は解決したんだが、その後もさほど時をおかず戦いは続いた」

次にモニターに映し出されたのはグラーフアイゼンを振りかぶってなのはに襲いかかるヴィータの姿だった。私服姿のなのはのバリアをヴィータの鉄槌が粉々に砕く。

「シグナム副隊長やヴィータ副隊長、シャマル医官達が深く関わった闇の書事件。襲撃戦での撃墜未遂と敗北・・・それに打ち克つ為になのは達が選んだのは当時はまだ安全性が危うかったカートリッジシステムの使用」

そういって雪鷹は新しい映像をモニターに映し出す。それは瞬間突撃システム、A・C・Sを展開したレイジングハートのフルドライブ、エクセリオンモードだった。そのままなのはは突撃していき、敵諸共爆煙に巻きこまれる。

「体への負担を無視して、自身の限界値を超えた出力を無理矢理引き出すエクセリオンモード・・・」

その凄まじさに新人四人は何も言うことができなかった。

「誰かを救う為、自分の想いを通す為の無茶をなのはは続けた。だが、そんなことを繰り返して体に負担が生じないはずもなかった。ブレイドハート、次はアンノウンによる高町なのは撃墜未遂の映像

だ」

撃墜未遂という言葉に新人四人は首を傾げ、シグナムとシャマルは顔を顰めた。

「事故が起きたのは入局二年目の冬・・・異世界の捜査任務の帰りになのははは未確認機に襲われた。いつものなのはならきっと何の問題もなく、落とせるはずだった相手・・・だが、溜まっていた疲労、続けてきた無茶がなのはの動きをほんの少しだけ鈍らせた。その結果が・・・」

モニターに映し出されたのは全身に包帯が巻かれ、ベッドの上で眠るなのはの姿だった。点滴や人口呼吸器も取り付けられていることから、かなりの重体であることが見て取れる。見ていることさえ痛々しいその映像に新人四人は言葉を失った。管理局でも名の通ったエースオブエースが今にも死にそうな状態でベッドで寝ているのだ。

「意識不明のまま一週間、目が覚めてからの二週間は絶対安静で、動けるようになったのは二カ月くらい経ってからだったか・・・詳しいことは俺よりそこにいるシャマル医官が知っている。飛ぶことはもちろん、立って歩くことさえできないかもしれなに、ということだったらしい。今は教導官として華々しく活躍しているが一歩間違えば死ぬまでベッドの上で過ごさなければいけないかもしれなかった」

無茶すると危ない。口で言うのは容易いがそれを本当の意味で理解させることは簡単なことではない。痛みを知らない人間にとって尚更だ。なのはの言葉の意味と理由ををようやく理解したティアナは返す言葉もなく、俯く。

「無茶をしても、命をかけても譲れぬ戦いの場は確かにある。だが、お前がミスショットをしたあの場面は、自分の仲間の安全や命を懸けてでも、どうしても撃たねばならない状況だったか？訓練中のあの技は、誰の為の、何の為の技だ？」

雪鷹の言葉にティアナは何も言えなかった。答えは決まっている、否だ。あの場で無茶をしなくてもガジェットを倒すことはできた。それでも、無茶をしたのはティアナが自分の力を、ランスターの弾丸の力を証明する為だけの、とても大切で、しかし、たったそれだけの理由しかない。誰かの、スバルの、命と釣り合うものではないのだ。

「・・・すみませんでした」

ティアナはただ謝ることしかできなかった。一歩退いて冷静に自分自身を見つめ直してみるとどれほど愚かなことをしていたのかがよくわかる。これまでのティアナはただ単純に力を証明することにしか目が向いてなかった。それだけの為にしか訓練してきていなかった。その為だけにしか戦ってきていなかった。他の何もかもが見えなくなってしまっていた。ティアナの中には管理局員として責務も誇りも、何もなかった。その空しさにやけに胸が響く。

「別に謝らなくてもいい。俺はお前のせいで他の人間が犠牲になるのが許せないだけだ。お前一人が無茶して勝手に死ぬのはどうでもいい・・・兄を尊敬するのはいいことだろうが、兄と同じように他人を巻き込むことまで真似するなよ？次、こんな馬鹿な真似をしたら・・・覚悟しろ」

「はい・・・」

雪鷹の言葉にティアナは頷くことしかできなかった。

23『たゆたうこころ』（後書き）

――技術を教えるだけが教導官の仕事じゃない――

――技術は教えられても、その後ろにある想いまでは伝えられない

ううん、違うな・・・伝えきれなかった・・・――

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
２４『たいせつなこと』

―どうして雪鷹がティアナのお兄さんのことをあんなに悪く言うのか知ってる？

Intermission 23.1

Intermission 23.1

「おい、ユキタカ」

自室に戻ろうとする雪鷹をシグナムが呼び止める。薄暗い廊下のせいで表情までは読み取れないが機嫌のいい声には聞こえなかった。

「まだ、何か？」

応える雪鷹の声もまた硬い。

「先ほどの事件の詳細はどれも特秘事項扱い・・・一介の局員が見てよいものではない。何故、貴様のような人間がそれを許されている？」

「それについては情報部の特権だと申し上げたはずです。貴女や貴女の主がその有能さを買われて罪を免れたように、情報部はその性質上、一般局員にはない特別な権限が付与されているのです。特秘事項の閲覧許可はその一つ・・・貴女如きに口出しされる覚えはありません、シグナム二等空尉」

シグナムに付け入る余地を与えない雪鷹の態度。しかも、六課でこそ曹長と階級を偽っているが実際の階級はシグナムより雪鷹の方が上なのだ。それを承知しているからこそ、雪鷹は敢えてシグナムに階級をつけたのだ。質問は受け付けるが、指図は受けない、という意思表示を込めて。

「では、ここに来る前から我々のことは調べていたと？」

「データベースで調べられる範囲については。だけど、それで済んだら潜入調査なんてする必要もないでしょう？直にその人の為人を知る為にこうやって実際に現場に来ているんです。前にも言ったはずですが、私は機動六課を妨害する為にここに来たわけではありません。機動六課がこの世界の平和と安全を害するかどうかを調べに来ただけです」

「我々が世界に仇なすとでも？」

まるで機動六課が悪者であるかのような雪鷹の言葉にシグナムは柳眉を逆立てる。自然と語気が荒くなり、拳に力が入る。

「少なくとも、それだけの能力がここにはある。オーバーＳランク魔導師が三人、ニアＳランク魔導師が二人、ＡＡランク相当が二人。新人達も四人合わせればＡからＡＡ相当の実力はあるだろう・・・加えて、ルシエ陸士の稀少技能（レアスキル）、竜召喚。白竜単体でもＡＡ相当、もう一騎も火力だけならここの隊長陣さえ凌駕するだろうと言われる真竜級の化け物・・・その気になれば管理世界の一つや二つを軽く制圧できるだろう？」

「そのような真似、するはずがあるものかっ！！」

シグナムは一喝する。雪鷹の言う通り、戦力だけを見れば管理世界の幾つかを制圧できるだけのものが揃っている。しかし、それだけで疑われるというのはシグナムでなくとも我慢できるものではない。シグナムには、もちろん他の六課メンバーにも、管理局員としてこれまで世界の平和と安全を守ってきた矜持がある。雪鷹の言葉はその矜持を踏みにじり、汚すものだった。許せるはずがない。

「何故、ないと言い切れる?闇の書事件で己の主可愛さに幾人もの魔導師を襲い、稀少動物を傷つけ、そのリンカーコアを奪ってきたのは他でもないお前だろう?もし身内を、八神二佐を人質に取られ、誰かを襲うことを命じられたら、お前はそれを拒めるか?己の主を見殺しにしてまで、管理局の正義を貫けるか、烈火の将よ」

「それは・・・」

答えに窮したシグナムに追い打ちをかけるように雪鷹は言葉を続ける。

「仮に拒めると答えても誰もそれを信じはしない。主の為なら他人を傷つけることさえ厭わぬことを過去のお前が証明しているのだからな。前科とはそういうものだ。罪滅ぼしが終わっていようとも、犯した罪は、もう消えない。聞きたいことはそれだけですか?」

言外に早く終わらせろ、という雪鷹にシグナムは言葉を躊躇う。しかし、ここで聞かなければおそらく二度と答えてくれない強迫観念を覚えたシグナムは迷いを振り払って雪鷹に尋ねる。

「なのはの撃墜未遂についてはどこでその情報を入手した?あれは本局の方が内密に片づけたせいでそう知られている人間はいないはずだ。高町の周辺の人間を除けば、管理局の上層部の、それもごく一部のみのはず・・・」

雪鷹への疑い、というよりも純粋な疑問に近い問いかけに雪鷹は苦笑を返した。

「簡単なことです。その事件の事後処理をしたのが一課だったとい

うだけです。私の一課の人間として色々と奔走したので・・・そういう日陰仕事も一課の役目だからな」

「では、お前はなのはがあんなことになっていると知りながら見舞いにも行かなかったのか？」

やや怒気の混じったシグナムの言葉に雪鷹は驚きの表情を浮かべ、小さく頷く。

「お前となのはの関係に口を挟むつもりはないが、友だというのなら見舞いの一つくらいしてもいいだろう？たとえそれができないでも連絡の一つくらいできただろう？何故それをしなかった」

「それを貴女に咎められるのは不愉快極まりないが、その非は甘んじて受け入れよう。言い訳もない」

雪鷹には珍しく反論一つせずにシグナムの言葉を受け止めると、そのままシグナムに背を向けた。

「そろそろなのは達が帰ってくる頃だろう。俺は迎えに行くが、お前は？」

「ほう、殊勝なことだな・・・今更、そのようなことをするのか」

なのはの見舞いにはいかなかったくせに、と皮肉を込めるシグナムに雪鷹は背中で笑った。

「こちらから無理を頼んだんだ。それくらいのことはするさ・・・」

24『たいせつなこと』（前書き）

伝えたいことがある

ずっと、そう思っていた
でも、それは間違いだった

伝えないといけなかった

伝えることが私の仕事なんだ
そんな簡単なことさえ忘れてしまっていた

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　始まります

24『たいせつなこと』

24『たいせつなこと』

「ご苦労だったな、なのは、フェイト」

「あれ?珍しいね、今日は雪鷹がお出迎え?」

普段は顔を見せることのない雪鷹が出迎えに来たことに三人は驚いた表情を浮かべるがなのはとフェイトは嬉しそうな表情に見えなくもない。思い返してみれば雪鷹が迎えに来たのはこれが初めてのことだ。喜ぶのも当然のことだった。

「まぁ、無理を頼んだのは俺の方だからな。そこまで冷徹な人間になった覚えはない・・・それに、生憎と普段は出迎えられる側だからな。偶にはこういうのも悪くないだろう?」

「ははは・・・それは、その・・・その通りだね」

雪鷹の皮肉めいた言葉になのはは苦笑するしかない。

「まぁ、それはいいとして高町教導官、教え子の面倒はしっかり見とけ。技術を教えるだけが教導官の仕事じゃないことはお前が一番知っているはずだろう?俺は訓練以外まであいつらの面倒を見る気はないぞ」

「・・・ティアナのことだね・・・今、どうしてる?」

「頭冷やしてるんじゃないか？あ、それとお前に断りもなく悪いとは思ったがお前たちの過去、少しあいつらに話した。魔法との出会いとかＰ・Ｔ事件、闇の書事件、あとお前の撃墜未遂についても。勝手なことをしてすまない」

「むぅ・・・ダメだよ、人の過去勝手に話しちゃ・・・でも、まぁ、今回の件は私の監督不行き届きのせいでもあるし、雪鷹にも迷惑かけたから仕方ないけど・・・」

なのはは複雑な表情を浮かべながらも仕方ないな、とため息をこぼす。雪鷹が面白半分で他人の過去を話すような人間でないことはなのはも承知している。出撃前のティアナの様子を考えれば、話さざるを得ない状況になったとしてもおかしくはない。

「まぁ、いずれはばれることだしな」

ヴィータは少々呆れた声で付け加える。フェイトもその横で何とも言えない顔を浮かべていた。

「さて、厄介ごとの引継ぎも済んだことだし、俺はもう寝るぞ？」

雪鷹はあくびをこぼすと眠そうに瞼をこする。

「お疲れ様、雪鷹。それじゃ、私もティアナの所にいこうかな」

雪鷹を見送ったなのははティアナの下へ足を進めた。

・＊・＊・＊・

隊舎からさほど離れていない岸壁にティアナは腰を下ろして空を見つめていた。星明りの瞬く漆黒の夜空は深く、広い。吸い込まれてしまいそうなくらい圧倒的で、それでいて穏やかで、無情な夜天。いつか、この空を飛ぶことを夢に見てここまで来た。しかし、夢ばかり追いすぎて、目の前が見えなくなってしまっていた。それに気づいた途端、何もかもが崩れ落ちてしまった。これまで人並み以上に努力してきた自負がティアナにはあった。だからこそ、エリート揃いの機動六課でもここまでやってこれた。しかし、その努力さえもティアナの夢を叶えるにはまだ足りないのだ。今以上の努力が必要で、しかし、物理的にそれは不可能で、となるとティアナはもうお手上げだった。何をすればいいのかがまるで見えてこないのだ。

「どうすればいいの・・・」

ティアナの口からこぼれた言の葉は夜に溶けて消えていく。静かな夜だった。しかし、その静けさを破るように足音が辺りに響く。その足音はティアナへと近づいてくる。ティアナがその方向に顔を向けるとなのはが立っていた。目と目が合うとなのはは優しく、にっこりと笑った。そして、そのままティアナの横に腰を下ろす。再び、静けさが戻った。しかし、ティアナが自らの意思でそれを破る。

「ユキタカ曹長から色々と聞きました・・・」

「なのはさんの失敗の記録？」

「じゃなくて・・・」

どこか自嘲交じりのなのはの言葉にティアナは慌ててそれを否定する。

「無茶すると危ないんだよって話だよね」

「・・・すみませんでした」

ティアナの口から出た謝罪の言葉。その場を取り繕う為の言葉ではなく、心の底からの謝罪なのだということが顔を見なくても伝わってくる。己の過ちを悔いている声だった。なのははその言葉をかみ締めるように小さく頷いた。

「無茶すると危ないんだよ・・・私が伝えたかったのは結局、それだけのことなんだけどね。みんなに私と同じ後悔(思い)をしてほしくなかったんだ」

「はい・・・」

ティアナもまたなのはの言葉を受け止めて小さく頷く。

「じゃあ、わかってくれたところで少し叱っておこうかな。あのね、ティアナは自分のこと、凡人で射撃と幻術しかできないっていうけど、それ、間違ってるからね。ティアナも、もちろん他の三人も今はまだ原石の状態、デコボコだらけだし、本当の価値も分かりづらいけど、だけど、磨いていくうちにどんどん輝く部分が見えてくる」

そう言ってなのはは優しく微笑む。

「教導の役目は悪い所を見つけて矯正することじゃなくて、強くなりたい人の可能性を見つけて伸ばすことなんだよ。エリオはスピー

ド、キャロは優しい支援魔法、スバルはクロスレンジの爆発力。三人を指揮するティアナは射撃と幻術で仲間を守って、知恵と勇気でどんな状況でも切り抜ける。そんなチームが理想形で、ゆっくりだけどその形に近付いていっている。模擬戦でさ、自分で受けてみてわからなかった？ティアナの射撃魔法ってちゃんと使うとあんなによけにくくて、当たると痛いんだよ？」

なのはの言葉にティアナはハッとした表情を浮かべる。ティアナの十八番（おはこ）、クロスファイアシュート。ティアナは多数の誘導弾による空間制圧しか考えていなかったが、なのはが行ったように複数の弾丸を合わせ、一点に集中砲火することで威力を何倍に高めることもできるのだ。ティアナが一度も考えたことがなかったが、なのははきっとそこまで考えていた。その事実が恥ずかしくもあり、それ以上に嬉しくもあった。

「一番魅力的な所をないがしろにして、慌ててほかのことをやろうとするから、だから危なっかしくなっちゃうんだよって教えたかったんだけど・・・」

なのははそう言って申し訳なさそうに俯く。海の彼方を見つめ、もう一度ティアナに視線を戻す。

「でも、今回の件に関しては私も反省しなくちゃいけないかな。技術は教えられても、その後ろにある想いまでは伝えられない。ううん、違うな・・・伝えきれなかった・・・完全に教導官としての私の力不足。そのせいで、ティアナや他のみんなにいっぱい迷惑かけちゃった・・・ごめんね」

「い、いえ・・・あたしの方こそ、何も考えずに無鉄砲な馬鹿やって、なのはさんやみんなに迷惑かけて・・・ごめんなさい」

なのはの謝罪にティアナは慌てて首を横に振って頭を下げる。命令や教導を無視したのは他でもないティアナだ。なのはがティアナに謝る理由などあるはずもない。謝られるくらいなら、大声で怒鳴りつけられた方がずっとよかった。なのはの謝罪は言葉だけのものではない本気の気持ちだ。教導官としての未熟さゆえにそれを悔いて、詫びているのだ。その言葉の一つ一つがティアナの胸を締め付ける。これ以上ないくらいの自己嫌悪だ。如何に自分が愚かなことをしていたのかが嫌というほど理解した。それが表情に出てしまったのかなのはは心配そうにティアナを見ていた。

「まぁ、でも、ティアナの考えたこと間違ってはいないんだよね」

ティアナを励ますような柔らかななのはの口調。ティアナのデバイス、クロスミラージュを手に取るとなのはは小さな声で呟いた。

「システムリミッター、テストモードリリース」

なのはの命令に反応してクロスミラージュの核が淡く点滅する。そして、なのははそれをティアナに手渡す。

「命令してみて。モード2って」

クロスミラージュを受け取ったティアナは僅かに首をかしげて見せた。デバイスにリミッターがかかっていることは初めの説明で聞いていたが『モード2』という言葉は今初めて聞いた。半信半疑なティアナを促すようになのはは黙って頷く。ティアナが普段と同じようにクロスミラージュを構え、命じる。

「・・・モード2」

《２ｎｄ　ｄａｇｇｅｒ　ｍｏｄｅ.》

クロスミラージュが仄かな橙光を放ち、銃把が動く。銃口からは魔力刃が伸び、二股に分かれた。一方なそのまま伸びて刃になり、もう一方は曲線を描きながら銃把に繋がる。橙の光、その全てが魔力刃だった。それはもう銃という体を為していない。完全に近接戦闘に特化した形態だ。

「これ・・・」

ティアナの口から驚きの声が漏れる。

「ティアナは執務官志望だもんね。ここを出て執務官を目指すようになったらどうしても個人戦が多くなるし、将来を考えて用意はしてたんだ」

嬉しかった。そこまで考えてくれていたことが。そして、それ以上に情けなくて、悔しかった。なのはや他の皆の期待を裏切ってしまったことが。

気付くと熱いものが頬を伝っていた。なだらかは曲線を描きながら、零れた一雫がクロスミラージュに落ちて弾ける。堪えようとしてみても嗚咽は止まらない。両手に顔を埋めてティアナは泣き続けた。なのははそっと肩を抱き寄せ、優しく言葉を紡ぐ。

「近距離（クロス）も遠距離（ロング）ももう少ししたら教えようと思ってた。だけど、出動は今すぐにでもあるかもしれないでしょ？だから、もう使いこなせている武器をもっともっと確実なものにしてあげたかった。だ

けど、私の教導、地味だからあんまり成果が出てないように感じて、それなのにスバルやエリオはすぐに使える小技をいっぱい教えてもらってるから、気持ちだけが焦って、先走って・・・苦しかったんだよね？」

ティアナは顔を上げてなのはを見つめる。涙でおぼろげにしか見えなかったが、優しく、強い眼差しがティアナを見つめていた。

「ティアナはもちろん四人とも前よりずっと強くなってる。そして、これからもっと強くなる。その為に私がいるんだよ。私だけじゃない。他の隊長達もみんなその為に頑張っているんだよ。まだまだ未熟な教導官だけど、信じてついてきてほしい・・ついてきてくれるかな？」

涙で声が出なかった。返事の代わりにティアナはなのはに抱きついた。なのはは笑顔でそれを受け入れ、ティアナを抱き締める。その優しさが心地よく、嬉しかった。誰かに縋って泣いたのはかなり久しぶりのことだった。たった一人の肉親を失ってからはきっと初めてだ。誰にも涙を見せまいと頑張って来たティアナだが、なのはの前ではそんな気持ちは微塵も感じなかった。そして、なのはは泣き止むまでずっとティアナを抱きしめ続けていた。ようやく泣きやんだティアナになのはは意を決して切り出す。

「それでね、ティアナ・・・雪鷹のことなんだけど・・・」

雪鷹、という名前に反応してティアナの顔に影が差す。

「今日、雪鷹がティアナにしたことはもちろん許されないことだし、納得できない気持ちはよくわかるよ。でも、雪鷹は雪鷹なりにティアナのことを考えているんだよ。だから、あんまり嫌わないであげ

てほしいな」

ティアナは戸惑いながらも、しかし、はっきりと首を横に振る。

「ユキタカ曹長の考えはなのはさん達が出撃している間に聞きましたし、あの人なりにあたしのことを考えてくれているんだってことはわかりました。だから、今日のことは反省していますし、恨んだりもしていません。でも、やっぱり兄を否定したのだけは許せません」

それだけはどうしても譲れない。ティアナの瞳に宿った小さな火は、弱いながらも決して消えることのない強さを持っていた。

「兄をあんな風に侮辱して、それで平然としているような人をあたしは許せない・・・許したくないんです」

なのはは小さく息を吐き出した。ティアナの気持ちはよくわかる。唯一の肉親を侮辱した人間を許せない、というのは無理もないことだ。しかし、ティアナは知らないのだ。何故、雪鷹がティアナの兄を侮辱するのか、その理由を。理由を聞くまではなのはも雪鷹の言動は許せなかったし、おそらく迷うことなくティアナの側に立った。しかし、その理由を聞いてしまってからはどちらが正しいのかわからなくなってしまったのだ。ティアナの怒りはもっともだが、だからといって雪鷹を悪と決め付けることがなのはにはできなかった。

「・・・どうして雪鷹がティアナのお兄さんのことをあんなに悪く言うのか知ってる?」

なのはは躊躇いながらも口を開く。本当ならこれはなのはが話すべきことではない。雪鷹の痛みは雪鷹以外の誰の物でもなく、他の人

間が他言していいことではない。しかし、きっと雪鷹の口からティアナに伝わることない。その確信がなのはにはあった。雪鷹は他人に理解を求めようとしないのだ。他人から理解されることに驚くほど無頓着で、個人主義者だ。雪鷹にとってティアナの兄、ティーダを侮辱する理由は雪鷹だけが知っていれば十分であり、そのせいで他人から嫌われようとまるで構わないのだ。なのは達が聞かなければきっと誰にも話すことはなかったはずだ。

「いえ・・・何かあるんですか？」

ティアナは怪訝な顔でなのはを見つめ返す。その目を見てなのはは心を決めた。

「あのね・・・ティアナのお兄さんが原因で雪鷹と同じ部隊の人が一人、殉職してるんだ」

それからなのはは雪鷹から聞いた話を全てティアナに話した。管理局の裏の顔と情報一課のこと。秘密裏に行われていた諜報活動。ティーダ一尉の独断専行、そしてその結果。一課の人間と一般人がその巻き添えを食ったという事実を知ったティアナは夜でもわかるくらいに青ざめて、血の気を失っていた。

「それは本当のこと、なんですか・・・」

「雪鷹はこういう嘘は絶対に言わないよ。それはティアナもよく知ってるでしょ？」

嘘であってほしい、というティアナの縋りつく言葉。しかし、なのははそれを振り払う。雪鷹はいい意味でも悪い意味でも嘘をつく人間ではない。相手が傷付くとわかっていながらも嘘で取り繕うこと

をせず、真実を告げるような人間だ。それはティアナも理解している。だからこそ、雪鷹の話が嘘であるはずがない。

「もちろん、だからってティアナのお兄さんを侮辱していいわけじゃないよ。それはみんなわかってる。でもね、少しだけ、ほんの少しだけでいいから雪鷹の気持ちになって考えてみてあげて・・・それでも雪鷹を許せなくて、嫌いなままならそれ以上、私からは何も言わないよ」

まるで懇願するようなのはの言葉をティアナは振り払うことができなかった。

「でも、だからって・・・」

ティアナは泣き出しそうなくらい顔を歪めていた。膝の上に拳を硬く握りしめ、震わせている。

「そんなこと一度も・・・それなら、そう言ってくれたら・・・兄さんのせいで・・・」

ティアナの声が震える。雪鷹にとってティアナは加害者の妹なのだ。その事実が容赦なくティアナを締め付け、苦しめた。

24『たいせつなこと』（後書き）

それは束の間の夢
いつかは消えてしまう夢だ

だけど、その夢はすごく幸せで
幸せだからこそ、切なくて、恋しい

――変えなくていい

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
２５　『ある日のある執務官の日常』

このままがいい――

他愛のない二人だけの時間
それが何よりも愛しい

Intermission 24.1

Intermission 24.1

なのはとティアナは雪鷹の部屋を訪ねていた。日付はもう変わろうかという時間だ。寝てしまったかと不安に思っていたが、扉の隙間から光が零れている。そして、すぐに扉が開き、雪鷹が姿を現した。

「雪鷹、少しいいかな？」

「・・・何か用か？」

気のせいか声に苛立ちが込められている。ネクタイを緩めたシャツ姿は普段とは別人のような印象を与え、鋭い眼光が二人を委縮させる。

「あの、その、ティアナがどうしても雪鷹に言いたいことがあって・・・」

「こんな夜遅くに？ふざけるなよ。明日の朝、出直してくれ」

なのはが切り出すが雪鷹は取り合おうとさえしない。雪鷹の言い分の方が正当性があるだけになのはもあまり強く出られない。しかし、ティアナの手前、そう簡単に引き下がることもできず、そのまま雪鷹と二言、三言と言い争う。そのまま口論に発展するかと思った所でティアナが口を開く。

「あの、ユキタカ曹長、こんな夜遅くに尋ねてきたことは謝ります。でも、お願いします」

そう言ってティアナは深々と頭を下げた。これには流石の雪鷹も驚いたらしく、なのはと二人してそれを見つめ、観念したようにため息を零した。

「手短に終わらせてくれよ」

そう言って雪鷹は二人を部屋の中に入れた。

「で、用件は？」

胸を前で腕を組んだ雪鷹は威圧的な態度を崩さない。部屋へ入ることを許しこそしたが、長居はさせないと無言で二人に命じていた。

「なのはさんから聞きました。あたしの兄のせいでユキタカ曹長の同僚が亡くなったことや色々と・・・」

その言葉を聞いて雪鷹はなのはを睨みつけた。溢れ出る苛立ちの矛先を全てなのはに向け、容赦なくその体を貫く。その鋭さに流石のエースオブエースも額に冷や汗を滲ませる。

「余計なことを・・・」

「だって、その・・・見てられなくて・・・それに、雪鷹だって私の過去を勝手に話したんだからこれでおあいこだよ」

雪鷹もなのはの過去を断りなく話してしまった負い目は感じている。なのはにおあいこ、と言われて雪鷹は苦い顔をしたが、軽く舌打ちをしただけでそれ以上は何も言ってこなかった。

「それでその・・・申し訳ありませんでした」

ティアナはこれ以上ないくらいに深く雪鷹に頭を下げた。それを見た雪鷹は煩わしそうにため息を零す。

「別に俺はお前に謝ってほしいわけじゃない。捜査に気付かれたのは一課の不手際だ。お前の兄の責任というわけじゃない。そもそも、お前が何かしたわけじゃないだろう？お前が俺に謝っても意味はない」

雪鷹はティアナの謝罪を無意味だと斬り捨てた。おそらく、そうなるだろうと予想していたのか、ティアナは静かに首を振って言葉を続けた。

「それでも、謝らないといけないと思ったから・・・そうしないと、あたしが変われないから・・・前に進めないから・・・」

これは謝罪というよりもほとんどティアナの自己満足に近い。、兄のせいで同僚を亡くしてしまった雪鷹に対する罪の意識はある。それを詫びなければいけない自覚はある。

しかし、それ以上にティアナの中にあるのは兄との、過去との決別の想いだった。

もちろん、兄を慕う気持ち、尊敬する気持ちは相変わらずある。しかし、だからといて兄の全てが是というわけではないということをティアナは知ったのだ。

兄のせいで苦しんだ人がいる。その罪を認めなければ、ティアナはこれからもずっと兄に縋ったまま生きていくことになる。それを認め、受け入れる為にティアナは雪鷹に頭を下げているのだ。

「結局、自分の為か？」

ティアナの心の内を見透かした雪鷹の言葉。ティアナの体が硬くなる。謝罪の気持ちに嘘偽りなどないが、それよりも重いものが胸の中にあるのもまた紛れもない事実だ。それを見透かされたはこの謝罪も薄いものになってしまう。

――また、怒られる。

そう思ったティアナは頭を下げたまま無意識のうちに目を閉じていた。

「まぁ、それを自覚してるだけ、馬鹿みたい許しを乞うよりは数段ましだな」

どこか嬉しそうに聞こえなくもない雪鷹の声。ティアナが恐る恐る顔をあげる。雪鷹の顔は笑ってこそいなかったが、二人を出迎えたときのような冷たさもなくなっていた。

「俺は努力することは否定しない。人は努力さえすれば必ず成功する。なぜそれが信じられないのか。それはもっと楽なもの、運や偶然、己の小さな才能に頼ろうとするからだ。それが人の目を曇らせ、覆い隠す・・・」

「はい・・・」

ティアナは小さく頷く。ティアナは何も見えていなかった。だから、自分の才能を卑下して、雪鷹やなのは達を天才と決め付け、それを羨み、妬んだ。努力することに疲れ、諦めていた。大切なことを忘れて。ただ強くなることだけを目指して愚かなことを繰り返した。それを理解したティアナの瞳はまっすぐに雪鷹を見つめていた。

「雪鷹、それで、一つお願いがあるんだけど・・・しばらくしてみんなが次の段階に進んだらティアナに近接戦闘(クロス)の技術を教えてあげてくれないかな?私は専門外だし、フェイト隊長やヴィータ副隊長は戦闘スタイルが違う・・・雪鷹が一番適任だと思うんだけど・・・いいかな?」

なのはの言葉にティアナは驚きの表情を浮かべる。

「あぁ、わかった」

その申し出にすぐに頷いた雪鷹にティアナは更に驚く。

「えっ、本当にいいんですか!?」

雪鷹の言葉が信じられなくてティアナは雪鷹に尋ね返す。雪鷹は若干の苦笑を浮かべてティアナを見た。

「そこまで嫌なら無理じいはしない・・・」

「いえ、そんなつもりじゃ・・・」

ティアナは慌てて首を横に振る。スバルにシューティングアーツの基礎を教えてもらったとはいえ、徒手格闘と刃物を持った場合では

勝手が違う。その意味ではティアナにとって雪鷹は最良の手本だ。兄を侮辱されたことに対する不満が消え去ったわけではないが、いつまでもそれにこだわってはいられない。少なくとも、雪鷹にはティーダを憎むに足る理由があり、そこはティアナの意志は及ばないのだ。

「よろしくお願いします、ユキタカ曹長」

「あぁ」

右手を差し出したティアナに雪鷹も応じる。

「今度、無茶なことをしたら容赦しないからな」

Intermission 24.2

Intermission 24.2

翌朝、早朝練習に向かおうと隊舎から出てきたティアナを新人達とフェイト、そして雪鷹が出迎える。

「「おはようございます」」

エリオとキャロの声が見事に重なる。それが嬉しいようで、照れくさくもある。

「おはよう」

エリオとキャロに挨拶を返すとティアナはフェイトと雪鷹の方を向く。

「おはようございます」

「うん・・・よく、眠れた？」

昨夜の顛末をなのはから聞き及んでいるフェイトが尋ねるとティアナはすっきりとした顔で頷く。それを見たフェイトは嬉しそうに頷くとそのまま訓練場の方へ歩き始めた。

「技術が優れてて、華麗で優秀に戦える魔導師をエースって呼ぶでしょ。その他にも優秀な魔導師を表わす呼び名があるって知ってる？」

道すがらフェイトが四人に尋ねた。四人ともお互いに顔を見合わせ、首を傾げる。なのはやフェイトのように優秀な魔導師が個人的に二つ名で呼ばれることは知っていたが、それ以上のことは知らない。

「その人がいれば困難な状況を打破できる。どんな厳しい状況でも突破できる。そういう信頼を持って呼ばれる名前・・・Ｓｔｒｉｋｅｒ（ストライカー）」

あっ、という声が四人から漏れる。

「なのは、訓練を初めてすぐの頃から言ってた。うちの四人は全員、一流のストライカーになれすはずだって・・・」

フェイトは四人を見つめ、そして視線を遠くの空へと移した。

「だから、うんと厳しく、だけど大切に丁寧に育てるんだって」

日が昇り、その肌を照らす。輝くような笑顔が雪鷹にはひどく眩しかった。

「まぁ、今のところは四人合わせてストライカーズだがな」

フェイトの言葉に付け加えるように雪鷹が呟くとそれを聞いたフェイトがくすくすと笑う。

「むぅ、それってあたしたちがまだ半人前ってことですか！？」

スバルがそれに食いつくが雪鷹は取り合おうとしない。不敵に、しかし面白そうにただ笑うだけだ。

「Ｓｔｒｉｋｅｒｓ（ストライカーズ）のｓの意味、今でなくていいから少しは考えてみろ。さて、着いたぞ」

まだ何か言いたそうな顔をしていたスバルだったが、訓練場に着いてしまい何も言えなくなってしまった。

「おはよう、みんな」

「「「「おはようございます」」」」

なのはの挨拶に四人が元気よく答える。

「訓練を始める前にみんなに一つだけ言わなきゃいけないことがあるんだ。急に決まったことなんだけど、雪鷹曹長にはしばらくフェイト隊長の補佐として捜査協力してもらうことになったからね」

「えっ、ちょっと、なのは、そんなの聞いてないよ・・・」

なのはの言葉にフェイトは慌てた表情を浮かべる。なのはが前に雪鷹が訓練から抜けるかもしれない、という話をほのめかしていたことは聞いていたが、フェイトの補佐として働くという話は今初めて聞いた。そもそも、フェイトにはシャリオ・フィニーノという正式な執務官補佐がいるのだ。わざわざ雪鷹に補佐してもらう必要はない。

「シャーリーもデバイスのメンテや通信で忙しいからその代わりも兼ねてってことで決めたんだけど、だめかな？」

なのはにだめかな、と聞かれてフェイトがだめです、と答えられるはずもなく頷くしかない。実際、ロングアーチとして働くシャーリ

ーの有能さははやてやグリフィスも買っていて、通信士として、またデバイスマスターとしての激務の日々を送っている。本人はそれを存分に楽しんでいるようなのでフェイトは何も言わないが、フェイトの補佐として働ける時間は以前に比べて明らかに少なくなっている。

「というわけだ。これからしばらくお世話になります、ハラオウン執務官。それとも、俺が補佐だと迷惑かな？」

優雅に微笑みながら右手を差し出す雪鷹の顔を見れば、知らされていなかったのはフェイトだけだと嫌でもわかる。嵌められた、というほどのことではないが、どこか納得できないものがある。

「迷惑じゃないけど・・・」

むしろ、雪鷹と一緒に働けて嬉しい、というのがフェイトの本音でもあるのだが、それにしても一言くらい相談してくれてもよかったのに、と思わないでもない。差し出したフェイトの手を雪鷹の手がそっと包み込む。白い指先は男にしては細く、優美ささえ感じられる。しかし、フェイトの手を握る力強さも、硬さも、その熱も確かに男のものだった。

「こういうのは、ずるい・・・」

雪鷹と握手をしながらフェイトは独り呟いた。そんなフェイトを無視してなのはは元気に声を上げる。

「さぁ、今日も朝練頑張るよ！！」

「「「「はいっ！！」」」」

訓練場に新人達の元気な声が響いた。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　２４．２（後書き）

どうも、月兎です。

今回は、はにかむフェイトを書きたか…ではなく、次回から始まるオリジナルストーリーに向けての『繋ぎ』のお話でした。

オリジナルストーリーは３０万ＰＶ記念で書くはずだったで記念小説の中身をベースに色々書いていこうと考えています。

ただし、あくまでも本編ですからアンケートの内容と若干の変更がありますのでご了承ください

ちなみに、恋愛話は『ほんのり甘く』にはなりません、残念ながら。

しばらく先、とは事前に断っていたものの本当にしばらく先になってしまいましたね…（苦笑

今更、と思わずに楽しんでいただけると幸いです。

それでは、次回をお楽しみに♪ではでは

はねやすめ～そのに～

どうも、月兎です。

投稿を始めて約５ヶ月…ついに『魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ』１００万ＰＶを達成しました♪

長かったティアナフルボッコ編（仮）もようやく終わってきりもいいので、今回は久しぶりの雑談メイン、もとい説明メインでお届けしたいと思います。それでは、裏話も交えてのフリートーク、始まります

雪「で、始まったわけだが……５ヶ月も書いてて未だに原作の三割程度の進行速度というのはどうなんだ？」

どうなんだって聞かれてもね…早ければいいってわけじゃ…

鷹「また、言い訳か？」

まだ何も言ってないのにっ！？

忍「まぁ、そういう作風だというのなら細かいことは言わないけど・・何事もほどほどにしないとね」

怖っ！！（なんで、笑顔がこんなに怖いんや・・・）

雪「まぁ、横道に逸れる前に本題に入ろうか。話すことがあるんだろう?色々と」

はい…まぁ、それでは本題に入りますね。今回は感想でも上がったティーダについて、そして情報一課についてお話ししようと思います。

鷹「予想はしてたが、ティーダについては厳しい意見が多いな」

まぁ、前提としてティーダを善い人として書こうと思ってませんでしたからね。まずはそうなった経緯についてです。

以下、月兎的ティーダの考察です。

まず、ティーダに関する情報が圧倒的に少ないですね。ティアナの兄でかなりのエリートだったのは間違いないんですが、それ以外の情報はさっぱり…

組織に属していたはずのティーダが任務中に一人だけ（一人じゃないかもしれないけど）殉職した。ティーダの死に関して、私の中にあったのはこの程度の情報でした。

ティーダ一人だけが殉職した、というのを前提で考えると組織に属しているはずのティーダが一人だけ殉職、というのは明らかに不自然ですし、犯人を取り逃がすはずがありません。

仮に組織で動いていて、犯人を取り逃がしたのならその責任はティーダ個人ではなく、組織が負うはずですからね

というわけで、ティーダが単独で戦ったと考えるのが妥当という結

論に至りました。組織に属している人間が任務中に単独で戦った、となるとティーダの単独行動していた可能性は十二分に考えられ、これがティーダ事件の骨格になりました。

ティーダ絡みの話を考えて一番悩んだのは一般人からみてティーダがどんな人間だったか、です。

殉職した後、上司からあれほどまで酷評されたティーダは本当に優秀な人間だったのか。こんな疑問がふと思い浮かびました。

原作では上司が悪いかのような発言をなのは達がしていましたが、本当にそうなのでしょうか。不当な評価と不愉快な評価、そして不適切な評価はそれぞれ似て非なるものです。

上司の下した評価はティアナやなのは達にとって不愉快な評価でした。社会的に見ても不適切な評価でした。しかし、だからといって不当な評価だったと決めるのは何かが違います。

もし、仮にその評価に相応の言動をティーダがしていたなら・・・というわけで、上司の評価が妥当だと思われる行動をティーダにさせました。こうして、ふとした思い付きからあのティーダが生まれました。

ダメティーダ誕生の経緯についてはこんな感じです。

『ティーダの心情描写が少ないせいで、ティーダだけが悪者のように見える』というご意見を多くいただきましたが、雪鷹視点で見るならまさしく、ティーダだけが悪者なんです。

そもそも、ティーダを善人に書くつもりはなく、今回は完全に悪役（ヒール）になってもらうつもりで書きました。雪鷹にとってみれば、ティーダにどんな理由があったとしても関係ないんです。やむを得ない理由があったとしても、ティーダが最悪の評価を下されて当然のことをした、という事実は揺るぎません。

この小説で意識しているのは第三者の視点です。たとえば、主人公サイドから見れば正義の味方部隊である機動六課も別の視点から、たとえば情報一課からでは異常な戦力が集中した危険視すべき部隊に見えるかもしれません。機動六課がその力を本来の目的以外で使わない、という保証は何処にもなく、しかも、その組織のトップが犯罪者だったとしたら疑わずにはいられないでしょう？

今回のティーダの件にしても、ティアナ寄りの人間から見た場合だとその評価に対して同情するでしょうが、雪鷹視点から見れば、ティーダは憎まれて当然のことをしてその報いを受けただけ、とも見れます。更に第三者の視点で見るなら、ティーダが其処に至った諸事情になんて興味がないはずです。どんな過程があったとしても結果さえ示せばそれでいいのですからね

というわけで、ティーダを心理描写に関してはほとんどを省きました。結果としてティーダが悪者のようになってしまいましたが、作者個人としてはそれでいいと思っています。

ティアナの兄、というフィルターを除いてティーダという人間を見てみると必ずしもいい人間ではなかったと思います。

幼い妹の面倒を見ながらの管理局勤めは決して楽ではなかったでしょう。仕事をしながら、ティアナの世話をしなければならないかったはずです。その苦労は並大抵のものではなかったと思います。その点を強調した描写を心掛けたなら、作品内でのティーダの印象は全く別物になっていたと思います。

しかし、敢えてそういう描写を省いたのは雪鷹の、もっと言うなら第三者の視点でティーダを書こうと思ったからです。読者の皆さんは作品内のティーダを見て、どんな印象を持ったでしょうか？

おそらく、好印象を持った方はいないと思います。原作を知らない人のティーダの評価は最低のクズ人間になったかもしれません。人によって差はあるでしょうが、原作での第三者のティーダに対する評価と同じになったと思います。ですが、表現したかったのはまさしく、そこなんです。

『第三者から見たティーダ』を書きたくて同情を誘うような描写は省きました。ティーダが悪者ぶりが際立つような設定を付け加えは

しましたが、有り得ない無茶な設定ではないと思います。というわけで、こういう見方もあるんだな、と受け入れてくださると嬉しいです。

忍「長々と語っていたが、実際の所、作者の技量不足もあるだろう？」

まぁ、否定はできないね…雪鷹視点で書いたからティーダの心情を描写したくても出来なかった、というのはあるし、補完する話を間に差し込むことはできたと思う。

雪「まぁ、それはそれでおいておこうじゃないか。さて、次は情報一課についての話だね」

これも幾つか感想で聞かれていたね。詳しくは雪鷹の方から

鷹「簡潔に言ってしまうと表の情報一課は『調べる専門』の組織だ。管理局内のデータベースの閲覧特権もその為のものだ。その代わり、現行犯以外での逮捕権はない。だから、局員が何か犯罪を犯していたとしても一課に逮捕することはできない」

雪鷹の説明に補足すると、閲覧特権はそこまで強力な権利ではありません。特秘事項とは言うものの申請さえすれば管理局員なら誰でも見られる、程度の情報です。情報一課はその申請を免除されてい

るだけに過ぎません。申請手続きにあまりに時間と労力がかかり過ぎる為、特秘事項を見ようとする局員もほとんどいませんが・・・

なので、最高評議会やレジアス中将の暗躍やカリムの予言、スカリエッティの存在については情報一課は全く把握出来ていません。たとえば、レジアス中将の周りに不透明な金の流れがある、ということならデータベースから調べられますがそれ以上の情報、その用途や相手についてはわかりません。

忍「だから、一課から人を出して直接調べるんだ。データベースだけで済むならわざわざ機動六課（ここ）には来ない」

まぁ、そういうことですね。雪鷹が六課に来た一番の目的は六課の調査です。部隊の概要はデータベースで調べられますが、それ以外にも色々ありますから。そもそも、閲覧特権は管理局内の犯罪者を探す為のものではありませんし

雪「で・・・裏の情報一課についてだが、まず一つ、これに関しては公式に認められた一課の仕事ではない。あくまで非公式な任務・・・一課の独断ということになっている」

あくまで、建て前ですけど。限りなく白に近い黒・・・ですね

鷹「一課はその特性上、管理局内の人間が何かを企んだ場合、真っ

先に察知できる。その規模があまりに大き過ぎたり、起きてからでは対応が出来ないと判断された場合、あるいは一般部隊では対処できない場合、一課はそれか起きないように独自に処理している」

はっきり言って、一課の裏の任務は違法行為です。しかし、抑止力、防止力としての効果は認めざるを得ないものがあり、管理局の上層部も目を瞑っているんです。

忍「一課も違法行為をしているという認識は持っているし、上層部も一課に何かあれば容赦なく切り捨てる。だから、絶対に証拠は残さない。噂だけしか残さない」

たとえ調べられても証拠がなければどうしようもありません。作中で雪鷹が『人を殺した』と発言していますが、これも雪鷹の証言以外に証拠になるものがないため、聞かれても問題ない、という判断の下話しているんです。

雪「まぁ、そういうことだな。上層部が黙認しているとはいえ、一課のしていることは結局、犯罪行為だからな。証拠を揃えられたなら、捕まるしかない。ちなみに、作者の中の一課のイメージは『忍者』だそうだ」

誤解しないで欲しいのですが、一課の本業はあくまでも情報収集・調査であって、暗殺云々はそこから派生した副業ですし、一課の人間全員が人殺しではありません。要人暗殺を担当しているのは雪鷹

を含めた一課の中でも一部の人間だけです。単なる暗殺集団にしてしまいたくはないのでその点はご理解ください。

忍「事と次第によっては法を犯すことさえ厭わない。一課はそういう組織を危険視している。そもそも、一課がそういう組織だからな・・・他にそういった部隊が存在しても驚きはしない。機動六課がそういう部隊かどうかを調べる為に来たんだ」

一課についてはこれくらいでいいでしょうか。まだまだネタバレできない部分もありますしね。ご意見やご質問についてはネタバレにならない程度にお答えしますのでどんどん聞いてください。

雪「それにしても・・・１００万ＰＶを祝うって雰囲気は皆無だね」

うぅ・・・それは、まぁ、そうなんだけど。そんなにはっきり言わなくても・・・

鷹「だが、事実だろう？」

仰る通りで・・・

忍「さて、次回からはオリジナルストーリーを始めるそうだ。休日編までの空白の時間を使って色々書くそうだ。可哀想に・・・新人

達の休みがまた遠のいた」

心にもないことを・・・

雪「何か言ったか？」

い、いえ、何も・・・というわけで、次回からオリジナルストーリーが始まります。読者の皆さん、是非お楽しみに♪ではでは

25『ある日のある執務官の日常』（前書き）

不意打ちで始まった雪鷹と一緒の仕事

嫌なわけじゃない
そう、嫌なわけじゃない

隣を向けばすぐそこに雪鷹がいる
不満なんてない
あるはずかない

私はこれ以上、何を求めているの？

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ始まります

25『ある日のある執務官の日常』

25『ある日のある執務官の日常』

ミッドチルダ首都、クラナガン市内を一台の黒のスポーツカーが駆け抜ける。運転しているのは機動六課、ライトニング分隊隊長、フェイト・T・ハラオウン執務官だ。隣の助手席で書類整理をしているのは臨時でフェイトの補佐を務めている雪鷹忍空曹長である。

「今日の予定は・・・午前中は地上本部に書類を提出して、午後からは港湾地区で密輸品の情報収集、か・・・法務と捜査、執務官は大変だね」

手元の書類をめくりながら、呑気な口調で雪鷹が呟く。その大変な仕事の補佐をしている自覚はあるのか、と疑いたくなる台詞だがフェイトは何も言わない。

「書類の準備、大丈夫？」

「あぁ、提出する書類は全部まとめてある。今、最期の確認で目を通しているところだ」

雪鷹は書類から視線を外すことなく呟く。その言葉にフェイトは嬉しそうに頷く。雪鷹がフェイトの補佐になって今日で四日目。慣れない仕事に戸惑いを見せるかと思っていたフェイトの不安のよそに今日までの三日間、雪鷹は任された仕事をそつなくこなしていた。フェイトの本来の補佐であるシャーリーと比べても遜色のないその働きにフェイトは内心驚いていた。特に法務関係の書類はフェイト

やシャーリーでも手を焼くことがあるというのに雪鷹はそんな素振りは一切見せず、仕上げた書類にフェイトが目を通しても申し分のない出来だった。

「雪鷹ってこういう事務仕事とか苦手だと思ってたんだけど、ちょっと意外だな」

「忘れているようなら言わせてもらうが俺はあくまでロングアーチだ。こういう事務仕事が本業なんだが？」

現場管制という名目で前線部隊に混じって出撃することが多い雪鷹だが、本業は後方支援や事務仕事なのだ。断じて前線に出て戦うことではない。もちろん、新人相手に教導官の真似事をすることでもない。

「それでもすごいことだよ。今日提出するような法務関係の書類は特に難しくて、私やシャーリーでも大変なのに」

「褒めても何もでないぞ？」

雪鷹はそう言って持っていた書類を封筒に入れ、別の書類を取りだした。

「それは？」

それはフェイトの見覚えのない書類だった。何かのリストのようだったが、車を運転している最中ということもあり、細かいところまでは見えなかった。

「ん？あぁ、ちょっとした野暮用だ。フェイトには関係のないから

気にしなくていい」

そう言って雪鷹はフェイトに書類を見せようとしない。そして、何事もなかったかのようにその書類も先程の書類と同じ封筒に入れた。

「え？それ、入れちゃっていいの？」

野暮用というからには雪鷹の私的なものか何かだと思っていたフェイトは驚いて尋ねる。法務関係の書類は書類そのものに不備が許されない。余計は書類が一緒に入っているのも当然まずい。書類作成に手慣れていた雪鷹がそれを知らないはずがない。

「まぁ、悪いようにはしないから」

雪鷹は笑って話を誤魔化す。六課では絶対に見せないような愛想のいい笑顔だ。悪いようにしない、というからには何か企んでいることは明白なのだが、この笑顔を浮かべられるとフェイトはどうしてもそれから先を問い詰めることができなかった。悔しいことに、滅多に見られない雪鷹の笑顔に見惚れてしまっている自分がいた。そして、幸か不幸かここはフェイトの車の中。雪鷹が笑顔を向けている相手はフェイトしかしないのだ。それは優越感にも似た一種の独占欲に近い。雪鷹の笑顔を独り占めしているのだという、ただそれだけのことで多少のことなら許してしまいたくなるのだ。しかし、そんな幸福は長くは続かない。目的地である地上本部の駐車場に着くと雪鷹はすぐに車から降りてしまった。

「さて、執務官殿、後はお任せしました」

恭しい態度でそう言って雪鷹はフェイトに封筒を手渡す。

「うん、ありがとう」

封筒を受け取ったフェイトは雪鷹を従えて地上本部に入る。これからフェイトが向かうのは地上部隊の法務関係を一手に引き受けている部署だ。それぞれの部隊の法務関連の案件は全てこの部署を通さなければならない。ここで決裁が下りなければ部隊そのものが止まってしまうこともあるので注意を払わなければならない。しかしというか、案の定というかこの部署の人間は誰しも頭が固く、一言で言ってしまえば融通の効かない人間が多い部署だった。

「やっぱり緊張するな・・・あの人、苦手」

フェイトは誰にも聞こえないように呟く。更に付け加えるなら六課の決裁を担当している人間、つまり、フェイトがいつも書類を提出している人間はその中でも特に癖の強い人物であり、端的に言うなら不備を見つけるたびにフェイトに嫌みやセクハラじみた発言を繰り返すような人間で、フェイトが苦手としている人物だった。

「ふん、早くせんかね、ハラオウン執務官」

嬉しくはないがお互いにもう顔なじみだ。横柄な声で呼ばれてフェイトはかすかな苛立ちを胸に抱きながら男のもとへ向かった。

「ほう、今まであんなに言い寄られても誰にも靡かなかった執務官にもついに男ができたんですか」

フェイトの後ろに立つ雪鷹を見て、男は笑う。その言葉にフェイトはカッと頬を赤らめる。半分は怒り、もう半分は羞恥心だった。

「ち、違います。雪鷹は臨時で補佐をしてくれているだけです」

「へぇ、そいつ、雪鷹っていうのかい？随分と仲がよろしいことで。あんたも羨ましいね、こんな女と毎晩、ベッドで・・・」

男の下卑た笑い。フェイトは顔を真っ赤にして俯いている。言うまでもないが、フェイトと雪鷹はそういう関係ではない。喜ぶべきか悲しむべきかは別にして、今のところ執務官とその補佐でしかない。しかし、目の前の男にそういう関係に見られているのだと思うと恥ずかしさが込み上げてくる。

「あなたには関係のないことですっ！！」

恥ずかしさを打ち消すように語気を強めてフェイトは男に書類を入った封筒を押しつけた。男は軽く舌打ちをしながらも封筒を受け取り、中の書類を確認していく。書類の不備を見つけてフェイトをなじるのを日課としていた男は書類にめぼしい不備がないことに苛立ちながら書類をめくっていく。そして、最期の一枚を見た瞬間、男の顔色が変わった。

「あ、あんた、これをどうやって・・・」

顔を真っ赤にして男はフェイトを問い詰める。まるで何かに怯えているかのようなその態度にフェイトは首を傾げる。男の持つ書類が原因であることは想像がついたが、男がここまで怯える心当たりはない。

「とぼけるな！！これをどこで・・・」

「お前には関係のないことだろう？さっさと決裁の印を押せ」

それまで黙っていた雪鷹がフェイトの前に立ち、男を威圧する。所属こそ後方支援だが、生粋の武人である雪鷹にすごまれて事務官風情が向きあえるはずもなく言われるがまま決裁の印鑑を押して書類を受け取る。

「どうも。まぁ、これからもいいお付き合いをしましょう？お互いに」

雪鷹の言う、いいお付き合い、がどのようなものなのかフェイトにはわからなかったが男の顔を見れば言葉通りのものでないことは一目でわかる。しかし、ここで負けてなるものか、と勇気を振り絞って男は雪鷹に言った。

「わ、私は脅しにはけ、決して屈しないぞ！！私は、誇りある管理局員なんだ！！」

「脅し？なんのことですか？変な言いがかりはやめてください。それに・・・」

優雅な、しかし、恐ろしい笑顔。その気になれば笑顔だけで人を殺せるのではないかと思ってしまうくらい冷たい微笑を浮かべて雪鷹は言う。

「次にそんなふざけた言葉を口にしたら、その欠片ほどもないちっぽけな誇りごと叩き潰しますから。身の程をわきまえてください、屑」

言うまでもないが地上本部においてこの部署の人間はいわゆるエリートと言われる部類の人間だ。そんな人間に向かって躊躇う素振りも見せず、雪鷹は屑と言い切った。慇懃無礼という言葉を体現した

かのようなフェイトは見ていてハラハラしたが言われた側の男は何も言い返せず俯いている。さきほどまで真っ赤だった顔色は病人のように青白くなり、何かに絶望したかのようだ。

「ハラオウン執務官、次に行きましょう。あぁ、そうだ、一つだけ・・・いいお付き合いがどうしても嫌なら自主退職をお勧めします。屑にも屑なりの体面があるでしょうから」

笑顔で屑、屑と言ってのける雪鷹のその顔は言葉にできないくらいに清々しい。言われた男は気の毒なくらいに落ち込んで、というよりも絶望しているようだったが雪鷹が先に行ってしまったのとこれまで受けたセクハラまがいの発言を思うとさして同情する気にもなれず、フェイトもその部屋を後にした。駐車場まで戻ると車の前で雪鷹が待っていた。

「雪鷹、今のは何だったの？」

純粋な疑問ではなく雪鷹を疑う視線。十中八九、あの男が顔色を変えた原因は雪鷹が封筒に入れたあの書類にある。野暮用と言っていたので特に気にもしていなかったが、こうなってしまって聞かないわけにはいかない。

「別にたいしたことはしてないよ。フェイトも見ていた通り、いいお付き合いをしましょう、と軽く挨拶をしただけだ」

「誤魔化さないで。あの人に何を渡したの？さっき見てた書類には何が書いてあったの？脅しに屈しないって言ってたけど、あれはどういう意味？」

さきほどまでとは打って変わったような鋭い言葉。凛々しいその表

情は執務官という立場に相応しく、ある種の威厳と強さを感じさせる。執務官としての顔を浮かべたフェイトに雪鷹は苦笑を浮かべる。

「そういう顔をあの男の前でしてみせれば変に付け込まれることもないのに・・・どうせ、今までもあんなセクハラまがいのことを言われたんだろう？」

「そ、それは・・・そう、だけど・・・でも・・・」

呆れたような雪鷹の言葉にフェイトは顔を赤らめ、恥ずかしそうに俯く。今日ほど露骨な言葉を浴びせられることは滅多にないが、書類を提出にいくたびに小一時間はあの男から猥談交じりの小言を浴びせられるのが常だった。容姿に優れ、発育もいいのだから周囲からそういう対象として見られることはどうしようもないと半ば諦めていたが、それでも露骨にそういう視線を浴びせられるのはやはり良い心地はしない。

「あの男に渡したのは言わば今までやってきた悪事のリストとその証拠を幾つか。フェイトに対するセクハラ発言なんて目にならないようなものも含めて色々してたからな・・・自分がこれまでしてきたことを再認識させただけだ」

「・・・つまり、全部お見通しだぞって伝えたの？」

雪鷹の言葉の意味を理解したフェイトは半ば呆れた様子で言った。言うまでもなくフェイトは執務官だ。証拠さえ十分に揃えれば身内である管理局員でさえ逮捕することができる。そのフェイトに自分のしてきた悪事をちらつかされたら男が蒼白になるのも頷ける。脅し、というのはそういうことなのだろう。フェイトには、正確には雪鷹にはいつでもあの男を逮捕できる材料が揃っているのだ。あの

男もフェイトに対する態度を改めざるを得ない。

「今すぐ逮捕したいなら証拠や必要書類は準備してあるから言ってくれ」

笑顔でいってのける雪鷹がひどく恐ろしかった。

「証拠って・・・いつのまにそんなの準備したの？雪鷹が私の補佐になったのはこの前だよ？」

まさかフェイトの補佐になる前から準備していた、などということがあるはずがないと思いながら雪鷹に尋ねる。

「昨日の夜だ。提出書類をまとめている片手間で作った。昔からの癖でな・・・色々と調べていたら面白いくらい余罪で出てくるんでつい・・・迷惑だったか？」

最初に断っておくが、管理局員の不正の証拠を集めることは容易なことではない。管理局の捜査方法を熟知しているだけあって手口も巧妙で、万が一ばれたときの為に抜け道を用意していることも少なくない。それら全てを塞ぎ、完全に包囲網を作ってからでないと逮捕したくてもできないのだ。証拠集めだけとはいえ、間違っても片手間でできるものではない。

「そんな・・・どうやって・・・」

「情報部の特権でね。管理局内のデータベースならどこからでも自由に情報を引き出せるんだ。特秘事項扱いのものも含めてね。だから、それらしい帳簿や出納帳、物品管理リストを調べれば大抵の証拠は揃う」

待機状態のブレイドハートを指でいじりながら雪鷹は事もなげに言った。

「そんな簡単に証拠が集められるなら情報部が逮捕したらいいんじゃないの？」

「生憎、情報部に逮捕権はないんだよ。現行犯なら話は別だけど、それ以外の場合はどんなに証拠が揃っていても逮捕できない。まぁ、情報部のリストに載るような連中は逮捕する価値もない奴ばかりだからそんなこと考えたこともないけど」

どこか仄暗い笑みだった。それから先は踏み込んではいけない、とフェイトの本能が告げていた。踏み込めば絶対に後悔する。その確信がフェイトにはあった。理由はない。執務官の、あるいは女の勘だ。

「別に好きに情報が引き出せるからって悪事を働く人間はいないし、ああいう男に釘を刺す為に使うくらい構わないだろう？それとも、ハラオウン執務官はこれからもずっとあの男のセクハラに悩まされた方がよかったかな？」

執務官として雪鷹のしたことを認めたくはなかったが、そのおかげであの男から嫌がらせをされなくなるのは一人の女性管理局員としては喜ぶべきことであり、目を瞑っても許されるような気がした。

「次はこういうことをする前に私に一言相談して」

「畏まりました。ハラオウン執務官」

恭しくお辞儀をする雪鷹がおかしくてフェイトの口から笑みが零れた。

「で、これからどうする？港湾地区に行くのは昼からだろう？午前中はこれで終わりだ。一旦、六課に戻るか？」

「うーん、六課に戻ってもすぐに出なくちゃいけないから・・・」

いつもなら地上本部で一時間程度はセクハラ交じりの小言を聞かされるので地上本部で二時間程度はかかると見積もっていたのだが五分もかからず終わってしまったので予定は大きく崩れてしまった。今から二時間程度の空き時間をどう過ごすか、フェイトは時計を見ながら思案し、雪鷹に尋ねた。

「少しお茶にしない？近くに美味しいケーキのお店があるんだって。もちろん、雪鷹がよければだけど・・・」

尻すぼみのフェイトの言葉に雪鷹はまたも苦笑する。

「さっきとまるで別人だな・・・そんな自信なさそうな顔をするな。フェイトがそこに行きたいならはっきりそう言えばいいだろう？」

執務官としての顔とはまるで別人の、年相応の少女の顔だ。色恋沙汰に疎く、照れと羞恥を混ぜ合わせたかのような赤い頬は白い肌によく映えている。咲き始めた蕾のような初々しさは見ていて愛らしく、男性の庇護欲を煽る。しかし、男に媚びる所は欠片もない。大抵の男なら喜んで食いつくはずのお誘いだが、雪鷹はあくまでも雪鷹だった。

「今の俺はお前の補佐なんだ。フェイトがそうしたいなら黙ってそ

れに従うよ」

一緒にケーキを食べに行く、ということさえも雪鷹にとってはその程度のことでしかないのかとフェイトは悲しそうに目を伏せる。喜んでくれるとは思っていなかったが、これならまだ断られた方がよかった。今の雪鷹はフェイトの補佐だ。だから、頷いてくれただけなのだ。その事実がひどく寂しく、苦しかった。

「どうした？行かないのか？」

その場に立ったままで動こうとしないフェイトに雪鷹が声をかける。フェイトが誘ったのだから、目当ての店の場所はフェイトしか知らない。目に案内してくれ、と言っているのを見てフェイトは少しだけ心が楽になった。少なくとも、我慢してフェイトに付き合っているわけではないのだと、そう信じたかった。

・＊・＊・＊・

地上本部に車を停めたまま歩くこと十分少々、フェイトが言っていたカフェは最近雑誌などでも取り上げられ始め、話題になっているお店だった。店の前には折り畳み式のイーゼルに小さな黒板がかけられ、『Ｔｏｄａｙ’ｓ　ｍｅｎｕ』と書かれている。値段は少々高目だが、高級店と呼ぶほどの値段でもない。若者がちょっとしたデートをするにはぴったりのお店に見えた。中に入ると店員が人数と喫煙席か禁煙席かを尋ねてきた。

「えーと、二人、喫煙席で・・・」

「いや、禁煙でいい」

普段、六課で煙草を吸えない雪鷹のことを思って喫煙席と言ったのだがその雪鷹から禁煙席と言われ、フェイトは驚いた。

「え、でも、いいの？」

フェイトとしてはもちろん禁煙席のほうがいい。折角、美味しいケーキを食べるのだから煙草の煙は遠慮したい。しかし、それでは雪鷹が窮屈ではないか、と思って首を傾げたが雪鷹は何も言わずに頷くだけだ。店員もどうすればいいのか迷っているようだったのでフェイトはすぐに頷いた。

「禁煙席でお願いします」

そう言って二人は壁際の席へと案内された。丸い白テーブルを挟むように小さな椅子が二脚置かれている。その席だけを切り取ったかのように窓から光が差し込んでいる。紛うことなきカップル席だった。カウンターや他の席も空いているにも関わらず、この席に案内されたということは、やはりそう見られているということなのだろう。フェイトは頬が熱くなるのを感じた。

「どうした？座らないのか？」

案内された席に迷うこともなく雪鷹は腰を下ろす。店員も促すような目でフェイトを見ている。今更、席を変えてくれ、などと言えるはずもなくフェイトも仕方なく席についた。店員はテーブルの上にメニューを一つ置くと、決まったらお呼びください、と一礼してそ

の場から去っていった。その声が少し笑っているように聞こえたのはフェイトの聞き間違いではないはずだ。

「フェイトは何にする？」

メニューを開きながら雪鷹がフェイトに尋ねる。季節の果物を使ったケーキやタルト、定番のショートケーキやチョコレートケーキなど幾つものケーキの写真が並んでいる。しかし、フェイトはそれどころではない。

「その・・・雪鷹は何も思わないの？この席に案内されて・・・」

この席、とは言うまでもなく今二人が座っている席のことだ。どう贔屓目に見てもカップル席にしか見えない。他の席が空いているにも関わらず、この席に案内されたということが何を意味するのかわからないフェイトではないし、雪鷹もそれを理解できないほど愚鈍でもない。

「別にそう見えるならそう思わせておけばいいだろう？」

やはり、雪鷹もその意味は理解していたようだがフェイトとは明らかに受け取り方が違っていた。

「で、でも・・・その私達、カップルに見られてるんだよ？」

そこに何も思わないのか、とフェイトが無言で雪鷹に語りかける。

「だから？それならそれでもいいだろう。子供じゃないんだからいちいち気にすることでもないし・・・そんなに嫌なら今から席を変えてもらうか？」

「い、嫌じゃないよ。変えなくていい。このままがいい」

慌てて首を横に振るフェイトを見て雪鷹は可笑しそうに笑う。雪鷹もフェイトの言わんとすることは理解できたが雪鷹にとってそれはいちいち気にするほどのことでもなく、むしろ、フェイトが気にし過ぎているだけだろう、というのが本音だ。管理局の制服を着ているとはいえ、年頃の二人が並んでいたらそれらしく見えてしまうことは別段おかしなことではない。加えて、店の雰囲気も足休めにふらっと入れるような場所ではないから尚更だ。それを承知の上でこの店に連れてきたのではないか、と雪鷹は内心首を傾げていた。

「フェイトは気にし過ぎなんだよ」

「そう・・・かな？」

どこかしょんぼりした様子でフェイトは肩を落とす。雪鷹の言葉は言いかえれば、雪鷹は気にしていない、ということだ。一人だけ舞い上がっていたのだと気付くと妙にむなしく思う。雪鷹と二人きりになれて嬉しいはずなのに、なにかが胸の奥で痛む。

「何も考えないのはもちろん愚かしい。だが、考え過ぎも同じくらい愚かなことだ。何事もほどほどに。で、何にする？」

そう言って雪鷹はフェイトにメニューを差し出した。その笑顔を見ると悩んでいたことが馬鹿馬鹿しく思えてしまった。何も考えずに生きていくのは以ての外だが、少なくともこの一瞬くらい、美味しいケーキのことだけを考えてもいいだろう。フェイトはそう心を切り替えた。フェイトも多くの女の子の例に漏れず、甘いものは大好きだ。今話題のお店の彩り豊かなケーキに興味がないはずはないの

だ。

「えーと・・・」

・＊・＊・＊・

「・・・雪鷹、それ本当に全部食べるの？」

フェイトは雪鷹の前に並んだケーキの数を見て苦笑した。ブルーベリーのタルトにレアチーズケーキ、苺を練り込んだロールケーキ、抹茶風味の和風ケーキ、アップルパイ。合わせて五つのケーキが雪鷹の前に並んでいた。ちなみにフェイトの前にはチョコレートでデコレーションされた丸いケーキの一つだけだ。

「あぁ、糖質は脳細胞にとって大事なエネルギー源だからな」

どこかずれた雪鷹の答えにフェイトは呆れた顔で苦笑する。確かにケーキの一つや二つだけでは成人男性の胃袋が満たされるはずがないことは頷ける。しかし、これは三度の飯ではないのだ。そこまでしっかり食べなくてもいいのでは、と思わないでもないが本人はたくさんのケーキを前にして嬉しそうなのでフェイトもそれ以上は何も言うつもりはなかった。ケーキの味は評判通り、上々で満足のいく一品だった。

「美味しいね」

「あぁ、そうだな」

他愛のない二人だけの時間。それが何よりも愛おしい。所詮、恋人の真似事でしかないことはフェイトも理解していた。雪鷹もきっとフェイトのことを好いてくれてはいるのだろうが、好きの質は全く違う。雪鷹の好きは尊敬であり、敬愛の念に近い。一方、フェイトの好きは言い換えるなら憧れであり、情愛だ。おそらく、それ以上二人の想いが重なり合うことはない。それを惜しいとも寂しいとも思うが、それでもその事実を受け入れることに迷いはなかった。雪鷹が今のままを望むのなら、フェイトはそれに従うだけだ。たとえ、雪鷹が他の誰かを想っているとしても、フェイトの気持ちを押し付けることだけはしたくなかった。

その先に待っている破滅をフェイトは知っていた。あまりに強過ぎる愛は人を狂わせ、全てを壊してしまう。そうならない自信と冷静さは備えているつもりだが、全くないと言い切ることもできない。フェイトの母、プレシア・テスタロッサがまさしくそうだった。フェイトの記憶に、すなわちアリシアの記憶に残されたプレシアはいつも優しそうな笑顔を浮かべて、アリシアを愛していてくれた。本当に優しい人だった。だから、その大き過ぎる愛故に、壊れてしまったのだ。それを知る者として、娘として、母親と同じ轍を踏むことだけはしたくなかった。

「さて、そろそろ港湾地区に行く時間か？」

時計を見ながら雪鷹が呟くとフェイトもそれに同意するように頷く。席を立ち、フェイトが伝票に手を伸ばそうとした途端、雪鷹がそれを遮って伝票を攫い取った。

「まぁ、こんなものか・・・」

伝票に書かれた金額を見て雪鷹は事もなげに呟くとそのままレジまで行き、会計を済ませてしまった。店の外に出た所でフェイトは雪鷹を呼び止める。

「ちょ、ちょっと雪鷹、待ってよ。私の分のお金、払うから」

そう言って財布を取り出そうとするが雪鷹はやんわりと、しかし、はっきりとそれを制した。

「いいよ、五個も六個も変わらない」

「でも、奢ってもらうなんて、なんか悪いよ」

雪鷹の好意に素直に甘えてしまえばいいのに、と心のどこかで想いながらもフェイトは食い下がる。生来の生真面目さゆえに理由もなく奢ってもらうことをよしとはできなかった。

「悪くなんてないだろう?それとも、何か理由が必要なのか?」

雪鷹に聞かれ、フェイトは控えめながらも小さく頷く。フェイトの中では嬉しいという気持ちよりも申し訳ないという気持ちの方が強いのだ。損な性格であることはフェイト自身も薄々気付いてはいるのだが、それでもやはり変えられないものは変えられないのだ。

「なら、前に出撃を代わりに行ってもらったことがあるだろう?その礼だ」

前の出撃とは雪鷹がティアナの振舞いに激怒したあの夜の出撃であ

る。雪鷹の言う通り、フェイトは雪鷹の代行で出撃した。しかし、あの時は状況が状況だっただけにフェイトが出撃せざるを得なかった。しかも、とってつけたようにその時の礼だと言われても何か釈然としないものが残る。しかし、雪鷹がフェイトにケーキの代金を払わせないつもりであることは明白でこれ以上言い争っても不毛なことをフェイトにもよくわかった。

「ありがとう、雪鷹」

フェイトが礼を述べると雪鷹はそれでいい、と言わんばかりに頷いた。嬉しそうと表現するには雪鷹の顔はあまりに冷たく、澄ましているように見えてけれども。

「次は港湾地区で密輸品の調査か・・・」

「そうだね。でも、まだ時間はあるし、もう少しゆっくりしても大丈夫だよ」

時計で時間を確認してフェイトは雪鷹の隣に並ぶ。流石に手を繋ぐことはできなかったが、隣を歩くくらいのことは許されるはずだ。誰が許すのか、と聞かれると返答に困るがそれでいいのだ。今はまだ、恋人の真似事でもいい。いつか、真似事でなくなればそれでいい。もしも、それが叶わないときは、と考えフェイトは頭を振る。考え過ぎるのはよくない。今はこの束の間の幸せに存分に浸っていれば、それでいいのだと自分自身に言い聞かせて。

ＥＤ『片想い』　Ｓｏｎｇ　ｂｙ　奥華子

25『ある日のある執務官の日常』（後書き）

フェイトと別れた雪鷹
向かった先は地上本部

そこで雪鷹が出会うのは・・・

情報一課の闇が動き始める

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
２６『ある日のある臨時執務官補佐の日常』

怨むなら――

――悪事に手を出した自分自身を怨め

Intermission 25.1

Intermission 25.1

港湾地区での仕事もフェイトが思っていたよりも早く終わり、雪鷹はフェイトに切り出した。

「今日の予定はもうこれで全部終わっただろう？この後はオフシフト扱いってことでいいか？」

「うん、そうだね。どこか行くきたい所があるなら帰る途中に寄っていくけど？」

フェイトの申し出に雪鷹は首を振る。てっきりどこか寄りたい所があるのだとばかり思っていたフェイトは肩透かしをくらった気分だった。

「地上本部に行きたいんだが、ここからだと六課の隊舎と反対側だからな」

地上本部、という言葉にフェイトは困ったように苦笑を浮かべる。雪鷹の言う通り、地上本部に寄ってから六課に帰るとなるとかなりの遠回りになる。しかし、フェイトが気になったのは地上本部に行くその目的だ。仕事もないのに、雪鷹が地上本部に赴く理由にフェイトは一つしか心当たりがない。

「また煙草？少しは控えた方がいいよ」

禁煙を求めることは既に諦めていた。しかし、健康に悪いもことはあまりしてほしくない。そんなフェイトの想いを感じ取ったのか雪鷹は苦笑いをしながらも頷く。

「けど、どんなスーパーカーも燃料がないと走れない。そうだろう？」

雪鷹はやはり雪鷹だった。フェイトは呆れた様子でため息を零す。悔しいが、今の雪鷹を止める術をフェイトは持たない。それぐらいに雪鷹の笑顔は魅力的で、奔放で、輝いていた。

「あんまり遅くならないように帰ってきてね」

雪鷹の方が年上であることは百も承知だが、それさえ忘れてしまうくらい無邪気で、嬉しそうに見えなくもない。今日一番の笑顔に見えた気がしたのはおそらくフェイトの気のせいではない。ほんの少し胸が痛んだ気がしたが、それを無理矢理振り払う。

「途中まで送ろうか？」

おそらく、雪鷹は断るだろう。そう思いながらもフェイトは雪鷹に尋ねずにはいられなかった。案の定、雪鷹は首を横に振る。雪鷹にとって、フェイトの隣にいることは一言で言ってしまえば仕事の一つであり、オフシフトになってしまえば一緒にいる理由はなくなってしまうのだ。それがただ単純に寂しくて、切ない。

「そっか・・・それじゃ、わたしはもう、帰るね」

そう言ってフェイトは車に乗り込む。もし、ここであっさり引き下がらずにいれば、と考え、フェイトは小さく首を振った。それをし

ないのはきっと怖いからだ。フェイトが雪鷹から明確に拒絶されることを恐れているから、その一歩が踏み込めないのだ。

「・・・私、こんなに臆病だったんだね」

誰にも聞こえないようにフェイトは呟いてアクセルを踏む。動き出した車はもう止まらない。ミラーに映る雪鷹の影がみるみる小さくなっていく。しかし、フェイトは止まらない。怖くて、止まれなかった。フェイトを見送った雪鷹は車が見えなくなるとふぅとため息を零した。

「まったく・・・こんな時に仕事をいれやがって・・・」

それまでの笑顔から一変して忌々しげに呟いた雪鷹の表情は怒りそのものだ。待機状態のブレイドハートを取り出して通信を入れる。

「あぁ、俺だ。悪いが急に仕事が入った。あぁ、そうだ・・・詳細はあとで下達する。すまないな・・・」

26『ある日のある臨時執務官補佐の日常』（前書き）

もしも、この世の全てに意味があるなら

この行動に意味があるなら

この出会いに意味があるなら

それはあまりに残酷で、無慈悲だ

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　始まります

26『ある日のある臨時執務官補佐の日常』

26『ある日のある臨時執務官補佐の日常』

地上本部についた雪鷹は真っ先に喫煙所へと向かった。昼も半ばを過ぎたこの時間帯はほとんどの職員は勤務時間中で、喫煙所の人影はまばらだった。しかし、雪鷹の探している人物はある意味では勤務時間に拘束されない人物だ。そして、目当ての人物は喫煙所の隅に一人座っていた。

「お久しぶりです、オーリス三佐」

「ユキタカ曹長・・・」

雪鷹を見た途端、オーリスの顔がパッと明るくなり、笑顔が広がる。

「久しぶりね。あ、そうだわ、はい」

オーリスは預かっていたライターを雪鷹に手渡す。躍動感に溢れる鷹の意匠が彫り込まれた一点もののライターはずっしりと重く、それでいて優しいぬくもりに満ちている。

「なんだか前より綺麗になってるような・・・」

ライターを受け取り、雪鷹はポツリと呟く。その言葉にオーリスは恥じらうように俯く。

「その・・・オイルが少なくなってたみたいだから足しておいたの

よ。その時ちょっと零して汚しちゃって・・・それでついでに磨いたり色々したから」

オイルを換えたならはっきりとそう言いきればいいのに、どこか言い訳めいた口調。そんなオーリスの言葉に雪鷹は違うよ、と首を振って見せる。

「いや、ライターじゃなくてオーリス三佐がだよ。前より綺麗になったというか雰囲気が少し変わったような気がする」

オーリスを正面から見つめ、躊躇う素振りの欠片も見せずに雪鷹は言い切った。オーリスは一瞬驚いた顔を浮かべ、すぐに頬を薄く染め上げた。雪鷹の顔を直視できず、恥ずかしそうに視線を逸らし、しかし、満更でもなさそうに仄かに笑みを浮かべる。

「そ、そうかしら？ありがとう」

もちろん、オーリスも妙齢の女性だから人並みに化粧はする。しかし、雪鷹と会うようになってからいままで以上に身なりに気を遣うようになった自覚はある。美人ながらもどこか固く、冷たいと言われていた雰囲気を少しでも改善する為に言葉遣いや服装を少しずつであるが変えて努力してきたのだ。その努力の結果を一番見てほしかった人物に言われたのは嬉しくないはずがない。しかし、手放しで喜ぶわけにいかなった。軽い女に見られてしまうかもしれないという不安と、三佐という立場にある人間に相応しい態度でいなければならないという自負心がオーリスにそれを許さなかった。

「そういう貴方も少し変わったのではないかしら？前より、雰囲気が柔らかくなったような気がするわ」

実際の所はどうなのかオーリスにはわからなかったが、照れ隠しを意味も込めてオーリスは雪鷹に言葉を返す。ただ、オーリスの気のせいかもしれないが前よりも心なしか表情が明るくなったように見えなくもない。初めて雪鷹にあった時はどこか人を寄せ付けない刺々しさがあった。爆弾、という不穏な言葉が聞こえなければ、あるいはオーリスも声をかけなかったかもしれない。それぐらい雪鷹は人を近づけない雰囲気を持っていたのだ。話してみるとそうでもないことはすぐにわかったのだが、それでもやはりどこか冷たいものが雪鷹からは感じられた。

「そうかな？それはきっと、久しぶりに貴女に会えたからだよ」

「ありがとう、お世辞でもそう言ってもらえると嬉しいわ」

飛びあがりたいくらい嬉しい気持ちを必死に抑えて笑顔を返す。もちろん、雪鷹の言葉がお世辞であることはオーリスも理解している。しかし、それでも嬉しいと思ってしまうのが乙女の、乙女というほどもう若くもないが、心情だ。頬が赤くなっていくのが嫌でもわかるが、オーリスは恋のいろはも知らないほど初心ではない。平静を装って笑っていられるのは大人の余裕だ。

「そういえば、聞いたわよ。ホテル・アグスタで色々とあったそうね」

「色々といえばまぁ、色々あったかな」

煙草に火を点け、ふぅと煙を吐き出す。その顔は笑ってこそいるがどこか苦々しく見えなくもない。雪鷹にとってはあの日は確かに色々あった日ではあった。もちろん、それをオーリスが知っているはずはないのだが、それを指摘されているようでどうにも素直に笑え

なかった。

「ガジェットの他にも未確認（アンノウン）の魔導師も出たという話も聞いたわ・・・ここだけの話、オークションの裏で行われる予定だった密輸品も幾つか強奪されたそうよ」

「流石は地上本部、情報が早いね・・・」

オーリスが口にしたのは地上部隊でもまだ一部の人間しか知らない極秘情報である。特に未確認の魔導師に関しては現場にいた機動六課のメンバーを除くと、六課の後見人の一人であるカリム・グラシアさえまだ掴んでいないはずの情報だ。オーリスがそれを知り得るのも地上本部の総司令、レジアス・ゲイズ中将の副官だからであろう。

「映像があるが、見せようか？」

「私に見せて構わないの？」

オーリスも素人ではない。雪鷹が見せようとしている情報がどれほどの機密事項なのかわかる。同じ管理局員だからといって迂闊に見せることはできない。下手をすれば見た側も見せた側もどちらの処分の対象になる。

「私はともかくオーリス三佐が処分の対象になることはないよ」

その言葉にオーリスの顔がわずかに強張った。オーリスの父親は言わずと知れた地上の守護者、レジアス・ゲイズ中将だ。正義感に熱く、武闘派と知られるレジアスだが、この程度の罪状で身内を罰するような冷血漢ではない。オーリスだけならその権力を以てすれば、

揉み消すことは決して難しいことではない。しかし、そんなことはどうでもよかった。雪鷹もまたオーリスをレジアスの娘としてしか見ていなかったのだと、そう突きつけられたようで、裏切られたようで、寂しかった。

「俺がさせない。そんなことは絶対に、させない」

「えっ・・・」

思いもしなかった雪鷹の言葉にオーリスは驚きの表情を浮かべた。雪鷹は、させない、と言い切った。もちろん、曹長程度の雪鷹にそんな権限があるはずもない。それでも雪鷹はさせないと言い切ったのだ。できる、できないの問題ではなく、雪鷹がそう言ってくれたことが、レジアスの娘としてではなく三等陸佐としてではなく、一人の女性として見てくれたことが何よりも嬉しかった。強張っていた顔が緩み、笑顔に変わる。

「何かおかしいことを言ったかな?」

「いえ、おかしくないわ。」

オーリスは笑いながら首を横に振る。

「まぁ、いいや・・・これがそのアンノウンの映像だ」

目の前にモニターを出すと雪鷹は先日戦った騎士の映像をオーリスに見せた。先端が薙刀状になっている槍を構えた偉丈夫。身なりこそやつれているが、その腕も心も一級品であることは言う間もない。

「何か知っていることがあれば・・・オーリス三佐?」

オーリスから何らかの情報が得られるとは思っていなかった雪鷹は社交辞令的な意味合いを含めて尋ねたつもりだったが、映像を見つめるオーリスの表情の変化に気付き、声を落として尋ねた。それまで笑っていた目元は大きく見開かれていた。まるで信じられないものを見るかのようなその表情に雪鷹は何かを知っているのだと確信した。

「オーリス三佐、この男について何かご存知で?」

「い、いえ、そんなはずないわ・・・きっと、他人の空似よ」

慌ててオーリスは首を振って否定する。しかし、その言葉は雪鷹を否定しているのではなく、オーリス自身に言い聞かせているような口ぶりだ。

「その人でもいい。教えてくれないか?」

オーリスの顔に影が差し、そのまま黙りこんでしまう。話しだす素振りのないので、雪鷹は早々に話題を切り上げた。垣間見た影は興味本位で踏み込むには深すぎた。それを見極める目については人一倍優れている自負の雪鷹だ。わざわざ地雷を踏むほど愚かな人間ではない。

「そういえば、噂で聞いたんだが、レジアス中将は地上防衛の要として大がかりな兵器を作っているそうだね」

「あぁ、アインヘリアルのことね・・・まだ公にはされていないけど、地上本部の中では公然の秘密も同然・・・地上防衛用の巨大魔力攻撃兵器、アインヘリアル。単純な火力だけならオーバーSラン

ク魔導師さえ凌ぐ代物・・・」

影を拭えないままオーリスは呟く。

「まさしく地上防衛の要、か・・・想像もつかないな・・・」

オーバーSランク魔導師を凌ぐ火力と言われても想像がつかないのか、雪鷹は呆れたように首を振る。どこかおどけたようにも見えるその顔をオーリスは否定できない。それはオーリスも同様なのだ。アインヘリアルの火力の凄まじさは完全に規格外だ。おそらく、アルカンシェルを除けば管理局の兵装の中でも一位、二位を争う火力を秘めている。もちろん、それは地上の守りの要に相応しいことには違いないが、その火力の凄まじさに一抹の不安を覚えないこともない。

「ユキタカ曹長、貴方はあれが本当に地上防衛の要になると思っていて？」

あれ、とはいうまでもなくアインヘリアルのことだ。火力は申し分ないが、所詮は固定砲台だ、どこにでも撃てるわけでもなく、また火力が大き過ぎる故に運用には色々と制限がついて回ることだろう。現状でさえ、運用許可について本局と議論を進めている最中であり、付け加えるなら議論の状況はあまり芳しくない。本局はもちろん、地上本部の一部からも否定的な意見が聴こえているのが実情だ。

「そうだね・・・もし、機動六課をその兵器一つや二つで抑えられるかというとたぶん無理だね。高町一尉の火力は言わずもがな。ハラオウン執務官のスピードを捉えられるとは思わないし、効果範囲も八神二佐には及ばないだろうからな・・・」

雪鷹の指摘にオーリスは俯く。地上防衛の要と謳ってはみたもののやはり、その程度の兵器なのだろうか、自然と顔が下を向いた。

「でも、それはある一面的な見方でしかないからね。仮にその兵器を運用するならきっと魔導師部隊も一緒に動くことになるだろうからそう簡単にはいかないだろうし、抑止力としての効果は十分に高い・・・エース級の魔導師に対してもある程度の効果はあると思うよ」

詳しい性能が分からないから偉そうなことは言えないけど、と付け加えて雪鷹は謙遜したように笑う。その笑顔がひどく自然で、含みがないことにオーリスは驚きながらも自身の頬が緩むのを感じた。

「現役の魔導師にそう言ってもらえると正直心強いわ。ありがとう」

「どういたしまして。曹長風情に何ができるというわけでもないけどね」

嫌みにも聞こえるその言葉も雪鷹が言えば謙虚な態度に見えてしまうのはやはりその笑顔のせいだろう。オーリスは懐から煙草を取り出して、火を付ける。吐き出した煙が空気に溶けていく。

「ユキタカ曹長、この後は何か予定があるかしら?近くにいいお店があるのだけど、よかったらどう?」

この前のお礼もしたいから、と含みを持たせながらオーリスは雪鷹をまっすぐに見据えて尋ねる。雪鷹は一瞬嬉しそうな笑顔を浮かべたがすぐに残念そうに首を振った。

「折角の申し出だけど、今日はまだ仕事が残ってるんだ。またの機

会に誘ってください」

「そう・・・残念ね。仕事、頑張って」

オーリスも残念そうな顔を浮かべたがすぐに笑顔を取り繕ってみせる。そして、煙草の火を押し消してそのまま立ちあがった。

「・・・また、会えるかしら」

「会えるよ、必ず」

そう言って雪鷹はオーリスにあのライターを渡す。あんな些細な約束を律儀に守っているのだと思うと可笑しかったが、嫌な気持ちは全くない。ただ一緒に煙草を吸うだけの関係だ。ただ、それだけでしかないことはお互いに理解している。しかし、それだけで片づけることのできないものが確かに二人の間にはあるのだ。そうオーリスは信じていた。だから、ライターを受け取ったオーリスは何も云わなかった。雪鷹も何も云わずにただ敬礼をし、オーリスも黙って敬礼を返した。オーリスを見送った雪鷹は煙を吐き出して、煙草を灰皿に押し付けて消す。

「さて、そろそろ動くか・・・」

周りに人影がないことを確認し、雪鷹は呟く。笑みの消えたその表情は先程までとはまるで別人だった。笑顔という仮面を脱ぎ捨てた雪鷹の視線は氷よりも冷たく、鋭い。雪鷹の目の前にモニターが浮かび、雪鷹のよく知った顔が映し出される。

「こちら、氷の懐剣（アイス・タガア）・・・準備は完了した。いつでも動ける」

「緊急ですまないな。動かせる人間がお前しかいなかったんだ」

モニターに映し出されたのは情報一課の課長だった。すまない、と口では謝りながらもその顔に詫びている雰囲気は皆無だ。それ自体は決して珍しいことではないので雪鷹は気にも留めずに受け流す。

「それは構わない。一課の人材不足はいつものことだからな。今回の標的は？」

「地上本部の内勤をしている連中だ。質量兵器と危険度の低いロストロギアの横流し・・・罪状としては決して重くないが、背後に佐官級の人間が絡んでいるらしい。とあるテロ組織との癒着しているという話も聞く」

「つまり、内勤連中を拷問して、黒幕を吐かしてから、その黒幕の佐官諸共片付けろっていうのか？俺一人でするには少々荷が重いな・・・」

上司の言いたいことを簡潔にまとめて雪鷹はため息を零した。やれ、と命令するのは簡単だが実際にするとなるとかなり面倒な仕事だった。ただ標的を殺すだけならすぐに片付くが、黒幕を聞き出さなければならないとなると手間は二倍にも三倍なる。嫌そうな顔を浮かべた雪鷹に上司は淡々と告げる。

「一人でしろ、とは言っていない、人を使えばいいだろう？」

「あいつらにこの仕事はさせない。そういう取り決めだ。あいつらにさせるくらいなら俺が全部一人でやる・・・結果を出せば、どうだっていいだろう」

苛立った雪鷹の声。本気で怒っているということがモニター越しに伝わったのか上司の男はそれ以上何も言ってこなかった。

「まぁ、期待しているよ、氷の懐剣（アイス・タガァ）。標的のリストはデバイスの方に送っておいた。できれば今晩中に片を付けてくれ。方法は問わない。君の言う通り、私が求めているのは結果だからね。そうそう、今夜だけはデバイスと魔法の使用制限を解いておいたから、気が向いたら使ってくれ。良い結果を期待している」

そう言うと男はモニターと共に消えてしまった。一人残された雪鷹は苛立ちをぶつけるようにすぐそばの壁に拳を叩きつける。ガツンという鈍い音に喫煙室にいた数名が驚いて顔を向けるが、鬼気迫る雪鷹の目を見るとすぐに顔を逸らし、何も見ていないかのように振舞う。

「ブレイドハート、リストを見せろ」

《Ｙｅｓ，ｍｙ　ｌｏｒｄ．》

映し出された標的のリストに目を通した雪鷹は盛大にため息を零した。

「馬鹿どもが・・・怨むなら悪事に手を出した自分自身を怨め」

26『ある日のある臨時執務官補佐の日常』（後書き）

蠢く闇

忍び寄る影

それはもう一人の雪鷹

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
２７『ある夜のある臨時執務官補佐の日常』

――悪魔でいいよ・・・悪魔らしいやり方で話してもらうから

Intermission 26.1

Intermission 26.1

雪鷹と別れたオーリスは真っ直ぐに上司であり、父親でもあるレジアス・ゲイズ中将のもとへ向かった。部屋ではレジアスが額に皺を寄せながら、書類に目を通していた。アインヘリアルの運用云々について書かれた書類だ。オーリスが戻って来たことに気付いたレジアスはオーリスを一瞥してすぐに書類に視線を戻す。

「・・・中将、一つお聞きしてもよろしいですか？」

「なんだ？」

少々苛立ちの込められた声。無論、それはオーリスに対してではなく、この書類を送って来た本局の人間達に対するものだ。

「見ての通り、わしは忙しい。手短に頼む」

「・・・ゼストさんは本当に殉職したのですか？」

ゼストの名前が出た瞬間、レジアスの顔色が変わる。一瞬真っ赤に染まったかと思うと覇気のない表情で視線を落とした。

「・・・あぁ、そうだ。ゼストは死んだ。わしのせいだ・・・」

ゼストの話をするときのレジアスはいつもこうだった。地上の守護者の面影は煙のように消え去り、実際の年齢以上に老けこんで見えてしまう。そこにあるのは深い後悔と自責の念だ。ゼストが殉職し

た、と聞いた時のレジアスを今でもオーリスは覚えている。人目を憚ることなく涙を流し、自分自身を責め続けたその姿は忘れることができない。オーリスが父の涙を見たのもそのときの一度だけだった。母親が事故で亡くなったときでさえ気丈に振舞い、オーリスの前では決して涙を見せなかった父があのときだけはただただ泣き続けていたのだ。忘れられるはずがなかった。

「・・・だが、なぜ今更そんなことを聞く？」

「実は、ゼストさんによく似た人物を先日見かけて、それで・・・遺体も見つかっていないと聞いています。なので、もしかすると・・・」

レジアスはそれを聞くと小さくため息を零す。

「ありえん。ゼストが生きているはずなどない・・・もう、八年も前のことだぞ。仮に一命を取りとめていたのなら、わしが把握しておるはずだ。万が一の可能性を考えて、方々調べ回ったからな・・・今更生きているとは思えんな」

あくまでレジアスは冷静だった。オーリスの言う通り、ゼストの遺体は未だに発見されていない。ゼストの部隊が全滅した、という知らせを聞いた時はレジアスもその生存を諦めたが、遺体がまだ見つかっていないとわかってからは万が一の可能性を信じて、手を尽くし、探し回った。しかし、何も手掛かりがつかめず、時間だけが過ぎていったのだ。もう、八年の月日が流れてしまった。

「あいつは、ゼストはもういない・・・いないからこそ、あいつの守りたかった地上の平和をわしが守らねばならんのだ。その為にここまで上り詰めた。アインヘリアルも必ず本局に申請を通す・・・

その為なら、わしは何も厭わん」

レジアスは持っていた手に力を込める。書類に皺が寄っていくがそれを気にするレジアスではない。

「命をかけても守らねばならぬものがあるのだ。誰にも邪魔はさせん」

レジアスの意志は鋼よりも固く、強く、微塵も揺らぐことはなかった。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　２６．１（後書き）

どうも、月兎です。
今回はレジアス中将のお話でした。
二次創作だと悪役か、あるいはいじられ役として描かれることが多いですね。どちらかというとファンから嫌われてるキャラかもしれませんが、個人的にはけっこう好きなキャラです。

善悪の判断や方法云々は別にして、レジアスの主張は一貫して、地上の平和を守る、でした。非人道的と呼ばれた人造魔導士や戦闘機人も結局は地上の平和を守る為に必要なだけでしたし…少なくとも、レジアスの主張は個人的な利益を求めたものではなく、ある意味では清廉潔白です。

また、レジアスははやてや教会の人間と違い、魔導士の資質はありません。はやて達に『持たざる者』の苦しみが理解できるはずもないですからね。地上と本局の確執を抜きに考えてもお互いに理解し合えたかどうかは疑問です。

ついでに付け加えるなら、はやては指揮官とはいえ所詮、現場の人間ですからね。レジアスとはやてとでは背負っているものの重みも戦う土俵も違うんです。単純に比較しても無意味というか無駄というか…

地上部隊に何人くらいいるのかわかりませんが、中将という役職を

自衛隊に無理やり当てはめるなら旅団長や師団長、あるいは方面総監くらいでしょうから何千人、何万人を指揮しなくてはいけない立場なんだと思います。そういうのを無視してレジアスを悪役扱いするのはどうなんでしょうね…

まぁ、まとめると安易なレジアス中将アンチはなんだかな…の一言なんですけど。

次回は今までよりもはるかに鬼畜な雪鷹が登場しますのでお楽しみに♪ではでは

27『ある夜のある臨時執務官補佐の非日常』（前書き）

もしも、管理局が正義だというのなら

管理局の悪は誰が裁くのだろう？

俺の罪は誰が裁くのだろう？

誰も俺の罪を裁きはしない、否、裁くことができないだろう。きっと…

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　始まります

27『ある夜のある臨時執務官補佐の非日常』

27『ある夜のある臨時執務官補佐の非日常』

業務時間が終了すると逃げるように地上本部を後にした影が一つ。午前中、フェイトにセクハラまがいの言動を繰り返していたあの男である。まるで何かから逃げるように人通りの少ない路地を進んでいく。

「なんなんだよ、あの男は・・・」

男の手には雪鷹に渡された書類が握られている。そこに書かれているのは男がこれまでやってきた不正の数々だ。法務関連に携わる部署という立場を利用して男がこれまでに積み重ねてきた余罪は数えきれないくらいある。質量兵器の横流しを筆頭に、書類の改竄、横領、恐喝、その他諸々に男は手を染めてきた。しかし、証拠の隠滅には万全を重ねてきた自信があり、万が一気付かれたとしての男の地位と立場を考えれば揉み消すこともわけないはずだった。その自信は脆くも崩れてしまった。

「これぐらい管理局員なら誰だってしてることじゃないか！！」

もちろん、男の言う通り管理局員全てが不正行為をしているわけではない。ほとんどの管理局員は法と平和の守護者の名に恥じぬ振舞いをしており、この男のように悪事に手を染める外道はほんの一握りしかいない。しかしというか、残念ながらというか、道を誤る管理局員が皆無というわけでもない。この男もはじめは健全な管理局員だった。道を外れたきっかけは同僚の不正を発見してしまったか

らだ。それなら俺も、と手を出したが最期。坂道を転げ落ちるように男はその手を黒く染めていったのだった。

「どうして俺だけがっ！！」

他の連中もしているのに、と言いかけて男はあることに気付いた。人通りを避けていたとはいえ、周りがあまりにも静か過ぎる。不審に思って周囲を見渡してみるが人影の一つもない。

「な、なんだ、これは一体！？」

男が魔導師であったなら、そこが封時結界によって切り取られた空間であることにすぐに気付けたのだが生憎この男に魔導師の素養はない。魔導師でない男が外部と連絡をとることはもちろん、自力でこの空間から出ることなどできるはずもない。異常事態であることだけは理解した男は慌て始めるが、どうすることもできない。

「我が園（その）に――――」

ふいに空気が揺れる。ただの詠唱とは異なる、その響き。それは祈りのように美しく、儚い。まるで唄うっているかのように、優雅で、ゆったりとした声音。魔力の躍動が、漆黒の世界を揺らす。突如として聞こえてきたその声に男は体を震わせる。何が起きているのかは理解できなかったが、何か危険なことが起きようとしているのだとその本能が告げていた。

「――――六つの花散るひさかたの」

その光景は神秘的でさえあった。淡い青白い光がたゆたいながら男を包み込んでいく。世界を包む魔力が胎動している。大気が震え、

天が静まりかえる。理解できない事象に恐怖した男は脱兎の如く、その場から走り出す。しかし、逃げられる場所がここにあるはずなどないのだ。

「天(あめ)より乱れ吹き荒ぶらん――――」

《Ｄｉａｍｏｎｄ(ダイアモンド)　Ｄｕｓｔ(ダスト)》

次の瞬間、世界が凍てついた。生きとし生けるもの全てが屍の如く、凍りつきその自由を奪われる。当然、男も全身が凍りついていたのだが、奇妙なことに首から上は凍ることなく残っていた。

「な、なんなんだ、これは一体！？」

「狭域殲滅型氷結魔法『Ｄｉａｍｏｎｄ(ダイアモンド)　Ｄｕｓｔ(ダスト)』一定空間内、具体的にいうと術者の中心とした半径数十メートル内の任意の空間を瞬時に凍らせる多人数戦に特化した魔法だ。本来ならお前のような屑に使う魔法ではないんだが、最近使う機会がなかったんで練習も兼ねて使わせてもらった」

男の悲鳴に律儀に答える一つの影、それは紛れもなく雪鷹だった。しかし、その格好は普段のバリアジャケットとも管理局の制服姿とも違っていた。上衣はほとんど袖無しの黒い単衣――筒袖――で袖の長さは二の腕の半ばほどもない。両腕には肘から手首まで鈍く銀色に輝く籠手がはめられている。下は上と同じ黒の袴だが裾は足首で絞られていて、白い足袋を履いていた。そして、なにより異様なのがその顔につけられた一枚の仮面だった。墨で塗り潰したかのような黒一色の面。目の部分だけがその形に切り取られている他は何も装飾がない。二つの穴から覗くその瞳は、命が抜け落ちた灰色の瞳だった。

「き、貴様っ!?これは一体何のつもりだ!!」

男は吠える。しかし、雪鷹は聞く素振りさえ見せずに、男に氷の刃の突きつける。

「選択肢は三つ。一つ、俺の質問に素直に答えてから殺される。二つ、俺の質問に素直に答えず、拷問されて、殺される。三つ、舌を噛み切って自害する。好きなのを選べ」

「ふ、ふざけるな!!」

どれを選んでも男が助かる道はない。男が叫ぶのももっともなことだったが、雪鷹は眉ひとつ動かすことなかった。

「これが、ふざけている状況に見えるか?」

雪鷹は狂気めいた笑顔を見せながら首を傾げてみせる。封時結界を使った上に、氷結魔法で全身を氷漬けにしているのだ。冗談であるはずがない。間違いなく殺される、その現実を理解した男の頬を涙が伝う。

「や、やめてくれ、殺さないでくれ・・・俺が何をしたっていうんだよ!?」

今まで色々やってきたが、殺されるような真似はしていない。男はそう考えていた。確かに誰かを傷つけたことはあった。しかし、誰かを殺したことは一度もない。それは倫理観云々というよりも、男にそれだけの度胸がなかったからなのだが。

「なぁ・・・助けてくれよ・・・自首するから、頼むから命だけは・・・」

自首すれば男がこれまで積み上げてきた地位も名誉も全てを失うことなる。しかし、命を失えば全てが終るのだ。

「なんなんだよ・・・お前も管理局員だろ・・・こんなこと許されるはずがないって知っているだろ・・・なぁ、頼む、止めてくれ・・・」

震えた男の声も雪鷹には届かない。管理局の定める法律に死刑という刑罰は存在しない。どんな重犯罪者であっても終身刑以上の刑罰には処されない。もちろん、管理局員が犯罪者を殺すことは許されていないし、基本的に魔法を使用する場合は非殺傷設定を義務付けられている。

「あぁ、そうだね。たとえどんな屑みたいな犯罪者に対してもこんなことは許されない。だから、絶対に気付かれてはいけない・・・犯罪ってそういうものじゃないのかい？」

男は言葉を失う。顔が青に染まった。

「君はばれなければ何をしてもいいと思ったのだろう？そんな君がそんなことを言うなんてね」

雪鷹は笑う。子供のように無邪気に、そして、残酷に。

「まぁ、そんなことはどうでもいい・・・君のした罪状も、僕にとっては興味がないことだ。僕が知りたいのはロストロギアの転売を誰が君に命じた、か。ただそれだけだよ」

「そ、そんなこと言われても知らん!!私はぁぁぁあああっ!!」

男が絶叫する。首に突きつけられていた刃が消えたかと思うと、男の右手が宙を舞っていた。そして、そのまま鈍い音を立てて地面に落ちる。一瞬遅れて激痛が男を襲う。声にならない悲鳴。しかし、どれだけ絶叫しても雪鷹は表情を変えない。氷のような冷たい目で男を見据えている。

「一つ言い忘れていた。知らない、という言葉は禁句(タブー)だよ。言えばどうなるか・・・もう一度、教えようか?」

そう言って雪鷹は傷口にブレイドハートで触れる。すると滴っていた血が凍っていき、男の出血を止める。痛みが鈍い痺れに変わり、男の感覚の狂わせていく。

「これで痛みは和らいだはずだ。さて、話してくれないか?誰が君に命じたのかな?」

雪鷹は笑う。男にとってそれはまさしく悪魔の微笑みだ。人の命を弄び、愉悦に浸る外道そのものだ。男は恐怖と絶望の入り混じった瞳で雪鷹を睨みつける。

「この・・・悪魔め・・・」

「悪魔でいいよ・・・悪魔らしいやり方で話してもらうから」

銀の髪が風になびく。嵐の間近に控えた雲のような灰色の瞳は人のそれではなかった。感情の抜け落ちた、命のぬくもりを感じさせない氷の眼差し。震えがくるほどに美しく、それ以上に恐ろしかった。

「お前は・・・心が痛まないのか?無力な人間を甚振って、傷つけて・・・何も思わないのか?」

「質問は・・・まぁ、少しは構わないけど、あんまりくだらない質問が続くとどうなっても知らないよ?ちなみに、今の質問に対する答えは、すごく心が痛む、だよ。君が聞いて意味があるとは思えないけど」

雪鷹がそう言った瞬間、男の左腕が宙を舞った。肘から下が綺麗に斬り落とされている。傷口から見える血肉には見るだけで背筋が寒くなるほどに生々しく、痛々しい。その痛みに男は悶絶する。しかし、すぐに傷口が凍りつき、痛みを麻痺させる。目の前に転がる二本の腕。肩から斬り落とされた右腕と、肘から斬り落とされた左腕。しかし、痛みは既に消えている。夢のような現実に男は焦点は定まることなく、震えている。

「夢、じゃないのか・・・」

「痛みで現実に引き戻すのは簡単だけど、話せなくなっちゃうと困るからね」

男の残された左腕が消えた。と同時に血飛沫が飛び、男が絶叫する。

「ほら、痛くて話せないだろう?」

雪鷹はそう言いながら男の傷を塞ぐ。

「男なら潔く決めてくれないかな?そろそろ終わりにしたいんだ、こんなことをしてると心が痛くて痛くて・・・だから、早く話して

くれないかな？」

煩わしそうな顔。白々しい声。まるで感情が読めない雪鷹に男は目を閉じた。

「・・・ロスト、ロギアは・・・リバー一等空佐に頼まれた。これで、いいか？」

「あぁ」

返事をした雪鷹の声は冷たく、感情が抜けおちている。

「なぁ・・・言われた通り、答えたんだ・・・命だけは助けてくれ、頼む・・・」

男が雪鷹に懇願する。全身を氷漬けにされ、両腕を斬り落とされた。今まで犯した罪への罰だというのならもう十分受けた。言われた通り、ロストロギアの横流しを頼んできた人間の名前も言った。これ以上、男にできることは何もない。

「子供が、いるんだ・・・もうすぐ六歳になる・・・なぁ、頼む、頼むよ・・・命だけは・・・」

男の頬を涙が伝っていく。どこぞの狸の泣き落としとは全く異なる、本気の涙だ。しかし、それさえも雪鷹を揺るがすことはできない。

「知ってるよ。娘が一人いるそうだね。妻一人、子一人を残して死ぬのは確かに不安だね。だけど、それがどうかしたのかい？君にとってそれはきっとすごく大切なことなんだろうね。でも、僕にとってそれは意味がないに等しいんだよ。選択はなされた。せめてもの

慈悲だ。一瞬で楽にしてあげるよ」

次の瞬間、氷の刃が一閃して男の首が跳ね跳んだ。その顔は泣いているあの顔のまま。おそらく、斬られたことにさえ気付かずに逝ったのだろう。ズンと鈍い音を立てて、首が地面に落ちる。その首を見つめながらそっと呟く。

「殉職扱いにしておくから二階級特進。汚職も闇の中で、名誉はまぁ、なんとか守られるだろう・・・遺族年金も出るから家族が金に困ることもない。それだけは約束する」

そう言うと雪鷹は封時結界を解いた。その瞬間、生ぬるい風が頬を撫でた。

「こちら氷の懐剣（アイス・タガア）、標的は片付けた。後の処理は任せた。そう、いつもの通りで頼む・・・あぁ、わかってるよ。あと、一人か・・・」

情報一課に通信を入れた雪鷹は疲れたようにため息を零す。そんな雪鷹の隣に漆黒の翼をはためかせながら一人の影が降り立つ。雪鷹は驚くことなくその影、女性を一瞥した。

「いつも思うけど、どうして殺した相手を皆、殉職扱いにしてるの？殉職だと二階級特進・・・悪人なのにそんなことするなんて」

納得できないと言った表情を浮かべながら影は呟く。その言葉を聞いた雪鷹は神妙な面持ちで夜空を見上げた。

「それでも遺族にとっては大切な家族だ。犯罪者の身内になるくらいなら、名誉の殉職の方がまだいいだろう？それに、稼ぎ頭がいなくなって一家が路頭に迷うなんていうのは気分が悪い。普通に暮ら

せる程度の金額は遺族年金で支払われる・・・罪滅ぼしの真似事だとでも思ってくれればいい」

どこか自嘲気味な笑い。狂っている、というより壊れたと表現すべき笑顔だ。

「・・・忍、苦しいのを我慢しないでよ。隠さないでよ・・・私達、全部わかるんだからね」

女はそう言って雪鷹に抱きつく。その黒い双眸の端には涙が浮かんでいる。

「仕事がつらいなら、私達が代わりに全部引き受ける・・・諜報も、拷問も、暗殺も、全部私達がする。忍が苦しまないで済むならなんだってする。命じてくれたら、最期の一人を今すぐにだって殺しにいく。だから・・・一人で抱え込まないで・・・」

泣きながら懇願する女を雪鷹は優しくそっと、しかし、はっきりと突き放す。

「前にも言ったはずだよ?その手を汚していいのは俺の為じゃない・・・これは俺への罰なんだ。今まで俺の都合で幾人もの命を弄び、奪ってきた報いなんだよ」

泣きじゃくる幼子を宥めるような優しい、しかし残酷な声音。女は嫌だというように泣き顔を雪鷹の胸に押し付ける。

「それでも私は守りたいの・・・あの子だけじゃなくて、忍のことも・・・」

「要らないよ。俺の隣には誰もいなくていい・・・それでいいんだ」

雪鷹はそう言って女をひきはがす。涙で濡れた黒い瞳と視線が合うといささかの罪悪感を覚えないでもなかったが、それでも雪鷹の中に躊躇いはなかった。

「・・・もう、次にいくぞ、クロエ」

「うん・・・」

涙を拭いながらクロエは小さく頷くとそのまま雪鷹とともに夜空へ飛び立った。

27『ある夜のある臨時執務官補佐の非日常』（後書き）

変わらないものなんてない。
その現実から目を逸らしていた

認めたくなかった
変わってしまったなんて

信じていた
あの頃のままだと

だけど、それはただの夢だった

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
２８　『一夜明けて』

――お前みたいな人間に俺は相応しくない。それだけだ

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　２７．１

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　２７．１

寝室のベッドに腰掛けながら寝間着姿のなのはがフェイトに尋ねる。

「・・・フェイトちゃん、まだ連絡つかないの？」

「うん・・・デバイスも応答してくれない」

一方、不安そうに窓の向こうを見つめるフェイトはまだ執務官の制服を着ていた。昼過ぎに雪鷹と別れたフェイトはそのまま六課に戻り、事務仕事を片付けていたのだが、日が沈んでも雪鷹が帰ってくることはなかった。もう子供ではないのだから、と初めは軽く考えていたフェイトだったが連絡してみても繋がらず、それが何度も続くうちにフェイトの不安はどんどん大きくなっていった。

「どうしよう、もし雪鷹に何かあったら・・・」

拳をきつく握り締め、フェイトは唇を噛みしめる。まだ雪鷹の身に何かあったと決まったわけではないが、デバイスにも連絡がつかないとなるとただごとではない可能性が高い。こんなことになるならあの時、強く引き留めておけばよかった、とフェイトは自責するがもう後の祭だった。今のフェイトには雪鷹の居場所を知る術さえないのだ。

「大丈夫だよ。そんなに心配しなくても・・・きっと夜中にこっそり帰ってくるよ」

なのはがフェイトを励ますがその声はいつもに比べて重く、自信も

なさそうだった。雪鷹の身に何かあったという証拠はない。しかし、無事だという保障もない。二人がわかっているのは雪鷹の所在が不明だということ、そして、連絡がつかないということの二つだけだ。それ以外のことは何もわかっていないのだ。

「だけど、こんなこと今まで一度もなかったよ・・・」

仮に雪鷹が酔いつぶれてどこか道端で眠っているとしても、デバイスが起動していれば居場所はわかる。それさえできないということは、デバイスが起動していないかあるいは起動できないかのどちらかしかない。もちろん、他の次元世界に行っている場合も連絡はつかないのだが、今回の場合、その可能性は限りなく零に近いので除いている。起動していないだけなら、まだいい。もし、起動できないのなら、と考えると胸を奥が苦く、重くなる。

「それは・・・そうだけど、でも、ロングアーチのみんなもおかしな魔力反応はなかったって言ってるし、フェイトちゃんもそんな張り詰めなくても・・・」

「それでも、心配なんだっ！！」

大声で叫んでしまってからフェイトは申し訳なさそうに俯く。雪鷹のことが心配なのはフェイトだけではない。なのはもフェイトに負けないくらい心配しているのだ。フェイトを宥める為に平静を装っているだけで、その胸の内はフェイトと同じく不安でいっぱいのはずだ。

「ごめん・・・大きな声出して」

「いいよ、そんなの・・・不安なのはわかるよ。でも、大丈夫だよ。

私達の知ってる雪鷹ならきっと大丈夫・・・だから、信じて待とう？」

なのはの言葉にフェイトは小さく頷く。

「うん、そうだね・・・信じて、待つよ。だから、早く帰ってきて、雪鷹・・・」

フェイトはもう一度窓の外を見つめた。星明かりが微かに瞬く他に何も見えない夜天。その星にフェイトは祈りを込める。無事でありますように、早く帰ってきますように。しかし、その祈りが届くことはなかった。結局、その夜、雪鷹が隊舎に帰ってこなかった。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　２７．１（後書き）

補足しておきますと、雪鷹の、つまり一課の使う封時結界はステルス効果のようなものがあるので、六課のセンサー類ではキャッチできませんし、通信も入りません。

起動していない、というのは待機モードではなく電源が入っていない状態という意味だと考えてください。デバイスに電源なんてそもそもありませんからあくまでもイメージですが

パソコンのスリープモードみたいな感じです。一切の機能が働いていない状態、という意味で起動していない、と表現させていただきました。

Intermission 27.2

Intermission 27.2

夜も更け、日付が変わってしまった夜道の一つの影が歩く。今晩の仕事をようやく終えた雪鷹とクロエの二人だ。クロエはまるで恋人であるかのように雪鷹の左腕にしがみ付き、放さない。雪鷹は振りほどくのが億劫なくらい疲れているのか、あるいは何か別の意図があるのかいつもの無愛想な表情を浮かべながら、そのまま黙って歩いていた。薄暗い階段を下っていくとそこには分厚い木の扉と『closed(閉店)』と書かれた看板。しかし、雪鷹は迷うことなく、その扉を開けた。

「いらっしゃいませ、お客様」

グラスを磨いていたビアンカは驚く様子もなく、笑顔で二人を出迎える。熟成された樽酒のように香り高く、芳醇な微笑。伊達に年を重ねていないのだと実感させられる。カウンターの上には『reserved(予約済み)』と書かれたプレートが二枚並んでいる。二人は迷うことなく、その席へと進み、並んで座る。

「何になさいますか？」

「任せるよ」

ビアンカが尋ねると雪鷹はそう言って、クロエの同じように頷く。

「かしこまりました」

ビアンカはそう言うと手際よく準備して、二人の前に湯気立つコーヒーとサンドイッチを並べた。クロエのコーヒーは普通のブラックだが、雪鷹に差し出されたコーヒーの上には生クリームが浮かんでいる。コーヒーはともかくとして、サンドイッチは明らかに用意していたものだ。それを見た雪鷹は苦笑を浮かべる。

「ここはバーだろう？いつから喫茶店に変わったんだい？」

「バーはもう閉店してますから」

ビアンカはにこやかに笑いながら言葉を続ける。

「それに、うちの従業員はともかく、お客様は今日は酔い潰れるまで飲みそうですから。お酒で痛みを紛らわすのが悪いとは言いません。魔法や薬では癒せない傷もありますから。でも、少しは自分の体を気遣ってあげてください。お客様の体はある意味でお客様だけのものであり、またある意味ではお客様のものではないのですから」

そう言ってビアンカは笑顔で、しかし、悲しげな瞳で雪鷹を見つめ、サンドイッチを雪鷹に勧めた。

「本当は忍君の好きな和食を用意できたらよかったんだけど・・・こんなものしか用意できなくて、ごめんなさいね」

「そんなことはないよ。いつもありがとう、ビアンカ」

そう言って雪鷹はサンドイッチに手を伸ばす。野菜とハム、玉子等々が挟まれた簡単なものだったが、仕事で疲れた空腹の胃袋にはこれくらい軽いもののほうがいい。

「すまないな、こんな時間まで従業員（クロエ）を連れまわして」

「すみませんでした」

二人が揃って頭を下げるとビアンカは微かに笑って首を横に振る。

「気にしてないわよ。いつものことだから。そもそも、行きたいって言ったのはクロエなんだもの・・・無事に帰ってきてくれたらそれだけでいいのよ」

それに、とビアンカは切なげに笑って付け加える。

「クロエの気持ちは私もよくわかるから・・・ねぇ、忍君、今日、何があったのか、どんなことをしてきたのか私は聞こうは思わない。貴方も聞かれたくないでしょうしね。だけど、これだけは言わせてね。ただ見てるだけ、ただ待ってるだけでも辛くて、苦しいことだってあるのよ・・・忍君が傷付けば、同じように悲しくなる人が忍君の周りにはいるの。クロエや私だけじゃなくて、他にもきっと・・・それだけは忘れないでね」

「・・・あぁ、すまないな、いつも心配させて」

そう呟いて雪鷹はコーヒーを一口飲み、一瞬驚いた顔を浮かべ、すぐに不敵な笑みを浮かべる。

「バーは閉店したって言ったのに」

雪鷹の言葉にビアンカは悪戯っぽい笑顔を返す。

「バーが閉まっていようといまいと私はバーテンダー（プロ）ですから」

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　２７．２（後書き）

どうも、月兎です。

今回の話は最後に??と首を傾げた方が多いと思いますので、あと書きにて補足説明をば。

ビアンカが雪鷹に出したコーナー、実はお酒入りなんです。アイリッシュコーヒーというカクテルがあるのですが、まさしくそれです。グラスにコーヒーと砂糖、ウイスキーを入れて混ぜ合わせ、生クリームをフロートさせたら完成です。加えるウイスキーはアイルランド産のもの、と決まっています。だから、アイリッシュコーヒーなんです。

ちなみに、作者は一度だけ飲んだことがあります。バーじゃなくて喫茶店でしたけど。コーヒーに負けないくらいウイスキーが強かったです。美味しかったですが、やっぱりアルコールが入っているだけありました（笑）

雪鷹のコーヒーには生クリームが浮かんでいた、という部分がここの伏線です。バーが舞台だというのも伏線ですね。すみません、わかりにくい文章で。

せっかくだからバーらしい話にしようと思ったらこんな話になってしまいました。楽しんでいただけたなら幸いです。

ではでは

28『一夜明けて』（前書き）

きっかけはほんの小さなすれ違い

好きだからもっと知りたくて
好きだからずっと心配で
好きだからこの気持ちは揺るがない

だけど、好きなのに、傷ついて
きっと、好きなのに、傷つける

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　始まります

28『一夜明けて』

28『一夜明けて』

結局、雪鷹が六課の隊舎に戻ったのは日も昇り始めた明け方近くだった。二日酔いと呼ぶほど潰れているわけではないが、頭が鈍く痛む。この時間ならちょうど新人達の朝練が始まるかどうかといった時間帯だ。別段、悪いことをしたつもりはないが鉢合わせをするのは流石に気が引けて雪鷹は裏口から隊舎の裏に回ろうとする。しかし、それよりも先に胸の前で両腕を組んで立っているフェイトを見つけて、雪鷹の足が止まる。唇を真一文字に結び、睨みつけるように雪鷹を見据えていた。愛らしいと形容するには程遠い表情で見つめられると雪鷹は何も悪いことをしていないはずだったが、その自信が揺らぎ、後ろめたさを覚えずにはいられなかった。

「どうしてそこにいるんだ?」

「雪鷹はどうしていないの?」

鋭いフェイトの声。昨日の昼過ぎに別れて以来だが、どう贔屓目に考えても相当怒っている響きだった。

「どうして朝帰りなの?どこかに通う女の人でもいるのかしら」

咎めるフェイトの声音に雪鷹はげんなりした声を出した。

「いるわけないだろう?わかっていながら言うなよ」

実をいうならあのまま雪鷹はバーで一夜を明かした。女性と一緒に

いたといえば、あながち間違いでもないのだが、ビアンカともクロエともフェイトが邪推しているような関係ではない為、雪鷹は首を振って否定する。

「わからないもの・・・雪鷹のことなんて全然わからない」

それは咎めるというよりは嘆きに近い悲痛な声だ。

「雪鷹は何も話してくれない・・・私やなのはが聞いても言えないとか、機密だからって・・・この十年間、何があったか少しも話してくれないじゃないっ！！それじゃ、雪鷹のことなんてわかるはずないよっ！！」

フェイトの頬を大粒の涙が伝っていく。ただ、泣いているだけではない。唇を強く噛みしめてそれ以上の衝動を必死に抑えつけていた。雪鷹の知る限り、フェイトは滅多なことで泣くような子ではない。訓練校時代でも、フェイトの涙を見たのは片手にも満たなかったはずだ。そのフェイトが雪鷹の目の前でぽろぽろと涙を流しているのだ。雪鷹は目を見張って見つめ、そして、気付いた。フェイトは昨夜から今朝にかけて既に何度も泣いたのだと。

・＊・＊・＊・

そのまま舎外でフェイトを泣かせるわけにはいかないと判断した雪鷹はフェイトを連れて自室に戻る。その途中にあった自販機でコーヒーを二本買って、その一つをフェイトに手渡した。フェイトに渡

したのはミルクのたっぷり入ったカフェオレ。雪鷹が自分の為に買ったのはブラックだ。フェイトは雪鷹の部屋に着いてからもまばたきせずに涙を零していたが、コーヒーを渡されると堪え切れなくなったように両手で顔を覆い、むぜび泣いた。

「心配させたのは悪かったよ。だけど、無事に帰ってこれなかったわけでもないのにそんなに泣かなくてもいいだろう」

雪鷹の身に何かがあったのならフェイトがここまで大泣きしている理由も納得がいくのだが、幸いなことに雪鷹は五体満足だ。少々寝不足であることと、お酒が抜けきっていないことを除けば仕事に問題はない。フェイトを泣かせるようなことをした覚えはないはずだった。

「そういう問題じゃないでしょう・・・」

フェイトは涙声で口を開く。

「無事だったとか怪我してなかったとか、そういうことじゃない。帰れないなら帰れないって一言くらい連絡してくれたらそれだけでよかったのに・・・」

「もうお互い、子供じゃないんだ。帰ってこないなら、それくらい察しってくれてもいいんじゃないかな?」

雪鷹の言葉は口調こそ丁寧だが、絶対に譲歩はしないという意志の込められていた。二人の視線が交わり、すぐに雪鷹がフェイトから目を逸らす。冷血漢の雪鷹であっても涙で濡れたフェイトの瞳はやはり気まずいものを覚えるのだ。

「それはつまり、誰かとその・・・他の女と一緒にいたってこと？」

雪鷹が知らない女性と一緒に過ごしたという事実を認めたくないフェイトは僅かに声が固くなる。まるで雪鷹を咎めるかのような響きに雪鷹も眉をひそめる。フェイトにおかしな邪推をされていることがまず気に入らない。仮にそれが事実であったとしても、それをフェイトに咎められるいわれはない。無意識のうちに言葉に力が入る。

「お前には関係ないだろう？人のプライベートに口を出さないでくれるかな」

わずかに、しかし、はっきりと突きつけられた雪鷹の敵意にフェイトは顔を強張らせる。涙さえ止まる。頭を過ったのはいつぞやの夜のことだ。あの夜は押し倒された程度で済んだが、その気になれば雪鷹はあれ以上のことを、フェイトにその気があるなしに関わらず、フェイトにできるのだ。それを改めて突きつけられた気がしてフェイトの体が硬くなる。それに気付いた雪鷹は慌ててフェイトに謝った。

「すまない。怖がらせるつもりはなかったんだ・・・だけど、あまり俺のプライベートを詮索しないでくれるかな。お互い知られたくない過去の一つや二つくらいあるだろう？」

「・・・また、そう言うんだ。そうやって私には何も云わないで・・・私は雪鷹が話したくないのなら無理に聞こうとは思わない。でも、雪鷹が話してくれないと私は雪鷹のこと、何もわからないままなんだよ。雪鷹はいつも十年前とは違うっていうけど、雪鷹が話してくれないと私もなのはも何も分からないまま・・・ずっとわからないままなんだよ」

一旦止まった涙がまた溢れ出した。雪鷹は何も云わずにそれを見つめている。フェイトをそれを真っ直ぐに見つめ返す。

「話すのが辛いなら、話さなくてもいいよ。でも、この十年間の全部が辛いことばかりじゃなかったでしょう？話せることだけでいいから、どんなことでもいいから私に話して・・・私は知りたい。雪鷹がこの十年でどんな風に変わったか、どんなことを思ったのか、どんなことをしてきたのか全部、知りたい。雪鷹のことが好きだから」

――好きだから――

一切の淀みなくフェイトは言い切った。その瞳は濡れてこそいるが、清らかさと強さを併せ持ち、真っ直ぐで、一点の曇りもない。眩しいくらいに輝いたその瞳を雪鷹は久しぶりに見た気がした。最期に見たのはいつだったかと、思い出してみて苦笑を浮かべた。前にこんな目を見たのはもう十年前のことだ。訓練校の卒業前夜だった。

その夜、雪鷹と同期で入校した一人の少女が雪鷹に告白してきた。今よりも少し不安そうで、頬をわずかに赤らめてこそいたがはっきりと雪鷹に向かって、愛している、と少女は言った。それはまだ子供だと侮っていた少女が初めて見せた女の顔だった。告白そのものは未来の約束という形でやんわりと断ったのだが、その少女はこの十年、約束を忘れることなく、妙齢の女人へと成長して、そして、また雪鷹のことを好きだと言ってくれた。あの時と同じ、澄み切った、真紅の瞳のままで。夢みたいなことかもしれないが、それが現実だった。

「・・・そうか、そういうことだったんだね」

ふと、ビアンカの言葉が頭をよぎった。ただ見てるだけ、ただ待ってるだけでも辛くて、苦しいことだってある。雪鷹が傷付けば、同じように悲しくなる人が周りにはいる、と。その言葉の意味をようやく理解した雪鷹は微かに笑いながらフェイトの目元にそっと指を伸ばして涙を拭う。

「ありがとう、フェイト。心配をかけてすまなかったね」

フェイトは驚いた顔をしたが、すぐにそれは笑顔に変わる。

「・・・うん」

フェイトは満足げに頷く。涙に濡れた目元がほんのりと紅いがそれさえ、フェイトの美貌を際立たせる為の化粧のように見えた。

「変わらないな、フェイトは・・・」

灰色の優しい瞳。雪鷹はゆっくりと立ち上がる。その立ち振る舞いは貴族のように優雅で、それでいて隙がない。口元に浮かべたな微かな笑みさえ、フェイトにとっては好ましくさえある。

「あの頃と同じ子供のままだ・・・」

雪鷹の手がそっとフェイトの口元に添えられる。雪鷹の顔がフェイトに近付く。以前とは違う優しい空気。そっと包み込むようなその心地よさにフェイトは身を任せて、ゆっくりと目を閉じた。

「俺もそう在りたかったよ」

右の瞼の上がポッと熱くなる。目を閉じていてもわかる。雪鷹の唇が触れているのだ。いつかの夜と同じ優しさと想いやりに溢れた口付けだった。しかし、胸の奥を刺すような痛みと切なさも伝わってくる。気が付くと雪鷹の唇はフェイトから離れていた。普通のキスをされるものだとばかり思っていたフェイトは期待が外れ、内心残念に思いながらゆっくりと目を開いた。

「だから、気持ちは嬉しいけど、すまない・・・」

雪鷹はそう呟いて、フェイトから逃げるように視線を逸らし、頭を下げた。その行為と先程の言葉が意味することは一つしかない。それを理解したフェイトが愕然とした。

「えっ・・・」

フェイト自身も驚くほど冷たい声だった。何もかも抜け落ちてしまったかのような、冷たく低い声。自分がこんな声を出せるなんてフェイトも知らなかった。知りたくなかった。フェイトの中でどす黒い感情が蠢き始める。

フェイトは雪鷹が好きだった。
大切に思っていた。
愛していた。

その強い想いが汚れていく。
濁っていく。

染まっていく。

愛しさが憎しみに変わっていくのがわかる。
苦しいのに、嫌なのに、心が、憎しみが、怒りが止まらない。

「どうして？ねぇ・・・どうして私じゃダメなの？」

まるで脅迫しているかのような低い声だった。

「・・・相応しくないから。お前みたいな人間に俺は相応しくない。それだけだ・・・」

「私みたいな人間には相応しくない？」

まるで、フェイトを蔑むような、見下すような声に聞こえた。その冷たさとその言葉に込められた意味にフェイトは悪寒さえ覚えた。フェイトの出生には公にできない秘密が隠されていた。

プロジェクトF。
かの大魔導師、プレシア・テスタロッサが亡き愛娘、アリシア・テスタロッサの記憶転写クローンを造りだすために完成させた人造生命の研究。ヒトで在りながら、ヒトでない存在を生み出す禁忌の技術。それによって生まれたのがフェイトだった。

ヒトとは少し違う生まれた方をしただけだ。
義母リンディ・ハラオウンはかつてフェイトにそう言ってくれた。
なのはやはやてもフェイトを出生に秘密を知りながらも忌避するこ

となく、友として接してくれている。それはフェイトに対する同情や哀れみからではなく、真実そう思っているからこその言葉であり、態度だ。だからこそ、忘れてしまいそうになるのだ。己の生命の歪さに。

その歪さは万人が受け入れられるものではないことをフェイトは理解していた。フェイトの出生に関する情報は極秘事項扱いで、当時の事件の関係者とフェイトの周囲の人間を除けば知っている者はいない。そして、雪鷹も知っている側の人間だった。つまり、フェイトの歪さを理解して、受け入れてくれている人間のはずだった。しかし、それは無残にも裏切られてしまった。消すことのできない己の歪な出生を蔑み、見下すかのような雪鷹の言葉。失望するよりも、涙を流すよりも先に、抑えようのない激情が、怒りがどす黒いものとともにフェイトの外へ溢れ出す。

「馬鹿にしないでっ！！」

フェイトは持っていた缶コーヒーを雪鷹に投げつけた。至近距離で投げつけられた缶は雪鷹の頬を直撃して、そのままゴトンと床に落ちる。雪鷹の顔がわずかに歪んでいた。流石にやり過ぎたと思ったフェイトは気まずそうに辺りを見渡し、そのまま逃げるように部屋から出ていってしまった。残された雪鷹は黙って缶を拾い、自嘲気味に笑う。

「俺みたいな人間がフェイトと釣り合うはずないだろう・・・」

自らを卑下する雪鷹の言葉が寂しく部屋に響いた。

・＊・＊・＊・

自室に戻ったフェイトは鏡の前に座った。目の前には目元を赤く腫らしたフェイトがいる。昨夜から今までずっと泣き続けていたのだから無理もない。そんな顔を見てフェイトは自嘲気味に笑う。

「本当にひどい顔・・・」

本当に醜いのは顔ではない。フェイトの心だ。たとえ、雪鷹がフェイト以外の人に向けられていても、それを受け入れられる自信がフェイトにはあった。以前、はやてにも話したことがある。雪鷹が幸せになれるのなら、悲しくても受け入れる、と。しかし、実際はまるで正反対だった。雪鷹の心がフェイトにないとわかった途端に胸の奥で何かがざわめき始め、フェイトの心を塗り潰し始めたのだ。込み上げてくる感情は憎悪と言っても過言でないくらいにどす黒く、醜い。しかし、それを抑える術をフェイトは知らなかった。その結果、愛していたはずの雪鷹を傷つけてしまったのだ。

「最低だな・・・私」

強い憎しみに花火のようなものだった。一度弾けてしまうとすぐに消えてなくなり、今はフェイトの胸の奥でわずかに燻ぶっているだけだ。後に残ったは空しさと罪悪感。深い後悔だけだった。そんな中、フェイトに通信が入る。まだ朝も早い上に、フェイトの気分も最悪。誰だろうと思って相手の名前を見てみるとフェイトのもう一人の母、リンディ・ハラオウンだった。相手によっては適当な理由で断ろうかとも考えたフェイトだったが、リンディが相手なら流石にそんな真似はできない。むしろ、こんな時間に連絡を入れてくる

ということは緊急の用件の可能性も高い。フェイトは軽く居ずまいを正してモニターを開いた。

「おはよう、フェイト」

「おはよう、母さん。こんな早くにどうしたの？何か事件でもあった？」

画面に映るリンディにフェイトはわずかに違和感を覚えた。管理局の制服ではなく、エプロン姿。今の時間を考えるとそれ自体は決しておかしいことではないのだが、緊急の用件であるなら普段着で通信を入れてくるはずがない。現状を把握しきれていないフェイトの表情にリンディは言葉を付けたす。

「事件というほどのことでもないけど、アルフがね・・・」

リンディがそう言うとフェイトの使い魔で、今はハラオウン家で子守り兼家事手伝いをしているアルフが顔を出す。

「フェイト、大丈夫？さっき、すごく嫌な感じがして、もしかして何かあったのか？」

何故、アルフが、とフェイトは首を傾げ、気付いた。使い魔であるアルフとフェイトは精神リンクで常に繋がっている。フェイトが普通にしていれば特別何か問題があるということはないのだが、急激な感情の乱れ、特に制御できないほどと強い揺れは直接アルフに伝わってしまうのだ。そして、その心当たりが今のフェイトにはあった。どす黒く、真っ黒な負の感情。その暴走をフェイトは抑えることができなかった。その結果、雪鷹を、アルフを、そしてなによりフェイト自身を傷つけてしまったのだ。

「ごめん・・・ちょっとね。大丈夫だよ、心配しないで」

フェイトは懸命に笑おうとするが、、涙が溢れて来て笑いたくても笑えない。

「本当に、大丈夫だから・・・何も心配することなんて、ないから・・・」

大粒を涙を零しながらフェイトは首を振る。しかし、何もない、と言っても誰も信じるはずがなかった。リンディは優しい声でフェイトに語りかける。

「一人で全部抱え込んではだめよ。私達に話してみなさい？」

「・・・うん」

リンディに促されてフェイトは重い口を開いた。昨日のこと、今朝のこと。雪鷹に言われた言葉。できるだけありのままを伝えようとしてみたものの、どうしても愚痴っぽくなってしまう。しかし、リンディは嫌な顔ひとつしないで娘の話に耳を傾け、アルフも熱心に聞いている。全てを聞き終えたリンディはしばらく考えた後、口を開く。

「雪鷹さんって確かフェイトやなのはさん達と同期で訓練校に入校した子よね？昔、何度か見かけたけど、そんなひどいことを言う子には見えなかったけど・・・」

リンディ自身は十年前の雪鷹と面識がある。あるといってもフェイトの親として訓練校に行った際に何度か顔を合わせたという程度で、

詳しいことは何も知らないのだが。フェイトが訓練校に入校した日、リンディが初めて見た雪鷹は体の線も細く、一見すると頼りなさそうに見えたのだが、その目の鋭さは飢えた狼を思わせた。しかし、卒業の日に見た雪鷹は鋭さの中にもどこか優しさのある貌に変わっていた。

「変わったんだよ、この十年で・・・」

フェイトは冷たく言い放つ。涙は既に渇ききっていた。胸の奥が鈍く痛む。黒く、重い痛みだ。

「そうかしら・・・？フェイト、これは私の勝手な想像だけど、雪鷹さんの言葉・・・本当は逆の意味じゃないかしら？」

「逆の、意味？」

リンディの言葉の意味を理解しかねて、フェイトは首を傾げる。

「雪鷹さんにフェイトが相応しくないんじゃなくて、フェイトに雪鷹さんが相応しくない・・・そういう意味じゃないかしら？あまりこういう言い方はしたくないけど、雪鷹さんは地球の生まれでしょう？管理局員とはいえ身元が不確かであることは否定し難い事実よ・・・もし、フェイトと一緒になれば出世やこれからのことにも影響してくるかもしれないわね。まぁ、そういう意味ではなのはさんも同じになっちゃうからそうだとは決め付けられないけど。それに、雪鷹さんがどこの所属なのか私は知らないけど、フェイトに引け目のようなものを感じているかもしれないし・・・もう一度よく話し合ってみたほうがよくないかしら？」

リンディの提案にフェイトは黙って考え込む。あのときは激情に身

を任せてしまったが、リンディの言う可能性も否定はできない。それを確かめようとさえしなかったこと恥じてフェイトは俯く。

「さて、参考になったかしら？」

「うん、ありがとう、母さん」

リンディの通信を切るとフェイトはさっと立ちあがる。その顔は晴々しているとは言い難いが、それでも、リンディ達と話す前に比べるとずっと明るくなっていた。雪鷹がどのような意図で言ったのかフェイトは想像できなかったがもう一度話しあってみる価値はある。そう決めたフェイトは雪鷹の部屋へ向かって歩き始めた。しかし、雪鷹の部屋に着くよりも先に舎内の廊下で雪鷹を見つけるとフェイトは急いで駆け寄る。

「雪鷹、あの、その・・・さっきは・・・」

ごめん、と言おうとしたフェイトに雪鷹は大きめの茶封筒を突き出して言葉を遮る。

「ちょうどよかった、ハラオウン執務官。これが今日の書類です。それと、今日は体調が優れないので一緒に外回りができません。隊舎に残って新人達の訓練を手伝おうと思いますので、そのつもりでお願いします」

雪鷹はそう言って封筒をフェイトに押し付けると一礼して、そのまま踵を返して、フェイトから離れていった。すぐに追いかければよかったのだが、フェイトはその場から動くことができなかった。体調が優れないというのは明らかに嘘だ。フェイトと一緒に外回りをしたくないがための建て前に過ぎない。それほどまで避けられてい

るのか、と思うとフェイトの心は容易く挫けてしまい、追いかけることができなかった。フェイトは廊下呆然として立ち尽くす。雪鷹の影が曲がり角に消えると、今日何度目になるのか分からない涙が頬を伝った。

「そんなのないよ・・・」

涙交じりの声が雪鷹に届くことはなかった。

28『一夜明けて』（後書き）

――とりあえず、泣き止んでくれ

俺が泣かしたみたいだろう？――

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
２９『揺らぐ心』

――本当に卑怯です

29『揺らぐ心』（前書き）

ずっと疑問だった

どうしてあの人は笑っていられるのか
どうしてあの人はあたしを責めないのか
どうしてあの人は・・・

いっそのこと、罵ってくれた方がよかった
そしたら、あたしもあの人を憎めた
こんなに苦しまずに済んだ

なのに・・・

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　始まります

29『揺らぐ心』

29『揺らぐ心』

フェイトと別れた雪鷹はその足で訓練場に向かう。この時間ならちょうど朝練が終った頃だろう、と目星をつけて行ってみると雪鷹の予想通り、訓練を終えた新人達が二組に分かれてストレッチををしている所だった。雪鷹が近付いてくることに気付いたヴィータが声をあげる。

「あ、ユキタカ・・・どうしたんだ?仕事があるんじゃないのか?」

「フェイトから今日の外回りは一人でやるから訓練の方にいってくれ、と頼まれてな。だが、少し遅かったようだな・・・」

何も知らないヴィータはそうか、と軽く頷くだけでその言葉を疑いもしなかった。しかし、その隣でなのははわずかに首を傾げた。雪鷹がフェイトの補佐についてから数日経つが、別々に行動にした日はこれまで一度もなかった。それもそのはずで、仕事とはいえ雪鷹と、好きな人と一緒に、更に言うなら二人きりに、なれる機会をフェイトは心底喜んでいたのだ。その機会をみずみず逃すとはどうしても考えられなかった。しかし、妙な所で真面目な雪鷹が無断で仕事を放り出すとも考えられない。

(フェイトちゃんと何かあったの?)

フェイトは昨日も夜遅くまで雪鷹の帰りを待っていた。そのフェイトが雪鷹と顔を合わせたならば、何もないはずがない。一見すると

風にも絶えぬ佳人のようなフェイトも怒るときは怒るし、しかもその激しさはなのはの比ではないのだ。何かあったのだ、そう察したなのはは誰にも聞かれないように念話で雪鷹に話しかけた。直後、雪鷹はわずかに顔をしかめたが黙することなるなのはの問いかけに答えてくれた。

（朝帰りを見咎められて、口論になって・・・まぁ、あとは想像に任せる。誤解のないようにいっておくが行きつけのバーに行っただけだからおかしな誤解はするなよ）

肝心の部分を雪鷹は誤魔化した。それくらいに雪鷹の説明は曖昧だったが、想像に任せると言われた通りその先の顛末を想像してなのははため息を零した。一晩中待ち続けて、朝帰りでしたというのなら流石のフェイトも怒るはずだ。おそらくは売り言葉に買い言葉、お互いに引けなくなってしまってこういうことになったのだろう。お互い、子供じゃないのに、となのはは苦笑するが、今更どうしようもない。

（・・・あとで仲直りしてよね）

なのはの言葉に雪鷹は何も言うことなく、苦笑しながら首を横に振った。

「とりあえず、ランスター陸士に近接戦闘（クロス）を教えるって約束したからな・・・それも兼ねて来たんだが、どうだ？」

「だって、ティアナ、どうする？」

「え、あ、はい・・・よろしくお願いします」

・＊・＊・＊・

「さて、これから訓練を始めるわけだが・・・何故、ここにいる？」

雪鷹はティアナと向きあいながら、その隣に立つなのはを見てため息を零す。

「安全監督、かな？」

語尾が疑問形なのが非常に気になる所だが、そこを無視してなのは は言葉を続ける。

「二人きりにしたくなかったから・・・それとも、私がいると迷惑なの？」

不適切かもしれないが、雪鷹にはティアナに対して前科がある。一応の仲直りはしたとはいえ、しこりが完全に消え去ったわけでもない。そう考えるとなのはが二人の訓練に付き添うというもの至極当然のことのように思えた。そのせいか、珍しいことに雪鷹は反論することなく、頷いた。

「・・・ただし、俺に一任したからには俺のやり方でやらせてもらう。訓練や出動に支障が出ない程度には加減するが、手も口も出させないぞ？」

婉曲に、それなりにティアナを痛めつけるとも受け取れる発言にな

のはは苦笑する。雪鷹の言動は乱暴に見えるが、その辺りの配慮は意外としっかりしているのだ。それを承知しているからこそなのは笑えるのだが、隣に立つティアナは例の一件を思い出したのか、微かに肩を震わせていた。

「最初からそのつもりだよ」

「あたしも、そのつもりです」

ティアナの声はわずかに固いが、しかし、はっきりと頷く。一目みるだけで肩に余分な力が入っているのだとわかる。先日の一件があるのだからティアナの反応も当然と言ってしまえばそれまでなのだが、これでは訓練にならない。その緊張をほぐすかのように雪鷹はティアナに優しく微笑みかける。

「そんなに心配しなくてもいいよ。しっかり、加減するからこの前みたいにはならないよ、きっとね」

「は、はい、よろしくお願いします」

雪鷹の思わぬ笑顔にティアナは毒気を抜かれ、間の抜けた声がその口から漏れる。

「じゃあ、さっそく始めようか。制限時間は五分。ミドルでもクロスでもいいから一発でも俺に当てられれば、一段階はクリア。弾丸（シュー）回避訓練（トイベーション）と違ってランスター陸士は何発被弾、もとい、殴られても問題ない。ハンデとして俺は攻撃魔法を使わない。とりあえずこんなところでどうかな？」

攻撃魔法を使わない、という雪鷹の言葉にティアナはわずかに顔を

硬くした。新人とはいえ、Bランク魔導師であるティアナはそれなりの実力がある。成人男性が魔法なしで勝てるほど弱くはないのだ。しかし、たとえティアナが万全の準備で挑んだとしても、それでも実力は素手の雪鷹の方が上なのだ。それは前回の件で嫌と言うほど味わった。

「わかりました」

そう答えてティアナはクロスミラージュを構える。

「それと、クリアできなかったときのペナルティは何がいい?」

「えっ?ペナルティ?」

そんな話は聞いていないとティアナは顔色を変える。蒼白とまではいかないものの、明らかに引きつっていた。

「雪鷹、ペナルティって・・・それはちょっとやり過ぎじゃ・・・」

なのはも口を出しかけるが雪鷹は不敵に笑う。

「口は出させない。そう言ったはずだよ、高町教導官。それに、ランスター陸士は初めから負けるつもりで戦うのかい?どんな罰が待っていても、君が勝てば何の問題もないだろう?」

勝てばいい。そう言ってしまえばその通りなのだが、正直その可能性は零に等しい。ティアナ単体では火力も機動力も雪鷹には及ばない。雪鷹を攻略する術が何一つ浮かばなかった。

「それとも、もっとハンデが必要かな?」

「い、いえ」

ほとんど反射的にティアナは首を横に振ってしまった。ただでさえ雪鷹はかなりのハンデを負っているのだ。これ以上のハンデはティアナのプライドに関わってくる。心のどこかで自分の愚かさと強情さを呪いながらも、首を縦に振ることだけはできなかった。

「まぁ、いい・・・ペナルティについてはあとで決めればいい。まぁ、訓練後だから軽めに行こうか」

そう爽やかに言い放つと雪鷹はバリアジャケットを展開して、拳を構えた。

・＊・＊・＊・

「クロスファイア、シュートっ！！」

ティアナの誘導弾が雪鷹を狙って飛び交う。前後左右を飛び回り、雪鷹を撹乱する。その隙を突いて、ティアナが雪鷹に迫る。しかし、雪鷹は戸惑う素振りも見せずにに地面に手をかざす。

「咲き誇れ、白蓮華（ビャクレンゲ）」

次の瞬間、雪鷹を包み込むように白銀の華が咲く。鋭い花弁がティアナの弾丸を貫き、その弾道を容易く遮った。ティアナが制御でき

る限界、十二発全てを防ぎきった雪鷹は大したこともなさそうに笑う。

「まただ・・・」

ティアナは悔しそうに唇を噛みしめ、雪鷹と距離を取る。白蓮華によって攻撃を阻まれたのはこれで三度目だった。誘導射撃弾による空間制圧攻撃。それがティアナの十八番にして、基本戦術。それが全く通じないのだ。他の方法がないわけではないが、雪鷹に通じる練度に達していないので試みる気にすらならない。幾つも考えを巡らせるが、全て雪鷹に阻まれてしまう気がしてしまう。攻略の糸口が全く見えなかった。

「おい、それがお前の全力か？今までの訓練で何を学んだんだ？」

もちろん、ティアナは全力だった。制御できる最高の弾速と最高の軌道。以前より数段増しているはずなのに、その全てを雪鷹は他愛もなく防ぐのだ。そもそも、ヴィータのシュワルベフリーゲンでさえ砕くことができなかった強固な防御なのだ。ティアナの弾丸如きが通じるはずがなかった。

（考えなきゃ・・・でも、今の私にあれを破れるだけの火力はない・・・）

火力不足をどうやって補うのか、必死に考えを巡らせるが有効な手が浮かんでこない。幻術で撹乱してみようかとも考えたが、それでは隙は作れても火力不足を補うことはできない。そもそも、見晴らしのいい一対一というこの状況で幻術がそこまで有効だとも思えない。逃げる為の時間稼ぎや撹乱は出来ても、決定打を与えることはできないのだ。完全に手詰まりになったティアナは雪鷹に銃口を向

けたまま息を整える。

（考えろ、考えろ、考えろ・・・）

乱れた息が僅かに整う。そして、ティアナは閃いた。

「クロスミラージュっ！！」

《Ｙｅｓ，ｓｉｒ．》

クロスミラージュからカートリッジがロードされ、空薬莢が飛び出す。いくつもの魔力弾が生成され、ティアナを囲むように布陣されていく。その弾数は二十を超えていた。明らかにティアナの制御できる限界を超えていた。しかし、ティアナの顔に迷いはなかった。

「シュートっ！！」

橙の弾丸の幾つもの軌跡を描きながら雪鷹を狙う。しかし、今まで異なり、その弾道は一直線で、速さも今までの数倍は上を行っている。

「制御を捨ててスピード重視か・・・」

しかし、雪鷹は驚くことなく目の前に白銀の華を咲かせて、ティアナの攻撃を防ぐ。いくらスピードが増したとはいえ、火力そのものは通常の大きな差もないので、当然のように弾丸は氷の華に阻まれる。しかし、ティアナの顔に焦りはなかった。

「第二波、シュートっ！！」

続けてティアナは誘導弾を放つ。その数は十発にも満たないが、その分、制御性能は格段に高く、花弁の隙間を縫うようにして、雪鷹を狙う。大量の弾丸を生成し、一挙に放つとみせかけてからの二段射撃。負担は当然、通常の比ではなく、どの程度まで通じるのかも未知数だったが他に雪鷹に通用する手が思い浮かばなかった。ティアナの弾丸が雪鷹を捉えた。そう思った瞬間、雪鷹の姿が消えた。

「上だ」

ティアナの背後から声が響く。その声に反応して、上空を見上げ、そして、気付いた。その声の主に、その声がどこから聞こえてきたかに、喉元に突きつけられた氷の刃に。

「詰み、だな」

ティアナの喉元に白蓮華の破片を突きつけながら、雪鷹はティアナの耳元で囁いた。いつの間に背後に回られたのか気付くことさえティアナは出来なかった。その声はまるで戦っているとは思えないほど甘く、優美で、そして、ティアナにとって屈辱的な声だった。悔しそうにクロスミラージュを握り締め、そして観念したかのように力を抜くとデバイスを待機モードに戻した。

「さて、これで決着はついたわけだが・・・もう一戦するか？」

まだまだ余裕そうな表情を浮かべている雪鷹とは対照的にティアナも首を横に振りながら、その場に座り込んでしまった。

「いえ、もう結構です」

ただでさえなのはの訓練を受けて疲れている上に、雪鷹との模擬戦

だ。一瞬も気を抜けない緊張感。呼吸をするだけで体力が奪われていくほどのプレッシャー。ほんの数分間戦っただけでティアナの心も体もぼろぼろに疲弊しきっていた。

「立てるか？」

座ったまま立ちあがろうとしないティアナに雪鷹が手を差し出す。

「はい、ありがとうございます」

雪鷹の手を握り締め、ティアナはなんとか立ちあがる。緊張の解けた反動か、まだ脚に力が入らないが転ばないように立つことはなんとかできた。肩はまだ大きく上下していて、落ち着きそうもない。

「久しぶりに戦ってみてどうだった？」

「まだまだ未熟だなってことがよくわかりました。あたしが他の三人に頼り切っていたことも・・・やっぱり、強いですね、ユキタカさんは」

息をわずかに乱した程度で平然と立っている雪鷹を見てティアナは苦笑する。雪鷹は今の強さは努力を積み重ねた結果だと言っていたが本当にそうなのか疑ってしまうほどに二人の実力差はかけ離れていた。

「動きはまだまだ荒削りだが悪くない。前に戦った時よりは強くなっている。それは俺が保証する」

雪鷹がこういった類の嫌みを言うはずがないことはティアナも知っている。強くなった、というその評価は紛れもなく本物なのだ。そ

れが嬉しくて、しかし、悔しくもあった。前よりも強くなったにも関わらず、結果は前とほとんど変わっていない。目の前の頂きはまだはるか遠く、高くにあるのだ。ティアナのようやくその裾野を踏んだに過ぎない。

「なのはからセンタガードは動かない方がいい、と言われているようだが、それはチーム戦での話だ。個人戦はとりあえず動け。射撃型なら周囲に気を配りつつ、常に相手に対して有利な距離を維持しろ。敵わないと判断したらすぐに離れろ。いくら射撃の腕がよくても単純な殴り合いに持ち込まれたら勝ち目はない」

いつぞやの痛みと記憶が蘇ってくる。雪鷹の言葉にティアナは若干顔をひきつらせながら頷く。

「・・・はい。あの、ユキタカ曹長・・・一つ、聞いていいですか？」

口に出してしまってからティアナは後悔した。聞くべきではないことだと心のどこかで思ってはいた。しかし、聞かなければならないとも思っていた。どうすればいいのかティアナ自身もわからなかったからずっと悩んでいた。頭の片隅で、ずっと。それが何かの拍子でつい、口から出てしまったのだ。

「なんだ？」

口にしてしまった以上、なかったことにはできない。ティアナは一瞬躊躇った後、口を開いた。

「兄のことは今でも許せないですか？」

「あぁ」

即答だった。雪鷹は迷うことなく、そう言い切るとどこかわずらわしそうな顔をして、ため息を零した。ティアナを見つめるその目には普段は見せない影が見え隠れしていた。

「何を聞くかと思えばそんなことか・・・わかりきったことを聞くな」

ティアナの兄、ティーダ・ランスターの独断専行の結果、雪鷹は同僚の一人を失った。一般人を事件に巻き込んでしまうという管理局員としてあるまじき失態を犯し、禍根を断つ為にその組織はもちろん、組織に関係していた多くの人間を殲滅しなければならない事態に追い込まれたのだ。いい印象を持っているはずがない。

「それなら、どうしてあたしにこうして色々と教えてくださるんですか？」

ティアナがそれが疑問だった。ティーダのことを怨んでいるのなら、当然、その妹であるティアナにも矛先は向いてもおかしくはない。だからこそ、ティアナはあの日、怒鳴られることを覚悟して雪鷹に謝りに行ったのだ。しかし、雪鷹は一言もティアナをティーダのことで責めなかった。ほっとした、といえばそうなのだが、納得できないものは結局残ったままだった。

「・・・そう頼まれたからだ。ほかに何の理由がある？それとも、それは遠まわしの当てつけか？兄を侮辱した相手に教えられるのがそんなに不満か？それなら、もう終わるぞ？」

苛立った声そのものは珍しくないが、普段のそれとはどこか異なる雪鷹の声にティアナはとっさに身を硬くした。

「い、いえ・・・そうじゃなくて・・・むしろ、逆で・・・」

声まで硬くなってしまい思うように声が出ない。ティアナはもう雪鷹を恨んではいない。もちろん、兄を侮辱された悔しさを忘れたわけではないが、少なくとも雪鷹にはティアナを責める資格があるのだ。どんなことを言われても、ティアナはそれを耐えることしかできない。

「普通なら、同僚を死なせた人間の身内だって憎みます・・・その人が悪いわけじゃないって頭ではわかっていても、心までそう考えられるわけじゃない。口では許すって言っておいても、心の中ではずっと恨んでいてもおかしくない」

「ずいぶんとわかったような口ぶりだな」

「わかります。ユキタカさんから見ればまだまだ子供ですけど、それぐらいわかります。だって、あたしがそうだから・・・」

そう言ってティアナの顔が歪む。

「ユキタカさんに感謝しているのは本当です。こうやってわざわざ練習に付き合ってもらって、本当に感謝しているんです。でも、心のどこかでまだユキタカさんを許せないでいるんです・・・兄さんのせいでユキタカさんや他の部隊の人たちにいっぱい迷惑をかけて、ひどいことを言われて当然だってわかってるのに、それでも・・・」

――私はあなたを憎んで、怨んでいる――

ティアナに雪鷹に対して憎む資格はない。雪鷹に憎まれることはあっても、その逆はないのだ。それなのに、ティアナは未だに雪鷹を許せずにいた。あんなに迷惑をかけて、どんなに謝っても足りることのない負い目があるにも関わらず、わざわざ貴重な時間を割いて訓練に付き合ってもらっているにも関わらず。恩を仇で返すような真似しかできない自分自身が、雪鷹を許せない自分自身が、情けなくて、悔しくて、惨めに思えて、涙が溢れてくる。ティアナの頬を熱いものが伝っていく。雪鷹に涙を見せたくはなかったが、ぐちゃぐちゃに乱れた心が何もかもを掻き乱し、理性を壊していく。その涙を雪鷹は氷のように冷たい指先でそっと拭った。

「やっぱり、子供だな。何もわかっていない。だが、とりあえず、泣き止んでくれ。俺が泣かしたみたいだろう？あとでなのはに怒鳴られたくはない」

ある意味では雪鷹が泣かしたといってもいいのだが、雪鷹はさらに言葉を続ける。

「本音を言うなら、お前に対して何も思うところがないというとそれは嘘だ。だが、それとこれとは話が別だ。当時十歳そこそこのお前を責めてどうなるものでもないし、それは今も同じだ。お前に言ってもお前の兄が犯した過ちは消えないし、死んだ人間は戻ってこない。だから、何も言わない。それくらいの分別は持っている」

それに、と付け加えて雪鷹はティアナと目線を合わせた。灰色の双眸。いつもは厳しく、冷たいはずのその瞳が今日だけは何故か優しく見えた。

「どんな理由があろうとも、肉親を侮辱されて怒るのは当然のことだ。侮辱した人間を許せないのも。別に恥じることでもないし、謝るようなことでもない。違うか？」

ずるい。

ティアナは心の底からそう思った。普段は慰めの言葉の一つもかけてくれないのに、こんなときに限って、優しく慰めるのははっきり言って反則だ。今すぐ誰かに縋りつきたいくらい心はボロボロで、こんなに優しく微笑みかけられてしまえば、いくらティアナと言えど揺らいでしまう。雪鷹に縋ることなどしたくないのに、そんな都合のいいことが許されるはずもないのに、心が揺らぐ。求めてしまう。誰かに縋りたくなってしまう。その衝動をもう、抑えきれない。

「・・・ユキタカさんは本当に卑怯です」

ティアナは恨めしそうに呟き、雪鷹の胸に飛び込んだ。雪鷹の胸に顔を埋め、大声を上げて泣き始めた。嗚咽を零しながら泣きじゃくるティアナを雪鷹は何も言わずに優しく、そっと抱きしめた。

29『揺らぐ心』（後書き）

――お前にとって
　お前の兄はどんな人間だった？――

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
３０『揺らがぬ志（こころ）』

――このまま執務官を
　目指してもいいですか？――

Intermission 29.1

Intermission 29.1

離れていた場所で二人の訓練の様子を監督していたなのははティアナが急に泣き出したのを見て、駆けつけようかと思ったがどうにも近寄りがたい雰囲気に当てられてしまい、近づこうにも近寄れなかった。仕方なく、念話で雪鷹に話しかける。

（あの・・・その・・・大丈夫？）

（大丈夫だ、問題ない）

返ってきた雪鷹の声は思っていたよりも冷静で、慌てている様子はまるで感じられなかった。むしろ、余裕そうなその声に何故だか分からなかったが、なのはの胸がちくりと痛む。

（一応聞くけど、ティアナ、怪我とかはないんだよね？）

模擬戦そのものはなのはも見ていたのだからどちらも無傷であることは確認するまでもないことだった。痛みで泣いているわけではないことは一目でわかったが、それにしてはティアナの泣く様子は少し異常だった。雪鷹に抱きつき、まるで幼い子供のように声を上げて泣いているのだ。なのはの知る限り、ティアナは滅多なことでは他人に涙を見せないし、心を許していない相手、雪鷹、の前で泣くなどそうあることではない。

（色々と思い詰めてたんだろう？それが全部弾けただけだ）

（それなら、それでいいけど・・・）

ティアナに問題がないのならそれでいい。なのはがこれ以上言うことは何もない。そのはずだった。しかし、ティアナを抱きしめている雪鷹を見ているとなのはの胸の奥が鈍く、疼く。堪えきれないほどの痛みではないが、無視できる痛みでもなかった。なのはは独り、唇を噛み締めた。

（でも、雪鷹・・・そんな風にティアナを慰めるなんてちょっと意外だな。てっきり、ティアナのことは嫌っているんだと思ってたから。ティアナに対してはいつも厳しくしてたし、あんなに殴ったり、ひどいこと言ったり・・・）

どこか棘のあるなのはの言い回しに雪鷹は内心、わずかに顔をしかめた。

（・・・そこまでひどかったか？）

なのはの言いたいことはわからないでもないが、そこまで冷たく接してきたつもりもない。ポジションの関係上、雪鷹がティアナに教える機会はなかったが、それでも他の三人と分け隔てることなく接してきたつもりだ。ティアナの兄があのティーダ・ランスターであることは六課に入る前に調べて知っていたが、それでもいつぞやのティアナの暴走を除けば、表に出した覚えはない。

（あいつの兄を許せないのは今も変わらない・・・が、それとこれとは別けているつもりだが？）

（本当にティアナのこと、何も思ってないの？嫌いじゃない？）

重ねるようななのはの問いかけに雪鷹は妙な違和感を覚えた。なのはは教え子でもあるティアナのことを心配して、雪鷹に色々と聞いているはずだ。それなのに、今のなのはの言葉にはそれが感じられなかった。どちらかというと、雪鷹がティアナを嫌っている、ということを前提にしている節さえ感じられた。まるで、そうだと決めつけて思いこもうとしているようで、それが事実だと雪鷹に、そしてなのは自身に言い聞かせているようだった。

（嫌いな人間の訓練に付き合ってやるほどお人好しじゃない、生憎とな）

（そ、それじゃ、雪鷹はティアナのことが好きなの？）

（なのは・・・どうしてそうなる？）

雪鷹の声がわずかに哀れみを帯びて、なのはに響く。

（だ、だって・・・）

（恋愛感情を抱いているかと言われると答えはＮｏ（ノー）だ。だけど、もう子供じゃないんだ。好きか嫌いかの二択で物事を考えるな。どちらでもない灰色（グレーゾーン）の方が世の中にはずっと多いんだからな。）

どこか突き放すような雪鷹の声がなのはの胸に鈍く響いた。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｉｏｎ　２９．１（後書き）

どうも、月兎です。

今回は雑談ではなく、お知らせです。
７月は色々行事・イベントがあって忙しくなるので今までのように定期的に投稿することが出来なくなるかもしれません。
一応、ストックはあるのですが、それに手直しを加えて投稿する時間が確保できるかどうかもわかりません。

なるべく今まで通りの投稿が出来るように心掛けますが、もしかすると遅くなってしまう可能性があるのでこの場を借りてお知らせいたします。

次回はティアナフルボッコ編ａｆｔｅｒ（仮）後編です。お楽しみに♪

ではでは

30『揺らがぬ志（こころ）』（前書き）

迷いなんてなかった
不安なんてなかった
恐れなんてなかった
代わりに夢を叶えるって誓ったからあの時から、ずっと。
だけど・・・

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　始まります

30『揺らがぬ志（こころ）』

30『揺らがぬ志（こころ）』

ようやく涙の止まったティアナは現状を認識すると逃げるように雪鷹から腕の中から離れた。その慌てぶりに雪鷹は苦笑する。

「あ、あの、その・・・すみませんでした。あたし、何がなんだかわからなくなって・・・」

顔を真っ赤にしてティアナは雪鷹に頭を下げる。穴があったら入りたい、とはまさしく今のティアナだ。あれほど嫌っていた男の前で涙を見せたことだけでも恥ずかしいことなのに、あまつさえ、その男に縋ってしまったのだ。恥ずかしい、という言葉では言い表せないくらいに恥ずかしさが込み上げてくる。更にそれに追い打ちをかけるように雪鷹の言葉が続く。

「別に。子供に泣き付かれた程度で怒るほど卑小な人間じゃない」

「あ、あたしは子供じゃ・・・」

雪鷹に子供扱いされ、ティアナはキッと雪鷹を睨みつける。しかし、顔を真っ赤にしたティアナの顔など雪鷹にとっては畏れるに値するはずもなく余裕の笑みを浮かべてそれを受け流す。ティアナを包み込む優しさとぬくもりを持った大人の笑みだった。

「一つ、聞いていいか？」

「・・・なんでしょうか？」

普段のティアナなら有無を言わさずに突っぱねてしまうところだが、泣きついてしまった負い目があるせいか、ティアナは戸惑いながらも頷く。すると雪鷹は幾分、真面目な顔になってティアナに尋ねた。

「お前にとって、お前の兄はどんな人間だった？」

「えっ？」

それは思いもかけない質問だった。ティアナの兄、ティーダ・ランスターを心底憎んでいるはずの雪鷹から、そのティーダに関する質問をされたのだ。まったくの予想外のことだった。

「あの、それは、どういう意味で・・・？」

「どういう意味も何も言葉通りだよ。ランスター陸士にとって、ティーダ一等空尉はどんな人間だったのか・・・それが知りたいだけだ。他意はない。単なる好奇心だよ・・・話したくないのならそれでも構わない」

雪鷹はそう言って涼しげに笑って見せた。その顔を見る限り、本当に興味本位で聞いているのだろう。嫌みな感じも、何かを企んでいる腹黒さもなかった。

「兄は・・・兄さんは、本当に馬鹿で馬鹿で、こんな馬鹿な人は他にいないんじゃないかっていうぐらい馬鹿正直でした」

ティアナの口から微かに笑みが零れた。同時に肩から余計な力が抜けていくのを感じた。

「お前の兄だろう？ひどい言い方だな」

実の兄を馬鹿、馬鹿と連呼するティアナに雪鷹は苦笑してみせる。しかし、その言葉の裏にはティアナの兄に対する想いに溢れていることは一目でわかる。どれだけティアナがティーダのことを愛しく、大切に思っていたか、否、想っているかなど今更確かめるまでもなかった。

「そうですね。どうしてかな・・・いざ話そうとすると悪い所しか浮かんでこないや」

ティアナも苦笑しながら空を見上げる。朝日が昇ったばかりの青空は澄み切ったように晴れ渡り、心地よい。そのどこかに兄がいるのかと思うと、悪口ばかりを言ってもいられないが、残念なことに褒める所がどうしても浮かんでこない。良いところないわけではないのだが、浮かんでくるのは直してほしかった癖やずぼらな所、整理整頓のできていない散らかった机に乱れたベッド。脱ぎ捨てられた洗濯物等々、悪い所ばかりだった。

「兄さんのせいでユキタカさん達が大変な目にあったのは知っています。だから、今でも兄さんを許せなくて、だから、兄さんについて色々と厳しいことを言って・・・それでも、そんなどうしようもない兄でも、あたしにとって大切な、自慢の兄なんです」

ティアナはそう言って雪鷹に微笑みかけた。

「あたしの両親はあたしがまだ小さな頃に事故で死んでしまって、あたしは兄さんに育ててもらったんです。両親が事故で亡くなった頃、兄さんはちょうど訓練校を卒業したばかり・・・だったと思い

ます」

ティアナはそう言うと少し寂しげに笑う。

「正義感が強くて、空戦魔導師の資質もあったから管理局員に、それも執務官になろうってそれで・・・でも、訓練校を卒業してさぁ、これからって時に両親が死んで、あたしだけが残されて・・・本当に困らせてばかりで、いっぱいわがまま言って、無理をさせて・・・兄さんはあたしのせいで色んなものを犠牲にしてきました。仕事が終ったらあたしの面倒をみなくちゃいけなくて、食事や洗濯、掃除・・・自分の時間なんてこれっぽちもなかったと思います。本当なら部隊の宿舎で暮らさなくちゃいけないのに、無理を言って自宅通勤にしてもらって・・・」

全部、あたしの為に費やさせてしまった。後悔がティアナの声から滲み出ていた。

「子供心になんとかしなきゃって思ってはいたんですけど、いつも失敗して、逆に迷惑をかけてばかりで・・・それなのに嫌な顔一つしないで何もしなくていいよって・・・兄さんは本当にいろんなものを犠牲にしました。自分の時間も、運も、友達も、仕事も、出世の機会も・・・全部あたしの為に、です。それでも、執務官になりたいっていう夢だけはどうしても諦めきれなくて・・・でも、結局その夢も叶えられなくて・・・ユキタカさん、兄は・・・きっと、あなたにとっては最低の人間なのかもしれません。でも、あたしにとって誰よりも大切で、大好きな兄さんなんです。だから、あたしは決めたんです。兄さんが叶えられなかったその夢をあたしが叶えるんだって・・・馬鹿だからそれしか、思いつかなくて・・・」

ティアナはそう言うとゆっくりと目を閉じた。すうっと涙がその頬

を伝っていく。しかし、ティアナはそれを拭おうとはせず、雪鷹もまた動こうとはしなかった。

「立派なお兄さんじゃないか。泣くな。胸を張って自慢すればいいだろう？」

「・・・はい」

ティアナは小さく頷いた。

「とはいえ、情報一課がお前の兄のせいで色々と迷惑を被ったのは紛れもない事実だし、どんな理由があろうとなかったことにはできないし、するつもりもない。だから、許すことはしないし、侮辱したことを撤回も謝罪もしない。その上で、一言だけ言わせてもらう。ティーダ一等空尉のことは心よりお悔やみ申し上げる」

そう言うと雪鷹はティアナに軽く頭を下げた。ティアナは驚いた顔で雪鷹を見つめ、そして、小さく頷く。雪鷹はティーダのことについて謝罪はしなかった。その評価も変えないと言った。しかし、その死を悼んでくれた。おそらく、それが雪鷹にできる最大限の譲歩なのだろう、とティアナは考え、何も言えなくなった。

「ありがとう・・・ございます」

かろうじて出てきたのは不思議なことにお礼の言葉だった。どうしてそんな言葉が出てきたのかティアナにも分からなかった。しかし、これまでティーダの死を悼んでくれる人は誰もいなかった。当時まだ幼かったティアナに同情してくれる人はいたが、その人達でさえ、ティーダの死を心から悼んでいるようには思えなかった。ティアナ以外で初めて兄の死を悼んでくれたのだ。雪鷹の言葉は口だけので

まかせではないのだとティアナは直感で理解していた。

「そう言ってくれたのはあなたが初めてです、ユキタカさん」

ティアナの口元が綻ぶ。咲き初めの蕾のように初々しく、可憐な唇が浮かべた微笑を一瞥して雪鷹はため息を零す。

「そうか・・・」

「・・・この話、そういえば誰にも話したことなかったなぁ」

思い出したようにティアナは呟き、空を見上げた。兄の夢を継いで執務官になりたいということは訓練校時代にスバルに話した。しかし、兄のことについて話したことは今まで一度もなかった。そもそも、誰も聞こうとしなかった。ある者は興味を持たず、またある者は遠慮して、聞かなかったのだ。ティアナにしてもわざわざ他人に話すようなものでもないので誰にも話そうと思わなかった。今日、雪鷹に聞かれるまでそんなことさえ忘れてしまっていた。

「聞いてはいけないことだったかな?」

「いえ、そんなことないですよ。今まで誰も聞いてこなかっただけですから・・・」

ティアナは小さく首を横に振って答える。

「そういえば、ユキタカさんにはご兄弟はいらっしゃらないんですか?」

「いないよ。一人っ子だったからな・・・それに、片親だったしね」

何気なく呟いた雪鷹の言葉にティアナがしまった、と顔色を変える。雪鷹の家族構成についてティアナは何も知らなかったが、明らかに触れてはいけない部分に触れてしまった気がした。しかし、慌てるティアナとは対照的に雪鷹は気にするな、といわんばかりに笑って首を横に振った。

「片親といっても死に別れたわけじゃない。よく言うシングルマザーという奴だ」

「・・・あれ？でも、確かユキタカさん、地球の出身のはずじゃ・・・」

そのまま聞き流してしまえばよかったはずなのに、一度気づいてしまった疑問は考えるよりも先にティアナの口から出てしまう。雪鷹はわずかに顔をしかめたが、すぐに観念したようにため息を零す。

「まぁ、隠すようなことでもないし、下手に取り繕って誤解されたり、邪推されたりするのは嫌だから・・・前にもいったかもしれないが母親はなのはや八神二佐と同じ第９７管理外世界『地球』の出身だ。そして、父親は管理局の人間だ」

「えっ？」

突然のことにティアナの頭の理解が追いつかない。管理外世界の人間が管理局員と接点を持つことは通常ありえない。なのはやはやてのようなごくわずかな例外は確かに存在するが、それでも管理局員は基本的に管理外世界への不可侵が義務付けられている。その管理局員が管理外世界の人間と子供を為すなど、当然のことながら、あってはならないことだ。

「おそらく、仕事か何かできていたんだろう・・・それについては俺も詳しくは知らない。とにかく、その管理局員は現地で出会った一人の女性、つまり、俺の母親と何度か関係を持ち、そのままこちらに帰ってしまった。それが一時の戯れなのか本気なのかはこの際、おいて置く・・・というよりも聞かれても答えられないから聞かないでくれ。そして、女は男の子を身篭った」

「その子が・・・ユキタカさん？」

ティアナの言葉に雪鷹は軽く頷いて見せる。

「まぁ、そういうことだな・・・当然、男のほうは女が身ごもったことなんて何も知らないし、俺の母親もそのことを伝える術を持っていない。結局、俺の母親は一人でその子を産んで、育てるしかなかった。もちろん、地球でな」

「え、でも・・・それじゃ・・・？」

ティアナの記憶が正しければ雪鷹の生まれはミッドチルダのはずだった。これでは雪鷹の説明に大きな矛盾が生じてしまう。首を傾げるティアナに雪鷹は苦笑を浮かべながらこともなげに言った。

「あぁ、自己紹介の時にいったことは忘れてくれ。本当のことを話すと色々と面倒なことになるから書類の上ではそういうことで通しているんだよ」

どこか影のある笑みだった。おそらく、正直に書いていた頃に何か色々と面倒なことがあったのだろうと、ティアナは考えを巡らせ、それ以上何も聞こうとはしなかった。ティアナ自身、今に至るまで

人並み以上に苦労してきた自負はあるがおそらく、雪鷹の苦労はそれ以上のものだ。雪鷹には先天性の魔力変換資質がある。しかし、第９７管理外世界には魔法文化は存在しない。誰も使い方を教えてくれない異能の力。それが雪鷹にとって災いでしかなかったのだろう。多くを聞かずとも雪鷹の顔を見れば嫌でもどんなことがあったのか想像がついた。

「地球でのことは割愛していいか？あまりいい思い出はないな。いじめられていたからな・・・」

「いじめられていた？ユキタカさんが？」

雪鷹がいじめられていた、というその事実にティアナは驚きの声をあげる。何度考えを巡らせてみてもその光景だけは想像ができない。

「まぁ、な・・・片親で、見ての通りの髪の色。ほんの些細なことだと思うかもしれないが、子供達にとってはそれでも十分な理由なんだよ。魔法のことを知られなかったのはせめてもの救いかな」

当時、雪鷹の周囲の子達にとって雪鷹は文字通り、毛色の違う者であり、格好の獲物だった。

「黙って殴られているつもりはなかったからな。そのおかげで喧嘩慣れしたのは・・・否定できないな」

自虐的に、しかし、さらりと言ってのけた雪鷹にティアナは背中を冷たいものが駆け抜けていく感覚を覚えた。以前、雪鷹が話してくれた強さの理由。徹底的な脳内シミュレーション。その言葉に嘘はないのだろうが、おそらくその根本には幼少期に虐められたことが深く関係しているのだ。喧嘩に勝ちぬく為に、強くならなければな

らなかったのだ。誰の為でもなく、雪鷹自身の為に。

「・・・辛くなかったんですか？」

そう聞いてしまってからティアナは後悔した。如何に雪鷹とはいえ辛くないはずがない。だからこそ、普段は見せないような影のある表情をしているのだ。ティアナは自分の愚かさを呪った。

「す、すみません。あたし、おかしなことを・・・」

「いや、気にしなくていいよ。辛くなかった、といえば嘘になるけど、辛いことだけでもなかったからね・・・いい意味でも悪い意味でも、大切な時間だったよ」

そう言って雪鷹は笑って見せた。それは強がっているわけでも、卑屈になっているわけでもない。過去を受け入れ、乗り越えた者の笑みだった。朝日に照らされた銀の髪はひどく艶めかしくて、ティアナも見惚れてしまうほど輝いていた。

「そ、それからどうなったんですか？」

不覚にも見惚れてしまったことを隠すかのようにティアナの声があからさまに早くなる。それに気付かない雪鷹ではないが、敢えて触れることでもないと軽く聞き流して問いに答える。

「色々あったが十二年は一応、平穏無事に過ごせた・・・が、やっぱり隠し通せるものでもなくてな・・・魔法のことを知られて、そしてこっちに連れてこられて・・・訓練校に入るまでの一年半くらいは本当に迷惑をかけたな」

誰に、と聞こうとしてティアナは止めた。それはあまりにも無粋な質問で、そして、それが誰なのか雪鷹の目を見ればすぐに気付いた。今まで一度も見せたことがない、優しさと悲しさの入り混じった瞳。ティアナに無遠慮に踏み込んでしまったことを後悔させるその鈍い灰色の瞳に言葉を失った。

「それで、訓練校に入って、なのはやフェイトと出逢って・・・そして、今に至ると・・・すまなな、つまらない話に付き合わせて」

「い、いえ・・・そんな・・・あたしの方こそ、すみません。こんなこと聞くつもりじゃなかったんです」

軽い気持ちで聞いてしまったことを懺悔するかのようなティアナの重い声に雪鷹は軽く笑いながら首を横に振る。

「そんな深刻な顔をするな。俺が悪いことをしたみたいだろう？お前が重く受け止めることなんてない・・・」

雪鷹は平気そうな顔で笑っている。しかし、その本心はどうだろうか、と考えてティアナは心を痛める。どんなに都合よく考えても愉快な気持ちになれるはずがない。ティアナも、ティーダの話をしていて懐かしいと思うと同時に辛いとも思ったのだ。おそらく、雪鷹も似たようなものを感じているはずだ。

「でも・・・いえ、なんでもないです」

何かを言いかけてティアナは首を横に振った。兄を思い出して辛くなかった、といえばそれは嘘になる。しかし、それは誰かに同情されるような辛い思い出ではないのだ。辛いことも、楽しいことも全部詰まった大切な思い出だ。雪鷹のそれもまたティアナの思い出と

同じものだ。中途半端な同情はただの侮辱でしかない。そんな同情をされたくはなかったし、誰かにしたくもなかった。

「ありがとうございます。その・・・訓練のこともですけど、色々とお話を聞かせていただいて・・・兄のことも・・・だから、本当にありがとうございました」

ティアナは立ち上がって雪鷹に一礼する。それは上辺だけでない心からの謝辞だった。その証拠に照れているのは恥ずかしがっているのかその頬は薄紅色に染まっている。年並み以上に優秀な魔導師とはいえ、中身はまだ十五、十六のうら若き乙女であることを再認識させられた雪鷹は微かに苦笑してみせた。

「こんなつまらない話が何の参考になるのやら・・・」

「聞けてよかったです。あたし、ユキタカさんのことを色々と誤解してました。何も知らないのに子供だってことにも気付かないで一人で馬鹿やって、スバルやなのはさん、ユキタカさんにも迷惑をかけて・・・でも、これからは二度とこんなミスしませんから・・・だから、このまま執務官を目指してもいいですか？」

一瞬、雪鷹とティアナの視線が交錯する。全身を貫くような鋭い痛みがティアナの中を駆け抜ける。

「そんなこと、俺に聞いてどうする？お前の人生だ、お前が決めろ。それともお前は俺が執務官になるな、と言えば諦めるのか？もしそうなら、その程度の夢に他人を巻き込んだ代償は安くはないとだけ警告しといてやる・・・別にお前に執務官になろうとならまいと俺には関係のないことだ。そんなくだらないことを聞くな」

雪鷹の痛烈な言葉にティアナは驚きながらも、そうですね、と苦笑したまま頷く。

「すみません。言い方を変えます。その・・・ユキタカさんはあたしが執務官を目指すのを応援してくれますか？」

ティアナが欲しかったのは許しの言葉ではない。ただ、背中を押してほしかったのだ。それだけだった。

「それは聞く必要ことがあることか？」

呆れるようなその言葉にティアナはわずかに首を傾げ、すぐに首を横に振った。

「いえ・・・すみません。聞くまでもなかったですね」

なのはに頼まれたから、というだけの理由でティアナの訓練に付き合うほど雪鷹は優しい人間ではないし、素直な人間でもない。なのはの代行及び手伝いからフェイトの補佐に回されたとはいえ、仕事が少なくなったわけでもない。幸いなことにここ数日、緊急出動はないが、もしその時が来れば雪鷹は前線へと駆り出されるだろう。今となってはその非凡さを驚くこともないが、断じて雪鷹は暇人ではないのだ。その雪鷹が自分の時間を割いてまでティアナの自習練週に付き合っている。その事実が無言で雪鷹の心の内を物語っているのだ。これ以上明確な言葉はなかった。

「ついでに、一つ謎かけをしてやろう」

雪鷹はそう言って不敵に笑う。

「仕事で絶対にミスをしない人間がいる。さて、どんな人間でしょうか？」

「すごく優秀な人間・・・ですか？」

違う、という確信はあったが他の考えが思い浮かばず、ティアナはその問いに答える。

「どんなに優秀な人間だってミスをすることはある。まぁ、ミスをミスと認めない馬鹿もいるが、それでも仕事でミスをしない人間なんていない。仕事で絶対にミスをしない人間、それは仕事をしない人間だ。ミスは、その人が仕事をした証・・・大袈裟に言うと生きた証だ。ミスをしないにこしたことはない。だが、ミスを恐れるな・・・」

「・・・はい」

ティアナは神妙な面持ちで頷く。雪鷹は素直ではない。しかし、素直ではない、というだけであって意地が悪いわけではないのだ。ティアナが何を求めていて、何を与えればいいのかを察し、理解し、実行するだけの能力も備えている。今のティアナに必要なのはほんの少しの後押しなのだ。夢を為と、既に心は決めていても、やはり迷いはある。今まで夢の為に犠牲にしてきたものは決して小さなものではなく、少なくもなかった。そして、これからも夢の為に多くを犠牲にしていかなければならないのだ。不安がないはずがない。ティアナは誰かに背中を押してほしかっただけだ。色々な困難が立ちうけている。それでも、大丈夫だと、ただそう言ってもらえればよかったのだ。雪鷹はきっとティアナの望む言葉を言うことはない。しかし、それでも見守っていると教えてくれた。その不器用な心遣いだけで十分だった。

「ありがとうございます、ユキタカさん」

「別に・・・礼を言われるようなことはしていない。さて・・・そろそろ戻るか。まったく・・・やっぱり今日は調子がおかしいな。お前にあんな話をするなんて・・・なのは達にも話してないのに・・・これは相当疲れているな・・・」

「えっ・・・」

欠伸を零しながら去っていく雪鷹を見送っていたティアナは自分の耳を疑った。なのは達にも話していない、雪鷹は確かにそう言った。

「別に驚くことでもないだろう？九歳の女の子に話すには重すぎる・・・あ、そうだ。誰にも言うな、と言っても無駄だろうから敢えて言わないけど、あいつらにだけは言わないでくれるか？」

あいつら、とはなのはとフェイトのことだ。なるほど、あの二人が今の雪鷹の話を聞けばどんな反応をするか想像するに容易かった。ティアナはわかりました、と小さく頷いて見せると雪鷹も笑顔を返した。

「あ、そういえばユキタカさん・・・ユキタカさんのお父さんも管理局の方なんですよね？どんな方なんですか？」

「さて・・・顔も名前も知らないからな・・・育ててもらった恩もない。あんな屑、もう他人も同然だ。そろそろ飯の時間だろう？そんなくだらないことを聞いている暇があったら、少しでも体を休めとけ」

急に雪鷹の声が固くなった。そして、少々怒鳴りながらそう言い捨てるとそのまま寮へと戻っていってしまった。

３０『揺らがぬ志（こころ）』（後書き）

――だから、それは十年前の・・・

違うよ。十年前より今の雪鷹のほうがずっと優しいよ――

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
３１　『近くて、遠い』

――俺は、そんな善人じゃない

でも、悪人なんかじゃないよ――

Intermission 30.1

Intermission 30.1

グラシア家では朝夕の食事では家族皆が顔を合わせるのが古くからの決まりごとだった。とはいえ、今は当主であるカリム・グラシアとその義弟、ヴェロッサ・アコーズの二人しかいない。カリムの補佐役であり護衛でもある修道女（シスター）、シャッハもこの時だけは他の修道女達と一緒に食事をする為、真実二人きりの時間だった。そのせいか、雰囲気もどこか穏やかで、ささやかな家族の団欒がそこにはあった。

「今日のパンはシャッハが焼いたんですって。後で味を聞かせてくださいって」

「へぇ、そうなんだ。あのシャッハがねぇ」

皿に盛られたパンを見てヴェロッサは意外そうに笑って見せる。教会での食事はシャッハも含めた修道女達が交代で担当している。なので、シャッハに料理のたしなみがあるのは当然といえば当然なのだが、護衛兼教育係としてのシャッハの印象が強いヴェロッサにその光景を思い浮かべることは難しかった。

「ところで、ロッサ、何か困ったことでもあるのかしら？」

「えっ？」

突然、カリムに聞かれたヴェロッサの口から間抜けた声が漏れる。

「朝からずっと浮かない顔よ。色恋沙汰ではないみたいだけど・・・仕事かしら?」

歯に衣を着せないカリムの言葉にヴェロッサは苦笑する。一見するとおしとやかな淑女なのだが、中身は見かけほど真っ直ぐでも純情でもない。聖王教会を束ねる騎士の一人であり、時空管理局では少将という階級を与えられているのだ。聡明と剛胆を兼ね備えたその心の強さは並みの人間では足元にも及ばない。

「うーん、困ってないといえば困ってないんだけどね・・・当たらずとも遠からずかな。相変わらず鋭いね、義姉さんは」

ヴェロッサは曖昧な笑みを浮かべてカリムの問いを受け流す。しかし、本気になった義姉(カリム)の追求をこの程度でかわしきれないことはヴェロッサ自身、身を以て知っている。

「前にはやてから頼まれごとをされたのは話したよね?六課に出向してきた人間の中に怪しい人がいるから調べてほしいって」

「・・・確か、情報一課から出向してきた人のことね。でも、それはこの前会った時に渡したのではなくて?」

六課にスパイが来たかもしれない、という話ははやてからカリムも聞いていた。シノブ・ユキタカ空曹長。ロッサが調べたところによると実際の階級は一等空尉であり、魔導師ランクも最高時でSランクを超える優秀な人間だ。はやての話によるとリミッター付きとはいえ、管理局のエースオブエース、高町なのはを撃墜するほどの実力を持っているという。部隊長としてはやてが疑いたくなるのも無理な話ではない。

「まぁ、そうなんだけど、個人的にもちょっと興味があってそれからもちょっと調べてみたんだ」

スパイではない、と雪鷹は言っていたが、それをそのまま信じるほどヴェロッサはお人好しではない。情報部が慢性的な人手不足であることは同業者であるヴェロッサがよく知っている。必ず、裏があるという確信がヴェロッサにはあった。

「少しでも不穏な動きを牽制できるように色々と過去を探っていたらね・・・嫌なものを掘り起こしてしまってね。戸籍上、彼の父親の欄には何も書かれていなかったんだけど、調べてみるとどうやら管理局の人間らしい」

「管理局員が？でも、はやての話だと一課から出向しているその人は確か、地球出身だという話のはずだったわよね？」

管理局員が管理外世界の人間に手を出すことは規則で原則禁止されている。しかし、だからといって男と女が視線を交わせばいらぬ情けの一つや二つが生まれることは止めようがない。したがって、この規則に関しては幾つか抜け道がないわけでもないのだが、それにしても管理局員が責任を持つことが前提としての抜け道だ。子を為したなら、親の欄に名前が書かれていないなどあってはあり得ない。

「まぁ、それはそれであんまりよろしくないんだけど、問題はその父親の管理局員なんだよね・・・」

ヴェロッサはため息を零す。胸を内を駆け巡るのは苦い後悔だ。ここで引き返していればこんな気持ちにならずに済んだのに、と軽く唇を噛みしめた。モニターにその男の詳細が表示される。

「十年前、はやての守護騎士達が起こした魔導師襲撃事件の被害者だったよ」

「そう・・・」

ヴェロッサの言葉にカリムも僅かに顔をしかめた。現機動六課部隊長、八神はやてとその守護騎士一同が深く関わった闇の書事件。破壊不可能と言われた凶悪なロストロギアを消滅させたことが有名だが、その裏で主の命の為とはいえ守護騎士達が罪もない魔導師や希少生物を襲っていたのもまた覆せない事実だ。そのせいで今もまだはやてを犯罪者扱いする輩もいるくらいだ。本来なら終身刑を免れないほどの重犯罪なのだが、諸事情を鑑みたクロノ・ハラオウン執務官の取り計らいにより、はやてとその守護騎士達は保護観察処分となった。

「でも、上が決めたこととはいえ、被害にあわれた方達は今でも納得していないでしょうね・・・」

はやてを犯罪者扱いする人間が未だに消えないのはこの曖昧な処分も関係している。はやてとその守護騎士達に配慮したこの処分は、結果として魔導師襲撃事件をなかったことにしてしまったのだ。もちろん、公式な記録には事件の詳細は記されているが、その罪については裁かれることがなかったのだ。もし、その罪を法に則って裁けば、はやてと守護騎士一同は一生、薄暗い牢の中で生きていかなければならなかった。それほどの重罪だったのだ。

「そうなんだよね・・・はやては罪を償って、一生懸命頑張っているけど・・・」

ヴェロッサはカリムのようにはやてと親しい人間なら、はやてが罪

を償う為にこれまでどれだけ必死になってきたのかをよく知っている。犯罪者と後ろ指を指され、罵詈雑言を浴びせられながらもはやてはこれまで挫けることなく、一生懸命頑張って来たのだ。償いは十分に果たしたといってもいいだろう、いうのが本音だ。

「でも、遺族にとってはまだ許せるはずもないんだろうね」

ヴェロッサが苦々しげに呟く。被害に遭った多くの魔導師はリンカ―コアが回復し次第、すぐに現場に復帰したのだが、リンカ―コアが回復せずに魔導師として再起不能になったものも僅かだが存在する。総じて、管理局に務める魔導師は皆、プライドが高い。それは能力の高さの現れでもあるのだが、そんなプライドの高い人間が魔導師生命を断たれてどうなったかは想像するに容易い。二度と魔導師として生きていけないという残酷な現実に絶望した一部の人間は自らの手でその命までを断ったのだ。そして、ヴェロッサが調べた結果、雪鷹の父と目されている管理局員もその不幸な一人だった。

「はやて達が殺したわけじゃない。他に生きる道があったのに、それを選ばなかっただけじゃないか。はやては何も悪くない。こんなこと・・・はやてが背負う必要なんてない」

「それでもはやては背負うのでしょうね・・・」

カリムの呟きにヴェロッサは黙りこむしかなかった。

「このこと、はやては知らないのよね？」

「あぁ、まだ話していないし、話さず済めばいいと思っている」

話せばはやてを苦しめることにしかならない。それはヴェロッサも

カリムをよく理解している。雪鷹の父親の死に、間接的にとはいえ、関わっていると知ったらその苦しみがどれほどのものになるのか。想像しただけで気が重くなる。

「まぁ、はやての方は僕が黙っていれば知られることはない。ただ、問題は・・・」

「彼もこのことを知っている、ということかしら?」

言いにくそうに途切らせたヴェロッサの言葉の続きをカリムが紡ぐ。

「・・・あぁ、そうだよ。ユキタカ一尉がこのことを知っているという確証はない。でも、彼には知るだけの能力があるし、動機もある。あの性格からして知らないなんてことはないよ」

「はやては強い子よ。闇の書の罪の全部を背負う覚悟もある・・・折れないと信じたいけど・・・」

はやてを犯罪者扱いする人間とはまた別の理由ではやてを憎む者もいる。魔導師襲撃事件の被害者とその遺族達だ。皆が皆、はやてを憎んでいるわけではない。はやてのこれまでの償いを認め、許している者もいる。しかし、未だにはやてと守護騎士達を許せない者もまた確かにいるのだ。彼らにとってはやてとその守護騎士達が犯した罪は絶対であり、はやてが幾ら罪を償おうと許せるものではない。

「遺族からの言葉は私達が考えているより、ずっと重いはずよ・・・」

闇の書のせいではやての命が危うかった、という事実は遺族達も知っている。しかし、それで納得しろ、と言われて納得できるはずが

ないのだ。どんな理由があれ、家族を理不尽に奪われたことに違いはないのだ。そして、はやての為に犠牲になる理由などどこにもない。

「もう十年経った・・・でも、まだ十年しか経っていない・・・」

もう十年も経ったのだから許されてもいいだろう。はやての周りの人間は誰もがそう思っている。一切の罪を受け止め、背負ってきたのだ。生き急いでいるとも見て取れるそんなはやての姿にカリムもヴェロッサも心を痛めてきた。しかしその一方で、まだ十年しか経っていないと言う人間もいるのだ。

「どうしてはやてだけがこんなに苦しまないといけないんだ・・・」

悔しさの滲み出たヴェロッサの声。その悔しさはカリムも同じだ。二人にできることはほんと僅かなことでしかなく、二人がどれほど力を尽くしたとしても何も解決されないのだ。

「何もできずに見ているだけしかできないというのも辛いものですね・・・」

カリムの言葉がむなしく響いた。

31『近くて、遠い』（前書き）

手を伸ばせば届く距離
だけど、届かない

すぐそこにいるはずなのに、届かない

それがもどかしくて、悔しくて・・・

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　始まります

31『近くて、遠い』

31『近くて、遠い』

六課の食堂の端で雪鷹は一人で遅めの朝食を取っていた。見渡してみると六課の隊員達が三々五々に気の合う仲間同士でテーブルを囲んでいる。一人きりなのは雪鷹だけだが、別段珍しいことではなかった。見目美しい雪鷹は一時期、六課の女性職員の中で噂にあがったのだが、どこか近寄りがたいその冷めた雰囲気からか高嶺の花のような存在と化してしまった。それに加えてフェイトの想い人であるという噂が女性職員の間で広がった為、表立って雪鷹に近付こうとする女性はいなくなったのだ。そんな雪鷹に近付く影が一つ。

「訓練、おつかれさまです」

雪鷹はわずかに顔を上げてその声の主を見て、わずかに顔をしかめた。

「なのは、何の用だ？」

歓迎されていないと一目でわかる雪鷹の視線になのはは僅かに戸惑いを見せながらも、向かいの椅子に腰を下ろす。両手には朝食が抱えられている。食事をしながら、ということはすぐに終わる話ではないのだろうと雪鷹は内心、ため息を零す。なのはが雪鷹に尋ねそうなことは幾つも思いつく。

昨日の夜のこと
フェイトのこと

訓練のこと
ティアナの涙の理由

その他にも幾つも思い当ることはある。思い当たるからこそ、煩わしい。

「たまには一緒に食事でも、と思って・・・迷惑だった?」

「いや・・・社交辞令はいいから本題に移れ。何か話があってきたのだろう?」

どこか苛立ったような、棘のある言葉になのははは僅かに眉をひそめる。雪鷹の愛想のよくないことは今に始まったことではないが、ここまで露骨に嫌な顔をされたのは初めてのことだった。なのはの自惚れなのかもしれないが、なのはとフェイトの二人だけは雪鷹にとって特別な存在なのだと心のどこかで想っていた。三か月という短い期間とはいえ寝食を共にした仲だ。この十年、音信不通であったとはいえその絆は今でも続いているものだと思っていた。事実、普段は冷たく、厳しい態度をとっているはずの雪鷹もなのはとフェイトに対しては物腰が明らかに柔らかくなっていた。なのはに何かの非があるのなら話は別だが、何もしていないのにこんな冷たい態度を取られたことは今まで一度もなかった。

「私、何か気に障るようなことした?」

何も思い当ることのないなのははは首を傾げる。理不尽だ、と憤ってもよかったが、理由もなしに雪鷹がこんな態度をとるはずはないということは承知しているので、感情を押し殺して雪鷹に尋ねた。涼

やかな、と言うには冷た過ぎる灰色の瞳はなのはの視線を受けてわずかに揺らぐ。今のなのはに非がないことは雪鷹が一番理解している。それでもなのはに対して冷たい態度をとってしまったのは、これから詮索されるであろうことを考えてしまったからだ。昨日は深夜まで一課の仕事をこなし、六課に帰って来たと思えばフェイトには泣きつかれ、些細なことから口論になり気まずい雰囲気になってしまったのだ。それに加えて、ティアナの訓練にも付き合った。肉体的にも、精神的にも雪鷹はかなり疲れていたせいもあり、煩わしいことは勘弁してほしかったのだ。

「いや、まだ何も」

「なら、どうして・・・」

「その、どうして、と聞かれることが苦痛だから・・・何を聞きたくて来たのかは知らないけど、聞かれることそのものが嫌なんだよ。色々と疲れているんだ」

切なさを秘めた吐息。物憂げな灰色の瞳はなのはを見ていなかった。何を見るでもなく遠くを見つめるその視線は今にも消えてしまいそうなくらいに儚かった。何かあったの、と聞こうと思い、なのはは心の中で首を振った。理由は知らないが雪鷹はなのはに聞かれること自体を拒んでいるのだ。無理に聞くべきことではない、と言い聞かせてその代わりの言葉を雪鷹に紡ぐ。

「雪鷹が嫌なら何があったの、なんて聞かない。でも、愚痴を聞いたり、相談に乗ったりはできるんだからね？私のこと、たまには頼ってくれてもいいんだよ。それだけは忘れないで・・・」

雪鷹を射抜く真摯な眼差し。そこには打算も迷いもなかった。潔い

くらい真っ直ぐな瞳は雪鷹にとっては眩し過ぎた。

「・・・どうしてだろうな」

ため息交じりに雪鷹は呟く。

「俺は十年前の俺じゃない・・・自慢にもならないことだが人を殺したこともある。それなのに、どうしてお前やフェイトはそんな目で俺を見ていられるんだ?怖くないのか?」

雪鷹はそれがずっと謎だった。雪鷹がその過去の一端を話してからもなのはやフェイトの態度には何の変化もなかった。怯える素振りも見せず、何事もなかったかのように雪鷹に話しかけ、普段と変わらない態度で接してくれた。怯えられるか、あるいは軽蔑されることを覚悟していた雪鷹にとって、拍子抜けしてしまうほど意外な反応だった。

「怖いかどうかなんて考えたことないよ」

なのはは意外なくらいあっさりと言い切った。その言葉に淀みは感じられない。それは紛れもなく、なのはの本心だ。

「そういう仕事、だったんだよね?　雪鷹がその人を殺したくて殺したわけでも、何かの事故でもない・・・殺したくないけど、仕事だから仕方なかったんだよね・・・それなら、怖がることなんてないよ。雪鷹が本当はすごく優しいって知ってるから」

「だから、それは十年前の・・・」

「違うよ。十年前より今の雪鷹のほうがずっと優しいよ」

雪鷹の言葉を遮ってなのははっきりと言い切った。それは決して大きな声ではなかったが凛とした強い響きを持っていた。研ぎ澄まされた刃のように鋭く、しかし、愛情に溢れた言葉だった。

「雪鷹の言うように、十年前とは違う所はいっぱいあるよ。でも、そんなの気にすることじゃないよ。みんな、変わっていく・・・変わっていかなきゃいけないんだから・・・」

そう言ったなのはの顔は雪鷹が初めて見るものだった。今にも泣きだしそうで、それなのに柔らかな笑みを浮かべている。仄かに微笑む口元も、優しい目元もせつなげで、妙な艶を感じさせる。その笑みは咲き初めの蕾のように薫り貴く、初々しい。花弁の奥から滲み出るような甘い儚げな色気が雪鷹を誘う。

「・・・なのは?」

憂いを秘めた眼差しで見つめられた雪鷹の声はいつもより上擦っていた。まだまだ子供だと思っていたなのはに、不覚ながらも、目を奪われてしまったせいである。

「私との模擬戦のとき、能力限定(リミッター)がかかってるから手加減してくれたでしょ?気付いていないと思った?」

「・・・買い被るな。ただ、手の内を晒したくなかっただけだ」

なんとか平静を取り戻した雪鷹は無愛想な声で答える。

「・・・否定はしないんだね」

妙に鋭い切り込みに雪鷹は眉を顰める。

「なのはの言う手加減がどういう意味なのか俺には判断しかねる、という意味だ。情報保全や守秘義務の関係でデバイスやバリアジャケットに幾らか制限がかかっている。だが、あの時の模擬戦はあの時の俺が出せる全力で戦った。それは間違いない」

言い訳がましくはあったが、なのははそれ以上聞こうとは思わなかった。雪鷹には雪鷹の事情があるのだ。言いたくてもいえないこともあるのだろう。そこを無理に聞き出す権利はなのはにはなく、またするつもりもなかった。

「それでも、雪鷹が優しいのは変わらないよ。色々不満ばかり言ってるけど、結局新人達のこともしっかりみてくれてるし、前線にも出てくれて色々サポートしてくれてる。ティアナのことがあっても、誰も雪鷹から離れなかったでしょう？みんな、わかってるんだよ。雪鷹が本当はすごく優しいんだって・・・だから、怖いなんて思わないよ、絶対に」

「やめてくれ。俺は、そんな善人じゃない」

雪鷹の口から苦しそうな声が漏れる。

「でも、悪人なんかじゃないよ・・・ティアナのことだって、やり方は乱暴だったけど、ティアナのことを思ってでしょう？本当にティアナが嫌いなら、何も言わないはずだよ。ティアナになんて構わないで、無視することができた。でも、雪鷹はそんなことしなかった」

「それは・・・あいつのミスで他の誰かが傷ついたり、悲しむのを

見たくなかったからだ。あいつのことを思ってしたわけじゃない」

「それならそれでもっとやり方があったはずでしょ？でも、雪鷹はティアナと真剣に向き合った・・・もし、私が雪鷹と同じ立場ならきっとそんなことできない。ティアナのことを許せないと思う・・・」

雪鷹の言葉を受け入れつつも決して自分の意見を曲げようとしないその意志の強さは十年前とまるで変わらない。そのことに半ば呆れながら雪鷹はため息を零した。

「そう思いたいならそう思えばいい。けど、後で裏切られたとか言うなよ」

早くこの話を切り上げたい、という態度が明らかに顔に出ていたがなのははこれ以上何も言うつもりはなかった。どんな理由があるのかわからないが、雪鷹はこの話題を本気で嫌がっているようだった。過去を詮索されることを極端なくらいに嫌っている、否、恐れているようでさえあった。冷たい刃のその奥に、雪鷹は己の過去を隠している。思い返せば、十年前も同じような目をした雪鷹を見たことがある。あの頃のなのはとフェイトが雪鷹の子供時代を聞こうとした時も雪鷹は今と同じ嫌そうな顔をしていた。初めて見る雪鷹のその顔はまだ幼い二人でさえ申し訳ないことをしたと思わせるには十分で、それから、なのはもフェイトも自然とその話題を雪鷹に聞かなくなったのだった。

「・・・ごめん、嫌なこと聞いちゃった？」

そのことを今になって思いだしたなのははは申し訳なさそうに雪鷹に尋ねる。

「いや・・・気にしなくていい」

気にしなくていい、という言葉がお前には関係ない、と聞こえた気がした。それはもしかしたら、なのはの気のせいかもしれないが、なのはを睨む雪鷹の目を見る限り、雪鷹の本音である可能性も否定できない。まだまだ色々聞きたいこともあったが、なのははその言葉を胸の奥に押し込めると無理矢理笑顔を浮かべた。

「ところで、雪鷹、それだけで朝ごはん、足りるの？いくらなんでも少な過ぎない？」

なのははそう言って雪鷹の前の皿を見た。雪鷹の前の更にはトーストが一枚とサラダ、そしてコーヒーが一杯あるだけだった。ほとんど手をつけていない所を見ると他に何か副菜があったとも考えられない。どう贔屓目に考えても成人男性の朝食ではないし、栄養的にも偏りが激しく健康に悪い。

「私、多く取り過ぎちゃったんだけど、どう？」

「いらない。今朝はあまり食べたくないんだ」

素っ気ない返事を返して雪鷹はトーストにかじりつく。嘘を言っている顔ではなかった。

「で、でも、それだけじゃお昼までもたないよ。もっと食べなきゃ・・・」

「いらないと言った。別に一食や二食抜かしたからといってどうなるわけでもないし、仕事に支障が出ない程度には働ける。何の問題

も・・・ごちそうさま」

雪鷹はそこまで言うといきなりすっと立ち上がった。皿の上の朝食はトーストを少々かじった程度でほとんど手付かずの状態だった。

「雪鷹?ごちそうさまって?まだほとんど食べてないよ」

世間一般でごちそうさまという言葉は食べ終わったことを示す言葉のはずだ。しかし、雪鷹の皿を見る限り、どう見ても食べ終わったようには見えない。むしろ、食べはじめたばかりだ。しかし、そんななのはの言葉を無視して雪鷹は食器を片付け、その場から立ち去ってしまった。そして、雪鷹と入れ替わるようにフェイトがなのはの前に姿を現した。

「あ、雪鷹・・・」

雪鷹の背中を見つめるフェイトの目はほんのりと紅く、切ない。フェイトの声が聴こえているはずなのに、雪鷹は振り返ることさえせずにそのまま食堂から去っていった。

「フェイトちゃん?何があったの?」

朝帰りの件で口論になった、とは聞いていたがなのはが考えていた以上に事態は深刻な様子だった。フェイトの雪鷹に対する想いはなのはも知っていた。昨夜、帰ってこない雪鷹の身を案じて涙を流していたことも。だから、雪鷹の朝帰りを知って憤慨することは容易に想像がついたし、口論に発展することも想定の範囲内だ。しかし、ただの口論でここまで二人の仲が抉れるはずがない。

「・・・何でもないよ」

フェイトは今にも泣きそうな顔をして取り繕ってみせる。一目で嘘だとわかるその表情がひどく痛々しくあった。

「何もなかったはずがないよ。とりあえず、座って?話を聞くから」

なのはの言葉にフェイトは逡巡した後、なのはも前の席、先程まで雪鷹の座っていた、に腰を下ろした。その姿は今にも倒れてしまいそうなくらい儚げで、弱々しく見えた。

「・・・それで、何があったの?」

「実は・・・」

フェイトは今朝の出来事を順を追って話し始めた。隊舎の裏で朝帰りしてきた雪鷹を見つけたことから始まり、そこで大泣きしたこと、そのまま雪鷹の部屋に行ったこと、そこで口論になったこと、雪鷹に相応しくないと言われたこと、怒りに身を任せて雪鷹を傷つけてしまったこと、仲直りしたいのに避けられていること。起きたことをできるだけ詳しく、細かく、フェイトは話した。なのはは途中で口を挟むことなく真剣にその話に聞き入り、時折頷いたり、相槌を打ったりしながら、最期までフェイトの話の聞き役に徹した。

「・・・で、もう一度話し合おうって思ってもさっきみたいに避けられて・・・」

「随分すごいことになってたんだね」

新人達を訓練している僅かな合間に想像を超えた修羅場が繰り広げられていたことになのはは純粋に驚きの声をあげた。

「私にも悪いところはあったよ。プライベートを詮索されて、嫌だったと思う・・・それで雪鷹が怒るのは当然のことだけど、でも・・・」

その代償はあまりにも大き過ぎた。雪鷹とフェイトとの間にできた溝はそう簡単に埋められるものではない。フェイトが歩み寄ろうとしても雪鷹がそれを拒むのだ。近寄ることさえ許さない。ただ、それだけのことでフェイトの心は折れてしまった。

「気にし過ぎだよ、きっと。さっきもちょっと様子がおかしかったみたいだし、少し時間を開けて話せばきっと雪鷹もわかってくれるよ」

雪鷹もわかってくれる。それはなのはの希望的観測だ。根拠などどこにもない。それがフェイトにもわかるのか微かに笑って、首を横に振る。

「ダメだよ・・・さっきの雪鷹の態度、見たでしょう?私の姿が見えただけでああなんだ」

「でも、ここで諦めたらずっとこのままになっちゃうかもしれないんだよ?それでいいの?」

弱気なフェイトをなのはが励ます。フェイトの落ち込みぶりは雪鷹が帰ってこなかった昨日よりもひどい。執務官としての業務が無事にこなせるのか不安になってしまうほど今のフェイトには覇気も元気もない。なのはの言葉にフェイトは黙ったまま俯いて何も言おうとしない。

「あのね、フェイトちゃん・・・雪鷹には雪鷹の考えがあってのことだと思うし、理由もなくフェイトちゃんを軽蔑したり、見下したりするようなひとじゃない。どうしてそれが信じられないの？色々気になる気持ちはわかるし、知りたいのは私も同じだよ・・・でも、そんなこと聞かなくても私は雪鷹を信じてる。疑うことなんて、何もないよ」

「・・・なのははすごいね。いつも真っ直ぐで、強く輝いてて・・・」

フェイトはゆっくりと顔をあげる。儚げな、しかし優しげな笑みを浮かべて頷いた。

「いつも、なのはに助けられてばかりだね・・・ありがとう、なのは」

まだ弱々しくではあったがフェイトはしっかり頷いて、笑ってみせた。

「うん、応援してるよ、フェイトちゃん・・・」

なのはも笑顔でそれに応える。

「とりあえず、朝ごはんを食べて、今日も一日、頑張ろう？」

「うん、そうだね」

そう言って二人は朝食を食べ始めた。他愛のないおしゃべりを交えながら食事。それはいつもと変わらない朝だった。ふと、なのはが食堂のテレビの目を移す。朝のこの時間はニュース番組が流れてい

るのだが、ゆっくり新聞を読む余裕がないなのはにとってこの時間帯のニュースは大切な情報源なのだ。フェイトもなのはに続いてテレビに目をやる。

「通り魔事件・・・地上本部職員が殺害、か・・・物騒だね」

「うん。あれ・・・あの人・・・」

なのはに同意するように頷いてからフェイトはテレビに映った顔がどこかで見たことがあることに気付いた。誰だろう、と記憶を探ってみて、すぐにその人物に思い当った。殺された地上本部職員はフェイトがつい昨日会ったあの職員だった。どちらかというと悪い印象しか持っていなかった男だが、殺されてしまったと聞くとやはり心に思うものがある。

「知ってる人なの？」

「うん、仕事でちょっとね。いつも書類を出したりしてたから顔くらいは」

その仕事の際にセクハラまがいの猥談で困らされていたことは黙ったままフェイトは頷く。

「両手と首を切り落とされて、か・・・愉快犯にしてはちょっと手が込み過ぎてるな。私怨？でも、それにしてもちょっと残虐過ぎ・・・」

執務官としての顔を浮かべたフェイトは画面を見つめながら呟く。続いて芸能関連のニュースが始まり、二人はテレビから視線を元に戻した。

「やっぱり通り魔なのかな・・・」

管理局員が殺されただけになのはの顔もどこか暗い。職務中の事故で管理局員が亡くなる、ということはそれほど多くはないが、特別珍しいことでもない。それだけの今回の通り魔事件に理由のわからない恐ろしさを感じずにはいられなかった。

「これだけの情報だとなんとも言えないよ。でも、おかしな魔力反応はなかったはずだから・・・」

一応、顔の知っている人間が殺されたということもあり、フェイトも他人事のような気がしなかった。しかし、ニュースで流れる情報などたかが知れている。執務官の権限を使えば事件の全容を知ることができなくもないが、興味本位で余所の事件に首を突っ込めるほど暇人でもない。

「魔力を使わずに鋭利な刃物を一太刀、だとしたら犯人はかなり絞られてくるんだけど・・・」

魔法文化の発達したこのミッドチルダで、魔力を一切に使わない純粋な武技はほとんど浸透していない。その絶対数がそもそも少ない上、一太刀で首や腕を切り落とせるほどの剣の使い手となると数はかなり限られてくる。もし、その人間が犯人であるとするなら、すぐに容疑者は浮かんでくるだろうが、そういう人間は得てして管理局員とはほとんど接点がないことが多い。私怨の可能性はかなり低い。

「まさか腕試しでこんなことするなんて・・・」

「流石にそれはないと思うよ。そんなに気になるなら、外回りのついでに詳しい話を聞いてこようか？」

冗談とも本気ともつかないなのはの言葉に苦笑しつつ、フェイトは尋ねる。本格的に首を突っ込まなくてもニュースや噂話よりも正確な情報を手に入れるだけならさほど難しいことでもない。

「いいよ。執務官の仕事、大変でしょう？ちょっと気になる事件だけど、でも、そこまでしてもらわなくてもいいよ。ニュースで十分」

そう言ってなのはは空になった食器を持って立ち上がる。

「さて、そろそろお仕事頑張らないと」

「そうだね、もうそんな時間だ」

時計を見て、フェイトも立ち上がる。今日も外回りで朝から忙しい。なのはの言葉ではないが大変であることに間違いはない。

「それじゃ、お仕事頑張ってね、フェイトちゃん」

「なのはもね。あの子たちのこと、お願い」

そう言うと二人は食堂で別れ、それぞれの仕事へと向かって行った。

31『近くて、遠い』（後書き）

真正面から向き合うんやって心に決めた
もう、下手な小細工は一切抜きや

誰が何と言おうと譲れへん物は譲れへん

次回　魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
３２『折れず、曲がらず』

この想い、絶対に譲らへん

Intermission 31.1

Intermission 31.1

自室に戻った雪鷹は崩れるようにベッドの上に倒れ込んだ。

「疲れた・・・」

小さく漏れたその声に嘘偽りはない。しかし、浮かべた表情はどこか壊れたような笑みだった。

「やっぱり、慣れることなんてないな・・・そうだろう？ブレイドハート」

≪But, you are not allowed to stop and shirk. You have to do all your strength for your dream, don't you? I think that your mind has been already decided. I only help you. Sorry, my lord.≫

青の宝玉は瞬き、淡々と告げる。無口な相棒から同情や慰めの言葉が出てくるはずがないことは雪鷹も承知していた。期待していたわけでもない。ほとんど、愚痴に等しい。

「そう、だな。迷わないと決めたのに・・・」

雪鷹はそう呟いて自嘲する。一課に配属され、管理局の暗部を知ってもう何年も経っている。己の手を汚したのはこれが初めてではない。今までに何人もの人間を闇に葬ってきた。今更、取り乱すことなどない。そのはずだった。

「なんでだろうな・・・」

お世辞にもまっとうな道を歩んできたとは言えないし、言うつもりもない。この世界に雪鷹の居場所などそもそも存在しないのだ。闇に染まる前の雪鷹を知る人など片手にも満たず、そして、もう二度と会うこともないはずだった。だから、闇に生きていくことに迷いはなかった。

「なんでここにきて再会するんだよ・・・」

雪鷹の口から漏れ出した声は震えていた。なのはとフェイトは闇に染まる前の雪鷹を知る数少ない人間だ。もう会うことはない、と思っていたその二人に雪鷹は再会してしまった。ここへの異動を命じられた時、二人の名前を見つけた雪鷹は己の運命を呪った。二人とも短いながらも訓練校時代を共に過ごした大切な同期だ。ここに配属されていなければ諸手を上げて喜んだはずだ。

「俺はもう、あの頃の俺じゃない・・・違うんだよ、何もかも」

二人の華々しい活躍は闇に生きる雪鷹の耳にも入っていた。自分のことでもないのに、馬鹿みたいに、誇らしくさえ思っていた。しかし、その二人に会うことになり、ふと気が付いた。二人と雪鷹とでは住む世界がまるで違うのだ。光り輝くきらびやかな表舞台と薄汚れた闇の深淵。決して、雪鷹とは相入れることのない世界に二人は住んでいるのだ。二人の放つ輝きは雪鷹には眩し過ぎた。

「汚れるのは俺だけでいい。お前達まで、穢したくない・・・」

雪鷹はそう言って右手を上に突き出した。細くて、白い腕。成人男性とは思えないほど綺麗な腕だが、実際で数多の血で汚れているのだ。誰かの命を救うのではなく、その命を奪い続けてきた腕が今になって憎く、おぞましくさえある。この血塗られた右手ほど二人に相応しくないものはない。二人の輝かしい未来に害を為しこそすれ、一欠片の利もないのだ。

「こんな思いをするくらいなら、会わないほうがよかった・・・」

二人とも雪鷹を責めることも、咎めることもない。それどころか、受け入れて、慕ってくれている。信じてくれる。頼りにしてくれる。そんな二人の想いが嬉しくて、だからこそ、雪鷹は苦しかった。そして、自分自身を許せなかった。血塗られた咎人に誰かを大切に想うことも、もちろん、大切に想われることも許されはしない。いっそ嫌われた方がいい、と敢えて乱暴な態度をとったこともある。それでも、二人の心は揺るがなかった。

「フェイトには悪いことをしたな・・・」

申し訳なさそうに雪鷹は呟く。実を言うと、仕事に入る直前に今どこにいるのか、とフェイトから連絡はあったのだ。その場で答えても何の問題もなかったが、これから人を殺すのだ、という後ろめたさのせいで返事をしなかった。仕事が終ってからも何度か連絡はあったのだが、雪鷹はそれを全て無視した。隊舎に帰ることもできたが、二人の顔を見たくなくて、人殺しの顔を二人に見せたくなくて、酒に縋った。我ながら本当に情けないことをしていると思う。過去を切り捨てることもできないまま未練に思い、未来を見据えること

もできずにただ彷徨い歩くその自分自身が本当に惨めだった。そんな雪鷹に相棒が再び、瞬く。

《You said me, “Stab a blade(心に) in my heart.” Do you remember?(貴方の言葉ですよ)

「あぁ、そうだな・・・俺が甘かった・・・」

目を閉じて、雪鷹は自分自身に言い聞かせるように呟いた。

「だが、腹は括った・・・もう、迷わない」

再び開かれた目は覚悟を決めた者の目だった。

Intermission 31.2

Intermission 31.2

「えぇ、機動六課です。お願いします」

人事課の窓口に書類を提出したフェイトに事務官の女が声をかけてきた。フェイトより年は少し上、おそらく二十代半ばほどのその女性は小さく手招きをしてフェイトを呼び寄せる。

「何か不備でもありましたか？」

書類に何か問題があったのだろうか、と急いでフェイトは顔を近付ける。しかし、女は違う、違うと首を横に振る。

「不備なんてないわよ。それより、貴女、執務官よね？今朝の事件について何か知らない？」

「今朝の事件？」

「ほら、ここの職員が殺されたって言う例のニュースよ。知らないの？」

首を傾げたフェイトに女は驚いた顔を浮かべる。

「あぁ、あのニュースですか・・・」

どこか軽い女の言葉にフェイトは内心、ため息を零す。女の顔にあるのは、誰も知らない情報を知りたい、という好奇心や興味に基づ

いた単純な欲求だ。そんな欲望を満たす為に話に付き合うつもりはなく、まして誰かに話せるほど詳しいことを知っているわけでもないフェイトは、何も知らないと首を横に振って見せる。女の与太話に付き合っていられるほどフェイトは暇人ではない。フェイトが何も知らない、ということを知ったら興味をなくすだろうと考えていたが、女はそれでもフェイトを放さなかった。

「実はね、ここだけの話、事件はあれだけじゃないのよ」

「えっ？どういうことですか？」

女の言葉にフェイトは驚きの声を上げる。フェイトが食いついてきたことに女はにやりと笑って得意げに言葉を続ける。

「ここは人事課だから職員が亡くなったりしたらすぐにそういう情報が入ってくるんだけど、昨日の夜から今朝までだけで今言った人も含めて管理局員が四人も亡くなってるのよ。大規模な任務で殉職したっていうんならともかく、偶然にしては多過ぎない？しかも、その中の一人は一等空佐よ」

女の言葉にフェイトは頷く。一晩で四人も死ぬのは明らかに異常だ。もちろん、管理局員である以上、殉職する可能性は常にあるが、よほどの任務でもない限り、そう起きるものでもない。

「四人とも所属も階級もバラバラ・・・一見すると何のつながりもないように見えるけど、質量兵器や密輸品絡みでそれぞれ要職に就いてた人達よ。その気になれば、押収した品物を裏でひっそり転売することだって・・・痛っ」

「こら、こんなところで油売ってないの」

三十代半ばと思われる女性がコツンと女の頭を叩く。横一文字に唇を結んだその顔はお世辞にも機嫌がいいようには見えない。いわゆる、お局なのだろう。叩かれた女はうぅ、と呻きながら叩いた女を見つめる。

「だって・・・こんなに怪しいんですよ。きっと何かあるに決まってますよ」

窓口の女は不満そうにその女性、お局、に反論する。

「推理小説の読み過ぎよ。空想と現実、それと仕事を混ぜないの。貴女も執務官ならこんなふざけた妄想にいつまでも付き合うんじゃないの・・・もう、何かあるとすぐこうなんだから。そんなに暇なら向こうで書類整理を手伝ってきなさい」

お局はフェイトにも軽い小言を零してから、女に仕事を与えた。女は不満そうな顔を浮かべながらもそれに従い、窓口の奥へと消えていった。それを見届けるとお局はふうと小さく息を吐き出してフェイトの方を向いた。怒られるのだろうか、と身構えたフェイトにお局は優しく微笑みけてきた。

「ごめんなさいね、あの子、いつも適当な人を見つけてはああやってつまらないおしゃべりを始めるのよ。明るくていいこなんだけど・・・ごめんなさいね、忙しいでしょうに時間を取らせてしまって」

「い、いえ、そんなありませんよ」

小言の一つや二つを浴びせられることを覚悟していたフェイトはやや拍子抜けしながらも、笑顔を返す。

「あの、実際の所はどうなんですか？一晩で四人も亡くなるなんて偶然にしては・・・」

「もしかして、貴女もあの子みたいな馬鹿げたことを考えているんじゃないでしょうね？仮にも執務官でしょうに・・・確かに偶然にしては出来過ぎているかもしれないわね。でも、偶然なのよ」

わずかにフェイトを咎めるような声音。年齢を感じさせる重みのある声で女は更に続ける。

「亡くなった四人のうち、一人は心臓近くの血管が詰まって、ということだからいわゆる病死で、一人は夜道での運転ミスによる交通事故。一人は自殺。つまり、殺されたのはニュースになった一人だけ。他の三つに事件性はないの。昨日その四つがたまたま重なっただけなのよ。まったく、推理小説が好きだからってそれを職場に持ち込まないでほしいわ・・・ここは現実。小説みたいな事件が起きるはずかないのに」

そう言って奥で働く女を一瞥した。遠回しに話にのってきたフェイトを皮肉っているようにも聞こえたが、返す言葉はない。この女の言う通りなのだ。四人も亡くなることは滅多にあるものではないが、偶々その稀なことが起きてしまっただけという可能性もなくはないのだ。事実、話を聞いてみるとニュースで報じられていた殺人事件以外は事件性の低いものばかりだった。

「あぁ、そうだ、貴女に一つだけいいことを教えてあげるわ。一晩で四人が死ぬなんてことはそう滅多にあることじゃないけど、一晩中何もない日はもっと珍しいことなのよ」

女の口から淡々とした言葉で告げられた事実にフェイトは何も言えなかった。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３１．２（後書き）

読者の皆様、日頃は魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔをご愛読いただきありがとうございます。

今回はちょっとしたお知らせです。

いきなりですが、今日から一週間ほど『魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ』をお休みします。

理由についてはネタに詰まったから旅に・・・ではなく、仕事の関係で今日からおよそ一週間、パソコンや携帯電話に全く触れられない生活を送るから、です。あぁ、もどかしい。早く続きを投稿したい。

早ければ来週の日曜日か月曜日には連載を再開します。というわけで一週間ほど感想返信等もできませんがそういう事情ですのでよろしくお願いします。

皆様からの感想やご意見、ご質問を月兎は心待ちにしています。読者の皆様からの言葉が月兎に力をくれるんです。折れそうになっても頑張れるんです。

それでは、皆様、これからも『魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ』をよろしくお願いします。そして、ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

それでは、次回もお楽しみに。ではでは♪

Intermission 31.3

Intermission 31.3

「ティア・・・何かいいことがあったの？」

ティアナの変化に真っ先に気付いたのはティアナの相棒、スバルだった。朝の訓練の終え、部屋に戻ってきたティアナの表情は訓練前とでは明らかに違っていた。雪鷹との一件が終ってからもティアナの顔にはどこか陰が見え隠れしていたのだが、それが嘘のようになくなっていた。

「べ、別に・・・何も・・・」

なかったわよ、と言いかけてティアナは言葉を止めた。本当に何もなかったのか、と自分自身に問いかけてみる。何もなかったはずがない。雪鷹と和解してからも胸の奥はずっともやもやしたままだった。本当にこれでよかったのか、と答えの分からない自問自答ばかりを繰り返していた。しかし、今ならはっきりとこれでよかったのだと胸を張って言える。そう思えるだけの何かは間違いなくあったのだ。

「あったといえばあった、かな・・・」

今更ながら、思い出してみるとそれなりに恥ずかしいことをしていたような気がしないでもない。わずかに頬が熱くなる。いつもは気にならない脈がやけに大きく聞こえた。あんなに嫌っていたはずの雪鷹に縋りつくようにして泣いたこと、兄のことを話したこと、雪鷹の過去を聞いてしまったこと。色々あった。

「なにがあったの？」

ティアナの表情の変化に気付き、興味津々なスバルの顔がティアナに迫る。その目は好奇心できらきらと輝いている。期待しているほど面白い話じゃないわよ、と一言断ってからティアナはスバルに言った。

「ユキタカさんと仲直りできた。それだけ」

「へぇ・・・で？」

続きを促すスバルにティアナはそれだけ、と言わんばかりに首を振る。

「えぇー」

スバルは不満そうな声をあげるが、ティアナはまるで取り合わない。今朝は本当に色々あった。それは他人に話せないようなことではなかったが、ティアナは誰にも、スバルといえども、話すつもりはなかった。ティアナが泣いたことや、兄の話だけならスバルに聞かせても何の問題もない。しかし、雪鷹の幼少時代の話だけは別だ。雪鷹に無断で話していいものではない。誰にも話すな、と言われなかったが雪鷹にとって広まって嬉しい話でないことは言われずとも理解していた。雪鷹がどういう意図で身の上話を聞かせてくれたのかティアナには見当もつかなかったが、それでもむやみやたらに言い触らすべきでないことだとわからないほど子供ではないのだ。

「秘密よ、秘密。私とユキタカさんだけの。だから、話さないわよ、スバルでも」

そう言ってティアナは自分の口元が緩んでいることに気付いた。ティアナ自身、笑顔を浮かべていることに驚きながらも、心のどこかで納得していた。以前のような雪鷹を憎む気持ちはもうなくなっていたのだ。もちろん、全てを受け入れられたわけではないが、雪鷹だけを憎み続けることはもうできそうもなかなった。

「よかったね、ティア」

「・・・うん」

具体的に何がよかったのか、と言われると困ってしまうがティアナは少し間を置いた後に小さく頷いた。今朝の一件で何かが解決したわけではない。ティーダの犯した過ちがなくなったわけではないし、ティアナが雪鷹を許せるようになったわけでもない。ティアナと雪鷹の関係は昨日と何一つ変わっていない。しかし、確実にティアナの中で何かが変わったのだ。その変化がいいことなのか悪いことなのかまだティアナにはわからなったが、少なくとも嫌な感じはしなかった。

「これでよかったのよ、きっと」

その言葉の意味を噛みしめるようにティアナはゆっくりと呟き、そして、微笑んだ。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３１．３（後書き）

どうも、月兎です♪
ようやく復活しました。

やっと終わった。あぁ、長かった。
途中で何度心が折れかけたことやら・・・
いや、折れては挫け、折れては挫けを繰り返して小さくなりすぎて折れなくなっただけか（苦笑

人間、諦めが肝心ですね。どんな困難も抗うのではなく、受け入れてしまえばなんとかなります。今回は色々と勉強になりましたね

と、まぁ、独り言はこれぐらいにしておいて今日から『魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ』を再開します。
今までと同じペースで更新できるように頑張りますので応援よろしくお願いします。
ではでは。

32『折れず、曲がらず』（前書き）

目指すと決めた道の為ならば
果たすと決めた夢の為ならば
迷うことは何もない
躊躇うことは何もない
ただ、己の信じるものを貫くのみ
ただ、自分の全てを尽くすのみ

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　始まります

32『折れず、曲がらず』

32『折れず、曲がらず』

「とりあえず、そこに座ってな。楽にしてくれてええよ」

ロングアーチスタッフとしての日常業務を終えた雪鷹は部隊長であり、直属の上司でもあるはやてに呼び出されていた。意外なことに部屋に入った雪鷹をはやては笑顔で迎え入れた。軽く見渡してみるが、部屋にははやて以外誰もいない。以前、隊長陣勢ぞろいで呼び出されたことを思えば、その静けさがかえって不気味でさえある。そんな雪鷹の視線に気付いたのかはやては苦笑しながら首を振る。

「そんな警戒せんでも誰もおらへんよ。私とユキタカ一尉の二人だけや」

「なるほど。密室に異性と二人きり・・・セクハラされたって言えば一瞬で私の首は飛びますね、八神二佐。それと、ここでは曹長で通していますので」

皮肉を返す雪鷹にはやては困った顔を浮かべてみせる。

「そんなこと企んでへんよ・・・まぁ、そう思われても仕方ないことしてきたのは認めなあかんけど・・・でも、今日はそういうことは一切抜きや」

そう言ってはやては一枚の書類を雪鷹に手渡す。

「事後承諾いう形になってしまったけど、ユキタカ曹長がハラオウ

ン執務官の臨時補佐官に就くにあたっての辞令や。わずらわしいと思うかもしれんけど、そういう規則なんや、そこらにポイって捨んと受け取ってな」

「謹んで拝命いたします」

心のこもっていない定型文を述べて雪鷹ははやてから辞令を受け取る。辞令を手渡したはやては軽く息を吐き、真面目な顔をして雪鷹と向きあった。

「で、本題はここからや・・・なんでこんなことになったのか聞かせてほしくてな・・・話してくれへんかな？」

「高町教導官やヴィータ副隊長達からその時の話は聞いていらっしゃるでしょう？今更、私が話すことがあるとは思えませんが？」

言外に話すつもりはない、と雪鷹は言い切った。しかし、はやては嫌な顔ひとつせず、笑顔で頷く。

「そやね。でもわたしはユキタカ曹長の言葉で聞きたいんや・・・恥ずかしい話やけど、今まで、ユキタカ曹長のことを疑ってばっかりで真面目に話を聞いたことなかったから・・・今更、虫のええ話や思うんはわかるよ。けど、あかんかな？」

顔は笑っているが、その目は不安で揺らいでいる。何事もない顔をしているがおそらく、ここに至るまではやての中での葛藤は相当なものだろう。比較的自由人な雪鷹とは違い、立場も責任もあるはやての苦悩は推して量るべきだ。

「隊長権限でもなんでも振りかざして無理矢理話させることだって

できただろう?前みたいに頭数を揃えて私を脅せばそれで済む話だ。わざわざこんな形にしなくても方法は幾らでもあっただろう?経緯を話すのは構わないが、その真意をお尋ねしたい」

「真意なんて・・・そんな大層なもん、あらへんよ。前のことで私も色々懲りたからな・・・強いて言うなら、ユキタカ曹長に信じてほしいから、かな。私のこと、信じてへんやろ?」

「あぁ、信じていない」

雪鷹の即答にはやては苦笑を返した。

「そうやね。ほとんど初対面でユキタカ曹長にあんな態度とって・・・私が逆の立場やったらそらもう堪忍袋の緒が切れてすごいことになってたやろな・・・」

自分の過ちを思い返してはやてはため息を零した。誓ってはやては雪鷹への悪意から、非礼な振る舞いをしたのではない。はやてははやてなりに六課のことを思って、六課を守りたいからのことだ。もちろん、それではやてが雪鷹を傷つけていい理由にはならない。どんな大義名分を掲げても、はやてが雪鷹を傷つけてしまった事実は消すことのできない事実だ。その結果、雪鷹がはやてにどんな感情を抱いたとしてもはやてにそれを咎める資格はない。

「ろくに話も聞かんと一方的にユキタカ曹長をスパイやって決め付けて、色々嫌な想いをさせてきた・・・」

「そうせざるを得ないように仕向けたのは私です。八神二佐が謝る道理はありません。どうぞ、お気になさらずに」

淡々とした雪鷹の言葉。氷のように冷たく、硬く、感情の抜け落ちた言葉にはやては寒気を覚えずにはいられなかった。

「せ、せやけど・・・」

傷つけてしまったことには変わりはないから、とはやてが食い下がる。しかし、雪鷹は静かに首を振った。

「八神二佐が何を考えているかは知りませんが、私には八神二佐に謝られる道理が見当たらない。貴女は誰に、何の為に謝っているのですか？」

静かで、無慈悲な問いかけ。はやては何も言えなかった。雪鷹の言葉は嫌みや虚言の類ではなかった。本気ではやてに謝られる道理がない、と考えているのだ。冷ややかな眼差しは揺らぐことなく、はやてを見つめている。その瞳を真っ直ぐ受け止め、そしてはやては言った。

「・・・そやね。でも、ユキタカ曹長だけには聞いてほしいんや。あかんかな？」

「懺悔のつもりですか？」

「そうかもしれへん・・・私のしようとしてることはユキタカ曹長への謝罪やのうて、自分が楽になりたいだけなのもしれへん。せやけど・・・いや、ちゃうな・・・せやからこそ、ユキタカ曹長に聞いてほしいんや。私がどんな人間かを知ってもらう為に・・・」

はやては真っ直ぐに雪鷹を見つめ返した。その為にわざわざ雪鷹と二人きりになれる場を設けたのだ。他の誰でもない、はやての言葉

ではやてを知ってもらう為に。

「シグナムから聞いたんよ・・・ユキタカ曹長が機動六課を、私を疑う理由。悔しいと思ったけど、でも、ユキタカ曹長の言う通りや。私の犯した罪は一生消えることはあらへんし、これからずっと償っていかなあかんことや。その為にならどんなことやってするって管理局に入ったときに心に決めて、今までずっと我武者羅に走り続けて・・・」

懺悔と呼ぶにはあまりに柔らかで、自然体の言葉だった。親しい誰かに語りかけるかのようなその口調に雪鷹が意外そうな顔を浮かべながらも、黙ってはやての話を聞くことにした。

「４年前の空港火災の時、初めて自分の部隊を持ちたい思って・・・それから四年ずっとその為に頑張ってきたんや。、機動六課はな、わたしが初めて全権を任された部隊や・・・たった一年だけの運用期間しかないけど、それでも、大切な夢の部隊なんや。そやから、ずっと前から決めてたんや。何があっても、六課は守る。私の全てを賭けてでも、てな」

せやけど、とはやての顔に影が差した。

「それはユキタカ曹長を傷つけてええ理由にはならへんし、そこは何を言われようとも謝らなあかん。許してな」

「謝らないでください、とさきほど申し上げたはずですし、そもそも、それについて何も思っていないのですから許す、許さない以前の問題です」

「そうかもしれん。でも、私が謝ることとユキタカ曹長が私を許す

ことは別物や。だから、こうして謝るんよ・・・私が謝らへんいうことは自分の過ちを認めへんいうことや・・・そんな卑怯はことはしたない。私がユキタカ曹長にしてきたことをなかったことにはしたくないんや。私自身への戒めとして・・・自己満足や、言われたら返す言葉もないし、怒られても仕方ないと思ってるよ」

はやては雪鷹を真っ直ぐ見つめながら言い切った。その目に迷いも躊躇いもなかったが、声はわずかに震えていた。雪鷹と、己の犯した過ちを認め、正面から向き合うと心に決めはしたが、それでも罵倒や叱責はもちろん、怖い。しかも、今回は何の仕込みもしていない直球勝負だ。怒り狂った雪鷹が何かをしてくるという可能性もないでもなく、もしそうなったときにはやてに出来ることは何もない。そんなはやてを見て、雪鷹は固く結んだ口元を緩める。

「腹芸の達者な小狸かと思っていたが、そうでもないようだな。そう怯えるな。別に俺は怒っていない・・・むしろ、好ましい方だ」

怒鳴られることを覚悟していたはやては愉快そうに笑うその声に首を傾げながら、雪鷹を見つめ返す。

「そんな顔をしないでください。これでも八神二佐のことを褒めているですから」

しれっと言ってのけるその笑顔にはやては若干顔を引き攣らせながら笑顔を返した。これまで一度も雪鷹に褒められたことなどない。むしろ、泣かされてきたことのほうが圧倒的に多い。素直に受け止めることなどできるはずがなかった。

「なんや、不思議やね。ユキタカ曹長にそんなこと言われるなんて・・・でも、嘘やないんやろうね。そういう目や」

堪え切れなくなったはやては雪鷹から目を逸らし、ため息を零した。雪鷹の言葉は嫌みや偽りの類ではない。はやてはそう直感した。根拠となるものなど自身の勘以外何もないが、それでも確信は揺るがなかった。

「・・・それは六課のことを認めてくれた、いうことでええんかな？」

「少々、考え違いをしているようですね。八神二佐は何か誤解されているようですが、私が六課を認めるということはありえませんよ。それは私の仕事ではありませんから。ときに八神二佐、戦争や紛争、緒犯罪等が起こす為の三要素をご存知ですか？」

雪鷹はふと居ずまいを正してはやてに向きあう。声の調子もどこか厳かで、重みが感じられる。しかし、はやてを威圧するような圧迫感はない。

「意志、能力、環境のことか？指揮官研修で習ったけど、それがどうかしたん？」

雪鷹の意図を掴みかねたはやては首を傾げるが、それに構うことなく雪鷹は話を続ける。

「そう、その通りです。意志は他者に対して攻撃を行おうとするものの主観的な意志を指し、能力はそれを実行するだけの火力や戦力はもちろん、経済力や士気、装備、後方支援を含めた総合力のことです。そして、環境は主に外的要因を示します」

まるではやてに対して講義を行うかのような雪鷹の口調。淡々としたその言葉にはやてを口を出そうと思ったが、心の中で首を横に振った。何が目的なのか見当もつかないが、雪鷹ははやてに何かを伝えるつもりなのは明らかだ。それならば、下手に話の腰を折るよりも最期まで聞いた方がいい。そう判断したはやては話の続きを促すように小さく頷いて見せた。

「そして、その中でも機動六課は能力が突出している。だから、情報一課はここを警戒しているんです」

「な・・・なんやねん、それ。そんなん、ただの言いがかりや」

遠回しに機動六課がどこかに侵略する、とでも言いたげな雪鷹の言葉にはやては憤慨した表情を浮かべる。魔導師ランク総合ＳＳの八神はやては広域魔法と後方支援に関しては右に出る者はいない。エースオブエースとして名高い高町なのはの火力は言わずもがなで、フェイトも近接戦闘から広域殲滅魔法までこなせるオールレンジに対応可能な一流の魔導師だ。三人それぞれが単騎で戦局を左右するほどの実力を持っている。シグナムやヴィータも一騎当千の実力の持ち主であり、シャマルとザフィーラも闇の書の守護騎士として第一線で戦えるだけの実力と経験を兼ね揃えている。新人達も総合力では今一つ劣る所もあるが、得意分野に関してだけならＡランク魔導師と比べても遜色のないレベルだ。ロングアーチスタッフも直接戦力としては期待できないが後方支援はもちろん、電子戦にも対応できるエキスパート揃いだ。確かに機動六課の戦力は他の部隊の比ではない。しかし、それだけの理由で疑われるなどはやてでなくとも納得のできるものではない。

「だが、まぎれもない事実だ。その気になれば他の管理局世界や地上本部の制圧も十二分に可能・・・それだけの戦力が揃っているん

だ。否定はできないだろう」

「それは・・・そやけど・・・」

可能かどうかの二択で考えるなら、可能である、と言わざるを得ない。ロングアーチが地上本部の防衛システムにクラッキングをしかけ、数分の時間さえ稼いでさえくればあとははやての広域殲滅魔法となのはの砲撃魔法、キャロの真竜召喚（レアスキル）で地上本部の防衛システムを物理的に破壊、無効化できる。その他の戦力で地上本部の残存戦力を各個撃破に持ち込めば完全制圧までさほど時間はかからない。実際はそう簡単にいくはずはないのだろうがが、それでも地上本部の制圧そのものは難しいことではない。

「そやけど、それだけで疑うなんて・・・」

「それだけ、のことか？今言ったように、六課は三要素の内の一つを満たしている。環境は外的要因によって常に変化するし、意志は幾らでも隠すことができる。そして、環境によって変化する可能性も高い。仮に、だが、八神二佐が人質にとられ、犯人グループからある人物を殺せ、と要求が来たとする。この状況で、貴女の守護騎士達は犯人の要求を蹴ると思うか？」

「・・・たぶん、蹴られへんやろうね」

はやては苦い顔をして、雪鷹から目を逸らした。守護騎士（ヴォルケンリッター）達の性格ははやてが一番よく知っている。たとえ、はやてが望まずとも守護騎士達ははやての命を優先するだろう。はやて（闇の書事件）達の過去がそれを如実に物語っている。はやての為に尽くす。忠義と言うその一点において善も悪もないのだ。

「それだけじゃない。この部隊の中核を為す人間は全て八神二佐の身内や友人達だ。そういう人間を盾に取られて、犠牲もやむなしと見殺しにできるか？八神二佐がそんな冷徹な真似ができる人間じゃないことは承知している・・・仲間の為なら、自らの手を汚すことも躊躇わないだろう？」

雪鷹に問われ、はやては自問する。もし、仮には守護騎士達が、なのはやフェイトが、大切な部下が人質にされたならば、それを見殺しにできるだろうか。

答えはすぐに出てこない。

指揮官としてなら、心を鬼にして見殺しにしてでも任務を遂行しなければならない。それが答えのはずだ。しかし、心の中の迷いは消えることがない。できるなら見捨てたくなどない。できるならはやてが身代わりになりたい。大切な人を失う苦しさを、辛さを、悲しさをはやては知っている。だからこそ、他の誰にもそんな気持ちをさせたくはなかった。

「結局、何が言いたいんや・・・私が指揮官に相応しない思うんやったらはっきりそう言えばええやろ」

はやては雪鷹の言葉を否定せずに、否定できずに、そう言った。嫌なことから目を逸らしてしまった自覚はあったが、それは今向きあ

うべきものではないはずだった。

「その潔さは個人的には嫌いではない。むしろ、好ましい方だよ。だけど、部隊を指揮するなら、自分の手ではなく、心を汚すことも必要になってくる。誰かの手を汚させてでも、しなければならないことがある。八神二佐、貴女の両肩にのしかかる責任は重く、与えられた力（権限）は強い。だけど、貴女の手はそんなに小さい・・・人一人ができることなんてほんの微々たることでしかないんですよ」

「かもしれへん。でも、私は私の道を行かせてもらうよ・・・その為の機動六課や。他の誰にも邪魔なんてさせへんし、もしユキタカ曹長が何かするつもりや言うんなら、ぶつかり合いたくはないけど、それでも、その時は覚悟を決める」

はやてはもう一度雪鷹を向きあった。雪鷹の言うことはよくわかる。詰まる所。はやての指揮官としての甘さを言っているのだろう。はやて自身、己の未熟さは重々承知しているつもりである。だからこそ、譲れぬものを曲げるわけにはいかなかった。己の未熟さを理由に曲げてしまえば、二度とその意地を、誇りを貫き通せない。その身に恥じることなどないのだ。はやてが折れる理由などない。

「好きにすればいい。何度も言っているが、俺は六課を妨害する為に来たわけではないし、八神二佐に何かを命じる権限もない」

二人の視線がぶつかり合う。しかし、不思議と険悪な感じはしない。互いが互いを認め合っているからこそのことだ。どちらからとなく視線を外す。

「私に言いたかったことはそれだけですか？これ以上何もないなら、戻らせていただきます」

そう言って雪鷹は立ち上がる。すらりと伸びた手足が優美で、それでいて動きに無駄がない。まるではやてに見せつけるかのようなその所作は鮮烈で、はやての目を釘づけにする。この男は自身の容姿がどれほどのもので、如何にして振舞えば相手の視線を奪えるのかを熟知している。確信犯であるだけになお性質が悪い。もう少しだけ、見ていたい。はやての胸の奥でささやかか欲望が疼く。

「そういえば、色々と大事そうことを話してくれたけど・・・それ、私に話してもよかったことなん?」

聞く必要はないことだと思いながらもはやては尋ねることを止められなかった。そして、雪鷹がわずかに物憂げな表情を浮かべたのを見逃さなかった。その振舞いに僅かに影が差し、雰囲気が憂いを帯びる。

「よくはない。けど、八神二佐は誰かに言い触らすような真似はしないでしょう?そもそも、機密を漏らした罰を受けるのは私です。八神二佐には関係のない話です」

はやてと視線を合わせようとしなかったが、どんな目をしているのかは容易に想像がついた。その冷たく、どこか寂しげな声音が全てを物語っていた。

「関係ないなんてことない。私はこの部隊の部隊長や・・・ユキタカ曹長やって大事な六課の一人なんよ。関係ないなんてそんな悲しいこと言わんといて。部下の面倒をみるんも部隊長の仕事や」

「仕事だから、か・・・下手な同情は相手を侮辱しているようなものだ。部下思いなのは結構なことだが、義務感だけで同情された部

下の気持ちにもなってみろ。安かろうと低かろうと誰だって意地やプライドはある。同情の安売りはしないことを忠告しておく」

そう言うと雪鷹ははやてに背を向けた。

「・・・あのな、最期に一つだけ聞いてほしいんや・・・六課は私の・・・私だけやない、私を助けて、支えてくれたみんなの夢なんや。せやから、誰にも潰させへんし、邪魔するんやったら誰が相手でも容赦できへん、たとえユキタカ一尉が相手でも。できるなら、そんなことはしたないんや・・・やから、私にそうさせへんといてくれんか？」

「なら、俺からも一つだけ。六課が何の目的で作られたのかなんてはっきり言って俺個人として興味はない。上からそれを探れと言われたから探っているだけだ。ただし、お前の夢とやらが道を踏み外して、世界に仇なすようなら俺は全力で、たとえお前や他の人間達を殺してでも、その夢とやらを砕く。その為にここにいる。だから、一つだけ、頼みがある。俺にそんな真似をさせないでほしい。俺からはそれだけだ」

雪鷹はそう言って部屋から出ていってしまった。残されたはやては黙ってそれを見送ると悔しそうにため息を零す。

「結局、こういう関係のまま、か・・・あかんな・・・」

己の無力を悔いるその言葉は他の誰の耳にも届くことなく闇へと消えていった。

３２『折れず、曲がらず』（後書き）

小さくていい。ほんの少しでいい
大きいと怖くて足が竦んでしまうから

小さくても、その一歩があれば前に進める
小さくても、その一歩があれば変われる

だから、勇気を出してその一歩を踏み出しますんだ

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
３３『一夜終えて』

Intermission 32.1

Intermission 32.1

自室に戻った雪鷹は制服を脱ぎながら笑い交じりため息を零す。実を言うのならば、雪鷹がはやてに話した内容は部外に話すのは好ましくないが、漏れて困るというほどでもない、程度の情報だ。しかし、それを雪鷹はあたかも重要そうに装ってはやてに話したのだ。そして、最期にその罪は全て雪鷹自身にある、と仄めかした。その効果は覿面で、はやては聞いてはいけないことを聞いてしまったと、見ていて面白いくらいに顔色を変えていた。

「潔さは尊敬に値するがまだまだ子供だな」

雪鷹に短い付き合いながらも、はやての性格を既に把握していた。責任感に溢れるその姿は優秀な指揮官としてこれからの成長を期待させるものの、まだ清濁併せ呑めるほどの強さはない。そして、誰かが自分のせいで傷付くことを臆病なくらいに恐れ、嫌っていた。自分自身が手を汚すことにほとんど迷いがないことを考えるとそれは少々異常とも思える嫌悪の仕方だ。

「心だけは清く在りたい、とでも思っているんだろうが・・・」

闇の書事件のせいか生来のものなのかはともかく、はやては自分自身が傷付くことを恐れていないように見えた。辛いことがあっても一人で抱え込み、独力で片付けようとしている。それはそれで潔いことであり、雪鷹も認める所であるがそれは逆に、せめて心だけでも清くあろうと足掻いているようにも見えた。自分の為に誰かに手を汚させることは想像以上に精神的に負担がかかるのだ。それはそ

れ、と割り切れる人間ならともかかう、はやてのような人間にとってそれはただの苦痛でしかない。

「無理だよ。そんな甘い考えじゃ・・・」

その苦しみを知る雪鷹は今のはやてにかつての自分自身を重ね、苦々しげに呟く。窓から差し込む日の光に右手をかざす。透き通った血潮は休まることなく、脈動している。一見すると細く、白い綺麗な手だ。しかし、この手は幾つもの命を刈り取ってきた死神の手だ。幾人もの怨みと怒り、嘆きと悲しみが纏わりついているおぞましい右手だ。

「人の手はこんなにも小さい・・・この手に掴めるものなんてたかが知れている。才能や努力でどうにかなるものじゃない・・・」

はやての性格からして部下を見捨てるということは絶対にできない。それはそれで頼もしいことではあるが、同時に恐ろしくもある。守るべき市民と自分自身ならはやては迷わず、己の職務を優先し、自分自身が犠牲になろうとも市民を守ることを選ぶだろう。しかし、はやての身内や親友がその秤にかけられたなら、はやての心がどちらに傾くのか。それが雪鷹には判らなかった。管理局員なら、たとえどんな状況であろうとも市民を優先する。それははやても他の六課職員も承知していることだ。しかし、頭で理解しているからといってそれが実行できるかというとそれは全く別問題だ。そして、雪鷹には部下を犠牲にしてでも市民を助けることを選択するはやてがどうしても想像できなかった。

「・・・そうならないことを祈るよ」

雪鷹はそう呟くと右手を硬く握りしめた。機動六課がどんな目的で

作られたのか雪鷹に興味はない。しかし、情報一課が危険視するだけの能力がここには揃っているのだ。見過ごすことができるはずなどない。いまははやての指揮下で正常に動いているものの、何かの拍子に道から外れてしまうことは十二分に在り得るのだ。もしものときは、はやてや隊長陣を刺し違えてでも、暴走を止めなければならない。その現実を改めて認識した雪鷹は自嘲する。

「よりによってなのはとフェイトのいる部隊か・・・運が悪い、というよりも確信犯なんだろうな、きっと・・・」

この任務を命じた上司の顔を思い浮かべ、雪鷹は忌々しげに呟く。雪鷹となのは、フェイトの関係を知っている者はそうそういるものではない。しかし、訓練校の卒業生と時期を調べれば三人が同期であることはすぐにわかることで、それを把握していない上司であるはずがない。雪鷹の本当の上司、すなわち情報一課の課長を務める人間は一見するとただの中年オヤジの昼行燈なのだが、情報網と腹黒さに関しては右に出る者はいないしたたかな切れ者なのだ。

「結局、俺もあんたにとっては駒の一つ、か・・・まぁ、いい。駒(ポーン)は駒(ポーン)なりに足掻くだけだ。さて、そろそろ出るか・・・」

着替え終えた雪鷹はそう言うと自室を後にした。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３２．２

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３２．２

「なぁ、みんな・・・ひとつ聞いてええかな？」

「ん？どうしたんだ、はやて」

隊舎の食堂には八神家一同が顔を揃えている。毎日顔を合わせているとはいえ、全員が一緒に食卓を囲める日はそうあるものでもない。そんな珍しい日にも関わらず、更に珍しいことに八神家の主、はやての顔はどこか浮かない。そして、いただきます、と合掌してすぐにはやてはその問いを切り出した。

「もしもの、本当にもしもの話なんやけど・・・もし、また管理局と対立せんなんことになったら、みんなやったらどうする？」

「それは、どういう意味なの？」

湖の騎士、シャマルは首を傾げる。ヴィータもはやての意図が掴めないといった表情を浮かべている。リインもいつもならすぐに食事に食いつくはずなのに、雰囲気を察してか、黙ったままはやてと守護騎士（ヴォルケンリッター）達を見ている。

「ユキタカに何か言われたのですね？」

シグナムだけが静かにそう聞き返した。はやては黙ったまま頷く。

「おい、それってどういうことだよ？なんか言われたのか？」

「まぁ、色々とな」

ヴィータの問いにシグナムは軽く頷いて返す。

「数日前に尋ねられた。主を人質に取られ、誰かを襲うことを命じられたら、お前はそれを拒めるか？己の主を見殺しにしてまで、管理局の正義を貫けるか、とな・・・主はやても似たようなこと聞かれたのでしょう？」

「・・・そうや」

シグナムの言葉にはやては頷く。

「なんだよ、それ・・・ふざけやがって」

ヴィータは顔をしかめながら、毒つく。しかし、ザフィーラはやんわりと、しかし、はっきりと首を振って、それを否定する。

「おそらく、ふざけてはいないだろう。我らが過去に犯した過ちを考えるなら、聞かれてもしかたのないことだ」

ザフィーラの言葉に皆、黙りこむ。十年前の闇の書事件。かつて、はやてを助ける為とはいえ、守護騎士（ヴォルケンリッター）達が犯した過ちはそう簡単に忘れられるものではない。忘れてよいものであるはずがなかった。誇り高き古代ベルカの騎士達がその誇りを捨ててさえ守ると決めた主はこの十年で立派に成長した。心配していた後遺症も残ってはいない。なにもかもが順風満帆に進んでいる、誰もがそう思っていた。しかし、その平穏の一枚下には過去に犯した過ちが消えることなく遺っているのだ。それを改めて突きつけられ、誰もが言葉を失って

いた。しかし、守護騎士（ヴォルケンリッター）の誰もがあのときの決断を後悔はしていない。あのまま何も動かずにいれば、闇の書は容赦なくはやての命を喰らい、新たな器を求めてどこかの世界に転生していたはずだ。

「・・・どんな理由があったにせよ、我々のしたことは決して許されることではない」

しかし、シグナムの声に込められていたのは間違いなく後悔の念だった。あのときの決断が今もなお、主であるはやてを苦しめ、傷つけるとは考えもしていなかった。

「けど、それでもせなあかんと思った・・・それは私がようわかってる。だから、みんなが気にしたらあかんよ。わたしがこうやって生きていられるんはみんなのおかげや。それだけは間違いないよ」

はやての優しい言葉が騎士達の傷を慰める。

「してしまったことはなかったことにはできへん。けど、こうして償える機会をもらえたんや・・・みんなで償っていこな」

その言葉に騎士達は小さく、しかし、はっきりと頷く。

「それにしてもよ・・・あたしらがこういうこと言える立場じゃねぇけど、前にもユキタカからこんなこと言われたよな。しかも嫌がらせとかそういうんじゃなくて結構本気（ガチ）で・・・ちょっと、拘り過ぎじゃねぇか」

以前に雪鷹を呼びだした時にも、雪鷹は動じることなく、はやての過去に踏み込み、切り返してきた。弱みを突かれたはやてのそのまま場の主導権を奪われてしまい、はやての目論見は結局、失敗に終

わってしまった。場の優位を取り戻す為にはやての過去を話した、ということ自体はおかしなことではなく、不愉快ではあるが、理解できないことではない。しかし、ヴィータはそれだけでは収まらない何かが雪鷹の言葉には秘められているような気がしてならなかった。無論、根拠などない。そんな気がする、というだけの勘に等しいあやふやなものだ。

「それは考え過ぎじゃないかしら・・・こういう言い方はしたくないけど、あの事件が私達やはやてちゃんにとって一番の弱みなんだから」

「それはそうなんだけどよ・・・そんなんじゃなくて、もっとなんて言うかな・・・個人的な感情みたいな・・・」

ヴィータが頭を捻らせながら、言葉を絞り出す。シャマルの言う通り、はやての一番の弱点（スキャンダル）である闇の書を突いてくるのは定石であるのだが、それとは何か違う気がしてならないのだ。それを上手く言葉にすることができないヴィータを見て、それまで黙っていたリィンが口を開いた。

「個人的な怨みとかですか？」

「つまり・・・ユキタカの知り合いを我々が襲っていた、ということか？」

「いや、その線は薄いと思うよ」

リィンとシグナムの言葉をはやては首を振って否定する。

「ユキタカ曹長が訓練校に入ったんは事件が終ってからや。それま

で地球で暮らしてたから、魔導師の知り合いとかはおらへんはずや。それに、もしそうやったら、私を前にしてあんな風に平然とはしてられへんやろうし・・・たぶん、それだけ私らを警戒してるってことなんやと思うよ」

「はやてちゃん！！」

どこか自嘲気味に話すはやてにシャマルの視線が、他の者達の目も、若干険しくなる。

「ごめん。そういうつもりで言ったんやないんよ・・・」

「だが、まぁ、ユキタカの不安もあながち的外れなもでもないからな・・・警戒したくなる気持ちが理解できなくもない」

シグナムはそう呟いた。あのとき、シグナムが雪鷹に何も言えなかったのは心に迷いがあったからではない、答えは既に決まっている。迷ったのはその答えを口に出してよいのかどうかのただ一点のみだ。あの場で口にすればはやてや守護騎士達に対する印象にどのような影響を与えるのかわからなかったからだ。だからこそ、シグナムは言えなかっただけなのだ。守護騎士達の視線が一瞬だけ、交わる。口に出すまでもなく、騎士達の想いは一つだった。

「この身に命ある限り」

「我らは御身のもとにあり」

「我らの、夜天の王」

「八神はやての名のもとに」

「ですね」

これが答えだ、と言わんばかりにあの日の誓いを繰り返した。シグナムやヴィータは管理局に属しているが、守護騎士達の主は管理局ではない。守護騎士（ヴォルケンリッター）の主は八神はやて、ただ一人なのだ。

「主はやてが管理局を敵に回しても、というのなら我らはそれに従うだけだ。主を守る牙となり、盾となり、この命、尽き果てるまで戦い続けることも厭いはせん」

「でも、はやてちゃんが誰かに捕まったり、何か危険が及んだりして脅されて、管理局に敵対しなくちゃいけなくなったら、その時は・・・」

「本当はそんなこと絶対にしたくねぇし、あっちゃいけないんだけど・・・でも、決めたんだ。二度とはやての誇りを踏みにじる真似はしないって。だから、守護騎士としては失格かもしれないけど・・・」

「たとえ、見殺しにすることになろうとも、不義理と蔑まされようと、主のその誇り（笑顔）だけは何に代えても守り抜く・・・夜天の王、八神はやての騎士である者として、必ず。それが我等貴女の守護騎士達の誇りです」

騎士達にとって、それは苦渋の決断だった。本心では、誰もがはやてを助けたいと望んでいる。見殺しにしたくはない。この手を血に染めてでも、その命を救いたい、というのが本音だ。しかし、はやてがそれを望まないこともまた。誰もが承知していた。はやては自分の命の為に誰かが犠牲になることを望んでいないのだ。

「うん・・・ありがとうな、私（みんな）の騎士達・・・」

死が怖くないわけではない。この世に生を受けてまだ二十年も経っていない。したいことは数えきれないほどある。しかし、それよりも大切なことがあるのだとこの十年の間にはやては知ったのだ。人は永遠には生きられない。老いか、病か、刃か。いずれは奪われてしまうのだ。それならば、どこまで生きるかではなく、どう生きたかを大切にしたい。それがはやての偽らざる想いだった。誰にも、守護騎士にもなのはやフェイトにさえ、打ち明けたことがなかったが、その想いは確かに騎士達に伝わっていたのだ。そして、騎士達は何も言わずに受け入れてくれた。それだけで十分だった。

「もう、何も恐れることも迷うことあらへん・・・わたしはわたしのやるべきことをするだけや」

Intermission 32.3

Intermission 32.3

ノータイにジャケットという雪鷹にしては珍しい砕けた服装で、雪鷹は一軒の店に入る。店の入り口には達筆な字で『盛』と書かれた看板が掲げられている。明らかに居酒屋風の店構えだ。通りからそれた横道に面しているせいか、繁盛しているようには見えない。しかし、だからといって寂れているようにも見えない。お世辞にも店の中は広いとはいえず、カウンターの他にテーブルが幾つか並んでいるが、十人も入れば満席といったところだ。

「っらっしゃいっ！！って、ユッキーかい！！」

店主と思しき男が雪鷹の姿を見て、大声を、もとい奇声をあげる。そんな一人漫才を見た雪鷹は露骨に顔をしかめて、男を睨みつけるが何も言わない。

「ひさしぶりに会ったというのにそんな顔すんなや」

年は雪鷹とほぼ変わらないだろうといったところだろう。太めのフレームの黒ぶち眼鏡の奥から覗く笑顔から滲み出る人好きのある愛嬌のよさは雪鷹には絶対にないものだ。店の制服なのか、あるいは普段着なのか紺の縞の入った作務衣着た姿は居酒屋の主に見えなくもなかったが、よくよく見ればどこか胡散臭さが滲み出ている。それを感じさせないのは男の軽快で明朗な言葉によるものだ。

「相変わらず、繁盛してないのな、モリー」

客の姿が一人も見当たらない店内を見渡して雪鷹はため息を零す。
モリーと呼ばれた男は嫌な顔一つせず、頷いてみせる。

「そりゃ、まだ開店準備中だから客なんているわけねぇだろ。生憎と、店が開くのは日が沈んでからなんだ。まだちょっとばっかり早ぇぇよ」

それを知っていて入ってきたんだろう、と目で訴えるモリーに雪鷹は苦笑しながら頷いて返す。

「まぁ、久しぶりに来たんだ。新メニューの毒見、じゃなくて味見でもしていってくれな。お代は勉強しとくから」

毒見で金を取るのか、と零しながらも雪鷹はカウンター席の一つに腰を下ろす。モリーの性格は雪鷹もよく知っている。決して悪人ではないが、どこか捻くれていて、不真面目を思わせる言動ばかり繰り返している。だからといって仕事に手を抜くかといえばそんなはずもなく、特別流行りもしないこの小さな店を細々と、しかし、手堅く切り盛りしているのだ。客に出す為の料理で、しかも、他人に食べさせるというのならその出来栄えはそれなりのもののはずだ。ほどなくして、小鉢に入った冷奴とおからの和え物が雪鷹の前に並べられる。。

「如何にも酒の肴だな・・・」

居酒屋なのだから酒の肴を出すのが当然のことなのだが、出された品を見て雪鷹は呟く。決して珍しくもない、どこに店にでもあるような定番が出てきたことが意外だったらしく、いささか期待外れの感は否めない。

「ただの豆腐と思うなよ?居酒屋『盛』特製、完全手作りだ。もちろん、おからもな。どうよ、美味そうだろ?」

「・・・相当、暇なんだな」

呆れた目で雪鷹はモリーを見つめた。豆腐の作り方そのものは雪鷹も知識として知っている。材料は豆乳とにがりさえあれば誰にでも作れるには作れるが、材料が揃っていれば簡単に作れるものではないはずだった。しかも、おからも一緒に作ったということは大豆から作ったということだ。大豆を一晩水につけて、砕き潰し、煮て、おからと豆乳に分ける作業のわずらわしさを考えるととてもではないが真似する気になれない。

「おうともさ」

笑顔で応えるモリーが殺したくなるほど憎たらしく思える雪鷹であった。しかし、出された豆腐に罪はない。出された豆腐に箸を伸ばし、あることに気付き、モリーに尋ねた。

「薬味も醤油もないんだが?」

「あぁ、とりあえず何もつけずに食べてくれよ」

薬味も醤油もないことに納得できない顔を浮かべていた雪鷹だったが、作った本人がそのまま食べてみろ、と言うのだからそれ以上は何も言わずに豆腐を口に運ぶ。そして、一言呟く。

「・・・美味い」

「当然」

自信満々に、そして嬉しそうに微笑むモリーの顔がこの上なく憎らしかったが、それでも、モリーの手作り豆腐は、甚だ悔しいことだが、絶品だった。大豆本来の味を生かした風味。所詮、豆腐と言ってしまえばその通りなのだが、市販されているそれとは明らかに一線を画していた。

「なるほど。豆腐そのままの味を楽しんでもらいたい、というわけか・・・確かに下手な薬味を付けても野暮かもな」

そういって雪鷹はおからの和え物にも箸を伸ばす。薄味ではあったがしっかりと味はついていて、ただの豆腐とはまた変わった味わいがある。雪鷹の顔を見れば味については申し分なしだと一目でわかる。結局、雪鷹は出されたものは残すことなく食べてしまった。満足そうに頷きながらモリーは雪鷹に尋ねる。

「今回の新メニューはわりと良いところいってると思うんだけどよ？」

「あぁ、悪くない。味も俺好みでいいとは思うが・・・酒の肴にはな少し弱いな。一品料理として合格だけど、酒と一緒に、と考えるとな・・・まだまだ甘い」

「うっ・・・やっぱり、そこを突いてくるか・・・ユッキーは相変わらず厳しいな」

雪鷹の指摘にモリーは顔をしかめる。しかし、モリー自身、その指摘について薄々気付いていたのか特に反論しない。

「流石というかなんというか・・・まぁ、ぶっちゃけちゃうと問題

はそこなんだよね。豆腐本来の味を生かすのか、あくまで酒の肴に徹するのか・・・悩んでるわけよ。どっちがいい？」

好きな方にしろ、と言わんばかりに雪鷹は首を振りながら立ち上がる。

「さて・・・どちらでも構わないんじゃないか？」

どうでもいい、と言わんばかりの雪鷹の態度にモリーはむっとした表情を浮かべる。そんなモリーの様子に気付いているのかいないのか、雪鷹は淡々と言葉を続けていく。

「俺は豆腐の味見をするためにここに来たわけじゃない。こう見えて急いでいるんだよ。これから仕事があるからね」

「まったく・・・この仕事馬鹿。少しくらいいいじゃんかよ」

不貞腐れた子供のような態度でモリーは雪鷹を見るが、冷たい目で睨み返されると何も言わずに雪鷹から視線を逸らし、盛大なため息を零した。そして、懐から少々厚めの封筒を雪鷹に手渡した。モリーから封筒を受け取った雪鷹は中身を確認すると小さく頷き、それを懐に仕舞う。

「確かに渡したぞ？」

「あぁ」

雪鷹は頷くと封筒と入れ替えに財布を取り出し、テーブルの上にお金を置く。冷奴とおからの和え物の代金として考えるには少々額が多い。それを見たモリーは苦笑する。

「勉強するって言ったのに・・・こういう所は律儀だな」

「酒の肴にならないが、だが、それだけだ。妥当な金額だと思うが？」

雪鷹の言葉にモリーは首を横に振って応える。

「上品な店ならこの値段でも悪くはないけど、ここはそういう店じゃない。こんな値段じゃ誰も注文しない。せいぜい、これくらい・・・」

そう言って硬貨だけを摘み取るとお札を雪鷹に突き返した。

「そういうところは謙虚だな。らしくない」

「ユッキーの律儀さには負けるよ」

お互いに顔を見合わせ、笑う。

「それじゃ、用も済んだことだし俺はそろそろ仕事にいくか」

お釣りを財布にしまうと雪鷹は店の入り口へ向かって歩き始めた。

「ところでユッキー、仕事ってどっちの？」

モリーの言葉に雪鷹は足を止めた。そして、呆れたような、それでいて悲しげで、怒りの滲み出た声でモリーに言った。

「聞くまでもないことを聞くのは野暮だろう？」

Intermission 32.4

Intermission 32.4

「ごめんなさい、少し遅れてしまって・・・」

人ごみの中から目当ての男を見つけた女は急いで駆け寄って遅れたことを詫びる。いつもなら、こんな時間まで仕事が長引くことなどないのだが、昨夜から今朝にかけて立て続けに不幸が起きてしまった為、色々と仕事が増えて遅れてしまったのだ。仕事を片付け、急いで待ち合わせ場所に来たのだが、結局約束の時間には遅れてしまったのだ。

「いいよ、僕も今着いたばかりだから」

男はにこやかに微笑みながら首を振る。短く切り揃えられた銀の髪。人目を惹きつける灰の双眸。おそらくは女の気遣っての言葉なのだが、嫌みや取り繕った感じがまるでしない。気取った感じのない自然体の振舞いが男の魅力を余計に際立たせていた。

「でも、少しくらい待ったのでしょう?」

「まぁ、ほんの少しはね」

男はくすりと笑いながら言葉を続ける。

「正直言うとね、来てくれないんじゃないかなって少し不安だったけど、でもよかった。君が来てくれて」

「まぁ、私が来ないと思っていたの？」

女は拗ねたような、甘えるような媚態で男に迫る。少々、演技が入っているとはいえ、それは女の偽らざる本音だった。誘ってきたのは男からだった。その男に来ないかもしれないとほんの僅かでも疑われていたのだと思うと女としての誇りを傷つけられたような、ほんの僅かだけだが、悔しかった。

「そういうわけじゃないよ。君が来ると信じているからこそ、待っていたんだよ？」

男はそう言って微笑んだ。その笑顔を見て、女は心の底から男のことをずるいと思った。おそらく、女が来るかなり前から待っていたのだろう。それを仄めかしながらも、嫌みな感じがまるでしない。その優しい灰色の目で見つめられてしまうともう、何も言えなくなってしまった。曇りもない、真っ直ぐな瞳。表情だけは怜悧な印象を受けるが、その瞳だけが妙に幼く、子供のようで女の目を放させない。

「・・・そんなに待たせた？」

ふと、女の声が艶を帯びる。甘えるような上目遣いで男を見つめ、しかし、男はそれに靡かない。笑みを浮かべ、女の視線を受け流す。女に媚びる所が欠片もないのだ。しかし、女に興味がないわけではない。

媚びるつもりはないが、逃すつもりもない。

灰色の視線はそう語りかけているようだった。媚びずとも、女を放さない自信が男にはあり、事実、男の容姿は悔しいくらいに魅力的で、その振舞いには心惹かれるものがある。女の心は既に傾きつつあった。

（どうしてだろう・・・何か、怖い）

一方、女の中で何かが警鐘をならしていた。伊達に内勤とはいえ、地上本部務めをしているわけではない。人並み以上に状況判断能力はあるし、そこそこ頭も切れる自信がある。その直感が何かがあるのだと告げていた。その何かが何なのか女にはわからなかったが、男の笑みの裏には何かがあるのだ。

（だけど、それでも・・・）

それでも、別に構わない。この優しい笑顔に見つめられるなら、それでも構わない。女は心のどこかでそう思っているのだ。それがどれほど危うくて、許されざることなのか分からない女ではない。しかし、危ういからこそ、許されないからこそ、その誘惑は何よりも甘美で、蠱惑的なのだ。蕩けてしまいそうな悦楽は時に身を滅ぼすという。しかし、それを知っていても、人はその誘惑を拒めない。善悪の天秤はその見た目ほど絶対はものではないのだ、

「それじゃ、少しはやいけど、食事に行こうか？」

差し出された男の手を女は断れない。女は男の手を取ると同時に、あれこれ考えることを女は放棄した。この先に何かがあるのだとしても、それが必ずしも悪いものではない。そもそも、何かある、と

いうその考えの女の勘でしかないのだ。証拠があるわけではない。ただの杞憂だと女は自分自身に言い聞かせる。

「えぇ、そうね」

法を犯しているわけでもない。ただ、男と一緒に食事をするだけだ。幸か不幸か、女は付き合っている相手のいない独り身である。誰にも恥じることはしていない。それなのに、胸の奥で何かがざわめく。言葉にできない罪悪感が疼く。

（これくらい・・・許されてもいいわよね、きっと）

女は祈るかのように男の手をぎゅっと握りしめた。女のそれとは全く別に、硬く、力強い指先。それとただ触れ合っているというだけで胸が高鳴る。そして、男は女の手をぎゅっと握り返してくれた。女にとってはそれだけでもう十分だった。たとえ、これが束の間の夢だとしても、その夢に浸ることの何が悪いのか。夢は夢でしかないのだ。目が覚めてしまえばそれで終わりなのだ。それで、いいのではないかと、女は自分自身に言い聞かせる。まるで、祈るかのように女は胸を内で繰り返す。

これぐらい構わないと。
言い訳ではないのだと。
夢なら覚めないで、と。

33『一夜終えて』（前書き）

Auf die Hande kust die Achtung,
Freundschaft auf die offne Stirn,
Auf die Wange Wohlgefallen,
Sel'ge Liebe auf den Mund;
Aufs geschlossne Aug' die Sehnsucht,
In die hohle Hand Verlangen,
Arm und Nacken die Begierde,
Ubrall sonst die Raserei.

グリルパルツァー『接吻』より

魔法少女リリカルなのはStS Blade Heart
始まります

33『一夜終えて』

33『一夜終えて』

フェイトは緊張した面持ちで雪鷹の部屋の前に立っていた。今朝早くに喧嘩別れしたきり、フェイトは一度も雪鷹と顔を合わせていない。外回りで忙しかったというのもその理由の一つなのだが、一番の理由は雪鷹がフェイトを避けていたからだ。遠目にわずかでもフェイトの姿を見かけるとすぐにその場から離れていってしまうのだ。あまりの露骨さになのはや新人達も心配してフェイトに何かあったのか、と尋ねてきたほどだ。なんでもないよ、とその場は取り繕ってみせたが、この状態が何日も続くとなると舎内の雰囲気にまで悪影響を及ぼしかねない。今日の内に解決してみせると覚悟を決めて雪鷹の部屋の前まで来たはいいがフェイトはそれから先になかなか踏み出せなかった。雪鷹の部屋を訪れる度に雪鷹に泣かされてきたのだ。躊躇いの一つや二つ、あるのが当然だ。しかし、それを振り払ってフェイトはドアをノックする。

「・・・雪鷹、入るよ？」

部屋に入ると雪鷹の視線がフェイトに突き刺さる。雪鷹はいつもの制服ではなく細いストライプ地のシャツを着ていた。襟元から見える鎖骨が妙に色っぽいが、纏う雰囲気に甘い所はまるでない。ハンガーには白いジャケットがかけられていて、どこかに外出していたのだわかる。気のせいかもしれないが、ほんのりと甘い香り、おそらくは香水か何か、が漂っている。緩められた襟元から見える鎖骨が妙に色っぽいが、纏う雰囲気に甘い所はまるでない。

「どこかに行っていたの？」

雪鷹が夕方からオフシフトになっていることは知っていたが、外出していたという事実までは知らなかった。

「ハラオウン執務官、何か御用ですか？」

親しみの欠片もない雪鷹の言葉。ひどく胸に響く。フェイトの問いかけに答える気は皆無なようで、完全に無視していた。

「明日必要な書類については今まとめている所です。遅くても明日の朝にはお渡ししますのでご心配なさらずに」

それだけ言うと雪鷹は画面に視線を戻した。

「ち、違うの・・・そうじゃなくて、今朝のこと、謝ろうと思って・・・あんなことしちゃって、ごめんなさい」

フェイトが雪鷹に頭を下げる。しかし、雪鷹は視線を画面から動かそうとしない。まるでフェイトがそこにいないかのように振舞い、フェイトの全てを拒絶し、無視していた。これならまだ罵倒されたほうがずっとよかった。雪鷹の冷たい態度に心が折れそうになるのを必死で堪え、フェイトは頭を上げる。涙はもう見せない。そう心に決めてここに来たのだ。絶対に泣くわけにはいかなかった。

「雪鷹・・・『お前みたいな人間に俺は相応しくない』っていうのはどういう意味なの？私が雪鷹には相応しくないの？それとも、私に雪鷹が相応しくないの？ねぇ、答えて・・・」

雪鷹の動きが止まり、その端正な顔をわずかにしかめた。

「言葉通りだ・・・」

「誤魔化さないで。今朝は私も感情的になったけど、でも、後から考えてみるとやっぱり雪鷹らしくない・・・ねぇ、どっちなの？答えて」

まるで犯罪者を尋問するかのようにフェイトは雪鷹に問いかける。それはフェイトの執務官としての顔だった。その決意は固く、雪鷹が黙りこんでいるというのに焦る素振りさえ見せない。

「私がハラオウン執務官に相応しくない、という意味です。気に障ったようでしたらお詫びします。言葉足らずで申し訳ありませんでした」

フェイトが容易く退かないと理解した雪鷹は思っていたよりもあっさりと折れた。リンディの言った通り、雪鷹の言葉の真意はフェイトの思っていたのと間逆だった。

「雪鷹が私に相応しくないってどういう意味？何がいけないの？」

「言葉通りです。貴女は本局次元航行艦隊のエリートでハラオウン家の一人娘。将来有望な執務官だ。対して私はどこの馬の骨とわからない日陰者・・・釣り合うはずがないでしょう？」

自嘲気味にそう言った雪鷹の言葉の裏に隠されているのは狂気にも似た危うさだ。踏み込んではいけないとフェイトの本能が告げる。しかし、フェイトはその警告を振り払う。ここで前に進まなければ何も変わらないのだ。ただ泣くのはもうやめた。そう決めたからには立ち止まれるはずがなかった。

「・・・そんなこと、ない」

雪鷹の目の真っ直ぐに見つめてフェイトは言った。しかし、雪鷹は静かに首を振る。まるで子供を諭すかのような優しい、しかし、冷たい声だった。

「たとえ、ハラオウン執務官がそう言っても、周りが納得しないんですよ。貴女には相応しくない、似合わない、釣り合わない・・・そういうものなんです。そして、非難の矛先はいずれハラオウン執務官にも向くでしょう。管理局内での貴女の立場は悪くなり、出世の道も狭くなる。もしかすると、貴女だけでなく、貴女の家族にも被害が及ぶかもしれない・・・貴女も自分の家族に迷惑はかけたくないでしょう？」

「そんな・・・」

雪鷹が突きつけた現実にフェイトは唇を震わせる。雪鷹の話はあくまでもこうなるだろうという想像だ。しかし、所詮想像だろう、と笑って片付けるにはあまりにも現実的過ぎた。そんなフェイトに雪鷹は更に過酷な現実を突きつけた。

「ニュースで見たかもしれませんが、昨夜地上本部の管理局員が死んでいるでしょう？事件の犯人は情報一課、つまり私です。四人とも私がこの手で殺しました・・・殺されたとわからないように事故や自殺を装いながら」

「嘘、だよね・・・」

雪鷹の告白にフェイトの顔が青くなる。雪鷹の言っているニュースはフェイトの外回りの時に耳にしているし、執務官としての意見を

求められたときに現場の映像を幾つか見せてもらってもいる。拷問された後に殺されたのだと一目でわかる惨い死に方をしていた。首を、両腕を断たれた死体。体中傷だらけだった。とてもまともな人間の仕業とは思えず、一応は怨恨の線も調べてみるものの、主としては快楽殺人犯の線で捜査を進めていく、とのことだった。

「嘘じゃない・・・これが現実だよ」

仄暗い狂気めいた雪鷹の笑みにフェイトは戦慄を覚えずにはいられなかった。背筋を冷たいものが駆け抜ける。本能がここから逃げるように警告する。しかし、その全てをフェイトは己の意志で抑えつけた。恐怖よりも強い想いがフェイトの中にはあるのだ。

「私は人殺しだ・・・相応しいはずない」

「そんなこと、ないよ」

フェイトはゆっくりと首を横に振る。さらさらと金の髪が優しく揺れる。場違いでないかと思ってしまうほどに優雅で、気品に溢れた仕草だった。

「雪鷹は雪鷹だよ。あの頃も、今もずっと・・・私の大好きな雪鷹だよ」

唇が震える。しかし、はっきりとフェイトは言った。雪鷹を真っ直ぐに見据える真紅の瞳は強い。

「何故だ?俺が怖くないのか?俺は人殺しなんだぞ?」

「怖いよ」

フェイトは躊躇うことなく言い放つ。

「なら、どうして・・・」

「そんなの簡単だよ。好きだからだよ。雪鷹を怖いっていう気持ちよりも雪鷹を好きっていう気持ちの方がずっとずっと強くて、大きくて、大切なものだから・・・だから、雪鷹がどんなに怖くても私は雪鷹を受け入れるよ・・・」

雪鷹はしばらくフェイトを見つめ、そして静かに首を横に振った。

「それでも、やっぱり、だめだ」

フェイトはその言葉を聞いて少し残念そうな顔を浮かべたが朝のように取り乱すことはなかった。不思議なくらい心は穏やかで清々しくさえある。振られたというのに、顔が自然と綻んでいくのがわかる。

「それでも、いいよ。私が雪鷹を好きなことに違いはないから・・・」

「そう、か・・・すまないな、フェイト」

そう謝った雪鷹の顔は本当に申し訳なさそうで、心からフェイトに詫びているのだと一目でわかる。

「謝らないで・・・雪鷹が悪いんじゃないんだから。それにね、雪鷹は十年前と変わってしまったっていうけど、変わってないところもあるんだよ」

そう言ってフェイトは雪鷹の右手をとる。男にしては線の細い、長く繊細な指。あれほどの腕の剣士なら指が固くなっていてもおかしくないはずなのに、武骨さがまるでない。その指先の優しいぬくもりが今も昔もフェイトは好きだった。

「昔、頭を撫でてくれたことがあったでしょ。卒業の前の日に涙を拭ってくれたのもこの指だった。すごく嬉しかった・・・この温もりも優しさも、昔のままだよ」

雪鷹の右手をフェイトの両手が優しく包む。しかし、雪鷹は寂しげに、苦しげに首を横に振る。

「でも、この右手は血で穢れている・・・フェイトには似合わないよ」

「そんなことないっ!!今も昔も、私にとってこの手は優しくて、大きな手だよ」

フェイトは雪鷹の手をギュッと握りしめた。握りしめられた手を通じて、フェイトのぬくもりが、想いが伝わってくる。

「お願いだからそんな悲しいこと、言わないで・・・」

そのままフェイトは雪鷹の手を引くとその掌の上にそっと唇を落とした。

「穢れてなんてないよ・・・だから」

フェイトの目尻に涙が浮かぶ。心情的な負い目がある上に、潤んだ

瞳で懇願されると流石の雪鷹も強くは出られない。視線を伏せたまま、フェイトの方を見ようとさえしない。その瞳に何を映しているのかフェイトには窺い知ることさえできなかった。

「・・・もう、十年になるのか。あれから随分経ったね・・・」

唐突に雪鷹が口を開いた。誰に向けて言うでもなく、独り言のように話し始めた。

「訓練校を卒業する少し前にね、街で一人の女の人に声をかけられたんだ。年は・・・今の俺くらいだったかな。美人で、雰囲気がすごく冴えてて・・・今まで見たことがない感じの人だったな。灰紫の瞳を輝かせていて、全てを見透かしていそうなくら聡明で・・・」

昔を懐かしむような雪鷹の笑み。一方、内心面白くないのはフェイトだった。雪鷹の表情から影が消えたのはよかったが、代わりにフェイトの知らない女性の話をし始めたのだ。それだけでも腹立たしいのに、その人を美人だ、聡明だと褒めるのだからいい気持ちがするはずがない。

「・・・その人が雪鷹の恋人？」

フェイトの声に若干の棘が混じる。雪鷹を見つめる目が厳しくなっていることにフェイト自身も気付いているのだが、それでも自分自身を制御しきれない。そんなフェイトに気付いた雪鷹は苦笑を返した。

「色々お世話になったし、迷惑もかけたけど、恋人ではなかったね・・・その人は所謂、情報部のリクルーターで、早い話、その人にスカウトされたんだよ」

それはフェイトが初めて聞く話だった。訓練校を卒業したら武装隊に行くものだと思っていた雪鷹が別の道に進み、気が付けばどこに所属しているのかも分からないまま疎遠になってしまっていた。当時十四歳の雪鷹が色仕掛けに引っかかったとは思いたくなかったが、フェイトはよからぬ方向に邪推してしまう。雪鷹から香る甘い芳香が女性物の香水を思わせることも無関係ではないのかもしれない。

「そんなに美人だったんだ・・・」

どこか非難めいたフェイトの言葉に雪鷹はため息を零す。

「まぁ、美人であったのは否定できないけど、でもそれに釣られたわけじゃないよ。知っての通り、俺は管理外世界の出身だ。後から聞いた話なんだけど、それが情報部にとっては都合がよかったらしい」

「どういうこと?」

「俺のように管理外世界出身で、管理世界との繋がりが極端に薄い人間は裏切りに心配が少ないからな・・・裏切るもなにもその相手がいないんだからな」

そう言った雪鷹の表情はどこか寂しげで今にも消えてしまうそうなくらい儚げに見えた。私がいるよ、と言う代わりにフェイトは握りしめた雪鷹の手をぎゅっと力を込めた。優しいぬくもりが肌を伝わってくる。

「それじゃ、その人は雪鷹を目当てにきたの?」

雪鷹は街で声をかけられたと言った。雪鷹に話があるならわざわざ街で雪鷹を探すよりも訓練校に直接来た方が早く、後々の手続きも簡単に済む。そこにある妙な違和感にフェイトは首を傾げた。

「さて・・・本人は偶然だって言ってたけど、実際の所は俺にもわからない。でも、本当に偶々出逢ったんだと思うよ。そう言えば、前に言われたことがある。私とこの仕事に出逢えたのは偶然じゃなくて、必然。何故なら、貴方はこの仕事に選ばれたのだからって・・・まぁ、そういうわけで俺は情報一課に配属された」

そう言った雪鷹の顔に影が差し込んだ。

「一課の主な任務は知っての通り、諜報活動や管理局内部の監査、他部隊から依頼されての情報収集、及び情報提供等々・・・表立っているものだけでこれだけのものがある。もちろん、その過程で戦闘行動を取ることもあるし、結果として人を殺すこともある。これは一課に限らず、荒事を抱えている部署なら、まぁ、よくある。執務官も時と場合にとっては被疑者をその場で殺すこともあるだろう？」

雪鷹の言葉にフェイトは小さく頷いた。執務官として捜査及び犯人の身柄確保を行う場合、基本的には無傷で確保するのが望ましいがそれが不可能な場合は物理的に相手の行動の自由を奪うこともある。そして、執務官本人及び周辺に対し特に危険な状況だと判明した場合には現場の指揮官の権限で犯人を殺すことも、フェイトは行ったことはないが、認められている。管理局が認めた、合法的に、人の命を奪う権利だ。このような特例は執務官以外にも捜査官など危険の伴う任務に就く人間には大抵認められている。もちろん、これは特例の処置であり、多くの場合は非殺傷設定の魔法で事が足りる為、実際に行使されることはほとんどないのだが。

「だが、それとは別に明確な殺意を持って人を殺すことを目的とした任務もある・・・要するに暗殺だ」

雪鷹の声が重くなる。声だけではない。雪鷹の纏う雰囲気そのものが固く、重くなったようだった。妙なプレッシャーさえ感じる・

「公に処罰することが難しい場合、その処分が急を要する場合・・・色々あるが、正当な手順を踏んでもどうしようもならない場合、超法規的措置として情報一課は綱紀粛正という名目でその局員ないし、犯罪者を逮捕や裁判等の一切の手続きを踏むことなく殺すことがある」

「そんな・・・」

信じられない、という顔をフェイトは浮かべた。管理局の定めた法に死刑という刑罰はない。どんなに凶悪な犯罪者であっても軌道拘置所での終身刑が最高刑だ。前にも雪鷹が一課で殲滅作戦を行ったという話を聞いてはいたが、あれは特別な事情による例外中の例外なのだと信じていたのだが、それさえも雪鷹にとって任務の一つに過ぎなかったのだ。

「で、でも、そんなこと認められるはずが・・・違法行為だよ」

雪鷹のことが真実だとするなら、管理局が定めた法を、管理局自らが破っていることになる。信じたくないフェイトは動揺を隠せない。

「信じられないかもしれないが、それが管理局の事実なんだよ。昨日あった管理局員殺しもその一つだ。上の方に佐官級の人間が絡んでいて真っ当に調査しても手が出せないということであいう形で

処分した。法を犯してはいるが、相応の効果はあるし、それとなく噂を流せば抑止力にもなる」

処分、という言葉にフェイトの中で響く。忘れられない過去のトラウマ。最愛の母から捨てられた時の最悪の記憶が蘇ってくる。全身が寒気で震えだす。雪鷹にとって殺す相手はもう人ではないのだ。道端に転がっているゴミ屑と等しい存在なのだ。だから、処分という、本来なら人に対して使う筈のない、言葉を躊躇いなく使えるのだ。見たくなかった管理局の裏の顔。それを垣間見てしまったフェイトは見てしまったというその事実さえどうしようもなく恐ろしく、苦しかった。

「そして俺はその任務と専門にしている特務隊の隊長だ。本来ならこうやって出向している間に仕事が入ることはないんだが、昨日は急に仕事が入ってな・・・フェイトと別れた後、四人を殺してきた。朝帰りになったのは・・・まぁ、そういうことだ」

察してくれ、と無言で訴えかけてくる雪鷹にフェイトは頷くことしかできなかった。任務に時間がかかったということもあるのだろうが、雪鷹が帰ってきてフェイトやなのはと顔を合わせたくなかったとしてもおかしくはない。

「軽蔑してくれてかまわない。俺はこういう人間だ。任務だと言われたら平気で人を、それこそ女子供関係なく殺せるような人間にはそういう末路が相応しい・・・」

自嘲するでもなく、自虐するでもなく、雪鷹は淡々と言葉を紡ぐ。まるで雪鷹とフェイトの間に見えない壁でもあるかのように、表情一つ変えないその姿が雪鷹とフェイトの距離を物語っていた。十年前はあんなに近くにあったはずなのに、手を伸ばせば触れられるく

らい近くにいるのに、二人の距離は果てしなく遠かった。その事実がただ、単純に悲しくて、辛い。しかし、不思議なことに涙は出てこなかった。あるいは涸れてしまっただけなのかもしれないが、フェイトは涙を見せることなく、呟いた。

「変わってしまったって、こういうことだったんだね」

雪鷹は否定も肯定もしなかった。ただ寂しげに笑うだけだ。その奥には洞ろな闇が広がっている。それがフェイトの胸の奥を掴み、掻き乱す。雪鷹のしてきたこと、情報一課のしてきたことを管理局員として、執務官として、フェイト・T・ハラオウンという一人の人間として認めることはできない。もちろん、許せるはずがない。しかし、フェイト・T・ハラオウンという一人の女としてはそれでも雪鷹の隣に立ちたいと望んでいるのだ。たとえ、その身が何を背負っていようとも雪鷹を想う気持ちが揺らぐことはない。たとえ、それがフェイトの全てを投げ捨てる結果になろうとも、厭うことなど何もないのだ。

「・・・どうしてそこまでするの?」

フェイトは雪鷹を否定も肯定もしなかった。することができなかった。その代わりにフェイトは雪鷹に一つの問いを投げかけた。いくら任務だからといってそう容易く人を殺せるはずがない。あるいは今は慣れてしまったのかもしれないが、一度も躊躇いを持たなかったはずがない。人殺し。それは人としての一線を超える行為だ。何が雪鷹にそれを決意させたのか、それをフェイトは知りたかった。

「たとえこの手を汚しても、それでも守りたい人がいる・・・それだけだ」

雪鷹は静かに、しかし、はっきりと言い放った。

「それだけって・・・そんなことで・・・」

フェイトは自分自身に問いかける。誰かの為に人が殺せるか。すぐに答えは出てこない。もし、その人が危機に瀕しているのならあるいはこの手を汚すことを選ぶかもしれない。その可能性が零だとは言い切れない。しかし、それを踏まえた上で、雪鷹のように何度も人を殺せるものかと考えるとその答えは否だ。あきらかに状況が違う。殺せるはずがなかった。

「そんなの・・・間違ってるよ。どんな理由があったとしても、人が人を殺していい理由になんてならないよ・・・」

「別に俺は俺が今までしてきたことを正当化する気はない。だが、死んでも守る者の為になら、人を殺すことは厭わないよ。咎は背負う。ただ、それだけだよ」

そう言い切った雪鷹の瞳に迷いはなかった。二人の間には決して越えられない壁があるのだ。如何にフェイトの気持ちが強かろうと、それだけでは理解しえないものが確かにそこにあるのだ。その現実にフェイトは何も云う事が出来なかった。

33『一夜終えて』（後書き）

変わらないものなんてない
みんな、変わっていく

子供の頃はそう思ってた。
でも、今なら分かる

変わらないものもある
あの頃の私達は、ずっとあの頃のままだ

私達も、貴方も

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
３４『あせないおもいで』

Intermission 33.1

Intermission 33.1

首の根本から鎖骨にかけてうっすらと残っている接吻痕（キスマーク）。その痕跡にそっと指を添えるだけで胸が熱くなる。愛する男（ひと）との束の間の逢瀬。思い出される情事に女の頬も自然と熱くなる。

「・・・今度はいつ会えるのかな」

目を閉じれば優しげな灰色の瞳が浮かび、首筋にあのときの熱が蘇ってくる。耳元にかかる吐息を思い出すだけで体中が歓喜に震える。官能的な熱情が女の中で疼き出す。女の指が愛痕へと伸びる。触れた瞬間に溢れんばかりの熱が女の中を駆け巡る。

「シノブ・・・」

せつなげな声で女は男の名を呟く。狂おしいほどの愛しさの込められた響き。そして、女はゆっくりと目を開いた。

「さっき別れたばかりなのに」

言葉にすると胸が熱くなる。そして、それ以上に苦しくなる。

「また、会いたい…」

今宵の逢瀬は久しぶりのことだった。お互い、同じ管理局勤めなのだが、だからこそ時間の合うことがほとんどなかった。前回の逢瀬は一週間以上前のことであり、次にいつ会えるのかは全くわからな

い。

「早く、会いたい…」

声や姿だけなら通信で間に合わせることもできる。しかし、それだけでは満たされないのだ。直に言葉を交わし、肌を重ねなければ女の中の熱情は満たされない。男の求めて体中が、本能が疼くのだ。そして、疼きは甘美な苦痛となって女を苦しめる。

火照る熱情は吐息となって女の外へ零れ落ちる。内側から燃え上がる熱情を抑えようと女は何度か深めの呼吸を繰り返し、女は卓上鏡に映る自分を見つめた。容姿にはそれなりに自信はある。この類の経験が他にないわけでもなく、初めてというわけではない。初な乙女と言えるほど若くはないつもりだったが、頬は薄紅色に上気し、えも言われぬ艶を帯びている。まるで生娘のようだと女は独り笑った。

「馬鹿みたい・・・もう、子供じゃないのに」

不思議なくらい、心がときめいていた。女としての花盛りはあと何年も残されていない。女自身、そろそろ身を固めようかと考えていたそんな時に出逢ったのだ。　まるで、物語の世界から飛び出してきたかのような優美で、幻想的な風貌。いまにも消えてしまいそうな銀の色合いはその儚さとは裏腹に一度見てしまえば忘れられないほどに鮮烈だった。

「本当に、不思議・・・」

かつては一人でのろけるなど馬鹿馬鹿しいことだと思っていた。思

っていたそのはずなのに、鏡に映る女の表情は嬉しそうで、この上なく、幸せそうな笑顔だった。

「シノブ・・・愛しているわ」

女は男への愛を呟く。耳元で愛している、と囁いてくれたのは数時間前のことだ。ただその一言でここまで幸せになれるのだ。どんな魔法も適わない、とびきりの魔法だった。

「だから、貴方(シノブ)が望むなら、これくらい・・・」

いけないことをしている自覚はある。モニターには管理局のデータベースにも載っていない機密情報が映し出されている。そのどれもが部外はもちろん、管理局員にすら公開することの禁じられているものばかりだ。発覚してしまえば厳罰は免れないが女の指は迷うことなくキーボードを叩き続ける。

「だから、私のことをもっと愛してね・・・」

誰もいない職場で女は呟いた。愛する者の為に、法を犯すことさえ厭わない。その危うささえも女にとっては愛の証なのだ。一度火のついた狂愛(ほのお)は女の胸の中で激しさを増して燃え上がった。

Intermission 33.2

Intermission 33.2

「あ、フェイトちゃん、おかえり。雪鷹と仲直り・・・できなかったみたいだね」

自室に戻ってきたフェイトをなのはが迎える。フェイトが雪鷹と仲直りする為に行ったことは聞いていたが、その結果はフェイトの顔を見れば想像に容易い。涙こそ見せていないが暗く沈んだその表情に普段の面影は微塵も感じられない。

「何かあったの？」

なのはの問いかけにフェイトは小さく頷いた。近くにあった椅子に腰かけるとなのはを真っ直ぐに見つめた。

「今朝、ニュースになってた通り魔事件の犯人、雪鷹だった。さっき、雪鷹がそう言われた」

「・・・へっ？」

フェイトの言葉の意味を理解できないなのはの口から間の抜けた声が漏れる。いきなり、同じ職場で働く同僚が殺人犯だと言われて信じられるはずがない。しかし、フェイトはなのはを真っ直ぐ見つめ、小さく、しかし、はっきりと頷いた。

「一課の仕事なんだって・・・殺された人が裏で悪いことをしていて、表だってはどうしようもなかったからそれで・・・」

影の差したフェイトの目を見れば、冗談の類でないことは嫌でもわかる。それでもなのははフェイトの言葉を信じ切れなかった。

「本当、なの？」

フェイトは無言のまま頷く。唇を固く結んで、肩を震わせ、零れそうになる涙を懸命に堪えながら、なのはに向けて頷いた。二人が雪鷹のことをどう思っていようとも、それが真実だった。

「ねぇ、なのは・・・どうしよう、どうしたらいい？」

フェイトの震える声。しかし、なのはは何も言えなかった。どうすればいいのか、という正しい答えなどなのはも持っていないのだ。

「フェイトちゃんはどうしたいの・・・」

「私は・・・」

フェイトはそこで言葉を途切らせ、黙りこんでしまう。どうしたいのかさえ、フェイトの中では定まっていないのだ。逮捕したいわけではない。このままにはしておけない。止めさせたい、それだけしかフェイトの中にはない。

「・・・執務官としてはやっぱり、見逃せない。どんなに難しくても証拠を集めて、雪鷹を逮捕しなくちゃいけないと思う。私一人でダメなら他の人に協力してもらって・・・わかってるんだ、そうするべきなんだって。執務官としてそうしなくちゃいけないんだって・・・でも・・・」

悲痛な叫びだった。フェイトの葛藤がそのまま声に出てしまったかのようで、聞いているなのはもその身が張り裂けてしまいそうになる。

「そんなことしたくないって思ってる。しなくちゃいけないのに、それが私の仕事なのに・・・雪鷹にそんなことしたくないって思ってる。執務官としてそんなの許されないのに・・・」

フェイトは膝の上で両手をきつく握りしめる。執務官としては見逃せないが、一人の女としてはむしろ見逃してしまいたい。それがフェイトの本音だった。罪を見逃すなど、本来許されることではない。しかし、それでもフェイトの心はそちらに傾いてしまっているのだ。

「もし、捕まえようと思えばすぐに捕まえられるの？」

誰を、となのははは言わなかった。現実から目を背けたいのはフェイトだけではない。なのはも雪鷹が犯人だという事実を認めたくはなかった。

「・・・すぐに捕まえるのは難しいと思う。証拠がないから、捕まえても証言を翻されたらどうしようもないし、雪鷹も捕まらない自信があるから私に話してくれたんだと思う」

フェイトの言葉になのははは黙りこむ。雪鷹は人を殺した。しかし、それは私怨や快楽に基づくものではなく、そうするように命じられたからだ。そして、それを命じたのはなのはやフェイトと同じ管理局の人間なのだ。雪鷹を捕まえて解決する問題ではない。下手をすればとかげの尻尾切りのように全ての罪を雪鷹に押し付けられてしまう可能性もある。それでは意味がないのだ。

「フェイトちゃん、この話、まだ誰にも話していないんだよね？」

「うん・・・なのは以外にはまだ話してないよ」

それじゃ、となのははは心を決めた。迷いは立ち切った。

「この話しは二人だけの秘密にしよう？私達二人が黙っていれば、誰も・・・」

「で、でも、それは・・・」

なのはの提案にフェイトは戸惑いを隠せない。フェイトも同じことを考えた。しかし、執務官としての矜持がそれを口に出すことを許さなかったのだ。どんな理由があろうとも、法の執行者たる執務官がその法を犯すなどあってはならない。だからこそ、フェイトが胸の奥に秘めた言葉をなのはは口にした。

「わかってるっ！！本当はこんなことしちゃいけないことなのは私だってわかってる・・・でも、他にどうしようもないじゃない・・・雪鷹、本当はすごく優しくて、その仕事のせいできっとすごく苦しんでる。これ以上、雪鷹を苦しめたくない・・・だから、ね？」

なのはの言葉にフェイトは一瞬悩み、そして静かに頷いた。気持ちはフェイトも同じだ。これ以上、雪鷹を苦しめたくはない。

「そうだね・・・雪鷹を逮捕したとしても根本的な解決にはならないし・・・」

それが体のいい言い訳に過ぎないことは理解していたが、フェイトは言わずにはいられなかった。フェイトやなのはの力が魔導師とし

ていかに優れているとしても、どうにもならないのだ。二人が何をしても、それは雪鷹を苦しめることにしかならない。救いにはなり得ないのだ。

「どうしてあの頃のままでいられないんだろう・・・」

なのはの苦しげな声が静かに響いた。

34『あせないおもいで（前編）』（前書き）

雪鷹と初めて出逢ったのはもう十年前のことで、私がまだ九歳の頃だ。

訓練校に入校した日に初めて会った。

すらりと伸びた、というには細すぎる体。
背だけが異様に高く見えた。
髪の毛か銀色で、目も灰色。

なのはと同じ地球の、しかも日本の出身だと知ったときはすごくびっくりした。あの頃の私には、今でもかもしれないけど、とてもそんな風には見えなかった。

第一印象はたぶん、刀みたいな人、だったと思う。
私のお義兄ちゃん、クロノとは年はそこまで変わらないはずなのに、雰囲気は全然違った。
クロノはどちらかというと真面目で規則に厳しいけど、基本的には優しい。
少し冷たいところもあるけど、それはたぶん、冷静さの裏返しで、すごく優秀だ。

でも、あの頃の雪鷹は誰も寄せ付けない冷たさと鋭さがあって、それでいて人の目を惹きつける不思議な雰囲気を纏っていた。

怖い、というのとは少し違っていた。
安心できる、というのも何かが違う。

上手く言えないけど、怖いんだけど、嫌いになれなくて、そして、好きにもなれない、そんな感じだった。

しばらく一緒に生活をして、雪鷹の印象はすぐに変わった。
無愛想な所ばかり目立つけど、いろんなことに気づいて、気配り上手で偶に見せる笑顔がすごく綺麗だった。

私やなのはが模擬戦を頼みにいくと、嫌そうな顔をしながらも結局は相手をしてくれて、しかも絶対に手は抜かない。
少し人見知りする所があるみたいで、初対面の人には冷たい態度を取るんだ、と苦笑しながら話してくれた。
そのときの雪鷹の笑顔は今でもよく覚えている。

たぶん、その頃からこの気持ちは私の中に芽生えていたんだと思う。

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　始まります

３４『あせないおもいで（前編）』

３４『あせないおもひで（前編）』

「ディバイン、バスタぁああっ！！」

桜色の奔流が地上に降り注ぐ。なのはの十八番、長距離砲撃（ディバインバスター）。豪快な爆発とともになのはは己の勝利を確信した。しかし、爆煙が吹き飛んだ後にあるべきはずの、雪鷹の姿がない。

「逃げられたっ！！」

そう叫んだ瞬間にはなのはの敗北が決定していた。首元に走るひんやりとした感触。突きつけられたのは氷の刃だった。なのはが振り返るよりも先に雪鷹はなのはの細い首にその刃を突きたてることができるのだ。悔しいが負けを認めるしかなのははにはできなかった。なのはの背後で雪鷹の声が静かに響く。

「降参？」

雪鷹の言葉になのはは観念したかのように頷き、デバイスを解く。そのまま二人は地上に降り立ち、なのはは盛大にため息を零す。

「うぅ、また負けた」

なのはとフェイトがここ、第四陸士訓練学校に入校してもう既に一週間が過ぎた。それはつまり、二人が雪鷹と出逢って一週間が経ったということでもあるのだが、この一週間の間、二人は幾度となく

雪鷹と模擬戦を繰り広げたのだが一度も白星を上げることができなかった。

「魔導師ランクは私達の方が上で、雪鷹さんは陸戦魔導師なのに・・・」

しかも、雪鷹が使っているデバイスは訓練校で支給される標準的な片手杖なのだ。デバイスの性能差を考えてみても、なのはが雪鷹に負ける要素などどこにもない、はずだった。それなのに、なのはもフェイトも雪鷹に一度も勝つことができなかったのだ。

「簡単なことだ。俺はお前の弱点を狙う。お前に俺の弱点を狙わせない。それだけのことだ」

雪鷹はそう言うと体を伸ばし、ストレッチを始めた。年齢はなのは達より五歳上の十四歳なのだが、年齢の割に背が高く、色白でしかも筋肉が身長に伴っていない為、どう見ても長細のもやしのように見えてしまう。贔屓目に見ても腕っ節があるようには見えない。そんな雪鷹になのはもフェイトも出逢ってからこの一週間、一度も勝てないままだった。

「わたしの、弱点？」

雪鷹の言葉になのはは首を傾げるが、雪鷹は笑うだけで何も言おうとはしない。聞いたところで素直に教えてくれる性格でないことはこの一週間でなのはもフェイトも理解していたので、それ以上は聞かなかった。

「次は私の番だね」

バリアジャケットを準備したフェイトは愛機、閃光の戦斧（バルディッシュ）を構え、その斧先を雪鷹に向けていた。その顔は嬉しそうに微笑んでいるが、一方の雪鷹は若干顔を引き攣らせながら、苦笑していた。

「今、戦ってたばかりなんだけど？」

二人と模擬戦をする、と約束したのは他でもない雪鷹なのだが、休む間もなく連戦というのは流石にきつい。肉体的にも、精神的にも。そんな雪鷹の心の内を知ってか知らずかフェイトは不満そうにむっと雪鷹を睨む。睨むとはいってもそこはまだ九歳の少女なのだから、怖さも威圧感もまるでなく、愛らしくしか見えない。当然、雪鷹が気にするはずもなく、そのまま地面に座り込み、体を伸ばしながらフェイトに言った。

「また、後でな」

雪鷹にとってそれは何気ない言葉のつもりだった。しかし、フェイトは悲しげに俯き、その場から動こうとしない。勇ましく構えていたバルディッシュも寂しげにその斧先を地面につけてしまっている。雪鷹の断れてしまったことのが相当ショックだったらしい。雪鷹が何か悪いことをしたはずではない。そのはずなのに、フェイトを見ているとその確信が揺らぐ。ひどい罪悪感に耐え切れなくなった雪鷹はため息を零して立ち上がるとフェイトに言った。

「気が変わった。今すぐ模擬戦開始だ」

デバイスを構え、そう言った雪鷹を見てフェイトの顔に笑顔が戻る。嬉しそうに頷くと斧先を雪鷹に向ける。

「手加減したら許さないから・・・」

「さっさと終わらせて休みたいんだ。手なんか抜くか」

そう言って雪鷹が動く。一瞬、遅れてフェイトの地面を蹴った。それが模擬戦開始の合図だった。

・＊・＊・＊・

「てぁっ！！」

雪鷹がデバイスを振りかぶり、フェイトに襲いかかる。雪鷹の使用しているデバイスは訓練校から支給された片手杖型のデバイスで、ミッドチルダ式の魔法を使うことを前提に作られたデバイスだ。当然、デバイスによる直接攻撃はその用途から大きく外れてしまっているのだが、管理外世界出身の雪鷹がそのようなことを気にするはずもない。勢いよく振り下ろされたデバイスはフェイトのすぐ右横で豪快に空を切る。そして、フェイトが反撃に転じるよりも先に下から跳ね上がって、襲いかかってくる。

「っ！！」

間一髪、雪鷹の攻撃をフェイトはバルディッシュで受け止める。全身に響く鈍い衝撃。バルディッシュを握る両手が痺れてくるのを必死に堪えながら、フェイトは打倒雪鷹の策を巡らせる。はっきり言って雪鷹の戦い方は出鱈目だ。魔法の術式はミッドチルダ式だが、近接戦闘を好み、どちらかというと動きそのものはベルカ式の騎士

に近い。しかし、フェイトの知るベルカの騎士、シグナムやヴィータ、とも何かが違う。雪鷹の動きには型というものは全く存在しなかった。

「はぁぁああっ！！」

雪鷹に力で押し切られ、フェイトは空へと逃れる。腕力では雪鷹の方に分があるのは言うまでもないが、これでは魔導師の闘いというより、喧嘩に近い。シグナムやヴィータの動きにはある種の型のようなものがあった。一見するとバラバラなのだが、一連の流れにはまとまりがあり、見ていて美しいとさえ思うことがある。しかし、雪鷹にはそれがない。乱雑で、動きが読めないという意味ではかなり戦いにくい相手だった。

「プラズマランサー・・・」

《Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ》

フェイトの周りに生成された金色の発射体（スフィア）を環状魔法陣が取り巻く。雪鷹は陸戦魔導師である為、空戦はほとんど経験がない。短時間の飛行は可能だが、所詮はその程度でフェイトを相手にして空中戦を繰り広げられる技量はない。空に逃げてしまえば雪鷹がフェイトに攻撃する手段はないに等しい。そんな雪鷹に対して、空からの攻撃。卑怯と言われても仕方のないことかもしれないが、フェイトに迷っている暇はない。狙いを定め、フェイトは雷槍（プラズマランサー）を放つ。

「ファイアっ！！」

放たれた八筋の軌跡。その先に雪鷹はデバイスを中段に構える。

「魔力強化（フリージングソード）っ！！」

雪鷹の片手杖が氷を纏う。雪鷹の魔力変換資質『氷結』を利用した強化魔法の一種だ。本来なら近接戦闘には不向きな片手杖もこれで一時的ではあるが、アームドデバイスに負けない強度と切れ味を得ることができる。

「はぁああっ！！」

強化したデバイスで雪鷹はプラズマランサーを叩き斬る。以前の射撃魔法、フォトンランサーに比べ、弾自体の強度は上がっているが魔力強化されたデバイスには及ぶはずがない。八発のうち、二つが叩き斬られ、残りの六発も全て四方に弾かれてしまう。

「ターンっ！！」

攻撃を防がれたフェイトだが慌てることなく、遠隔操作で再び雪鷹を狙う。

「ファイアっ！！」

六方からの同時攻撃。いかに雪鷹といえどそう容易くは躱せない。純魔力制御が苦手な雪鷹は防御魔法ももちろん苦手だ。なのはのような全方位防御はできない。剣で捌くにしても一本で六方向からの攻撃を捌き切るのはまず不可能だ。今度こそ当たる、とフェイトは確信した。しかし、雪鷹はフェイトの想像を超えていた。

「アイスソードっ！！」

雪鷹の左手に氷の剣が現れた。右手の片手杖と合わせての二刀流。

まさか、と思ったその瞬間、雪鷹目掛けて飛んできたプラズマランサーを雪鷹が叩き落としていった。目にも止まらぬ乱拍子で六発全てを叩き切った雪鷹は空を舞うフェイトに微笑んだ。そこに在ったのは圧倒的な余裕、そして、フェイトへの挑発だった。

「二刀流なんてずるい・・・」

雪鷹を見下ろしながら、フェイトが呟く。

「空を飛びながらそれを言うか？」

皮肉まじりの笑み。そんな雪鷹の挑発を受け流せるほどフェイトは大人しい女の子ではない。一見すると可憐な少女だが、中身は見かけによらずなかなかの剛胆なのだ。

「バルディッシュ、ハーケンフォームっ！！」

《Ｈａｋｅｎ　Ｆｏｒｍ》

アサルトモードからハーケンモードに姿を変えたバルディッシュを振りかぶり、フェイトは狙いを定める。第一ラウンドは明らかにフェイトの負けだった。互いに有効な攻撃を与えることができなかったが、フェイトかかろうじて雪鷹を凌げたのに対し、雪鷹はプラズマランサーをいとも容易く退けたのだ。勝敗がどちらにあるのか言うまでもない。

「バルディッシュ、次は絶対に当てるからね・・・」

《Ｙｅｓ，ｓｉｒ》

・＊・＊・＊・

《Ｈａｋｅｎ　Ｓｌａｓｈ》

バルディッシュを振りかぶり、フェイトが急降下して雪鷹を狙う。魔力強化に加えて、重力加速を味方につけた必殺の斬撃。単純な一撃の重さでは今のフェイトが出せる最大級の攻撃だ。それを雪鷹は二刀の氷剣を以て受け止める。拮抗する刃と刃。しかし、切れ味と勢いに優る雷刃が徐々に雪鷹を押していき、みしみしと氷の剣が軋む。

「てやぁあああっ！！」

ここが攻め所を決めたフェイトは細腕に力を込めて、一気に鎌を振り切る。しかし、手応えがない。フェイトが辺りを見渡すと右から雪鷹の脚が勢いよく飛んできた。避けられない、そう覚悟を決めた瞬間、その蹴りをバルディッシュのオートバリアが受け止める。

「ありがとう、バルディッシュ・・・雪鷹さん、避けるなんてずるい」

「受け止めきれないなら逃げるしかないだろう？何が悪い」

先程のフェイトの攻撃を受け切れないと判断した雪鷹は左手の剣を捨てて、その場から離れたのだ。所詮は魔力を固めて作った氷の剣だ。作ろうと思えばいくらでも作れるのだから、理に適っていると

いえばその通りなのだが、全力を込めた攻撃を正面から受けるのではなく、躱されたという事実がフェイトは許せなかった。

「悪いよ、全部、雪鷹さんが悪いっ！！」

バルディッシュを握る腕に再び力を込めて、フェイトは雪鷹に切りかかる。

右から。
下から。
上から。
背後から。

高速移動魔法（ブリッツアクション）を交えながらの目にも留まらぬ高速連続斬撃。単純なスピードだけならあのシグナムさえ凌ぐその連撃を雪鷹は全て捌いていた。いつの間にか、左手には再び、氷剣が握られていた。威力こそ大きいが大振りにならざるを得ないハーケンフォームと小回りが聞き、数でも勝る二刀流。どれだけフェイトが攻めようと防御に徹した雪鷹にその一撃が届くはずがなかった。

《Ｓｏｎｉｃ　Ｆｏｒｍ》

更なるスピードを求めたフェイトは余分なバリアジャケットをパージして、高速機動形態（ソニックフォーム）に換装する。連撃に次ぐ連撃。常人には目で追うことさえ困難な攻撃だ。しかし、それさえ雪鷹は全て捌き切ってみせた。刃が届くよりも先に弾かれ、あるいは軌道を逸らされる。決して、その一撃が雪鷹に届くことはない。

「きゃっ！！」

空振りの連続により生じた隙を狙って、雪鷹がバルディッシュを大きく弾き飛ばした。普段のフェイトなら何事もなく対応できたはずだが、空振りに次ぐ空振りは予想以上にフェイトの体力と気力を奪っていた。弾かれた反動で後ろに仰け反り、そのまま尻餅をついてしまった。すぐに立ちあがって体勢を立て直そうとするが乱れた息はなかなか整わない。

「もう終わりか？」

雪鷹も息は乱れているがフェイトほどではなく、表情を余裕そのものだ。フェイトは額を流れる汗を拭い、悔しそうに雪鷹を睨みつける。勢いに任せて攻めていた時は気にならなかったが、一旦その勢いから外れてみると想像以上に全身が疲労していた。今まで一度もしたことないブリッツアクションを駆使した連撃。まだ九歳のフェイトにとってその負担は想像を絶するものだ。羽のように軽かった体が今では鉛のように重い。一度もまともに攻撃を受けていないのにこの状態なのだ。状況は想像以上に不利だった。

「ま、まだまだ・・・」

負けじと自分自身を鼓舞するようにフェイトはバルディッシュを構え、雪鷹と対峙する。疲労はもちろんのことだが、息を整えなければ攻撃などできるはずがない。もし、ここで雪鷹に攻撃をされると状況としてはかなりまずい。卑怯と言われるかもしれないが空に逃げようかとフェイトが考えを巡らせたと同時に雪鷹が動いた。

「そろそろ、俺が攻めてもいいな？」

フェイトが空に逃げるよりもはやく、雪鷹はフェイトに襲いかかる。二刀流はもちろん、それに加えて両脚から繰り出される多彩な蹴り技。疲労困憊のフェイトにそれらが受け切れるはずがない。最初の数発こそかろうじて防いでみせたが太ももに下段蹴りの一撃を喰らうとそこから一気に体勢が崩れ、そのまま雪鷹の右上段蹴りが吸い込まれるようにフェイトの側頭部に命中し、そこでフェイトの意識は途切れてしまった。

３４『あせないおもいで（前編）』（後書き）

後編に続く・・・

どうも、月兎です。
オリジナルストーリー編は如何でしたでしょうか。以前に企画した３０万ＰＶ記念小説アンケートを元にして今までの話を書いてみました。次回の話で『あせないおもいで』は終わり、その次の話で一応、オリジナルストーリー編の前半は終わります。はい、前半が終わります。

本来、書くつもりだったオリジナルストーリー編を次の次の次の話からはじめていきます。うーん・・・新人達の休日はまだまだ長い・・・

というわけで、オリジナル展開がしばらく続きますがこれからも『魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ』をよろしくお願いします。

皆様からのご意見やご感想、ご質問等を心よりお待ちしています。
その一言が月兎にやる気と元気を与えてます。

ではでは、月兎でした。

35『あせないおもいで（後編）』

35『あせないおもいで（後編）』

「うぅ・・・」

疼くような鈍い痛みを堪えながらフェイトは目を覚ました。

「ここは・・・医務室？」

フェイトが目覚めたのは訓練校の医務室のベッドの上だった。

「ようやく目を覚ましたな」

声のしたほうに顔を向けるとそこには雪鷹となのはが座っていた。二人を見て、フェイトはようやく自分の置かれている状況を理解した。雪鷹との模擬戦。挑発に乗って、攻め続けたフェイトはすぐに体力が底を突いてしまい、反撃に転じた雪鷹の攻撃を凌ぎ切れず、頭に上段蹴りを入れられてそのまま気を失ってしまったのだ。

「・・・私、負けちゃったんだ」

フェイトは悲しげに呟き、シーツを引きよせ、きつく握り締める。

「まぁ、そういうことだな。で、調子はどうだ？痛むところはないか？」

雪鷹がフェイトに近付き、腰を落として目線の高さをフェイトに合

わせる。すぐ目の前に雪鷹の顔がきたせいか、緊張してフェイトはわずかに体を硬くしながら小さく首を振る。

「えーと、頭が少し・・・他は・・・大丈夫、かな」

曖昧なフェイトの答えを聞いて不安に思ったのか、雪鷹はフェイトにそっと手を伸ばし、雪鷹自身が渾身の蹴りを入れた側頭部に触れる。ひんやりとした冷たさが心地よい。そして、静かに手を引き、フェイトをまっすぐ見つめ、雪鷹は頭を下げた。

「悪かったな・・・その、ちょっと夢中になり過ぎて加減を忘れた」

「えっ、あの、その・・・うん・・・」

まさか雪鷹から謝られるとは思ってもいなかったフェイトは驚き、言葉を詰まらせる。そもそも、模擬戦を頼んだのはフェイトだ。多少の怪我ははじめから覚悟していたし、それで雪鷹を責めるつもりもない。それなのに、謝られたのがどうにもむず痒い。

「だ、大丈夫だから、ほら、なんともないから」

フェイト自身も理由はよく分からないが雪鷹に謝ってほしくなかった。口だけではない、と言わんばかりにフェイトは立ち上がろうとする。しかし、体に力が入らず、バランスを崩して倒れこんでしまう。倒れた先には雪鷹がいて、必然的にフェイトの小さな体は雪鷹の腕の中に収まることになる。

「想像以上に疲労が溜まっているみたいだな」

雪鷹はフェイトが倒れてきたことに驚くこともなく、受け止めて抱

き抱えるとベッドに寝かせた。平気ではないのはフェイトの方だ。頭のすぐ上で雪鷹の息遣いが聞こえてくる。アルフとは異なる腕のぬくもり。しかし、嫌な気はしない。雪鷹に抱き抱えられてしまったことに対する恥ずかしさはもちろんのこと、倒れてしまったことに対する不甲斐なさも相まって、白磁の頬は薄紅色に染まっていた。

「う、うん、そうみたい・・・」

あの程度のことで倒れてしまうなんて情けない、とフェイトは悔しそうに顔をしかめた。

「まぁ、あれだけの高速機動を連続すれば相当の負荷になるのは当然・・・というよりもそれが狙いだったんだけど」

「えっ？狙いって？」

「簡単なことだよ。お前を動けるだけ動かして体力を消耗させて、弱った所を一気に叩く・・・それを狙ったんだ」

さらりと言ってのけた雪鷹をフェイトは驚いた目で見つめ、そして、むすっとした表情で睨みつけ、ポツリと一言呟く。

「ずるい・・・」

横で話を聞いていたなのはも呆れたような、どこか苦い笑みを浮かべていた。雪鷹の言った作戦はこの上もなく単純で、だからこそ、フェイトは納得できなかった。雪鷹の作戦は高機動型で、体力の劣るフェイトを動かし続け、疲れた所を狙うというシンプルなものだったのだ。定石といえば定石の作戦なのだが、フェイトが接近戦を仕掛けなければ、成立しない危うさもある。それでもなお、その作

戦を選んだということはフェイトが接近戦を仕掛けてくるという確信が雪鷹にあったからに他ならない。なぜ、その確信が持てたのか。それはフェイトを接近戦に仕掛けるように仕組める自信があったからだ。

「だから、私を挑発したんだ・・・」

模擬戦の間、ずっと心に引っかかっていたことがある。それが時折見せる、否、見せつけるかのような挑発的な雪鷹の態度だった。今まで何度か雪鷹と戦ってきたがその類の仕草を見たことは一度もなかった。フェイトを小馬鹿にしているかのような余裕に満ちた笑み。静かに、しかし、確実にフェイトの神経を逆撫でするその仕草に、フェイトは心を乱され、雪鷹の狙い通り、フェイトに接近戦を仕掛けさせたのだ。

「まぁ、そういうことだね。距離を取られて遠距離戦に持ち込まれたら俺に勝ち目はないから」

雪鷹は悪びれる様子もなくしれっと言ってのける。結局、フェイトは最初から最後まで雪鷹の手の上で踊らされていたのだ。それを改めて突きつけられたフェイトは観念したかのように盛大にため息を零した。

「雪鷹さんには敵わないなぁ・・・」

いくらフェイトの動きが早いとはいえ、攻撃を捨て、無駄に動くことをせずに防御に徹すれば防ぎきれない速さではない。単純な腕力は雪鷹の方が上で、魔法を抜きにした剣の腕前も雪鷹がフェイトよりも勝っている。凌ぎ切る自信があったのだろう。事実、雪鷹はフェイトの怒涛の連撃を全て凌ぎきってみせたのだ。振り返ってみる

と、雪鷹の行動は全て勝利への布石だった。如何に効率良く、確実に、フェイトを倒す為に計算された上での行動だった。それを見せつけられて無性に悔しくて、そして、それ以上に尊敬の念を覚えずにはいられなかった。

「まぁ、経験の差というか年の差みたいなものだ。気にするな」

そう言って雪鷹はフェイトの頭を撫でた。細長い指先は色白で綺麗な指をしていた。ほんのりと冷たいその感触にびっくりしてフェイトは僅かに体を硬くしたが、嫌な感じはまったくしない。むしろ、心地よい。しかし、まるで幼子をあやすようなその仕草は恥ずかしい。フェイトは羞恥心と怒りで顔を赤くして、雪鷹を睨む。憤慨しているというにはあまりにも愛くるしいその表情に雪鷹の頬もわずかに緩む。

「こ、子供扱いしないでよ」

世間一般の常識で考えるなら九歳の女の子は間違いなく、子供に分類される。たとえ、精神的に少しだけ大人びているとしても、エース級の魔導士であったとしても。

「それだけ元気なら一日休めばすぐに回復するだろう。ゆっくり休めよ」

そう言うと雪鷹はフェイトから離れようとした。それに気付いたフェイトは右手を伸ばしていた。無意識のことだった。小さな手が雪鷹の服の裾を掴む。フェイトに引きとめられたことに雪鷹は若干驚いた様子だったが、再び腰を屈めて、フェイトの視線に合わせる。

「どうかしたのか？」

「あ、えーと、その・・・」

どうして雪鷹を引きとめてしまったのかフェイト自身も理解していないのだから何も答えが浮んでこない。しかし、服を掴んでまで引きとめてしまって何もありませんでした、などと言えるはずもなく、フェイトは逡巡しながら口を開く。

「えーと、弱点を教えてくれないかな・・・わたしやなのはが負けた理由とか」

フェイトの言葉に雪鷹はわずかに顔をしかめてみせた。フェイトやなのはの弱点を教えることは雪鷹にとって不利益（マイナス）にしかならない。模擬戦では負け知らずの雪鷹だが、総合力ではなのはやフェイトの方が圧倒的に勝っているのだ。今までの話でさえ、手の内を晒し過ぎたと思っている雪鷹にこれ以上、話をするつもりはなかった。

「今までの話だけでは不足か？色々と手の内を教えたつもりなんだけど・・・」

「そ、そうなんだけど、でも・・・」

フェイトはそこで言葉を詰まらせる。しかし、つぶらな瞳は悩ましげに揺れながらも、もっと教えてほしい、と無言で語りかけてくる。見るとなのはも同じように雪鷹を見つめている。二人から真っ直ぐ見つめられた雪鷹は観念したかのようにため息を零す。

「話す代わりに俺に射撃魔法を教えてくれ。それなら、話す」

「うん、わかった」

「いいよ、それくらいなら」

雪鷹の提案に二人は迷うことなく頷く。

「具体的な話はしない。あくまでヒントしか言わないが・・・二人の戦い方に共通しているのはどうやって勝つか、をメインに考えて戦っている点だよ。言い方を変えると攻撃を少し意識し過ぎている」

「それのどこがいけないの？」

雪鷹の言葉にフェイトが首をかしげる。どうやって勝つか、を考えて模擬戦に挑むのは当然のことで、なのはもフェイトと同じように首を傾げている。

「いけなくはないよ。ただ、参考までに言うなら俺の場合はどうやったら負けないか、とメインに考えて戦っている。二人と俺との一番の違いはそこだと思う。たとえば、ダメージは大きいけど成功率が７０パーセントの強力な攻撃と、ダメージは少ないけど成功率が９５パーセントの確実に当たる攻撃。二人ならどちらを選ぶ？」

「ダメージが大きい方かな」

「私もそっち。７０パーセントなら、大丈夫そうだもん」

二人は迷うことなく前者を選んだ。

「やっぱりな・・・強いて言うなら、そこが敗因というか弱点だな。７０パーセントという数字は一見すると高く見えるが実際はそんなによくはない。もし、その攻撃を五回繰り返したら、全部成功する

確率はいくらだと思う？」

小学生の算数の知識で解ける問題ではないが、数学に限れば高校生以上の知識を持つフェイトは頭の中で計算をする。

「えーと、７０パーセントを五回だから・・・０．７かける０．７に、また０．７をかけて・・・あれ？」

そして、出てきた答えに驚き、首を傾げた。

「成功率・・・２０パーセントもない。計算を間違えたのかな？」

「いや、間違ってない。０．７の五乗は０．１６８０７。パーセントに直すとおよそ１７パーセント。ちなみに、ダメージが少ないほうは約７７パーセントだ。もちろん、実際はこんな簡単な話じゃないし、成功率なんて常に変動する。あくまでも例え話だが、俺の言いたいことはなんとなく伝わったな？」

二人は小さく、しかし、はっきりと頷く。

「攻撃重視が悪いとはいわないし、ここだっていう勝負所なら俺だってリスクを冒してでも少々の無茶はする。けど、その時以外に絶対に無茶はしないようにした方がいいと思っている。最初から最期まで全力で突っ込んでいくとどうなるかは今日の結果を見れば言うまでもないだろう？」

「・・・うん」

それはまさしく今日のフェイトの戦い方だった。機動力を最大限に利用した高速連撃。もちろん、並みの相手は一瞬で倒すことができ

るだけの効果はあるし、決して悪い作戦ではない。しかし、防御に徹された時の対応をフェイトは何も考えていなかった。しかも、負けず嫌いの性格が災いして、というべきか意地でもその防御を破って勝とうとするあまりフェイトは作戦を変更することなく、攻め続けた結果自滅してしまったのだ。

「二人に共通する弱点はまずそこだと思う。高町の砲撃や誘導弾は確かに面倒だけど、逃げるだけ、防ぐだけならなんとかなる。ハラオウンにしてもそうだ。スピードは確かに速いし、攻撃も俺より鋭いけど、反撃することを考えずに防ぐだけに徹すれば捌ききれないほどでもない。防御に徹して、機会（チャンス）を待てばそのうち隙が出来る。そして、出来た隙を逃さなければ勝てないわけじゃない」

雪鷹にそう言われて二人はようやく気付いた。今まで雪鷹と何度も模擬戦をしてきたが雪鷹が積極的に攻めてくることはほとんどなかった。常に防御に徹し、冷静に場を読み、的確かつ確実な動きで決して不利になる状況を作らなかった。一方のなのはとフェイトは雪鷹に勝つ為に色々と作戦を考えて挑みはしたものの、結局は自分の得意分野を生かしてのバリエーションの域を超えてはいない。そして、その程度のバリエーションが通じるほど雪鷹は弱くはない。攻撃が通じないから、二人は無茶をして、結果としてそれが雪鷹に付け込まれる隙になってしまうのだ。

「総合力ではお前達二人の方が圧倒的に上だ。でも、俺が二人を上回っている部分も幾らかはある。それを上手く使えば二人に勝つのも無理な話じゃない。というよりも使わないと勝てるはずがない。ちなみに、これ以上、俺に手の内を晒させるなでくれ？俺だって足りない頭を捻って捻って作戦を考えてるんだからな・・・さて、俺の話はこれで終わりだ。約束通り、射撃魔法を教えてくれ」

「うーん、なんとなくわかったようなわからないような・・・」

「あの、もっと具体的にどこが悪いとか、そういうのも教えてほしいな」

具体的な弱点を指摘してくれるものだとばかり思っていたなのはとフェイトはそう言って雪鷹を見つめた。しかし、二人に続きを促す期待の眼差しで見つめられても、雪鷹は首を横に振るだけだった。

「俺より才能があって、技術もあって、いいデバイスも持っている。それだけ揃っていて、まだ足りないのか？負けて悔しいなら自分で勝つ努力をしろ。弱点が分からないならまず自分で考えろ。それでも分からないなら自分を自分で分析しろ。そして、自分自身と戦って勝つにはどうすればいいのかを考えろ。それでも、分からないなら・・・残念だが、諦めろ。百回でも二百回でも気付くまで痛い思いをして、弱点を知れ。それも無理なら弱点なんて気にならないくらいに強くなれ。それができないなら・・・潔く諦めろ」

「・・・あれ？他の人に聞くっていうのは？」

他人から教えてもらう、という選択肢がないことに気付いたなのはが首を傾げる。

「そんなもの、ない」

雪鷹ははっきりとそう言い切った。

「ないって・・・どうして？」

今度はフェイトは雪鷹に尋ねる。

「忘れるからだ。人から教えてもらったものはすぐに忘れる。言葉なんて曖昧だからな。悩んで、迷って、時には自分の血を流して、考え抜いたことしか身に付かない。そして、それが強さに繋がる。色々とヒントは言ったんだ。それに気付けないなら、諦めろ。俺は約束を守ったぞ？次はお前達の番だ。とはいえ、ハラオウンは今は動かせないし、高町も模擬戦をしたから疲れているだろうから、教えてくれるのは別の都合のいい日で構わない。決まったら教えてくれ」

雪鷹はそう言うと部屋から出ていってしまった。残された二人はお互いに顔を見合わせ、頷き合った。

「自分で考えろ、か・・・雪鷹さんらしいね」

フェイトの言葉に、そうだね、となのはも笑いながら頷く。

「それで。雪鷹さんに射撃魔法を教えるのはどうする？」

「明日でいいと思うよ。一日休めば、私も動けるようになるはずだから」

軽く手足を動かしてみて感触を確かめながらフェイトが呟く。

「それじゃ、そう伝えてくるね」

「うん、お願い、なのは」

フェイトはそう言ってなのはを見送る。一人になったベッドの上でフェイトは静かにの拳を握りしめ、しかし、どこか嬉しそうな笑み

を浮かべて呟く。

「今度は絶対に負けないんだから」

新たな決意を固めたフェイトの顔はこれ以上ないくらいに清々しく、気持ちのいいものだった。ちなみに、翌日二人が教えた射撃魔法の基礎を発展させ、凶悪ともいえるスピードと貫通力を併せ持った射撃魔法『フリーズランサー』を雪鷹は完成させることとなる。操作性を度外視したその凶悪な射撃魔法に狙われることとなった二人が今日の約束を後悔するのは、もう間もなくのことである。

35『あせないおもいで（後編）』（後書き）

見上げると一面の夜天
そして、少女達は空にに想いを巡らせる

――誰かに愛されるなんて、許されるはずがない・・・そうだろ？ブレイドハート

ずっと苦しんでいるのに、気付いてあげられなかった――

誰の為になら、そんなことができるの・・・ねぇ、雪鷹――

――だから、ほんの少しでええから、私の背中を支えてな・・・祝福の風（リインフォース）・・・

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
３６『鉄の意志、鋼の心』

その星に、祈りを込めて

36『鉄の意志、鋼の心』（前書き）

見上げると漆黒の夜天
幾つもの想いが交錯する

話せない
許されない
伝えられない
知られたくない

そんな想いを皆、胸の奥に秘めて
ただ、星のみがそれを識る

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　始まります

36『鉄の意志、鋼の心』

36『鉄の意志、鋼の心』

「十年、か・・・早いものだ」

自室の窓から夜空を見上げながら雪鷹は呟く。涼やかな夜風がそっと頬を撫でた。もう春は過ぎてしまったというのに、冬を思わせるその冷ややかな風は痛みさえ感じる。

「フェイトはきっと泣いているんだろうね」

《It's your fault(あなたが泣かせたんですよ)》

夜空に思い浮かべたのはあの時のフェイトの顔だ。涙を懸命に堪えながら、現実を受け入れようとして、しかし、受け入れられずに苦しむ悲痛な表情は雪鷹の脳裏に鮮明に焼き付いていた。思い出した雪鷹はわずかに顔をしかめ、そして、すぐに切なげで、皮肉めいた笑みを浮かべた。

「そうだったね・・・いっそのこと、このまま嫌われてしまいたいよ」

自嘲するように雪鷹は呟く。雪鷹とて一人の男だ。フェイトから好意を持たれて嬉しくないわけではない。しかし、それ以上に苦痛なのだ。フェイトが雪鷹をどう思っていたとしても、雪鷹は人を殺したのだ、雪鷹の手で。それも何の怨みもない、自分と無関係な人間を、雪鷹の身勝手な理由で。自己嫌悪という言葉すら生ぬるい感情

が雪鷹の中を塗り潰していく。罰と呼ぶにはあまりにも利己的で、身勝手な心の枷が雪鷹以外の者までも苦しめているのだ。そんな末路こそ相応しいのかもしれない、と雪鷹は独り笑う。

「誰かに愛されるなんて、許されるはずがない・・・そうだろ？ブレイドハート」

《I am the born（機械の私に） of your（“愛”という概念を） sword. Steel（理解する） is my body（ことが）, and Electric signalis（できるわけ） my（ないでしょう？） blood.》

あくまで冷静な相棒の答えに雪鷹は苦笑しながら首を振る。

「それは残念だ」

雪鷹は紛れもなく、人殺しだ。罪に問われようと問われまいとその事実は揺るがない。命じられるままに他人の命を、未来を、幸せを理不尽に奪い続けた犯罪者なのだ。たとえ、そこにどんなに崇高な理想や大義があったとしても、事実は変わらない。変わらないからこそ、それは押し潰されてしまいそうなほど重い。その重さを知っているからこそ、他の誰かにその重さを背負わせるようなことはしたくなかった。

《You（全ては） should become（正義の） “Hero（為・・・）” who you（なのでしょう？） want to be, don't you?》

「愛は理解できなくても、正義は理解できるのか・・・お前は優秀だな」

《By（あくまで） the way, they（“管理局”の） made（正義ですが） me》

その答えに雪鷹は苦笑する。デバイスに刷り込まれた倫理観は結局、管理局が基準となったものだ。如何にインテリジェンスデバイスといえど、そこは変わらない。頭では理解しているつもりだったが、こうして改めて突きつけられてみると笑いを堪え切れなかった。

「時々、お前達が羨ましく思えるときがある。小難しい感情や理屈に左右されない0と1だけの世界・・・もっと、合理的に、理論的に生きられたら楽なんだろうね」

≪But, it is more(楽でも) difficult than(そこまで) you thought(ありませんよ)≫

「そうか、それは大変だ」

ふと、窓の外に目を向けると一筋の光が夜空を駆け抜けているところだった。

・＊・＊・＊・

「たとえこの手を汚しても、それでも守りたい人がいる、か・・・」

屋上のフェンスに手をかけながらフェイトは苦々しげに雪鷹の言葉を繰り返した。そして、眉間に皺を作りながら悔しそうに頭上に広がる夜空を見つめた。ひんやりとした風が頬を撫でる。何物にも冒されない漆黒は物言わずにフェイトの眼前に広がり、立ちふさがっ

ている。

「どうして、そんなことができるの」

答えが返ってくるはずがない、とわかっていながらもフェイトは闇に問いかけずにはいられなかった。フェイトは自問自答する。もし、自分や誰かの身に危険が差し迫った状況であるならば、或いは他人の命を奪うことはあるかもしれない。しかし、それは正当防衛として認められる範囲であれば、の話だ。罪を犯している、という理由だけで見ず知らずの人間を殺すなど正気の沙汰とも思えない。執務官として到底受け入れられるものではない。

「・・・やめさせるべき、なんだよね」

《Ｙｅｓ，ｓｉｒ．》

自分自身に言い聞かせるかのようにフェイトは呟き、手に持っている缶を握り締めた。雪鷹の言葉からして証拠を集めて捕まえることはおそらく不可能だ。だからこそ、雪鷹はフェイトに己の罪を話すことができたのだ。自白しか証拠がないのならば、逮捕できたとしても不起訴処分になる可能性の方が高い。雪鷹には被害者を殺す動機がない。仕事だから殺した、と雪鷹は言うが管理局の任務で人を殺した、という話そのものが荒唐無稽で非現実的な上、公にできるものではない。雪鷹の証言しか証拠がないこの状況では証言を翻されたら法で裁くことは不可能だ。執務官として逮捕することができないのなら、せめてこれ以上罪を重ねないようにするべきなのだが、心が決まらない。

「それが私にできる最善・・・しなくちゃいけないのに・・・」

心が揺れる。仮に雪鷹に人殺しを止めさせることができたとしても、情報一課は別の人間にその仕事を割り振るだけで根本的な解決にならない。他の誰かが雪鷹の代わりに人を殺すだけだ。雪鷹だけを助けたい、と思うのは執務官としてではなく、一人の女としての想いであり、正義も誇りもない。フェイトの我（エゴ）だ。

「結局、私にはどうすることもできない・・・ただ、見ていることしかできない」

《Ｉｔ'ｓ　ｎｏｔ　ｙｏｕｒ（ください）　ｆａｕｌｔ．泣かないで》

愛機（バルディッシュ）の慰めも今のフェイトには届かない。悔しそうに唇を噛みしめる。

「雪鷹を助けてあげられない・・・ずっと苦しんでいるのに・・・」

一粒の涙が零れ落ち、弾ける。

「ずっと苦しんでいるのに、気付いてあげられなかった・・・」

《Ｈｅ　ｉｓ　ａ　ｇｏｏｄ（ありません）　ａｃｔｏｒ．貴女の責任では》

今夜の雪鷹の話を聞いて、フェイトの中で全てが繋がった。十年ぶりの再会の中に感じた微かな違和感。気のせいだと振り払ってみたものの、それは気のせいではなかった。この十年で雪鷹は変わってしまった。もう、フェイトの知るあの頃の雪鷹ではないのだ。その手を、その心を血に染めてしまったのだ。そんな自分自身が許せなくて、フェイトやなのはと距離をとっていたのだ。華々しい未来が約束されている二人には相応しくない、そう考えてのことだった。

「一人で苦しんでいるのに、私は何も・・・」

雪鷹を好きだ、好きだ、と言いながらフェイトには何も見えていなかった。雪鷹が一人で悩み、苦しんでいる間、何もできなかった。しようとさえしなかった。今はただ、そのことが無性に悔しくて、悲しくて、重い。いっそのこと、全てを投げ出して、雪鷹の傍にいようかとも思ったが、そう自由の効く立場でないことは承知していたし、何より、それが雪鷹をより一層苦しめ、傷つけてしまうことは容易に想像がついた。悩みを、苦しみを振り払うかのようにフェイトは頭を振って、持っていた缶のプルタブに指を伸ばす。いつも飲んでいるそれとは違う無糖ブラック。一口飲んでみてフェイトはわずかに顔をしかめた。

「苦い・・・」

雪鷹の真似というわけでないが、気付けばいつもは飲まないこの缶コーヒーを買ってしまっていた。紅茶の渋みとはまた別物のコーヒーの苦みは正直、あまり好きではない。フェイトにとってコーヒーは嗜好品というより、目覚まし代わりだった。

「あ、流れ星・・・」

ふと、目の端を流れ星が駆け抜けた。青白いその尾はフェイトが瞬きをしている間に闇へと消えてしまった。

「願い事をすればよかったのに・・・」

そう呟いてからフェイトは左右に首を振って、ため息を零した。流れ星に願って叶うような願いなら、ここまで悩むはずがない。誰かがどうにかしてくれる、と思っていては何も解決しないのだ。フ

エイトはもう一度コーヒーを口に運ぶ。

「やっぱり、苦い・・・」

慣れない苦みに顔をしかめて、小さく呟いた。

・＊・＊・＊・

「雪鷹が犯人、か・・・嘘みたいだけど、それが現実・・・なんだよね」

≪Ｙｅｓ，ｍｙ（残念ながら）ｍａｓｔｅｒ．≫

寝巻姿に着替えたなのはは小さく呟いて窓の向こうに目をやった。

雪鷹が今朝の通り魔事件の犯人だとは信じたくなかったが、フェイトや雪鷹がその類の冗談を言う性格でないことはなのはが一番理解していた。それは間違いなく、現実だった。しかし、それでもなのはのその現実を信じられなかった。否、信じたくなかった。

「どうして、そんなことができるの・・・」

≪Ｉ　ｃａｎ'ｔ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ．≫

フェイトから聞いた話では、雪鷹はこう言ったらしい。任務だから殺した、と。そして、この手を汚してでも守りたい人がいる、と。

「自分と無関係な人を殺してまで守りたい人なんて・・・」

任務の為、だけならなのはも受け入れることができた。雪鷹のことを与えられた仕事を機械的に処理する冷徹な人間なのだと割り切って、見切りをつけることもできた。しかし、現実はそうではないのだ。雪鷹は、なのはやフェイトの知らない、誰かの為にその手を汚しているのだ。心を持たないわけではないのだ。

「誰なんだろう・・・その女（ヒト）」

誰かの為に他人の命を奪うことができるか。

ある意味では陳腐な愚問であり、またある意味では永遠の命題でもあるこの問いに対する明確な答えをなのはは持っていなかった。エースオブエースの称号を持つとはいえ、なのははまだ、十九の若い身空なのだ。同年代より波乱に満ちた人生を歩んできた自覚はあるが、誰かの命を奪ったことはただの一度も、ない。

「誰の為になら、そんなことができるの・・・ねぇ、雪鷹・・・」

もし、自分が誰かの為に人を殺せるというのなら、それは誰だろうか、となのはは指折り数えてみる。しかし、指は動こうとしない。

《Ｄｏｎ'ｔ（無理しないで）　ｃｒｙ，　ｍｙ（ください）　ｍａｓｔｅｒ．》

「・・・おかしいよ・・・そんなの、絶対におかしいよ・・・」

《Ｙｏｕ（誰も貴女にそれを）　ｄｏｎ'ｔ　ｈａｖｅ　ｔｏ（望んでいません）　ｄｏ　ｔｈａｔ．》

フェイトやはやての為ならば、と考えてはみるが実際に、二人の為に人を殺せるかというと答えは出てこない。無論、二人のことは大

切に思っているが、人の命を奪うというその重みはそれさえ比べ物にならないほどに重い。

――――二人の為に自分の命を投げ出すことなら、たぶん私でもできる。でも、二人の為に他人の命を奪うことは、きっと私にはできない

なのはは悔しそうに両手を握りしめた。他人の命を奪ってまで、守りたいものがあるのだろうか、と考え、なのはは首を横に振った。考えることも馬鹿馬鹿しかった。答えは、在るに決まっている。人は、平等ではないのだ。好きな人がいて、嫌いな人がいる。強い力を持つ者がいて、持たない弱い者がいる。愛する人がいて、憎む人がいる。他人の命を奪ってでも守りたい人と思う人が雪鷹にいたとしてもそれは何もおかしなことではない。ただ、今のなのはにそう思える人がいないだけなのだ。

「ねぇ・・・この十年で何があったの・・・誰が雪鷹をこんな風に変えてしまったの・・・ねぇ・・・教えて・・・」

苦しげなのはの独り言（つぶやき）。しかし、当然のように答える者は誰もいない。窓の向こうでは静かに一筋の星が流れていた。

・＊・＊・＊・

贖罪の『贖う』という言葉には『金品を出し罪科を免れること』を意味する。
あの頃はまだ、自分達の犯した過ちがどれだけ大きいことなのかよくわかっていなかった。
言われるままに裁判を受け、罪を償った。

そのつもりだった。

特別捜査官になって法律や過去の判例にも多少は詳しくなった今ならわかる。
私と私の騎士達が犯した過ちはあの程度の軽い処分で済むようなものではないのだ。
一生を懸けても償いきれないほど、あの事件は重いのだ。

「もしも、私が蒐集行使（レアスキル）を持ってへんかったら今頃どうなってたんやろうな・・・」

部隊長室ではやては独り、呟いた。過去の判例に則って考えるなら、十年や二十年監獄で過ごしたからといって贖えるような罪ではない。それを保護観察処分で済んだのは当該者であるはやてが蒐集行使という稀少技能（レアスキル）を持っていたからに他ならない。もちろん、事件の経緯やはやての意志とは無関係であったこと、夜天の書の特性、はやての命が危うかったことなど情状酌量の余地があったことも事実だが、たとえそれを差し引いたとしても執行猶予の懲役刑は免れない

はずだった。それさえなかったということははやての稀少技能と守護騎士四人を含めた即戦力になる魔導師を確保しようという管理局側の打算があったことは否定できない。

「まぁ、今更そんなこと気にしたってしゃあない・・・過去はどう頑張っても変えられへん」

過去は変えられない。どんなに忘れようと思っても、忘れることはできない。たとえ、忘れてしまっても、それはなかったことになるわけではないのだ。なかったことになどできるものではなく、そもそも、していいものではない。たとえ、この世の誰もが忘れてしまったとしても、咎める者がいなくても、赦される日が来たとしても、はやては己の罪を忘れない。忘れることなく、背負うのだ。失ってしまった、守れなかった者達を為に、自分の為に。

「だから、私は未来を守りたいんや・・・もう、誰もあんな悲しい想いをせんでええように・・・その為に頑張るんや・・・」

胸の前ではやては待機モードの騎士杖(シュベルツクロイツ)を抱く。力を求めたのは譲れない誇(夢)りの為。あの日、誓ったのだ。この世界を守れるように、もう誰も悲しむことのないように。ただ、それだけの為に。大切な人を失う苦しみも、痛みも、もう十分だ。

「その為になら、私はどんなことだってする・・・たとえ、ユキタカさんでも絶対に邪魔はさせへん・・・六課は絶対に守る・・・守ってみせる・・・」

機動六課の設立にはやて個人の力では不可能だった。管理局の上層部や聖王教会の助力があってこそ、今の六課はあるのだ。そして、管理局や聖王教会は戯れや気まぐれの類で力を貸してくれたわけで

はないのだ。六課に、ひいてははやてに期待するものがあるからこそ、惜しむことなく、力を貸してくれるのだ。部隊長として、六課を率いていくはやてにはその期待に応える義務があるのだ。

「ユキタカさんにはユキタカさんの事情があるんやろうし、言いたいことはわかる・・・けど、私かて引けへん。ここで引いたら色んな人の想いが無駄になる・・・」

はやてはその小さな背中に全てを背負っているのだ。罪と罰。期待と責任。誇りと夢。痛みと苦しみ。部下の命と未来。それは生半可な覚悟で背負えるほど軽いものではない。十九歳の少女にはあまりに重い。しかし、それでもはやては背負うのだ。華奢な体で、その全てを。

「こんなところで挫けるわけにはいかんのや・・・」

はやての背負う全ての為に。

「だから、ほんの少しでええから、私の背中を支えてな・・・祝福(リイン)の風(フォース)・・・」

はやての想いに応えるかのように夜空を一筋の光が駆け抜けた。

３６『鉄の意志、鋼の心』（後書き）

埋められない溝
擦れ違う二人の心

しかし、事件は待ってくれなくて・・・

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
３７『やさしいひと』

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３６．１（前書き）

これは夢だ
もう何年も昔の、私がまだ私でさえなかったときの夢だ

色褪せることのない記憶（おもいで）

Intermission 36.1

Intermission 36.1

――もう、死ぬんだ・・・

私は直感で、或いは野生の勘で死(それ)を理解していた。胸の傷の深さは致命傷に足り得るものであり、溢れる血もそれを物語っている。血が流れ過ぎたのか刺すような痛みが鈍くなっていく。

――ごめんね、守ってあげられなかった

隣には弟が倒れている。傷の深さは私とほとんど同じだった。せめて弟だけでも、と頑張ってはみたものの、力のない私に、誰かを守ることなんてできるはずもない。できたのはほんの一瞬だけ、弟が傷つくのを遅らせただけだった。

――私に力さえあれば・・・

ただ、悔しかった。私に力さえあれば、弟を守ってあげられた。こんな苦しい想いをさせなかった。

「終わりたくないんだな」

不意に声がした。頭を動かすことさえ、億劫だったがなんとか動かして前を見た。血を流し過ぎたせいか、視界が霞む。しかし、目の前に一人の人間がいることだけは理解できた。

「力があれば、生きられるか？」

人間は更に言葉を続ける。その言葉に私は自問自答する。力があれば弟を守ってあげられたはずだった。こんな理不尽な痛みから、苦しみから守ってあげられる、そのはずだった。朦朧とする意識の中で私は小さく頷いた。

「これは契約。力を与えるかわりに俺の願いを一つだけ叶えてもらう」

冷たい声だった。だけど、すごく寂しげな声だった。孤空に舞う鳥のように。

「契約すれば、お前達はヒトの世に生きながら、ヒトとは違う理で生きることになる。異なる摂理、異なる時間、異なる命・・・その覚悟があるか？」

迷うことなどなかった。もう失うものなど今の私には何も残されていないのだ。

「いいわ、結びましょう、その契約を」

――そして、私に与えなさい。大切な人を守る為の力を。二度と後悔しない為の力を

光が私を包み込んだ。優しい、だけど強い光だった。身体が、意識が溶けていくような、奇妙な感覚。しかし、無になるのではない。心地よい浮遊感。ほどけた糸が再び織り合わさっていくように溶けた身体がまた、形を成していく。私がかつての私ではなくなり、そして、新しい私へと変わっていく。

気が付くと私は立っていた。胸の怪我はなかったかのように消えていた。もちろん、痛みなどあるはずもない。身体中に力で満ちているのがわかる。ふと横を見るそこには弟が、否、かつて弟だった存在がいた。もう、私達はたった二人きりの姉弟ではない。ましてや、ヒトでさえない。

「これが契約・・・」

「嫌なら今すぐに破棄するが？」

目の前にいたのは銀髪の少年だった。まだ大人になりきれていない幼さの残る綺麗な貌。でも、灰色の瞳は鋭く、寒気さえ覚えるものだった。少年の言葉に私は首を横に振った。そして、命じられたわけでもなく、少年の前に片膝をついた。主なのだと本能が告げた。

「「御身の為、この身と心、持てる全てを捧げます」」

「あぁ、お前達の命、確かに預かった。預かったからには俺の命なく死ぬなよ。さて、名前がいるな・・・」

「クロエ、でどうだ？」

クロエ。それが私の新しい名前だった。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３６．１（後書き）

どうも、月兎です。

今回はクロエの過去？みたいな感じのお話です。如何でしたでしょうか。

ちょっと構成ミスかな、と思う部分があって、内容的にＩｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３５．１として投稿した方がよかったかなとも思いながら結局、３６．１として投稿しました。

さて、今回でオリジナル編の前半は終了します。次にもう一つちょっとした事件があって原作の休日編に突入する予定ですが、ここで皆様に一つお知らせがあります。

一身上の都合により二週間程、執筆をお休みさせていただきます。色々とやらないといけないことが溜まってきたり、執筆の参考に読みたい本があったりしてまとまった時間が必要だと判断し、９月の半ばまで執筆・投稿をお休みさせていただくことにしました。

９月の三連休くらいには復帰する予定でいます。なので、これからも『魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ』もよろしくお願いします。しばらくは読み専になって皆様の作品を読

ませていただきます。

皆さんからのご意見やご感想、ご質問等は随時受け付けていますのでよろしければ是非♪

それでは、次回をお楽しみに♪ではでは

37『やさしいひと』（前書き）

誰も傷つかない世界なんてない

それは否定しようのない現実で
だからこそ、守ると決めた

せめて、子供達は
何の罪もない小さな命だけは

私の全てをかけて

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　はじまります

37『やさしいひと』

37『やさしいひと』

ミッドチルダ首都、クラナガン市内の交差点に一台の黒のスポーツカーが止まっている。しかし、車内の空気は重い。結局、一夜明けて雪鷹はフェイトの補佐官に復帰したのだが、二人の仲は何も変わっていなかった。今朝もフェイトの挨拶に雪鷹は無言で目礼を返しただけで、一度も口を聞いていない。怒っている、というよりもまるでフェイトを無視しているかのようなその態度に早くもフェイトの心は折れてしまったのだ。今のフェイトを動かしているのは執務官としての任務を果たそうとする責任感と義務感だけだった。

「・・・信号」

雪鷹が小さく呟いた。

「えっ？」

今朝から一度も口を開かなかった雪鷹が喋ったのだ。突然のことにフェイトは驚きを隠せない。

「だから、信号が青に変わっている」

雪鷹は苛立ったように呟く。見ると目の前の信号は青に変わっており、ミラーには後ろの車の運転手の苛立った顔が移っている。慌ててフェイトはアクセルを踏み込む。

「ご、ごめん・・・ちょっと考え事をしてて・・・」

フェイトが謝る。しかし、雪鷹は眉ひとつ動かさずにそれを無視する。再び、車内に沈黙が広がる。張り詰めた緊張感は並みのものではなく、ハンドルを握るフェイトの手にも余計な力が入る。

「ね、ねぇ、雪鷹、あのね、昨日のことなんだけど・・・」

「前を見ろ」

「えっ、あっ！！」

ふと、視線を戻すと目の前の信号が赤い。慌ててフェイトはブレーキを踏む。

「あ、ありがとう」

「注意力散漫・・・調子が悪いなら帰ってくれ。今日の仕事は一人で片付けられる。事故なんて起こされても困る・・・邪魔だ」

雪鷹の厳しい言葉にフェイトの表情が硬くなる。雪鷹の言う通り、注意力は少々疎かになっていることは否定できない。しかし、その原因は間違いなく、昨夜の雪鷹との一件にあるのだ。それにも関わらずフェイト一人に責任があるかのような雪鷹の言葉にその心中は穏やかとは言い難い。

「そんな言い方しなくても・・・」

雪鷹に反論しようとしたその瞬間、緊急事態を告げるアラームが車内に鳴り響いた。六課のそれとはまた別の通信、執務官をはじめとする捜査官系列専用のチャンネルだ。急な応援を要する時に使われ

るにしかこの連絡回線が鳴ったということは、その先に続く展開も自ずと決まってくる。すぐにモニターが開き、見知った捜査部の人間の顔が現れた。

「市街地中心部にて立て篭もり事件発生。協力を頼む。詳細は以下の通りだ・・・」

モニターには詳しい事件現場の地図と犯人と思しき人物と人質の情報が次々に映し出されていく。フェイトはそれを一瞥すると、普段のフェイトらしからぬ、舌打ちをした。

「雪鷹、その情報をまとめておいて。バルディッシュ、現場までの最短ルートの割り出しをお願い。シャーリー、緊急で立て篭もり事件の協力要請があったから、今から雪鷹と二人で現場に向かいます。今日するはずだった仕事の調整をお願い」

先程までとは別人のように的確な指示を出して、六課に連絡を入れるとフェイトはシフトを切り替え、車の速度を上げる。それと同時に覆面パトカーよろしく赤色灯を点灯させ、現場に向かった。

・＊・＊・＊・

フェイト達が現場に着いた時には既に地上の陸士部隊と捜査官が展開を終えており、犯人が籠城している建物を完全に包囲していた。そこは摩天楼の隙間にひっそりと佇む古い教会だった。すぐ横には小さな公園が造られているせいもあり、都市部の喧騒から逃れられる憩いの場所として多くの市民に利用されている所だった。フェイトの姿を見つけて現場の指揮官が駆け寄ってくる。フェイトや雪鷹

より年上の、しかし、まだ若さと活気に溢れる青年だった。

「ハラオウン執務官、協力を感謝します・・・そちらの男性は？」

若いながらも名実共に兼ね揃えたフェイトは執務官として割と有名なのだが、その補佐まで知っている人間はそう多くはない。更に付け加えるのなら、雪鷹がフェイトの補佐官として働きはじめたのは数日前のことだ。シャーリーのことを知っている捜査官であったとしても、雪鷹のことを知っている者はほとんどいない。

「彼は臨時で私の補佐を務めている雪鷹空曹長です。それで、状況は？」

雪鷹の詳細を簡潔に済ませるとフェイトはすぐに捜査官から現場の状況を聞く。

「犯人は現在確認できているだけで三名。皆、道化師（ピエロ）や化け物などの覆面を被っており、顔は不明。同じく年齢や性別は不明。教会の人間と公園で遊んでいた子供達数名を人質にとっています。犯人達の武器は確認できている範囲で一般用の杖型デバイスが二つと、小型の刃物が一つです。それと、未確認ですが質量兵器を持っていたとの目撃情報も・・・」

「子供が人質・・・」

フェイトの表情が険しくなる。車の中で見た情報の中に『子供が人質になっている』という一文を見て、事前に知っていたとはいえ、こうして改めて言葉にされるとやはり、悔しさを感じずにはいられなかった。犯人にどんな目的があるにせよ、子供達が被害者になってよい道理などあるはずがない。知らず知らずのうちにフェイトの

拳に力が入る。フェイトが専門に扱っている古代遺物（ロストロギア）や違法研究関連の事件ではまだ年端もいかない子供達がその被害に遭っていることが少なくない。色々な意味で大人より“扱いやすい”せいで、子供達がそれらの事件の犠牲者になっているのだ。そして、今日もまた卑劣な大人達のせいで何の罪もない子供が理不尽な痛みを、苦しみを受けているのだ。それがフェイトには許せなかった。

「犯人から何か要求は？」

静かに怒りを滾らせるフェイトとは対照的に、雪鷹は普段と変わらぬ冷静な声で捜査官に尋ねた。

「今のところは何も・・・人質をとって立て篭もったきりです。近付けば人質を殺すと言ってきたほかは何も・・・」

雪鷹は捜査官からその話を聞くとわずかに顔をしかめた。何も要求がない、ということはまだその段階まで至っていない、つまり、まだ何かをする可能性がある、ということでもある。犯人グループが何を企んでいるのか想像もつかないが、どう贔屓目に考えてもまともなことではないだろう

「違法魔導師に質量兵器・・・少々面倒だな・・・人質の正確な人数とどこにいるかはわかるか？」

「おそらく、十人もいないと思いますが正確な人数や位置までまだ・・・」

教会内の様子を知る術がないので、と捜査官は言い訳をするかのように付け加えた。

「こちらから何らかのアプローチは？長引くと人質の子供達の命が危険です・・・何らかの手段で犯人達とコンタクトを取らないと」

「ええ、それはもちろん、我々も試みてはいるんですが・・・」

捜査官はそこまで言って言葉を濁らせた。

「犯人が一方的に近寄るな、と叫ぶだけで話をすることさえできないんです」

「わかりました。私から犯人にアプローチをかけてみても？」

「えぇ、お願いします」

フェイトの申し出に捜査官は頷く。そして、フェイトと二人で行ってしまった。残された雪鷹はその後ろ姿を見ながら小さくため息を零す。仕事に熱心なのは素晴らしいことだが、今のフェイトはどこか危うい。車の中では注意力が散漫で、今も子供が人質になっているせいなのか妙に浮足立っている。空回りになければいいが、と呟きながら雪鷹はデバイスに命じて、モニターを開く。

「とりあえず、情報収集だな。嫌な予感がする・・・悪いが、力を貸してもらうぞ、クロエ・・・コード《アイス・タガァ》入力、閲覧制限解除。検索開始・・・キーワードは・・・」

・＊・＊・＊・

「それ以上、近付くなっ！！近付いたら、人質の命はねぇぞ！！

現場に響く犯人の怒声。教会の扉の前にはナイフを持った男が子供を抱えて立っている。ナイフの刃先は子供の首に突きつけられている。子供の泣く声は痛々しく、フェイト達の心に突き刺さった。できることなら、今すぐにでも犯人の身柄を取り押さえたかったがどう贔屓目に考えても射撃魔法で男を狙うよりも早く、その刃で子供の首を掻き切ることができる。下手に動くと人質の命はないのだ。

化け物の覆面を被っているせいで表情は読めなかったが、声や挙動からは、数十人の武装した管理局員に取り囲まれているにも関わらず、男の顔に焦りや恐れと言ったものは見られない。

「人質の子供達を解放して・・・まだ誰も傷付いてない。今なら罪も軽くて済む。お願い、こんな馬鹿なことはもう止めて」

フェイトが一歩前に進み出て男の説得を試みる。しかし、その程度で引き下がるような男であるはずもない。素顔を隠す為に被っているお化けの面が不気味に笑った。まるでフェイト達を挑発するかのような笑みだった。

「貴方達の目的は一体何なの？」

「うるせぇ！！」

交渉の余地さえ与えられず、事件解決の糸口は全く見えない。そして、男は人質を連れて教会へと入っていく。これで三度目だった。

犯人は局員達を威嚇、或いは挑発するようにきまぐれに人質を連れてフェイト達の前に現れてはナイフをちらつかせ、また教会の中に戻っていくという不可解な行動を繰り返していた。その間も何かを

要求することはなく、ただ近付くな、と繰り返すだけだった。

「また失敗・・・犯人達の目的が分からない。何が目的なの・・・どうして、こんな・・・」

フェイトが苦々しげに呟く。今、こうしている間にも人質の子供達は苦しんでいるのだ。何もできない無力感がフェイトの胸を締め付ける。

「雪鷹もこんな時にどこに行ったの・・・」

フェイトが犯人の説得を試みている間に、雪鷹は姿を消してしまっていた。その場にいた局員の話によると、しばらく空を見上げていた後、用事ができた、と言い残してどこかへ行ってしまった、ということだ。無責任なその行動にフェイトは怒ることさえ忘れ、呆れてしまった。雪鷹の能力の高さはフェイトも承知している。だからこそ、何かがあったときの頼りにしていたのだが、いなくなってしまってはもうどうしようもない。

「ハラオウン執務官、ここはやはり強行突入しか・・・奴等の目的が不明確な以上、徒に時間を延ばすわけには行きません・・・」

「でも、それじゃ子供たちが・・・」

敵の戦力はそれほど脅威ではない、というのがフェイトを含めた現場の下した判断だった。違法魔導師が複数いるとしてもフェイト単独でも対応できる。そもそも、フェイトが手こずるほどの力量を持った魔導師がこのような小規模の事件を起こすとは考えられない。そう結論付けた現場捜査官達は強行突入を主張した。しかし、それでは人質の安全が危うい、とフェイトだけが強硬にその作戦に反対

していたのだ。

「もちろん、人質は救出します。あの教会を制圧し、犯人達の身柄を確保した後に・・・できるなら、交渉で少しでも多くの人質を解放させてからの方がよかったのですが、それさえもできないのならやむを得ません」

男の言葉は現場の総意であり、それは既に決定事項だった。フェイトも頭では理解していた。もう既にそれしか、事件解決の手は残されていないのだと。犯人グループの目的は不明。一切の交渉ができず、人質の安否さえ確認できないのだ。突入するしかない。しかし、フェイトは諦めない。

「あと一度だけ、犯人と話をさせてください」

「・・・何か、手があるのですか？」

フェイトの目を見つめ、捜査官が尋ねる。フェイトは小さく頷いた。

「子供達の代わりに、私が人質になります・・・」

・＊・＊・＊・

「聞こえますか、私は執務官のフェイト・Ｔ・ハラオウンです・・・話があります、出てきてください」

フェイトは教会にいる犯人達に呼びかける。しかし、反応はない。呼ばれてのこのこと出てくるような馬鹿な真似を犯人達がするはずがない。当然のことである。予想していたフェイトは一呼吸おいて、言葉を続けた。

「人質の子供達を解放してください・・・代わりに、私が人質になります」

犯人が交渉にのってくるかどうかはフェイトにもわからなかった。自信もない。しかし、犯人にとってみれば敵の戦力を大きく削れる、という点では有効なので応じる可能性は、おそらく、ある。もちろん、命の危険も付きまとうが今、こうしているときでさえ子供達は怯えているのだと思うとフェイトに迷いはなかった。教会の扉を見つめ、フェイトは覚悟を決める。人質事件の常識（セオリー）を無視した行動であることはフェイト自身も自覚していることである。しかし、それでもフェイトにはこうするしかないのだ。子供達が傷付くとわかっていて、それを黙って見過ごしてしまうのなら、それはフェイトではない。

「絶対に助けてあげるから、だから・・・」

人質の子供達の無事を祈り、フェイトは呟く。今まで執務官として、多くの事件と向き合ってきた。そのどれもが危険で、凶悪な事件ばかりだった。そして、それと同じくらい、事件の犠牲になった子供達を何人も見てきた。

大人の身勝手な都合で、弄ばれ、傷つく子供がいた。
未来を、夢を見ることさえできずに傷つき、苦しむ子供がいた。

理不尽な理由で命を弄ばれている子供がいた。
親からも見放され、誰も信じられなくなった子供がいた。

懸命に助けようとした。しかし、フェイトが如何に優秀な魔導師とはいえ全能の神ではない。その中には、助けられなかった子供達もいる。救えなかった命もある。だからこそ、フェイトは心に決めたのだ。その為になら、己の全てを掛ける、と。そして、ゆっくりと教会の扉が開いた。出てきたのは一人の少年だった。

「あ、あの、デバイスを受け取って来いって、その・・・」

怯えた表情に震えた声。フェイトの心が痛む。それと同時に怒りが湧き上がるのを感じた。フェイトを人質にする為にデバイスを取り上げようとするのはわかる。それは想定の範囲内だ。しかし、その為に犯人達は人質である子供を利用しているのだ。こんな子供を人質にして姿さえ見せようとしない卑劣な犯人が許せなかった。

「大丈夫だよ、こっちにおいで」

待機モードのバルディッシュを取り出し、少年に見せる。すると少年は震えた足取りでフェイトの前まで歩いてきた。

「よく頑張ったね、もうすぐお姉さん達が助けてあげるから。だから、もう少しだけ、待っててね」

少年は恐怖のせいか表情ひとつ変えることなく小さく頷いた。俯いているせいなのか、人質になった恐怖心からか何も言わずに黙ったまま少年はフェイトからバルディッシュを受け取ると教会まで歩き

始めた。今はまだその小さな背中を見守ることしかできないことが悔しくて、歯痒くて、フェイトの手に力が入る。そして、教会の中へ消えて、入れ替わりに男が姿を現した。服装から見ると教会の人間のようで、それに続いて先ほどの少年とは別の子供達が姿を現した。

「犯人からの伝言です。下手な真似をすれば残りの人質の命はない、だそうです」

そう言って司祭の男は子供達を連れてフェイト達のいる方へ歩き始めた。それを見て、フェイトも歩き出す。すれ違いざまに司祭の口から安堵のため息が漏れる音が聞こえたが、フェイトは気にすることなく、歩みを進める。人質がどの程度解放されたのかは不明だが、教会の中には人質の子供がいるのだ。必ず助け出す、と誓ったあの子もまだ。

「フェイト・T・ハラオウン執務官です」

扉の前でフェイトは名を名乗る。ギィと軋む音と共にわずかに扉が開いた。それは犯人達からの入れ、という無言の合図だ。フェイトは静かに手を伸ばし、その扉を開いた。

37『やさしいひと』（後書き）

身代わりとなったフェイト

奔走する雪鷹

そして・・・

幾つもの想いが交錯し、事件は加速する

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
３８　『つめたいげんじつ』

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３７．１

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３７．１

「やぁ、こんな時間に義姉さんから連絡なんて珍しいね」

ミットチルダ首都、クラナガンで遅めの昼食をとっていた査察官、ヴェロッサ・アコースは少し驚いた顔を画面越しの義姉（カリム）を見たが、にこりともしていないその表情にすぐに思考を仕事モードに切り替える。

「ロッサ、今日は地上に降りてきてるのでしょう？これから、至急行ってほしい場所があるの」

「何かあったのかい？」

真面目な顔を浮かべたロッサにカリムは切り出す。

「さきほど、地上本部から連絡があって、クラナガン市内の聖王教会で立て篭もり事件が起きたそうよ。人質の中にはその教会の司祭や修道女（シスター）もいるみたいなの。でも、もう地上部隊が先に動いているから教会として手出しができないのよ・・・」

聖王教会には管理局ほどではないが独自の戦力として騎士団を有している。数こそ管理局の魔導師には及ばないが騎士個々人の技量は管理局の上を行くと自負している兵達（つわもの）だ。

しかし、地上部隊との関係はあまり芳しくないのがカリムの悩みの

種だった。地上部隊の縄張り意識や術式の違いによる確執、過去の歴史認識の違い等不和の原因は多々思い当るからこそなお頭が痛い。

地上部隊との確執のせいで共同で任務にあたるということはほとんどない。もちろん、緊急時の協力体制等の取り決めはあるが、それはほとんど形式的なものに過ぎない。一応、聖王教会絡みの事件は教会騎士団が担当することになっているのだが、今回の場合は、事件の発生した場所が教会というだけで事件そのものは立て篭もり事件だ。先に現場に到着した方が事件の指揮を執る、という暗黙の了解に従えば教会騎士団を公に動かすことはできない。

「だから、僕に現場に行ってほしい、か。わかったよ、すぐに向かう。場所は？」

教会側の人間でありながら、管理局に勤めるロッサはこういう時に都合がいい。カリムもロッサ同様、管理局にも籍を置いているが少将という階級は自由に動くには重過ぎる。動こうと思えば動けないわけではないのだが無理をすれば教会の地上本部の間に無用な軋轢を生む可能性もある。だからこそ、それらの諸問題を気にすることなく自由に動けるロッサはカリムにとって貴重な存在だった。詳しい現場の位置を聞くとロッサはすっと立ち上がる。

「頼むわね、ロッサ」

「任せてよ、義姉さん」

笑顔をカリムに返しながら、通信を切る。幸いなことにここから現場まではさほど離れてはいない。昼食の代金を払うとロッサは駆けだした。現場につくと、そこは既に地上部隊によって完全に封鎖されていた。ロッサを野次馬を勘違いしたのか局員が近付くな、と追

い払うような仕草をしてみせたが管理局員のＩＤを見せると失礼しました、と敬礼を返した。

「さて、と・・・まずは現状把握しないとね」

現場の指揮官はどこか、と辺りを見渡すと見たことの後ろ姿を見つけた。腰まで伸びた艶やかな蜂蜜色の髪に執務官であることを示す黒い制服。その後ろ姿は間違いなく、フェイトだった。しかし、ロッサが声をかけるよりも先にフェイトは教会の中へと消えてしまった。

「・・・どういうことだ？」

立て篭もり事件に執務官が入っていくとすれば、それは強行突入する時しかない。しかし、ロッサの見たフェイトはどう見ても丸腰だった。直接犯人達と交渉する為に乗り込むなどあるはずもない。疑問に思いながらも聖王教会の司祭を見つけたロッサはその疑問を頭の隅に片付けて、司祭の元に駆け寄る。

「大丈夫かい？」

「あ、はい、おかげさまで何とか・・・ただ、私達の身代わりに若い執務官の方が人質に」

ロッサの眉がピクリと動く。まさか、とは思いたかったが目の前の現実をロッサは否定できなかった。

「その執務官の名前はわかるか？」

一縷の望みをかけて、ロッサはその司祭に尋ねる。

「ハラオウン執務官、と呼ばれていました。まだ若い女性で・・・」

しかし、現実はやはり現実だった。認めたくはなかったが、あの後ろ姿はやはりフェイトだった。

「これははやてにも連絡した方がよさそうだね・・・」

古びた教会を見つめ、ロッサは苦々しく呟いた。

Intermission 37.2

Intermission 37.2

「道化師の覆面・・・まさかとは思ったが・・・」

雪鷹は苦々しげに呟く。以前、犯罪者組織の調査で過去の事件を調査しているときに全員が道化師の覆面を被った犯罪組織を見たことがある。主な罪状は質量兵器の密売で、規模も決して大きな組織というわけでもない。雪鷹の記憶が正しければ、半年ほど前に組織の幹部が逮捕され、それから芋蔓式に関係者が捕まっていき、既に壊滅したはずの組織だった。

「その残党どもというわけか・・・」

情報部の特別権限で管理局のデータベースから集めた情報を見ながら呟く。壊滅したとはいえ、組織の人間全てが捕まってしまったわけではない。管理局の網をくぐり抜け、捕まらずに済んだ人間達がいたとしてもおかしいことではない。組織の規模が大きくはないが、扱っていた質量兵器は幅広く、子供でも扱えるような小型の軽火器から小さなビルの一つや二つくらい吹き飛ばせるだけの威力を持った爆薬など様々だ。それらを使ってよからぬ事を企んだ、というのは想像に難くない。

「狙いは報復テロか？」

浮かんだ答えを雪鷹は首を振って否定する。管理局に対する報復が狙いなら聖王教会に立てこもるなど無駄なことでしかない。地上本部や陸士部隊を狙ったほうがはるかに容易く、組織の再生を広く示

すことにもなる。

「報復が目的ではない・・・だとすれば何が・・・」

金銭が目的なら、人質を使って身代金を要求するなど、犯人達からなにかしら動きがあるはずだ。しかし、それが一切ない。それはつまり、金銭が目的ではないということだ。

「単なる売名行為？いや、それにしては動きがなさすぎる。教会に立てこもるだけでは何のアピールにもならない」

相手の目的が読めない雪鷹は苦々しげに呟く。

「・・・違うな。まだ、要求する段階に来てない、だけという可能性もある」

閃いてしまった最悪の可能性に雪鷹は顔をしかめた。犯人達が何も要求してこないのは、その要求に釣り合う人質がまだ手に入っていないから、という可能性も考えられる。確実に管理局に要求を通す為に、それに見合う人質を確保する為の時間稼ぎが立て篭もり事件の目的だと考えれば納得がいく。そして、雪鷹は更に考える。管理局の要人を人質にするのはまず不可能だ。一度は壊滅した組織にそこまでの人員と能力があるとは思えない。

「だとすると、狙いは・・・一般人を狙った無差別テロか・・・」

資料をもう一度見直して雪鷹は眉をしかめた。管理局をテロの標的にするには幾重にも張り巡らされた防衛システムや護衛を突破する必要がある。それが不可能なら、狙いは自ずと絞られてくる。幸か不幸かこの組織にはそれを可能にするだけの火力を秘めた爆薬があ

るのだ。クラナガンのどこかに爆薬を仕掛け、市民を人質にして管理局と交渉するつもりなのだろう。

「・・・外れてくれるといいんだが・・・」

無差別テロはあくまでも雪鷹の予想だ。今のところ、その証拠もない。しかし、雪鷹の経験上、外れてほしいと思った予想は大抵、的中していることが多い。

「まぁ、探し物はあいつらに任せるとして・・・」

そこで雪鷹は言葉を途切らせ、小さくため息を零した。

「問題はフェイトだな・・・よりによってこんな連中の相手か・・・分が悪過ぎる」

雪鷹の思い浮かぶ限り、フェイトとの相性は最悪だ。もちろん、魔導師としてのフェイトの実力は雪鷹も承知している。相性の悪い相手にでも戦えるだけの技量と経験は兼ね揃えている。しかし、今回の犯人グループはそれだけではどうにもならないのだ。

「フェイト・・・優しいだけじゃ、何も守れないよ」

Intermission 37.3

Intermission 37.3

「ねぇ、アルトから聞いたんだけど、なんだか今、クラナガンで立て篭もり事件が起きてるらしいよ。人質をとって聖王教会に立て篭もっているって」

午前中の訓練を終えて、少し早めの昼食を取りながらスバルが他のフォワードメンバーに言った。

「で、偶々近くにいたフェイト隊長とユキタカさんが指揮してるんだって」

「その二人が指揮してるなら、すぐに解決しちゃうんでしょうね・・・」

ティアナはスバルの話を聞いて小さく呟く。不謹慎かもしれないが、ティアナのその立て篭もり事件の犯人達に対して同情を禁じ得なかった。魔導師としての技量はいわずもがな、執務官としての捜査能力も高い。幾つもの凶悪事件を解決してきた経験を持つフェイトにとって立て篭もり事件は緊張するほどのものではないだろうし、雪鷹にしてみても、この程度で普段の冷静さを欠くとは思えなかった。そして、突破力、攻撃範囲（レンジ）、あらゆる状況に対する対応力、いずれの点に置いても犯人達が雪鷹とフェイトを超えるとは思えない。

「でも、それがそうもいかないみたい。なんでも、犯人が一切交渉に応じないから難航してるんだって」

「フェイトさん、大丈夫なんですか？」

それまで食事をしていたエリオとキャロが心配そうな表情を浮かべるが、ティアナは大丈夫よ、笑って見せる。

「二人とも心配しすぎよ。考えてみなさい、あの二人を苦戦させられる魔導師なんて六課の隊長陣級（クラス）じゃないと無理よ。何が目的か知らないけど。そんな魔導師が教会に立て篭もり事件なんてすると思う？」

ティアナの言葉にキャロはなるほど、と頷く。もし、犯人がオーバーSランク、あるいはそれに匹敵する技量の魔導師ならば立て篭もり事件より、もっと凶悪な事件を起こすはずだ。

「じゃあ、フェイトさん、きっとすぐに帰ってきますね」

安堵の混じった嬉しそうな声だった。

「確かに、あの二人が苦戦する相手って想像がつかないかも・・・」

リミッターによる魔力の制限はあるものの、戦闘技術だけならオーバーS級（ランク）魔導師と比べてなんの遜色もないフェイトだ。そして、雪鷹も魔導師ランクや魔力値こそ一般魔導師並みだが、技量や経験はフェイトやなのはを超えている。少々格上の魔導師であろうとも互角以上に渡り合える実力は持っている。

「相性が悪い相手でも冷静に対応できるだけの技量と経験は持ってるもの・・・心配なんてしなくても大丈夫よ」

「なんだか、ちょっと意外・・・」

大皿からパスタを山盛りに盛ったスバルがティアナに呟く。

「なによ、意外ってどういうこと？」

「ティアがユキタカさんのことをそんな風に見てたなんてちょっと意外だなってこと。今までのティア、ちょっとユキタカさんを避けてるっていうか距離を置いてるみたいだったから」

「それは・・・」

スバルの言っていることに心当たりがないわけでもない。スバルの言う通り、以前のティアナは雪鷹のことをそれとなく避けていた。元々、スバルやエリオに比べて接点は少なかったが、それに加えて努力することなく力を得た天才だと誤解し、心のどこかで嫉妬し、憎んでいた。今思い返せばそれは実に子供じみた愚かは振舞いであったとわかる。雪鷹の強さがティアナとは比べ物にならないくらいの努力の結果であると知ってからも、己や兄の犯した過ちの後ろめたさから雪鷹に対して素直になることができなかった。そんなティアナを一番近くで見ていたのは他でもないスバルだった。

「いつまでもそういうわけじゃないわよ、もう子供じゃないんだから」

スバルから顔を逸らし、頬を薄く染めながらティアナは呟く。どうして顔を逸らしてしまったのかティアナ自身にもわからなかったが、スバルを直視してはどうしても言えなかった。以前よりも雪鷹との関係が改善されたという自覚はティアナにあったし、何がそのきっかけなのかもよく理解していた。だからこそ、誰にもそれを言いた

くなかった。

「ティア、ひょっとして照れてる？」

「なっ・・・どうしてあたしが照れなきゃいけないのよっ！！」

スバルの言葉にティアナは大きな声を出す。以前の個人訓練でティアナは雪鷹の前で泣いた。悔しくて泣いたのではない。込み上げてくる感情のゆらぎに堪えらえなくなり、雪鷹に縋るようにして泣いたのだ。あそこまで泣いたのは兄が死んで以来のことだった。おかげで残っていたわだかまりはなくなったものの、泣き顔を見られて、否、見せてしまった恥ずかしさは今でも忘れられずにいた。

「だって、ティア・・・顔、真っ赤だよ」

「う、うっさい、バカスバルっ！！」

ティアナ自身、顔が燃えるように熱くなっている自覚はあった。おそらくはスバルの言う通り、真っ赤になっているのだろう。しかし、ティアナはそれを認めたくはなかった。照れる理由も、恥ずかしがる理由もどこにもない、はずなのだ。よって、顔が赤くなることなどないはずだった。しかし、それ以上なにも言い返せなくなったティアナは黙りこむしかなく、逃げるように急いで食事を食べ、その場を後にしてしまった。

Intermission 37.4

Intermission 37.4

「よし、ここでいい」

何かの作業員を装った男が部下に指示を出す。二人の部下が指示された場所に段ボールを下ろす。

「これで全ての配置が完了した。教会組の様子は？」

「いえ、これといって特には。予定通り、時間を稼いでくれましたね」

部下の一人が額に滲む汗を拭い、時計を見る。立て篭もり事件が発生してから既に数時間が経過している。周辺の陸士部隊は事件の方に回されているらしく、全く見かけない。全て男達の計画の通りだった。

「まったくだ。問題は管理局が交渉に応じるかどうかだな・・・」

「流石に応じますよ。クラナガン市民全員が人質みたいなものですから・・・仕掛けた爆弾の一つや二つを爆発させれば奴らだって・・・」

部下の男はそう言って笑う。しかし、作業服の男の顔は晴れない。男の懸念はまさしく、それだった。市内の至る所に大小合わせて十個近くの爆弾は設置した。その全てを男の手元にある装置を、同じものを教会組にも渡してあるが、使って遠隔操作して好きな時に起

爆させることができる。人質は確保したも同然だ。しかし、それでもなお、管理局が男達の要求を呑むとは思えなかった。管理局がどれほど歪な組織であるのかを男は十二分に理解していた。市民を人質にしたところで、見捨てないという保障はどこにもない。そして、管理局が人質を見捨てることを選んだとしても男は驚きはしなかった。

「まぁ、そのときは管理局も一緒に終わりだな・・・」

煙がたち込め、瓦礫の山と化したクラナガンを思い浮かべて男は苦笑を浮かべた。もし、管理局が交渉に応じなかったときは手元のスイッチで仕掛けた爆弾を起爆させれば済む。ただ、それだけのことなのだ。それで溜飲が下るわけではなかったが、一矢報いた気持ちにはなれるだろう。

「待っててくださいよ、ボス・・・」

手伝っていた男の一人が祈るように呟く。その顔は切実そうで、それでいて誇らしげでもあった。男達の要求は他でもない。半年ほど前に管理局に捕まってしまった組織の幹部、男達にとっての直属の上司、を解放することだ。ただそれだけの為に、この日まで力を尽くしてきた。組織の中核を為す人間が軒並み捕まってしまい崩れかけた組織をもう一度立て直すのは容易なことではなかった。しかし、その努力と執念がようやく実を結び、計画の実行までこぎつけたのだ。小規模な誘拐事件を囮にして、本命である無差別テロの準備のための時間を稼ぐ。蓋を開けてしまえば、そこまで複雑な作戦ではない。しかし、その作戦に男たちはすべてを賭けていた。

「必ず、助け出しますから・・・」

男の言葉が不気味に響いた。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３７．５

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３７．５

「あ、なのは隊長、ちょっとええかな？」

隊舎の廊下でなのはの姿を見つけたはやては呼びとめて、部隊長室に招き入れる。その顔には、何かある、と無言で語っていた。あまりいい話ではないのだろう、と覚悟を決めたなのはは部屋に入るとはやてに尋ねた。

「どうしたの？」

「もう聞いてるかもしれへんけど、今、フェイト隊長とユキタカ曹長がクラナガン市内で起きてる立て篭もり事件の指揮を執ってる」

はやての言葉になのはは頷く。詳しいことはなのはも聞いていなかったが、フェイトからシャーリーにその旨を伝える連絡があったことは既に聞いていた。

「その立て篭もり事件で何かあったの？」

「まだ、詳しいことは不明なんやけど、フェイト隊長が人質になったらしいんや・・・」

「人質っ！？」

はやての言葉になのはは驚きを隠せない。指揮を執っている人間が

人質になることは通常ではあり得ない。それが起きたということは局員と犯人との間に戦闘行動があったと見るのが妥当だ。そして、リミッター付きとはいえ、フェイトは並みの犯罪者ならば圧倒できる技量の持ち主だ。そのフェイトが囚われたということから犯人達の力量は推して量ることができる。

「かなり手ごわい相手、だね」

なのはは待機状態の愛機（レイジングハート）を握り締める。フェイトと互角以上に戦える相手ということは、なのはと同等の技量を見てまず間違いない。フェイト救出の為、緊急出動を覚悟したなのはだったが、はやては黙って首を横に振る。

「犯人との戦闘はたぶん、なかったはずや。センサーに何も反応はなかったし、いくら六課がレリック対策の専門部隊やいうてもそんな大規模な戦闘があったら何かしら連絡があるはずや」

「でも、それじゃどうしてフェイトちゃんが人質に・・・？」

戦っていないというのなら、フェイトが犯人達に捕まる理由がわからない。状況が理解できなくなったなのはは頭を抱え込む。

「それが詳しくわからへんからこっちも対応に困ってるんや。もしかしたら捕まったいうこと自体が何かの間違いかもしれへんし、何か考えがあって囮になったのかもしれん。もし、これが何かの策やとしたら下手に動かんほうがええぇ・・・」

「そうだ、雪鷹は？雪鷹も一緒に現場にいるんでしょう？雪鷹に聞けば何か・・・」

フェイトが捕まってしまった、という驚きで雪鷹の存在を完全に失念してしまっていたなのはは、閃いたように声を出す。しかし、はやては首を横に振ってそれを否定する。

「ユキタカ曹長は所在不明で連絡もつかへん。私も今さっき試してみたけど、無理やった」

「そんな・・・」

悔しそうなのはの声。その気持ちははやても同じだった。

「この件についてこっちで調べてみるから、なのは隊長はフォワードの子らをお願いな。フェイト隊長が事件の指揮を執ってるいうことはたぶんロングアーチから聞いて知ってるやろうけど、それ以上のことは知らせんようにせな」

「うん、そうだね・・・」

はやての言葉になのはは頷くと祈るように窓の向こう、フェイトがいるはずのクラナガンの街を見つめた。

「お願い、二人とも無事でいて、フェイトちゃん、雪鷹・・・」

38『つめたいげんじつ』（前書き）

世界は裏切りと欺瞞に満ちている

だけど、それでも私は

だからこそ俺は

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　はじまります

38『つめたいげんじつ』

38『つめたいげんじつ』

仄暗く、重い空気。教会の外とはまた別の緊迫感に満ちたその内部に入ったフェイトを迎えたのは仮面の男達と二丁の拳銃、質量兵器だった。二人の男がそれぞれ拳銃を持ってフェイトに向けている。そして、その間からリーダー格と思われる男が近づいてきた。

「ようこそ、ハラオウン執務官」

道化師の仮面の男が銃を突きつけながらフェイトに話しかける。仮面のせいで表情は読めない。しかし、フェイトが考えていたよりもその声は高かった。緊張して上擦っているにしては、不自然さの残る声の高さだったが、そんな些細な疑問を振り払い、フェイトは仮面の男に尋ねる。

「あなた達の目的は何なの・・・話して」

「通信機や盗聴機の類をお持ちでしょう?渡してください。それとも、無理矢理脱がされたいですか?」

そう言って男はフェイトの問いかけを無視すると、フェイトに手を差し出した。

「おかしな真似はしないでください、お互いの為に」

男の指さした方向に仲間の男が銃を向ける。その先には聖王教会のシスターと子供達が座っていた。やつれた顔のシスターは見ている

だけで不憫に思えてくる。そのシスターの周りを囲む子供達も目の奥が薄暗く、不気味な冷たささえ感じられた。従わなければ、撃つという無言の脅しだった。

「残りの人質を解放して。私一人いれば十分でしょう?」

「それはできない相談です。貴女一人が人質なら、管理局は貴方を見捨てる、という選択をしかねない。どうせ、今も強行突入しようと皆で準備しているんでしょう?我々をあまりに見くびらないでください」

冷ややかな声だった。少年のように無邪気で、それでいて悪意に満ちた声だ。その声に込められているのは管理局に対する憎しみであり、怨みであり、怒りであり、そして、悲しみだった。怨嗟の声がフェイトに突き刺さる。仮面で見えないその瞳がどれほど悲しみに満ちたものなのかを想い浮かべ、フェイトは心を痛めた。

「何があったの・・・」

フェイトに問いかけに答える代わりに男は銃を突きつける。

「隠しているものを全部出してください。無駄弾は撃ちたくないんで」

本気とも冗談とも判断しかねる声で脅され、フェイトは忍ばせてきた盗聴機材を男に手渡す。念話の類は妨害されるかもしれない、と思って持ってきたのだが犯人達にはそれは予想の範疇のようだった。男は受け取った機材を見て小さくため息を零すと、勢いよく床に叩きつけた。ガツっという鈍い音が教会の中に響く。そして、男は追い打ちをかけるかのようにそれを踏みつぶした。

「無駄なことを・・・ハラオウン執務官、上着を脱いでください。心配しなくても、猥褻行為はしませんから安心してください」

フェイトは男を睨みつけるが、銃と人質を突きつけられては言う通りに動くしかない。上着を脱いで男に渡すと男はそれを別の人間に預けて、フェイトを見つめた。ジャケットの下に隠れて見えなかったが、年の割に成熟した体付きは見事というよりほかないが、男はそれには興味を示しているようではない。表情は読めなかったが好色な雰囲気は感じられない。もしかしたら、考えてしまったフェイトは内心、安堵のため息を零す。

「両手を後ろ手に回してください。想像している通り、貴女を拘束します」

そう言って男は他の人間に命じてフェイトの両手を縛り始めた。手首に食い込む縄の感触にフェイトの背筋が冷たくなる。バインド系の魔法ならば、デバイスがなくとも自力で解除する自信があったが物理的に縛られてしまってはフェイトにはどうしようもない。魔導師としては優秀なフェイトだが、所詮は１９歳の少女でしかない。力任せで逃れることができるはずもなく、両手を縛られたフェイトは悔しそうに男を睨みつけた。

「そんな目でみないでください。欲情してしまうでしょう？」

下卑た言葉とは裏腹に、冷めた声。からかわれているのだと気付いたフェイトは頬を赤く染める。しかし、男はそれに興味を示すこともなく、近くの椅子にフェイトを座らせた。

「大人しくしていれば乱暴なことはしません。こちらとしても貴女

一人に人を割きたくないので、静かにしていてくださいね」

「何が目的なの・・・」

男の指が伸びて、フェイトのあごに触れる。鼻につくのは錆びた鉄と硝煙の臭いだ。

「有名な美人執務官が捕まって、犯罪者達に集団強姦（レイプ）される様子を生中継で主要な次元世界に流して、管理局の権威を貶める為、というのは如何ですか？」

無表情の道化師の仮面が不気味に笑う。感情の抜け落ちた、冷たい声だ。下卑た笑い声の方がまだよかった。男の言葉が本意でないことは頭では理解していた。しかし、この男なら本気でしかねない、とフェイトは直感で感じ取った。欲望を満たす為ではなく、単なる暇つぶしや戯れの見世物として、フェイトを辱め、晒すこともやりかねない。その行動には何も意味はない。意味を持たないからこそ、恐ろしかった。

「じょ、冗談にしては笑えないね」

せめてもの虚勢でフェイトは笑って見せるが、自分の頬が引き攣っているのが嫌でもわかった。

「笑ってるじゃないですか」

フェイトの動揺を見抜いたかのように男は笑う。氷のように冷たい指先があごから首筋を伝って、襟元まで撫でていく。悪寒にフェイトは体を震わせる。

「やめ・・・っ」

男の指の冷たさと不気味さにフェイトの体が反応する。懸命に体を逸らせて、男から逃れようとしていた。そこには執務官としての意地も誇りもなかった。女としての本能がフェイトにそうさせたのだ。

「確かに冗談にしては笑えませんね。まぁ、いいでしょう・・・事が済むまで貴女に手を出している余裕はこちらにもありませんし」

仮面の男はそういうとフェイトから離れた。それと同時にフェイトの額に汗が流れ、その愛らしい唇からは安堵のため息が零れる。それを見て、男は微かに笑ったがそれを気にする余裕さえフェイトにはなかった。実際の経験こそないが、男女の営み云々やこの類の事件についてはフェイトも知っていた。しかし、それは本当に知っているだけだった。フェイトの知るそれはただの知識でしかなかった。こういった形でフェイト自身がその対象になるなど今まで考えたこともなかった。いつぞやの雪鷹との一件とは全く質の違う別の恐怖だった。体も、心も、全てが拒絶していた。

「こんなの・・・」

フェイトは己の浅はかさを怨んだ。人質の身代わりになると決めた時、命の危険は覚悟していたが貞操の危機は全く眼中になかった。あるいは、軽んじていたのだ。命を危険に晒すよりも怖いはずがない、と。揺らぎかけたフェイトの心に追い打ちをかけるように、更なる事実がフェイトに襲いかかる。

「うそ・・・」

フェイトは目の前の現実に我が目を疑った。

・＊・＊・＊・

「・・・すまない、もう一度、言ってくれ」

現場に戻った雪鷹は捜査官の言葉に耳を疑った。色々な状況を想定しながら、常に動いている雪鷹だったがそれでも、その想定を超える事態は起こり得るもので、今回のこれはまさしく、雪鷹の想定を超えるものだった。

「ですから、ハラオウン執務官は人質として教会の中に・・・」

「そんな馬鹿な真似をあいつがするはずが・・・」

そこまで言って雪鷹は気付いた。少し離れた場所に泣きじゃくる子供達とその親らしき人影が見える。おそらくは人質として捕らえられていた子供達だ。それだけ見ればもう、十分だった。

「あの馬鹿・・・」

苦々しげに呟き、雪鷹は空を見上げた。冷静に考えれば、ある意味でもっともフェイトらしい行動だ。子供が人質になっていると聞いたフェイトが黙っていられるはずがない。何もしないで見ているはずがないのだ。黙ってみているくらいなら、自分から飛び込んでいくのがフェイトだ。はっきり言って執務官には向いていない性格だ。評価されるべきものでもない。しかし、それでも、雪鷹は心のどこ

かでそれを喜んでいた。フェイトはやはり、あの頃のままだった。

「そういう貴方はどこに行っていたんですか？補佐官が上司に無断でどこかに行くなんてありえません」

非難混じりの捜査官の視線。雪鷹は何も言わずに捜査官に書類を突き出す。捜査官は怪訝そうに書類を受け取り、目を通す。そして、すぐに驚いた顔をして雪鷹を見た。

「これはひょっとして犯人の・・・」

「あぁ、連中の目星だ。反管理局テロ組織『ｃｌａｎ（クラン）』。ついでに言うと過去の犯罪データベースで検索すればわりとすぐに出てきたぞ？俺を非難するのは一向に構わないが、お前達は今まで何をしていた？教会を包囲して、それだけか？」

咎めるというよりも呆れた様子の声音に捜査官はそのまま押し黙ってしまう。雪鷹の言う通り、現場の捜査官は教会を包囲してからは、何もしていなかった。もちろん、強硬突入の準備はしていたし、不足の事態に対応できるように準備はしていたが、それだけだ。何も要求してこない犯人を愉快犯の類と決め付け、過去の犯罪について調べようとしていなかったのだ。それを雪鷹に見抜かれては返す言葉もなかった。

「まぁ、それはもういい・・・問題はこいつらだ」

そう呟いて雪鷹は書類に張られた写真をコツンと指で叩いた。

「た、確かに・・・まさかよりにもよって・・・普通の犯罪者ならともかく、彼らが相手では局員も手が出しづらいですね」

捜査官も顔をしかめ、頷いた。

「こんな小さな子供達が犯人だなんて・・・」

写真に写っていたのは十歳前後の幼い子供達だった。

・＊・＊・＊・

「どうして・・・」

フェイトの言葉を失った。目の前には先程、フェイトからデバイスを受け取ったあの少年が立っていた。身の丈程もある大きな銃をスリングで首からぶら下げ、銃口をフェイトに向けながら。

「どうしてって・・・答えは簡単だよ。僕もあの人達の仲間だからだよ」

少年はそう言って満面の笑みを浮かべた。氷のように冷たく、天使のように純真な笑顔だった。そこに罪悪感を欠片も見えない。この子も犯人達に利用されているのだ、とフェイトの中で犯人達への怒りと少年への同情が同時に湧きあがる。

「卑怯者っ！！こんな小さな子供を使って・・・っ」

フェイトが仮面の男を避難する。しかし、最期まで言い終えるより

も先にゴツンと鈍い痛みが頭に走った。

「うるさいっ！！全部管理局が悪いんだっ！！」

鈍い痛みと共に少年の声が頭に響く。少年がぶら下げた銃の床尾部分でフェイトを殴ったのだ。殴られたことによる物理的な痛みはたいしたことなかったが、助けようと思っていたはずの子供に殴られた、という事実がフェイトの思考を停止させていた。そして、少年は一度では許せないのか、もう一度銃を振り上げた。

「やめとけ。そいつも人質だ」

それを道化師の仮面の男が間に入って止める。

「だけど、こいつ、僕達を卑怯者だってっ！！」

しかし、少年の怒りは収まらず、不満そうにフェイトを睨みつけていた。そこにあるのは純粋な憎悪だ。まだ十歳にも満たない少年が、何故あれほどくすんだ目で人を見ることができるだろうか。フェイトには理解できなかった。少年の目に宿っているのは怒りであり、憎しみであり、悲しみだ。この世の悪意を全て詰め込んだような少年の目がフェイトは恐ろしかった。

「手荒な真似はするな。事が終ればどこかの物好きに売るんだ。キズものにして値を下げたくない。わかるな？」

有無を言わせぬ口調で、男は少年を鎮めるとあっちに行け、と無言で示し、フェイトに顔を向けた。

「まったく・・・大人しくしろって言っただろ。黙っていれば痛い

目にあわなくて済んだのに・・・」

呆れたような、小馬鹿にするような男の声。しかし、そんなことは全く気にならなかった。気にする余裕さえなかった。少年に殴られたという現実が、憎悪という言葉でさえ生ぬるいくらいに黒く塗りつぶされた視線がフェイトの心を掻き乱す。

「あの子は・・・何があったの・・・どうしてあんな目が・・・」

フェイトがこれまでに取り扱った事件の中には、悲しいことだが、年端もいかない子供達がその犠牲となった事件も少なくない。その中でフェイトは色々な子供達を見てきた。

絶望に打ちひしがれた目。
生きる気力を無くした目。
人を信じられなくなってしまった目。
孤独と寂しさに満ちた目。
怒りと悲しみに溢れた目。

本当に色々な目を見てきた。しかし、その中にあれほど暗く、冷たい目をした子供は一人もいなかった。

「あんたにはわかんないだろうけどさ、犯罪者には犯罪者の事情ってのがあるんだよ。俺にも、あの子にも・・・ん？」

男はそこで言葉を途切らせ、懐から通信機を取りだした。

「あぁ、了解した・・・大丈夫、上手くやるさ」

手短に話を終えると男は小さくため息を零した。そこに込められたのは歓喜であり、狂気だった。

「さて、管理局に宣戦布告するとするか・・・」

・＊・＊・＊・

教会の扉がゆっくりと開いた。出てきたのは道化師の仮面を被ったあの男だ。周囲の局員に緊張が走る。今までは人質を連れていたが、今回はそれもいない。取り押さえることは容易なはずだが、それをさせないだけの威圧感が男にはあった。そして、男はゆっくりと口を開いた。

「やぁ、管理局の皆さん、ごきげんよう・・・突然だが、クラナガン市内に幾つかの爆弾を仕掛けさせてもらった。ここからの遠隔操作でいつでも爆破させることができる。威力はものにもよるがビルの一つや二つくらいなら木端微塵にできる程度の量は準備した、とだけ言っておこう」

突然のことに現場に一瞬静まりかえり、そして、すぐにざわめき始める。

「は、はったりに決まっている」

捜査官の男が震えた声で叫ぶ。しかし、男はそれを無視して話を続けた。

「ここで爆弾を爆発させて、その存在を証明するのは簡単だが悪戯に命を奪うのは好きではない。我々の要求は、以下の二つである。まず一つ、半年前に管理局に捕らわれてしまった我々の同志の解放。二つ目に、我々と解放した同志を無事に脱出させること。金品の類は一切求めないし、交渉に応じるつもりもない。返答はイエスかノーの二択しかない。言うまでもないことだが、ノーと答えた場合、クラナガンの安全は保証しない。３０分後に聞く。もう一度言うが、クラナガン市民全員が我々の人質である。管理局には賢明な判断を期待する」

それだけ言うと仮面の男は教会の中へと戻ってしまった。

・＊・＊・＊・

「なんて馬鹿なことを・・・」

男の話を聞いていたフェイトは苦々しげに呟く。どちらの要求も管理局、更に言うなら地上本部が、受け入れるはずのない要求だ。まだ金銭を要求した方がわずかではあるが可能性はある。管理局に捉えられた犯罪者が自由になる方法は一つしかない。裁判で決められた刑期を全うし、犯した罪を償うことでしか自由は得られない。こんな形で犯罪者が釈放されるなどあり得ないし、あってはならない。何があったとしても管理局はそんな前例を作るはずがない。

「馬鹿なこと・・・確かに、そうかもしれないね。だけど、それでも、やるしかないんだよ、俺達には」

気が付くと道化師の仮面の男がフェイトの前に立っていた。

「やるしかないって・・・あなた、何を考えてるの？」

「あんたにとってみれば、俺達も他のテロリストなんかも犯罪者っていう一つの括りでしかなんだろうが、俺達にとって捕まえられた仲間達は家族も同然だ。だから、どんなことをしてでも、取り戻す。それだけのことだ。家族を取り戻す為に全てを賭ける、なにかおかしいか？もう、二度と管理局なんかに大切な家族を奪われないように・・・その為になら、なんだってするさ」

仮面の男はそう呟くと、小さく笑った。仮面越しに聞こえてきたそれは力の抜けた、寂しげな笑い声だった。そのせつなさにも驚いたが、それよりも気になったのは男の呟いた言葉だった。

「管理局に、奪われた？」

フェイトは震える声で尋ねる。

「俺達の本当の家族は、管理局に奪われた・・・任務中の事故の巻き添えになったり、犯罪者として捕まったり・・・管理局の汚職を暴こうとして殺された奴もいたな、あの子の親がそれだ。まぁ、理由は人それぞれだが、俺達の組織は管理局に怨みを持った者の集まりだ。大切な家族を奪われたって怨みをな」

「そんな・・・」

その言葉に込められているのは純粋な悪意であり、管理局に対する呪詛だった。今、フェイトが向けられているのは敵意ではないのだ。それがひどく恐ろしく、怖かった。

「だから、俺達は金銭は一切求めない。そんなもので家族の命は贖い切れないからな・・・」

不味い相手だとフェイトは直感した。相手の頭の中には復讐しかない。己の命に対する執着も、利害も何もかもが感じ取れなかった。目的が果たせなければ、全てを無に帰すことさえ厭わないのだ。

「やめて・・・今なら、まだ・・・」

「もう、遅いよ。優しい優しいお姉さん・・・」

狂気めいた男の声がフェイトの耳に響き渡った。

38『つめたいげんじつ』（後書き）

タイムリミットまてあと僅か

残された雪鷹の決断は

捕らわれたフェイトの運命は

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
３９　『たった一つの冴えたやり方』

そして、事件は終わりを迎える・・・

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３８．１

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３８．１

「何！？無差別テロだとっ！！」

テロリストからの要求を聞いたレジアスは激昂して、叫ぶ。クラナガンといえば地上本部のお膝元であり、地上部隊や捜査部がそれぞれの担当地域を巡回して、不審者がいないかどうか常に目を光らせている。その目を盗んで市内に十数個の爆弾を仕掛けるなど不可能に等しい。しかし、犯人達は実際にそれをしてのけたのだ。

「おそらく、立て篭もり事件そのものが囮ということですね。敢えて局員の目を集め、その隙をついて爆弾をしかけたのでしょう。事件の対応は地上本部の捜査官と付近の陸士部隊が行っていますが、状況は膠着している模様です」

オーリスはレジアスのように大きな声を出すこともなく、淡々と言葉を並べる。それを見てわずかではあるが落ち着きを取り戻したレジアスはオーリスに言った。

「犯罪者の釈放はなにがあっても認めん。それを現場に徹底しておけ」

レジアスは断固とした態度で言い放った。

「よろしいのですか？無差別テロとなると犠牲者の数が・・・」

迷う素振りさえみせなかったレジアスにオーリスは尋ねた。もちろ

ん、犯人グループの要求は到底呑めるものではなかったが、無差別テロによる犠牲者のことを考えると、厳密には無差別テロを防げなかったことによる地上本部に対する信頼の失墜を考えるとそう容易く頷けるものではなかった。

「構わん。ここで犯罪者どもに屈するわけにはいかんのだ」

レジアスはまたもやはっきりと言い切った。

「目の前の命だけに捉われて、明日の命を見捨てることなどできるものか・・・」

ここで管理局が犯人達の要求を呑めば、管理局の、ひいては地上本部の威信は失墜する。犯罪が増えることはどう考えても避けることはできない。一度でも前例を作ってしまえば同じことを企む輩が出てくる可能性もある。時間をかければ威信は取り戻せるかもしれないが、取り戻す前に失われる命の数は今、人質になっている数の比ではない。

「本当にそれでよろしいのですか？」

オーリスはレジアスに再度尋ねる。辣腕家であり、強引な所もあるレジアスだが、人の情がないわけではない。むしろ、大切な人を理不尽に奪われる痛みや苦しみを誰よりも理解している。レジアスも過去に愛する妻、オーリスにとっては母、を事件で失っている。目の前の命を見捨ててしまうことになんの躊躇いもないはずがないのだ。

「構わんと言った」

しかし、それでもレジアスは言い切る。どちらを選んでも管理局の威信に傷がつくことは避けられない。だからこそ、レジアスは己の信じる道を選んだ。無差別テロの規模はどの程度になるのかレジアスにもわからない。下手をすれば未曾有の大災害になる可能性もある。それでも、それが己の正しいと信じた結果であったのなら潔く受け止め、背負う覚悟はできていた。

「現場の人間に伝えておけ、もしものときの責任はすべて上(わし)が引き受けるとな。それと、各部隊に人員の半分を緊急出動待機させておけ・・・医療センター等主要施設にはすぐに人員を向かわせて事態の対処にあたらせろ」

犯人の要求を蹴ると決めた以上、レジアスのやるべきことは一つしかない。無差別テロが起きると想定しての関係部署に次々に指示を出していく。

「わかりました」

オーリスはレジアスに敬礼をして、そのまま部屋をから出ていく。一人残ったレジアスは疲れたようにため息を零すと立ち上がり、窓の近くに歩いていった。眼下に広がるのは穏やかなクラナガンの街並みであり、それこそレジアスが、地上本部が守ろうとしているものだった。

「ミッドの平和は我々が守る。誰にも邪魔はさせんっ！！」

Intermission 38.2

Intermission 38.2

「まったく、無差別テロだなんて・・・馬鹿な連中がいるものね」

クロエはため息交じりに呟いた。雪鷹からクラナガン市内で不審な人や物を探すように頼まれたのはほんの少し前のことだ。その時はまだ、かもしれない、という雪鷹の予想の中での話だった。しかし、先程、それが決定的になってしまったのだ。頬を撫でる風が鋭さを増していく。

「それにしても、無駄に広いのよね・・・この街は」

眼下に広がるクラナガンの街並みを見下ろしながらクロエは呟く。市内の中心には地上本部のビル群が並び、その周辺には医療センターなどの主要施設がある。ここからは見えないがクロエの働いているバーも地上本部周辺の歓楽街の中にある。そこから東西南北にそれぞれ道が伸びているのだ。

「でも、まぁ、爆弾を仕掛ける場所なんておおよそ見当はつくんだけど」

無人の荒野に爆弾を設置しても、それは何の脅威にもなり得ない。当然、脅しには使えない。限られた数の爆弾で効率良く、人を傷つけるにはある程度場所を選ばなければならないのだ。人が多く集まる場所を狙うのはもちろんのことだが、人ではなく何らかの街の象徴や名所、史跡、あるいはライフラインなどを狙い、精神的なダメージを狙うこともある。高層ビルが窓ガラスを爆破することで破片

を雨のように降らせることもできる。いずれにしろ、何日も前から設置するのは不可能に近い。教会での立て篭もりが時間稼ぎであるとするならば、今この時、現在進行形に爆弾を設置している可能性が極めて高い。流石にクロエだけでクラナガン市内全てを見るのは厳しいが、眷属の力を借りればさほど難しいことではない。既に指示は出してあるので、すぐに情報は集まるはずだった。

「ん？あれは・・・」

眼下に奇妙な一台の車を見つけて、クロエは高度を下げた。一見すると工事で使う機材を積んだ小型のワゴン車なのだが、妙な違和感がある。更に近付いてみて、クロエはその違和感の理由に気付いた。このワゴン車からも、積まれている機材からも臭いが感じられないのだ。長年、現場で使われることで染み付いた泥臭さや油臭さがまるで感じられなかった。

（手入れをしっかりしているってわけじゃなさそうね・・・）

車はそれなりに年季が入っているが、積まれた機材は新品同然で、使われた形跡がほとんどない。まるで、最近買い揃えたかのようだった。何かを隠しているかもしれない、とクロエに思わせるにはそれで十分だった。クロエは迷うことなく、雪鷹に念話で連絡を入れる。

「シノブ、それらしい車を発見した。中心部に向かってる。証拠はないけど、私の勘だと当たりな気がする・・・うん、わかった・・・とりあえず、探りを入れてみて、何か分かったらまた連絡するね」

そう伝えて、念話を切るとクロエはその車の上に降り立ち、耳をすませた。車のエンジン音の中から聞き取った会話にクロエは忌々し

げにため息を零す。聞こえてくるのは管理局への不満や無差別テロの関係する危険な単語ばかりだった。乗っているのは犯人達に間違いはなかった

「シノブ・・・当たりよ。うん、後は任せたから・・・うん・・・」

悔しげに頷くとクロエは念話を切った。できることならこの場で犯人達を捕まえ、どうしてこんな愚かなことをしたのかと問い詰めたかった。しかし、クロエにはそれができない。雪鷹がそれを許すはずがなかった。雪鷹から、するな、と命じられれば、クロエに抗う術はない。ただ、その命令に従うことしかできないのだ。

「シノブ・・・」

クロエは悔しそうに呟きながら漆黒の翼を羽ばたかせ、車の上から空へと飛び立った。

Intermission 38.3

Intermission 38.3

平穏な昼下がりの機動六課に突然鳴り響いた緊急招集のアラート音。スバル達が集合場所に着くとそこには既にはやてとなのはの姿があった。その顔はどこか緊張しているようで、普段とは雰囲気も違っていた。

「全員集合・・・って、あれ？ティアナは？」

「あ、あたし達、一緒にご飯を食べてたんですけどティアは先に部屋に戻っちゃって・・・」

スバルがそう言っていると、三人に遅れてティアナが姿を現した。四人が揃ったことを確認するとはやては小さく頷く。

「これでフォワード全員集合やね。もう、知ってるかもしれへんけど、今、クラナガンで立て篭もり事件が起きてるんや」

「それって、もしかしてフェイトさんが・・・」

アルトから聞いた話が思い浮かんだスバルはまさか、と表情を変える。そして、はやてはその言葉に同意するように頷いた。

「そうや、その事件や。今さっき、犯人グループから要求があったんや。要求は前の事件で捕まった仲間の解放。それができへんようやったら、市内にしかけた爆弾を爆発させるって。犯人グループの

示した時間まであと二十分弱・・・みんなには出動待機をしてもらって、もしものことがあったときは、救助任務に出てもらわなあかんかもしれん」

はやての言葉に四人は黙りこんでしまう。もし、四人が出動することになったときには、もう既に爆弾が爆発してしまった後なのだ。瓦礫に埋もれたクラナガンが各々の頭の中を過る。危機が迫っているのに何もできない、その現実に四人は無力感を噛みしめるしかなかった。

「あたし、今から爆弾を探しに・・・」

「あ、それならあたしも」

「僕も」

「私も」

ティアナの皮きりにスバル、エリオ、キャロはそれに続く。

「あかん。今、命令した通り、四人は出動待機や」

「でも、今から探せばもしかしたら・・・」

見つけられるかもしれない、とティアナは食い下がる。普段のティアナらしからぬ言動にはやてはわずかに驚いてみせたが首を縦に振ることだけはしなかった。

「何度も同じこと言いたないけど、そんなこと認められるわけないし、見つかると思えへん。それに、仮に見つけたとしてそれでどう

するつもりや？」

「それは・・・」

答えに窮したティアナは黙りこむしかなかった。当然のことながら、ティアナに爆弾を解体する技術はない。爆弾を見つけて、それを動かしていいものかどうかを判断する知識や経験もない。それは他のフォワードメンバーも、なのはやはやても同じだった。

「気持ちはわかるよ。でも、だからこそ、今は我慢して」

なのはにまでそう言われてはティアナも頷くしかなかった。はやてやなのはが何も思っていないわけではないのだ。それさえ分からないほどティアナは幼くも、愚かでもない。今、ここで悪戯に足掻いても何も変えられないし、救えない。目の前のことだけはなく、その先にあるものを見据えての判断の結果なのだ。

「すみませんでした・・・」

「今は、待つことしかできへん。信じて待っといてな、みんな」

はやての言葉にティアナは、他の三人も、力強くはっきりと頷いた。

Intermission 38.4

Intermission 38.4

「で、これからどうするつもりなんだ？」

雪鷹はそう言って捜査官の男を見た。

「どうするつもりとは・・・？」

雪鷹の言葉の意味が分からなかったのか捜査官の男は首を傾げる。

「だから、事件を解決する為にどう動くかということだ。フェイトがいない今、ここの指揮官はお前だろう？早く指示を出せ」

雪鷹にそう言われ、捜査官は驚いた顔を浮かべ、青ざめた顔で震えだした。フェイトが来るまではこの捜査官が現場の指揮を執っていたのだから、フェイトが指揮を執れなくなったのならば後を引き継ぐのが妥当だ。しかし、予想外の事態の連続にそんなことさえ失念していたらしい。

（まぁ、無理もないか・・・）

雪鷹から見ても今回の事件は数名の捜査官の手に負える規模の事件ではない。決して経験豊富には見えない若手の捜査官にとって、この事件は重過ぎる。判断を誤れば、人質の命はもちろん、クラナガン市民の命まで奪ってしまうことになるのだ。指揮をするということは責任を持つということである。すなわち、自分の決断一つで幾

多の命が奪われてしまうかもしれないのだ。並みの人間ならその重さに潰されてしまうことも珍しくはない。

「お前がしっかりしなくてどうする」

「あ、いや、しかし・・・」

「まずは深呼吸をしろ。指揮官がそれだと士気に響く」

犯人達の要求により、現場の空気は一変してしまった。いずれは解決するだろうと現場の誰もが思っていた立て篭もり事件が、一転して、無差別テロへと変わってしまったのだ。なんとかなるはずだ、というどこか楽観した雰囲気に代わり、もうどうしようもないという絶望的な空気が現場を支配していた。張り詰めた緊迫感は瞬く間に人間の精神力を削り取っていく。

「あ、はい、そうですね」

雪鷹に言われるまま、捜査官の男は深呼吸をして落ち着こうとする。しかし、深呼吸をした所で背負わなければならない責任の重さは変わらない。呼吸こそ落ち着いたが、男の顔色は相変わらずだった。

「それにしても、貴方はずいぶん落ち着いていらっしゃいますね」

捜査官の補佐を務める男が怪訝そうに雪鷹を睨みつけた。まるで雪鷹を疑っているかのような露骨な視線に雪鷹は苦笑を浮かべるしかなかった。

「顔だけですよ」

しかし、補佐官は眉ひとつ動かすことはなかった。むしろ、ますます雪鷹を疑わしく思ったのか、視線は鋭さを増す。流石に捜査官もこのままではまずいと思ったのか、二人の間に立つ。

「今はいがみ合ってる場合じゃない、とりあえず、地上本部に相談してみることにする」

そう言うと男は地上本部に連絡をし始めた。その後ろ姿を見ながら雪鷹はため息を零す。お世辞にも頼りがいのある背中には見えない。クロエのおかげで犯人の仲間の現在地は既に把握している。人員さえ動かせるなら、今すぐにでも動かして確保に向かわせることは可能だ。しかし、教会の人間が起爆装置を持っているのなら、下手に動くと遠隔操作で起爆させられる可能性もある。残りの時間を考えると爆弾の回収はおそらく、不可能だ。そうなると実行可能な作戦はかなり限られてくる。

（これは俺が動かないと無理か・・・）

諦めにも似た心の声は静かに雪鷹の胸に響いた。

Intermission 38.5

Intermission 38.5

現場で無差別テロ宣言を聞いていたヴェロッサは顔をしかめた。ヴェロッサから見ても犯人達の要求は突拍子のないことであり、地上本部や本局が受け入れるとは思えなかった。無差別テロは確かに脅威であるが、テロに屈して失うものの大きさと重さを考えると、管理局の選ぶ道は自ずと定まってくる。

「レジアス中将なら蹴るだろうな・・・」

武闘派で名の通ったレジアス中将ならば、テロに屈することを選ぶはずがない。市民がテロの犠牲になったとしても、犯人達を必ず捕らえるだろう。それが最善の判断かどうかは別にして、レジアスはそういう考え方の人間なのだ。もちろん、その考えは間違っているとはヴェロッサも思ってはいない。ヴェロッサが同じ立場であったなら、おそらく似たような指示を出す。ヴェロッサの義姉であるカリムも大まかな考えは同じだろう。

「でも、やっぱり誰かが傷付く所は見たくないよね」

それはヴェロッサに限らず、誰もが思っていることだ。誰一人傷付くことなく、無事に事件が解決することに越したことはない。しかし、その可能性は限りなく零に等しい。突入して制圧することは簡単だが、その分人質の安全は保障されない。助け出された司祭の話ではシスターの他に子供は何人がいるということだったが、その子供達が突入の巻き添えになってしまう可能性もあるのだ。

「協力した方がいいんだけど・・・」

躊躇いがちに呟き、ヴェロッサは迷う。地上本部と本局の確執は聖王教会とのそれに負けないくらい深くて、歪んでいる。下手にヴェロッサがこの事件に協力すると、後々の諍いの火種になりかねない。人命には変えられない、と頭では理解しているが、地上本部と本局、そして聖王教会の協力体制が悪化することもヴェロッサにとっては同じくらい避けなければならないことだ。

「バレないように・・・なんてことはできないよね、流石に」

ヴェロッサの稀少技能、『無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）』は捜査や探索に適してはいるものの、隠密行動には適していない。犯人達の様子を探ることはできたとしても、それを誰にも気付かれずに行うなどまず不可能だ。

「さて、どう動くか・・・」

考えあぐねているヴェロッサは聞き覚えのある声に気付いた。

「もしかして・・・」

そう呟いてヴェロッサは目を細める。そして、見つけた。局員と話す雪鷹の姿を。

「やっぱり、彼か・・・」

どうして雪鷹がこの場所にいるのかは気にならなかった。雪鷹の言動に疑問を抱いていたヴェロッサはできる限りの範囲で雪鷹のことを調べていた。だから、雪鷹とフェイト、そしてなのはの関係が単なる職場の同僚ではないことを知っていた。更に付け加えるなら、

雪鷹はフェイトをエスコートしていたこともある。そのフェイトが人質になってしまったのだ。黙って見捨てるはずがない。言動はともかく、雪鷹の能力の高さについてはヴェロッサも認めるものがある。

「六課の仇なすつもりはないと言ってたけど・・・」

ヴェロッサはそう呟いて考えを巡らせる。雪鷹なら地上本部と本局、聖王教会のしがらみとは無関係に動くことができる。もちろん、機動六課の所属は本局であるため地上本部はいい顔はしないだろうが、ヴェロッサが動いた場合に比べればその波風も些細なことでしかない。ヴェロッサ自身が動くよりもここは雪鷹に任せたほうがいいと判断したヴェロッサはそのまま静観することに決めた。

「さて、お手並みを拝見させてもらうよ、ユキタカ一尉」

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３８．６

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３８．５

不安で胸が苦しくなる。
拳を硬く握りしめる。
息を全部吐き出して、いっぱい吸い込む。
それでも、不安も苦しみも消えてはくれない。

あの人の実力は知っている。
私達が束になってかなわないくらい強くて
なのはさんやフェイトさんにも負けないくらい強くて
心も体もすごく強くてあたし達が心配する必要なんてないくらいに強い
それなのに、強いって知っているのに、不安になる。

兄さんもそうだった。
すごく強くて、それなのに、事件で殉職して突然あたしの前からいなくなってしまった。
だから、あたしは不安なのだ。
誰にも負けるはずのないあの人が、突然あたしの前からいなくなってしまいそうで。

憎んでいたこともあった。
妬んでいたこともあった。

恐れていたこともあった。
いなくなってほしいとずっと考えていた、はずだった。
いついなくなってもいい、そう思っていたはずだった。

なのに、今のあたしの心はそれと正反対のことを叫んでいる。
怪我しないで、早く帰ってきて、と。
無理しないで、ここに帰ってきて、と。

何事もなければいい。
だけど、そんなことは絶対にないのだ。
現場では何が起きるかわからない。
あの人の身に何もないということは絶対にないのだ。
どんなに強くても、もしもはあり得る。
あり得るからこそ、ものすごく怖い。
あり得るからこそ、不安になる。
その不安に潰されてしまいそうになる。

「無事でいてください・・・」

想いを祈りに込める。
祈りを言葉に込める。
そして、祈る。

言葉が届きますように。
祈りが届きますように。

想いが届きますように。
天に、そして、あの人に届きますように。

あたしには無事を祈ることしかできない。
ただ、それだけのことしかできない。
あたしだけじゃない。
スバルもエリオもキャロも同じだった。
なのはさんや八神部隊長みたいにすごい力を持っていても、何もできない。
無事に帰ってきてほしいから、祈る。
不安に押しつぶされることのないように、祈る。

誰もただ、祈ることしかできない。
相手の為に。そして、自分自身の為に。

祈ることしかできないから、もどかしい。
もしも、を考えると震えが止まらない。
そうならないで、必死に願う。
なるはずがない、と心に言い聞かせる。

根拠なんてどこにもない。だから、祈る。
理由なんて必要ないくらいに祈る。
祈れば、少しだけ不安がなくなる。
そして、また不安が圧し掛かってくる。

祈りと不安のせめぎ合い。
いつ終わるのかさえわからない。

ほんの数分のことでしかないのにもう、何時間も、何日も続いているかのような錯覚

折れそうになる。
負けそうになる。
潰れそうになる。
挫けそうになる。

「ユキタカさん・・・無事でいてください」

その名前を声に出す。
あたしだけにしか聞こえない小さな小さな声でその名前を呼ぶ。
その名前があたしに力をくれる。
勇気が湧き上がってくる。

ほんの少しだけ、不安がなくなった。

39『たった一つの冴えたやり方』（前書き）

この手の力は壊す為ではなく、守る為の力
悲しみの連鎖を、断ち切る力

その為になら、正義を捨てても構わない
守りたい人さえ守れない力に、意味はない

だから、俺は迷わない

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ　始まります

39『たった一つの冴えたやり方』

39『たった一つの冴えたやり方』

「地上本部は・・・やっぱり、無理か・・・」

現場の指揮を執る捜査官は犯人からの要求と地上本部からの返答の板挟みに頭を悩ませていた。案の定、地上本部の返答は、犯人の要求は不当なものであり、一切認めることはできないという旨の言葉であった。更に付け加えるなら、クラナガンの市民の安全を守ることが地上本部の義務であり、市民の一人も傷つけることを許さない、という無理難題ともとれる行(くだり)もあり、経験豊富とは言えない若い捜査官は既にお手上げ状態だった。予想していた状況とはいえ、あまりの無能ぶりに雪鷹はため息を零す。

「まぁ、一介の捜査官が扱うには大き過ぎる事件だから慌てるのはわかるが・・・」

事件の規模や危険度等を考慮すると複数の捜査官、或いは執務官が対策本部を立ち上げて担当する規模の事件だ。しかし、本来そこにいるべきはずの執務官は囚われの身で今は教会の中だ。一人でその全てを負わなければならなくなってしまった捜査官が焦ってしまうのは無理もない。しかし、このまま任せきりにしてしまっては取り返しのつかない事態になる。見ていられなくなった雪鷹は軽く深呼吸をして、表情を切り替えると未だ混乱の最中にいる捜査官に近付いた。

「悪いが現場指揮権は俺が預かる」

「な・・・貴方はいきなり・・・」

雪鷹の言葉に驚きの表情を捜査官だったが、うっ、という詰まるような鈍い声がしてその体が糸の切れた人形のように崩れ落ちる。見ると、その腹部には雪鷹の拳がめり込んでいた。

「有無は言わせない・・・と、もう聞いていないか。心配するな、気絶させただけだ。早速だが、ここにいる局員の半分を今から示す場所に向かわせろ。犯人グループの仲間らしい人間を見つけた。早急に確保しろ。車番は・・・」

近くにいた人間に気絶した捜査官を預けると雪鷹はその場にいる人間に次々に指示を出す。中には不満そうな表情を浮かべるものもいたが、雪鷹に睨まれると何も言い返せなくなってしまい、言われた通りに動くしかなかった。

「ユキタカ補佐官、いくらなんでもこれは越権行為なのでは?」

一通りの指示を出し終えるやいなや、捜査官の補佐を務めていた男が雪鷹に近付いてきた。その顔は明らかに不愉快そうな顔を浮かべていた。

「心配しなくても手柄はお前の上司にくれてやる、安心しろ」

「そういう問題ではないでしょうっ!!」

軽く言い放ったことが気に障ったのか、はたまたそれまで為込んでいたものが一気に溢れてしまったのか補佐官の男が大きな声を出して雪鷹に詰め寄る。もし、これが雪鷹ではなく、フェイトであった

なら何の問題もなかった。執務官がここの指揮を執るというのなら、捜査官の面子も保たれる。しかし、執務官の補佐に指揮権を奪われたとなるとそうもいかない。捜査官の体面に傷をつけるような真似を補佐官として許せるはずがなかった。しかし雪鷹は表情一つ変えずに冷たく言い放つ。

「なら、どういう問題だ?まともに指揮も執れない人間に全部任せてフェイトが死ぬのを黙って見ていろとでも?お前の上司が上手く指揮できるなら俺だってこんなことしたくない。そもそも、お前が上司を上手く補佐してやれば済んだ話だろう?自分の無能さを上司のせいにするな」

突きつけられたのは怒りであり、殺気でもあった。補佐官は顔を真っ赤にしながらも何も言い返すことができずに引き下がる。それを見送った雪鷹はため息を零す。

「これだから指揮とかするのは嫌いなんだよ・・・」

不満を零しながらも、雪鷹は時計を見た。

「もう、時間に余裕もない・・・突入はしたくなかったが、そうもいってられないな・・・仕方ない」

・＊・＊・＊・

仮面の男が言った三十分という時間が過ぎた。結局、地上本部が犯

人達の要求を呑むことはなく、むしろ人質を無事に助け出し、早急に事件を解決しろ、と急かされただけだった。その旨を犯人達に伝えなければならない、という重責を背負わされた、ある意味では自ら背負ったともとれるが、雪鷹は煩わしそうにため息を零す。

「はぁ・・・今からでも責任を押し付けてやろうか・・・」

そう呟いた雪鷹の目は一切笑っていなかった。教会の屋根の上に一羽の烏が降り立った。まるで、これから先のことを暗示しているかのような黒いその翼に場の空気がわずかに重たくなる。ただ、烏が現れただけでこうなのだ。既に現場の人間が犯人達に呑み込まれてしまっているのだ。呑まれていないのは雪鷹ただ一人だった。

「士気を揚げて全員の力を合わせるのが一番いいんだろうが、生憎俺にそんな才覚はないからな・・・貴女みたいな真似はできないよ。個人主義者だからね」

微かに笑みを浮かべて、雪鷹はバリアジャケットを展開する。右手にはブレイドハートが握られている。

「な、なにをするつもりですか？」

補佐官の男が驚いて雪鷹に尋ねる。さきほどの一件で雪鷹が最期までこの現場の指揮を執るものだと考えていたのだ。しかし、今の雪鷹は明らかに戦いに赴く者の姿だった。

「指揮権を返す。それだけだ。打てる手は全て打った。もうすぐ犯人グループを探しに行った連中から連絡があるはずだ。あとはそっちで上手く処理してくれ。それもできないほど無能な人間じゃないだろう？」

「し、しかし、あなたは？」

雪鷹が最期まで指揮をすればそれで済む話だ。本来ならただでさえ引き継ぎ云々で指揮権交代は面倒なことなのに、この土壇場で押し付けるというのは無謀というより他にない。

「上司を助けにいくのは部下の役目だろう。何があったにせよ、あいつが捕まってしまった原因の一つは俺が現場にいなかったこと・・・だから、責任を持って助け出す、必ずな」

「どうやって・・・ハラオウン執務官の他にも人質はいるんですよ。しかも爆弾だって・・・」

「使われる前に連中の一人を人質に取る。無差別テロを起こしてまで捕まった仲間を助け出そうとする仲間思いの連中だ。仲間を人質に取られて、それでもなお抗う気概があったら褒めてやる。約束の時間までもう時間もない・・・動くなら今しかない」

にやりと笑った雪鷹の顔を見て、補佐官は戦慄を覚えた。雪鷹が何を企んでいるのかは容易に想像がついた。雪鷹単独での強襲。そして、そこから犯人の仲間を人質にとって、強引に交渉に持ち込むつもりなのだ。否、交渉する気さえないのかもしれない。脅迫まがいに犯人達に詰め寄り、強引に事件を解決することさえしかねない。先程のやりとりを思い出すとあながち的外れな想像ではないと思えてしまうだけに恐ろしい。

「ば、馬鹿なことをするな。そんなこと、管理局の正義に反しているっ！！」

「人を救えない正義に何の意味がある？人を救える悪の方がまだましだ。突入隊は指示があるまで待機。これを以て、指揮権を返上する」

・＊・＊・＊・

教会の中は異様な緊張感に満ちていた。約束の時間まで残り僅かもない。五分後には全てが決まっているのだ。囚われた仲間が返ってくるのか、あるいは無差別テロの決行か。その緊張感を肌で感じているフェイトは既に説得を諦めていた。彼らは結局、管理局の犠牲となった人々なのだ。家族を奪われ、仲間を奪われた彼らを止める言葉をフェイトは持っていなかった。フェイトの言葉は何一つ彼らの心に届きはしないのだ。

「おい、誰か近付いてくるぞ」

突然、教会の中がざわつき始めた。

「あれはバリアジャケットか？だが、デバイスは持ってないな・・・」

「待機モードにしているだけかもしれない。気をつけろ」

「そろそろ時間だ。返答に来た局員じゃないのか」

ざわつきは次第に大きくなる。犯人達は手に手に武器を構えてはい

るものの、交渉に来た人間とみなしているらしく、今すぐに爆発しそうな気配はない。その中にあの子どもが混じっているのを見て、フェイトは心が痛くなった。子供達を助けたいと思って、覚悟を決めてここまで来た。しかし、助けるべきであるはずのその子供もまた敵だったのだ。それでも、助け出せる希望を捨てなかったフェイトだったが、少年の目を見てその希望はいとも容易く崩れ落ちてしまった。エリオの時のように身を呈すれば心を開いてくれるかもしれない。心のどこかでそんな淡い期待を抱いていたのだが、あの子供の目はそれを砕くに足り得るものだったのだ。そうこうしているうちに教会の扉が開いた。そこにいたのは、紛れもない雪鷹だった。

「雪、鷹？」

何故、雪鷹がここにいるのだろうという疑問よりも先に安堵しているフェイトがいた。しかし、その安堵さえ吹き飛ばすような寒気がフェイトを襲った。雪鷹は黙って右手を空に掲げた、魔力が収束していき、幾つもの氷の礫ができあがる。突然のことに犯人達は状況が呑み込めず、ただそれを見ていることしかできない。

「嘘・・・まさか・・・」

寒気の正体が冷気ではなく、雪鷹自身から発せられる殺気だとフェイトが気付くと同時に雪鷹は右手を振り下ろした。その瞬間、氷の礫が爆ぜた。フリーズランサーには及ばないものの、数だけを比べればその比ではない。数十を超す氷の礫が四方八方に飛び散り、教会を、そして、犯人達を穿つ。一瞬遅れて、犯人達の悲鳴が飛び交う。まさか、警告もなしにいきなり攻撃をしてくるとは予想もしていなかった犯人達は抵抗することはおろか、その攻撃を防ぐことさえできなかった。

「や、やめて・・・」

叫んで駆け寄ろうとするフェイトの体を何者かが強引に引き寄せ、こめかみに冷たく、硬い何かを突きつける。鼻につくのは鉄と硝煙の臭いだった。

「貴様、なんのつもりだっ！！」

叫ぶ声はあの道化師の仮面の男だった。フェイトの首に腕を回し、締めつけながらこめかみには銃が突きつけている。鈍く光る銀の輝きと冷たさが無言で雪鷹を威嚇する。

「いますぐ人質を解放しろ。さもないと、斬る」

しかし、雪鷹は動じる様子も見せずに床に蹲る犯人の一人に氷の刃を突きつけて仮面の男を睨み返す。嵐の前の空のような激しい灰色の瞳。その冷たさと恐ろしさにフェイトは体の奥から震えが込み上げてくるのを抑えきれなかった。仮面の男がフェイトを解放する気がないと判断した雪鷹は更に言葉を続ける。

「爆弾を取引材料にしようと思うなよ？そんなくだらないことを口にしたら、ほかの連中も殺す」

見ると幾つもの氷の槍が傷付き、呻く犯人達を狙っていた。そもそも、フリーズランサーをはじめとする物質加速型の射撃魔法は弾自体が質量を持っているので、人道的観点から対人使用が限りなく黒に近い灰色の魔法だ。雪鷹の本気を以てすれば非殺傷設定であっても生身の人間を撃ち殺すことは容易い。どちらが悪人だと聞かれると十人が十人とも雪鷹の方が極悪非道だ、と答えてしまいそうな構図だが雪鷹の目に迷いはなかった。

「ふざけるなっ！！こいつがどうなってもいいのかっ！！」

仮面の男がフェイトに突きつけた銃を雪鷹に見せつける。大人しくしなければ殺す、という露骨な脅しだ。しかし、雪鷹はそれを一笑に付しただけで気に留めなかった。

「好きにすればいい。そいつも管理局員の端くれだ。いざという時の覚悟はできているはずだ。好きにしろ・・・ちなみに、そいつに手を出したら生まれてきたことを後悔させる程度には拷問してやるからな。喜べ、殺してくれと懇願するまで痛めつけてやる」

雪鷹は狂気めいた笑顔で男を脅迫する。大人しく解放しなければ、どうなるかわからないぞ、というその脅しはとても法と平和を司る管理局員のものとは思えないと凶悪で、おぞましい。しかし、仮面の男はそれでもフェイトを解放しようとはしなかった。フェイトを解放すれば、男を守るものは何もないのだ。

「あ、そうだ。忘れていた・・・大人しく投降するなら弁護の機会がある、らしい。規則だから一応伝えておく」

規則だからという理由だけで決まり文句を棒読みする雪鷹。当然、その行為は仮面の男の神経を逆撫でするだけだった。そして、雪鷹は氷の刃を倒れていた男の首元に押し付けた。それを見て男の声に焦りが見え始める。

「や、やめろ」

「なら、人質を解放しろ」

雪鷹は静かに告げる。声を荒げることさえなかった。しかし、だからこそ、その声は犯人の心を揺さぶる。完全に場の主導権は雪鷹の手の中にあった。互いに人質を取り合っているが、その重みはまるで違う。雪鷹にとって、人質は人質になり得ないが、男にとって人質はかけがえのない仲間であり、家族なのだ。その家族の命が危険に晒されているのだ。男にはもう、選択の余地はなかった。

「・・・行け」

観念したように呟くと男はフェイトを解放した。フェイトは一瞬戸惑いの表情を浮かべながらもすぐに雪鷹に駆け寄る。それと同時に何かがフェイトの横を掠め、鈍い呻き声が響いた。

「雪鷹っ！！」

フェイトの声が続いて響く。しかし、それをかき消すように更に呻き声が響く。

「どうして・・・雪鷹の言う通り、私を解放したのに、どうして・・・」

「愚問だな。そいつは犯罪者だぞ？」

撃ったのは雪鷹だった。仮面の男は片膝をつき、呻きながら右肩を血に染め、恨めしそうに雪鷹を睨んでいた。持っていた銃は氷槍に砕かれ、掌や脚も穿たれていて、反撃することは不可能だった。

「貴様ぁあ、この卑怯者っ！！」

「卑怯？言い得て妙だな、外道。自分達の望みを通す為に無関係な

市民を巻き込もうとした奴らからそんな真っ当な言葉聞けるとは思っていなかった。それとも、他人を傷つける覚悟はあっても自分が傷付く覚悟はなかったのか？」

雪鷹はどこまでも冷徹だった。男の目の前に氷槍を突きつけ、不敵に笑う。

「大人しく、投降するか？それとも、矜持と共に散るか？」

勝敗は既に決していた。不意を突かれた犯人達は瞬く間に戦闘能力を奪われ、最期の切り札になり得た人質さえも解放させられた。頼みの綱の爆弾さえも使えない。犯人達に戦闘の意志は既にない。それでも、雪鷹は止めなかった。折れた心を更に砕きかかる。新たに生成した氷槍で男を狙う。

「やめて、もう、この人達にそんなことしないで・・・」

フェイトは雪鷹に抱きついて懇願する。これ以上は惨過ぎた。犯人達にこれ以上の戦闘の意志も能力もないことは明らかだ。投降する意志がないにしても確保するのは簡単だった。更に追い詰めるような真似などする必要がない。

「どうして・・・どうして、そこまでするの・・・」

「なら、聞くがどうしてそいつらを庇う？こいつらのしようとしたことを忘れたのか？己の欲望を満たす為だけに、何の罪もない人間を犠牲にしようとしたんだぞ？それ相応の報いは受けてもらう・・・そうしないと俺の気が済まない」

その時、初めてフェイトは理解した。雪鷹の中にあるのは正義でも、

義務感でもない、純粋な怒りだった。否、大切なものを傷つけようとした者達に対する、怒りという言葉でさえ生ぬるい激情だった。これまで感情が高ぶっている雪鷹をフェイトは今まで見たことがなかった。ティアナの一件の時でさえ、ここまで恐ろしくはなかったはずだ。あの時の雪鷹も十二分に怖かったが、それでもまだ優しさの、もっと言うなら良心の欠片が残っている状態だった。今の雪鷹にはそれさえ感じられない。

「そんなのダメだよ・・・それじゃ、雪鷹もこの人達と同じになっちゃうよ・・・嫌だよ、そんなの・・・」

犯人達を突き動かしていたのもまた管理局に対する怒りであり、憎しみだった。その犯人達を怒りで以て駆逐するというのはフェイトにはどうしても許せなかった。それでは憎しみの連鎖を生むだけだ。

「雪鷹の言う通り、この人達には犯した罪に対する報いを受けてもらう。でも、それを決めるのは私じゃない。雪鷹でもない・・・ここで雪鷹が怒りのままに暴力を振れば、私はきっと雪鷹を許せなくなる・・・こんなの正義でも、理想でも、任務ですらない。どんな理由があったとしても、それじゃ犯罪者(この人達)と何も変わらないよ」

「あぁ、そうさ・・・俺は人殺しだ。こいつらと同じ犯罪者だ。命じられるままに、何人もの人間の命を奪ってきた。人の皮を被った化け物が俺の本当の姿なんだよ」

雪鷹は冷たく微笑んだ。灰色の瞳がせつなげに光る。

「違うっ！！」

フェイトは叫ぶ。雪鷹の言葉を、人殺しという罪を懸命に否定する。

それは悲痛な叫びだった。白磁の頬を涙が伝う。

「違う・・・そんなことないよ。本当の雪鷹はすごく優しくて、だから一人で苦しんで、傷付いた・・・私達にそれを見せないように必死に隠して、そして、また傷付いて・・・そんなのはもう嫌だ。私はこれ以上、雪鷹が傷付くところを見たくない」

静かさを取り戻し始めた教会に、その声はよく響いた。すると、雪鷹は軽く舌打ちをして、フェイトを突き飛ばした。そして、一瞬遅れて破裂音が響き、雪鷹が膝をつく。腕からは血が滲み、苦悶の表情を浮かべている。

「雪鷹っ！？」

「撃ち損じた奴がいたか・・・」

雪鷹の見つめる先にはあの少年がいた。管理局を憎み、フェイトを殴ったあの少年だ。攻撃がかすめたのか右の腕から血を流しているらしく、腕全体を使って抱え込むように雪鷹に銃を向けている。

「こんな奴がやさしい奴なもんか・・・こいつのせいでみんなは・・・」

十歳に満たない少年の声とは思えないほど怨念の込められた声だった。銃口は雪鷹に向けられていて、引き金に少年の指が伸びる。

「やめ・・・」

フェイトが叫ぶよりも先に氷の槍が少年を貫いていた。少年は一瞬、驚いた顔を浮かべ、次の瞬間に絶叫する。千切れ飛んでこそいない

が、少年の腕の肉が抉り取られていて、フェイトでさえ目を背けてしまいたくなるほど惨い傷痕になっていた。滴る血の紅が不気味なくらいに鮮やかだ。痛みに耐えかねて絶叫する少年に雪鷹は近付く。

「子供を甚振る趣味はないし、大人しくしていれば見逃してやってもよかったが・・・」

少年から銃を奪い取ると、肉の抉れた腕に手をかざす。

「撃ったからには無視するわけにはいかない。だから、撃った。お前も人に銃を向けるなら、撃たれる覚悟は持て」

雪鷹の掌に魔法陣が広がり、少年の腕が凍りついていく。驚いた少年が逃げようとするが雪鷹は腕を掴んで、少年を逃がさない。

「動くな。応急処置だが、これで止血はできるし、痛みも多少は紛れる」

「な、なんで助けるんだよ」

少年は驚きながら雪鷹を睨みつけた。雪鷹に助けられた、という事実が受け入れられないのかその目には戸惑いの色が浮かんでいる。

「簡単なことだ。お前を殺したくないから。ただ、それだけだ。人の命は、それを奪うこともだが、お前が考えているよりずっとずっと重い。そして、殺した奴はその重さを背負うんだ・・・背負いたくなくたって背負わないといけないんだ。仕事でもないのに、そんな重荷を俺は背負いたくない。だから、無用な殺しはしない。それだけだ。突撃班、犯人達の身柄の確保は任せた」

通信を入れて、待機している局員に指示を出すと雪鷹は立ち上がった。

「お前は管理局に親を殺されたらしいが、俺も似たようなものだ。だから、敢えて言う。俺は、お前の気持ちが理解できないし、どういう考えでこの犯行に及んだのか想像が付かない。別に知りたいとも思わないが・・・お前もお前の嫌っている管理局と同じように、罪もない人間を傷つけ、殺そうとしたんだ・・・いいな、どんな理想や正義を掲げても、その事実だけは変わらない。この罪、軽くはないぞ?」

そう言い残すと雪鷹は少年から離れて、無傷のまま怯えている人質、シスターの下へと向かった。

「無事だな?」

震えるシスターは雪鷹の言葉に怯えるばかりで何も答えない。そして、差し出された雪鷹の手を叩き落とし、振り払った。その目はあったのは間違いなく、雪鷹に対する拒絶だった。まるで、汚物を扱うかのようなシスターのその仕草にフェイトの心がちくりと痛む。しかし、雪鷹は表情を変えることなく、フェイトを手招きするとシスターを任せ、何事もなかったかのように突入してきた局員と一緒に犯人達の確保の指示を出し始めた。こうして、立て篭もり事件は発展した無差別テロは未遂に終わった。

39『たった一つの冴えたやり方』（後書き）

事件は終わりを迎えた
だけど、二人は…

きっかけは雪鷹の一言から

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ
４０『Ｏｎｅ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｒｏａｄ』

夜はまだ、終わらない

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ　３９．１

「もう、大丈夫ですよ」

フェイトは人質だったシスターに駆け寄る。シスターは憔悴しきっていたが、体に目だった傷もなく、怪我はしていなかった。一見すると出鱈目に見えた雪鷹の乱射も、そうではなかったらしい。

「・・・ねぇ、アレはいったい何なの？」

女は怯えた、消え入りそうな声で呟く。その目の先には局員達に指示を出す雪鷹の姿があった。腕から流れる血が痛ましいが、雪鷹はそれを気にする様子も見せずに、局員達に指示を出している。そんな雪鷹を見つめながら、女は更に言葉を続けた。

「アレは人の皮を被った悪魔よ・・・」

その言葉にフェイトは身を硬くする。『アレ』とは間違いなく雪鷹のことだ。

「どうしてなの・・・ねぇ、どうしてあんな豹虎（ケダモノ）が管理局にいるのよ。ねぇ・・・」

震える声は目の前の現実を、そして雪鷹を否定し、拒絶するものだった。女の目を見ればわかる。雪鷹を悪魔だ、豹虎（ケダモノ）だと罵りはしているがそこにあるのは悪意でも侮蔑でもない、純粋な恐怖だ。それがわかるからこそ、フェイトは込み上げてくる言葉をグッと飲み込

むしかなかった。

「・・・立てますか？」

フェイトに言えたのはそれだけだった。助けてもらってお礼や感謝の言葉を言うでもなく、悪魔だ、化け物だと罵るなど許せるはずがない。雪鷹も無傷ではないのだ。フェイトやこのシスターを助けるために傷ついたのだ。それなのに、この仕打ちはあまりにも惨すぎた。フェイトに促されて女は立ち上がるが、その足は恐怖に震えている。

「とりあえず、外に出ます。歩けないのなら、私に掴まってください」

女の腕を自身の肩に回し、フェイトは歩き始める。足取りは重く、心の内はそれ以上に重い。女は恐怖心が消えないのかフェイトにしがみついて離れない。同じ人質になった身としてはその恐怖もわかるし、同情もしている。しかし、それ以上の感情がフェイトの中に渦巻いていた。普段のフェイトなら被害者の顔をまっすぐ見つめ、親身な言葉をかけて励ますのだが、今日だけはこの女の顔を見たくなかった。言ってはいけない言葉を口にしそうで、見られなかった。

「貴女にはこの後、怪我がないか簡単な検査を受けてもらって、それから今回の事件について色々と話をしてもらうことになると思います。なので、今のうちに話す内容をまとめておいてください」

フェイトの言葉に女に対する気遣いは欠片もなかった。ひどく無機質な言葉はとても冷たく、そして、硬い。普段なら出てくるはずの優しい励ましの言葉が全く浮かんでこない。浮かんでくるのはこの女に対する怒りであり、憎しみだけだった。混乱して犯人と雪鷹を

間違えてしまったのなら、仕方がないと許すこともできた。しかし、違うのだ。この女は雪鷹と雪鷹として認識していながら、悪魔だ、豹虎（ケダモノ）だと罵っているのだ。

（ねぇ・・・雪鷹、私はどうしたらいいの・・・）

女には見えないようにフェイトは硬く唇をかみ締める。込み上げてくる憎悪を抑え込んでいるのはフェイトの執務官としての理性であり、矜持だった。この女を責めるべきではないのだとフェイトも頭では理解している。しかし、心はどうしてもそれを受け入れることができないのだ。フェイトが愛する人を罵るこの女の言動を、一人の女として受け入れることはとてもではないができなかった。

（きっと、私はこの人を、許せない・・・だから・・・）

「ごめんなさい・・・」

フェイトの呟いた言葉は女の耳に届くよりも先に、静かに風の中へ消えていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8788p/

魔法少女リリカルなのはStS Blade Heart

2011年11月2日06時03分発行